

遊戯王Incarnation

レルクス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デュエルモンスタースターズが政界、財界に匹敵する力を持つようになり、専門学校なども設立されることとなった。

そんななか、『デュエルスクール・アムネシア』に通う高等部一年生、ふしはらゆうげつ不死原遊月。

高身長だが、腐ったような目とドクロのネックレスが特徴と言う変わった雰囲気少年は、とある事情を抱えながらも、学園生活を謳歌する。

しかし、面倒な巡り合わせにより、彼の物語は、大きく動きだした。「死後の世界の広さを教えてやる」

目次

第一話	1
第二話	19
第三話	37
第四話	54
第五話	73
第六話	90
第七話	103
第八話	121
第九話	135
第十話	149
第十一話	165
第十二話	181
第十三話	197
第十四話	223
第十五話	251
第十六話	269
第十七話	287
第十八話	302
第十九話	321
第二十話	342
第二十一話	360
第二十二話	382
第二十三話	398
第二十四話	413

第二十五話	425
第二十六話	440
第二十七話	454
第二十八話	471
第二十九話	486
コラボ回 第一話	503
コラボ回 第二話	528
コラボ回 第三話	540
コラボ回 第四話	554
コラボ回 最終話	569
第三十話	591
第三十一話	596
第三十二話	619
第三十三話	633
第三十四話	642
第三十五話	663
第三十六話	676
第三十七話	691

第一話

「zzzz……」

人は基本、寝る時は屋内で寝るものだが、本当に気持ちいいと考えた場合、まあ虫が出ることを無視すれば（ギャグではないが）外でも寝ることはできる。

ならば、大きな木の下で、草原を布団にして寝ているというのも、あまり見ない話ではあるが不思議なこととは言いきれない。

もちろん、それができるのは時間が来るまで、と言う制限付きだが。とにかく、今木の下で草原で寝ている、黒髪でドクロのネックレスを付けた少年はそう思っているわけである。

「おい。遊月。そろそろ午後の授業が始まるぞ」

草原ですやすやと寝ている少年、不死原遊月ふしはらゆうげつは、腐ったような瞳で自分を呼んだ生徒を見る。

『オレンジ色の髪でやんちゃそうな顔立ちのイケメン』がいた。

「……なんだ英明か」

「俺で悪かったな」

なんだと言われた生徒、仮澤英明かりさわひであきは溜息を吐いた。

そして、チラッと校舎の方の時計を見る。

「あと十分で授業だ。そろそろ行かないと時間がヤバイぞ」

「あー……そうだな。んじゃ行くとしよう」

もそもそと起き上がる遊月。

「ていうか、なんでこんなところで寝てたんだ？」

「気持ちよかったからだが」

「まあ、今日は久しぶりに雲一つない日だからな」

「お前毎日毎日雲があるかどうか確かめてるのか？」

「別にそんなことを突っ込んでほしかったわけじゃねえっつーの。行くぞ」

「おう」

走って行く英明についていく形で、遊月もついていった。



デュエルモンスターズ。

もうもはや語るまでもないカードゲームである。

もう何千種類という種類のカードの中で、禁止・制限をまもりながら、同名カードを三枚までとして、メインデッキは四十枚から六十枚、エクストラデッキはゼロ枚から十五枚の間でデッキを作り、ルールを守って勝利条件をもぎ取るゲームだ。

デュエルディスクと言う、誰が考えたのか、ソリッドビジョンシステムという立体映像を用いることでエンターテインメント業界のトップに君臨。

今では政界、財界とならぶデュエル界となっている。

要するに、デュエルが強いということは、コネを作る力とか、金がたくさんあるとか、それに匹敵する何かを生み出せるということだ。さっぱり意味が分からない。

しかし、人間と言うのは納得できるかどうかはともかく慣れるのは早いもので、ルールは変更しなくても、今ではバイクに乗ってデュエルしても何も疑問に思わなくなった。

「英明。私は一つ思うことがある」

六時間目が終わって放課後、遊月は早速、英明に話しかけていた。

「なんだ急に」

「デュエルモンスターズのデッキというのは、私は大きく分けて二種類だと考えている。『手札にあるカードでどうにかするデッキ』と『デッキに触りまくって盤面を整えるデッキ』だ」

「前者は『スタンダード』で、後者は『ソリティア』だな」

「ああ。強いカードをブン投げるか、着地点をしっかりと定めるか。ということだ」

「なるほど」

「はつきり言ってソリティアする奴の頭っておかしくないか?」

「どういうこつちや」

「いや、例えば『銀河^{ギャラクシー}』だが、あれは手札がそれなりにそろってれば、初手から『銀河眼の煌星竜^{フレア}』と『No. 90^{フォート} 銀河眼の光子卿^{ロード}』と『サイバー・ドラゴン・インフィニティ』が並ぶだろ」

「まあ、ある種の着地点だな。俺も見たことがある」

「デッキ交換デューエルと言うものを知っているか？あれを急にやった時に、私は一度、『銀河』を使ったことがある」

「ほう」

「頑張つても『銀河眼の煌星竜』と『サイバー・ドラゴン・インフィニティ』しか並ばなかった」

「もうちつと踏ん張れよ。ていうかソルフレアはサンクチュアリー一枚で出せるだろうが」

「いや、すごく難しい。『銀河』が制圧力の高いデッキであることは認めよう。定石もある。だが、あれは記憶能力が高いデュエリスト向けの構築だ」

「なあ遊月」

「なんだ？」

「お前『インフェルニティ』って知ってるか？」

「私はあれも嫌いだ」

「単純にお前がサボってるだけじゃねえか！」

「本当に難しいんだぞ！急に手に取った時のあの絶望感だ。自分が持つても全然わからないのに、相手が使つてて自分が誘発握つてなかつたらその三体が普通に並ぶんだぞ！」

「俺が知るか！」

何とも救いような話をしているが、一部のものに取っては領きたくなるかもしれないものである。

まあ要するに、『銀河』はソリティア勢にとって絶好のオモチャだと言いたいのだ。

「あー……何か疲れた。遊月。今日はどうするんだ？」

「何も予定はない。帰って寝る」

「ならちよつと一緒に行きたいところがある」

「連れションか？」

「鼻で笑うわ。これだ」

英明がとりだしたのは、大量の福引券だ。

三十枚ある。

「十五枚で一回引けるんだが、一人一回なんだよ」

「なるほど、私は数合わせか」

「悪いか？」

「いや、別に何も」

というわけで、移動することになった。

デュエルスクール・アムネシアという学校に通っている遊月と英明だが、敷地が広く、系列店もそれなりに多い。

大型のショッピングモールもあるし、少し歩けばライディングデュエル用のコースもあるくらいだ。

今回用事があるのはショッピングモールの方である。

「よし、一等はシークレットレアの『灰流うらら』だ。絶対に当ててやる！」

「英明。物欲センサーって言葉知ってるか？」

「こう言う時にそう言うことを言うんじゃない！」

「だったら結果的に当たらなさそうなフラグを立てるな」

そんなことを言いながらも歩いているので見えてくるショッピングモール。

「このショッピングモールの三階だぜ」

ものすごくワクワクしながら店に入って行く英明。

遊月は黙ってついていくことにした。

三階では、既に長蛇の列になっていた。

「うわ、すげえ人数だな」

「そりやそうだろ」

正直、『デッキに触るな!』と言わんばかりの効果を持つ『灰流うらら』は、手札誘発のカードとしては強い。

最近は炎属性モンスターを手札に戻す手段と言うものはそれなりに存在するので、なおさら価値が高くなっている。

しかもそのシークレットレアなのだ。とりあえずチャンスがあればやっておきたいと思うのが人間である。

だが、確率と言うのは人の希望を打ち砕くものなのだ。

「大当たりー!!!」

先頭からそんな声が響いた。

次の瞬間、英明が滝のような汗を流している。

「一等！一等です！『灰流うらら』のシークレットレアが当たりました！」

ざわついた後、何とも言えない……なんというか『うあああああ』とでも言う感じになった店内。

「……英明。大丈夫か。私より目が腐っているぞ」

「……うるへー」

どうやらまともに返事をする事すらできなくなっているようだ。

「もうおうちかえる」

「そうか。なら私はもう帰るぞ」

「……」

英明は何も言わないが、遊月としては大して興味はない。

長い付き合いなので、別に放っておいても次の日には復活していることは分かるのだ。

「さて、小便済ませて帰ろう」

まっすぐトイレに向かった遊月。

どうやら、友人を慰めるよりもトイレの方が優先順位は上のようなのだ。

いくらお互いのことをわかっているからと言ってやりすぎ感がある。

とはいえ、本人がそれを気にしないのだった。

★

次の日。

「遊月！パックでレアカードが当たったぜ！」

「お前立ち直り早いな」

遊月はとても元気な様子で『クリッター』のレアカードを見せてくる英明に対して溜息を吐いた。

何を言ったとしても無駄なのは大体わかっているが、それでもいろいろ言いたいことはある。

「まあ、お前のデッキだとクリッターはそれなりに使えるからな」

「おう！その通りだ！」

他人の大吉よりも自分の吉を喜ぶ。

ほかでもない英明からそのようなことを聞いたことがあるような気がする遊月。

「……そう言えば、綾羽ちゃんあやはが若干元気なさそうだな。何かあったのかね？」

英明が振り向いた先にいるのは、一人の女子生徒だ。

名前は大束綾羽おおつかあやは。

黄色のメツシユが入った黒髪をハーフアップにしている、お淑やかな生徒だ。

あまり声も大きくなり、自己主張も少ないが、だいたい微笑んで聞き上手だと聞いている。

胸もそれなりに大きく、デュエルの腕もあると聞いている。教師からの評価も良いだろう。

単純に活発なだけで頭の回転がよろしくない英明しか友人のいない遊月と比べれば、その差は歴然である。

「……私からはあまり変わらないように見えるが」

「お前親衛隊ファンククラブから殺されるぞ」

「そんなものがあるのか？」

「ああ。綾羽ちゃんは誰にでも優しいしな。二次元から出てきたんじゃないかって思うほどいい人なんだ」

「……」

話が変な方向に進みだしていると思った遊月。

「で、お前から見て、大束さんがいつもよりちよつと暗い感じになっていると思っただんな？」

「そうだ。俺は毎日毎日、目を開けている時の四分の一は綾羽ちゃんのことを見ている」

「……」

遊月は軌道修正が面倒になってきた。

「だが、自己主張ができない性格だからな」

「私たちとは大違いだな」

「ああ。その通りだ」

お互いに自覚があつたことを確認しあう遊月と英明。

ここまで切ない友人関係と言う者もなかなか珍しいだろう。

「で、英明。お前はそれを解決してやりたいと思っっている訳か」

「そういうことだ。そしてお近づきになりたい」

「私なら断固拒否するがな。そんな人気者、一緒にいるだけで神経が磨り減る」

「お前めんどくさがり屋だもんな」

「ああ。と言うわけで頑張れ。お前ならたとえ手柄を誰かに取られてもまた立ち上がれるだろうからな」

「俺が二番手になることは前提なのか？」

「……………そんなことはない」

「その間はなんだ」

遊月はかたくなに返答を拒否した。

しかし、クラスメイトが沈んでいる理由。

成績も良いらしいし、そもそも特定のグループに属していないし、普段話している友達と何か問題があつたという話はない。というかあつたら英明が勝手にしゃべりだすだろう。

そして、実質次の日である今になってまだ頭から離れないこと。

(……………)

遊月は頭の中で候補があつた。

(ま、頭の片隅に置いておくか)

結局、その程度にしておく遊月だった。

ただ、一つだけ。

あの『灰流うらら』の精霊がどこにいるのか、それを探るくらいはしておこうと思った。

★

デュエルモンスターのカードはあくまでも紙で作られたカードである。

手裏剣になったり爆弾になったりするが、紙のカードである。神のカードもあるが、それは今は置いておこう。

デュエルモンスタースターの精霊。と呼ばれる存在がいる。

カードに宿ることで自我を持つことが出来る知的生命体だ。

特定の感知能力があれば見ることも声を聞くこともできるのだが、もつと感知能力が高いと、遠くにいてもわかるようになる。

ただ、精霊が宿ったカードと言うのは大変貴重なモノ。

純粹にレアであるカードよりも、精霊が宿ったカードの方が高額になることがある。

と言うより、精霊カードを集めているコレクターに高額で売れると言った方がいいかもしれない。

だからこそ、『精霊ハンター』のようなものがデュエル界の裏には存在する。

シークレットレアかつ精霊が宿っていて、オマケにカードの性能として実用性があり、しかも女の子カードとなれば、億クラスの金を出すものもいるのだ。

当然のことだが、カードとしての効果は同じである。手札に来る確率に若干影響するかもしれないが、いずれにせよ、『灰流うらら』なら『墓穴の指名者』には無力である。

まあ、真のデュエリストの場合、その『墓穴の指名者』を『イージー・チューニング』で回避してくるわけだが。

「おい、誰にもばれてないだろうな」

「勿論だ。こんなカードを手に入れたんだ。万全を期すに決まってる」

裏路地という誰も近づかないであろう場所。

しかも、夜という誰もが寝静まる便利な時間。

そんな中で、わざわざそのような場所を利用するとなれば、当然、表にはできない取引が行われているに決まっている。

「で、実物は？」

「これだ」

話しあっている二人の男。

そのうちの一人が、『灰流うらら』のカードをとりだす。

もちろん、シークレットレア。

もう片方の男が頷いて、ポケットからレンズをとりだすと、それを通して見る。

「……確かに、偽物ではないようだな」

「プロだからな。そんなチャチなことするかよ」

「フン。精霊ハンター『京吾』の名は伊達ではないか。こんなカード。良く手に入れることが出来たものだ」

「こんな価値が高すぎるカードだっていうのに、危機感ゼロのバカがいたってだけの話だ」

「そいつ。精霊のことを知らない可能性もあるな。まあ俺達にとって
は好都合。これが約束の金だ」

そう言って男がジュラルミンケースを開けると、一億円が入っていた。

「よし、交渉成立」

京吾が『灰流うらら』のカードを渡そうとした瞬間だった。

あたりにシャッター音が鳴り響く。

しかもフラッシュが焚かれており、一瞬、あたりが明るくなった。

「誰だ！」

京吾が振り向いた。

フラッシュは上からだった。

見ると、ドクロのネックレスを付けた少年が見えた。

「糞が！」

京吾たちがデュエルディスクを振り上げると、アンカーが射出される。

先端にはフックが付いており、少年がいる建物の屋上の鉄柵に絡まった。

二人はワイヤーを巻き上げると、一気に建物の屋上まで上がってくる。

二人がここまで焦っているのは、裏路地とは言え、ここに来るまでには監視カメラもそれなりにあるのでフードなどを使えなかったゆえに、少年のカメラにしっかり映っている可能性があったからだ。

というより、京吾たちが上を見て少年を確認した際、やたら高性能

のデジカメを見せびらかしてきたので追わざるを得ない。

「ずいぶんと舐めたことしてくれるじゃねえか」

「それはお互いのセリフだろ」

少年、不死原遊月はデュエルディスクを構える。

それを見た京吾は獰猛な笑みを浮かべる。

「へえ。俺とデュエルをやろうってのか」

「そうだ、私は君たちが奪ったカードを無視できないし、君たちは私のコレが無視できないはずだ」

遊月はデジカメを見せる。

どちらかと言えば、遠くを撮る際にいろいろ補正がつきやすい機能が備わっているタイプだと男たちも察した。

「このカードを持つてた女から頼まれたのか？ここを突き止めたことは褒めてやるが、過ぎた正義感~~は~~身を滅ぼすぜ」

「心配は無用。既に滅んだ後だ」

「……どうということだ？」

「説明する義務はない」

「ああ。そうだな」

京吾もデュエルディスクを構える。

当然、ソリッドビジョンに影響を与えて、相手のライフを0にした時にかかりの衝撃を発生させることが出来るように違法改造されている。

「ソリッドビジョンの違法改造か。それ、自分が負けた時もそれなりの衝撃だつてことは分かっているよな」

「当然だ。ようは勝てばいいんだよ！」

京吾はカードを五枚引いた。

それに対して、遊月もカードを五枚引いた。

「さて、生意気なガキにお灸をすえてやるぜ」

「死後の世界の広さを教えてやる」

「デュエル！」

遊月 LP8000

京吾 LP8000

「俺の先攻！」

京吾のターンから始まる。

「俺は手札のモンスター一枚を捨てることで、『ワン・フォー・ワン』を発動。デッキから『ホルスのしもべ』を特殊召喚！」

ホルスのしもべ DFE 100 ☆1

「ホルス……しもべとかいたのか、初めて知った」

「クツクツ。コイツがいれば、俺のフィールドの『ホルスの黒炎竜』は、相手のモンスター、魔法、罫の対象にならねえんだよ」

「なるほど……だが、『ロード・オブ・ドラゴンードラゴンの支配者』が来ないことを警戒しないということは、『DNA改造手術』でも恐れてるのか？」

「！」

表情を少し変える京吾。

凶星のようだ。

『ロード・オブ・ドラゴンードラゴンの支配者』はドラゴン族に適用されるが、当然、継続効果によって種族が変更されると無意味だ。だからこそ、名称指定の『ホルスのしもべ』を採用しているのだから。

まあ、単純に『ホルスデッキ』なので、枠が余ったから突っ込んだだけかもしれないが。

「チツ。まあいい。俺は墓地の『アマリリース』を除外して、『ホルスの黒炎竜 LV6』をリリースなしで召喚！」

ホルスの黒炎竜 LV6 ATK2300 ☆6

「カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「……『お触れホルス』か？まあいいが。私のターン。ドロ」

遊月はドロしたカードを見て頷く。

「なるほど。私は『不知火の隠者』を通常召喚」

不知火の隠者 ATK500 ☆4

「そして隠者をリリース。デッキから守備力0のアンデットチューナー、『ユニゾンビ』を特殊召喚」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3

「隠者にユニゾンビ……典型的なアンデットか」

「あまりソリティアとか好きじゃないからな。ユニゾンビの第一の効果。対象はホルスのしもべで、手札の『屍界のバンシー』を捨てて、レベルを一つ上げる」

ホルスのしもべ ☆1→2

「墓地から『屍界のバンシー』の効果発動。このカードを除外して、デッキから『アンデットワールド』を発動」

建物の屋上が、死の大地に変わっていく。

ただし、魔法の効果を受けないホルスはそのままだった。

「ハッ！そんなものを使ったところで、ホルスには通用しねえんだよ」
そういう京吾だが、表情は少し歪んでいる。

この『アンデットワールド』の雰囲気、普通に発動されたものと比べて、ずいぶんと重苦しいものに感じられるからだ。

頭の中に『精霊カード』の可能性がよぎるが、モンスターカードならまだしも、魔法カードの精霊など聞いたことが無い。

「構わない。私は『おろかな埋葬』を発動。デッキから墓地に送るのは『グローアップ・ブルーム』で、効果発動だ。このカードを除外し、デッキからレベル5以上のアンデット族を手札に加えるが、フィールドに『アンデットワールド』が存在する場合、特殊召喚できる」

遊月がデッキから抜き取ったカード。

遊月が持つと同時に、闇が溢れた。

「そのカードはまさか」

「お察しの通り。精霊カードだ」

遊月はデュエルディスクに叩きつける。

「終わりも始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

爆発するかのように闇が溢れて、その中から一つのドクロが出現し、体を形成していった。

まるで蛇のような胴体が出現し、右手には禍々しい杖が出現する。

死霊王 ドーハスーラ ATK2800 ☆8

「ドーハスーラの精霊カードか。これは臨時収入としてはでかくなり

「そうだぜ」

舌なめずりをする京吾。

未来で手にはいるかもしれない報酬で頭がいっぱいなのだろう。

「油断している場合か？」

「何？」

「ユニゾンビの第二の効果。対象はホルスのしもべだ。そしてこの瞬間。アンデットが効果を発動したことでドーハスーラの効果発動。ホルスの黒炎竜を除外する」

ドーハスーラが右手で持った杖に暗黒の波動を集中させていく。

「な……俺のフィールドにはホルスのしもべが——」

「知らないのか？ドーハスーラの除外効果は対象に取らない」

非情とも言える宣告。

ドーハスーラが放った波動は、ホルスの黒炎竜を消し去った。

「チェイン１のユニゾンビの効果。デッキから『馬頭鬼』を墓地に送り、ホルスのしもべのレベルを上げる」

ホルスのしもべ ☆2↓3

「そして、『馬頭鬼』を除外することで、墓地から『不知火の隠者』を特殊召喚」

不知火の隠者 ATK500 ☆4

「レベル4の不知火の隠者に、レベル3のユニゾンビをチューニング。死した紅き眼の黒竜よ、屍界で湧き上がる怨念を宿し、君臨せよ」

出現するのは、アンデット化する前の力を取り戻しつつある、紅い眼の朽ち果てた竜。

「シンクロ召喚。レベル7。『真紅眼の不屍竜』！」

真紅眼の不屍竜 ATK2400↓3000 ☆7

「こ、このタイミングで……」

「『異次元からの埋葬』を使い、『ホルスの黒炎竜 LV6』、『屍界のバンシー』『馬頭鬼』を墓地に戻す」

真紅眼の不屍竜 ATK3000↓3300

「さらに、不屍竜に『メテオ・ストライク』を装備させる。これで、貫通能力を付与だ」

「マズい！」

もう遅い。

「バトルだ。『真紅眼の不屍竜』で、『ホルスのしもべ』を攻撃」

青の黒炎弾を放出し、ホルスのしもべは碎け散った。

「ぐあああああ！」

京吾 LP8000↓4800

「この瞬間、不屍竜の効果。アンデットモンスターが戦闘で破壊されたことで、お互いの墓地から、アンデットモンスターを一体特殊召喚できる。アンデットワールドがある時、ホルスは墓地にいる場合ならアンデット族だ。こちらに来てもらうぞ」

京吾の墓地から『ホルスの黒炎竜 LV6』が溢れ出て、遊月のフィールドに出現する。

ホルスの黒炎竜 LV6 ATK2300 ☆6

真紅眼の不屍竜 ATK3300↓3200

「ば、バカな……」

ホルスを奪われたことに加えて、不屍竜の一撃によって発生した身体へのダメージが想定より大きかったことで、京吾は内心で焦っていた。

「ドーハスーラとホルスで、ダイレクトアタック」

ドーハスーラが闇の波動を放出し、ホルスはブレスを放出した。

二体の攻撃は、京吾もそうだが、京吾の後ろにいた男も巻きこんで吹っ飛ばす。

「ガハッ！」

京吾 LP4800↓2000↓0

デュエル終了と同時に、モンスターは消えて、あたりの景色が戻って行く。

煙が晴れてくると、遊月は京吾がいる位置よりも手前の場所にあった『灰流うらら』が落ちているのを見て、手袋を自分の両手に付けてからそれを拾い上げた。

「さてと……」

カードを拾い上げた遊月は、カードに宿る精霊を見る。

遊月が感じた色は、昨日見たものと同じだった。

「珍しいな。まだ自分に自我があると分かっている精霊か」

上手く表現するのは難しいが、あえて言えば生まれたての赤ん坊のようなものだ。

しつかりと自我を持てば流暢にしゃべるようになるだろうが、そうなるまでには少し時間が必要である。

「まあ問題はないな。明日の朝に誰よりも早く来て、机にでも入れておこう」

遊月はカードをポケットに突っ込むと、そのまま帰るのだった。

当然のことだが、そのまま借りパクはしない。

精霊カードでシークレットレアなのでメリットは大きいけど、もとは他人のカードなのだ。ぶっちゃけリスクが高すぎるだろう。

そういつた損得勘定は抜きにしても、プライドだとかまあいろいろあるのだが、もっとわかりやすい理由を言うならば……。

★ 遊月の推しは『灰流うらら』ではなく『幽鬼うさぎ』である。

「……むむむ、綾羽ちゃんの調子が戻ったようだな」

「……」

次の日。

教室に入ってきた英明は、大東を見てそんなことを言った。

そしてそんな英明を見て信じられないものを発見したような顔で英明を見る遊月。

まあ、もともと腐ったような目をしているのでちよつと分かりにくいのだが、それはそれなりに驚いていた。

「こういうことは……遊月。お前が言った通り、俺は二番手になるってことか」

「……私に言われても困るのだが」

そもそも英明に解決できるかどうかは分からないのだ。

なので、遊月にとっては二番手もクソもない。

「ていうか、誰が助けたんだろう……ハッ！もしかして、既にそいつをつきあつてるのか！美少女を助けたんだ。絶対につきあつてるに

決まってる。じゃなかったらそんな男は糞だろ」

遊月は二割くらい本気でイラツとしたが、すぐに抑えた。

「……私を知るか」

遊月はそう言うのと、もう何も言わなくなった。

こうして英明が時々うるさいのはいつものことだ。

すぐに戻るだろう。そう考えれば日常の範囲内である。

★

一方、綾羽の方もいろいろ思うことはあった。

当然のことだが、シークレットレアの『灰流うらら』となれば、一度でも取られたらもう二度と戻ってこないと思うのが普通である。

それほどのレアカードだ。

裏と言うものはデュエルにもあるもので、そこに流れてしまえば出所など二の次。

それが、朝来たら机の中に入っていたのだ。

驚くのは当然のことである。

「一体誰が……あつ」

驚きすぎてうっかりしていた。

鞆の中を探ってみると、ノートを一冊、教室に忘れていた。

「どうしたんだ？綾羽」

たまたま近くを通りかかっていた、クラスの中のトップカーストグループで一番イケメンの男子が話しかけてくる。

別に綾羽自身はそういったグループに属してはいないが、たまに誘われるときがある。

そして、もっとも自分を誘ってくるのが、この銀髪のイケメン、ながいしげいこ永石圭吾という生徒である。

「ごめん、ちよつとノート忘れちゃって、先に喫茶店に行つて、私も後で行くから」

「どうせなら俺が取りに行くけど」

「大丈夫、先に行つてね」

そういつて、綾羽は背を向けて校舎に向かって走って行く。
教室は二階にある。

一番近い階段を上って、三つ目の教室だ。

そして、その階段を上がって、顔を曲がった時だった。

「うおっ」

「きやつ」

男子生徒とぶつかった。

普段は誰もいない時間なので油断していたようだ。

クラスメイトの男子生徒だ。

身長は百八十に届くくらい高いが、首からドクロのネックレスを付けて、さらに腐ったような目をした生徒である。確か、名前は不死原遊月だ。

その名字も若干縁起が悪いような気がするのと、腐ったような目をして不気味な印象があるので、永石圭吾のグループでは良い印象はなく、逆に悪くいうときが多い生徒だ。

「大丈夫か？」

「あ、うん。不死原君は？」

「問題ない」

体を起こした時、綾羽は自分のそばにカードが落ちていることに気が付いた。

『アンデットワールド』のカードだった。

綾羽はそのカードが遊月のものだと察して、そのカードを手にとった。

その時綾羽は、スカートのポケットに入れたデッキが疼いたような気がした。

いや、ポケットの中だけではない。

自分の胸も、すこし、疼きがあった。

(何？今の……)

今までこんなことはなかったので戸惑う綾羽。

「どうかしたのか？」

遊月が聞いて来る。

綾羽は慌ててカードを渡した。

「ううん。何でもないよ。これ……」

「ああ。どうも」

遊月はカードを受け取ると、それ以上、綾羽に対して興味がないかのように歩いていった。

(……不思議な人だなあ)

綾羽にとつてはあまりない反応だった。

自己主張することはほとんどないが、普段近くにいるカーストを考えれば、自分のルックスがすぐれていることは認識しているし、色々な人が自分を見るが、無反応と言うことはなかった。

「あ、そうだ。ノートをとっておかないと」

珍しいことだ。

だが、遊月のような反応をする人は始めてではない。

そのため、すぐに自分が忘れたノートの存在に興味移った。

ただ一点。

『アンデットワールド』のカードを手にとった時のあの感覚。

そして、ポケットの中のデッキだけではなく、胸の疼き。

なぜあの一瞬だけ、自分が『感謝』を考えたのかが分からなかった。

第二話

一つのことを何度も思い返すことがあったとしても、常に時間は過ぎていく。

とある『話題』が時間の経過とともに噂することすらなくなるのは、そういう時間の経過が原因だ。

いつまでも誰かが話す話題の方が珍しい。

そう言うわけで、遊月は思ったことがあれば、いつも通り英明に話しかけるのだ。

「英明。時々思うことがある」

「おう、なんだ？」

「モンスターカードは二種類で分類できると私は思う」

「ほう」

「あくまでも効果が優先されるモンスター」と『場に残って頑張るモンスター』だ」

「ソリティアで言う『展開補助』と『着地点』だな」

「そうだ。はつきり言っって『着地点』の方は言うまでもないだろう。強いから立てておくんだからな」

「そりやそうだ。で、『展開補助』の話か」

「ああ。たまに思うのだが、妨害札を使った時、酷い時は、そのままモンスターが残るものだ。で、自分のターンになって戦闘で破壊しようとした時、思ったよりステータスが高くてびっくりするときがある」

「あー……分かるな」

「英明。お前が普段使わないだろうから聞くが、デストルドの守備力を知っているか？」

「……あの『ライフ半分使ってレベル7シンクロしようぜ』って言いたそうなモンスターか」

「ああ。どれくらいだと思う？」

「攻撃力は確か1000だったと思うんだよな。ソリティアが好きな連中が攻撃表示で出してきたとき、そんなステータスだったような気がする」

「合っているぞ」

「守備力か……2000から2500くらいか？」

「3000ある」

「高つか！え、アイツそんなにあるの!？」

「ある。あと『ドットスケーパー』の守備力を知ってるか？」

「ええと……サイバース族で、墓地に送られた時と除外された時、それぞれでデュエル中に一回ずつ特殊召喚できるんだっただな」

「そうだ」

「レベル1だよな」

「そうだ」

「……わからん」

「2100ある」

「うわー……500強化するだけで2600のレベル1モンスターになるわけか」

「そうなる」

「……高くね？」

「まあそういう話をしているわけだからな」

「こんなふうには、モンスターのステータスと言うものは侮れないものなのだ。」

「召喚した時にいくら表示されるからと言って、意識していなければならぬことはいろいろあるのだ。」

「月の書で裏側になったデストロイドをドーハスーラで殴って振り返り討ちになったのは遊月に取って記憶に新しい。」

「ま、そんな風に、覚えておくことも必要ってことだな」

「そうだな……そう言えば、午後は実技授業か」

「っていつても、デュエルするだけだけだな」

「デュエルスクールと言うものはどこもそう言うものである。」

「クラス内でくじ引きみたいなもんだろ？どうなるんだらうな」

「私を知るか」

「まあ、遊月は誰が相手でも関係ないからな」

「一定の評価をもらえる程度にデュエルをする。」

それだけであり、それ以上でもそれ以下でもない。

「む、デュエルディスクに通信が来た……タッグデュエルだと？」

「へえ、初めてだぜ……ん？この番号は……遊月。ひよつとしてペアはお前か？」

「……みたいだな」

遊月は英明のデュエルディスクをチラ見してそういった。

「ぐぬぬ。何でタッグデュエルでお前とペアなんだよ。綾羽ちゃんがよかつたぜ」

「私に言うんじゃない」

いずれにせよすべて偶然なのだ。遊月に言われても困る。

★

敷地の地下。

そこには、膨大なほどの実習室が存在し、一つの部屋で四人までが混ざってデュエルするような感じだ。

一つの部屋に対して入り口が対照的になるように二つ存在し、東側から入るか西側から入るか、という入り方になっている。

「ええと、お前と組むんだからこれを無理だな。ええとこつちに……」
英明が遊月の『アンデットワールド』に合わせていろいろ調節しているようだ。

遊月よりも綾羽の方がいいとかいろいろ言っているが、結局は遊月に合わせる。

なんだかんだ言っていていいやつなのだ。若干性欲が強いが。

遊月とは真反対である。

「よし、デュッキの調節は出来た。行くぜ。遊月」

「ああ」

扉を開けて中に入る。

シングルでもそうだが、タッグデュエルに加えて、多少の観戦スペースが存在する。

ちなみに、このレベルの広さの部屋が何百個もあるというのだから工事費用と電気代の無駄遣いと言うものだ。

とはいえ、現代においてデュエルは政界や財界と並ぶ要素であり、

このデュエルスクールは『施設重視』である。

はつきり言って最新式のデュエルコートだとか言われても、野外でやるのと大して変わらないので、それならばと部屋を作りまくったということだ。

……予算の使い方を確実に間違えている気がする。

「あれ、まだ対戦相手は来てないみたいだな」
「だな」

英明は誰が相手なのか楽しみにしていたようだが、まだ相手は来ていなかった。

「まあ、それならそれでかまわないか。まだちよつと時間あるし」

「確かに。普通なら、タッグデュエルをすればそれ相応にデッキの調節は必要だ」

「汎用パーツが多いお前のデッキとは違うからな」

「お前が言うか?」

そこまで行ったとき、反対側のドアが開いた。

二人ともクラスメイトだ。

永石圭吾と、大束綾羽。

永石が大束をグループに誘われているという話を聞いたことがある。

「というか英明が言っていた。」

「フッフ、綾羽ちゃん。このデュエルで君に見せてあげるよ。俺がこの学校で最も優れたデュエリストだということだね」

「あ、う、うん」

明らかに大束の方がおびえたような雰囲気を持っているのだが、それはそれでどうなのだろうか。

「おいお前！俺と遊月は噛ませ犬じゃねえんだ。あんまり舐めてると後悔するぜ」

「はっ?お前馬鹿か。お前程度の雑魚が俺に勝てるわけねえだろ」

「ふっぎけん！雑魚って言った方が雑魚なんだよ!」

「まあいいさ。どうせ俺が勝つのは決まってるんだ。バカの熱血漢に、目の腐った不気味男だろ?こんな底辺コンビに負けるわけねえだ

ろうが」

永石がデュエルディスクを構える。

「くっそおおおお、絶対にぎゃふんつて言わせてやる。行くぞ遊月」

「英明。余計なことをペラペラしゃべるな。見ていて滑稽だ」

「ぐふっ」

デュエルディスクを構えながら英明にとどめを刺す遊月。

正直なところ、どうでもいいことだとしか思えないのだ。

「あ、あはは……私も頑張ろう」

バカとかアホが部屋の中に三人もいて何を言えればいいのかわからなくなっている大束。

仕方のないことである。

とは言うものの、デュエルをすることに変わりはない。

全員がカードを五枚引く。

「[[デュエル!]]」

遊月&英明 LP8000

圭吾&綾羽 LP8000

ターンランプが付いたのは英明。

「よっしゃあ!俺の先攻!俺は手札から、『E・HERO ソリッドマン』を召喚!」

E・HERO ソリッドマン ATK1300 ☆4

「ソリッドマンの効果発動。手札のHEROを特殊召喚だ。現れる。

『E・HERO シャドー・ミスト』!」

E・HERO シャドー・ミスト ATK1000 ☆4

「シャドー・ミストの効果で、デッキから『マスク・チェンジ』を手札に加えるぜ。そして、ソリッドマンとシャドーミストの二体をリンクマーカーにセット!」

二体のHEROがマーカーに飛び込んだ。

「条件はHERO二体。英雄は今混じりて、驚異の爆走者となる。リンク召喚!リンク2『X・HERO ワンダー・ドライバー』!」

X・HERO ワンダー・ドライバー ATK1900 LINK

「俺はカードを二枚セットして、ターンエンドだぜ！」

「ハッ！HEROなんてカードを使ってるなんてな。俺が叩き潰してやる。ドロー！」

圭吾が勢いよくドローした。

そして楽しそうな笑みを浮かべる。

「行くぜ。俺はスケール1の『クリフオート・アセンブラ』と、スケール9の『クリフオート・ツール』で、ペンデュラムスケールをセットイング！」

出現する二体の機械。

「んな……クリフオートだど!?!」

「その通りだ。ツールのペンデュラム効果で、デッキから『アポクリフオート・キラー』をサーチ」

圭吾&綾羽 LP8000↓7200

「しかもキラーって……」

「それに特化してるってことだ。さあお出ませ」

手札のカードを二枚もった永石。

「邪悪の樹を宿す砦よ。振り子が描く設計図に従い、殲滅すべく起動せよ！ペンデュラム召喚！『クリフオート・ゲノム』『クリフオート・アーカイブ』！ま、ステータスは変化するけどな」

クリフオート・ゲノム ATK1800 ☆4

クリフオート・アーカイブ ATK1800 ☆4

「そして、この二体をリリース。『クリフオート・ディスク』をアドバンス召喚！」

クリフオート・ディスク ATK2700 ☆7

「ディスクの効果発動。クリフオートをリリースしてアドバンス召喚したことで、デッキから二体のクリフオートを特殊召喚する。そして、ゲノムとアーカイブの効果。こいつらはリリースされた時に発動できる固有の効果がある。ゲノムの効果で、俺から見て右側のセットカードを破壊。アーカイブの効果で、ワンダー・ドライバーを手札に戻す！」

「こりやマズい！指定された『マスク・チェンジ』を使って、ワンダー・

ドライバーを変身召喚！『M・HERO 光牙』！

M・HERO 光牙 ATK2500 ☆8

「対象不在でゲノムとアーカイブは不発だ。だが、ディスクの効果で、それぞれ二体目のこいつらを特殊召喚！」

クリフオート・ゲノム ATK1800 ☆4

クリフオート・アーカイブ ATK1800 ☆4

「これで、クリフオートが三体……」

「俺はフィールド魔法『機殻の要塞』を発動し、それにより、追加のクリフオート召喚権を得る。俺はディスク、ゲノム、アーカイブをリリース。『アポクリフオート・キラー』をアドバンス召喚！」

アポクリフオート・キラー ATK3000 ☆10

「きやがったか」

「そしてこの瞬間、ゲノムとアーカイブの効果発動！」

「はっ!？」

「ターン一なんてついてねえんだよ！」

ゲノムの効果によってセットカードが破壊され、アーカイブの効果で光牙がエクストラデッキに戻る。

「セットカードは……『ヒーロー・シグナル』か。悪くはねえが、通用しねえよ」

「クソ……」

「やれ！アポクリフオート・キラー！」

アポクリフオート・キラーから放出されたレーザーが、英明に直撃する。

「うごはっ！」

遊月&英明 LP8000↓5000

「俺はこれでターンエンドだ。俺の手札は今はゼロ枚だが、アセンブラのペンデュラム効果により、このターンアドバンス召喚のためにリリースしたクリフオートの数、よって五枚。デッキからドロウする」

あれだけぶっ壊したというのに手札が五枚。

「どうだ。俺のクリフオートデッキの力は。お前らなんぞ相手にならねえんだよ！」

「……」

「どうした。驚きすぎて声も出ねえか？このドクロ野郎！」

「ドクロ野郎なんて言われたのは初めてだが、まあそれは置いておくとして……理想的な動きをすと思うただけだ」

「何？」

「私のターン。ドロー」

「ともかくにも、次は遊月のターンだ。」

「さて、どうするか」

「アポクリフオート・キラーに、下手な手段は通用しないぜ」

「私が気になっているのは、キララーの方ではないが……」

遊月は『機殻の要塞』をチラツと見て、それに加えて、英明が使った『マスク・チェンジ』にも一瞬意識が向いたのだが、それ以上は注ぎたくないことにした。

「要するに、レベル10以上のモンスター効果なら受け付ける訳で、攻撃力と守備力を下げる以外は邪魔してこないというわけか。なら私は『ユニゾンビ』を召喚」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3

「ユニゾンビ……なるほど、典型的なアンデットってわけか。なら、俺のアポクリフオート・キララーを倒す手段は……」

「第一の効果発動。ユニゾンビを対象にして、手札の『死霊王 ドーハスーラ』を捨ててレベルを一つ上げる」

ユニゾンビ ☆3↓4

「ほう、ドーハスーラか」

そのカードを聞いて笑みを濃くする永石。

レベル8モンスターであるドーハスーラではどうしようもないと考えているのだろうか。

「私は『おろかな埋葬』を使って、『馬頭鬼』を墓地に送る。そして、これを除外」

遊月の墓地から、闇があふれ出す。

「終わりも始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

死霊王 ドーハスーラ ATK2800↓2300 ☆8

出現する屍の世界の王。

「この感覚、精霊カードか」

「ご名答」

「クツクツ。お前には過ぎたカードだ。このデュエルで俺が勝つたら、そのカードはもらうぜ」

「な、圭吾君。いくらなんでもそれは……」

「あ？俺の言うことが聞けないっていうのか！」

急に大束に対して叫びだした永石。

「……」

「なんだクロ野郎。俺に文句があるってのか？」

「別にアンテイルールが発生しようとは私は気にしない。第一、私のドーハスーラが君の言うことを聞くわけがない」

「どういうことだ？」

「説明する義務はない。それと……ドーハスーラがアポクリフォート・キラーを倒せない。と言っているように聞こえるが、それは単体の話だ」

遊月は手札の速攻魔法を使う。

「私は『緊急テレポート』を発動。デッキから『幽鬼うさぎ』を特殊召喚」

「はっ？」

幽鬼うさぎ ATK0 ☆3

「ば、馬鹿な……」

「ユニゾンビの効果で、デッキから『屍界のバンシー』を墓地に送り、ドーハスーラのレベルを上昇させる」

死霊王 ドーハスーラ ☆8↓9

「そして、墓地からバンシーを除外して、デッキから『アンデットワールド』を発動」

遊月のデッキから『アンデットワールド』が発動され、遊月と英明がいる側のフィールドが屍界に染まっていく。

「……なんだ。これは」

「なんだか。思ったより重いね」

「うーん。まあいつも通りなんだが、みんなもそう思うのか？」

三者三様といったところだが、遊月は気にしない。

「そして、アンデット族のユニゾンビとうさぎをリンクマーカーにセット。召喚条件はアンデット二体。失意の英雄よ、怨念渦巻く大地で、救世主となりて生まれ変われ、リンク召喚。リンク2『アドヴェンデット・セイヴァー』！」

アドヴェンデット・セイヴァー ATK1600↓1100 LI
NK2

「バトルフェイズだ。まずはセイヴァーで攻撃。そして、デッキから『死霊王 ドーハスーラ』を墓地に送ることで、キラールの攻撃力を1600上げる。そして『アンデット・ストラグル』で、セイヴァーの打点を上昇させる」

「くそが……」

アドヴェンデット・セイヴァー ATK1100↓2100
アポクリフオート・キラール ATK3000↓1400
圭吾&綾羽 LP7200↓6500

「さらに、ドーハスーラの攻撃力も元に戻る。ダイレクトアタックだ」

死霊王 ドーハスーラ ATK2300↓2800
圭吾&綾羽 LP6500↓3700

「手札から『アドバンス・ドロウ』を発動。ドーハスーラをリリースして、二枚ドロウ……カードを二枚セットしてターンエンドだ。セイヴァーの攻撃力はキラールが消えた時点で戻っている。そしてストラグルの効果が終了して元に戻る」

アドヴェンデット・セイヴァー ATK2100↓2600↓1600

伏せカードは二枚。

アンデットワールドもあるので、悪い布陣ではない。

「なら、私のターンだね。ドロウ！」

次は大東のターンだ。

「スタンバイフェイズに入っていないか？」
「うん」

「なら、ドーハスーラの効果発動だ。守備表示で特殊召喚する」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「むむむ、なかなか面倒なことになったね」

クリフオートのペンデュラム効果は、当然だがペアである大東にも適用されている。

はつきり言つて、クリフオートデッキではないのなら邪魔である。

遊月が英明をチラツと見ると、英明は二体のペンデュラムモンスターを見ている。

「まずは『揺れる眼差し』を発動。ペンデュラムゾーンのカードをすべて破壊して、その数によって効果を決定するよ」

(割るんかい)

ツールとアセンブラが粉々になった。

ちなみに、ツールの効果を使っていないところを考えると、どうやら大東のデッキの中にクリフオートは入っていないようだ。

「んなつ。俺のカードになにしやがる！」

そして叫びだす永石。

はつきり言つて邪魔である。

さすがの大東も無視した。

「効果解決。500ポイントのダメージを与えて、デッキから『エキセントリック・デーモン』を手札に加えるよ」

遊月&英明 LP5000↓4500

「これは……」

「このまま『エキセントリック・デーモン』をセッティングして、ペンデュラム効果発動。このカードと『アンデットワールド』を破壊するよ」

「……まあ、これは仕方がないか」

消え去っていくアンデットワールド。

とはいえ、これは必要経費だろう。

そして……本人のデッキは一体……。

「私は手札から『ヘカテリス』を捨てて、効果発動、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加えるよ。そして発動！」

普通なら、フィールド魔法しか風景に影響しないのだが、実際にヴァルハラが出現した。

「くううー！綾羽ちゃんを使うヴァルハラ、最高だぜ！」

そして英明が何か言っているが、大東は無視することにしたようだ。

……というより変態慣れしてきたような気がする。

ただ、遊月は、英明とは別の理由で、あのヴァルハラのカードに興味があった。

「そして、これをそのまま発動して、『幻奏の音姫プロデイジー・モーツァルト』を手札から特殊召喚！」

幻奏の音姫プロデイジー・モーツァルト ATK2600 ☆8

「モーツァルトの効果発動。手札から、光属性、天使族モンスターを特殊召喚できるよ。私は手札から『マスター・ヒュペリオン』を特殊召喚！」

マスター・ヒュペリオン ATK2700 ☆8

「そのまま効果発動。墓地のヘカテリスを除外して、ドーハスーラを破壊！」

ドーハスーラが破壊された。

「そして、『フォトン・サンクチュアリ』を発動。フォントークンを特殊召喚」

フォントークン DFE0 ☆4

フォントークン DFE0 ☆4

「そして、フォントークン二体をリリース、アドバンス召喚『天帝アイテール』！」

天帝アイテール ATK2800 ☆8

「レベル8モンスターが三体来たか」

「まだまだ行くよ。アイテールのアドバンス召喚成功時の効果。デッキから『汎神の帝王』と『真源の帝王』を墓地に送ることで、デッキから『光帝クライス』を特殊召喚！」

光帝クライス ATK2400 ☆6

「クライスの効果、アドヴェンデット・セイヴァーと、セットカード一枚を対象にして発動するよ。この二枚を破壊！」

「指定された罨カード『針虫の巣窟』を発動。デッキの上から五枚のカードを墓地に送る」

落ちたのは、『真紅眼の不死竜』『傀儡虫』『アンデット・ネクロナイズ』『龍の鏡』『馬頭鬼』

遊月は『私は何か悪いことをしたかな』と三割くらい本気で思った。

「……『アドヴェンデット・セイヴァー』と『針虫の巣窟』が破壊されて、私は二枚ドロ―」

「バトルフェイズ。天帝アイテールでダイレクトアタック！」

『和睦の使者』を発動し、ダメージを0にする」

かなり強制的だが、これは仕方がない。

「チツ。これだけやって決めきれねえとか、甘いにもほどがあんだろ」

フリーチェーンだっていうのに何言ってるんだこの男。

「む……私はターンエンド。天帝アイテールの効果で特殊召喚されたクライスは、手札に戻る」

「よっしゃ！次は俺のターンだ。ドロ―！」

勢いよくカードを引く英明。

「さて、前にペア組んだ時にすっかり忘れてておもしろい怒鳴られたから、きつちり行け。ドーハスーラの効果発動！守備表示で特殊召喚する！」

次の瞬間、遊月はドーハスーラから視線を感じる。

(……このデュエルでは英明の言うことにも従え)

遊月がそう念じると、ドーハスーラが墓地から出現した。

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「……ワンテンポ遅くね？」

やかましい。

「そうだった。『アンデットワールド』がなくても、『機殻の要塞』があるから……」

「そう言うことだ！」

「何!?!俺のカードの何が悪いってんだ!」

悪いとかどうとか言っても仕方がないのだが、さすが大東も放置を覚えた。

「そして、墓地の『馬頭鬼』を墓地から除外し、墓地の『真紅眼の不死竜』を対象にして効果発動。そして、アンデットモンスターの効果発動により、ドーハスーラの効果発動。天帝アイテールを除外する!」

遊月が先ほど念じたことを思い出したのか、ドーハスーラは右手の杖に波動を集約し、アイテールを消滅させた。

「さらに、『真紅眼の不死竜』を特殊召喚!」

真紅眼の不死竜 ATK2400 ☆7

「手札から魔法カード『マスク・チャージ』を発動。墓地から『マスク・チェンジ』と『E・HERO ソリッドマン』を手札に加える。そして、ソリッドマンを召喚!」

E・HERO ソリッドマン ATK1300 ☆4

「効果発動。手札から『E・HERO エアーマン』を特殊召喚!」

E・HERO エアーマン ATK1800 ☆4

「効果発動。デッキから『E・HERO オネステイ・ネオス』を手札に加えるぜ!」

準備完了。と言わんばかりに英明が笑みを深くした。

「俺は『マスク・チェンジ』を発動。ソリッドマンを变身召喚『M・HERO ダイアン』!」

M・HERO ダイアン ATK2800 ☆8

ちなみに、攻撃力も高いが、守備が3000もあるちよつと頭がおかしいモンスターだ。

M・HEROでは屈指の防御力だが、単純な防御性能でいえばカミカゼのほうが上で、制圧力はダーク・ロウの方が上というちよつと悲しいモンスターである。

とはいえ、効果は強力だが。

「手札のオネステイ・ネオスの効果を発動!ダイアンの攻撃力を2500アップさせる!」

M・HERO ダイアン ATK2800↓5300

ダイアンが拳を握る。

「バトルフェイズ！ダイアンでマスター・ヒュペリオンを攻撃！」

ダイアンがマスター・ヒュペリオンを殴り飛ばした。

ちなみに吹っ飛んだヒュペリオンは使用者である大束ではなく永石に直撃した。

「ぐはああああ！」

圭吾&綾羽 LP3700↓1100

「そして、『真紅眼の不死竜』でダイレクトアタック！」

圭吾&綾羽 LP1100↓0

「よっしゃ！遊月。俺たちの勝利だぜ！」

「ああ。うん。よかったな」

遊月は若干雑に答えた。

「く、くそ、この俺が負けるはずがねえ！こんなのは何かの間違いだ！」

「……」

正直、オネステイ・ネオスという決戦兵器を持つHEROをバカにしている時点であまりいい判断ではない。

展開力に物を言わせた手段で攻めて、リカバリーを考えなかった大束にも敗因はある。

だがしかし、キラールの力が想像より役に立っていなかったゆえに吠えている部分もあるはずだ。

それともう一つ。

「単にお前は傲慢なだけだろ。欲しいカードがあればそれを奪おうとするだけで、何も考えてないのは明白だ」

「なんだと？」

「なら、聞いておこう」

遊月はデッキから『死霊王 ドーハスーラ』のカードを取り出して見せた。

「お前はこのカードが欲しいと言っていたが、『クリフオート』に入るわけがないだろ」

「ぐ……」

そう、そこが問題である。

クリフォート以外の特殊召喚ができなくなるペンデュラム効果であふれているのに、どうするっていうのだ。

「糞が……」

永石は起き上がると、遊月に背を向ける。

「今回は運が良かったただけだ。次は負けねえ」

「そうかもしれないな。お前が言うとおり、どんなに考えたデッキでも運が悪いと負けるからな」

「~~~~~っ！」

何かを言いたそうにしている永石だったが、何も言わずに実習室を出て行った。

……というわけで、永石という最大の邪魔者はいなくなった。

そして英明が動く。

「綾羽ちゃん。あいつに何か弱みを握られているなら俺が助けてやっから、いつでも頼ってくれ。じゃあな！」

カツコよく決めたような表情の英明。

ただ、遊月は英明の顔が非常に赤くなっていることに気が付いた。

ついでに言えば若干前傾姿勢である。

(正義感が根本にあつて表面に出てくるのが性欲かよ……しかも若干へタレとか……)

英明はなんかかっこいいことを言ったままの表情で実習室を出て行った。

「……まあ、深く気にするな」

遊月はそれだけ言つて、実習室を後にした。

★

「あんな。作業みたいなタクティクスに負けちまうとはな……」

永石は校舎裏にいた。

グループの生徒も今はそばにいない。

『単にお前は傲慢なだけだろ。欲しいカードがあればそれを奪おうとするだけで、何も考えてないのは明白だ』

先ほどの遊月の言葉が頭に浮かぶ。

「……チツ。その何が悪いってんだ。俺のすべてを知ってるような口ききやがって、それこそ傲慢だろうが」

永石はデツキから『アポクリフオート・キラール』のカードを取り出す。

「絶対だと思っていた力が、絶対じゃなかった。か」

感情が認めないだけで、理性の方ではわかっていることなどいくらでもある。

「いえ、あなたの『絶対の力』とは、そのカードではありませんよ」「っ。誰だ！」

振り向いた先にいたのは、サングラスをかけた紫の長髪の男性。

スーツ姿できっちりしている印象はあるものの、不穏なものが含まれていた。

「そう警戒するな。私は確かに怪しいものだが、何も害する存在ではない。私は君たちの理解者だよ」

「……たち？」

複数形なのが気になった。

だが、男性はそこは無視した。

「あなたには絶対の力がある。だが、あなたは気が付いていないようだ」

「それではないって言ったな。なら、いったいどれだ」

永石はすぐに、『自分が絶対の力をすでに持っている』と判断した。

そう言い聞かせているように聞こえたからである。

「あなたは思ったより賢いですね……それが知りたければ、私と契約をしましょう」

そう言っつて男性が取り出したのは、一つのカプセルだ。

飲み干すことができるくらいの大きさのものである。

「私は確かに、あなたが持つ絶対の力がなんなのかを知っている。契約するのであれば、それを教えたうえで、さらなる力を手に入れるこのカプセルを差し上げましょう」

「その契約の内容は？」

「あなたが賛成してから話しますよ」

「ハッ！いまだき小学生でもそんな話には乗らねえよ。第一……」

永石は男性をにらみつけて、言葉が続ける。

「他人に与えられた力なんぞ知るか。それと、『さらなる力を手に入れるカプセル』っていったな。言い換えれば、カプセルを使うだけで手に入る程度ではあるが、まだ俺には上があるってことだ。なら、俺がそれに乗る必要はねえんだよ。俺が、俺だけの力で、それすらも越えてやる！」

永石は『アポクリフト・キラ』のカードを掲げると、自分の後ろに出現させる。

そして、そのままレーザーを放出させた。

「む……」

男性は回避した。

レーザーが地面に直撃し、土煙が舞う。

そうして晴れたころには、すでにいなくなっていた。

「……俺も離れた方がいいか」

傲慢である永石もさすがにそう思った。

★

そのころ、永石に接触していた男性は電話していた。

「申し訳ございません。『被験者』との契約に失敗しました……え、はい。かしこまりました。任務を続けます」

通話を終了させた。

「フッフ。『他人に与えられた力なんぞ知るか』ですか……バカなものですね。今使っている力が、他人に与えられたものだとは知らずに」

笑いを必死にこらえているようだ。

「まあいいでしょう。まだ交渉相手は残っていますからね」

素晴らしいながら、男は闇の中に溶けていった。

第三話

永石、大束のタツグとデュエルした遊月と英明だが、だからと言ってすることが増えるわけではない。

実はこの実技授業、準備時間とデュエル時間に分かれており、準備時間の方がそれなりに設けられているので、デュエルは一戦だけいいのだ。

時間が余ればやってもいいのだが、二戦目以降は双方合意が必要である。

そのため、二戦目以降をする必要がなく、一番最初に永石が退室した時点で、何がどうなろうと実技は終了である。

そして、デュエル一回に必要な時間と言うものは、まあ『霊獣』のような効果説明がどう考えても必要になるソリティアデッキとか、『終焉のカウントダウン』のような時間経過の特殊勝利デッキを使わない限り、大した違いはないものである。

誰かのデュエルが終わったとき、ほかの誰かのデュエルも終わっているものなのだ。

よって、爆発現場。と言うものは話題になる。

いや、まだ話題になっていないので、『なってしまうかもしれない』というほうが正しいか。

『精霊力』が残ってるなあ。単なる爆発っていうのならいいんだが、こういうことがあると面倒なんだよねえ」

一人の男子生徒がそんな現場に来ていた。

だらしなく伸びた茶髪はボサボサである。

そしてその瞳は、『面倒なことは嫌いです』と言っているかのようにだらけきっている。

「ま、仕方がないか」

男子生徒は『ミキサード』のカードを取り出した。

それをデュエルデスクのモンスターゾーンに置くと、そのままミキサードが出現する。

「んじや。これの始末はよろしく」

ミキサーロイドは頷くと、自分の背中（……と喋っているのだから）からミキサーを流して、爆発現場の痕跡を上から消していく。

数秒後には元通りになっていた。

乾くのがあまりにも早すぎるが、ミキサーそのものにも精霊力が存在する。

後でミキサーのほうの精霊力は霧散するようになっていたので、問題は無い。

なお、精霊力って何？という質問には黙秘権を行使する。

「残った精霊力から察するに、おそらくモンスターは『アポクリフォー卜・キラー』だが……永石の仕業か？だが、ここまでするようなやつとは思えないけどなあ」

少し考えた後、『もつと異質な精霊力が通った先』を見る。

「……会長への報告はしなくてもいいか」

それ以上は何も言わずにミキサーロイドも引込めると、その場を後にした。

★

次の日の放課後。

「英明。私は思うことがある」

「なんだ？」

「ロック系のメタカードだが、突破手段は『割る』か『無視』するかと二種類ということだ」

「……なるほど。あれくらったら嫌だよな」

「ああ」

「正直『マクロコスモス』とか俺嫌いだな」

「【M・HERO】を使っているお前が言うな」

「ダーク・ロウ先生をデイスるんじゃない」

「別にデイスっているつもりはないがな。ただ、ロック効果が本命じゃないのにロックカードみたいなカードって身近にあるからな」

「そうか？」

「じゃあ聞くんが、『マクロコスモス』の第一の効果を言ってみろ」

「第一？」

「マクロの除外効果は第二だ」

「……なんだっけ」

「少しは考えろ」

「マクロコスモス……いや、正直、名前とイラストだけで『除外される』って印象が強すぎて……」

「『原始太陽ヘリオス』って知ってるか？」

「え、あ……ああっ！アイツか！」

お互いの除外されたモンスター一枚につき100ポイントが攻撃力と守備力になるモンスターだ。

ぶっちゃけ、使いやすさでいえばダ・イーザの方が上である。

「そういえばいたな。最近のカードしか集めてないデュエリストの中にはそもそもカードの存在を知らないやつがいるんじゃないのか？」

「ありうるっていうか、中等部一年のガキンチョが『マクロコスモスの効果って知ってる？』って聞いてきたから『原始太陽ヘリオスを特殊召喚できる』って言ったら『違うよ』って言われた」

「アツハツハ！傑作！」

「まあ、もちろん、実は存在する制限効果に気が付いていない場合って言うものも存在するがな」

「それってどういう——」

とここで、ふと英明は思いだした。

「……そう言えば、遊月が使ってる『アンデットワールド』って……」

「ああ。フィールドと墓地のモンスターをアンデット族に変更する効果もあるが、もうひとつ。『アンデット族モンスターしかアドバンス召喚できない』という効果がある」

「……要するに、永石と綾羽ちゃんのタッグとのデュエル。三ターン目に発動されたお前の『アンデットワールド』を割らないと、綾羽ちゃんも『天帝アイテール』をアドバンス召喚することすらできなかったのか」

「そう言うことになる」

ついでに言えば、天使ではなくなるため『マスター・ヒュペリオン』の除去効果も使用不可になる。

要するに綾羽は、『揺れる眼差し』を使い、『エキセントリック・デーモン』を使う。という流れだけで、その時点で見えていた自分のタクティクスを制限するカードを全て排除した。と言うことになる。

「二応、『天帝アイテール』のリクルート先には、アンデット族の帝王である『冥帝エレボス』が存在するが、モーツァルトやフォトン・サックチュアリのようなカードを採用しているところを見ると入っていないだろう。事故率が上がるだけだしな」

「……そう考えると、あの流れにはそれだけ意味があったのか、何かすげえな」

英明がうんうんと頷いている。

「ああ。それほどのことを考えられるタクティクスの持ち主だ。もしも、『天帝アイテール』の効果でリクルートされたのが『光帝クライス』じゃなくて、二枚目の『天帝アイテール』だったとしたら、英明がドロウするカードにもよるが、かなりマズいことになっていた可能性もある」

おそらく大束のデッキは、ほとんどのカードが『光属性・天使族・レベル8』で構成されたヴァルハラデッキだと思われるが、『帝王』ギミックが搭載されたアドバンス召喚が得意なデッキとも考えられる。

レベル8のモンスターが三体並んだが、『神竜騎士フェルグラント』すら出さなかったのはそういう理由があるだろう。『エキセントリック・デーモン』の存在もあり、『真帝王領域』はタッグデュエルゆえに抜いていたかもしれないが、普段は入っているかもしれない。

「めちやくちや考えた戦術だったのか」

「よく永石に誘われているようだが、それなら永石が【クリフオート】を使うことも知っていただろう。そもそも『自己主張しない』というのなら、私なら普通にクリフオートを組む」

「だな。ツールが強いし」

「それでも自分のデッキを選んできたんだ。よほど自信があるんだろうな」

「ほー……」

「ここで英明もう一つ思いだした。

「なら、あの場面で決めようとする必要はなかったよな。次の永石は手札六枚スタートだったし」

「いや、おそろくそこはわざとだ」
「え？」

遊月の指摘に英明は驚く。

「ぶん回していたが、私が余裕そうな表情だったから、フリーチェーンで護るカードくらい伏せていると思ったはずだ。ならば、あの場面でクライスを出せば、つかうことくらいは考えた可能性は十分にある。そうしてあのターンを乗り切れば、次のターン、英明が使うHEROデッキは爆発力があるからな」

「それでわざと負けたってことか？」

「あの時、永石はアンテイルールを急に入れてきた。全力を出しているような素振りを見せながらも負けるようにする。と考えれば、あのデュエルは考えられたものだった」
「要するに凄えんだな」

英明はあまりわかっていないように見えるが、まあいいとしよう。
「で、ロックカードの処理手段が割るか無視するか。と言った話に戻すが、要するにそう言うことだ。クリフオートのパンデュラム効果だが、あれは自分にしか影響を及ぼさないが、クリフオートデッキを組むことに寄って、視点を変えると『制限を無視している』と言える」
「……なるほど」

パンデュラムスケールの高いモンスターは、パンデュラム効果に制約効果が含まれていることがほとんどだ。

そう見ると、クリフオートも確かにその一つであり、これを回避する手段は基本的に「純正クリフオート」を組むか、割るカードを使うくらいだろう。

究極必殺技として『サイキック・ブロッカー』もあるが、ここでは語らないことにしよう。

「カテゴリーデッキを使うからデメリットは気にならないっていうけど、あれもある意味、『自分にかかるメタ要素を無視してる』ってことなんだな」

「そうだ」

別にあとで考えてみれば難しい話ではないが、『この話だけで多くを語れる』という時点で、深いことなのだ。

第一、遊月本人も、『アンデット族モンスター以外アドバンス召喚できない』というデメリットを忘れる時がある。

アドバンス召喚と言う概念そのものが薄れてきているということもあるにはある。

しかし、トロイメア・ゴブリンやジエムナイト・セラファイなど、追加の召喚権を簡単に得ることが出来るカードや出張パーツが増えていくので、全く考慮しないというのはあまりしない方がいいのだが。「なるほどなあ。俺も覚えておくぜ」

「だいたいだろうな」

遊月はそろそろ英明が何かを話したがっていると察して会話を止めた。

「あ、遊月。俺はこれからちよつと行くところあるから、また明日でいいか?」

「いいぞ」

「そっか。助かるぜ」

「……誰かと会うのか?」

「俺、お前しかダチがいないわけじゃねえからな?」

「それもそうだな」

英明はコミュニケーション能力がそれなりに高いのだ。

とはいえ、相手にはあまり踏み込まないので薄い関係が続くといった程度である。

例を挙げれば、共通の趣味でつながっていて、どちらかの興味がなくなつた時に離れる。という感じだ。

まあそれはそれとして、英明にも友達はある。

「んじゃ、また明日!」

そういつて、英明は走って行った。

「さて、私はデュエルディスクの販売店に行くか」
最近メンテナンスに出していない。

精密機械なので、重要なところでボロが出る可能性はそれなりに高いのだ。

簡易キットでできる程度なら自分ですが、本格的な部分は定期的にする必要がある。

★

実際、デュエルディスクは精密機械だ。

一応、量産ラインのようなものがあるにはあるが、多品種少数生産の時代になってきていることを考えると、一つ一つの値段が跳ねあがる。

さらに言えば、大幅なルール変更に寄り、昔に使われていた中古品とかになるとそもそも使えないものもあり、後付けパーツをとりつけることで何とかすることはできるのだが、正直ダサイ。

だがしかし、デュエルモンスターズの影響が強い現代。

親としては、せめて小学生の内か、最低でも中学に入学するころには最新式のデュエルディスクを買ってやりたい。と思うものなのだろう。

実際見ていると分かるのだが、小学校ではデュエルディスク所持率が三割程度なのに、中学ではほぼ百パーセントだ。

そのため、新しく行政機関として『決闘省』が設立。

デュエルモンスターズの普及のため、デュエルディスクの費用の大部分を負担している。

そのせいで、デュエルディスクの大量販売を考えている企業は国に逆らえないと言う状況になっているのだが、それはそれとしよう。

「ここだな」

デュエルディスクの機能と言うのは基本的に違いはない。

ただし、アプリだったりパーツをつけたり、と言ったことをして自分好みにしていくものだ。

なお、遊月のデュエルディスクは光を反射しないマットブラック塗装である。

精錬された黒というものに人は高級感を感じるもので、遊月のデュエルディスクはそれに該当する。

店内に入ってみると、ショーケースにデュエルディスクが並んでいる。

というより、店内はかなり広く、メンテナンスをはじめとして、根本的なシステムに関してはこうした大型店が担当し、デザイン面のディテールなどの部分は小売店が担当する。と言うパターンもある。

とどこどこでパンフレットを配っている人がいるところを見ると、小売店とのつながりは不可能だ。

遊月はまっすぐ、メンテナンスコーナーに移動する。

受付のおじさんにデュエルディスクを渡して、変わりのデュエルディスクをもらう。

その際、パンフレットももらった。

……あまり興味はないし、遊月のデュエルディスクを見て、『そういった高級感』が好きであることは分かっているらしく、強く進めてくることはなかったが。

「……どうせだから見ていくか」

しかし、何も興味がないというわけではない。

デュエルディスクは、そのデュエリストのデッキと並ぶ顔のようなものである。

遊月が使っているものは別にいつ使っていても『時代遅れ』と言われないタイプのものだが、だからと言って他を気にしていないと比較ができない。

といっても、好みの問題はあるので通るエリアは大体同じになるわけだが。

(若干高いな)

高級感と言うものは安くはない。

当然、そのデザインを生み出すためにそれなりの金額はする。

塗装をどうにかするだけでも、実のところかなりの費用なのだ。

「黒色で高級感を出したいのなら、あと一か月は待つべきだ。質の良い染料が発売されるのがその時期だよ」

遊月が染料のコーナーで見ている時、自分に話しかけてきたことを

理解した遊月は振り向いた。

ボサボサの茶髪と、だらけきった瞳をした少年だ。

見た感じ、年齢は高等部一年生。

遊月と同じである。

「……生徒会の副会長だったか？会長が不在で代弁してたな」

「ほう、よく覚えてるな」

「名前は覚えてないが」

「よくあることだ。僕の名前はいちのせかな一之瀬栞菜。君が言った通り、デュエ

ルスクール・アムネシアの生徒会副会長だ」

「不死原遊月だ」

「そうか……ん？どこかで聞いたことがあるような……まあいいか。

ちなみに、僕が先ほど言った『一か月後に発売される染料』というのは、僕の父さんの会社『イチノセ・テクノロジー』の新発売の物だ。

少々高いが、品質は保証しよう」

「考えておく」

「ああ。それじゃ」

そう言うと、栞菜は背を向けた。

次の瞬間、栞菜のポケットから着信音が鳴った。

栞菜が電話に出る。

「……何!？」

驚愕したかのように返答し、そして、遊月の方を向いた。

先ほどはだらしない顔つきだったが、今はかなり真剣である。

「……ああ、分かった」

通話終了。

「……私に何か用があるということか？」

「そう言うことになるな」

遊月は栞菜の目を見る。

敵対、という意味は感じられない。

どちらかと言うと、疑問だ。

具体的に表現するなら、『そういうジャンルがあるのは知っているが、そういうジャンルに目の前の人間が属しているとは考えていな

かった』と言うパターンのものである。

「君には聞きたいことができてしまったな」

「試しに何を聞きたいのか言ってみるといい。無料タダで話すことかどうかは、私が決めることだ」

「なら、一つ聞いておこうか。君は……『ISD』なのか？」

明らかに略称であるそれ。

遊月は、その意味を正確に理解したうえで、こう返答した。

「そうだ。そして……これ以上は確実に有料だ」

「なるほど」

栞菜は制服の内ポケットからカードをとりだす。

黒色のカードだ。

「イチノセ・テクノロジーの系列店の会員カード。それも上位のものだ。系列店で購入する際、社員割引で買うことが出来る他、いろいろと優遇処置がある」

「……社員割引？」

「定価の三割引きだ」

「そりゃすごい」

遊月は頷いた。

「で、そのカードで吊りあうと思ってるのなら別に構わないぞ」

「……」

遊月は『そのカードを貰うメリットの量だけ答えるよ』という意味を含めて言った。

栞菜はそれを聞くと、カードを一度ポケットにしまって、デュエルディスクを取り出した。

「なるほど、最初からそのつもりだったみたいだな」

遊月もデュエルディスクを取り出す。

「ただ、ここでは無理だろ」

「……そうだな」

というわけで、二人で店の二階のデュエルスペースに移動した。

デュエルモンスターズ専門店だと、こう言ったスペースが大体存在する。

「さて、始めるか」

「ああ……死後の世界の広さを教えてやる」

お互いにカードを五枚引いた。

「デュエル！」

遊月 LP8000

栞菜 LP8000

「先攻は譲ろう」

「なるほど、なら私の先攻。手札から『真紅眼融合』を召喚」

「なっ、『真紅眼融合』だど!？」

「私はデッキから、『真紅眼の黒竜』と、『魔晶龍シルドラス』を墓地に送る。紅き眼の黒竜よ。偶像の魔竜の力を得て、黒き流星となれ！」

デッキから出てきた二体のドラゴンが混じりあう。

「融合召喚。『流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン』！」

流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン ATK3500 ☆8

「流星竜か」

「融合召喚成功時、効果発動。デッキから『真紅眼の不死竜』を墓地に送り、1200ポイントのダメージを受けてもらう」

栞菜 LP8000↓6800

「……いきなりやってくれるな」

「そういうものだ。私はカードを一枚セットして、ターンエンド」

「僕のターン。ドロー！」

栞菜はドローしたカードを見て一瞬考えたようだが、すぐにプレイし始める。

「僕はフィールド魔法『メガロイド都市』を発動」

「……『ビークロイド』か」

遊月は、栞菜が発動したフィールド魔法で、ある程度の予想をする。

一応、サーチ範囲が『ロイド』カードと広いのでいろいろ出来るのだが、発動ターン中は融合召喚しかできないことを考えるとそうなるだろう。

「そして、『サブマリンロイド』を通常召喚」

サブマリンロイド ATK 800 ☆4

「バトルフェイズだ。サブマリンロイドは直接攻撃が可能。そして、メガロイド都市は、ロイドモンスターが戦闘を行うダメージ計算時のみ、デッキからロイドを墓地に送って、『元々』の攻守を入れ替える。僕が墓地に送るのは『ドリルロイド』だ」

「その『元々』っていうテキストウザいな」

遊月 LP8000↓6200

「そして、サブマリンロイドは守備表示になる」

サブマリンロイド ATK800↓DFE1800

「だけど、まだバトルフェイズは終わっていない。『エネミーコントロール』を発動」

「あ……」

「サブマリンロイドをリリース。流星竜をこちらに移動させる」

流星竜が移動する。

「そして、ダイレクトアタック！」

「うごっ！」

遊月 LP6200↓2700

「メインフェイズ2。メガロイド都市の効果で流星竜を破壊して、デッキから『エクスペレスロイド』を手札に加える」

「なら、フィールドから墓地に送られた流星竜の効果で、墓地から『真紅眼の黒竜』を特殊召喚」

真紅眼の黒竜 ATK2400 ☆7

「カードを二枚セットして、ターンエンド」

フィールドからモンスターがいなくなった。

「私のターン。ドロウ。『不知火の隠者』を通常召喚」

不知火の隠者 ATK500 ☆4

「そして、隠者をリリース。『ユニゾンビ』を特殊召喚」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3

「第二の効果を発動。真紅眼の黒竜のレベルを、デッキから『屍界のバンシー』を墓地に送ることによって一つ上げる。そして、バンシーの効果で、デッキから『アンデットワールド』を発動！」

真紅眼の黒竜 ☆7↓8

屍界が広がって重苦しくなった。

「この雰囲気は……いや、『ISD』なら当然か」

「……『おろかな埋葬』を発動。『グローアップ・ブルーム』を墓地に送り、効果を使う。墓地に送られたこのカードを除外することで、レベル5以上のアンデット族モンスターをデッキから手札に加える。そして、フィールドに『アンデットワールド』が存在する時、特殊召喚できる」

遊月のデッキから闇が溢れ始める。

「終わりも始まりもない蛇の王よ。ウロボロス怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

死霊王 ドーハスーラ ATK2800 ☆8

「精霊カード……ここまで本人と親和性が高いのは初めてだ」

「仲良しっていうよりは主従の関係だな。バトルフェイズ。ドーハスーラで、ダイレクトアタック！」

「無駄だ。罨カード『和睦の使者』を発動。ダメージはない」

「……メイン2。『アドバンスドロ』を使い、『真紅眼の黒竜』をリリースして二枚ドロ。そして、レベル8のドーハスーラに、レベル3のユニゾンビをチューニング。現世をさまよう怨霊よ、弔われず嘆く骸に宿りて、屍界の底より顕現せよ！」

大地が、屍界が、脈動する。

「シンクロ召喚。レベル1『骸の魔妖―餓者髑髏』！」

骸の魔妖―餓者髑髏 DFE2600 ☆1

「魔妖まで入ってるのか」

「入ってるのは7から上だけだがな。カードを一枚セットして、ターンエンド」

「僕のターン。ドロ」

「スタンバイフェイズ。ドーハスーラを特殊召喚」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「なら、魔法カード『手札抹殺』を発動。君は一枚、僕は二枚捨てて、それぞれドロする」

お互いに手札を交換する。

「そして、『戦線復帰』を発動。『エクस्पレスロイド』を墓地から特殊召喚」

エクस्पレスロイド DFE1600 ☆4

「効果発動。墓地から『サブマリンロイド』と『ドリルロイド』を手札に加えるが……」

「ドールハスラーの効果を発動。その効果を無効にする！」

正直、名称指定のターンーがついていない効果を無効にしたところであまり意味はないのだが、止めない意味はない。

「なるほど、ならば『ミキサーロイド』を通常召喚」

ミキサーロイド ATK0 ☆4

「ミキサーか……」

ただ、何故だろう。

ミキサーロイドの顔が『なんで俺また働くんだろう』と言っているような気がするのだが……気のせいだろうか。

「ミキサーロイドの効果、自身をリリースすることで、デッキから二体目の『エクस्पレスロイド』を特殊召喚」

エクस्पレスロイド DFE1600 ☆4

「効果発動。墓地から『ミキサーロイド』と『サブマリンロイド』を手札に加える。魔法カード『融合』を発動。モビルベース。エクस्पレスロイド二体、サブマリンロイド、ミキサーロイドで、融合。蛮族の意思を持つ決戦兵器よ。今こそ姿を現せ！」

五つの機械が混じりあう。

「融合召喚。レベル12。『極戦機王ヴァルバロイド』！」

極戦機王ヴァルバロイド ATK4000 ☆12

「ここでヴァルバロイドか……」

「僕はこのまま——」

「無駄だ。メインフェイズ中に『戦線復帰』を発動。墓地のモンスターを守備表示で特殊召喚する」

「ヴァルバロイドに勝てるモンスターは……」

「いないさ。お前が見えている範囲ではな」

遊月の墓地から、圧倒的な量の怨霊が溢れてくる。

「なんだ……」

「正直、俺のデッキがそろそろ、舐めてかかるなって怒りだしているよ
うだ」

「ん？」

墓地のカードを掲げる。

「屍界にさまよう怨霊よ。力を束ね、鯨を描き、神罰を下せ。『地縛神

Chacu Chalhua』！」

上空にシャチが描かれる。

そして……。

地縛神 Chacu Chalhua DFE2400 ☆1

0

「このタイミングで、地縛神」

「Chacu Chalhuaの永続効果により、守備表示の時、相
手はバトルフェイズを行えない」

「……ターン、エンド」

「私のターン。ドロ」

ドロしたカードを見て頷く遊月。

「Chacu Chalhuaの効果。このカードの守備力分のダ
メージを与える。そしてそれにチェインして、ドーハスーラの効果。
ヴァルバロイドを、除外する」

葉菜 LP6800→4400

「ぐ……」

「ドーハスーラと餓者髑髏を攻撃表示に変更し、バトルフェイズ。二
体でダイレクトアタック」

葉菜 LP4400→1100→0

尽きたライフ。

それはまぎれもなく、遊月の勝利を意味している。

「すまん。こんな決着で」

「……いや、構わない」

葉菜はこれが、遊月が好きな勝ち方ではない。と言うことが分かっ
たようだ。

ちなみに立ち上がった葉菜は、元のだらけきった顔に戻っていた。「そつちもかなり事故っていたようだが？」

デツキの相性もあるだろうが、あまりいいものではなかっただろう。

そもそも、機械族の切り札『リミッター解除』が使えない時点でいろいろ苦労するのだから。

まあ、アンデットワールドを使っている遊月が言うのも何だが。

というより、なんというか、「お互いにめちやくちやなデュエルをしていた感」がかなりあって、あまり本音をぶつけた気がしないのである。

「関係ないさ。これは渡しておこう」

黒いカードを投げ渡してくる葉菜。

「そうか……ま、返しても勝手に送りつけて来るだろうし、貰っておく」

「ああ。そうしてくれ」

そう言うと、葉菜は去っていった。

見えなくなった後、遊月は溜息を吐く。

「さすがに、地縛神まで見せる気はなかったんだが……お互いに変な爆発力があるところなるってことか」

それに加えて。

「正直、『魔晶龍ジルドラス』の効果を知っているとは思っていなかったな。良い感じに牽制していたのか？」

遊月も、この一戦だけで葉菜を測るのは無理だ。

第一、遊月が考える以上に葉菜は考えてデュエルしていただろう。

メガロイド都市を軸にして、戦闘をしながらターンを稼いで決めにかかる【ビークロイド】と、『ほぼフリーチェインで対象をとらず除外』するドーハスーラが入った【アンデットワールド】では、相性の差は露骨に出ている。

「まあ、難しいことはいいでしょう。それにしても、アレのことを正確に知っている奴がいるとはなあ……」

これから、本当に面倒なことになると思いながら、遊月は広場を後

にした。

第四話

遊月の前には、『デュエルモンスターズチップス』が三袋ある。

「……」

ビリッ……ガサッ……『融合』

「……」

ビリッ……ガサッ……『融合』

「……」

ビリッ……ガサッ……『融合』

「英明、ポテチ一袋いるか？」

「ちよつと待て！まず突っ込ませろよ！」

デュエルモンスターズは、デュエルディスクなどの後付けパーツなどもあるが、基本的に『カード』である。

様々な要素とミックスして販売することが可能なのだ。

結果としてポテチと合併するというのはなかなか予想外な展開だが、別に悪いわけではない。

そして、新規カードがあればそれはそれなりに買う人は多いのだ。

もともと食玩というのは売れるものなのだ。デュエリストはカードを手に入れるためには金を大放出するものなので、バク売れするだろう。

多分そこら辺のゴミ箱を漁れば、カードだけ抜かれたポテチの袋が出て来るはずだ。デュエルの渦に巻きこまれて消えていったホームレスの主食になるだろう。多分。

「お前『融合』ばっかよく当たるなあ……」

結局一袋貰ってむしゃむしゃ食べる英明。

「これはあれか？『冥界龍 ドラゴネクロ』を三積みしろという暗示なのか？」

「入ってるのか？」

『『超融合』と一緒にピン差ししている』

「ああ、なるほど、そりゃ奇襲に使えるよなあ」

「あまり手札に來ないがな……」

とはいえ、基本的にはアンデット族の汎用パーツに頼るデッキである。

『融合』を入れるとしても、それがメインになることはないだろう。「さてと……」

ちよつと食べる気が失せてきたチップスを輪ゴムで縛って立ち上がる遊月。

「あ、英明。私は思うことがある」

「なんだ？」

「攻撃反応罠に関してだ。『相手の攻撃を無効にするカード』と『相手の攻撃を無効にしないカード』に二種類に分けられるだろう」
「だな」

「一般的なビートダウンに入れるなら、強いといえるのは止めるほうだ。攻撃を止められない場合、こちらのモンスターは破壊されるパターンが多く、仮に相手モンスターが破壊されるとしても、それは確実に自爆特攻を狙ったものだからな」

「確かにな。確実にアドバンテージを取られる」

「代表的なのは？」

「攻撃を止めるって……」マジック・シリンダー『魔法の筒』とかリアクティブアーマー『炸裂装甲』か？」

「代表的っていうか、教材に適しているカードだな」

「大体そんなもんだろ」

「ああ。ただ……『魔法の筒』は攻撃を無効にするが、『炸裂装甲』は無効にしないぞ」

「え、そうだっけ？」

デュエルディスクを起動してテキストを確認する英明。

「あ、本当だ」

「ちなみにどつちも対象にとる」

「……みたいだな。そうか。『炸裂装甲』を使ったとき、相手モンスターが破壊されるから、実際に攻撃が来ないってだけの話なんだな」
「ぶっちゃけ、『炸裂装甲』と並べるのなら『次元幽閉』だ」
「なるほど。確かに」

どちらもモンスターゾーンからモンスターを引つpegがすのだが、ど

ちらも対象にとるし、攻撃を無効にするわけではない。

「多数破壊は？」

「ミラフォは確かに多数破壊だが、これは攻撃は無効にしない。攻撃表示モンスター専門で全体破壊が可能だがな」

「なるほど」

「ただ個人的には、エア・フォースのほうが嫌だがな」

「だよな。お前のデッキ、手札に戻されたらどうしようもないだろ」

「正直、『手札抹殺』を握ってないと悲惨だ。最近は展開のために罠を使うことも少なくなないから、思ったより警戒する必要はないんだが、急に食らうとびっくりする」

展開のために手札を使うのが現代のデュエルモンスターズである。

もちろん、攻撃反応で発動する罠も増えてきているので、無警戒はつらいのだが。

「なるほど、攻撃反応罠の違いか……とはいっても、『和睦の使者』とか『威嚇する咆哮』は強いのは間違いないだろ」

「間違いないが、同じ攻撃力のモンスターのバトルなら、『和睦の使者』で相手だけ破壊できる代わりに、戦闘で破壊されないだけで効果を受けなくするわけじゃないからカタストルで割られるし、『時戒神』だったら悲惨だ。で、『威嚇する咆哮』の場合、戦闘を介するほうが強いデッキの場合は投入しにくいからな」

一長一短である。

ただ、どのカードにも言えることは、『奇襲性がある』ということである。

もちろん、『ロックバーン』のようなデッキの場合は両方入っていることもあるが。

「へえ……遊月のデッキには『和睦の使者』が入っていたな」

「攻撃宣言後でも使えるからな」

とまあ、そんな理由である。

「俺も考えてみるかなあ……」

「バトルフェイズで発動か？英明は『ヒーローバリア』だろ」

「あれフリーチェーンだぞ」

「……そうだったか？」

「そうだよ！」

英明は自分のデツキから『ヒーローバリア』を出して遊月に見せる。

「あ、本当だ。ていうか、お前デツキに入れてるのか……」

「まあ、いざという時に何となる時があるからな」

と、いいつつ、遠い目をしている英明。

本当に『いざという時』だったのだろうか。

そろそろ遊月はしゃべりつかれてきた。

そして、それは英明も同様。

「さて……ん？あれは綾羽ちゃん！」

英明が急に一点を見つめる。

遊月は振り向いた。

「……どこだ？」

「あそこだ」

英明は五百メートルくらい先にあるカードショップを指さす。

だが、まだ遊月にはわからない。

「……わからんぞ」

「二階でショーケースに入ったカードを見てるぞ」

「え？」

遊月は言われたところを見る。

確かに、二階のショーケースを眺めている大東がいた。

「よく見えたな」

「俺の綾羽ちゃんセンサーは正確なのさ」

「誘拐された時しか使えないセンサーのために感覚神経のほとんどを

使ってないからお前」

「当たり前だろ」

「当たり前なのか……」

遊月は追及をやめた。

いずれにせよ、自分の予想を超えた何かに話が進んでいくところが

分かったからである。

「はあ、可愛いなあ」

「……アタックしないのか？」

「誰がするか。んなことしたら親衛隊ファンククラブに殺されるわ」

「……何人いるんだ？」

「知らん」

遊月は追及を放棄した。

「ていうか、遊月はどうなんだ？まさか可愛いとすら思っていないのか？」

「いや、まあそうなんだろうなって認識はあるが」

「お前性欲無いんじゃないか？」

「薄いだけでまだ残っている」

というより、そこで『性欲』という言葉を出すということに対して突っ込みを入れたくなかった遊月。

「……お前んち行ったとき、ベッドの下にもタンスの裏にもエロ本なかったもんな」

「お前の家にもなかったぞ」

「俺のおかずは決まってるからな」

「ファンクラブに殴られるんじゃないか？」

「フフフ。甘いな遊月。『綾羽ちゃん親衛隊ファンククラブ』には鉄の掟があるのさ」

「……そっういえば英明」

「聞けよ！興味ないのか!?!」

「ない」

「断言するなよ。そして驚くな。綾羽ちゃん親衛隊ファンククラブの鉄の掟。それは

『暴走せよ。しかし理性を保て』というものだ」

「言いたいことは分かった」

遊月は『どこかに【拷問車輪】って売ってなかったかな』と二割くらい本気で考えたが、大束を見て幸せそうにする英明を見て放置することにした。

生々しい話を続けていても遊月にとって幸せなことは何一つ存在しない。

「というわけで遊月。俺は綾羽ちゃんリサーチをしてくるから、ここまです。アディオス！」

元氣よくカードショップに走っていく英明。
そんな英明を見て、遊月は呟いた。

「……日本は平和だな」

ちよつと自分でも何を言っているのかと思つたものだが、要するにそういうことなのだと思うことにした。

間違いないのは、ポケもツツコミも両方できるものが二人揃うと双方が疲れる。ということである。

「……ふむ、今日の放課後にはデュエルディスクのメンテナンスは終わつてはるはずだったな。取りに行くとしよう」

遊月も歩き出した。

デュエルディスクの販売店は、校舎の敷地からかなり近いところにある。

カードもそうだがディスクは何かあつた時に専門家しか見れないほど精密だからだ。

そのため、英明とは進行方向は逆である。

「……この路地を通つたほうが近いな」

裏にもいろいろと店があつたりするのがデュエルスクール周辺である。

というより、あえて『裏』を作っているといいだろう。

そういった裏路地が多数存在する。

「――」

暗躍している雰囲気、というものは、なんとなく察してしまう時がある。

失礼なものだが、『明らかに怪しい』と思う時はもうそのイメージが抜けないものだ。

そういったものを見かけたらどうなるか。

簡単に言えば、足は止まる。

「ふむ、現在判明しているのは、永石圭吾。 仮澤英明。 大東綾羽の三人……できる限り交渉しておきたいものですが、永石圭吾との接触を一度失敗している以上、間を開けたほうがよさそうですね。 仮澤英明と大東綾羽に的を絞りましたようか……」

紫の長髪で、サングラスとスーツを身に着けた男性が、タブレットを見ながらブツブツ言っている。

なかなかの雰囲気を持ち主である。

「ふむ、この学校の生徒会長が帰ってくるまでに何とかしておきたいのですがね。ボスがあちこちで引つ張りまわしている間にどうにか……」

どうやら企んでいるということは明白だろう。

そして、そのメンバーを読み上げた時点で、遊月はどういうことなのか分かった。

それと同時に、どうにかして聞き出しておきたい部分があった。

そうなれば遊月は、自分から仕掛けに行くタイプである。

「何をたくらんでいるのかしらんが、多分あんた。勘違いしてるぞ」

「——っ！誰です！」

男性がこちらを向いた。

どうやら見つかるとは微塵も考えていなかったようだが、遊月にはそれほど隠れているとは思わなかった。

『ISD』に対して交渉。ということか？どうやら自分の陣地に引きこんでおきたいと考えているようだが、勘違いしてるぞ」

「どういうことですか？」

「英明と大東はそうさ。だが、永石は違う」

「ば、馬鹿な……そんなはずはない！確かに、彼はあのカードを持っているー！」

「お前が知ってるルールなんぞ知るか。それと、危害を加えるつもりだっというのなら、私にも考えがあるぞ」

「フンッ。これだから若造は困りますね。私たちは危害を加えようと考えているわけではありません。新しい力を与えようとしただけのことですよ」

遊月はそれを聞いて納得した。

「なるほど、永石との交渉が決裂した理由はそれか。それにしても、私が若造か……あんた何歳？」

「私は三十二ですが？」

「三十二か……」

「そうです。高等部一年生であるあなたの倍生きているのですよ。もう少し敬ったらどうですか?」

「まあもともと、年齢でごちやごちやと考えているなんて古すぎてやってられないが、別にあんたの言うことに従う必要は私にはない。それと……これ以上の情報は有料だ」

遊月はデュエルディスクを構える。

男性もデュエルディスクを構えた。

「いいでしょう。どうせあなたも、彼のように交渉は通じないでしょうからね」

「よくわかってるな」

「その余裕ぶった顔。すぐに絶望に変えてあげますよ。何を知っているのか知りませんが、無理やり聞きだせばいいだけのことです」
「やってみろ」

お互いにカードを五枚引いた。

「私の名前は……ギル。と名乗っておきましょう。さて、始めましょうか」

「不死原遊月だ。死後の世界の広さを教えてやる」

「デュエル!」

遊月 LP8000

ギル LP8000

ターンランプがついたのはギルのほうだ。

「私の先行。『強欲で金満な壺』を使い、六枚除外して二枚ドロ。手札から『サイバー・ダーク・カノン』と『サイバー・ダーク・クロ』を捨てることで、効果発動。デッキから『サイバー・ダーク・エッジ』と『サイバーダーク・インフェルノ』を手札に加えます」

「……『サイバー・ダーク』か」

「そうです。手札から『サイバーダーク・インフェルノ』を発動し、『サイバー・ダーク・エッジ』を召喚。効果を発動し、墓地の『サイバー・ダーク・カノン』を装備しましょう」

サイバー・ダーク・エッジ ATK800↓2400

「私はカードを一枚セット、ターンエンドです」

「私のターンだ。ドロロー」

遊月は手札を見る。

そして、ふむ、と頷いた。

「私は『融合』を発動。手札から『屍界のバンシー』と『グローアップ・ブルーム』を墓地に送り、融合召喚を行う」

「！……なるほど、『アンデットワールド』ということですか」

「その通りだ。妖精よ、花よ、屍界の底で力を束ね、冥界より響く咆哮を示せ！」

混じりあい。そして地中深くから聞こえてくる咆哮が、冥界の天蓋を突き破り。降臨する。

「融合召喚。レベル8『冥界龍 ドラゴネクロ』！」

冥界龍 ドラゴネクロ ATK3000 ☆8

「ぐ……なるほど、そのモンスターですか」

「当然だ。そしてこの瞬間、墓地に送られた『グローアップ・ブルーム』を除外することで効果発動」

デッキからレベル5以上のアンデット族モンスターを手札に加え、

『アンデットワールド』があれば特殊召喚できる。

だが、まだ『アンデットワールド』は存在しない。

しかし。

『グローアップ・ブルーム』の効果で手札に加えるか特殊召喚するかを決める処理は効果処理時だ。『屍界のバンシー』の効果をチェーンして発動。墓地から除外することで、デッキから『アンデットワールド』を発動する」

広がり始める屍界。

それを感じとったギルは、表情をゆがめる。

「フィールドと墓地のモンスターをアンデット族に……なかなか忌々しい効果ですね」

「だろ？」

フィールドのモンスターは当然重要で、『墓地は第二の手札』と呼ばれるほど重要なものだ。

だが、そんな中でアンデットワールドは、『名称指定ではないコンボパーツ』のほとんどを封殺する。

しかし、『同じ種族』と言うものが重要であるならそれはそれで使いこなせるわけだ。『元々の種族』を指定する『一族の結束』は使う際に注意が必要だが。

「この雰囲気……あなたも『ISD』なのですか？」

「答える義務はない。間違いないと思っっていることをいちいち人に聞くな。デュエル続行だ。デツキからレベル5以上のアンデット族モンスターを特殊召喚する」

遊月のデツキから闇が溢れる。

「終わりの始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

死霊王 ドーハスーラ ATK2800↓2300 ☆8

「こ、この雰囲気……尋常ではありませんね」

「さらに、手札から『牛頭鬼』を召喚」

牛頭鬼 ATK1700 ☆4

「このまま効果を発動し、それにチェインしてドーハスーラの効果発動。サイバー・ダーク・エッジを除外！」

ドーハスーラの杖から放たれる波動が、エッジを消し去る。

「装備されていたカノンの効果で一枚ドロ。『対象を取らない除外』ですか。なかなか欲張りですね」

「王だからな。チェイン1の牛頭鬼の効果で『妖刀―不知火』を墓地に送る。バトルフェイズ。牛頭鬼でダイレクトアタック！」

「うぐ……」

ギル LP8000↓6300

「ドーハスーラでダイレクトアタック」

「ぐはっ」

ギル LP6300↓3500

「ドラゴネクロでダイレクトアタック！」

「さすがにそれは通せませんね。罨カード『ガード・ブロック』を発動！ダメージを0にして、一枚ドローします」

「……」

サイバー・ダークの星四機械族は、破壊と肩代わりする効果を持っている。

そう考えるなら、悪いカードではないのだろうか。

「……なら、『アドバンスドロー』を使って、ドーハスーラをリリースして二枚ドロウ。カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「私のターン。ドロウ」

「スタンバイフェイズ。ドーハスーラは特殊召喚される」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「……厄介なカードですね。ですが、止まるわけではありませんよ。私は『強欲で貪欲な壺』を使い、十枚除外して二枚ドロウ。手札から『サイクロン』を使い、『アンデットワールド』を破壊！」

「……」

屍界から元の裏路地に戻った。

「さて、私は『竜の霊廟』を発動。デッキから『青眼の白龍』と『光と闇の竜』を墓地に」

一枚使えばなんだかんだ言っただアドバンテージを稼いで来るカードだ。

しかし、『青眼の白龍』……通常モンスターサポートも入っている可能性は考えられる。

一応注意しておいて損はない。『復活の福音』一枚で跳んでくるからだ。

「手札にあるそれぞれ二枚目の『サイバー・ダーク・カノン』と『サイバー・ダーク・クロウ』を捨てることで、効果発動。デッキから『サイバー・ダーク・エッジ』と『サイバーダーク・インフェルノ』を手札に加えます。そして、手札から『サイバー・ダーク・エッジ』を召喚」

サイバー・ダーク・エッジ ATK800 ☆4

「効果は発動しません。これを使用するためにね。私の最強のカード。『オーバードロード・フュージョン』！」

「そのカードは……」

発動によってフィールドに出現する『オーバーロード・フュージョン』

だが、そのカードから発せられる威圧感は、通常のそれをはるかに凌駕する。

「私はフィールドのエッジと、墓地に存在する『クロール』『カノン』を二枚ずつ除外。闇を纏う機械よ、竜よ、五つの力を束ね。万物を壊せ！」

混じりあうのは、五体のサイバー・ダーク。

「融合召喚！レベル10。『鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン』！」

鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン ATK2000 ☆10

「……普通と比べるといきなりだな……」

サイバー・ダークとはいえ、もう少しこのモンスターには時間をかけると思っていた。

「ククク。私の、私自身の力である『オーバーロード・フュージョン』から繰り出す最強のモンスター。それがこのサイバー・ダークネス・ドラゴン。その力を思い知らせてあげましょう。特殊召喚に成功した時、墓地に存在するドラゴン族か機械族モンスターを装備し、その攻撃力を得る！」

墓地から何かが出て来る。

「私が装備させるのは、『光と闇の竜』」

鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン ATK2000↓4800

「攻撃力。4800」

「さあ、バトルフェイズ！サイバー・ダークネス・ドラゴンで、牛頭鬼を攻撃！」

「……」

遊月 LP8000↓4900

「ククク。牛頭鬼は確かに、墓地で発動する効果がある。しかし、その発動のためには他のアンデット族を除外する必要がある。その顔で

すと、手札にアンデット族はいないようですね」

「……」

「私はカードを一枚セットして、ターンエンドですよ」

「私のターンだ。ドロー！」

いろいろと言ってくるギルを完全に無視して、デュエルを続ける遊月。

「一応言っておきますが、『光の闇の竜』は破壊され墓地に送られた場合。自分のフィールドのカードを破壊しますが、墓地のモンスター一体を蘇生することが可能です」

要するに、特殊召喚された時の誘発効果で装備出来るモンスターにとっては、疑似的な破壊耐性になるということだ。

「なるほど、私は二枚目の『アドバンスドロー』を発動。ドラゴネクロをリリースして二枚ドローする」

「おや？なんども蘇生できるドーハスーラではないのですか？」
「違うんだなこれが」

二枚ドローする遊月。

「二枚目の『屍界のバンシー』を通常召喚し、除外することで『アンデットワールド』を発動」

再び屍界が広がり始める。

「む……またこれですか」

「こいつの力を最大限に発揮するためだ。『妖刀―不知火』の効果発動。墓地のこのカードと『牛頭鬼』を除外し、『デスカイザー・ドラゴン』を特殊召喚」

デスカイザー・ドラゴン ATK2400 ☆6

「デスカイザー・ドラゴン……」

「効果発動。お前の墓地の『青眼の白龍』を、私のフィールドに特殊召喚する」

青眼の白龍 ATK3000 ☆8

遊月は自分のフィールドに移動してきた『青眼の白龍』を見る。

(……このカード。コピーカードだな)

遊月はそう思った。

確かに、公式デュエルならばまず使えないようなカードだが、デュエルディスクを改造することで使用可能にしている。

「フッフ。その程度のモンスターでは、私のサイバー・ダークネス・ドラゴンを倒すことはできない！」

『サイバー・ダーク・インフェルノ』があることで、『光と闇の竜』を装備しているサイバー・ダークネス・ドラゴンは対象に取れない。

とはいえ、まあ、やりようはある。

「私はレベル6のデスカイザー・ドラゴンと、奪ったモンスターである『青眼の白龍』をレベル6として扱い、オーバーレイ！」

「何!？」

デスカイザー・ドラゴンと青眼の白龍が渦の中に飛び込んで行く。

「黒き六つの星々よ。赤い月が惑わす異なる星と共鳴し、高潔なる存在として現れる。エクシーズ召喚！ランク6『交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン』！」

交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン ATK2600 ★6

「ヴァ……ヴァンパイア・シエリダンだと」

「効果発動。エクシーズ素材を一つ使い、相手フィールドのカード一枚を対象にして、墓地に送る。私が選択するのは、『光と闇の竜』！」

ヴァンパイア・シエリダンが指をパチンと鳴らすと、サイバー・ダークネス・ドラゴンに装備されていた『光と闇の竜』が墓地に送られる。

鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン ATK4800↓2000

「そして、破壊されることなく墓地に遅られた『光と闇の竜』は、その効果を発動出来ない。ドーハスーラを攻撃表示に変更する」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000↓ATK2800

「バトルフェイズ。ヴァンパイア・シエリダンで、サイバー・ダークネス・ドラゴンを攻撃！」

再び指を鳴らすシエリダン。

すると、黒い球が出現して、それが超高速でサイバー・ダークネス・ドラゴンを貫いた。

「ぐっつ……」

ギル LP3500↓2900

「この瞬間。ヴァンパイア・シエリダンの効果発動。エクシーズ素材を一つ使い、サイバー・ダークネス・ドラゴンを私のフィールドに守備表示で特殊召喚する。それにチェーンして、ドーハスーラの効果。『光と闇の竜』を除外」

なんとも踏んだり蹴ったりなタクティクスである。

鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン DFE2000 ☆1

0

「そして、ドーハスーラでダイレクトアタック」

「させませんよ。罨カード『パワー・ウォール』を発動。デッキからカードを六枚墓地に送る」

「……カードを一枚セットして、ターンエンド」

「私のターン。ドロー！」

若干起こったような表情でカードを引くギル。

「……ククク、わたしをここまでコケにするような相手は君が初めてですよ」

「そうか。で？」

「本来なら使うのはためらいたいところですが……仕方がないですね。私にボスより与えられた圧倒的な強さを教えてあげますよ。『強欲で貪欲な壺』で十枚除外して二枚ドロ。墓地の『ギャラクシー・サイクロン』で『アンデットワールド』を破壊！」

また破壊された。

「私は『グローアップ・バルブ』を通常召喚！」

グローアップ・バルブ ATK100 ☆1

「そして、グローアップ・バルブ一体でリンク召喚。リンク1『リンクリボ―』！」

リンクリボ― ATK300 LINK1

「私は墓地のグローアップ・バルブの効果。デッキトップを墓地に送ることで、特殊召喚！」

グローアップ・バルブ ATK100 ☆1

「さて、私はこの二体のモンスターでリンク召喚。チューナーを含む

モンスター二体、『水晶機巧―ハリファイバー』

水晶機巧―ハリファイバー ATK1500 LINK2

「ハリファイバーのリンク召喚成功時、デッキからレベル3以下のチューナーモンスターを出すことが出来る……フフフ。フハハハハハ！私はデッキから、『オルフェゴール・カノーネ』を特殊召喚！」

オルフェゴール・カノーネ DFE1900 ☆1

「な……『サイバー・ダーク』に『オルフェゴール』だど!？」

「フフフ……私はオルフェゴール・カノーネと、ハリファイバーを、リンクマーカーにセット、リンク召喚！リンク3『オルフェゴール・ガラテア』！」

オルフェゴール・ガラテア ATK1800 LINK2

「チツ……」

現在のモンスターの位置。

遊月

□□ドサ□

ヴ オ

□□□□□

ギル

ド↓ 死霊王 ドーハスーラ

サ↓ 鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン

ヴ↓ 交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン

オ↓ オルフェゴール・ガラテア

「墓地の『オルフェゴール・スケルツオン』の効果、このカードを墓地から除外し、墓地の『オルフェゴール・カノーネ』を特殊召喚！そして『機械複製術』を使い、攻撃力500のカノーネを三体に増やす！」

オルフェゴール・カノーネ DFE1900 ☆1

オルフェゴール・カノーネ DFE1900 ☆1

オルフェゴール・カノーネ DFE1900 ☆1

かなり増えてきた。

「そして、オルフェゴール・カノーネ三体をリンクマーカーにセット。リンク召喚！『オルフェゴール・ロンギルス』！」

オルフェゴール・ロンギルス ATK2500 LINK3
ガラテアのリンク先に出て来るロンギルス。

「そして、ロンギルスの効果発動。除外されているカノン二体をデッキに戻すことで、リンク先にいるシェリダンを墓地に送る」

やられた……。

「私は墓地の『オルフェゴール・デイヴエル』の効果を使い、デッキから『オルフェゴール・スケルツオン』を特殊召喚！」

オルフェゴール・スケルツオン ATK1200 ☆3

「墓地から『星遺物―『星杖』』を除外することで、除外されているスケルツオンを特殊召喚」

オルフェゴール・スケルツオン ATK1200 ☆3

「私はガラテアとスケルツオン二体をリンクマーカーにセット、現れなさい。殲滅の旋律を奏でる最終兵器『オルフェゴール・オーケストリオン』！」

オルフェゴール・オーケストリオン ATK3000 LINK4

……。

（なんていうか……あまりオルフェゴールを触ってないのかね？見えているカードを使っているだけと言うか……かなり必至と言うか……汎用ドロソ使いまくってるわりに展開がそうでもないな。人のこと言えないが）

遊月はギルのタクティクスを見てそう思った。

とはいえ、こればかりは『汎用ドロソを使いまくらないとどうにもならない』というより、『ドーハスーラの威圧感が半端ない』という方が正確だろう。

「私はオーケストリオンの効果発動。除外されているクロー二枚とエツジをデッキに戻し、リンク先にいるドーハスーラとサイバー・ダークネス・ドラゴンの攻撃力と守備力を0にして、効果を無効にする！」

死霊王 ドーハスーラ ATK2800↓0

鎧獄竜―サイバー・ダークネス・ドラゴン DFE2000↓0

「バトルフェイズ。ロンギルスでサイバー・ダークネス・ドラゴンを攻

撃！」

当然だが、なすすべもない。

「そして、オルフェゴール・オーケストリオンで、死霊王 ドーハスーラを攻撃！」

遊月 LP4900→1900

「私はこれでターンエンドです」

「私のターン。ドロー」

まあまずはこちらだ。

「スタンバイフェイズ。ドーハスーラは特殊召喚される」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「む……ですが、そのカードだけでは……」

「三枚目の『アドバンスドロー』だ。ドーハスーラをリリースして二枚ドロー」

無視する遊月。

「なるほどな。『デーモンとの駆け引き』を発動。『バーサーク・デッド・ドラゴン』を特殊召喚」

バーサーク・デッド・ドラゴン ATK3500 ☆8

「何？」

「そして、『一騎加勢』を発動。攻撃力を1500上げる」

バーサーク・デッド・ドラゴン ATK3500→5000

「な……攻撃力5000だど!?!」

「バトルフェイズ。全体攻撃だ。やれ、バーサーク・デッド・ドラゴン」

ギル LP2900→900→0

「ぐはっ……ば、ばかな……この私が……」

「というより、オルフェゴールなんて混ぜるからだと思うけどな……」
正直なところ、慣れていない感じがする。

そもそも、『サイバー・ダーク』と言うデッキはあまり考える必要がないのだ。

ソリティアするやつは着地点を明確にしているから強いのである。

だが、このギルと言う男はそう言うものではなさそうだ。

「ぐ……こうなったら一時的に撤退して……」

「逃がすと思うか」

秀星の影から『真紅眼の不屍竜』が出現する。

「ぐ……！」

「——!？」

遊月は、ギルの後ろから飛んでくる塊に気が付いた。

それを察知した不屍竜が、青の黒炎弾を放つことで爆散させる。

だが、それに対応した時、既にそこにギルはいなかった。

「……この塊。見た感じの材質的に『星冠』か？」

そんなことを考えた遊月だが、もう追うことはできない。

本来の目的である自分のデュエルディスクを取りに行くのだった。

第五話

「遊月。俺は重要なことを知ってしまった」

「朝っぱらから何だ。というか即座にメールしてくるんじゃないやなくてわざわざもつたいぶつて言うあたりそうでもないだろ」

「……驚くなよ」

「スルーするなよ。で、なんだ？」

「綾羽ちゃんは、フルーツを食べる時、皮ごと食べるんだ」

「……リンゴとか？」

「いや、キウイだった」

「……そうか」

正直。驚いた。

「まあでも、食べられないわけじゃないけどな。メロンはすごいけど」

「食ったことあんの!？」

「ある。メロンの皮の網目みたいなのがあるだろ」

「あるな」

「あれが原因なのかどうかは不明だが、なんか木の皮を食ったみたい
な感じになるんだ。罰ゲームで食べたけどなかなか地獄みたいな触
感だったぞ」

「うええ……俺は止めておくれ」

当然、中はおいしい。

だが皮はダメだ。

特にメロンはダメだ。

幼いころから思っている遊月の教訓である。

「まあ、なんというか、俺は人には見かけによらない変わった部分があ
ると思つた」

「そうだな」

話題をそろそろ変更した方がいいと遊月は感じた。

「英明。私は思うことがある」

「なんだ？」

「初手五枚。というものをデュエルするたびに見えて思うことだ

が、『手数が多いか少ないか』ということを私は考えたい」
「ほう」

「まず、手数が多いことの利点だが、ある程度カウンター罫で展開を止められたとしても、次の行動に移れるということだ」

「ふーむ……まあ、召喚権をとりあうようなカードばかりが手札に来ると、さすがに止まるよな」

「自分で特殊召喚する効果を持っていたりすれば、最近リンクモンスターがいるから、能動的に墓地に送るのは難しくない。だが、召喚権をとりあう手札だと、サーチをうららで止められたら悲惨だろう」
「だな。俺も経験がある。盤面が中途半端の時、どうにかしてオネスティ・ネオスを引きこんでおかないと不安で……」

「そう言う類のものだ。ただ、手数が多いデッキというものにも弱点はある」

「そうか？」

「止められた後で着地点を素早く見つけ出すことだ。はつきり言っソリティアが嫌いな私はうららとか大っ嫌いだ」

「それはお前が悪いんだろうに……というか、それだと制圧系の盤面を相手が組んできたときどうするんだよ」

「まあ、『永続的なロックカード』と『パーミッション効果もちが横並び』するかのどちらかだ。ただ、抜け道がない盤面とか基本ないからな」

「壊獣とかだな」

「処理するのも少々面倒だがそんな感じだ」

ちなみに、『振り出し』というカードを御存知だろうか。

昔よくある『手札一枚をコストに相手モンスター一体を除去する通常魔法』なのだが、『振り出し』は何と『デッキの一番上』なのだ。

壊獣がデッキの一番上。これはデュエリストとしては地味に嫌である。

「なるほど、手数が多いゆえの話か……俺もソリッドマンとかヴァイオンを止められたら嫌だな」

「アライブがなかったら地獄のようなことになるからな」

お互いに頷く。

というわけで、良い空気変更になったようだ。

「と言うわけで、さらなるリサーチのため、俺は偵察してくる」

「その『と言うわけで』というつなぎ方は正直変だと私は思うが……その偵察した先の終着点は何だ?」

「フフフ……いざという時のために力になるわけさ」

「チキンだなお前」

そこで『交際する』と言わないところを見ると、何とも言えない。

「ていうか、他にもかわいいと思える生徒はいると思うんだが……」

「当然、俺はそっちも評価する」

「それはファンクラブとして大丈夫なのか?」

「もちろんだ。掟には『暴走してもいい』となっているからな」
ずいぶんゆるゆるである。

というより、ほとんどノリで作ったものなのだろう。

そこから少しずつ暗黙の了解ができたような、そんな感じだ。

おそらく、他の人間に聞けば『鉄の掟』の内容は違う可能性もある。

「だが、俺のリサーチ対象のうち八割は綾羽ちゃんであるということに変わりはない。と言うわけで行ってくるぜ!」

そういうと、元気な様子で英明は走って行った。

「……都合の良いルールだなあ」

残された遊月はそうつぶやいた。

融通が効くことは評価しよう。

だが、女子が聞いたらドエライことになりそうだ。

まあ、男子同士の生々しい話など大体そんなものである。

★

「放課後になっても私の前にあのバカは現れない……ストーカー中なのか?」

久しぶりに放課後に一人になった遊月。

とはいえ、その腐った目に変化はない。

「さて、晩飯でも……ん?」

遊月はカードショップの二階を隠れやすそうなスポットから望遠

鏡で覗いている不審者を見かけた。

まあ、残念なことに友人なわけだが。

(英明のやつ。何やってんだ?)

とはいえ、あの理性と性欲の強い(矛盾しているが)友人のことだ。目線の先には、本を立ち読みしている大東の姿が。

(英明……どう言い繕っても不審者だな)

こんなやつくらいしか友人がいないことを嘆くべきなのか、何をどう考えてもストーリーカーなのに迷惑をかけていないことを評価するべきなのか迷う遊月。

少なくとも、自分にはあそこまで熱中することができないものがないことに気が付いて消沈する。

(アホらし。もう帰ろう)

遊月は背を向けた。

近くのコンビニを見る。

カップラーメンが外から見える位置にある謎配置の店だが、外から見える範囲でも『ピリ辛レツドデーモンズヌードル』が見えたので買うことにした。元ネタは使用については――

「……ん?」

物音が聞こえた。

振り向くと、ちょうど大東が店から出てくるところだった。

大東は店を出ると遊月がいる方向とは別の方向にまがって、遠くから見ている英明に気が付いた様子もなく、歩き始めている。

それと同時に、英明も隠れられそうな場所を探すためにきよろきよろしている。

友達をやめたほうがいいのではないかと二割くらい本気で考える遊月。

しかし、問題はここからだった。

大東が角を曲がろうとしたとき、ワゴン車が急に走ってきて、大東の前で急停止。

扉を勢いよくあけた男が大東に手を伸ばした。

だが、大東はなんとこれを回避。

はつきり言って遊月も驚く体捌きだった。

正直、彼女から『灰流うらら』を奪った精霊ハンターの『京吾』を再評価する必要が出てくる可能性があるほど絶対に何かを習っている。

「――！」

大東は後ろに下がったのはいいが、男のデュエルディスクから発射されたアンカーが彼女のデュエルディスクに接続された。

さらに、それが二人。

銀髪と金髪の男性だが、銀髪のほうは日本人だが、金髪のほうは外国人だろう。

(物騒な世の中だな)

チラツと英明を見る。

さすがにヤバいと思ったのか、トップスピードで走り出した。

そして、最短距離で走っているとき、一台の全く関係のない車が路上駐車(違反)されている。

それを飛び越えようとして英明はジャンプ。

「おっ」

かっこよく飛び越えようとする英明。

速度を落とすことなく両足で踏み込んで跳躍し、そのまま両足をそろえて飛び越えようとしているが、思ったより角度が上に足りなかったようだ。

速度を落とすことなく両足で踏み込んだことで最大加速したまま、ルーフ(屋根)と側面が作り出す角にダブル弁慶で激突。

地面に墜落して悶絶している。いや、気絶はしていないが。

「~~~~~っ!!?」

声にならない声。というか、声は出ていないが、その代わり表情に出すぎて地上波が無理そうな感じになっている。

(クソダセエ……何て様だ)

この重要な場面で天才的なドジをかます友人に最高と最低の評価が同時に発生する遊月。

だが、このまま黙っていても仕方がないので遊月が行くことにし

た。

大東は男たちと話しているようだが、いい雰囲気ではない。当たり前だ。

「クツクツク。嬢ちゃん。おとなしく俺たちとついてきてもらおうか」

「アンタに恨みはねえが、大東家には恨みがあるんだよ！」

「……」

大東は冷や汗を流している。

遊月から見てもわかるが、それはそれなりにこの二人のレベルは高そうだ。

「だったら大東家に直接殴り込めばいいだろ、人質なんて手段をとる時点で、三下確定だ」

遊月はそういいながら大東の隣に立つ。

「ふ、不死原君」

驚いた様子の大東。

とはいえ、別に遊月は気にしない。

「あ、なんだテメエ」

「あえて詳しく名乗るのは面倒だ。単なる正義感で動いていると解釈してもらって十分」

いつもと変わらない表情でそういう遊月。

「なるほどなあ。だったらそっちも二人でいいぜ。力のない正義感なんぞ意味がないってことを教えてやる」

男二人がデュエルディスクを構える。

「不死原君。駄目だよ。この二人、かなりの実力で……」

「だったら大東だけならなおさら無理だろ。お互いに使用デッキはなんとなくわかってるんだ。邪魔しないようにするからだまっつていうことを聞け」

遊月はデュエルディスクを起動する。

「……わかった」

大東はあきらめたのか、デュエルディスクを構える。

「ならはじめようぜ。俺は銀丈真尋ぎんじょうまひろ。元プロデュエリストだ。プロの

世界もついでに教えてやるよ」

「俺はスミス・サーバー。同じくプロデュエリストだ。覚悟しろ」

元ではあるがプロデュエリストのようだ。

「……不死原君」

「なんだ？」

「負けても文句は言わないでね」

その言葉に、遊月は溜息を吐きながらカードを五枚引く。

そして、真尋とスミスのほうを見る。

「さてと、死後の世界の広さを教えてやるさ。あと、力のない正義に意味がないことを教えてやるといったな。なら私も、力のない悪がどれほど惨めか教えてやろう」

「っ！いったなクソガキが！」

「つぶしてやる！」

全員がカードを五枚引いた。

「『デュエル！』」

遊月&綾羽 LP8000

真尋&スミス LP8000

「俺の先行！」

先行は真尋。

「俺は手札から、『フォトン・サンクチュアリ』を発動！」

フォトントークン DFE0 ☆4

フォトントークン DFE0 ☆4

「さらに、手札の『銀河戦士』を捨てることで、二枚目の『銀河戦士』を特殊召喚だ」

銀河戦士 ATK2000 ☆5

「『ギヤラクシー』か」

「その通り。特殊召喚成功時のモンスター効果により、デッキから『銀河騎士』を手札に加える。そして、フォトントークン二体をリンクマーカーにセット、『銀河眼の煌星竜』をリンク召喚！効果により、墓地の『フォトン』または、『ギヤラクシー』を手札に加える。『銀河戦士』を手札に加える」

銀河眼の煌星竜 ATK2000 LINK2

「手札の『銀河眼の光子竜』を捨てて、二体目の『銀河戦士』を特殊召喚！」

銀河戦士 ATK2000 ☆5

「レベル5機械族の、戦士二体でオーバーレイ。サイバー・ドラゴン・ノヴァ。そしてインフィニティ！」

サイバー・ドラゴン・インフィニティ ATK2100↓2700

★6

「まだ俺は通常召喚していない。『銀河騎士』を召喚して『銀河眼の光子竜』を特殊召喚！」

銀河騎士 ATK1800 ☆8

銀河眼の光子竜 DFE2500 ☆8

「そして、レベル8のこの二体でオーバーレイ。エクシース召喚！『No.90 銀河眼の光子卿』！」

No.90 銀河眼の光子卿 DFE3000

「どうだ。俺はこれでターンエンド」

自信満々になってターンを渡してくるスミス。

とはいえ、その理由は理解できなくもない。

ソルフレア。インフィニティ。フォトン・ロード。

並んだ時の制圧力は圧巻の一言である。

「こ、これはマズいね」

手札を見ながら苦々しい表情を作る綾羽。

ただし、ターンランプが次についているのは遊月だ。

そして、あまり悲壮感はない。

「私のターンだ。ドロ」

「スタンバイフェイズ。フォトン・ロードの効果発動。デッキから『銀河眼の光子竜』を手札に加えるぜ」

新たに手札に加わる光子竜。

これで、ソルフレアが除去効果を使えるようになった。

「……特殊召喚されたモンスターの破壊。モンスター効果無効&破壊。カード効果無効&破壊。これらが一回ずつか」

「そうだ。『ギヤラクシー』の先攻における最高の終着点。突破できるものならやってみろ！」

「壊獣があれば楽なんだが入れてないからな……」

とはいえ、遊月は表情を変えるわけではない。

「だが、万能と言うわけではない。私は『邪神機―獄炎』をリリースなしで召喚」

邪神機―獄炎 ATK2400 ☆6

「な……攻撃力が下がらない妥協召喚モンスターだと!？」

「獄炎はレベル5以上のアンデット族だ。これにより、『アンデット・ネクロナイズ』をインフィニティを対象にして発動。そのコントロールを得る」

「インフィニティの効果発動。エクシーズ素材を使うことで、その発動を無効にする！」

サイバー・ドラゴン・インフィニティ ATK2700↓2500

「どうだ！まだインフィニティの方が、攻撃力は上だ！」

「バトルフェイズだ。獄炎で、ソルフレアに攻撃」

獄炎のブレスがソルフレアを焼き尽くす。

真尋&スミス LP8000↓7600

「ぐっ……だが――」

「インフィニティとフォトン・ロードが残っている。か？メインフェイズ2だ。『強制転移』を発動。私が選択するのは獄炎だ。どちらかをもらうぞ」

「……フォトン・ロードだ」

インフィニティの方が無効範囲が広いのでこれは仕方のないことである。

それに加えて、攻撃表示モンスターをパクる効果は使われると悲惨なので当然そうなるだろう。

「そして、『手札抹殺』を発動。お互いに手札交換だ」

「むう……」

真尋と遊月は互いに二枚捨てて二枚ドロー。

「私はカードを一枚セット、ターン終了だ。そしてこの瞬間。獄炎の

効果が発動。墓地に送り、そのカードをコントロールしていたプレイヤーは、獄炎の元々の攻撃力分のダメージを受ける」

「な……うがああああ！」

獄炎が真尋を巻き込む形で爆発する。

……破壊ではなく『墓地に送る』なのだが、突っ込まない方がいいだろうか。

真尋&スミス LP7600↓5200

「す、すごい。あの盤面を、上手くすり抜けて……」

すごく驚く大束。

壊獣で無理矢理どかしたわけではない。

敵視点のマストカウンターをしっかりと把握した上で発動された魔法カードの数々。

こればかりは、『アンデットデッキに入る魔法・罫は一枚一枚が強力』とも言えなくもないが、それにしただって全体が見えているといえるだろう。

「獄炎の効果処理も終わって、ターンエンドだ」

「なら、俺のターンだ。ドロー！」

もう一人、スミスというデュエリスト。一体どんなデッキを使うのだろうか。

まあまずすることは決まっている。

「ドローフェイズ中に、墓地の『屍界のバンシー』の効果発動。デッキから『アンデットワールド』を発動する」

「ぐ……」

スミスの表情が歪んだ。

その先にいるのは、フォトン・ロードだ。

インフィニティの効果で無効にしようとしても、それを無効にされることは分かっている。

それに加えて、『ドローフェイズ中の発動』と言う発言で、すでに察しているのだ。

「インフィニティの効果発動。その効果を無効にする」

「当然。フォトン・ロードの効果で無効にする」

破壊されるインフィニティ。

お互いに無効効果を持っているのなら、フリチエをやったもの勝ちである。

広がり始める屍界。

それは、本来より重苦しいものだ。

「そしてスタンバイフェイズだ」

墓地から闇が溢れだす。

「終わりも始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の

魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「やはりそのモンスターか」

「その通り」

スミスは苦虫を噛み潰したような表情だが、すぐにカードを使い始める。

「俺は魔法カード『U・A・フラッグシップ・デイル』を発動！」

「『U・A』か……」

攻撃専門と防御専門のモンスターがいたはず。

「デツキから『U・A・ファンタジスタ』を、効果を無効にして特殊召喚。1200のライフを失う」

U・A・ファンタジスタ ATK1200 ☆4

真尋&スミス LP5200↓4000

「そして、手札から『U・A・スタジアム』を発動！」

遊月たちのそばの風景は『アンデットワールド』のまま、デュエルフィールドを覆うようにスタジアムが出現する。

「俺は『U・A・ドレッドノートダンカー』を。フィールドのファンタジスタを手札に戻すことで、特殊召喚！」

U・A・ドレッドノートダンカー ATK2500 ☆7

「この瞬間、スタジアムの効果を発動。ドレッドノートダンカーの攻撃力が500アップする」

U・A・ドレッドノートダンカー ATK2500↓3000

「そして、『U・A・パワードギプス』をドレッドノートダンカーに装

備！攻撃力が1000ポイントアップ！」

U・A・ドレッドノートダンカー ATK3000↓4000

「さあ、バトルフェイズだ。ドレッドノートダンカーで、ドーハスーラに攻撃！」

「うーん。こいつってなんかやばい効果を持っていたような気が……」

「ドレッドノートダンカーは貫通能力を持っている！さらに、パワードギブスの効果により、ダメージは倍！」

「うえい!？」

遊月&綾羽 LP8000↓4000

「ドレッドノートダンカーは戦闘ダメージを与えたとき、フィールドのカード一枚を破壊できる。アンデットワールドを破壊！」

「むう……」

アンデットワールドが消えて、スタジアムだけが残った。

「さらに、パワードギブスの効果。装備モンスターの攻撃で相手モンスターを破壊したとき、装備モンスターはもう一度だけ攻撃できる。フォトン・ロードを攻撃！」

遊月&綾羽 LP4000↓2000

「そして、戦闘ダメージを与えたときの破壊効果にターン1制限はない。セットカードを破壊する！」

「速攻魔法『デーモンとの駆け引き』を発動。レベル8のドーハスーラが墓地に送られたことで、デッキから『バーサーク・デッド・ドラゴン』を特殊召喚！」

バーサーク・デッド・ドラゴン ATK3500 ☆8

「なるほどな……メインフェイズ2。俺は『U・A・ファンタジスタ』を召喚」

U・A・ファンタジスタ ATK1200 ☆4

「この瞬間。スタジアムの効果が発動。デッキから『U・A・パーフェクトエース』を手札に加える。そして、ファンタジスタの効果。ドレッドノートダンカーを手札に戻すことで、パーフェクトエースを特殊召喚する」

U・A・パーフェクトエース DFE2500 ☆5

「ドレットノートダンカーがフィールドを離れたことでパワーダギブスが墓地に送られるが、このカードは、装備モンスターが手札に戻っていた場合、手札に加えることができる」

さらに、と続ける。

「ファンタジスタを手札に戻し、『U・A・カスタディアン』を特殊召喚！」

U・A・カスタディアン DFE2800 ☆6

「俺はこれでターンエンドだ」

次は大東のターンだ。

「パーフェクトエースは手札一枚をコストに効果の発動を無効。カストディアンは一体に対して破壊耐性を付与だったな。少々厄介だが……」

一応。バーサーク・デッド・ドラゴンを出してある。

ある程度問題は緩和されるだろう。

大東がデッキトップに指を置く。

その瞬間、聞こえた。

——力になりたい。

「……私のターン。ドロ……このカードは」

何かいいカードを引いたようだ。

「このままスタンバイフェイズ。スタジアムがあるので、墓地のドーハスーラが効果を発動できる！」

「またそいつか……だが、アンデット族などお前のデッキには入っていないだろう。通してやる」

(ドーハスーラ。出てこい)

大東、というよりは、遊月の声にこたえて、墓地からドーハスーラが特殊召喚される。

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「そして、『アドバンスドロー』を発動。バーサーク・デッド・ドラゴンをリリースして、二枚ドローする」

「通せないな。パーフェクトエースの効果。手札一枚をコストに、無効にして破壊する！」

だが、バーサーク・デッド・ドラゴンはいくまでも発動コストなので、墓地に送られる。

「まだまだ。私は手札の『ヘカテリス』の効果。デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加える効果を発動する。だけど……私はこれにチェーンして、手札の『灰流うらら』の効果を発動！」

「何!？」

デッキの重要なカードをサーチする『ヘカテリス』の効果を無効にする。

なかなかの選択だ。

「そしてこの瞬間、私の『灰流うらら』……アンデット族モンスターの効果が発動したことで、ドーハスーラの効果発動！」

「何!？」

「どうする? 選択するのは効果処理時だけど」

「ぐ……カストディアンの効果発動。パーフェクトエースに破壊耐性を与える」

ヴァルハラが投入されるデッキのモンスターの攻撃力では、あまり変わらない可能性があるが……。

「ドーハスーラの効果を処理。パーフェクトエースを除外！」

(やれ。ドーハスーラ)

ドーハスーラの暗黒の波動が、パーフェクトエースを除外した。

「ヘカテリスの効果は無効になるけど、墓地には送られるよ。そして、永続魔法『アドバンス・フォー』を発動。レベル7以上のモンスターを召喚するとき、レベル5以上のモンスター一体のリリースで出すことができる。私はレベル8のドーハスーラをリリース。『マスター・ヒュペリオン』をアドバンス召喚！」

マスター・ヒュペリオン ATK2700 ☆8

「効果発動。墓地のヘカテリスを除外。カストディアンを破壊する！」

マスター・ヒュペリオンが生み出した光球が、カストディアンを粉砕する。

「ぐ……だが、まだ1300足りない！」

「これでラスト！私は手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！」

お互いの墓地のモンスターの中から一体を対象にして自分フィールドに特殊召喚する魔法カード。

『D・D・クロウ』など、効果処理時に墓地からモンスターを取り除くようなカードがチェインされたりしない限り、効果が不発になりにくいカードだ。

「私はこれを使って墓地から……え？」

大東は首をかしげる。

モンスターはお互いの墓地から選択する。

そしてタッグフォースルールのため、ペアとの墓地は共有である。

(なんで……アンデットモンスターが表示されてないの?)

デュエルディスクの液晶。

そこに、特殊召喚可能なモンスターのリストが存在する。

ちなみに、『アンデットモンスター』と言ったが、厳密には『灰流うらら』は表示されている。

だが、『邪神機―獄炎』も『死霊王 ドーハスーラ』もいなかった。

『バーサーク・デッド・ドラゴン』に関しては、『デーモンとの駆け引き』の効果でのみ特殊召喚が可能なモンスターなのでいけないことは納得できるが、この二体が表示されていないことが理解できない。

大東は遊月の表情を見る。

遊月は、大東の方を向かなかった。

「……私は、『銀河眼の光子竜』を特殊召喚！」

銀河眼の光子竜 ATK3000 ☆8

「な……俺のモンスターだ?!」

ルール上問題はなくとも、デュエリストとしての感覚と言うか、それを明らかに無視したような選択に、真尋はうろたえる。

だが、デュエルは続いている。

「バトルフェイズ。私は二体のモンスターで、ダイレクトアタック！」
「う、うあああああああ！」

真尋&スミス LP4000↓0

敗北して、その衝撃でぐったりしている二人。

そして、大東のデュエルディスクからアンカーが外れた。

その時、遠くからサイレンが聞こえてくる。

(……英明が先ほどから反応がない。本当に気絶しているのか?)

となれば、最後の力を振り絞ってセキュリティを呼んだということだろう。

まあ、それだけ聞くとかつこいいが実際の状況を考えてとかつこよさなど絶望的だが。

ちなみに、真尋とスミスは違法デュエルなどの常習犯だったようだ。

セキュリティの隊員も見た瞬間にわかったようで、すぐに手錠で拘束されて連れていかれた。

「ねえ、一体どういうこと?」

セキュリティの隊員がいなくなった後、大東が遊月に聞く。

「さっきの死者蘇生の時の、私のモンスターを蘇生できなかった話か?」

「それ」

「……簡単に言えば、私と君は同類で、君より特殊性が強いというだけのことだ」

「それってどういうことなの? 一体、何者なの?」

「私は何者か……ねえ」

遊月は少し考えた後、こう続けた。

「あえて言えば、私はただの生きざこないだ」

「え、そ、それってどういう——」

その時、黒いリムジンが通りかかって、大東のそばで急停止した。

そして、運転席からスーツとサンングラス装備の黒服が出て来る。

「綾羽様。家にお戻りの時間です。訓練開始まで時間ありません」

よ」

「えっ……」

大東はデュエルディスクを確認すると、驚いたような表情になった。

「速く車に乗ってください」

「……はい」

大東は遊月の方をチラッと見る。

それを見て、黒服が遊月の方を見る。

「君は一体何だ？綾羽様はこれから重要な訓練の時間だ。邪魔をするなら——」

「別に邪魔なんてしないさ」

遊月はためらいなく背を向けた。

「別に私は、君の質問に答えようとは思っていない。それと……まずは一度、自分で考えた方がいい。私のコレはそういうものだ」

「……」

大東は納得いかないようだ。

「綾羽様」

「……わかっています」

大東はリムジンに乗りこむ。

黒服も運転席に座って、すぐに発信した。

「……」

遊月はデュエルディスクを見る。

そこには『17：48』と表示されていた。

「……門限速いな。とにかく今は、あのバカをどうにかするでしょう」
英明を叩き起こすべく、遊月は歩き始めた。

第六話

「ぐぬぬ……綾羽ちゃんのピンチであんなミスをしてしまうとは……」

(ミスと言うレベルなのか?)

通学時。

遊月と英明はよく一緒になる。

起きる時間が一緒なのかどうかはともかく、寄り道がほとんど同じなのだ。

そのため、ばったり会うことも多く、こうしてしゃべることも当然ある。

「だが、まだあの醜態を見られてはいない。まだチャンスはある!」

そういつて拳を握りしめる英明。

「……まあ、お前のそれは正直どうでもいいがな」

「にやにおう!」

「ところで英明。大東に関しては一つ置いておくとして、彼女の実家の方はどうなんだ?」

「ん? 実家の方か」

「ああ。何か知ってるか?」

「もちろん」

聞いておいてなんだがそれはそれで問題があるような……。

「大東家は最近名が知られてきてるけど……綾羽ちゃんだけがすごいって感じなんだが……裏に何かすごいのがいる感じがするんだよな」

「裏?」

「ああ。大東家……っていうより、綾羽ちゃんだけ門限がすごく早いんだが、綾羽ちゃん以外はゆるゆるなんだ。兄弟も親戚も、ほとんど強制はされていないらしい」

「ほう……」

「で、どんなところに住んでるのかなって思ってたDホイールで追いかけてみたんだ」

「……お前Dホイール持ってたのか？」

「ライセンスも持つてるぞ」

遊月は意外と思うよりも、こんなことを考えていた。

(M・HERO使いで、バイクに乗ってるって……なんかアレだな)

とりあえず思考を放棄。

「で、見つかったのか？」

「ああ。ただ、敷地内なのに、めちゃくちゃ嚴重に管理されてる施設があつてな。授業サボって三日間張り込んだんだが、大東家の中では綾羽ちゃんしか入ってないんだよ。それ以外入っていた人たちは、白衣を着たりファイルを持っていたり、そんな感じの学者とか研究者みたいな風貌だったからな」

「……」

徹底してるな。と遊月は思った。

「お前、そこまでするのに告白とかしないんだな」

「当たり前だ。俺たちは『ファンクラブ』ではあるが、『親衛隊』でもある。決して、交際だとか結婚だとか、そういう踏み込んだ関係を目指しているわけではない。一步引いたところから綾羽ちゃんの幸せを望むのが目的だ」

「……」

そこだけ聞くとかつこいいのだが、遊月が見たあのダブル弁慶の激突のインパクトが強すぎて全然かつこよくない。

「それ、もしも大東が彼氏作ったらどうするんだ？」

「それが綾羽ちゃんが考えて選んだ結果なら構わねえさ。だって、しつかり考えて選んだ相手なら、そいつと一緒に生きていくのは幸せなことだろう？」

「喧嘩くらいはすると思うが」

「何言ってるんだ。『幸せ』じゃなかったら『喧嘩』なんてしないさ。もつとひどいものになる。それによく言うだろ？『喧嘩するほど仲がいい』って。あれはそういうことだって親衛隊^{ファンクラブ・マスター}長が言ってた」

「お前の言葉じゃないのかよ……」

あとその無駄にわけわからないルビはなんだ。

とはいえ、本当にその通りの理念で動いているのなら、本人の迷惑にならない限り尊い組織である。

だが、遊月は言わせてもらいたい。

「親衛隊ならちゃんと護れるようになれよ」

「……」

明後日の方向を見る英明。

流星にこういわれると分が悪いようだった。

「わかってら」

英明はそういうと、もう何も言わなくなった。

遊月としても聞いておきたいことは聞いたので、もう何も聞かなかった。

ただ、あの黒服が現れた時の大束の表情。

少なくとも、恐れている何かがあるのは間違いないだろう。と遊月は思った。

★

「チッ。しけてんな。雑魚どもが」

永石は財布の中身を見て舌打ちする。

そのそばでは、なぜそこまで鍛える必要があったのかわからなくらいムキムキの男がぐったりしている。

デュエルディスクには『LPO』と表示されているので、今までデュエルをしていたのだろう。

「で、あれか」

永石はワゴン車を見る。

それなりに人を詰め込めそうなくらいの大きさだ。

永石が中を見ると、目隠しされてガムテープで口をふさがれた女子生徒が二人と、男子生徒が三人いる。

全員が身じろぎしているところを見ると、起きているようだ。

クラスメイトではないが、制服は『デュエルスクール・アムネシア』のものだ。

「男子が多いな。強制労働施設にでも放り込む気だったのか？……まあ、俺には関係ねえか」

「ククク。デュエルが強かろうと、その鍵をこじ開けることは——」
「キラー。奪え」

永石がデュエルディスクに『アポクリフト・キラー』のカードを置くと、実際に出現。

ムキムキの男が驚愕した様子でジャケットの右ポケットを抑える。それではどこに隠しているのかを教えているようなもの。

そして、攻撃力3000のキラーは、なんだかんだ言って力も強い。鍵を奪って、永石に手渡してきた。

永石は鍵を使ってドアを開けると、中にいた全員の拘束を解いた。
「あ、ありがとうございます」

中等部三年。永石よりも年下の男子生徒が礼を言ってきた。

「別に構わねえよ。狩りのついでだ」

チンピラは彼に取って獲物らしい。

「暴行されてねえみてえだな……なら問題ねえな。で、後はアイツか」
キラーがチンピラを抑えている。

どうやらチンピラの攻撃力は3000未満のようだが、そんなことは永石には関係ない。

永石は電話をかける。

「おい、現行犯逮捕だ。隊員よこせ」

何様のつもりだろうか。

ただ、永石は警察では有名なのか、電話の受付も慣れたものである。すぐにデュエルスクール専門部隊のセキュリティ隊員が来た。

ちなみに、感謝状とかいろいろ発生すると面倒なので、謝礼金として金一封をもらうというのが、時間的にお互いにとって一番コストパフォーマンスが高いやり取りである。

そういうわけで、もらった永石も当然中身は確認しない。

金一封の意味はよくわかっていてからである。

「お前らも用事がねえんなら事情聴取のためにセキュリティについていけ。カウンセラーの姉ちゃんのおっぱいでけえから」

そういうと今まで意気消沈していた男子たちが顔を上げるのだから世の中と言うのは性欲である。

そしてそんな男子たちを見て白い目を女子が向けるまでがお約束である。

こういう事情があるので、不謹慎な話だが被害者に男がいるとやりやすい。

「……身も蓋もないですね」

「世の中そんなもんだろ。ていうか。ここはデュエルスクールエリアの範囲内だろうが。まだぐるっと一周囲んだ隔離壁があるはずだろ。こんなチンピラ入れてるお前らが悪いんだよ」

「ぐうの音も出ませんね。それでは、後はこちらで対応しますので」

「おー。よろしく」

永石はそういうと、後ろからかけられる感謝の言葉に対して、右手を上げるだけで答えてその場を後にした。

そして、近くの広場を通る。

「糞が。こんな安物チャチな力じゃなくて、もっと大きな力がほしいってのに」

永石は『アポクリフオート・キラール』のカードをとりだす。

「お前が精霊だつてことは分かっている。だが、お前から何も言うことができねえんじや意味がねえ」

もちろん、捨てようとは思わない。

精霊。

デュエルモンスターズでは、一部、存在を認めないものがあるもの、いるとなればそれ相応にデュエリストに影響を与えるカードだ。

「もっと強くなれば、もっと上のものを利用できる。それができれば、アイツを……」

そこまで考えた時だった。

広場のベンチで、見知った顔を発見した。

「……不死原遊月」

どうやら本を読みながらベンチに座っている。

相変わらず腐った目で、ドクロのネックレスを付けていて、いつも通りだ。

「……ん？永石か」

「こんなところで何やってんだ？」

「私は日光が当たっているところが好きなんだ。だから、屋上か、こうした広場によくいる。それに、こうして本を読んでいれば、待ち合わせだと思っても不思議に思わないからな」

「単純にベストポジションってことか。腐った目をしてるわりに日光が好きとか変わってるぜ」

「よく言われる。まあ、今日に関して言えば、ちよつと面倒になって逃げてきただけだが」

「……どういふことだ？」

「理由があつてここに退避しているということだ」

そこで、会話がいったん止まった。

永石としても溜息を吐きたくなつたからである。

「……なあ、お前、俺が今持っているもので新しく強くなるとしたら、どんな力だと思う？」

永石が聞いた時、遊月は本に葉を閉じて、永石の方を見た。

「力と言うのは二種類ある」

「ん？」

『小さなものを成長させたもの』と、『身に余るものを制御したもの』だ

「ああ。まあ納得はできるぜ」

「今持っている。と言っている以上、君が言っているのは前者だろう。だが、君が持っている『アポクリフオート・キラー』のことではないと言われたのか？」

永石の表情が変わる。

「何で知ってたんだ」

「私がつつドーハスーラに目を向けた君だ。精霊カードと言う存在がどれほどの影響力を持っているのか、そこに鍵があると思つていたことは間違いない。だが、君の中でその考えが揺らいでいるようだ」

「……そうだな。俺が持っている唯一の精霊カードだ。その力ではないっていわれたからだろうな」

「もつとも、本当にそれで君が強くなれないのかどうかはともかく、他

にもあるというのなら……それは『機殻の要塞』だろう」

「……」

永石は答えない。何も返答しない。

「その反応を見ると、どうやら少しは考えていたようだな。で、あのカード、誰かからもらったものか？」

「……ああ、そうだ」

「そうか。誰からもらったのか知らんが、迷惑をかけないようにしていたようだな」

「なんで分かる」

「そういうカードだと知っているからだ」

遊月は立ち上がった。

「もう少し、頼りにしてみるといい。迷惑をかけてみるもいい。君が持っている『機殻の要塞』のカードは、たぶんそれを望んでいるからな」

「……おい、本当に、このカードを——」

遊月が左手を前に出したことで、その雰囲気を感じたのか、永石の声が止まる。

「もう少し、良いツラになって私に食って掛かるようになったら、ここから先のことを話そう」

遊月はそう言うのと、背を向けて歩いていった。

永石は『機殻の要塞』のカードをとりだす。

「本当に、これを頼ればいいってことか？」

それはまだ、彼にはわからない。

★

「……どこに行ったんだろう」

綾羽は放課後、遊月に話しかけようと思ったのだが、そのころにはすでに、遊月はいなくなっていた。

「完全に逃げられた。そんなに話せないことだっただってことなのかな」

もちろん、綾羽にだって話せないことくらいはある。

だが、どれほどなのか。ということはともかく、その質が大きく違うと感じた。

しかし、綾羽にだって気になることはある。

「はあ……あ、圭吾君」

広場に通りがかったとき、永石圭吾を見つけた。すこし、何かを考えているような顔つきである。

「……綾羽か。何してんだこんなところで」

「ちよつと探してる人がいて……」

その言葉に、圭吾は頬を動かした。

「不死原か？」

「え？……あ、うん。そうだけど、なんでわかったの？」

「なんか『退避してきた』とか言つて、さっきまで本を読んでいたぞ」

「そうなんだ。どっちに行つたか分かる？」

「あつちだ」

一つの路地のほうを指さす圭吾。

「わかった。ありがとう」

綾羽は走り出す。

路地に入つて行つて、どんどん進んでいった。

「……この街つて、こんなところがあつたんだ……」

普段は路地裏などを通らないので初めてだった綾羽。

とはいえ、そういう場所があることはもちろん知っていたが、少し、異質な感じがする。

「本当にこつちに、遊月君が……」

そうつぶやいた時だった。

「どうやって罫にはめようかと考えていたが、まさか自分から路地裏に入つてくるとはな」

「——っ！誰?！」

綾羽は振り向いた。

するとそこには、黒いシャツの上に金色のロングコートというなかなか前衛的なファッションの少年がいた。

そして、感じ取れる雰囲気からヤバいと感じた綾羽は、デュエルディスクを構える。

「ほう、逃げるのではなく応戦してこようとするのか」

少年はデュエルディスクを構える。

「まあいずれにせよ。逃がすつもりは毛頭ない」

「一体、何が目的なの？」

「お前には理解できないだろうが、『本部からの新技術の提供で、奪う方向にシフトする』というものだ」

少年はカードを五枚引いた。

「……なら、ここで倒して、どうにかすればいいだけのことだよ」

綾羽もカードを五枚引く。

「俺はレイエス・アドベント。さて、任務開始だ。容赦はしないぞ」

「容赦をしないっていうのは、私のセリフだよ」

「デュエル！」

綾羽 LP8000

レイエス LP8000

「先行はくれてやる」

「なら、私のターンからだね」

綾羽は五枚の手札を見て、何をするかを一瞬で決めた。

「私は手札から『ヘカテリス』を捨てて、効果発動。デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加える。そして発動。手札から『幻奏の音姫プロデューサー・モーツァルト』を特殊召喚！」

幻奏の音姫プロデューサー・モーツァルト ATK2600 ☆8

「そして『トレード・イン』を使って、『The splendid VENUS』を捨てて二枚ドロウ。このまま、『死者蘇生』を使って特殊召喚！」

The splendid VENUS ATK2800 ☆8

「さらに、モーツァルトの効果発動。手札の『大天使クリスティア』を特殊召喚する！」

大天使クリスティア ATK2800 ☆8

「私はこれで、ターンエンドだよ」

「俺のターンだ。ドロウ」

VENUSとクリスティアという布陣を見ても、レイエスは淡々と進める。

「……俺は、お前のモンスター三体をリリース」
「え……」

モーツァルトも、VENUSも、クリスティアも。
いつそ、無情と言えるほどあっさり、消えていった。

「お前のフィールドに、『ラーの翼神竜―球体形』を召喚する」

ラーの翼神竜―球体形 ATK0 ☆10

「ま……まさか……」

「『所有者の刻印』を発動。こちらに移動してもらおうか。そしてリリース」

リリース。とは言うものの、消える訳ではない。

ただ、そんな感じのエフェクトが見えたと思ったら、球体が開きだす。

「現れる。『ラーの翼神竜』」

ラーの翼神竜 ATK4000 ☆10

「さ、三幻神……」

「驚いている暇はない。俺は『手札抹殺』を使う」

「私は一枚捨てて、一枚ドロ」

「俺は三枚捨てて三枚ドロ」

手札交換は十分に済ませたようだ。

「俺は墓地から『グローアップ・バルブ』の効果。デッキトップを一枚墓地に送ることで、このモンスターを特殊召喚する」

グローアップ・バルブ ATK100 ☆1

「さらに、手札一枚をコストに、『ジェット・シンクロン』を特殊召喚」

ジェット・シンクロン ATK500 ☆1

「現れる。神罰を刻むサーキット」

出現するアローヘッド。

「バルブとジェット・シンクロンをリンクマーカーにセット、チューナーを含むモンスター二体、『水晶機巧―ハリファイバー』だ」

水晶機巧―ハリファイバー ATK1500 LINK2

「リンク召喚成功時の効果はあるが……使っても意味はないか」
「え？」

「再び現れる、神罰を刻むサーキット」

再度出現するアローヘッド。

「俺は、ハリファイバーと、ラーの翼神竜をリンクマーカーにセット」
「三幻神を素材に……」

「リンク召喚。リンク3 『アークロード・パラディオン！』」

アークロード・パラディオン ATK2000 LINK3

「そのモンスターは……」

「そして、ラーの翼神竜が墓地に送られたことで……現れる。『ラーの翼神竜―不死鳥』！」

ラーの翼神竜―不死鳥 ATK4000 ☆10

「ご、ゴッドフェニックスって……」

「アークロード・パラディオンは、リンク先のモンスターの元々の攻撃力分、その攻撃力をアップさせる」

アークロード・パラディオン ATK2000↓6000

「こ……攻撃力6000」

「その代わり、リンク先のモンスターは攻撃できなくなる。だが、不死鳥に効果は通用しない。攻撃が可能だ」

「――！」

攻撃力4000の不死鳥と、攻撃力6000の騎士。

いや、そんな数値的なものではない。

赤々と燃え上がる不死鳥。

そこからは、感じとってしまう。

原始的で

単純で

濃密で

絶望的で

自分の中で、何かが終わってしまうのではないか。

そんな恐怖が、綾羽の心と体を駆け巡って来る。

「バトルフェイズ。アークロード・パラディオンで、ダイレクトアタック」

「――！」

両腕を交差させる綾羽。

そんな綾羽など意に介さず、アークロード・パラダイオンは剣を振りおろす。

発生した斬撃は、そのまま綾羽の方まで飛んでくる。
デュエルディスクに発生した衝撃。

だが、そんなもので受け止められるようなものではなかった。
そのまま吹っ飛んでいき、近くの壁に激突する。

「あぐっ！」

そのまま地面に落ちて、フラフラになりながら立ち上がった。

綾羽 LP8000↓2000

「ラーの翼神竜。やれ、ゴッドフェニックス」

「――！」

不死鳥が燃え上がり、綾羽に向かって突撃してくる。

綾羽の体を貫き、内側から焼かれるかのような感覚が、綾羽を襲った。

「いやあああああー！」

不死鳥はそのまま舞い上がる。

そして、綾羽の中から、とても大事なものを奪っていく。

綾羽はそのまま膝から崩れ落ちて、意識を失った。

綾羽 LP2000↓0

不死鳥はレイエスのそばに戻ってきて、口の中からあるものを出して彼に渡す。

それは、三枚の『神の居城―ヴァルハラ』だった。

「ふーん……さすが、俺と同世代だな。まあいい……？」

レイエスは、倒れている綾羽のデッキから、あるものを感じる。
近づいて行って、それを確認した。

「なるほど、『灰流うらら』の精霊カード。しかもかなりのレアだな。
俺の相性は悪そうだが……」

そう言った後、レイエスはポケットからあるものを取り出す。

言ってしまったら、手錠のようなもの。

「さて、後はこいつをあの研究所に……！」

レイエスは上から何かを感じる。

見上げると、『死霊王 ドーハスーラ』が、その杖に暗黒の波動を集約させている。

レイエスは『ラーの翼神竜―不死鳥』をデュエルディスクにセットした。

ドーハスーラの前に不死鳥が出現。

暗黒の波動は、不死鳥の阻まれた。

「フン。そんな雑魚モンスターで、俺に勝てるわけが……！」

圧倒的と言えるステータスと、完全耐性を持つ不死鳥。

だが、そんな不死鳥を素通りして、そのままレイエスに斬りかかって来る何かがいた。

デュエルディスクで受け止めるが、衝撃を受け流すことはできずにそのまま下がる。

綾羽との距離が開いてしまった。

「チツ……『No. 23 冥界の霊騎士ランスロット』か」

直接攻撃モンスターだが、まさかデュエル以外でもその効果を発揮するとは思わなかった。

その時、サイレンが聞こえてくる。

「……これ以上、大ごとになると、この学校の生徒会長が帰ってくる可能性があるな」

レイエスは手に持った四枚のカードを見る。

『神の居城―ヴァルハラ』三枚と、『灰流うらら』だ。

「まあ。今回はこれくらいでいいでしょう」

レイエスはその場を後にした。

第七話

「遊月！大変だ！」

「朝からどうした」

遊月は朝から騒いでいる英明に対してげんなりしていた。

「綾羽ちゃんの様子がおかしいんだ」

「……大束が？」

「ああ。なんか。健康って意味では何も問題はねえけど、何か大切なものがなくなっただけじゃないか。そんな感じがする」

「私はお前が実はカウンセラーに向いているんじゃないかと思いはじめてきたがな」

「そんなこと言ってる場合じゃねえって」

そう言った時、教室に大束が入って来た。

遊月は、確かに、大束に変化があることは認識した。

というより、普段からいるはずの存在が見つからない。

（『灰流うらら』の精霊がない……なるほど、昨日ドーハスーラが急にいなくなったのはそういう理由か）

昨日の夜のことだ。

寄っておきたい店への近道として裏路地を通っていた遊月だが、急に、ドーハスーラが飛びだしてどこかに消えて行った。

すぐに戻ってきたが、ドーハスーラにいくら聞いても何も答えなかった。

ドーハスーラの雰囲気からは良い予感がしなかったので置いておくことにしたが、ここまで来てはつきりした。

（だが、それだけじゃないな。なるほど、『何か大切なものがなくなっただ』か。的を射ているというか……）

遊月は英明が言いたいことを理解した。

だが、英明はそれがどういふことなのか分かっていないようである。

「なんだろうな。なんか、綾羽ちゃん。存在感がいつもより薄い気がする……」

「……で、どうするんだ？」

「俺はいろいろな方面から調べてみるさ。何かを奪われてるような感じがするし、おびえてる気もする」

「なぜそこまで分かるんだ？」

「日常をずっと観察していれば変化だつてわかるさ」

それはそれでどうなのかと思う遊月。

とはいえ、英明に関しては何を言ったところで無駄である。

「とにかく、俺はいろいろ調べる必要があるから」

「ああ。構わない」

遊月の友人は今のところ英明のみ。

とはいっても、毎度毎度話したいことがあるかと聞かれるとそれは違う。

(さてと……私はどうするべきかな)

既に決めている答えを自問し始める遊月であった。

★

しかし、調べるにしても時間がたたなければネットにだって情報は集まらない。

調べるとすれば、それは放課後になる。

あと、手掛かりというものは簡単には見つからないものだ。

(精霊も、特別なスリーブに入ったりすると分からなくなることはよくあるからな)

精霊ハンターがよく持っている装備の一つである。

精霊というものは基本的にカードに宿るものだが、存在が確定した場合、離れることも実はできないわけではない。

実際にコレクターの部屋に侵入すれば、ありとあらゆるカードがこのスリーブに入っている。

遠くにいる精霊がわかるほど感受性の高い人間であったとしても、発信される情報が著しく制限されるとわからなくなる。

(三十年ほど前なら、精霊に対する技術という概念そのものがなかったが、……人は人間以外を支配しようと考える生き物だなあ)

遊月はなんとなくそんなことを考えるが、すぐに思考を切り替え

る。

「さてと……」

遊月が来たのはデュエルスクール・アムネシア内に存在する閲覧室。

見たいのは、それ相応に閲覧料金がかかるデュエルの試合映像だ。デュエルというものが政界、財界に匹敵するということは、そのプレイングに料金が発生するということでもある。

デュエルスクール・アムネシアは民営だが、かなり連携している幅が広く、こういった高額料金が発生するデュエルであっても、その記録映像まで見ることができる。

「ここに載ってなかったらかなり面倒なことになるからな……頼むぞ。本当に」

かなり大規模な大会であっても閲覧可能な場所だ。

だが、ここですら見れないとなれば、監視カメラのハッキングをしたうえでローラー作戦だ。それは勘弁してほしい。

デュエルモンスターズは確かにカードゲームだ。

だが、その中でも明確に価値があるとわかるのは数枚。

言い換えれば、持ち運びの困難さがほぼ皆無だ。

さらにいえば、手慣れているものは自然体になっているほうが怪しまれないことを知っているの、監視カメラに映っても全然わからない。

「見つかりますように……こればかりは神頼みだな」

神の存在など信じていないが、遊月は切実にそう思う。

「検索は『天使族』で、新着からだな。うわ、今つて午後五時くらいだよな。なんでもう百件超えてるの?」

天使族ってそんなにデツキ作れるの?と思った遊月。

とはいえ、ちまちまとダメージを稼ぎまくって、果てには便所ワンキルなどという不名誉な名前をもらった『トリックスター』が天使族なのだからそりやそうである。

遊月は動画の一番上のリンクをクリック。

そして流れ始めるデュエル映像。

簡易的な概要を見る限り、片方が天使族で片方が「ラーバモス」だ。一瞬ニューロンがスパークしかけたが、プロの世界にはいろいろあると考えて見始める遊月。

先行一ターン目、デュエル前からずっとにやにや笑っていたデュエリストが、手札からヘカテリスをすててヴァルハラをサーチ。

そして発動されるヴァルハラ。

出現した城は、なんというか、神々しさというか、普通とは何かが違うたものを感じさせる。

遊月はもうもはや絶句していたといっても過言ではないが、ここからはどちらかというところ『ラーバモス』が気になるので見ておくことに。ヴァルハラを使った男は『天空勇士ネオパーシアス』というんだか懐かしいカードを使っている。

そして、返しの「ラーバモス」使いのターン。

『寄生虫パラノイド』でネオパーシアスに寄生。

そのまま『超進化の繭』を使って、ネオパーシアスをリリースしながら、あのモンスターを特殊召喚しようとしている。

だが、ここでヴァルハラを使っている男は『灰流うらら』を使ってそれを無効に。

遊月の胸の中で渦巻くモヤモヤというかムカムカというか、そういったものが爆発した。

「ここで張り込むことになると思っていた私の覚悟を返せええええええええ！」

『閲覧室では静かにしましょう』と書かれた張り紙など完全に無視して、遊月は叫んだ。

ちなみに、このデュエリストの容姿と名前、所属などを記録したのはいいが、一つ考える。

(ていうか、本当にこの人。「ラーバモス」狙ってたのか?) 用意されている究極完全態への道。

それを閉ざしてまで、あのモンスターを選ぶのだろうか。デュエリストの好みというのは千差万別である。



「よし。この力があれば、俺はまた返り咲くことができる」

白い上下のスーツという、なかなか見ないファッションの男が裏路地を歩いている。

その手には、『神の居城―ヴァルハラ』三枚と、『灰流うらら』が握られている。

彼の職業はプロデュエリストだが、最近では戦績が良くなかった。

最近ではネタデッキ扱いされている者たちが集まるレベルの大会にしか出ていなかったが、今回は今までの戦績を覆すような動きをすることができた。

これが続けることができれば、再び大舞台に戻ることができる。

「だが、レンタル品だからな。いずれあいつもぶっ潰して、これを俺のものにしてやる」

路地を曲がると、金色のコートを着た前衛的なファッションの少年がいる。

男が近づくと、少年はこちらを向いた。

「どうやら戦績はよかったようだな」

「ああ。いずれ大舞台に立つんだ。そのための一歩としては十分だぜ」

男、安江浩太はカードを四枚見せた後、封筒を出した。

それをレイエスに手渡す。

レイエスはポンポンと手の上ではねさせると、うなずいた。

「びったりだな」

「わかんのか?」

「わかる」

変な特技である。

「なるほど、一日ごとにレンタルを更新し続けているシステムか。わかりやすくいいな」

「!」

遠くから聞こえてくる声に驚く二人。

振り向くと、髑髏のネックレスを付けた腐った眼の少年、不死原遊月がいた。

「なんだお前は」

「何。ちよつとそのカードは盗品なんでね。それを回収しに来ただけだ」

「はっ?」

浩太はレイエスを見る。

レイエスは溜息を吐くだけで何も言わなかった。

「盗品なのか?」

「そうだが、何か悪いのか?強くならなければ意味はないんだぞ」

浩太にそういうレイエス。

浩太はうなずいた。

「ああ。そうだな。プロの世界はシビアだからな。カードなんてとられるほうが悪い。第一、これは俺が正当な取引でレンタルしてるものなんだ。俺が正しいんだよ!」

それを聞いた遊月もまた、溜息を吐いた。

「そうか。お前は、お前が正しいと思ってることをしているだけなんだな」

「当り前だろうが!」

「なら、いいんだな?」

「何が——!」

あたりに広がり始める腐食の波動。

別に、本当に腐っているわけではないだろう。

だが、錯覚か、幻覚か、それともまた別のものなのか。

浩太の眼には、全く違うものに見える。

「私も、私が正しいと思うことをしてもいいんだな?ならば、死後の世界の広さを教えてやる」

「——っ!上等じゃねえか!俺が正しいんだ。俺が正義だ!」

お互いにデュエルディスクを構える。

「デュエル!」

遊月 LP8000

浩太 LP8000

「俺の先行だ」

「うが早いか、浩太はすぐにカードを使う。」

「俺は手札から『ヘカテリス』を捨てて効果発動。デッキから『神の居城―ヴアルハラ』を手札に加える。そして発動。そのまま効果を使う。あらわれる。『天空聖騎士アークパーシアス』！」

天空聖騎士アークパーシアス ATK2800 ☆9

「俺はカード一枚セット。これでターンエンドだ」

「私のターンだ。ドロー」

伏せカードが一枚。

パーミッションである可能性は非常に高いだろう。

「私は手札から、『手札抹殺』を発動。お互いに手札交換だ」

「チツ……その表情を見る限り、手札事故ってわけじゃなさそうだな」

「ああ。私は墓地に贈られた『グローアップ・ブルーム』の効果で、墓地から除外することで発動！」

「それは止めておくれ。1500のライフを払って、『神の通告』を発動！」

墓地にいた朽ち果てた花が雷で焼かれた。

浩太 LP8000↓6500

「……まあ仕方がないな。墓地の『屍界のバンシー』の効果発動。墓地から除外することで、デッキから『アンデットワールド』を発動」

広がり始める屍界。

重苦しい雰囲気だが、浩太以上に、レイエスが驚いているようだ。

「馬鹿な……年齢的に、お前のそれはあり得ない」

レイエスが驚いている。

それに対して、遊月は微笑む。

「安心しろ。私はお前とは別世代だ。デュエル続行。『闇の誘惑』を発動して、デッキからカードを二枚ドロー。闇属性モンスターを除外し、これを『D・D・R』で対象にする」

除外したばかりだが、闇をまき散らしながら、姿を現す。

「屍界にさまよう怨霊よ。力を束ね、巨人を描き、神罰を下せ。『地縛

神 Cc a p a c A p u 』！」

上空に巨人が描かれる。

そして……。

地縛神 C c a p a c A p u A T K 3 0 0 0 ☆ 1 0

「な……地縛神だと!？」

「バトルフェイズ。C c a p a c A p uで、アークパーシアスに攻撃!戦闘で相手モンスターを破壊したとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える」

「な……うあああああ!」

浩太 LP 6 5 0 0 ↓ 6 3 0 0 ↓ 3 5 0 0

「私はカードを二枚セットして、ターンエンドだ」

「ぐ……俺のターン。ドロー!」

「スタンバイフェイズ。いいか?」

「まさか……」

墓地から闇があふれ出す。

「終わりも始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の

魔眼を開け! 『死霊王 ドーハスーラ!』」

死霊王 ドーハスーラ D F E 2 0 0 0 ☆ 8

特殊召喚されたドーハスーラを見て、レイエスが顔をしかめる。

「ドーハスーラ……邪魔したのはお前か」

「それは独断だから私は知らん」
「それは独断だから私が、相手している浩太としてはいいものでは当然ない。」

「やはりそいつか……だが、俺のフィールドにはヴァルハラがある。さらに……俺は『サイクロン』を発動。『アンデットワールド』を破壊する!」

竜巻によって消えていくアンデットワールド。

こればかりは仕方がない。

「そしてこれにより、地縛神は維持できない」

「ま、その通りなんだよな……」

消えていく巨人。

とはいえ、土地に縛られるモンスターなのだからこれは仕方がない。

「俺はヴァルハラの効果発動。手札から『天空勇士ネオパーシアス』を特殊召喚！」

天空勇士ネオパーシアス ATK2300 ☆7

「確かにドーハスーラは強力なモンスターだが、自身の効果で墓地から出てくる場合、すべて守備表示だ。そして、その守備力は2000しかねえ。やれ、ネオパーシアス！」

遊月 LP8000↓7700

「そして、ネオパーシアスが戦闘ダメージを与えたことで、一枚ドロ―だ」

「まあ、『便利なアンデット族』の宿命だな」

『ピラミッド・タートル』のリクルート圏内に入るためには、守備力は2000が上限。

まあもちろん。そうはいつでもステータスは破格だが。

「俺はカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「そのターン終了時、『メタバース』を発動。再び、『アンデットワールド』を発動する」

「な……」

再び現れる屍界。

「そして、私のターンだ。ドロ―。墓地のドーハスーラの効果が発動する」

「チツ……カウンター罠『輪廻のパーシアス』を発動。手札の『神の宣告』を見せて、これを捨てて、1000ライフを払って無効にする」

浩太 LP3500↓2500

「そして、エクストラデッキから、『天空神騎士ロードパーシアス』を特殊召喚！」

天空神騎士ロードパーシアス ATK2400 LINK3

「なるほど。なら私は、『不知火の隠者』を召喚してリリース。『ユニゾンビ』を特殊召喚」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3

「そして、自身を対象にして第二の効果を発動。『馬頭鬼』を墓地に送り、レベルを一つ上げて、馬頭鬼を除外することで、隠者を特殊召喚」

ユニゾンビ ☆3↓4

不知火の隠者 ATK500 ☆4

「レベル4の隠者に、レベル4の隠者をチューニング。屍界の底で鳴り響く王者の咆哮。天地鳴動の轟きを示すがいい！」

降臨！

「シンクロ召喚。レベル8。『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000 ☆8

「はっ!?レッド・デーモンズ・ドラゴンだど!?!」

最近では破壊効果の汎用性の問題で余り投入されないモンスターだが、まあ、それは置いておこう。

「最近ではスカーライトとかいるけど、私は正直こちらのほうが好みだね。永続罫『閻次元の解放』を発動。除外されている『グローアップ・ブルーム』を特殊召喚」

グローアップ・ブルーム ATK0 ☆1

「手札から『生者の書―禁断の呪術―』を使い、墓地から『ユニゾンビ』を特殊召喚し、アーク・パシアスを除外」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3

「さてと……」

遊月の体から、蒼い炎が噴き出し始める。

『真紅眼の不屍竜』が吹き上げているような、蒼い炎を。

「死者の世界で猛威を振るう『最強の地縛神』。その力を得た怪物を見せてやる」

「なんだと……」

「レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンに、レベル3のユニゾンビと、レベル1のグローアップ・ブルームを、ダブルチューニング」

ユニゾンビとグローアップ・ブルームが、蒼い炎の輪を生み出す。

そしてレッド・デーモンズ・ドラゴンは、その輪に包まれた。

「獄炎の王者よ。紅蓮の悪魔の力を得て、天地創造に呼応し、現世にて猛威を振るええ！」

炎が吹き荒れる。

「シンクロ召喚。レベル12。『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン』！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK3500 ☆12

「アンデット族のデッキに、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンだと!」
「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは、墓地のチューナーの数×500。
その攻撃力を上げる。私の墓地には、グローアアップ・ブルーム。ユニ
ゾンビ、そして、『灰流うらら』がいる」

「何!？」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンが叫ぶ。

墓地の三体のモンスターが、悪魔の竜に力を与えた。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK3500↓5000

「バトルフェイズ!スカーレット・ノヴァ・ドラゴンで、天空神騎士
ロードパーシアスを攻撃!」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンが、蒼い炎を噴き上げて、ロード
パーシアスを爆散する。

それと同時に、浩太に直撃した。

「うがあああー!」

浩太 LP2500↓0

そして遊月のフィールドに戻ってきたスカーレット・ノヴァ・ドラ
ゴン。

その体を煌めかせて、浩太のデッキを一時的に支配した。

「な……俺のカードが!」

浩太のデッキから、『神の居城―ヴァルハラ』三枚と、『灰流うらら』
が抜かれて、遊月のほうに移動する。

根こそぎ力を奪って進化したスカーレット・ノヴァ・ドラゴン。

その傲慢な力は、当然、進化した先でも当然持っている。

「さて、目的のカードは返してもらった」

「……」

レイエスが遊月をにらむが、それにこたえるかのように、スカー
レット・ノヴァ・ドラゴンも唸り声をあげる。

「……いいだろう」

レイエスは遊月に背を向けた。

分が悪いと思ったかどうかは分からない。

だが少なくとも、遊月と戦う場合、それ相応に覚悟する必要があると考えたようだ。

「なあ、おい、俺のあのカードは……」

「自分で奪い返せ。俺は知らん」

レイエスは浩太の言い分など気にする様子はなく、その場を去って行った。

「く、くっそおおおおおー！」

膝から崩れ落ちる浩太。

プロデュエリストは、あくまでも実力で語るしかない。

負けた後でも可能性があれば、それを見た誰かが拾ってくれるが、そう都合いいものではないのだ。

だからこそ……。

(酔狂と言うか、蓼食う虫も好き好きというか……)

遊月はポケットからカードをとりだす。

それは、『天空騎士パーシアス』のカードだ。

「まあ、本人が行きたいと言うのならいいか」

浩太に向かってパーシアスのカードを投げると、遊月もその場を離れていった。

★

「はあ……」

魂の抜けたような声が響く。

朝、学校に通う綾羽の口から漏れたものだ。

「私って……私自身に価値なんてなかったのかな」

活力のない瞳で、そんなことを呟いている。

当然、彼女がそう考えるのには理由がある。

第一、理由もなくそんなことを考える人などいないだろうが。

綾羽の現状を一言でまとめるならば、『散々』というものだろう。

(嘘でしょ……)

それが、実技授業で綾羽が内心でつぶやいたことだった。

あの夜、レイエスと名乗る少年に襲撃されてから、意識を失った綾羽。

意識を取り戻したのは午前三時ごろ。

さすがにその時間では、自分の状態を正確に伝えるものは起きていなかったし、わからないことだらけだった。

ただ、自分のデツキを見たとき、無くなっている四枚のカードを認識して、全身が凍るかと思った。

自分が持っているありとあらゆる秘密。

それらは、そのカードたちに集約されているといっても過言ではない。

だが、まだ希望はあった。

確かに奪われはしたが、同名カードであれば今までは問題なかったからだ。

あの夜は意識を取り戻さなかったので、当然訓練はなかった。

なお、彼女の両親は綾羽に皆勤賞をとるように言いつけているので、別に体調そのものに異常はないので学校に来ることになった。

だが、いつもは最低限あるはずの活力がない。

極めつけは実技授業だ。

綾羽のデツキは、『ヘカテリス』と『神の居城―ヴァルハラ』が三枚ずつ入った、実質『ヴァルハラ六枚体制』のデツキである。

さらに、デツキの枚数も四十枚ジャストで、できる限りヴァルハラを手札に引き込めるようになっていた。

最近は一ツアルトという、ヴァルハラから開始できる展開札も手に入ったこともあり、レベル8の光属性天使族に定めたとという経緯がある。

そのため、手札交換カードはそれなりにあるのだが、最上級モンスターがそれ相応の比率を占めるデツキだ。

そして実技授業のデュエル。

ヘカテリスもヴァルハラも、手札に来なかった。

もちろん、下級モンスターが全く入っていないわけではないので、フィールドに何も出さずにターンを終えるということにはなかった。

しかし、このままでは良い方向には進まない。

そうなるだけの理由が、綾羽にはある。

(お母さんもお父さんも、私を見ていたわけじゃないんだ……)

彼女がそう考えるのは、家に帰ってからのことだ。

実際、帰りたとは思わなかった。

しかし、彼女がつけているデュエルディスクは、否応なしにその位置情報を実家に伝え続けている。

門限を超えていない限り行き先に制限はないが、門限に近づけば必ず車が来て戻される。

そうして訓練が始まるわけだ。

だがしかし、あの『施設』に入つてすぐに分かった。

もう自分には、あの力など宿っていないのだ。ということ。

そうなったときの周りの反応は驚愕だった。

そして事情聴取が始まった。しかも嘘発見器付きで。

レイエスと呼ばれる男に襲われたこと。

起きた時から活力がないこと。

そして実技授業で、来てほしかったあのカードたちが来なかったこと。

それを聞いた研究者たちは、さまざまな機械を使つて綾羽を調べたが、綾羽からはその力の反応はなかった。

しかし、心の片隅では思っていたのだ。

ある意味で力と義務から解放された、と考えれば、これからは自由に生きていけるのではないかと。

だが、彼女が抱えていた力は、彼女本人だけの問題ではすでない。

施設が撤退するという話が聞こえてきたりもするが、それと同時に、大束家に支払われていた多額の支援金がなくなるかもしれないということ。

それに加えて、綾羽が失った力だが、そもそも『このような形で失う』と思っていなかった』こともあり、研究者側の想定を超えている。そのため、引き続き訓練はいつも通りで、観察に関しては日常より増えるかもしれない。という話もあった。

だが、まだ耐えることはできる。

どうせ、最低限の自由しかないのはいつものこと。

だから、あきらめることはできる。
しかし……。

『あの子の力がなくなつたから、支援金が払われなくなるかもしれないって？なら、もう仕方がないね。あの子には、別の『ISD』を抱えているところに、婚約でも何でもいいから行ってもらいましょ』『そうだな。顔と体はいいからな。それに、婚約してそのまま結婚まで行けば、こっちにも支援金が入るだろうし』

偶然聞こえてきた両親の声で、綾羽の中で、いろいろなものが崩れた。

「はあ……」

活力など宿らない。

他の術を何も知らない綾羽は、何を見ればいいのかなどわからない。
い。

脱力したまま教室に入った。

珍しく誰もいない。

いつもは自分の身だしなみくらいは確認するだろうし、グッズのカードも調節するだろう。

だが、そんなこともせず、ただ、学校に来た。

「……あれ？」

机の中に何かがある。

取り出してみた。

「え？」

『神の居城―ヴァルハラ』が三枚と、『灰流うらら』だ。
「！」

それだけではない。

うらがが急に出現して、綾羽に飛びついてきた。

「え、ちよつと……」

「くく」

戸惑う綾羽にかまわず、気持ちよさそうに抱き着くうらら。

「い、いったいどうして」

「ゾンビお兄ちゃんが助けてくれたの！」

誰だソイツ。

「もしかして……遊月君？」

「そうなのー！」

当てちゃダメだろ。いいのかそれで。

ていうかうららちゃん。だったら何で最初から『遊月さん』とかそう言う呼び方しないの？

「ねえ、今どこにいるの？」

「上にいるのー！」

うららが真上を指さす。

ここは二階だが、仮に自分の同級生に用事があるとすれば……。

そこまで考えた後、綾羽は教室を飛び出して走り始めた。

階段を駆け上がって、一気に屋上まで走り抜ける。

ドアを開けはなつて、あたりを見渡した。

「あ……」

ベンチで本を呼んでいる遊月がいた。

相変わらず、腐ったような瞳で、ドクロのネックレスを付けて、本にカバーを付けて何を読んでいるのかわからないようにしながら、いつも通りの姿で読んでいる。

「……なるほど、うららと話せるようになったわけか」

チラッと綾羽を見た遊月。

そのそばで微笑むうららを見て、なぜ自分にたどり着いたのかを理解した。

綾羽は走って行って、遊月の真正面に立つ。

「ねえ……遊月君がとり返してくれたの？」

「否定しても意味が無いだろうからな。肯定しておこう」

綾羽のカードをとり返したことそのものに興味はもうないのか、遊月は本を読みながら応えている。

「あ、ありがとう。とり返してくれて」

「……別にいい」

遊月はそっけなく言った。

だが、言葉は続く。

「気が付いていないようだが、泣いてるんだから、取り繕ってもすぐに分かるぞ」

「え……」

綾羽は気が付いていないようだが、泣いていた。

自分の頬に触れて、ようやくわかったくらいである。

「うまく笑うのは得意みたいだが、こんな時でも素直になれないのはどうかした方がいいな」

「……っ！」

一気に顔が赤くなる綾羽。

遊月は変わらず、呆れたような様子で本を読み続けている。

「わ、私。この力がなくなってから、なんにもできなくて……お母さんもお父さんも、私のことなんて何も見てなくて……」

「……で？」

「このままだと、望んでない人と結ばれるかもしれない……」

「ふーん」

「でも、遊月君が助けてくれて……」

「……はあ」

遊月は本を閉じて、ベンチから立ち上がった。

綾羽を真正面から見つめて、呆れ気味に言う。

「別に何を言おうとかまわれないが、自分が最初に言った『ありがとう』の価値を高めるためにしゃべってるようにしか聞こえないぞ」

「え？」

「最初に『ありがとう』って言ったんだ。それに対して、私は『別にいい』と言ったんだ。私が何か報酬を求めるのならともかく、そう言うわけじゃない。これから何をしたいのかなんてこれからゆっくり考えればいいだろ。別に今が最後でもう会えなくなるわけじゃあるまいし」

「で、でも……」

何を言いたいのか決まっていない。

だが、粘ろうとしている。

「さつきまで辛かった。でももう今は大丈夫なんだろう？ならもうこの

話は終わりだ。言ったはずだ。『取り繕ってもわかる』と。感謝するのは分かったから、それで十分」

綾羽から視線を外して、屋上から去ろうとする遊月。

だが、一つだけ言っておくことがあったのか、振り向いた。

「それと、大東が持つてる力なんてどうでもよくて、大東自身を見ているやつはたくさんいる。自分のファンクラブがあることはさすがに知ってるだろ」

「え……あ、うん。聞いたことはあるけど……」

さすがにそれくらいは認識しているようだ。

『力』なんてものはもつと強い『力』に叩きつぶされるだけで脆いものだ。脆くなくとも、打算的なつながりしか生まない。ファンクラブができるってことは、大東の中に、惚れるだけの何かがあるってことだ。それが何なのかは、笑顔で傍にいてくれる奴がいるうちに気が付いた方がいいぞ」

言いたいことは全て言ったのだろう。遊月は改めて背を向けて、屋上を後にしようとする。

だが、綾羽は最後にまだ、言いたいことがあった。

「あ、あの。遊月君！」

「……なんだ？」

まだあるのか？と言いたそうな表情を隠そうともしない遊月。

「そ、その……つきあってる人って、いるの？」

「君次第だ」

即答すると、興味がなくなつたのかそのまま歩き始める遊月。

綾羽は言われたことを認識して、噛みしめて、そして――

「えっ……ちよ、それってどういう意味!？」

遊月を追いかけながら問い詰めようとする綾羽。

「ん？……フフッ」

余裕のある笑みを浮かべながら止まることなく歩く遊月。

そんな遊月に思うところは当然あるので、顔を真っ赤にする綾羽。

結局はぐらかされたままで、時間制限が来てしまうのだった。

罪な男である。

第八話

何度も言うことになると思うが、夜というのは不思議な時間である。

何かを企むのに適しているが、警備するものが少ない時間でもあるからだ。

少人数で警備する必要があるのに、なぜか監視カメラの映像を確認できる部屋よりも、実際に人を配置して警備させることを選ぶのだからなんともいえない。

そしてもちろんわざわざこんな話をするのにも理由はある。

「一刻もやつを捉えろ！今ここで『F-43』を奪われるわけにはいかん！」

軍服のようなものを着た中年男性が叫ぶ。

彼のそばには、後部が大破した車が存在する。

何かを運んでいたが、そのタイミングで襲撃された。というのが現状であることは一目瞭然だ。

そして、彼が指差す方向には、金色のコートを着た少年がバイクに乗って逃走している。

……こう言ってはなんだが、コソコソと隠れて行動するはずの任務だと思われる中でこのファッションはなかなか常識外れだろう。普通は黒か、暗色で作られたものを使用するはずだが、少年はそのあたりの事情はなかったようだ。

「ふう、『敵が想定していない攻撃力をぶつけければ簡単に崩れる』……か。ギルが言っていたがそのとおりだな。なんでこんなことを考えたと強いのにあんなにデュエルが弱いのか……」

少年、レイエスはそんなことをつぶやきながらバイクの速度を上げる。

当然だが、速度制限などブツちぎっている。というかこの状況で守るやつはいない。

後部に積んだアタッシユケースをチラッと見て、また前を向いた。

「もう少しで、ギルが言っていたポイントに……！」

レイエスは驚愕する。

自分が走っているのは明らかに公道なのに、右隣に線路ができていくからだ。

「リアルソリッドビジョン……まさか」

後ろを見るレイエス。

なんと後ろからは、『弾丸特急ロケット・ライナー』が文字通り走ってきていた。

「さすがにDホイールでは無理だな」

特急に追いつけるわけがない。

レイエスがよく見ると、バレット・ライナーの上には、一人の少女が乗っていた。

先程の中年男性が着ていたような軍服の女性用のものを着て、長い銀髪をなびかせている。

幼い印象があるものの、ここまでぶっ飛んだことをするのだから見た目通りの精神ではないのだろう。

「チツ」

レイエスは乗っているDホイールに、『ラーの翼神竜―不死鳥』のカードをおいた。

カードから閃光が天に向かって放たれると、そこから爆炎を身に纏う不死鳥が出現する。

「やれっ！ゴッドフェニックス！」

レイエスが命令すると、レイエスの体からエネルギーが不死鳥に送られる。

それを受け取った不死鳥はまっすぐ、バレット・ライナーに向かって突撃した。

「やったか……あ」

盛大にフラグを立てたことに気がついたレイエス。

まさしくそのとおりで、ロケット・ライナーは直進してくる。

何やら波紋が広がっているようにも見える。

『マグネット・フォース』か。なかなかやるな
敵ながらあっぱれである。

「ならば、ゴッドフェニックス。次は攻撃だ」
突撃する不死鳥。

だがその瞬間、バレット・ライナーの速度が倍になった。

「速度が倍に……全体が赤くなっていることを考えると『リミッター解除』か」

さすがにこれは無理だ。

ロケット・ライナーに突撃した不死鳥が逆にはねられて消えていく。

不死鳥に押し負けないとは、なかなか精霊としても『強度』が高い。「はつきり言って相性が悪いな」

舌打ちするレイエス。

除去が不死鳥だよりなので、効果を受け付けられないのであれば攻撃するしかない。

ただし、これは対象に取れないオベリスクにも言えるが、効果を受けないというのは強化も出来ないとも取れるので、なかなか突破しにくいのだ。

少女がデュエルディスクを向けてくる。

「この状態でデュエルするつもりか？」

そういうわけではないらしい。

デュエルディスクからアンカーが射出され、Dホイールの後部に積んでいるアタッシュケースに直撃した。

レイエスが反応するより早く、アンカーが巻き取られる。

「……仕方がない」

レイエスが右手を上げると、そこにデジタルデータ式のカードが出現する。

それをケースに向かって投げて当てた。

カードはすぐにケースの中に入っていき、見えなくなる。

「あのウィルスを入れることが本来の目的だ。入れずに奪うのがもっと良かったがな」

その時、ヘルメットに通信音声がかえってくる。

『レイエス様！次の角を右に曲がってください！ジャミングトレー

ラーを用意しています！」

ギルの声だ。

「わかった。すぐに行く」

ギルは曲がり角を右に曲がった。

すると、後部が開いているトレーラーが見えた。

それに飛び込むと、自動で扉が閉まる。

そばにあったパソコンを見ると、ロケット・ライナーがなんと角を曲がってきたが、こちらのことを発見出来ていないようだ。

パソコンを操作していろいろ確認するが、このあたりはトレーラーをはじめとした重機が並ぶ場所。

似たようなトレーラーもあるので、良いカモフラージュになっている。

さらに言えば、この近辺にある監視カメラはハッキング済み。

少女がレイエスたちを見つけないことはないだろう。

ジャミングしているのではれないだろうし。

数分後、少女のデュエルディスクから通信が行ったのか、質の良い軍服のようなものを着た中年男性が出てきた。

中年男性は少女が確保していたアタッシェケースを奪うようにとると、状況も含めて、アタッシェケースを確認しているようだ。

ただし、その会話の雰囲気は良くない。

中年男性がきよろきよろとしているが、レイエスたちのトレーラーに気が付いている様子はない。

少女が何か言っているようだが、男性はほぼ無視している。

そして、何か癪に障るようなことを言ったのか、怒鳴り始めた。

そのまま、レイエスたちがいる路地に背を向ける。

「……？」

そのまま少女も帰ると思っていたが、なんと少女は、レイエスたちがいるトレーラーにまっすぐ歩いてきた。

何か不審なものを感じたのか、それとも……。

レイエスがDホイールから降りてデュエルディスクを構えたが、その前に、男性が怒鳴ったようだ。

少女は男性についていき、二人とも見えなくなった。
レイエスは運転席に行く。

すると、若干ほっとしたような雰囲気のリルがいた。

「……リル。見えていたか？」

「レイエス様。はい、私も見ていました。あまり良い雰囲気ではない様子でしたが……」

「まあ、俺達が気にするところではないがな」

「はい……ただ、レイエス様のDホールのカメラで確認していましたが、なかなか天晴な少女ですね」

「ああ。実際のデュエルでは無いとはいえ、俺がおし負けとは思わなかった」

実際のデュエルになっていればまた違う結果になったと思うが、レイエスとしてはそれ相応に驚いていた。

「昇進とはいかなくとも昇格はあるか？本来なら」

「そうですね。頭の回転は速いようですが上に立つとしては向かないでしょう。昇格はありそうです。本来ならですが」

「……フン。まあいい。最善の三番目か四番目と言ったところだが、これ以上は欲張りだということにしておこうか。帰るぞ」

「はい。レイエス様」

リルとレイエスを乗せたトレーラーは発進した。

★

「ねえ遊月君。ちょっと相談があるんだけど……」

「なんだ？」

「ちよつと、友達に困ってる子がいて、遊月君も一緒に助けてほしいの」

「……内容によるぞ。悪いことをするわけじゃなさそうだから別にかまわない」

「なら大丈夫だよ！」

遊月は綾羽の目を見る。

目は嘘を言っていないようだ。

「……いいだろう」

「ありがとう！」

面倒な約束をしたと遊月は内心で思ったものだが、約束したからには仕方がないということにした。

そして綾羽が遊月から離れると、今度は別方向から英明がこそこそと近づいてきた。

「遊月」

「なんだ英明。そんな血の涙を流しそうな顔をして」

「当然だ。なんでお前、綾羽ちゃんとあんな楽しそうに話をしてたんだ」

「楽しそうに？」

「……いや、お前の表情は全然変わってなかったな。だが、綾羽ちゃんのおんなにもじもじした表情を俺は初めて見るぞ。はつきり言っただけで——」

「それ以上言わないほうがいいと思うぞ」

「おっと、俺とされたことが」

口を手で押さえる英明。

ただ、遊月は『俺とされたことが』という言葉に対してすごく今更感を感じた。

「で、どういうことなんだ？」

遊月は経緯を説明した。

もちろん、綾羽にも遊月にも話せない部分は大まかに端折って、普段から見ているならわかっているだろうことは素直に言う。という感じで、言葉を選びながらである。

「なるほど」

それを聞いて、英明はうなずいた。

「理解した。そういうことなら俺は理解した」

「理解するんだな」

「いったはずだ。俺たち親衛隊ファンククラブは、綾羽ちゃんの幸せを願っている」と。

綾羽ちゃんがお前を選んだというのなら、ぐちぐち言いながらも静かに血の涙を流しながら見守るぞ」

「辞書を引け」

ファンクラブとしての矜持と私情がごちゃ混ぜになって変な化学反応が起きている。

人間は思ったことを口に出す場合、自分が無意識に作り出す翻訳システムに放り込んでから話すものだが、今の英明はそれがズタズタになっていようだ。

「まあ、お前の内心など私にとってはどうでもいいことだ」

「もうそれでいいーや。それに、あんな乙女の顔をする綾羽ちゃんが見られるだけで俺はいいんだ」

「……」

そのファンクラブと呼ばれるものが実際に同志で集まるほどのものであることを前提にして、英明がどの立ち位置にいるのかはわからない。

のだが、もし英明のこれが当然だとするなら、もしかしたらすごい組織なのではないかと考えてしまった。

「ところで、私は思うことがある」

「なんだ？」

「ワンタールキルには二種類あるということだ」

「……ごめん、わからない」

「分けるとすれば『8000を削りきる盤面を作り上げること』と、『無限ループ』だ」

「ああ。なるほどね」

しっかりと終着点を設けることで削りきる構築なのか、ちまちまと8000を削るのか。

要するにそういうことだ。

「ただ、ライフを削りきる盤面って……『結果的にそうなった』っていう感じが強い気がする」

「まあそれもあるから、今回は無限ループのほうだが、意外とあるんだよな」

「『マテリアルワンキル』とかその筆頭だもんな。大体グスタフでブツパするんだが……なんでエリクシーラーがレベル10なんだろうな」
「知らん。ただ、それらの規制が薄いのは、単に『チェーン・マテリア

ル』のサーチができないということがある」

「だな。大体ループに入れそうなカードは規制される」

「あとあれだな。『六武の門』だったか？」

「あー……ていうかあれってワンキルまで行けるのか？」

「比較的簡単に行けるぞ」

「え、そうか？」

英明が首をかしげる。

「ミズホとシナイがいるだろ？」

「ああ」

「ミズホは自身以外の六武衆をリリースしてフィールドのカードを破壊。シナイはリリースされたときに、自身以外の六武をサルベージできるとだ」

「ふむふむ」

「だから、ミズホの効果でシナイをリリースして、ミズホ自身を破壊することで、墓地に行った段階で、シナイの効果が発動してミズホを回収できる」

「……」

「で、六武の門があればシナイも回収できるわけだ」

「そういや門って墓地からのサルベージもできるのか、サーチのほうしか気にしてなかった」

「そういう人たまにいるけどな。まあそれはそれとして、あとはすでにフィールドにミズホかシナイがあればこのループが開始する。出せないという意味ないからな」

「なるほど」

「で、軍大將がいれば、リンク先に六武衆が特殊召喚されるたびにカウンターをためることができ、軍大將はカウンター一個につき100上がるから、ループすればするほど攻撃力が上がっていく」

「……長くね？」

「長いぞ」

やることは簡単だ。

「私の知り合いはこれを『浮気心中ループ』って言ってたな。嫁さんに

殴られてたが」

「ひでえな」

「ああ。そして、これは言い換えるなら『六武衆でカウンターが無限にある』ともいえる」

「やべえな」

何でもできると言っているのと同じである。

ちなみに、ファイアオールが現役であれば、フウマ、キザン、ダイガスタ・エメラル、トロイメアたちと組み合わせ、『無限トリシューラ』が可能だ。

最強の守護竜……どこが守護なのだろうか。

とはいえ、ロンゴミアントとゴシップ・シャドーを並べることができるとレベルと種族なので、そちらを狙うのが現実的か。

「さて、ワンターシキルの話をしていただったな」

「既にお腹いっぱいだ」

「なるほど、ならばこのあたりで止めておこうか」

すでにお腹一杯の様子。

遊月は頷いて、そこからは単なる雑談に入ることにした。

★

放課後に会いに行くと言っていたが、当然視線は感じる。

よく『男がするチラ見はガン見と一緒に』と言われるが、それは逆でも同じのようだ。

だいたい男は鈍いので気が付かないというだけの話であって、女の方から見られていると気が付けばわかるのである。

しかし、放課後に会うということは間違いではない。

「遊月君。こっちこっちー」

大きく手を振って遊月を呼ぶ大東。

近くの喫茶店だった。

大東の隣には、中等部二年のネクタイを付けた女子生徒が座っていた。

銀髪をまつすぐおろしており、おどおどしている顔立ち。

大東ほどではないが胸は大きく、それ相応に自己主張している。

中等部二年としても身長は低い方だろう。

どうやら、『困っている子』は彼女で間違いなさそうだ。

遊月は席に座る。

「高等部一年の不死原遊月だ。相談してほしいと言われてきたんだが、君でいいのかわ？」

「あ。はい！私は江藤香苗えとうかなえといいます。その、相談に乗ってくれてありがとうございます」

「香苗ちゃん。遊月君は優しいから緊張しなくて大丈夫だよ」

フオローしている大束だが、遊月から見ると、『緊張しているのがデフォルトなのではないか』と言うのが遊月から見た江藤の印象である。

「……それで、相談したいということというのは一体何だ？」

「あ、はい。私、『デュエルガードクラスター』に所属しているんですけど……」

デュエルガードクラスター。

略称は『DGC』

基本的な部分を言うと『デュエル界における警察組織に臨時提供される人材の保持・育成を行う組織』のことである。

デュエル界における警察組織というのは言いかえるなら『セキュリティ』だ。

ただし、『セキュリティ』はそもそもデュエル界でそれぞれ独立していた警察組織を束ねたものなので、セキュリティの設立以前に存在していたDGCの業務はそう規定されている。

ちなみに、『セキュリティに臨時提供される人材』と表記しないのは、『セキュリティが警察組織ではなくなった場合に提供権利を放棄するため』である。

ちなみに、なぜ『政界』には既に『警察』が存在しているのに、『デュエル界』にそのような組織が存在するのかと言うと、一部の地域では、『政界』よりも『デュエル界』の力の方が大きくなるので、その場合に警察組織が入ることができないという状況の解決のため、デュエル界そのものが警察組織の保有権限を持っているのだ。

なお、『セキュリティ』と『DGC』の最も大きな違いを言えば、『セキュリティ』は特定の部署につけば、変わらない限りその業務に従事するのだが、DGCはあくまでも提供される人材であり、『教育が存在し続ける』というものである。

もちろん、学生向けのもの、社会人向けの施設は分けられているが、社会人になったからと言って勉強する必要がないというわけではない。それがDGCだ。

「……訓練生だよな」

「はい。まだ訓練生です」

基本的に学生の場合は、『訓練生』扱いであり、責任も権限も少なくなる。

時間がある限り、訓練施設に通っているはずだ。

ちなみに、DGCの入隊に年齢制限は存在しないので、大人でも単位が足りなければ訓練生である。

「……何かクリアできない課題があるとか？」

得に情報がない場合、遊月に思い浮かぶのはその程度である。

「実は……」

江藤がポツリポツリと話し始める。

箇条書きするところだ。

①：昨日の夕方から、訓練生向けに設定されている巡回コースを回っていた。

②：その時は何も起こらなかったのだが、夜になった時に爆発音が聞こえた。

③：駆けつけてみると、破損した護送車と、速度制限を守っていないDホイールを確認。

④：DGCの訓練生でも特定状況下では公道での精霊の具現化はできるのですが、精霊を具現化させて追った。

⑤：攻防を繰り返したうえで、奪われたであろうアタッシュケースをとり返したが、犯人を見失った。

⑥：精霊の具現化と言う特例を行使したので、その報告書類を書いていた時、監査から呼ばれた。

⑦・アタツシユケースには既にウイルスが入っており、復旧不可能。この責任をどうとるのかと追及された。

そこまで聞いた時点で、遊月はなんとなく察した。というより、結果が見えた。

「……で、責任が取れない場合はどうするって言ってきたんだ？」

「私が持っている精霊カードである『弾丸特急バレット・ライナー』を没収したうえで、除隊だそうです。それに加えて、罰金もかなり出ると言われました」

「なるほどねえ……」

いくつか思うところはある。

が、遊月はチラツと大束を見る。

大束は目を逸らした。

おそらく、大束も江藤から同じ話を聞いたのだろう。

そしてその上で、その犯人の特徴で、誰なのかが分かってしまった。

大束家として動けば何となる状況かもしれない。

しかし、敵が強すぎて自分では根本的な解決ができない可能性が非常に高い。

なので、遊月を呼ぶことにした。ということだろう。

「大切なカードなんです。DGCにいられなくなってもいいです。でも、このカードだけは、本当に大切なものなんです。遊月先輩。お願いします。助けてください！」

目に涙を浮かべて頼んでくる江藤。

遊月はそれを見て溜息を吐いた。

「もともと、『助けてやってくれ』と頼まれてここに来たんだ。協力はするさ」

「ありがとうございますー！」

座ったままだが、ガバツと頭を下げてくる江藤。

何かと健気な雰囲気である。

「あ、あの、遊月君。一応、香苗ちゃんの言葉に嘘はないから……」

「そこで変なフォローをするな。『取り繕わなくてもわかる』からな」
その言葉に大束はピクリと体が反応したが、そこからは何も言わな

くなつた。

「……で、具体的にどうするかなんだが、最善は何だと思う?」

「え?」

二人そろってすつとぼけたような声を出した。

「そもそもおかしい部分があるんだよな。一応言っておくが、DGCが『不可能』って言葉を、当日に使うことはないんだぞ」「え、そうなの?」

「そもそも『解析』に類する部署がDGCには存在しない。それがあるのは『セキュリティ』の方だ」「要するに……」

「江藤は、精霊カードを持っていることをすでに知られているんだろう。上層部が狙ってるんじゃないか?」

「そんな……」

「精霊カードが貴重。」

「これはまぎれもない事実である。」

「ところで、江藤はここに至るまでの段階で、何かのサインとして自分の名前を書いたり、ハンコを押したりしたのか?」

「い、いえ、それはまだやってないんですけど」

「なるほど」

「それならまだ何とかなる。」

「遊月君。DGCの上層部は、香苗ちゃんの精霊カードを狙ってるんでしょ? 最悪、除隊は無しになっても、精霊カードだけ取られちゃうんじゃない……」

「可能性は十分にある。が、実をいうとまだ時間はある。まずは乗り込んでみるか」

「え?」

「遊月は黒い笑みを浮かべた。」

「DGCの施設には、一般開放されているエリアがある。そこなら、所属していない私と大束も入ることが可能だ」

「そこまでやって大丈夫なの?」

「まあな」

遊月は不敵な……言い換えれば、頼りになりそうな笑みを浮かべて言った。

「私はね。人から何かを奪っておきながら『正義を掲げるいい人』でありたいなんて馬鹿なことをいうやつに、それがどれほど惨めなことなのかを教えに行くだけだ」

欲は少ないといえる遊月。

しかし、そんな彼にも、『面白くない』と思うことはある。それだけのことである。

第九話

DGCの存在目的の多くは、『セキュリティ』への人材の臨時提供である。

これはすでに説明した。

そして、そのために訓練を積んでいるということになるのだが、それ専用の施設はなかなか大きい。

なお、『政界』に属しない警察組織のため、あくまでも法律上は民間組織に位置する。

「さて、ここがDGCの『アムネシア支部』だな」

遊月の前には、それ相応に大きな建物だ。

一つの巨大な高層ビルを使って運営されている。

そのうちの支部の一つだ。

「あの、本当に大丈夫なんですか？」

「もちろんだ。いざとなれば弱みを使って脅せばいい」

「遊月君。それはそれでどうなのかと私は思うんだけど……」

「安心しろ。泥臭いことをするのは私だ。というわけで入ろうか」

一般エリアが存在するので、そこに堂々と入っていく遊月。

中には軍服のような制服を着た者たちがいるのだが、当然、彼らとしても遊月が暴れない限り取り押さえる権利はない。

しかし、遊月たちに向けられる視線は鋭いものだ。

そもそもこの施設に入ってくるものはあまりいない。

あと、江藤に対して嫌悪感を感じているものが多いようだ。

「なるほど、そういう立ち位置ということか」

勘付いた遊月だが、それそのものに興味はなかった。

まっすぐ受付に移動する。

「本日はどのような用件でしょうか」

あくまでも事務的に接してくる女性職員。

だが、江藤を連れていくところを考えて、察しているようだ。

「ああ、江藤香苗に出た審査結果に対する再審査の請求についてだよ」
遊月の言葉を聞いた女性職員は一瞬顔をしかめたが、すぐに表情を

戻した。

「お引き取りください」

「それを聞く義務はないね。『再審査の請求を拒否できない』ってことはDGCの規定に書かれてるんだ。まさか外部対応を業務とする職員が知らないわけじゃないよな」

厳密には、『再審査を実際に行うかを判断する部署』に提出するということだ。

なお、その『再審査部署』の人間は、この支部の人間ではない。ここが重要。

実はこの辺りは完全に『申請主義』であり、知らないものが損をするだけのシステム。

もともと行政の場合はこういった部分が多いのだ。調べてみるといろいろメリットはある。

無駄な労力や経費を増やしたくないのはどこの組織も同じなのだ。これは学校で例えると分かりやすい。

金を貰うゆえにいろいろな教える学校でも、奨学金に関しては完全に申請主義の場合が多い。

学校というのは、『学生から金を集めたいと思っている企業』なのである。特に大学はそんな感じだ。

ちなみに、DGCの運営資金の多くはスポンサーからの支援金だ。しかし、訓練生であっても業務をしっかりとやれば実は給金が発生するシステムなのだ。

優秀な人材を囲んでおきたいと思うのは当然だろう。

「……少々お待ちください」

女性職員はそういつて奥に引っ込んでいった。

大東が不安そうに話しかけてくる。

「あの、遊月君。大丈夫なの？」

「大丈夫大丈夫。まだ規定通りのことしか言っていないよ」

「……まだ、ですか？」

江藤が首をかしげる。

「そう。まだだ。ここからが楽しいからよく見ておくといい」

遊月は腐った眼のまままで笑みを浮かべる。
正直怖い。

数分後。先ほどの女性職員が中年男性を連れて歩いてきた。
それを見た江藤が『あつ……』と声を漏らしているところを見ると、
江藤の話に出てきた護送指揮官なのだろう。

「場所を移すぞ。ついて来い」

一方的にそう言って、廊下を歩いていく男性。

遊月は楽しいことになりそうだと思いつつ、男性についていく。
慌てたように、大束と江藤もついてきた。

そして案内されたのは応接室だ。

普通の調度品ばかり置かれていて特徴があまりないのだが、それは
いいでしょう。

若干ほこりをかぶっている部分があるところを見ると、最近使つて
いないようだ。

とはいえ、そんなことはどうでもいい。

有月はあることを前提にして、言葉を選ぶことにした。

「座るといい」

「じゃあ遠慮なく」

中年男性が座る前に遊月は座った。

男性は少しだけ眉間にしわを寄せたが、すぐに戻す。

男性も座って、遊月を挟むように大束と江藤も座った。

「自己紹介をしておこうか。私は米倉義之よねくらよしゆき。このアムネシア支部の支
部長をしている」

まあ、それ相応の秘密のような案件だろうから、支部長かそれに近
いところが出てくるとは思っていた。

隣で大束が息をのんだのが分かったが、遊月は無視。

「どうも、アムネシアの高等部一年、不死原遊月だ」

「あ、私は大束綾羽です」

「……」

江藤はしゃべらない。

もちろん、彼女のことを向こうが知っていることはわかっている。

だがしかし……。

「江藤、声くらい出しておきな。どうせ録音されてるから、急にしゃべったら不自然になるぞ」

「えっ!？」

江藤が驚いている。

大東も絶句している。

米倉は啞然としている。

「私は江藤香苗です」

ボソツと江藤が言った。

「というわけで……今回は彼女に出た審査結果に対する再審査の請求に来たんですよ」

「理由を聞こうか。確かに君が言っていたように、再審査の請求を拒否することはできないが、だからと言ってどんな意見でも通していたら話にならない」

「当然ですね」

それに関しては同意する遊月。

(さて、どういじめてやろうかな)

内心で黒い笑みを浮かべる遊月。

「彼女から機密に触れない程度に事情は聴きましたが、彼女はまだ候補生ですよ。現場指揮官ではなく、なぜ彼女が責任を取ってるんですか?」

「違うな。責任を取るのは彼女だけではない。そのとき現場にいた私も、それ相応の責任を取る。その上で、本人も責任を取らなければならないのは当然のことだ」

そういう建前というわけだ。

おそらくここまでは江藤にも話しているのだろう。

「しかし規定では、ミスをした場合であっても嚴重注意ですよ。精神的にこれからの任務に支障をきたすというのなら除隊させることは可能ですが、罰金や没収などといったことはできないはずでは?」
「今回の護送任務で運んでいたものは貴重なものだ。嚴重注意では済ませられない」

「彼女はその時間は巡回中だった。護送任務そのものには関係ないんですよ」

「だが、かかわってしまった以上、巡回ルートから外れることに……」
「巡回にルートなんてありませんよ。あると錯覚してる人は多いと思いますけどね。重要な案件が発生した場合にかかわることも『巡回』の一部ですよ」

「はっ?」

ついにすつとぼけたような声を出す米倉。

「それに、ウイルスを本当に解除できないのか。ということもありませんよ。一回にこの施設の見取り図とかいろいろありましたけど、『解析』ができる施設はなかったはずですが?まだわからないはずですよね」

「それは……」

「それでは、もうちょっと根本的なことを言いたいでしょうか」

遊月はついに黒い笑みを浮かべていった。

「その事件が起こったのは昨日の夜ですよ。そして、江藤香苗に判決が出たというのなら、何が起こっているのが書類としてまとめられているわけです」

遊月は続ける。

「まだ本部の方に提出していませんか? DGCには、各支部の支部長が重要な案件の処理をしなければならぬ時のために、臨時の支部長クラスの人間がそれ相応の人数常備されているはずですが?」

「ば、バカなことを言うんじゃない!」

ついに叫んだ米倉。

はつきり言って遊月からすれば滑稽なものである。

「判決が出ているのなら、まず本部の方を通してあるわけですよ。なら、本部はすでにこの事件について知っているはず。あなたがそれに奔走していないのは、いったいどういうことなんでしょうね。だって重要な案件なんですよ? 支部長クラスの人間が実際に動くほどには」

「……」

「黙秘権は誰にでもあるので黙っていてもいいですけど……ひよつとして、今回の護送任務で運んでいたものは『精霊カード』関連の物だったから、江藤香苗が持つ精霊カードを没収することで、今回の失態をもみ消そうとしているんですか？」

「バカなことを言うんじゃない！私を誰だと思っているんだ！」

「先ほど自己紹介で聞きました。で、どうなんですか？」

「そんなはずがないだろう。証拠は何もない」

「そうですか。なら、もう帰りますよ」

「「え？」」

遊月の言い分に、三人が驚いたような声を出した。

そして実際に席を立つ遊月。

それに続く大束と江藤。

怪しいと思っているのだろうか。米倉もついてくる。

廊下を歩いて、ロビーを通過して、そして施設の外に出た。

「……本当に帰るのか？」

「今現時点では、ここに用はないので。あ、そうだ」

遊月は左腕につけていたデュエルディスクを外した。

「米倉さんでしたね。知ってます？実は市販されているデュエルディスクの中には、特殊な器具を使わないと開けられないタイプの錠前がついているものがあるんですよ」

遊月が裏面を見せると、実際にその錠前が見えた。

「……だからどうした」

「なので……このようなデュエルディスクの『録音』には、しっかりとした『法的証拠能力』があるんです。絶対の信頼があるわけですね」

「……何!？」

意味を理解した米倉が叫ぶ。

そして、遊月が持つデュエルディスクに手を伸ばした。

遊月はニタツと笑う。

「英明ー!」

遊月はデュエルディスクを思いっきり投げた。

そしてそこには、Dホイールに乗ってヘルメットをかぶって、発進

準備が完了した英明がいた。

「よっしゃー！ナイスコントロールだぜ。遊月！」

右手でがっしりと遊月のデュエルディスクをつかんで、それを荷台に放り込む英明。

遊月はグッドサインを送った。

英明もグッドサインを返してきて、そしてDホイールを発進させる。

「な……いったいどこに……」

「本部に決まってるでしょ。ここからそんなに遠くないし」

「糞っ！」

米倉があわてて支部の方に入っていく。

自分の息がかかって裏のことを頼める連中に連絡しに行ったのだろう。

「遊月君」

「なんだ？大束」

「なんていうか……すごいんだね」

「ちよっと調べてみればわかるんだよ。やってみれば簡単だろう？」

規定に関する知識、証拠能力の高い録音機器、そしてDホイールを乗りこなせて、それ相応にデュエルも強い友人。

最後はともかく、前二つは実は簡単なのだ。

「いやー。便利な世の中になったもんだ。証拠能力の高い録音機器なんて、昔は言うほどなかったし、それをデュエルディスクに搭載するなんて考えもしなかったからな」

感慨深そうな表情でそういう遊月。

「あ、あの……」

「どうしたんだ？」

「あ、ありがとうございます」

「礼を言うのは早いさ。さて、あとは勝手にいろいろ進むだろうからな」

Dホイールが発進していった方向を見て、遊月は微笑む。

(さてと、頼むぞ。英明)



「さーて、せっかくだ。飛ばしますかね」

あれから即座に高速道路に乗った英明はDホイールを走らせながらつぶやく。

「遊月には借りが多いから少しは返済しないと……ん？」

英明はモニターを確認する。

すると、後ろからDホイールによってDGCの制服を着た者たちがおって来ていた。

「うーん……十五人はいるなあ。さすがに全員相手すんのは面倒だ。仕方がない。法律ギリギリで暴れますか」

まあちよつとグレーも踏み込むけどな。と英明は遊月と似た笑みを浮かべる。

『そのDホイール！直ちに停止しろ！』

スピーカーから音声が聞こえてくる。

「ハッ！こっちは届け物を頼まれてんだ。別に違反なんておれは何もしてないからな。止まる理由なんてないんだよ！」

『速度制限違反だ！早く停止しろ！』

英明はちらつとメーターを見る。

限界ギリギリだった。

「おい！俺はギリギリで走ってたぞ！それでも追ってくるお前らは守ってねえじゃねえか！」

『我々は任務で動いている。速度制限を超えるのは当たり前だ！』

「あーはいはい。そうですか」

あーいえばこういう。というのはお互い様だと思いつつもDホイールを止めない英明。

『いいから早く止まりなさい！』

「誰が止まるか！捕まえられるもんならやってみやがれ！」

遊月からは『標的の息がかかったものが追ってくるかもしれないが、逆に言えば、息がかかったもの以外には連絡できない。なら、後ろから来る者たちだけを基本注意していれば問題はないぞ』という伝言を受け取っているのだから余裕である。

「さてと……そろそろだな」

モニターを見ながらそんなことをつぶやく英明。

その時、隊員が叫ぶ。

『ならば、貴様をデュエルで拘束するー！』

その時、英明のDホイールから、あの厄介な音が聞こえてきた。

『デュエルモードオン』

ちなみにオートパイロットではありません。

それと同時に、デュエルレーンに続く道が出現する。

「ちょうどいい。ここを通れば、本部への近道だ。挑発しなくても自分でやってくれるとは、最高だぜ！」

英明はそのレーンにDホイールを走らせる。

隊員たちも続いてきた。

ただし、ほかの隊員は入れないようになっている。

基本的に、レーンに入れるのはデュエルするものだけだ。

不用意な事故が起きにくいようにするためである。

セキュリティは入れるのだが、あくまでも臨時派遣であり、しかも勤務中ですらないDGCではこれを突破できない。

隊員のうちの一人がデュエルディスクを展開する。

「デュエルだ」

「ああ。やってやるぜ」

お互いにカードを五枚引く。

「ライディングデュエル・アクセラレーション！」

英明 LP8000

白井 LP8000

「どうやら隊員の名前は『白井^{しらい}』のようだ。

とはいえ、あまり関係のない話である。

「俺の先行！」

ターンライブがついたのは英明。

「俺は手札から、『E・HERO ソリッドマン』を召喚！」

E・HERO ソリッドマン ATK1300 ☆4

「効果発動。手札から『E・HERO エアーマン』を特殊召喚！」

E・HERO エアーマン ATK1000 ☆4

「そして、エアーマンの効果。デッキから『E・HERO シャドー・ミスト』をサーチ！」

弱くないカードばかりを使う英明。

「あらわれるろ！英雄たちが集うサーキット！」

あらわれるアローヘッド。

「アローヘッド確認！召喚条件はHERO二体。俺はエアーマンとソリッドマンを、リンクマーカーにセット！」

上下の位置に衝突する二人のHERO。

「英雄は今混じりて、驚異の爆走者となる。リンク召喚！リンク2

『X・HERO ワンダー・ドライバー』！」

X・HERO ワンダー・ドライバー ATK1900 LINK

2

「そして、ワンダー・ドライバーが存在することで、『HERO'S ボンド』を発動。手札のシャドー・ミストと、ブレイズマンを特殊召喚！それぞれの効果で、『マスク・チェンジ』と『置換融合』を手札に加える」

E・HERO シャドー・ミスト DFE1500 ☆4

E・HERO ブレイズマン ATK1200 ☆4

「そして、ブレイズマンの効果！デッキから『E・HERO バブルマン』を墓地に送って水属性に変更」

準備完了。

「さあ！ヒーローショーの時間だ！手札から『マスク・チェンジ』を発動。対象は水属性になってるブレイズマン！」

ブレイズマンが手を顔に当てると、彼を水の膜がつつんでいく。

「変身召喚！レベル6『M・HERO ヴェイパー』！」

出現するヴェイパー。

使用されているのがライディングデュエルであること、そして使用者の影響だろうか、なんとバイクに乗って登場である。

M・HERO ヴェイパー ATK2400 ☆6

「そして、ワンダー・ドライバーの効果発動。このカードのリンク先に

HEROが特殊召喚されたことで、今使った『マスク・チェンジ』を墓地からセットする。そして、さらに手札からカードをセット、これでターンエンドだ」

それ相応にいい盤面である。

さらに言えば、なぜヴェイパーはバイクに乗っているのか。

それに関しては英明のノリに合わせたということだろう。

「俺のターン。ドロー…このままメインフェイズ。手札から『切り込み隊長』を召喚し、さらに『切り込み隊長』を特殊召喚！」

切り込み隊長 ATK1300 ☆3

切り込み隊長 ATK1300 ☆3

現れる二人の隊長。

「え……切り込みロック?」

「偶然手札に来たただけだ。俺は隊長二体をリンクマーカーにセット。リンク2『聖騎士の追想 イゾルデ』！」

聖騎士の追想 イゾルデ ATK1600 LINK2

「リンク召喚成功時、デッキから『重装武者―ベン・ケイ』をサーチする」

「……」

あまりにも久しぶりなカード過ぎて絶句する英明。

「そして、イゾルデの効果発動。デッキから『最強の盾』『魔導師の力』『流星の弓―シール』『閃光の双剣―トライス』を墓地に送り、デッキから『荒野の女戦士』を特殊召喚！」

荒野の女戦士 ATK1100 ☆4

「さらに、『二重召喚』を発動。イゾルデと荒野の女戦士をリリース。『ギルフォード・ザ・レジエント』をアドバンス召喚！」

ギルフォード・ザ・レジエント ATK2600 ☆8

「効果発動。墓地の四枚の装備魔法を装備！」

ギルフォード・ザ・レジエント ATK2600↓4600↓6600↓5600↓5100

「これで、攻撃力5100で、直接攻撃を二回行うことができる」

英明はいろいろ思うことはあった。

そして、こうつぶやいた。

「なあ、『M・HERO』について調べたことってある？」

「フーン！ダーク・ロウにさえ気を配っていれば何も問題などない」
「そうだろうか。と英明は思う。」

「さあ、バトルフェイズだ！」

「なら、またまたヒーローショウだ。『マスク・チェンジ』を発動。対象は水属性のヴェイパーだ！」

ヴェイパーが手を仮面に添えると、さらに大きく水が吹き上がる。

「変身召喚！レベル8『M・HERO アシッド』！」

M・HERO アシッド ATK2600 ☆8

こちらのアシッドもバイクに乗って登場。

「アシッドの特殊召喚成功時、ワンダー・ドライバーの強制効果がチェーン1で、墓地の『マスク・チェンジ』をセット。チェーン2。アシッドの効果で、相手の魔法、罠を全て破壊し、相手モンスター全ての攻撃力を300ダウンさせる！」

「何!？」

ギルフォード・ザ・レジェンド ATK5100↓2600↓2300

「ぐ……だが、攻撃はできる！ギルフォード・ザ・レジェンドで、ワンダー・ドライバーを攻撃！」

「罠カード『ヒーローバリア』！攻撃を無効にする！」

「くそ……ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！」

英明はドロウしたカードをちらつと見ただけだった。

セットカードはないし、白井の表情からすれば、手札誘発も握っていないさそうである。

ならば、場にあるカードだけでどうにかなる。

「まずはこれだ。あらわれる！英雄たちが集うサーキット！」

あらわれるアローヘッド。

「アローヘッド確認！召喚条件はHERO二体以上。俺はリンク2のワンダー・ドライバーとシャドー・ミストを、リンクマーカーにセッ

ト！」

下と右下と左下。

「英雄たちが集う場所ですその力を束ね、恐怖を打破するものとして生まれ変われ！リンク召喚！リンク3『X・HERO ドレッドバスター』！」

X・HERO ドレッドバスター ATK2500 LINK3

「まず、墓地に送られたシャドー・ミストの効果で、デッキから『E・HERO エアーマン』をサーチ。さらに、ドレッドバスターとそのリンク先のHEROは、墓地のHEROの数×100アップする！」
ソリッドマン。エアーマン。ブレイズマン。バブルマン。ヴェイパー。シャドー・ミスト。ワンダー・ドライブの七体。

M・HERO アシッド ATK2600↓3300

X・HERO ドレッドバスター ATK2500↓3200

「さらに、手札からエアーマンを召喚！効果によって、『E・HERO オネステイ・ネオス』をサーチする」

E・HERO エアーマン ATK1800↓2500

「ば……馬鹿な……」

「バトルフェイズ！まずはドレッドバスターで、ギルフォード・ザ・レジェンドを攻撃、手札のオネステイ・ネオスの効果発動。攻撃力を2500ポイントアップさせる！」

ドレッドバスターの背中に羽が生えた。

そのまま、注射器を構えて突撃。

X・HERO ドレッドバスター ATK3200↓5700

「ぐあああああ！」

白井 LP8000↓4600

「エアーマンでダイレクトアタック！」

白井 LP4600↓2100

「さあ、そろそろヒーローシヨウは幕引きだ。M・HERO アシッドで、ダイレクトアタック！」

アシッドはなんとバイクから飛び上がって、白井に向かってとび蹴りをぶちかました。

「ぶへっ！」

しかも顔面に。

ただでさえひどい状況だったのにこの仕打ち。

なんというか、『泣きっ面に蹴り』である。

白井 LP 2100↓0

それはともかく、白井のDホイールは減速。

英明の勝利である。

「ミッシヨンクリア。さて、あとは届けるとしますか」

とりあえず障害がなくなった英明は、そのままDGCの本部を目指すのだった。

第十話

「というわけで、米倉さんはあっさり而降格処分されました」

次の日の朝。

遊月は大束と江藤と話していた。

「で、江藤は再審査が行われて、いろいろあつた罰は全部無効になって、昇格が決まった。簡単に言えば、スカウトがあればいつでも部隊に所属することができくらいいままで上がったみたいだな」

「よかったね。香苗ちゃん」

「はい！ありがとうございます！」

「一番重要な部分は英明がやってたからね。後で礼を言っておくといい。もしくは私から伝えよう」

「でも、遊月君の腹黒さがなかったら、ここまでうまく進んでないんじゃないっしょ？」

「そうだな。作戦の企画はすべて私だ」

いろいろ布石は考えながらやっていった。

「ただ、録音されている部屋に連れ込まれることは必要だったから、ストレートに切りかかったただだよ。で、あとはそれを指摘すればいい」

「でも、もしこつちが録音されていることがばれたら、どうするんですか？」

「その時は録音機器を予備の予備の予備くらいまで用意してたからどのみち問題ないんだなこれが」

まずそもそも、人間は自分がやった作戦を他人がやらないと思っっている人間だ。

そして、相手の作戦を見破ったとき、充実感と優越感に満たされて、それ以上は思考が及ばないのである。

「じゃあ、なんで私たちには説明してくれなかったの？」

「二人とも駆け引き弱そうだから」

否定できない大束と江藤。

「敵を欺くにはまず味方からとか、そういう感じじゃないの？」

「実はそういう感じですらない。とはいえ、あの時点で私たちをボデイチェックする権利はあいつらになかったからね」

ルールというものは、知っているものが得をする。

そして、武器にも防具にも道具にもなるのだ。

重要なのは、『自らが行使しようとする権利を妨害できる別の項目の権利を把握しておくこと』である。

もちろん、連鎖的に覚えることは増えるのだが、その作戦に確実性が増すのだ。

あとはメモしておけばそれを応用できる。

その積み重ねが『マニュアル』というものである。

ちなみに、『十分な声質をとった録音機器を、本部で一番中立性の高い部署に届ける』ということが、今回の作戦において重要なわけだが、これを達成するまでに遊月が考えていたルートの数は三ケタくらいある。

「とりあえず、今回の件に関して言えば、これで終わりだ」

うまくいってよかった。と思う反面。もうちよつと搾り取ることもできたのだが、そこまでやると江藤だけの問題ではなくなるのでやめておいた。

内心はちよつと不完全燃焼だが、それはいいとしよう。

「でも、その米倉さんは除隊されると思ってたけど、まだ残ってるんだね」

「あ、私も気になりました」

「あの人はあの組織の中でそれ相応に人脈を築いていたからな。今は米倉本人の権力が揺らいだからグラグラだけど、いきなり追放したら非情だって思われるからな」

本部のほうだが、長期間米倉を置いておくのかどうかはまだ遊月にもわからないが、一つ言えることはある。

『失態』 ↓ 『除隊』

『失態』 ↓ 『降格』 ↓ 『除隊』

いずれにせよ米倉はこのどちらかにならざるを得ないのだが、上だと周りからいろいろ言われるのである。

そして、下の場合は、米倉本人がもう言い訳できなくなっているといっても過言ではない。

というわけで、米倉はもう長くはいられません。

「でも、コネだけで生き残ってるっていうのがなんか納得いかないっていうか……」

「つながりが深いってことは、それだけ重要なんだよ。表に裏に、金を使いまくってるってことだからな。誰か一人が倒れたら全員が倒れる。負債を抱えまくった銀行が続いてる理由と同じだ」

「そうなのですか?」

「そうなんだよ」

世の中というのは複雑だ。

そして複雑だからこそ死角が生じる。

そんな時に限って視野の狭い人間が管理職になって、不平等な信賞必罰が横行する。

『上流』が『元上流』になる典型例である。

「まあでも、香苗ちゃんの問題ないってことは間違いないんだね」

「その通りだ。この件に関しては何も問題はない。じゃなければ昇格なんてできない」

「本当に良かったです……」

ほっとしている江藤。

「さて、そろそろ授業だ。そろそろ教室に行くでしょう」

というわけで、お開きである。

★

遊月は自炊する派である。

要するに、買い物くらいはする。

すでに買い物は終わった。

エコバックを持ってきたので、そちらに詰めているところである。

「あ、グルコサミン買うの忘れてた」

何歳だお前は。

「……まあいいか、まだ家にあるし」

ならなんで『買うの忘れた』なんていうのだ。

備蓄か？グルコサミンを備蓄しているのか？

「さてと……ん？」

視界の端に銀髪が映った。

見ると、江藤がカートをこちらに運んできた。

「……」

別に遊月は珍しいと思う程度で、わざわざ話しかけようとは思わない。

買い物に来るのは誰でも同じなのだから。

「あ、遊月さん」

なので、自分からは話しかけないが、相手から呼ばれたときはちゃんと反応する。

「江藤は……量からして買い溜めか？」

「そんな感じですね」

頷く江藤。

そこからは黙々とエコバックに入れていく。

「にしてもアレだな。この店、いろいろな意味でマーケティングやりすぎだといいたい」

「どういうことですか？」

「購買意欲と言うか、無駄なものを買わせるというか、そんな感じ」

「へえ……」

「焼き肉コーナーにある『余り安くはない焼き肉のタレ』とか、『流行を装っている山積みの商品』だとか、この店はそう言うのがいろいろあるんだよ。で、江藤。なんでそんな苦虫を噛み潰したような顔になってるんだ？」

聞く前に『そう言うことなんだな』と分かっていたので、あえてそれ以上は何も言わない遊月。

「あ、遊月さん。そのバック……」

江藤は遊月のバックの中のデュエルモンスターズのバックを見る。

表紙に『サマンティック・バック』と書かれていた。

「結構雑多なカードが入ってるバックだな。一部では『在庫処分』とまて言われるほどだ」

「そ、そうなんですか？」

「たまにめっちゃ古いフォーマットのカードも入ってるから、最近コレクターになり始めた。みたいな人には売れる時もあるけどな」

ちなみに、福引でうららを当てることができずに撃沈した英明が、レアカードのクリッターを当てたのはこのパックである。意外とバカにできない。

「試しに開けてみるか」

一パックだけ買ったのだ。

別にもつたいぶる必要は無いだろう。

ビリッとパックを破いた。

『ブロークン・ブローカー』

『サボウ・クローザー』

『シンクロ・ストライク』

『サイバー・ダイナソー』

『突風』

「……うーん……うううううううん」

遊月は唸った。

それ以外に何をしたらいいのかわからなかったからだ。

「なんといいいますか……意味不明ですね」

『サマンティック』だからな」

「私、『シンクロ・ストライク』以外は始めてみました」

「あ、そうなの？」

「はい」

カードを江藤に見せる遊月。

「……私のデッキに入らないですね」

「私も同じだ。うまく使えばスパイスになりそうなものはあるが、だからと言って狙うか？と言う話に発展する可能性が非常に高い」

まあ、もともとこんなわけが分からない方が面白いので、それはそれでいいのだが。

ちなみに、本来は何かしらの催し物での参加賞とか、特殊ルールを自作して使うときもある。

その時、出入り口で誰かが叫んでいるのが聞こえた。

「本日の特別企画！プロデュエリストをお呼びしています！制限時間は二時間！一組一回の挑戦で、勝利した方々には、様々なクーポンデータが入ったスペシャルデータをプレゼントします！プロデュエリストと戦えるチャンスです！タッグデュエルで受け付けていますので、気軽に参加してください！」

呼び込みの人だったようだ。

「あんなことやってるんですね……」

『この店はプロデュエリストを呼ぶことが出来ます』っていうアピールは定期的にしておいて損はないからな」

デュエル界ではそういうものは重要だ。

下手なコンパニオンを置いておくより意味がある。

「なんなら、私と江藤で出てみるか？」

「え？……でも……」

「安心しろ。君のデッキは大体わかってる。邪魔しないようにするから問題ない」

そう言いながら、右手で江藤の頭を撫でる遊月。

彼の外見年齢を考えると少々マズいかもしいれないが、案外違和感がない。

客が周りにいるのだが、遊月を軽蔑の視線で見るとはいない。

「~~~~♪」

そして、撫でられている江藤もされるがまま。

遊月が慣れているのか、江藤に耐性がないのか。

「というわけで、行くぞ」

「あ……」

パツと手を放して歩き始める遊月。

名残惜しそうに頭を触った後、江藤は遊月を追った。ちゃんと買い物かごをカートに入れて。

★

確率と言うものは人を裏切るものだが、偶然と言うものは時に粹なことをする。

「久しぶりだな。遊月」

「まさか、こんなところで会うとは……」

銀丈真尋。安江浩太。

いずれも、遊月が戦ったことがあるプロデュエリストだ。

銀丈真尋は、プロデュエリスト、スミス・サーバーと一緒に大束を狙っていたデュエリストだ。

そして、安江浩太は、レンタルだと思っていたヴァルハラを使って、パースiasデッキを使っていたデュエリストである。

「あの、遊月さん。知り合いなんですか？」

「まあ、知らない顔じゃないな……手加減してくれないかもしれない……」

いずれも、ちよつと容赦なく叩き潰した記憶がある。

はつきり言つて、『手を抜いてください』なんていつたら鼻で笑われるだろう。

「まあいずれにせよ。やることはデュエルだ」

「ああ。そうだな。はつきり言つてお前には感謝してるけど、手加減はしねえぜ」

「俺も同じだ。もう、あんな惨めな思いはしたくねえからな」

プロデュエリスト二人がデュエルディスクを構える。

「さて、やるか。死後の世界の広さを教えてやる」

「なんだかよく分かりませんが、私も頑張ります」

遊月と江藤もデュエルディスクを構えた。

「『デュエル！』」

遊月&香苗 LP8000

真尋&浩太 LP8000

先攻は……浩太だ。

「ん？俺の先攻か」

ちなみに、現在のデュエルでは『先攻だからと言って必ずしも有利ではない』という風潮のため、チャレンジャーだからと言って先攻。と言うものではない。

「俺は手札から『豊穡のアルテミス』を召喚！」

豊穰のアルテミス ATK1600

「さらに、ペンデュラムゾーンに『解放のアリアドネ』をセット。カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

悪くはない。

悪くはないが、『同胞の絆』くらいは引いておきたかったんだろうな。と言うのがよく分かる盤面だ。

どうやら『パーシアス』らしい風味はあるが、『パーミッション軸』になっているようだ。

『輪廻のパーシアス』という意味不明なカードがあるのだから気持ち分かる。

「私のターンです。ドロー！」

勢いよくカードを引く江藤。

そんな様子を見て、思わずプロデュエリスト二人もほっこり。

「私は手札からフィールド魔法『転回操車』を発動します」

そして顔面蒼白になった。

……気持ちは分かる。

「お嬢さん。それはダメだぜ。カウンター罫『輪廻のパーシアス』を発動。手札の『神の宣告』を見せることで、無効にして破壊する！」

「むむ……」

「そして、エクストラデッキから『天空神騎士ロードパーシアス』を特殊召喚する！アルテミスの効果で一枚ドローだ」

天空神騎士ロードパーシアス ATK2400 LINK3

そして現れるパーシアス。

とはいえ、『列車』の切り札とも言えるあの速攻魔法の存在もあるので、むやみにモンスターを増やしたくないという気持ちもあると思うが、それは気にしても仕方がない。

「私は手札から、二枚目の『転回操車』を発動します！」

「んなっ。二枚目?！」

浩太の表情がゆがんだ。

さすがにこれは……『ヤバイ』というより『嫌』である。

「手札から『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を妥協召喚

します」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト ATK0 ☆10

「この瞬間、『転回操車』の効果発動。デツキから『無頼特急バトレイン』を、レベル10にして特殊召喚します」

無頼特急バトレイン ATK1800 ☆10

「さらに、『重機貨列車デリックレーン』の効果を発動。このモンスターを特殊召喚します」

重機貨列車デリックレーン ATK1400 ☆10

「そして、『弾丸特急バレット・ライナー』を特殊召喚します！」

出現する精霊カード。

弾丸特急バレット・ライナー ATK3000 ☆10

並び立つレベル10モンスター。

展開操車のデメリットで、このターンの戦闘ダメージが0になってしまうが、戦闘破壊もバーンダメージも可能だ。

「出てきてください。重機を呼び起こすサーキット！」

現れるアローヘッド。

「召喚条件は、機械族二体。私はバトレインとバレット・ライナーを、リンクメーカーにセット！新たな設計図で、いぎ連結！リンク召喚！リンク2『機関重連アンガー・ナツクル』！」

機関重連アンガー・ナツクル ATK1500 LINK2

「そして、デリックレーンとナイト・エクスプレス・ナイトでオーバーレイ！全てを砕く大砲を装着し、いぎ発進！ランク10『超弩級砲塔列車グスタフ・マックス』」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK3000 ★10

現れる列車のエースカード。

こいつがいるせいで、レベル10を並べることが出来るデツキを相手にする際はデッドラインが2000になるというわけの分からないカードである。

「グスタフ・マックスの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使うことで、相手に2000ポイントのダメージを与えます！」

グスタフ・マックスが大砲を展開して、ぶちかました。

真尋&浩太 LP8000↓6000

「相変わらず恐ろしい効果だ……」

「さらに、オーバーレイユニットだったデリッククレーンの効果によって、豊穣のアルテミスを破壊します」

デリッククレーンがアルテミスに突撃していく。

あっけなく散った。

「そしてバトルフェイズ。私はグスタフ・マックスで、ロードパーシアスを攻撃！」

再度展開される大砲。

容赦なくロードパーシアスを粉砕する。

「ぐうう。これだから【列車】ってマゾイ」

「私はターンエンドです。このタイミングで、バレット・ライナーの効果でナイト・エクスプレス・ナイトを、バトレインの効果で、デリッククレーンをそれぞれ手札に加えて、ターンエンドです」

「なら、俺のターンだ。ドロー！」

次は真尋のターンだ。

前にデュエルした時は「ギャラクシー」だったが……。

「俺は、相手フィールドにエクストラデッキから特殊召喚されたモンスターがいて、自分フィールドにモンスターが存在しないことで、『光波双顎機』を特殊召喚！」

光波双顎機 ATK1600 ☆4

「さ……【サイファー】!?!」

「俺はもともとこつちだ。そして効果発動。手札を一枚捨てることで、デッキから『光波翼機』を特殊召喚！」

光波翼機 ATK1400 ☆4

「そして、墓地に送られた『光波異邦臣』の効果。デッキから『RUM―光波昇華』を手札に加える」

なかなか理想的な動きである。

「さらに、手札から『光波鏡騎士』を通常召喚！」

光波鏡騎士 ATK0 ☆4

「行くぞ。俺は『光波翼機』の効果に寄り、リリースすることで、レベ

ルをそれぞれ4上げる」

光波双顎機 ☆4↓8

光波鏡騎士 ☆4↓8

「俺はレベル8の光波双顎機と光波鏡騎士で、オーバーレイ！満ち溢れる暗号たちの力を束ね、銀河の瞳で神秘を示せ、エクシース召喚！ランク8『銀河眼の光波竜』！」

銀河眼の光波竜 ATK3000 ★8

「さらに手札から『RUM―光波昇華』を発動。光波竜一体でオーバーレイ！解き明かされた暗号たちよ。銀河の瞳の野望に呼応し、さらなる世界を開け！ランクアップ・エクシース・チェンジ！ランク9『超銀河眼の光波龍』」

超銀河眼の光波龍 ATK4500 ★9

「効果発動。オーバーレイユニットを一つ使い。グスタフ・マックスを、効果を無効にしてそのコントロールを得る。さらに、攻撃力を4500にして、『超銀河眼の光波龍』として扱う！」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK3000

←

超銀河眼の光波龍 ATK4500

「な……」

「バトルフェイズだ。超銀河眼の光波龍として扱っているグスタフ・マックスで、アングラー・ナツクルを攻撃！」

遊月&香苗 LP8000↓5000

「さらに、超銀河眼の光波龍で、ダイレクトアタック！」

放たれるブレス。

まあ当然。防ぐ手段はない。

遊月&香苗 LP5000↓500

崖っぷちにもほどがある。

「俺はカードを一枚セット。これでターンエンドだ」

「ふう、一瞬ひやひやしたぞ。私のターンだ。ドロー」

冷や汗を書きながらカードを引く遊月。

「本来なら、お前が先攻をとるのがよかったかもな」

「どういう意味だ？」

「お前のエースカードを考えれば当然だろう」

なるほど、毎ターン、スタンバイフェイズに自己蘇生できるドーハスーラのことを言っているようだ。

「言いたいことは分かった。だが……まだ私のドローフエイズは終わっていない。速攻魔法『手札断殺』を発動。お互いに二枚墓地に送り、二枚ドロースする」

「……まさかな」

真尋は冷や汗をかきながら手札を交換する。

「そしてスタンバイフェイズだ」

遊月の墓地から闇が溢れだす。

「終わりも始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

蛇のような体で∞を描きながら出現するドーハスーラ。

『我が主あるじよ』

(……なんだ?)

『我を活躍させてくれ』

何言ってるんだコイツ。

(何かあったのか?)

『私のイメージアップのためだ』

(お前何か悪いことしたことあるの?)

『正確には我ではないがな』

ちよつとドーハスーラが言っていることが分からない遊月。

いろいろと裁量権を与えているので、勝手に行動している時があるのだ。

ちなみに、それでもし発見されそうになった場合はどうするのかと言う話だが、『信じられないほどデフォルメして出現する』というものである。絶対こいつの頭はおかしい。

(なるほどな)

『頼むぞ。我が主よ』

(また今度な)

『なぬう!?!』

悲鳴を上げるドーハスーラ。

これでも死霊たちの王である。世間とは案外格式が高くはないものだ。

(私の手札を覗いてみれば分かるが、ちよつと出しゃばりたいと考えている奴がいるみたいなんだ。そつちに譲ってやれ)

『……なるほど、まあこれなら仕方があるまい』

遊月の手札を覗きこんで納得するドーハスーラ。

「さてと、まあこんなふうには、元々墓地にいなかったとしても、使えないわけじゃないってことだ。『複数の効果を持つモンスター』というのは、『一体で完結している』か、もしくは『他のカードと混ぜ合わせるか』で、そのポテンシャルをフルに発揮すること出来るかどうかが決まる」

最近出てきた『転生炎獣ガゼル』のようなカードの場合。一体で完結しているといえるだろう。

自信を特殊召喚できる効果と、特殊召喚成功時の効果を持っているのだ。

ドーハスーラの効果の場合、確かにスタンバイフェイズにしか蘇生効果は発動出来ないのだが、速攻魔法を活用することで、このような展開が可能となる。

ちなみに、もう一枚が『屍界のバンシー』の場合なら、なお盤面は万全と言えるだろう。

「さらに言えば、先攻はドロー出来ないが、ドローフェイズは存在する。よつて、このテクニクを使うことは可能なんだ。説明終了。

『アドバンスドロー』を使って、ドーハスーラをリリースして二枚ドロー」

『……手札見た時から想定はしていたが、鬼畜の所業だな』
やかましい。

「さらに、手札から『竜の霊廟』を発動。デッキから『真紅眼の黒竜』と『真紅眼の黒炎竜』を墓地に送る」

「な……『レッドアイズ』だと!？」

思えば、この二人とのデュエルでは見せていなかったな。

「そして、『思い出のブランコ』を使って、墓地から『真紅眼の黒炎竜』を特殊召喚」

真紅眼の黒炎竜 ATK2400 ☆7

「さらに、『生者の書―禁断の呪術―』を発動。私の墓地から『真紅眼の不死竜』を特殊召喚し、お前たちの墓地から、『光波翼機』を除外」

真紅眼の不死竜 ATK2400 ☆7

「これは……」

「私はレベル7の黒炎竜と不死竜で、オーバーレイ!紅き瞳の竜よ。黒炎の中に潜む鋼の炎の力を示せ。エクシーズ召喚!ランク7『真紅眼の鋼炎竜』!」

真紅眼の鋼炎竜 ATK2800 ★7

「フレアメタル……だが、そいつ一体だと、俺達が戦闘破壊して終わりだ」

「もちろん、コイツ一体じゃないさ。私は鋼炎竜の効果発動。オーバーレイユニットを一つ使い、墓地から『真紅眼の黒竜』を特殊召喚」

真紅眼の黒竜 ATK2400 ☆7

「このタイミングで、普通のレッドアイズ?」

遊月の手札は三枚。

一枚くらいは『黒炎弾』なのかもしれないが、それではまだ足りない。

使うとしても三枚すべてがそうでなければ、ライフを削りきることはできない。

「別に『黒炎弾』何て握っていないさ。私は手札から、『相克の魔術師』をペンデュラムゾーンにセットする」

「は、魔術師!？」

「別に魔術師パーツを複数積んでいるわけじゃない。入れてるのは相克の魔術師だけだ。私はペンデュラム効果を発動。このターン。鋼炎竜は、レベル7のモンスターとしてエクシーズ召喚が可能になった」

遊月は手を掲げる。

「私は、レベル7の『真紅眼の黒竜』と、ランク7の『真紅眼の鋼炎竜』で、オーバーレイ！」

二体の真紅眼が、渦の中で交わり、雄叫びを上げる。

「紅き瞳の黒竜よ。憤激する魂の爆炎を纏い、二色のまなこを煌めかせ、爆誕せよ」

爆炎を巻き上げながら、その竜は現れる。

「エクシーズ召喚。ランク7 『霸王烈竜オッドアイズ・レイジング・ドラゴン』！」

霸王烈竜オッドアイズ・レイジング・ドラゴン ATK3000

★7

『グルル……』

（ん？ 『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』の精霊をエクシーズ素材にして出せて？ 知りあいに持つてる奴いないんだから仕方がないだろ）

レイジング・ドラゴンからの要求はまるっと無視する遊月。

いないものはないのだ。

「このタイミングで、オッドアイズ・レイジング・ドラゴンだと……」
「効果発動。オーバーレイユニットを一つ使い、相手のカードすべてを破壊し、その数×200。攻撃力を加算する」

爆炎を巻き上げると、二枚のカードが破壊される。

霸王烈竜オッドアイズ・レイジング・ドラゴン ATK3400

「さらに、オッドアイズ・レイジング・ドラゴンは、一度のバトルフェイズで二回の攻撃ができる。やれ、オッドアイズ・レイジング・ドラゴン！」

オッドアイズ・レイジング・ドラゴンが、エネルギーを集約している。

そして、それをブレスにして一気に放出した。

「うわああああ！」

真尋&浩太 LP6000↓2600↓0

決着。

「と言うわけで、私たちの勝ちだ。クーパーデータは貰うぞ」

「ああ。それはルールだからな。貰っていけよ」

データが入ったカードを二枚もらって、片方を江藤に渡す。

その時の遊月を見る江藤の顔だが、何と言うか、頼りになりそうな人を見つめている時の目だった。

(……これは、まだ問題を抱えているんじゃないかな……)

何かを言ってくるわけではない。

ただ、訴えているようなその視線に、遊月は何を言えばいいのかわからなかった。

第十一話

何か訴えてくるような視線を向けてくる江藤だったが、途中でそれをやめた。

まだ言うべきではないと思ったのか、別の理由なのか。いずれにせよ、そこからは普通に帰宅。

連絡先はもともお互いに知っているので、何もすることもなく終わった。

★

「……協力してほしいって?」

「はい」

次の日の放課後。

教室から出ようとして、出入り口から助けてほしそうな目で江藤が自分を見つめていることに気が付いた遊月は、とりあえず江藤を連れて移動することにした。

そして聞いた話だが……。

「そう言えば、セキュリティって悪霊ハンターみたいなこともするんだっただな」

「正確には『精霊課』が担当しています」

デュエルモンスターの精霊と言うものは普通に存在するものだが、だがしかし、中には悪霊と呼ばれる存在もいる。

負の感情が溜まったとか心が闇の染まったとかいろいろ説はあるのだが、実は悪性となる条件は決まっていない。

ただし、悪霊はいずれも『瘴気』を発する。とだけ分かっている。

この瘴気は、精霊なら誰しも発する可能性があるということでもあり、そして感染する。

単純に『悪霊瘴気』と名付けられたこれを発している悪霊を発見した場合、セキュリティの『精霊課』に報告することが推奨されている。義務ではない。

そして、セキュリティの中に管轄部署があるということは、状況によつてはDGCからの増援が求められるということでもある。

おそらく、強い悪霊が出現したことで、重要任務の最悪な状況を回避した江藤に白羽の矢が立った。というのが建前だろう。

「なるほど、まあそう言うことならいいぞ」

「ありがとうございますー！」

ほっとした表情で頭を下げる江藤。

初々しい様子で何よりである。

★

移動手段と言うものはいろいろあるが、結局のところ、途中で燃料補給する必要のないエンジンが存在するDホイールがいいと言うのはひとつの真理である。

「あの、遊月さんは、悪霊を退治したことってあるんですか？」

遊月がDホイールを運転して、それに後ろから抱き付く江藤。

もちろん二人ともヘルメットを着用だ。どこぞの漫画のようにノーヘルでDホイールに乗ったりはしない。

なお、それ相応に大きい江藤の胸が押し付けられているが、それに対して遊月は反応しなかった。

「何回もあるよ」

いろいろ思いだすことはある。

『もとより、我は悪霊として生まれたのだがな』

遊月に並走するようにドーハスーラが出現する。

もちろん、江藤には見えないようだ。

(……そうだったな。傲慢なお前を従えるのは骨が折れた)

『だろうな。だが、我を精霊として従えたからこそ、圧倒的な力を持つアンデットワールドを使いこなすことができているといっても過言ではないがな』

そういつて高らかに笑うドーハスーラ。

当然のことだが、『今この世に生きている存在』の数と、『長い時間の中で死んで行った者』の数を比べれば、誰が何と言おうと後者の方が多い。

そんな概念の『世界そのもの』である『アンデットワールド』を制御するのは、並大抵の難易度ではなかった。

ドーハスーラを従えて、アンデットワールドを制御したことで、大切な『真紅眼の黒竜』を、手放すことなくそばに置いておくことが出来た。

(さて、近いかな?)

『ああ。もうそろそろ悪霊の場所が近い』

ドーハスーラはもともと悪霊。

ありとあらゆる事情に関係なく、『悪霊』と言う存在を感知できる。

『我はそろそろ引っ込んでおこう』

そういつて、ドーハスーラは姿を消した。

「遊月さんは苦労したことってありますか?」

『白鬨気双頭神龍』の悪霊が出てきたときは発狂するかと思った』

「……」

ほぼ無尽蔵と言っているほど、高い攻撃力のトークンを生成するモンスター。

遊月もこれには参った。

どこにいるのかわからなければどうすることもできない。

高い攻撃力のトークンが出て来るのだが、出現ルートを巧妙に隠し、そしていくつも用意することで、破壊をまき散らした。

最終的には遊月が『スケープ・ゴースト』を使ったローラー作戦で発見し、あたりをアンデットワールドで支配したうえで、ドーハスーラでトークン生成を無効にしながら、打点を上昇させた『真紅眼の不屍竜』で焼き尽くすという、なんとも総決算な感じになったのは記憶に新しい。

「まあでも、今回はそんなことはないんだろ?」

「はい。そこまで単体で強くないみたいですよ」

「ならいいんだがな……ん?」

遊月は何か不穏なものを感じた。

見上げると、戦闘機のようなものがいくつも飛んでいる。

「あの色は……バトル・イーグル・トークンですか?」

「つて、ヤバイ!」

一体が爆撃をかましてきた。

勢いよく方向変換してそれを回避する。

「うひゃああああー！」

背中では悲鳴を上げる江藤。

「しっかり捕まってる！」

「もう捕まっています！」

当たり前だ。

と思つたら二体目が突撃してきた。

最後回避してやり過ぎす。

「あーくそ、面倒だな」

どうしたものかと思つた時、遠くからDホイールが走って来る音が聞こえる。

あのDホイールは……。

「英明か！」

「遊月!?なんでこんなところに」

「背中の子に協力してる感じだ」

「あーなるほどね。確かに制服がDGCだな」

英明はカードを一枚とりだして、遊月に投げ渡してくる。

遊月は受け取った。

「俺が情報屋から受け取った、こいつらの本体がいる場所のデータだ。ここは俺に任せろ！」

「え!?英明さん。この数を相手にどうするつもりなのですか!?!」

「問題ない。良いからさっさと行け」

「ああ。ここは任せろぞ」

遊月はDホイールのスピードを上げた。

「あの、遊月さん。英明さんに任せて大丈夫なのですか?」

「問題ない。見てみろ」

「え?」

江藤が英明を見ると、英明は左腕に付けていたデュエルディスクに『マスク・チェンジ』と『フォーム・チェンジ』のカードを入れる。

ディスクに『MT』と『FT』というアイコンが出現。

そのままデュエルディスクをベルトの金具に当てる。

すると、ディスクから金具が出てきて固定された。

「え!？」

江藤が驚いている間に、英明は、『M・HERO 光牙』のカードをとりだした。

そして……。

「変身!」

英明はディスクに『M・HERO 光牙』のカードを入れて、ディスクの『MT』のアイコンを押す。

『マスク・チェンジ 光牙』

すると、光が溢れて、英明は『M・HERO 光牙』になった。

「ええええええ!?!何ですかアレ!?!」

普段おどおどしている江藤もこれにはびつくり。

「いやー……なんていうか、あの年で『変身!』とか思いつきり叫ぶとか恥ずかしくないんだろうか……」

「着眼点そこですか!？」

「冷静になつて考えてみる。高校一年生にもなつて、家の中じゃなくて公共の場で『変身!』なんて叫ぶんだぞ。私なら絶対にやりたくない」

「……冷静になつて考えてみたら変身できることがおかしいと考えるのが普通だと思いますけど……」

「英明にそんな常識は通用しない」

彼が持っている『マスク・チェンジ』は特別なのだ。

「とにかく急ぐぞ。変な空気を察した本体が逃げるかもしれない」
「変な空気つて……」

何を言えばいいのかわからなくなる江藤。

とはいえ、そう言っている間に英明は見えなくなっている。

ちなみに、光牙の力を使っていると考えれば、相手が多ければ多いほど強くなるので大丈夫だろう。

「そんなことより、さっさと行くぞ。あまり遠くはないからな」

「あ……はい!」

モニターをチラツと見て実際に近いことを把握した江藤。

遊月はDホイールを走らせた。

しばらくすると、全く人気のない場所に来た。

「……廃棄された倉庫街か」

「全く人気がないですね」

「最近は効率よく下に掘り進めることが出来るからな。高性能の大容量エレベーターが同時に開発されて、管理しやすくなっている。こんな倉庫は壊すのにもコストがかかるから、そのまま残ってるんだ」

土地には価値があるものだが、建物の方は必要ないとなれば壊すしかない。

しかし、壊すのにもコストが必要。

さらに言えば、もともと倉庫街として成り立っているということ
は、居住区画として都市設計の段階から外れている。

再利用にも困る場所と言うことだ。

「あれだ！」

遊月の目線の先に、発進し始めているバトル・イーグル・トークンが見えた。

「既に生成し終わってる個体があるのか」

「どうしますか?」

「倉庫の中なら簡単に暴れられないだろう。江藤は倉庫の中に乗りこんでくれ。私はあのトークンたちを破壊してくる」

「え?」

「良いからいけ」

「あ。はい！」

江藤はDホイールから降りて、ヘルメットを外すと荷台に置いた。
「それじゃあ。また後でな」

遊月は『レッドアイズ・トランスマイグレーション』のカードをとりだす。

「え?」

「行くぞ。レッドアイズ」

遊月が言うと、『真紅眼の不死竜』が出現し、そして遊月に纏うように移動すると、『レッドアイズ・トランスマイグレーション』のカード

が光って、遊月が『ロード・オブ・ザ・レッド』になった。
「うそ!？」

「残念ながら嘘じゃない」

「でもレベルが足りませんよね」

「まあ、なんとかなるんだよ」

ルール無視じゃねえか。

「それじゃあいつてくる。本体の方は頼んだぞ」

遊月はそう言つて、『ヘルモスの爪』のカードを使って『真紅眼の黒竜剣』を背に担いでDホイールを発進させた。

「……私が変わるのでしようか」

安心しろ。そんなことはない。変態なのはあの二人だ。

「とにかく、私は本体を叩きます」

江藤は倉庫の中に入つて行つた。

倉庫の中は、広々とした空間だったが、逆に何もなかった。

そして、バトル・イーグル・トークンは発進し終わった後なのだろう。

倉庫の中には、『No. 42 スターシップ・ギャラクシー・トマホーク』だけがいた。

瘴気が溢れている。

確実に悪霊だ。

『ふむ、ようやくきたか』

「私はDGCの江藤香苗です。悪霊であるあなたを、討伐します」

『やってみろ』

香苗がデュエルディスクを展開し、カードを五枚引く。

すると、SGT（スターシップ・ギャラクシー・トマホーク）の方も、デジタルデータのカード五枚を出現させた。

『デュエル!』

香苗 LP8000

STG LP8000

「私の先攻です!」

香苗は手札のカードを迷いなく使う。

「私は手札から、『転回操車』を発動。そのあと、『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を妥協召喚します」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト ATK0 ☆10
「この瞬間、『転回操車』の効果発動。デッキから『無頼特急バトレイン』を、レベル10にして特殊召喚します」

無頼特急バトレイン ATK1800 ☆10

「……は……」

江藤は考える。

手札は思ったより良くはない。

そして、スターシップ・ギャラクシー・トマホークと言えば、大量のモンスター数からつながるリンク召喚が鍵。

ここですべきなのは、防御性能に長けたモンスターだ。

「私はレベル10のナイト・エクスプレス・ナイトとバトレインで、オーバーレイ！」

二体のモンスターが、光となって金色の渦に飛び込んで行く。

空中に、『81』の刻印が出現。

しかし……。

「！」

空中に浮かぶ『81』の数字にノイズが走る。

次の瞬間、81はバラバラになって砕け散った。

「ぐっ……エクシース召喚！ランク10『超弩級砲塔列車グスタフ・マックス』！」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK3000 ★10

出現するグスタフ・マックス。

だが、先ほど砕け散った数字。

少し【列車】について調べれば、何を出そうとしたのかは一目瞭然。だが、出て来ることはなく、それとは関係ないモンスターが出現した。

『……なるほど、どうやらまだ認められていないようだな』

「……あなたには関係ありません。私はグスタフ・マックスの効果発動！オーバーレイユニットを一つ使い、相手に2000ポイントのダ

メージを与えます！」

SGT LP8000↓6000

出したいモンスターは出せなかったようだが、だからと言ってグスタフ・マックスが弱いというわけではない。

ライフポイントは、途中で回復しない限り8000。

一気に2000を削るグスタフ・マックスは、常に引導火力といっていいステータスなのだ。

「私はカードを二枚セットして、ターンエンドです。バトレインの効果で、デッキから『弾丸特急バレット・ライナー』を手札に加えます」
『私のターン。ドロー』

SGTのそばにカードが一枚出現して、そして消える。

『私は『混沌の場』を発動』

フィールド魔法が発動される。

『発動時の処理として、デッキから『暗黒騎士ガイアロード』を手札に加え、特殊召喚する』

暗黒騎士ガイアロード ATK2300 ☆7

『さらに、『スターシップ・スパイ・プレーン』は、相手フィールドにエクシーズモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる』

スターシップ・スパイ・プレーン ATK1100 ☆4

『そして、このモンスターが手札からの特殊召喚に成功した時、相手フィールドの魔法・罨一枚を選択し、手札に戻す。私が選択するのはセットカード一枚だ』

「チェーンして罨カード『マグネット・フォース』を発動！これで、グスタフ・マックスは、相手モンスターの効果を受けなくなります！」
『構わない。私は魔法カード『ギャラクシー・クイーンズ・ライト』を発動し、スパイ・プレーンのレベルを7に変更』

スターシップ・スパイ・プレーン ☆4↓7

『私はレベル7のガイアロードとスパイ・プレーンで、オーバーレイ。最強母艦よ。艦隊を編成し、敵を殲滅せよ。エクシーズ召喚！ランク7『No.42 スターシップ・ギャラクシー・トマホーク！』』

No.42 スターシップ・ギャラクシー・トマホーク DFE3

小型のスターシップ・ギャラクシー・トマホークが出現。

「あ、悪霊本体が……」

『効果発動。バトル・イーグル・トークンを、五体特殊召喚』

バトル・イーグル・トークン ATK2000 ☆6 ×5

『そして、私自身とイーグル・トークン三体でリンク召喚。リンク4

『トポロジック・ボマー・ドラゴン』』

トポロジック・ボマー・ドラゴン ATK3000 LINK4

混沌の場 魔力カウンター 0↓1

「と、トポロジック・ボマー・ドラゴン……」

『魔法カード『精神操作』を発動。グスタフ・マックスのコントロールを得る』

「そんな……」

グスタフ・マックスが移動する。

『精神操作で奪ったモンスターはリリースと攻撃ができないが、効果を使うことはできる。2000ポイントのダメージを与えよう』

「い、いやあああー」

江藤 LP8000↓6000

悪霊が絡むデュエルでは、ダメージが実体化する。

ライフが0になる時のダメージを受けて、殉職する人間もいるほどだ。

『このままでは、ターン終了時にコントロールが戻る。私はイーグル・トークン二体とグスタフ・マックスをリンクマーカーにセット。リンク召喚。リンク3『電影の騎士ガイアセイバー』』

電影の騎士ガイアセイバー ATK2600 LINK3

混沌の場 魔力カウンター 1↓2

トポロジック・ボマー・ドラゴンのリンク先に出て来るガイアセイバー。

『この瞬間、トポロジック・ボマー・ドラゴンの効果が発動。リンクモンスターのリンク先にモンスターが出現したことで、お互いのメインモンスターゾーンのモンスターを全て破壊する。だが、君が発動した

『マグネット・フォース』の効果により、私のモンスターであるトポロジック・ボマー・ドラゴンの効果を、機械族であるガイアセイバーは受けない』

マグネット・フォースの波紋で、トポロジック・ボマー・ドラゴンの効果からガイアセイバーが守られる。

『そしてこのターン。このカード以外の私のモンスターは攻撃できないが、もともと、私の効果により戦闘ダメージはゼロ。これでターンを終了する』

「わ、私のターンです。ドロー！」

江藤はカードを引く。

そして頷いた。

「私は罫カード『エクシーズ・リボーン』を発動。墓地からグスタフ・マックスを特殊召喚して、このカードをオーバーレイユニットにします！」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK3000 ★10

「効果発動。2000ポイントのダメージです！」

『む……強力なカードだ』

SGT LP6000↓4000

「そして私は、『RUM―アージェント・カオス・フォース』を発動します！」

『何?!RUMだ?!』

「私は、ランク10のグスタフ・マックスでオーバーレイネットワークを再構築!……ぐっ!うう……」

少し、彼女は『この場所にすぎた』ようだ。

胸の中を急速に何かが侵食していくような痛みが走る。

そんなことは関係なく、グスタフ・マックスが光の渦の中に飛び込んで行く。

「摩訶不思議な力を得て、いざ降臨!ランク11『CX 超巨大空中要塞バビロン』！」

CX 超巨大空中要塞バビロン ATK3800 ★11

『なるほど……だが、そのモンスターだけでは、私のライフを削りきる

ことはできない。さらに、君の手札は二枚。そのうち一枚は弾丸特急バレット・ライナーだ。今のままでは攻撃すらできないだろう」
「私は魔法カード『鬼神の連撃』を発動します。バビロンのオーバールイユニットをすべて取り除くことで、このターン。二回の攻撃を可能にします！」

『ばかな……』

香苗は手を掲げる。

「バトルフェイズです。私はバビロンで、トポロジック・ボマー・ドラゴンを攻撃！」

SGT LP4000↓3200

『ぐ……』

「バビロンが相手モンスターを戦闘で破壊した時、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与えます！」

SGT LP3200↓1700

「二回目の攻撃！バビロンで、ガイアセイバーを攻撃します！そして、その攻撃力の半分のダメージを与えます！」

SGT LP1700↓500↓0

『く、くそおおおおおー！』

悪霊となった精霊は、自らの構成する『精霊力』が、『悪霊瘴気』に変わってしまう。

そして悪霊はデュエルに敗北すると、『悪霊瘴気』が形を保てなくなる。

結果、スターシップ・ギャラクシー・トマホークの悪霊は、まるで光の粒子になって行くように、崩れていった。

「はあ……はあ……」

デュエルが終わると同時に肩で息をする香苗。

苦しそうな表情で、ポケットに手を入れる。

だが、目当てのものが入っていなかった。

驚いて見渡すと、後ろの方に小さなケースが見える。

コントロールを奪われたグスタフ・マックスに攻撃された時に跳んでいったようだ。

「はあ……はあ……うう……ゆう……げつ……さ……」

そのまま、江藤は意識を失った。

★

「よし、悪霊の気配は全てなくなったな」

バトル・イーグル・トークンを全て破壊して、倉庫に戻っていく遊月。

既に、ロード・オブ・ザ・レッドの姿ではなく、普通の遊月の姿である。

「遊月！終わったみたいだな！」

遊月が振り向くと、英明がDホイールを走らせてきていた。

既に変身は解除されている。

「そつちも終わったか？」

「つていうより、バトル・イーグル・トークンが動かなくなったからな。本体が消えたんだと思うぜ」

そう言つてニカツと笑う英明。

「ていうか、英明は何でいたんだ？」

『綾羽ちゃん親衛隊』の表の業務さ」

「……っ。」

意味が分からない遊月。

「ま、こんな悪霊が出た時は、俺達が何とかしてる時もあるつてこと
や」

『精霊課』が予算の無駄遣いみたいな感じなのに、アムネシア周辺が
どうにかなつてるのはそういう理由か」

話していると倉庫についた。

「江藤、デュエルは終わったのか……江藤！どうした！」

倉庫の中に入ると、江藤が倒れている。

熱も出ているのだろうか。顔が赤い。

「悪霊はすでに消えてるぜ。デュエルは勝ってるんだ。一体どうい
うことなんだよー！」

「静かにしろ。これは……」

その時、ドーハスーラが出現。

『うむ。どうやらこの少女は【精霊力制御疾患】のようだな』

「あ、それか」

「は？なんだそれ」

遊月は知っていたが、英明は初耳のようだ。

『基本的に、精霊力はこの世界にいる生物なら誰もが生成している。そして、自らが許容できる範囲で体内に保持するために、体外に排出している訳だ。だが、制御疾患の場合、この排出器官が収集器官に丸ごと変わって、過剰な精霊力が体内にたまることで悪影響を及ぼす』
「だが、それだけじゃないように見えるぜ」

『薬を使えば、収集は止められないが排出は行える。そして……『精霊力』と『悪霊瘴気』は表裏一体で、この疾患を抱えていると収集してしまう』

要するに、悪霊とのデュエル中に薬の効果が切れて、悪霊がまき散らしている悪霊瘴気を体の中に取り込んでしまったことで、悪影響が出ているということだ。

「ドーハスーラ」

『分かっている』

ドーハスーラが右手の杖を振った。

すると、江藤の体から悪霊瘴気だけが出て来る。

それが倉庫の上の方に集められた。

「レッドアイズ。頼むぞ」

『了解した』

真紅眼の不屍竜が出現して、黒炎弾を放って悪霊瘴気を消滅させた。

「これで、悪霊瘴気はなくなったのか？」

「ああ。だが、病院に連れていった方がいい。保管が簡単な薬だと限界があるからな」

病院に連絡する遊月。

事情を説明して、そのまま救急車に来てもらうことにした。

「しっかし……支部で江藤が毛嫌いされていることは察していたが、たぶん理由はこれだろうか」

「この疾患って感染するのか？」

「感染経路はHIVと変わらない。と言えはわかるか？」

「要するに、セックスか血液感染くらいしかないってことか？」

「お前がHIVの感染経路について正しい知識があることの方が驚いたがな……」

「それくらい知ってて当然だろ……ん？HIVと変わらないってことは……」

遊月は頷く。

「それを知っているもの達は、HIVと同じ勘違いをしてるってことさ」

「なるほどな」

HIVだろうと制御疾患ウイルスだろうと、これは先ほど言った二つの経路でしか感染しない。

唾液にも含まれているが微量であること、空気に弱いことも共通している。

「なんていうか、あれか。日本って性教育に関して否定的だから、『体液感染』なんてばかした言い方してんだろ」

「ああ。それと同じだ。一体どんだけディープキスするつもりなんだろうな。やっても感染しないだろうけど」

「それで実力関係なしに差別されてるってわけか。バカな話だぜ」

「世の中そんなもんだ」

すると、救急車が来る音が聞こえた。

「来るの速いな」

「悪霊瘴気、抜いてるけど、本来は抜けないのが常識だからな」

「あ……どうするんだ？」

「抜く手段があることを知ってる奴がいなわけじゃないから大丈夫だろ」

遊月は江藤の頭を撫でながらそう言った。

（面倒なことになるとは思っていたが、こんな形だとは思っていなかつたな）

副作用の強い薬しか存在しない疾患だ。

しかも、先天性までありえるもの。

闘病生活を長い間続けていたことは間違いない。

(頼ろうとしていたあの目……さて、どうしたもんか)

いろいろなと解決しなければならぬことが一気に増えたと思う遊月であった。

第十二話

知らない天井だ。

香苗はうつすらと目を開けて、そう思った。眼だけでできよろきよろと見てみると、右には誰もいない。窓の外から夕日が見えているが、その程度。そして左には……

「あ、香苗ちゃん。気が付いた!」

自分に抱き付いて来る綾羽がいた。

「あ、綾羽さん」

「救急車で病院に運ばれたって聞いて、びっくりしたんだよ! 何事もなくてよかった……」

ほっとした様子の綾羽。

「気が付いたようですね」

安心して居る時、部屋に白衣を着た医者が入って来た。

優しい笑みを浮かべた男性である。

左胸の名札には『伊賀和志』とかかかれている。

「あの、先生。綾羽ちゃんは……」

「何も問題はありませんよ。明日から学校に通うことも可能なくらい健康です」

「え、でも……」

綾羽も、香苗が『精霊力制御疾患』であることを知っている。

対応が時に複雑になることも知っていた。

「私も驚きました。この疾患を抱えていたと知らされていなかった人間が、正しい処置をして救急車を呼んだことをね」

「え、遊月君が?」

「彼から状況を聞いた救急隊員も驚いていました。その場でしなければならぬこと、隊員に伝えなければならぬことを、簡潔にまとめ話していたとね」

そういつて、医者 of 男性はケースを取り出す。

香苗が持ち歩いているものと同じものが入ったケースだ。

「悪霊瘴気をとりにこんでしまった場合の最も優れた対応は、『悪霊瘴気を抜くこと』と『救急車を早急に呼ぶこと』ですが……時折勘違いして、この薬を飲ませる人がいます。これが最悪の間違いなのですよ」
「え、そうなんですか？」

綾羽が首をかしげる。

医者 of 男性は頷く。

「はい。この薬には、『精霊力』を排出させる成分が含まれていますが、悪霊瘴気を狙って排出させることはできません。服用すると、その二つをまとめて排出します。しかし、外に出ていきやすい精霊力の方が多く出ていくのです。結果的に、体の中の悪霊瘴気の割合が多くなります」

「じゃあ、遊月君は薬を飲まずに、悪霊瘴気だけを抜いて、救急車を呼んだってこと？」

「その通り。悪霊瘴気はすでに抜いており、薬を飲ませてはいないことを伝えることもしつかりとね」

そこまで説明を聞いて、綾羽は疑問に思った。

「あの、悪霊瘴気を抜いているんですね。なら、その時点で問題はな
いと思うんですけど……」

「悪霊瘴気を抜いたとしても、すでに発生していた体調不良はなくなりません。さらに悪霊瘴気と言うのは、元から存在する精霊力を変質させたものですから、それを丸ごとごとそり抜いた場合、今度は体内の精霊力が足りなくなります」

「多すぎると困るが、だからと言って足りないと問題が出て来る。それが精霊力と言う存在である。」

「この疾患を抱えている人は、飽和状態に近い形で精霊力を保持している人が多く、体内の精霊力が足りなくなっても問題が出てきます」

「はあ……なんていうか、すごいんですね」

「遊月さんでよかったです。あの、ありがとうございます」

ほっとしている香苗だが、医者 of 男性にも頭を下げる。

だが、医者 of 男性は手を振った。

「いえいえ、私はこれが仕事ですから、礼ならその少年に言ってください」

い。仮に最悪の状態で運ばれていたら、今のような良い状態ではなかったはずですからね」

この医者としては本心だった。
とはいえ……。

(最も、あれほど正確に、根こそぎ悪霊瘴気を取り除けるとは……もともと悪霊の可能性もありますね。大変気になりますが、まあいいとしましよう)

医者として興味があるとしても、話したがないというのならそれは尊重するべきである。

「それでも、ありがとうございます。ええと……あの、他の人って名札に名字しか書かれてないんですけど、なんで先生だけフルネームなんですか？」

例を言おうとしてな札を見て、疑問に思った。と言ったところだろう。

首をかしげる香苗。

医者はフツツと微笑む。

「名字だけですよ」

「え？」

「私の名字は、『伊賀和志』と書いて、『いかわし』と読むんです」

「あ。す、すみません！」

「構いませんよ。よく『伊賀和志』と間違われるのでなれていますから」

なかなか聞かない名字。というものはあるが、名字と名前が一体化しているように見える名字と言うのは少ないものだ。

謝る香苗の横で綾羽もびっくり。

……とまあ、そんな珍事もあったが、おおよそ平和である。

★

次の日。

「あの、遊月さん。ありがとうございました」

「……それは任務に協力したことなのか、悪霊瘴気が入りこんでいた君を助けたことなのかかわからんが、いずれにしても礼を言われるほど

のことじゃないさ」

なんだかんだ言つて律儀と言うか素直な江藤。

次の日に学校に行けるとなれば、校舎に入つて行く遊月を見つけて礼を言っている。

「あの、そつちじゃなくて……」

「……ああ、君の任務の後始末をしたことか？」

先日の悪霊退治だが、あれは彼女の任務である。

確かに悪霊討伐は成功しているが、その後で倒れてしまったため、報告書の作成など不可能だ。

医者から夜は安静にしているように言われたので、朝になつてどうするかと言う話になると彼女は思っていたようだ。

しかし、連絡を入れてみると、既に報告書作成に必要なメモが提出されており、不備がなく、実際に現地調査と提出者への確認も済ませて、正式が書類が受理されていた。

その結果、この件に関していえば、DGCの中ではすでに完結している。

「はい、提出者は遊月さんと聞いたので……」

「別に、DGCにいろいろ聞かれるのが初めてじゃないっていうだけの話だ。その時の応用だよ」

「それでも、ありがとうございます」

「……そうか」

それ以上は何も言い返さない遊月。

遊月としては別にどうでもいいことだ。

しかし、江藤としてはちゃんと礼を言っておきたいということなのだろう。

なら、遊月はそれを否定することはない。

「それで、あの……遊月さんは、私の精霊力制御疾患が気にならないんですか？」

「別に全然。江藤とセックスしたいわけでもないしな」

「セツ……そ、そんなこと言っちゃだめですよ！」

顔を真っ赤にして慌てて怒る江藤。

見ていていじるのが楽しくなるような反応だが、遊月はあえて言わない。

「ま、そう言うわけだ。私は精霊力制御疾患についての知識をしつかり持っているから、問題はない」

「分かりました」

「まあ、また迷惑をかけに来るといい」

そういつて、遊月は江藤の頭を撫でる。

「〜♪」

そして気持ちよさそうになる江藤。

……忘れてはならないのは、ここは学校の敷地内である。

当然、他の生徒も見ている訳だが、誰も遊月を変な目で見ている様子は無い。

というか、中には羨ましそうな顔で見ている者もいる。

「さて、もうそろそろ授業だ。また後でな」

「あ……」

パツと手を放す遊月。

江藤は名残惜しそうに頭を触った後、教室に歩いていった。

★

「英明。昼休みにタブレットを弄って何してるんだ？」

「ん？ああ、今日は非番だからな。悪霊調査だよ。掲示板とかってみんな勝手に書きこんでいくからな」

昼休みの時間の使い方と言うのは様々だが、英明は『綾羽ちゃん親衛隊』の表の業務として悪霊退治をしている。

「……で、何かあるか？」

「まあなんていうか、人間だろうと精霊だろうと、悪い奴になろうと思えばだれでもなれるわけだし、とりあえずデツキとデュエルディスク持って行けば勝てるような奴が多いんだよなあ」

「悪霊にも大小があるからな」

「そういうこつた」

そう言いながらもタブレットを見つめる英明の目は真剣である。

とても、組織の第一目的を果たそうとしてダブル弁慶で気絶した男

とは思えない。

(ていうか、英明ってネットとか使えるんだな)

『私も使えるぞ』

遊月の隣にドーハスーラが出現。

(え、お前使えるの?)

『まあ検索エンジンをかけるくらいだがな。我はいろいろと気になることが多いからな』

(自分の評判だろ?)

『その通りだ。そう言うものを調べるのにネットは便利だからな』

(へえ……どんなことがかかれてるんだ?)

『我がこの地に降り立った時は「とりあえずデツキに『電網の落とし穴』を入れておこう」みたいなコメントが多くて発狂するかと思った』

電網の落とし穴

通常罠

(1) : 相手がデツキ・墓地からモンスターを特殊召喚した時に発動できる。

そのモンスターを裏側表示で除外する。

(……それはひどいな)

『せめて奈落で勘弁してくれと思ったものだ』

意気消沈したドーハスーラだが、言いたいことは終わったのかフェードアウトしていった。

「……うーん。特にないな。今日は綾羽ちゃんを見ていよう」

「非番なんだよな」

「だからって見ていたらダメな理由にはならない」

納得していいのかどうか微妙なところである。

「そーいや、香苗ちゃんは大丈夫なのか?」

「大丈夫になるようにしているから大丈夫だ」

「なるほどな……それにしても、精霊力制御疾患って先天的になる場合があるって聞いたことがあるけど、あれって親からもらうものなのか?」

「……基本的に生まれてくる時に感染するものではない」

「そうなのか？」

「母親がHIVに感染していたからと言って、出産の時に引き継ぐことはない。お腹の中にいる時だって、母親と子供が血液を交換し合っているわけじゃないしな」

「……そうだったっけ？」

「お前血液型なんだ」

「俺はBだけど」

「お前の母さんは？」

「母さんはOで……あ、それもそうか。交換されてたら拒絶反応起きてるわ」

「そういうことだ」

飯に（という失礼かもしれないが）江藤が子供を産むとしても、帝王切開すれば子供に精霊力制御疾患が感染することはまずない。

「親からもらうわけじゃないのに、なんでそんなことになるんだ？」

「……少し大きな話になるが、精霊力って言うのはそもそも、所有することそのものにバランスが存在する」

「極端に多く持つものが少なく、少ないものが多いのはそういう理由か」

「このあたりは金と同じだ。だが……金と同じと言うことは、あまりにも上のものがやりすぎると、とばっちりを受けるものがある」

「……じゃあ、香苗ちゃんは、俺たちが今まで作ってきた借金を抱えているみたいなものか」

「そうだ。そもそも精霊力制御疾患は、三十二年前までは確認すらされていないウイルスが原因だからな。そのウイルスが勝手に感染する」

「なるほどねえ……」

英明の中にもいろいろ考えはあるかもしれないが、遊月はそれを変えようとは思わない。

「誰が決めたのかは知らんが、誰かが何かを奪っているとして、今まで気にしなかった癖に、いきなりそれを借金だと言いだしたんだ。そして江藤は、それを抱えて生きている」

「遊月が香苗ちゃんに協力的なのはその借金が理由か？」

非常に強力な精霊を味方に行っている遊月。

英明がそう判断するのは不思議なことではない。

「そうなんだろうな。私のレッドアイズは、本能でそういう抱えている運命の重さみたいなものが分かるんだ。それを従えている私にも影響が出ているだけだが」

「抱えている運命の重さねえ……俺ってどうなんだ？」

「レッドアイズ曰く『軽くはない』らしい」

「……マジで？」

「マジだ」

英明は嫌そうな顔をしているが、レッドアイズがそう言うのなら遊月にとってはそうである。

「さて、今日は特に問題がないのなら、私はそれでいい」

遊月は立ち上がって自分の席に戻った。

「……ま、このDGCのホームページに乗ってるレベルなら、DGCの下級構成員の話で済むだろうな」

英明もそう結論付けて、タブレットをしまった。

★

江藤は昇格したわけだが、まだまだ階級で言うと下であることに変わりはない。

言い方はあれだが、『使う側』ではなく『使われる側』である。

「ええと、この部屋ですね」

近い時期に昇格や昇進したものが香苗を含め数人いるので（降格も複数いるが）、穴が開いているチームなどの再編成が行われる。

もちろん、DGCである以前にデュエリストであり、人間なので、それぞれ存在した関係は考慮されるのだが、その関係を無理矢理作っているのだと判断された場合、上から一方的に彼らを書類上は切り離すことになる。

あえて話しあいの時間と場を設けないのは、本人たちで解決しようとしても問題が長期化するだけの場合がほとんどだ。人間関係と言うのは元よりそういうものである。

そのため、上の人間が一方的に命令を下すことで、多少の評判の悪化は覚悟したうえで再編成するというものだ。

無理矢理関係を作っていたとしても、一度切り離して別々の環境に放り込めば、それ相応に人間は変化するものである。

そう言うこともあり、結果的にこのようなことになっている訳だ。

切磋琢磨はいいが、関係に囚われているのはダメだ。というのが上層部の意見なのだが、構成員のほとんどは知らないものである。

「あら、やっときたんですね」

そこまで広いというわけではない部屋だ。

報告書などを紙で行うこともあり、なかなかペーパーレス化が進まないDGCらしく、紙を保管するファイルやケースが大量にあるのかと思っていたが、そのようなものはなく、多少本棚がある程度の部屋だった。

そこに、黒い髪を伸ばして銀縁の眼鏡をかけた女性がデスクに座っていた。

「あ、あの、江藤香苗と言います。よろしくお願いします！」

「ああ、いいわよ。そう言うの。私はきっちり仕事をこなしてくれたらそれでいいから」

そう言いながらもキーボードを連打する女性。

作業が終わったのか、腕を伸ばして、香苗の方を見る。

「あ、私は米倉晶子よねくらしょうこ。この部屋の責任者でアンタの上司だから、私の言うことだけ聞いていたらいいから」

そういつて、キーボードを少し押す。

すると、香苗のデュエルディスクにメールが送られてきた。

確認すると「巡回任務・エリア『アムネシア南東地区』・最高討伐難易度E」とかかかれている。

巡回任務で、場所も指定されている。

悪霊も確認されているようだが、難易度はEであり、任務発行に特別な審査や書類整理が必要になるBよりもかなり下だ。

Aにもなれば外部からの応援要請も考慮しなければならぬレベルだが、この場合は関係ないだろう。

「アンタが担当するエリアよ。ちゃんと割り振っておいたから、後は書類を作つてまとめて置いてね。じゃあ、私は帰るから」

「え?」

「えってなによ。もう私がやることは済んだんだから帰っていいに決まつてるでしょ。本来ならこんな雑務なんてしなくても上に行けるのに……ああ、これはアンタには関係ないわね」

言うが早いか、パツパと荷物をまとめて部屋から出ていく晶子。

香苗は呆然としていたが、ふと思うことがあった。

「米倉?」

確かこの名字は……。

「何してんの。速く行きなさい」

「え、あ、はい!」

晶子に急かさされた香苗は慌てたように走りだして、『DGC悪霊対策ホームページ担当第三室』の部屋を後にした。

そしてそんな部屋の中で、一枚の紙が晶子の引き出しから地面に落ちた。

いろいろと上層部からの報告がまとめられているが、一部、赤く大きな文字で書かれている部分がある。

『アムネシア南東地区にて、討伐難易度Aの危険な個体が確認されている。遭遇確率15%だが、任務発行の際に管理官は巡回任務を担当する者に対して嚴重に注意することを義務付けることとする。担当室からホームページに注意書きして置くこと』

★

「うーん……特に何もなさそうですね」

一人で巡回場所を歩く香苗。

ちなみに、本来こういつた討伐任務ならチームが組まれるのが通例だが、討伐難易度Fくらいの悪霊討伐と言うのは、言いかえれば雑草を引っっこ抜くようなものである。

とてもじゃないが、駆逐するにしても大人数は用意できない。というか『雑草を全部片づけるまで帰れない』などと言われた場合、場所

によつては発狂するだろう。

本来ならホームページを担当するようなあまり関係のないところにそう言った雑用が回ってくる。

そして、そんな回つてきた誰もやりたがらない面倒なことを、香苗は押し付けられたということだ。

何の説明もなしに進めたので香苗本人は気が付いていないが。

「何もなければならそれに越したことはないと言われたことはありますけど……」

当然のことだが、犯罪だの悪霊だのと言うのではない方がいい。

討伐数が多ければ英雄だが、討伐数が極端に少ないのならその時は安心すればいい。

予想外のことが起これば死を招くこともあるのだ。そのくらいの自重は必要。

セキュリティの目的はあくまでも『討伐』ではなく『守護』であり。

スローガンは『守りたいと思うものを増やしていく』である。

「……あ」

チラツと曲がり角に何かが見えた。

香苗は走つてそれを追いかけると、『ジャイアントウイルス』の悪霊が見えた。

「倒さないと……」

急いで追いかける。

だが、それに気が付いたジャイアントウイルスは逃げ続ける。

角を曲がり続けて、人の気配がないところまで移動しているような気もするが、被害が最小限になるのならそれでも構わないとして香苗は追い続けた。

そして、袋小路に追いつめる。

「討伐しますー！」

香苗はデュエルディスクを構える。

ジャイアントウイルスのそばに、カードが五枚出現した。

「『デュエル！』」

香苗 LP8000

GG LP8000

『ボクの先攻。モンスターをセットして、ターンエンド』

事故……と言うわけではなさそうだが、難易度Eだとデッキがまだ未熟なので、このようなことはよくある。

「私のターンです。ドロー！」

香苗はカードをドローする。

「私は手札から、『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を妥協召喚します！」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト ATK0 ☆10

「さらに、『重機貨列車デリックレーン』を特殊召喚です！」

重機貨列車デリックレーン ATK1400 ☆10

「そして、デリックレーンとナイト・エクスプレス・ナイトでオーバーレイ！全てを砕く大砲を装着し、いざ発進！ランク10『超弩級砲塔列車グスタフ・マックス』」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK3000 ★10

現れる列車。

なんとというか、『あ……』と思ってしまうような感じである。

「グスタフ・マックスの効果発動。相手に2000ポイントのダメージを与えます！」

GG LP8000↓6000

「そして、デリックレーンの効果が発動して、セットモンスターを破壊します！」

破壊されたのは予想通り『ジヤイアントウイルス』であった。

「そして、バトルフェイズです。グスタフ・マックスでダイレクトアタック！そしてこの攻撃宣言時、『リミッター解除』を発動します！」

『あ、やっぱり……』

途中から気が付いてしまったジヤイアントウイルス君。

絶望が彼のゴールである。

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK3000↓6000

GG LP6000↓0

そして消え去っていくジヤイアントウイルス。

夢い命であった。

「ふう……ここでの討伐は終わりみたいですね」

追いつめたのはいいが、肩で息をしながら歩く香苗。

見た目通り、あまり体力はないようだ。

そして、裏路地から出てきた時……。

右側から、膨大なエネルギーが感じられた。

「……え？」

香苗の目に映ったのは……。

『ククク。人は勝利した瞬間に油断する。俺様が作った撒き餌を倒した程度で油断してくれてうれしいぞ。人間』

不気味な色の液体を口の中に集約する『パンデミック・ドラゴン』だった。

そして、大きなウイルスの濁流が放たれる。

それはたやすく香苗を覆い尽くして、彼女の後方を侵食していった。

「うっ……げほっ！げほっ！」

全身から入りこんだウイルスが侵食していく。

それと同時に、先ほど飲んだばかりの精霊力制御疾患の薬の効果がき消されたように、パンデミック・ドラゴンから放たれる悪霊瘴気が彼女の体の中に入りこんで行った。

立つことすらできず、体を抱くようにして耐えながら、地面に倒れる。

「はぁ……はぁ……」

呼吸のペースもおかしい。さらに、全身から汗が噴き出ている。

だがこれでも、最悪の事態にはなっていない。

『ほう、俺様のプレスを受けてもまだその程度で済むとはな。褒めてやるぞ人間』

口の中にエネルギーを集約させていくパンデミック・ドラゴン。

香苗は自分の体の中を侵食するウイルスが発する気味の悪い何かに涙を流しながら、それを視界の端で見た。

今の状態であれを受けたら……。

(いや……し、死にたくない！)

内心で絶叫するが、そもそも人の気配のないところまで誘い込まれた時点で、彼女の負けだ。

『さあ、死ねー！』

パンデミック・ドラゴンがブレスを放出する。

その時……。

『させるかー！』

彼女の前にドーハスーラが飛びだしてきて、右手の杖から波動を放出してブレスにぶつける。

精霊の格。そしてそもそもお互いの攻撃力を考慮しても、ドーハスーラの方がステータスは上。

押し勝っているのはドーハスーラだ。

『チツ。邪魔が入ったか』

『我が主からいやな予感がすると聞いて、来てみればこんなことになっているとはな。最近のホームページは嘘っぱちらしい』

『ククク。人間が作るものだぞ？器用なものが作ったからと言って上手くできているとは限らないことくらい知っているだろうに』

『それに関しては同意見だが、今は貴様の相手をしている暇はないのでな。尻尾を巻いて逃げるといふのなら見逃してやってもいいぞ？』

『なるほど、それ相応に、お前にとっても大切な存在らしい』

パンデミック・ドラゴンは口の中にブレスをためる。

『チツー！』

ドーハスーラは舌打ちすると、波動を集めて壁にする。

『あ、あの……』

『黙っている。お前と話している余裕もないのだからな』

ドーハスーラは右手の杖を振って、香苗の体から悪霊瘴気を抽出していく。

だがその後ろで、ブレスを受ける壁が崩れ始めた。

『か、壁が……』

『こんな即席の壁で、難易度Aの悪霊を止められないことくらい我が一番分かっているから黙っている！』

ドーハスーラは叫ぶ。

彼はもともと、パンデミック・ドラゴンよりも上位の悪霊だ。

しかし、彼の得意分野は単なる『制圧』であり、守りながら戦うことに特化してなどいない。

元々の悪霊としての格で言ってもパンデミック・ドラゴンより上なのだが、そんなドーハスーラを困らせるくらい、パンデミック・ドラゴンのウイルスと、精霊力制御疾患というものは特殊性がありすぎる。

『ぐあつー！』

遂に壁を貫通してドーハスーラに直撃する。

だが、ドーハスーラは抽出をやめなかった。

まずこれを抜いておかないと、ウイルスの除去どころの話ではないことを、遊月よりも知っているからである。

「わ、私は……」

『だから黙っているー！というかレッドアイズはどこで油を売っているんだー！』

ドーハスーラは怒鳴り散らす、もしも来れないとなれば、盛大に足止めをくらっていると分かっている、それ以上は責めない。

『ほう、やはり元々の格の差があるか。なら、それを縮めるとしよう』
パンデミック・ドラゴンは、不気味な液体を口の中にためていく。
そして、それを一気にドーハスーラめがけて放出した。

『あれをくらうと我でも少々マズいー！』

アンデットワールドで療養できるが、だからと言って喰らいたくはないものだ。

だが、ここで黙っていた者が動いた。

特殊な形のその数字が、ドーハスーラと香苗の視界に入る。

次の瞬間。ドーハスーラを守るようにバリアが出現。

パンデミック・ドラゴンのウイルスボールは、バリアに当たると霧散していった。

『これは……なるほど、まだ認めている訳ではないようだが、粹なことをするものだ』

そう言っつて、ドーハスーラは抽出を続ける。

パンデミック・ドラゴンは驚いたように何度もウイルスボールをぶつけるが、バリアには何の影響もない。

そして。

『よし、抽出が完了したぞ。私の役目は終わりだ。消え去れ！』

ドーハスーラが振り向くと、右手の杖で波動を集約してパンデミック・ドラゴンにぶつける。

ひるんだようだが、すぐに体勢を立て直した。

『ぐ……仕方がない。ここは一旦引くでしょう』

次の瞬間、パンデミック・ドラゴンは消えて行った。

ドーハスーラは舌打ちする。

『チツ……どうやら所有者が近くににいるようだな。だが、探している時間はない。速く運ぶとしよう』

ものすごく背中が痛いのを我慢しながらそんなことを言うドーハスーラ。

世間体を気にするものは見栄を張りがちだが、彼クラスになると田舎の猿芝居だ。

『この程度はなんてことはない』と遠まわしに言っているようなものだが、それが香苗にわかるくらいである。

それはともかく、まだウイルスは抜かれていない。

だが、このドーハスーラが、誰のものなのかを香苗は把握した。体の中に不快感は残っているが、そつと、香苗は目を閉じるのだった。

第十三話

「……あ」

目を開けると真夜中だった。

そして、自分はまた、病院にいるのだと分かった。

「私、助かったんですね……」

香苗はそう呟く。

だが、何かがおかしいと思った。

不快感は体の中から取り除かれているが、今まで持っていたものが少し変わっているような気がする。

香苗は目線を動かすと、とあるランプが点滅していることが分かった。

おそらく、自分が起きたことを知らせるものだろう。

すぐに、自分のそばにあったモニターが付いた。

映されているのは、昨日見た伊賀和志という医者男性だ。

だが、彼の表情は優れない。

思えば変だ。

今、香苗がいる病室は窓がない。通気口はあるのだが、外部に出るための手段がドアしかない。

自分に何かまだ何か問題が残っていることを認識するのに苦労はしなかった。

香苗は慌てて、ベッドの上で正座する。

「香苗さん。目が覚めたようですね」

「あ、はい……不快感がなくなって、今は気分がとてもいいです。ありがとうございます」

「それはいいのですが……一つ。問題が残っています」

「……はい」

聞きたいとは思わなかった。

だが、知らないのも怖かった。

「今、まだ香苗さんの中には、とあるウイルスが残っています」

「……え？」

体の中に何も不快感はない。

だというのに、何故そのようなことを言うのだろう。

伊賀和志は苦い顔で続ける。

「特定の悪霊にしか作り出せないものです」

伊賀和志はそう前置きする。

「まだ、どこの病院でも取り除けないウイルスです。名前は『付着型空気感染ウイルス』……これは、本来は空気感染しないウイルスを、空気感染が引き起こす可能性が高いものに変えてしまうものなのです」
いやな汗が流れる。

「本来このウイルスは、自分に適合するウイルスでなければ付着することすらできないものですが……今、香苗さんの体内には、『精霊力制御疾患』に適合するものが入りこんでいます」

「そ、そんな……」

自分が戦っていればいい。

そんなウイルスだったはずだ。

だが、なんだそれは。

よりによって、なんでそんなものを、あのドラゴンは作っていたのか。

「難易度Aの悪霊の影響と聞いています。現段階で、治療は不可能と なっています」

「あの、こんな窓もない部屋にいるのは……」

「……現段階で、香苗さんはこうしてモニター越しに話すことはできませんが、実際に同じ部屋で話すのは不可能と言うことになって います」

それほど、空気感染の可能性が高くなっている。ということだ。

「私にできるのは、ここまでです。今は全力で、このウイルスを倒すための手段を模索しているところです」

「は、はい。あの……お願いします」

うつむいたままで、香苗はそうつぶやく。

もう、それしか言うことはできない。

ウイルスの対処など、自分にはどうにもできないのだ。

「……本当に、お願いします」

「分かっています。それでは、また」

そういつて、モニターは何も表示しなくなった。

「うっ……ぐすっ……」

膝の上で握る自分の手に、涙が落ちる。

「うわあああああああああああああ！」

崩壊する。

何故、自分だけこんなことになるのか。

ここまで戦ってきたじゃないか。

ここまで我慢してきたじゃないか。

まだ足りないのか。

まだ自分に、こんな不幸が訪れるのか。

彼女には分からない。

自らが借金を背負って生きているなどと言うことを、彼女は知らない。

「う、うう、ぐす」

枕に顔をうずめて、涙をこらえる。声を抑える。

だが……何かが変わるわけじゃない。

ただ、彼女は泣きつかれるだけだった。

★

「遊月。聞いたか？」

「勿論だ」

遊月は英明から、江藤のことを聞いた。

厄介なウイルスがまだ体の中に残っていること。

江藤はこの学校の中等部二年生なので、休んでいる理由を確認することくらいは楽だった。

「一体、どうしてこんなことに……」

「分からない。私がいたらどうにかなったのか、英明がいたらどうにかなったのか、それすらもわからない」

遊月はそう言うしかない。

ドーハスーラなら、仮にウイルスを受けたとしても、終わりも始まりもないので、またもと通りになる。

だが、人間は違う。

始まりも終わりもある。

「まだ、香苗ちゃん以外には感染してないんだよな」

「そもそも、ウイルスを抱えている人間に対応するんだ。それ相應の防護服を身に纏っていたのは間違いない。だから、まだ薬と体内の免疫でどうにかできるレベルに収まったそうさ。対応したものの達が検査し忘れてたら、被害が拡大していた可能性は十分にある」

「そんな強いのか？」

「それを可能とするのが難易度Aの悪霊だ」

そこまで話した時、大東が視界の端に映った。

「あ、遊月君」

大東が走って来る。

「まだ教室にいたんだ」

「ああ」

「あの……香苗ちゃんのこと聞いてる？」

「全て聞いている」

「……そう」

そして大東は、遊月に期待を込めたような視線を向ける。

「ねえ、遊月君。何か解決策はないの？」

「……解決策はない」

「そんな……」

「そもそも私は専門家じゃない。私にだってできることに限度はある。知っていることは限られている」

「でも……」

「でもと言っても駄目だ。解決策を知りたいというのなら、他を当たるといい」

「わかった。他の人に聞いて来る」

そういつて走って行く大東。

それを見送る遊月に対して、英明は溜息を吐いた。

「解決策はない……か。別に何かあるんだろ？」

英明が聞いて来る。

「ああ。だが、そのためには悪霊本体を探す必要がある。その情報があるとするれば……」

「まっ、DGCかセキュリティだよな」

「そういうことだ。というわけで付いて来い」

「ハッハッハ！拒否しないことが分かってるからって予定すら聞かないって言うのはちよつとアレだぜ？遊月」

「私がそんなこと知るか」

「まっ、いいぜ。今日も非番だしな」

そういうわけで、遊月と英明はDGCに乗りこむことになった。

★

「いやー……いつ来てもでかいよなあ。ここ」

「そうだな。だが、そこまで良いもんじゃなさそうだけだな」

「俺も思うが、どうやって聞きだすんだ？」

「正面から聞きに行くに決まってるだろ」

遊月は即答する。

そして実際に、『DGC・アムネシア支部』の建物に入って行った。

「頼りになるねえ」

英明はそれについていく。

中ではそれ相応に五月蠅いことになっているようだ。

もとより、討伐難易度Aの悪霊が出現し、そしてその被害者が出たのだ。

外部からの応援要請が出るほどのもの。

騒ぎになるかどうかはともかく、ざわついてすらいないとなれば逆に問題である。

遊月はまっすぐ一般客用の受付に行った。

前に来たときとは別の女性だ。

「本日はどのようなご用件でしょうか」

「昨日確認された難易度Aの悪霊の情報が知りたいんだ。アンタの権限で見せることができるものを全て見せてくれ」

遊月のストレートな言い方に受付の女性は驚いたようだが、避難する場合のホームページにアップする資料も作っているはずだ。

受付を任された職員でも、出せる物はある。

「少々お待ちください」

女性職員は奥に走って行った。

それを見た遊月は、カウンターから離れて英明のところに行った。

「……結構ストレートに言うんだな」

「ああいわないと向こうのペースに持って行かれるからな」

そんなことを話していた時、近くを歩いていた女性が話しかけて来た。

「あなた達、そんな情報を持ちだしてどうするつもりなの？」

遊月は振り向いた。

黒い髪を伸ばして銀縁の眼鏡をかけた女性だった。

「ちよつとやることがあるだけだ」

「そのやることって何？」

「江藤をどうにかする手段を手に入れる。それだけだ」

「……江藤って誰？」

本当に知らなさそうに首をかしげている女性。

遊月と英明は思わず目を合わせる。

「昨日、難易度Aの悪霊に遭遇して、今は隔離部屋に入ることになってしまった隊員だが……知らないのか？」

「知らないわ。なんでそんな間抜けのことを私が気にしなくちゃいけないのよ」

遊月と英明を軽蔑するような目で見る女性。

遊月は何と言うか、呆れた。

「おい、そりゃねえだろ。自分の仲間が、悪霊のせいで傷ついてんだぞ」

だが、英明は我慢ならなかったようだ。

「だから知らないって言ってるでしょ。私はこれからホームページの更新をしなくちゃいけないんだから、そんなこと気にしてる暇なんてないのよ」

「……ホームページ?」

「そうよ。『悪霊対策ホームページ』って知らない?あれの南東地区は私が担当してるのよ」

まるでなじるような言い方だ。

遊月は冷めきつたままだが、英明はそんなことはない。

「ふざけんな!隔離施設に送られた江藤香苗は、南東地区で被害にあっただぞ!」

「だから、私はそんな難易度Aの悪霊が出たなんて資料はもらってないわよ。運が悪かったんじゃない?」

「てめえ……」

「英明。もうやめろ」

「だが……」

「お前が熱くなりすぎだ」

「フン。アンタは分かっているじゃない」

「何を言っている。私は熱くなっている英明を注意しただけで、君の態度が正しいだなんて一言も言っていないぞ」

「はっ?」

女性はすつとぼけたような表情になった。

「私は別に、君がそんな態度だったとしても、業務さえきっちりこなしているというのなら構わない」

「だから、私はちゃんと……」

「本当に昨日。ノルマをこなしたのか?言い換えようか。ノルマを達成したうえで、指示を出したのか?制服のバッジを見る限り、管理官のようだが」

「は?当たり前でしょ」

「本当に全部見たのか?重要事項が書かれた資料が配布されなかったのか?」

「されてないわよ!ふざけたこと言っていると、セキュリティにつきだすからね!」

怒鳴り始めた女性。

だが、遊月は腐った目で、冷めたように見るだけだ。

「……そうか」

遊月が視線を逸らすと、そこには、少し大きめの茶封筒を持った先ほどの職員がいた。

遊月はそこまで歩いて行って、職員からパツと茶封筒を奪うようにとつた。

そして、遊月はそのまま中身を見る。

遊月は呆れたような目で、目的のものを見つけた。

『アムネシア南東地区にて、討伐難易度Aの危険な個体が確認されている。遭遇確率15%だが、任務発行の際に管理官は巡回任務を担当する者に対して厳重に注意することを義務付けることとする。担当室からホームページに注意書きして置くこと』

そうかかれたものだ。

日付も一緒に確認すると、昨日の朝に配布されたものだ。

「なあ、君に配布された書類の中に、こういった文のものが混じっている資料があつたはずなんだが」

遊月はその紙を見せる。

女性は受け取って読んでいる。

一瞬だけ表情が変わった。

「私はこんなもの知らないわよ」

「そうか……」

遊月は紙を奪うようにとつて、茶封筒の中に入れる。

「英明、行くぞ」

「え、遊月。でも……」

「もうここに用はない」

そういって、茶封筒を持ってきた鞆にしまった時だった。

「あの江藤香苗ってやつ？アイツ隔離施設に送られたみたいだぜ」

「えー、マジ？アイツウザかったよね。なんか、不幸だけど頑張ってます。みたいな雰囲気出しててさ」

「だよな。精霊力制御疾患だって？僕達才能のあるデュエリストにうつたらどう責任取るんだっつーの」

ゲラゲラ笑いながらそんなことを話している三人組がいた。

「……一部がクズだと、全体がゴミに見えるっていうのは本当なんだな」

遊月はそんなことを呟いた。

三人組は遊月の呟きが聞こえたようだ。

「はっ？何言ってるんだお前」

「部外者がうだうだ言ってるんじゃないわよ。アンタみたいなのを器が小さいっていうのよ。分かる？」

「DGCの中でも僕達は上位のデュエリストなんだ。間抜けがいると僕たちの評判が下がる。いなくなるのが一番いいんだ。正義は僕たちにある」

遊月は呆れた。

「一応言っておくが……私はDGCという組織を持つ『育成システム』は評価するが、君たち個人の評価などしたことはない」

「何言ってるんだ？」

「この場所は、『守りたい』って思う奴がくる場所なんだ。お前たちみたいな、椅子にこだわるような天才気取りがいていい場所じゃないと言っている」

「はあ？お前、DGCに喧嘩売ってるの？」

「違うな。お前たち三人をバカにしている」

どうやら、遊月は怒っているようだ。

大きな声を出すわけではない。

ただ、その中にある冷たい激情。

英明はそれを恐れたかのように、先ほどまでは熱くなっていたのに何も言わない。

「舐めてんのか？今ここでお前を潰してやってもいいんだぞ！」

騒いでいるが、それを気にする遊月ではない。

「……っ！」

遊月は少し、フロア全体を威圧した。

三人組も、先ほどまで話していた女性も、そしてその周りにいる全員が、何も言わなくなった。

「最初、彼らはバラバラだった」

そんな中、遊月は口を開く。

「利益なんて要らないから、守りたいって思う酔狂な連中だったが、それでも彼らは、バラバラだった」

「個人でも強者であった彼らは、異なる場所でお互いに干渉しないように、完全に分割して守っていた」

「誰かが危険に立つことになっても、恩の話をするのが嫌なのか、誰かが誰かを頼ることはなかった」

「そんな無茶で、無謀で、少数精鋭なんて言い訳をしながらも、彼らは守れてしまっていた」

「だがそんな彼らにも、守りたいと思う女が出来た」

「全員がその女のことを守りたいと常日頃から願って、近くまで来たときは最優先でまもるくらいに」

「恋なのか、愛なのか、何かに惚れたのかは分からずとも、彼らが守りたいと思う女だった」

「それでも、彼らは協力するということはなかった」

「集まることはあっても、共同はなかった」

「だがそれでも、守れてしまっていた」

「だから、ずっと続くと思っていた」

「しかし、そんなものは幻想にすぎなかった」

「全員は必要ない。でも、何人が集まらなければ勝てない。そんな微妙な敵だったはずだ」

「一人で勝てるようなものではないと誰もが思いながらも、『特例』だとか、『前例』を作りたくなかった彼らは、集まるなどと誰も口にしなかった」

「そんな馬鹿な場所で、女から『集まろう』なんて言葉が出てくるのは必然だっただろう」

「だがしかし、彼らは首を縦に振らなかった」

「それぞれが持っている過去が起因し、共同で事に当たるということを、特例を作るということを否定する」

「誰か一人が立ち向かって碎けなければ、彼らは分からなかったのかもしれない」

「変わるの嫌だ。できなかつたのならそいつが悪い。そいつが全部悪くないとすれば、自分たちにも原因があることになる。そんなことは認められない。変わるの嫌だ。変わるの嫌だ」

「捨てざるべき意地をバカな男たちが抱えているなか……女はついに、たった一人でそれに挑んだ」

「たった一人では勝てないそれに」

「奇跡など起こらなかつた。奇跡を望んだ男たちを、幸せな世界の女神は見えていなかった」

「二人では勝てないことが証明された」

「守りたいと思いつながらも、手を握りたくはない男たちは、この現実
身を震わせる」

「だれにも看取られることなくこの世を去った女を思つて、涙を流し
た。自らを呪つた」

「そして遂に、彼らは手を取り合つた」

「過ちを繰り返さないために」

「同じ間違いをしないように」

「全員で向かつた」

「もともと全員が必要じゃなかつたそれを倒すのは、楽なことだつた」

「そして彼らは考える」

「自分たちだけじゃない。何かを守ろうとしても、手を取ることがで
きなくて、何かを成し遂げられず終わるものがあるのではないか」

「耐えられなかつた」

「そして、目を背けることをやめると誓つたばかりだつた」

「彼らは自分たちの力を束ねて、頭を下げて専門家に頼つて、システム
を作り上げようとする」

「最初はどううまくいかなかつた」

「器用なものが作り上げたものが、上手くできているとは限らない」

「強いものが作り上げたものが、強くできているとは限らない」

「だがそれでも、もともと頑固な彼らは、なんとかそれを作り上げる」

「もともと大人数でも耐えられる箱であるそれを、広めていった」

「人は集まって、少しずつ功績を積んで、『デュエルで人を守る者たち』……『デュエルガードクラスター』は、認められ、そして人を守るために、今も多くのものを鍛え、そして守っている」

遊月はそういって、あたりを見渡す。

この場所に来た理由に後悔している者。

信念に感動した者。

さまざまな意思が交錯する中、遊月は三人組を見る。

彼らは、口をボーっとあけて、ただ遊月を見ていた。

そんな彼らに、遊月は言う。

「人が何かを作り上げたとき、打算だろうと信念だろうと、必ず何かが生かされている。この場所は打算で作られたものじゃない。自らのデッサンに魂を注ぎ込んで、もがき苦しんで、それでも、さらに多くのものを守るために手を取り合う。そんな場所なんだ」

遊月は見下ろす。

三人は、自分たちが腰を抜かしていることにすら気が付いていなかった。

「私のスピーチは終わりだ。これを聞いて何を思うかは私にもわからない。私の話を否定しようとかまわない。だが、何も変わらないというのであれば……私なら、君たちを見限るのに苦労しないだろうな。

英明。行くぞ」

「あ、ああ……」

出入り口に向かって歩き始める遊月。
あわてたように、英明は追いかけた。

★

「なあ、遊月。お前、この場所の創設秘話なんてどこで聞いたんだ？」
「……今はその話をしている場合じゃないだろう」

二人はDホイールに乗って走っていた。

「だって、まるで見てきたような言い方だったじゃねえか。DGCって、創設されてかなりの年月が経過してるぜ？」

「……」

遊月は何も言わなかった。

英明は溜息を吐く。

「まあ、言いたくねえんらしいけどよ」

「ならそうしてくれると助かる」

「はあ……で、場所はわかってるんだよな」

「もちろんだ。でなければDホイールに乗るのではなく、資料室に入っている……と、このあたりにいるはずだ」

そういうと、遊月のそばにドーハスーラが出現する。

『ふう、まだちよつと背中が痛い、まあいい』

(サーチは頼むぞ)

『問題ない。最後の一撃でマーキングしておいたからな。近くにいるのなら確実にわかる。次の角を右だ。そこからはずっとまっすぐ進めばいい』

(了解)

ドーハスーラは消えていった。

「英明。次の角を右だ。そのあとはまっすぐ進むぞ」

「わかったぜ」

そして曲がった時だった。

「あー……これ。待ち伏せされていた感じか？」

「いや、それにしてもバリケードが薄い。念には念を入れた結果だろう」

簡単に言うと、『死』と書かれた細菌のようなものがふよふよ浮いて

いる。

「ま、関係ねえけどな」

英明はデュエルディスクに二枚のカードを入れて、そしてベルトに接続する。

遊月は『レッドアイズ・トランスマイグレーション』のカードを手にとった。そしてひよつこりと、『儀式魔人デザイナー』が出現する。

「行くぞ。レッドアイズ」『了解した』

「変身ー」『マスク・チェンジ ヴェイバー』

遊月が炎を包んで、『ロード・オブ・ザ・レッド』に。

英明を水が包んで、『M・HERO ヴェイバー』に。

それぞれ姿を変えた。

バイクに乗ったまま姿を変えた二人は、容赦なくウイルスたちに突っ込んでいく。

そして突入したが、罨カードの効果を受けないようになるデザイナーズの間を得たロード・オブ・ザ・レッド、そして、破壊効果であるウイルスは、破壊耐性を持つヴェイバーにはそれぞれ通用しない。

あつという間にウイルスエリアを抜ける。

すると、遠くのほうに一台のDホイールが見えた。

そしてそのそばには、パンデミック・ドラゴンの姿がある。

「なるほどな。アイツが犯人か」

「どうやらそういうことらしいな」

二人はスピードを上げる。

すると、前を走っていたDホイールが二人に気が付いた。

そしてこちらを向く。

その顔に、遊月は見覚えがあった。

「米倉義之……候補の一人だったが、やはりお前か」

「貴様。どこまでも私の邪魔をするか！」

パンデミック・ドラゴンの持ち主。

それは、もともと管理職で上官だった米倉義之だ。

「なるほどな。遊月をどうにかすることはできないと踏んで、政令力制御疾患を抱えた香苗ちゃんを狙ったってわけか」

「うるさい！私が今まで、どれほど多くのものを積み上げたと思っている！小僧、お前にはわからんだろうが——」

「私が小僧か。まあどうでもいい。やるのかやらないのか。どっちだ」

「チツ。やれ！パンデミック・ドラゴン」

『マスター。俺様からはデュエルで決着つけることを勧めませ。あの遊月って男。俺様よりも強い悪霊を所有しているからな』

「何!?!」

そういうと、ドーハスーラが高笑いとともに出現。

『フハハハハ！我を呼んだか？下々の悪霊よ!』

登場とともにそのセリフはどうなんだ。ドーハスーラ。

「チツ。ならデュエルだ」

「そうと決まれば、死後の世界の広さを教えてやる」

遊月はロード・オブ・ザ・レッドを解除して、英明はベルトからディスクを外してDホイールにセットしなおした。ドーハスーラも再び待機する。

遊月。英明。義之はカードを五枚ドロウして、パンデミック・ドラゴンはカードを五枚出現させる。

「『デュエル!』」

遊月&英明 LP8000

義之&PD LP8000

「私の先行!」

義之のディスクにターンランプがつく。

「私は手札から魔法カード『クリティウスの牙』を発動!」

「な……クリティウス!?!」

「私は手札の『死のデツキ破壊ウイルス』を媒体とし、このモンスターを特殊召喚する。あらわれろ。『デス・ウイルス・ドラゴン』!」

デス・ウイルス・ドラゴン ATK1900 ☆4

「特殊召喚成功時に効果が発動する。さあ、不死原遊月。手札を見せてもらうぞ。攻撃力が1500以上のモンスターを破壊する」

遊月の手札が、それぞれのデュエリストのモニターに表示される。

『屍界のバンシー』 ATK1800

『ピラミッド・タートル』 ATK1200

『死霊王ドーハスーラ』 ATK2800

『馬頭鬼』 ATK1700

『タツネクロ』 ATK 500

(あ。これ踏んだな)

英明は絶句する。

「効果によって、屍界のバンシー。ドーハスーラ。馬頭鬼が破壊される」

そして淡々と進める遊月。

どちらがひどいことをしているのかわからなくなってきた。

「私はターンエンドだ」

セットカードはないが、悲観している様子はない。

手札誘発を握っているのだろうか。

「エンドフェイズ。墓地から『屍界のバンシー』の効果を発動。このカードを除外することで、デッキから『アンデットワールド』を発動する」

重苦しくなるハイウェイ。

だが、遊月が混ざるといふことはこういうことなのだ。

「なら、俺のターンだ。ドローー！」

勢いよくカードを引く英明。

「ドローカードを確認させてもらおうか」

「俺が引いたのは『E・HERO ソリッドマン』だ。攻撃力は1300だぜ！」

「チッ。雑魚モンスターめ」

エアーマンやオネステイ・ネオスなど、思わず悲鳴を上げたくなるようなカードはいろいろあるが、ドローカード一枚だけなら影響力はほぼ皆無である。

「そしてスタンバイフェイズ！墓地からドーハスーラの効果発動！」

(従え、ドーハスーラ)

遊月のデュエルディスクから闇があふれて、死霊たちの王が降臨す

る。

守備表示だけどな。

死霊王ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「俺は手札から『E・HERO ソリッドマン』を通常召喚！」

E・HERO ソリッドマン ATK1300 ☆4

「召喚成功時、ソリッドマンの効果発動。さらに、アンデットワールドの影響でアンデット族になっているソリッドマンの効果が発動したことで、ドーハスーラの効果が発動できる！デス・ウイルス・ドラゴンを除外するぜ！」

(ドーハスーラ。やれ)

『うむ』

ドーハスーラが右手の杖を振りかぶって、波動を叩き込む。

デス・ウイルス・ドラゴンは消滅した。

「チェーン解決。ソリッドマンの効果で、手札から『V・HERO

ヴァイオン』を特殊召喚！」

V・HERO ヴァイオン ATK1000 ☆4

「ヴァイオンの効果発動。デッキからHEROを墓地に送る」

「フーン！モンスターを墓地に送ったからといって安心して展開するのは悪手だな。私は『無限泡影』を手札から発動！私のフィールドにカードがないとき、このカードは手札から発動できる。ヴァイオンの効果を無効にさせてもらおうか！」

「なんでドーハスーラの時に使わねえんだよ！まあいいさ。『フィールドのモンスターを対象にとるスペルスピード2の無効効果』は、俺には通用しない！さあ、ヒーローシヨウの時間だぜ！」

英明は手札から一枚のカードをディスクにたたきつける。

「俺は手札から速攻魔法、『マスク・チェンジ』を発動！対象は闇属性のヴァイオン！」

ヴァイオンが仮面に手を当てると、彼を闇が包み込む。

「変身召喚！レベル6『M・HERO 闇鬼』！」

M・HERO 闇鬼 ATK2800 ☆6

そしてバイクに乗って出現する闇鬼。

「そして、ヴァイオンが墓地に送られたことで、対象不在となって『無限泡影』は不発になる！」

そのまま消滅していく『無限泡影』

「ば、馬鹿な。こんな回避方法が……」

「せっかくデッキを触るんだ。『灰流うらら』なら危なかったが、そんなものは通用しないぜ」

そして、墓地のヴァイオンのカードが光る。

「ヴァイオンの効果処理だ。デッキからHEROを一体墓地に送る。

『E・HERO シャドー・ミスト』だ！ただし、効果は使わない」「何?」

「忘れてねえか？俺は墓地に存在する『馬頭鬼』を除外して効果発動。墓地に送ったシャドー・ミストを特殊召喚する！」

E・HERO シャドー・ミスト ATK1000 ☆4

「そうか、アンデットワールドの効果で……」

「そうさ。お互いのフィールドと墓地のモンスターはアンデット族になっっている！」

種族指定ではなく名称指定のカテゴリであれば、馬頭鬼は汎用蘇生カードになる。

「シャドー・ミストの効果発動。デッキから二枚目の『マスク・チェンジ』を手札に加える」

準備完了とばかりに、英明は笑う。

「あらわれろー英雄たちが集うサーキットー！」

サーキットが出現する。

「アローヘッド確認！召喚条件はHERO二体。俺は闇鬼とシャドー・ミストを、リンクマーカーにセット。英雄は今混じりて、驚異の爆走者となる。リンク召喚！リンク2『X・HERO ワンダー・ドライバー』！」

X・HERO ワンダー・ドライバー ATK1900 LINK

2

「さあ、ヒーローショウだ！俺は手札から二枚目の『マスク・チェンジ』を発動。対象は地属性のソリッドマン！」

ソリッドマンが仮面に手を当てると、彼を砂嵐が包み込む。

「変身召喚！レベル8『M・HERO ダイアン』！」

そして出現するバイクに乗ったダイアン。

M・HERO ダイアン ATK2800 ☆8

「そしてこの瞬間、強制効果でワンダー・ドライバーがチェーン1で、魔法カードの効果で墓地に送られたソリッドマンがチェーン2で効果発動。墓地のHEROを守備表示で特殊召喚できる。ヴァイオンを特殊召喚！」

V・HERO ヴァイオン DFE1200 ☆4

「チェーン1のワンダー・ドライバーの効果で、墓地の『マスク・チェンジ』をセット。そしてヴァイオンの効果発動。墓地のソリッドマンを除外して、デッキから『置換融合』を手札に加える！」

まだまだ続く。

「さらに、手札から『ヒーロー・マスク』を発動。デッキから『E・HERO エアーマン』を落として、ドーハスーラをエアーマンとして扱う！」

ドーハスーラがエアーマンの仮面をかぶった。

なかなかシユールな光景である。

『……我が主よ。似合うか？』

(私に振るんじやない)

『むうう……まあ、アドバンスドロウのコストにされるよりはマシか』
マシンなのだろうか。

「あらわれろ！英雄たちが集うサーキット！」

あらわれるアローヘッド。

「アローヘッド確認！召喚条件はHERO二体以上。俺はリンク2のワンダー・ドライバーと、HERO扱いのドーハスーラを、リンクマーカーにセット！」

下と右下と左下。

「英雄たちが集う場所での力を束ね、恐怖を打破するものとして生まれ変われ！リンク召喚！リンク3『X・HERO ドレッドバスター』！」

X・HERO ドレッドバスター ATK2500 LINK3

「バトルフェイズ！ドレッドバスターでダイレクトアタック！」

「フーン！手札から『速攻のかかし』の効果が発動。このカードを捨てることで、バトルフェイズを終了させる」

「防御札があつたのか」

「ドールハスラーの効果を止めなかったのはこのためか」

それ相応に長い目で戦術を考えているということだろう。

無理にモンスターを残すよりも、次のデュエリストがいるのだから、相手の展開を妨害することに専念することは間違いない。

かなり失敗しているが、先行一ターン目で相手の手札を破壊するとは悪い手段ではないのだ。

「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

『なら、俺様のターンだ。ドロー！』

「ドローフェイズ。三度のヒーローショーだ！俺は『マスク・チェンジ』を発動。対象は闇属性のヴァイオン！」

ヴァイオンが仮面に手を当てると、闇があふれ出る。

「変身召喚！レベル6『M・HERO ダーク・ロウ』！」

M・HERO ダーク・ロウ ATK2400 ☆6

「そして、ドレッドバスターの効果で、このカードと、このカードのリンク先のHEROは、俺の墓地のHEROの種類一つにつき100ポイント。攻撃力が上昇する」

フィールドにいるのは、ドレッドバスター。ダイアン。ダーク・ロウ。

そして、墓地のHEROは、ソリッドマン、シャドー・ミスト、闇鬼、ワンダー・ドライバー、エアーマン、ヴァイオンの六種類。

遊月としては、わざわざソリッドマンを除外して置換融合をサーチする意味があつたのか聞きたいところだが、それはいいでしょう。

M・HERO ダイアン ATK2800↓3400

X・HERO ドレッドバスター ATK2500↓3100

M・HERO ダーク・ロウ ATK2400↓3000

攻撃力は十分だ。

「そしてスタンバイフェイズ！ドーハスーラがフィールドに帰還するぜ」

(出てくるんだ)

『うむ』

死霊王ドーハスーラ DFE2000 ☆8

『チツ……やっぱうぜえな』

『ククク。下々の悪霊が我にかなうわけもなからう』

まだアンデットワールドは適用されている。

モンスター効果は使えないはずだ。

『俺様は手札から『ツインツイスター』を発動。手札一枚をコストに、

『アンデットワールド』とセットカード一枚を破壊する』

「くそ……」

引つpegがされるアンデットワールド。

景色が元に戻った。

そして、セットされていた『置換融合』が破壊される。

「すまねえな。遊月」

「問題はない」

ドローカードにもよるが、まだ問題があるわけではない。

『そして俺様は、『D・D・R』を発動するぜ。手札一枚をコストに、あ
らわれる。我が分身『パンデミック・ドラゴン』！』

パンデミック・ドラゴン ATK2500 ☆7

「ツイツイのコストをダーク・ロウで除外して、そのまま特殊召喚して
きやがった」

『まつ。こんな使い方もあるってわけよ。俺様の効果を発動するぜ！

俺様はライフを3400払うことで、てめえのモンスターの攻撃力を

0まで下げる！』

「何!?!」

義之&PD LP8000↓4600

M・HERO ダイアン ATK3400↓0

X・HERO ドレッドバスター ATK3100↓0

M・HERO ダーク・ロウ ATK3000↓0

死霊王ドーハスーラ

ATK2800↓0

一気に攻撃力が下がるHEROたち。

ドーハスーラは守備表示だが、パンデミック・ドラゴンの攻撃力減少は永続だ。

『さらに、俺様も『クリティウスの牙』を発動するぜ。これで、手札の『タイラント・ウイング』を媒介として、出てこい！』
『タイラント・バースト・ドラゴン』！』

タイラント・バースト・ドラゴン ATK2900 ☆8

「あのモンスターは……」

『フハハハハ！タイラント・バースト・ドラゴンは全体攻撃ができるんだよ！まずはドレットドバスターを攻撃！』

「チツ。俺は罫カード『メタバース』を発動！デッキから『チキンレース』を発動する！」

フィールド魔法が発動される。

『なるほど、そういうことか』

チキンレースがあるとき、ライフが低いほうのプレイヤーはダメージを受けない。

ダメージを最小限に抑えたい場合、選択肢が多いカードであるメタバースの相棒となる。

『だが二回分。ダメージは受けてもらうぜ！』

遊月&英明 LP8000↓5100↓2200

「ぐああああああー！」

悪霊とのデュエルは衝撃も強い。

『そして、ダメージは与えられねえが、お前のモンスターはすべて破壊できるんだよ！』

三体のHEROとドーハスーラが砕け散った。

「英明。大丈夫か」

「なんの。これくらいどうってことないぜ」

肩で息をする英明。

遊月は次で決めたほうがいいと考えた。

『単なるやせ我慢じゃねえか。メインフェイズ2。ドーハスーラに出

てこられるとやってられねえからな。チキンレースの効果を使って、破壊してもらおうぜ』

義之&PD LP4600↓3600

『俺様はこれでターンエンドだ』

「ククク。いいぞ。パンデミック・ドラゴン。まだデス・ウイルス・ドラゴンの効果は残っている。このデュエル。私たちの勝ちだ」

勝利を確信する義之。

そんな彼を、遊月は冷めた目で見ていた。

「私のターンだ。ドロー」

「さあ。ドローカードを見せてもらおうか！」

「私はドローしたのは『アンデットワールド』。フィールド魔法だ」

「チツ。悪運のいい奴だ」

「このままメインフェイズ。私は墓地の『置換融合』の効果を発動。このカードを除外し、墓地のダーク・ロウをデッキに戻すことで。一枚ドローする」

まさか、置換融合をサーチすることによってここまで意味があったとは……。

遊月は英明のプレイングの評価を上方修正するのだった。

「通常ドロー以外でも、ドローなら見せてもらう」

「私が引いたのは……」

遊月はドローカードを見せる。

「『アンデット・ネクロナイズ』……魔法カードだ」

「ん？なんだそれは」

『んなつ！おい、やべえぞー！』

義之はわかっていないようだが、効果を知っているパンデミック・ドラゴンは本能が危険を告げる。

「続けるぞ」

この時点で、遊月の手札はすべて判明している。

『タツネクロ』『ピラミッド・タートル』『アンデットワールド』『アンデット・ネクロナイズ』

「私は『アンデットワールド』を発動」

再び広がり始める屍界。

「そして、タツネクロを通常召喚」

タツネクロ ATK500 ☆3

「通常召喚したタツネクロは、手札のモンスター一体と除外することでシンクロ召喚が可能となる」

「何!？」

「私はレベル4のピラミッド・タートルに、レベル3のタツネクロをチューニング。死した紅き眼の黒竜よ、屍界で湧き上がる怨念を宿し、君臨せよ。シンクロ召喚!レベル7『真紅眼の不屍竜』!」

真紅眼の不屍竜 ATK2400↓3600 ☆7

「そして魔法カード『アンデット・ネクロナイズ』を発動。レベル5以上のアンデット族モンスターが存在するとき、相手モンスター一体のコントロールを、ターン終了時まで奪うことができる」

「何!？」

「タイラント・バースト・ドラゴンのコントロールを得る。そして、不屍竜に装備」

真紅眼の不屍竜 ATK3600↓3500↓3900

「バトルフェイズだ。不屍竜で、パンデミック・ドラゴンを攻撃」

不屍竜が蒼い炎の黒炎弾をぶちかます。

義之&PD LP3600↓2200

『ぐおおお!』

「この瞬間、アンデット族モンスターが戦闘で破壊されたことで、不屍竜の効果発動」

遊月の墓地から闇が溢れ出す。

「終わりも始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の

魔眼を開け!『死霊王 ドーハスーラ』!」

死霊王 ドーハスーラ ATK2800 ☆8

『クッククク。これで、不死原遊月というデュエリストの二大エースが降臨したぞ!』

『ドーハスーラ。ちょっと静かにしろ。俺は歓喜の舞を踊るレイジングが危険すぎて、鎮めるのに苦労してるんだからな……!』

『あー、あれか』

何の話をしているのやら。

「まだ不屍竜の攻撃回数は残っている。やれ、不屍竜！ドーハスーラ！」

不屍竜が口の中に蒼い炎を再び集約させて、ドーハスーラが右手の杖に波動を集める。

「ちよ、ちよっと待て！私たちのライフは——」

義之の懇願はむなしく、不屍竜とドーハスーラは遠慮なくぶちかました。

義之&PD LP2200↓0

「デュエルは終わったが、まだすることはある。不屍竜！」

『わかっている』

不屍竜が全身から蒼い炎を噴き上げると、それを地面に流し込む。すると、パンデミック・ドラゴンの『悪霊の分身』が出現する。

『な……俺様が……』

すでにデュエルで敗北し、存在が消えていくパンデミック・ドラゴン。

そんなドラゴンを尻目に、ドーハスーラが波動を分身にあてる。すると、瘴気のようなものが漏れ始めた。

遊月がカプセルを取り出すと、その中に移動していく。

すべておさまると、遊月はふたを閉じた。

「ふう、ほしいものは手に入った」

「なら、速く香苗ちゃんのところに行って来いよ。俺はデュエルに負けても逃げてるあいつを追うからな。まあすでにフラフラだから捕まえるの簡単だけど」

そういつて、英明は義之を追った。

残された遊月はつぶやく。

「さて、あとは江藤が何を選ぶかだな」

第十四話

「……」

泣きつかれた。

香苗の現状としては、ただそれだけ。

自分が精霊力制御疾患だと知ったのは、四歳のころ。

その頃は、精霊力だとか、そんなことを言われてもわからなかった。

ただ分かったのは、自分が薬を飲み続けなければ、日常生活すら不可能だということ。

副作用が強く、まだ小さいころは体調不良ばかりで、病院で生活することも多かった。

薬は高価であり、物心ついた時から父親がいない香苗は、母親に負担をかけてばかり。

自分で薬代を稼ごうという気持ちになるのも、そう時間はかからなかった。

だが、精霊力制御疾患というものがどういうものか。と言うものを調べる人間はいても、そもそも『病気』というだけで避けるものがほとんどだった。

病院生活が長かったせいで、同世代との関係は薄い。

そんな中、無理が積み重なったのか、母親が亡くなった。

悲嘆にくれる暇もなく、実力があれば様々なものが免除されるアムネシアを目指した。

中学生になり、アムネシアに入学した後、疾患を抱えていることを隠しながらバイトを始めた。

だが、どこかから漏れてしまうその情報は広まり、うつるはずがない疾患を抱えているせいで、すぐにバイトも辞めさせられる。

そんな日々が続いた。

そしてそんな中で、DGCの募集ポスターを見つけた。

デュエルで強くなれば、給金も上がる。

そして、病気を抱えているものに対するそれ相応の援助も中には含まれていた。

何を言われるかはわからない。

だが、追いだされるといふことは表面上はまずない。

諦めていた香苗は、強くなることを決めた。

必死だった。貪欲だった。そして、無謀だった。

だが、それでも強くなりたかった。

『不幸』であると呼ばれるのは構わない。

だが、『弱い』のだと、『守られる側』であると言われるのが嫌だったのだろう。

努力が実を結んだ。と言うよりは、運がよかつたのだろう。

給金はそれ相応に増えて、薬を自分の金で買うことはできるようになった。

辛い日はない。

どこに行つても、この疾患を抱えているだけで、避けられ、蔑んだような目を向けられる。

頼ることを諦めていた。

そんな時、綾羽に出会った。

巡回の休憩中に会って、ちよつと話したくらい。

しかし、母親だけが味方だった彼女に取ってはとても大きいもの。いつからか、よくあつて話すようになった。

門限が厳しい綾羽だが、誰かと会話するのは良いものなのだ、そう思った。

でも、心のどこかで、自分が『守られる側』なのだと思ふような言葉を使う綾羽に対して、少しだけ苦手意識があつたかもしれない。

だから……助けてくれた遊月に会って、次に何か困つたことになつた時、綾羽ではなく遊月を頼った。

なぜ、遊月を頼ろうと思つたのか。それは香苗にはわからなかつたが。

様々なことを考えて、体験させられ、そして乗り越えてきた人生だった。

だがしかし、もう、外に出ることすらも許されない身になつてしまった。

「私は、弱くなんかない。私は……」

弱かったら、評価されない。

守られる側じゃなくて、守る側に立ちたい。

だが、彼女が背負っている借金は、そんな彼女を踏みにじるように、嘲笑うように、彼女の否定する。

「私は……」

その時、モニターのランプがついた。

そして、伊賀和志が映る。

「伊賀和志さん……」

「香苗さん。重要な話があります」

そう言う伊賀和志の声は、今までとは少しだけ違った。

まるで、選択を迫るような、そんな顔。

「まず、『精霊力制御疾患』と、『付着型空気感染』のウイルスが、『精霊力』を変質させたものである。ということ的前提に聞いてください」

「あ、はい。聞いたことがあります」

「分かりました……現段階で、香苗さんの体から、ウイルスを取り除くことはできません。しかし、そのウイルスすらも、体の中に抑え込んでしまう。そんな、強力なウイルスを入手することが出来ました」

「……え？」

思わず、とぼけたような声が出る香苗。

まだ、解決策がないと聞いて、一日も経過していない。

こんなに速く、こんな話が出てくるとは思っていなかった。

「……ど、どういうことですか？」

「簡単に言います。現段階で、漏れ出てしまうウイルスを取り除く、もしくは死滅させる手段はない。ならば、漏れ出てしまいそうになっていくウイルスが出てこれないほど、体内で集めようとするものを強化するウイルスを使う。ということです」

『精霊力制御疾患』のウイルスは確かに有害で、体外に出ることも当然あるが、感染するほど強くはない。

だが、『付着型空気感染ウイルス』は、その感染する可能性を引き上

げるだけ。

「それは……『精霊力制御疾患』のウイルスを強化する。ということですか？」

「はい。精霊力制御疾患の影響で、本来備わっている『排出機能』が『収集機能』に変わっています。その収集機能を強化することで、ウイルスが出てこれないように、体の中に抑える。ということになります」
壁を作ることとはできないのなら、吸収機能を強くして逃げられないようにする。ということだ。

「このウイルスを使えば、体内に存在するウイルスは、まず体の外に排出されることはなくなります。それほど強力なものです」

「あの……そのウイルスを使えば、この部屋から出ることはできますか？」

「もちろんです」

即答する伊賀和志。

香苗は唾をのんだ。

「さらに言えば体外にウイルスが放出されることはないでしょう。さらに言えば、ウイルスの収集能力が強すぎるので、血液にすら含まれなくなります」

「あの……それって……」

「はい。血液感染も性行為の感染もなくなります」

そこまでするを聞くと、素晴らしいものだ。

しかし、それだけでは無論ない。

「ですが、デメリットはあります」

解決はしない。といった。

ならば、デメリットがあるに決まっている。

「圧倒的なほど収集能力が強化されることで、本来ならわずかに体外に放出していたウイルスすらも体内で抱えることになり、今まで以上に精霊力の収集能力が急上昇します。これまで以上に強い薬を飲む必要があります。これはあくまでも私たちの試算ですが、三時間に一回。これまでに強い薬を飲む必要があるでしょう」
「……」

ただでさえ、今はひどいことになっているのだ。

これからは、それ以上にひどいことになる。

「悪霊に自ら接触する必要があるDGCに所属することはお勧めできません。最悪、強制的に除隊されることも考えられます」

「……」

この部屋から出て、誰かと触れ合うことはできる。

今までできなかったことだって、いくらでもできるようになる。

だがしかし、どれほど収集能力が高かったとしても、今まで通り、香苗が『病気』なのだという目線を向け続けるだろう。

ありもしないうつる可能性を見て、それだけに囚われて、ただ非難され、みんなが離れていく。

今まで以上にひどくなるだけ。

だが……心に残るこの希望は、いったいなんなのだろうか。

「最後に一つ。『このウイルスを使うことを選択した場合、選択肢を与えた責任はとる』……これが、不死原遊月君からの伝言です」

「ゆ、遊月さんが……」

「このウイルスを持ってきたのも、遊月君です。私からは以上で——」

伊賀和志が会話を終えようとした時。

「お、お願いします！そのウイルスを、私に使ってください！」

香苗の中にある何かが、それを叫んだ。

伊賀和志は驚いたような表情になる。

「……先ほども言いましたが、デメリットは大きいですよ」

「それでもいいんです。お願いします！」

「……わかりました。準備に取り掛かりましょう」

伊賀和志は、半ばあきらめたように、香苗の依頼を引き受けた。

★

「……」

辛い。

ウイルスが投与された香苗が考えたのは、まずそれだった。

すでに今までよりも強い薬を飲んでいますが、それでも、試算よりも吸収能力が激しいのか、気持ち悪さがなくならない。

「これが……ずっと……」

強くなるためには、挑まなければならない。

それは分かっている。

だが、ここまで辛いとは思わなかった。

「選んでしまったか」

「！」

病院のロビーまで歩いた時、そこには遊月が立っていた。

いつも通りの腐ったような目で、香苗を見ている。

「遊月さん」

「言ったことに嘘はない。選択肢を与えた責任はとる。が、とりあえずDGCに行くぞ。いろいろ説明する必要があるが、君は自分が今どうなっているかなんてわからないだろうからな」

「……はい」

ロビーを出て、お互いに制服姿で歩いていく。

「あの、遊月さん」

「なんだ？」

「遊月さんは、どうやってこのウイルスを手に入れたんですか？」

「君を襲った悪霊の力を利用しただけだ」

「……そうですか」

ただ倒して、そして負けたら挽回する手段はない。

そんな無責任なものにとらわれていた自分が恥ずかしくなった。

「ところで、君はこれからどうするんだ？」

「え？」

「DGCの給金システムはある程度知っているが、今のままだと、君は確実に金が足りなくなるぞ」

「そ、そんな……」

急に宣告されたそれは、香苗にとっては死活問題だった。

薬を買う金がなければ、日常生活すら不可能なのだ。

「責任をとるを言った以上、金は私が工面すればいい。それくらいの資金は私にはある」

「え……」

「こう見えてそれ相応に金があるということだ。で……君はどうする？ 言い換えれば、DGCで何がしたい」

「どういうことですか？」

「君にとつて本当に必要なのかということだ。DGCに所属せずに強くなつて、プロの大舞台で活躍するデュエリストが一体どれほどいると思つている。薬代に関しては私が工面するとなれば、稼ぐ必要はなくなるだろう。これからどうするんだ？」

「そ……それは……」

香苗は迷う。

続けたほうが良いような気はする。

だが、それがなぜなのか。

決めたはずなのに、いつの間にか、それは薬代を稼ぐことに目的が変わつていた気がする。

「さて、DGCについた。いろいろ話をしに行くぞ。ちなみに、上層部は君の状態をある程度把握している。医者とも話し合っているから、入ったからといって追い出されることはないはずだ」

「はい」

香苗は遊月について行つた。

自分が中に入ると、周りから驚愕の視線を向けられる。

隔離施設に入れられるほどの状態だったのに、なぜいるのかと考えている者もいるだろう。

「……」

居心地が悪いことに変わりはない。

だが、遊月がいたからだろうか。話し合いの場になれば、伝えることはしつかり決まつていて、香苗の主張を押し通すための材料をすべてそろえて発言しているため、結局は相手のほうが折れて話が通る。という感じになつている。

だがそれは言い換えるなら、香苗が戻ってくることを歓迎する者がいないということだ。

「さてと……宿舎のほうにも行くか」

「はい」

DGCに所属すると、好成绩であれば、部屋を借りれる。
三階にある自分の部屋まで上がった。
そして……。

「……え？」

自分の部屋の前に、自分の荷物がすべて運び出されていた。
ダンボール箱にいれられて積み上げられている。

「こ、これって……」

「ああ。君はこれからこの宿舎は使えなくなったよ」

振り向くと、こちらを軽蔑する目で見える中年男性がいた。

確か、この宿舎の管理人だったはず。

「あの、どういうことですか？」

「当たり前だろう。隔離施設に送られたんだ。君の事情を考えれば、なぜ送られたのかは一目瞭然。君が抱えてる病気がひどくなったんだろう。またいつそんなことが起きるかわからないのに、おいておけるわけがないだろうに」

「そんな……」

「ちゃんと業務をこなしていれば給料もいいんだ。どうせ貯めこんでるんだろ。だったらそれを使ってほかに住めばいい。ともかく、ここにはもう君は住めない。壁も床も張り替えて、次に住む人が決まってるからね。この宿舎にもう空きはないから、君はどのみち住めないよ。まあ、どこに住むにしても追い出されると思うがね」

「……」

「江藤。行くぞ」

「……はい」

中年男性は遊月を見て鼻で笑った。

「君も君だ。そんな病気を抱えた子をかばって、自分の時間を無駄に
してどうする」

「……」

遊月はあきれたように何も言わず、江藤を引っ張って宿舎を出た。

「……」

宿舎を出てからも、香苗は黙ったままだった。

「もう一度聞くが、どうするんだ？こんな場所に、君がいる価値があると思うのか？」

「私は……」

「一応言っておく。君はまだ弱いよ」

「……っ！」

「DGCにきてからの君の対応を見れば一目瞭然だ。歓迎されないし、そもそも拒否されることばかりだ。何をつかめるんだ？私なら、こんな場所はすぐに離れる」

「私は……」

「それともう一つ」

遊月は間をおいて言った。

「ここは確かに何かを守るための場所だ。だが、君は弱い。守られる側の君がいる場所ではない」

それを聞いた香苗は……。

「勝手に……勝手に決めないでください」

煮えたぎり始める。

「私にも、言いたいことはあります。やりたいことはあります。全部知ったようなことを、言わないでください！」

今までずっと我慢して、蓋をして、栓を閉めて、鍵をかけて、奥深くに沈めてきたもの。

それが、弱弱しい瞳の中で。

ずっと泣いていた心の奥で。

それは、少しずつ、燃えていく。

「私は、ここにいれば、誰かを守れると思ったから！誰かを守れる方法が知りたかったから！」

本当に守りたかったのは自分かもしれない。

だが、此処は、誰かを守るための場所だ。

誰かを守るために生まれたモノだ。

なら、自分も他人も、守れるはずじゃないか。

「逃げていたことは認めます。ずっと下を向いていたことは認めます。でもそれだって、何も考えずにただ選んだわけじゃないんです

！」

一步を踏み出すため？違う。

前を向くため？違う。

ならば、この怒りは何なのだろう。

「私は、自分の意思で、考えて選んで、ここに来たんです！」

ああ、そんなものは考えるまでもない。

怒りの理由が、分からないわけがない。

望まない言葉避けていただけ。

情けない、惨めだ。そんな陳腐な言葉で、自分の不幸を表現されて
たまるか。

どうしようもない未熟な意地だ。

避けていたそれに向き合わなければならぬ。

それに向き合う勇気がない自分に、腹が立たないわけがない。

「遊月さんには、感謝していることはたくさんあります」

恩を仇で返す。なんてことは絶対にしたくない。

そんなことをしたら、もう二度と戻れない。

優しい彼がそんなことをしないと頭で分かっている。

だけど、軽蔑されるのだと思っただけの自分の心が、そう断言して
しまうから。

「でも……私だって、ただ守られるだけの子供じゃないんです！」

信念がある。

弱くても、正しくなくても、無駄なものでも、バカにされてしまう
ようなものでも。

嘘で塗り固められ、自分の意見なんてほとんど残っていないような
ものでも。

それでも、今まで生きてきた。

学んだものがないなんて、誰にも言わせない。

「誰かを頼りにするだけじゃない。誰かに頼られる人になりたいんで
す！」

不幸であることが定められていると、証拠まで見せられた。

不幸の中で、自分が選ばなければならなかった。

だがそんな中でも、自分のような人間でも頑張れることを証明したいと考えて、何が悪い。

「だから……」

ようやく手にした。自分が行きたい場所に行く権利。

それを放棄すれば、もう二度と、自分の信念など通せない。

不幸だと言われようと、知ったことか。

手にすることが出来たのだ。

ようやくつかんだのだ。

進まないことを軽蔑するのなら、進むしかないに決まっている。

「だから私は、ここに来たんだ！」

吐きだされた少女の気持ち。

はつきり言つて、支離滅裂だ。

言いたいことが多すぎて、でも難しい言葉も深い言葉も見つからなくて、ただ思いついたことが口に出ただけ。

「はあ、はあ……」

肩で息をする江藤。

だが、その瞳の奥の炎は、まだ燃えている。

「……それだけなのか？」

「え？」

「言いたいことはそれだけなのかと聞いている。言っておくが……君がさつき言った程度の言葉なんて、世の中に溢れている。君がしゃべったからと言って、その言葉が重くなるわけじゃない」

「……！」

「言い足りないようだが、もう言葉なんて思いつかないだろう。だから……デュエルをしよう」

「デュエルを……」

「言いたいことが思いつかないのなら、自分の魂で組んだデッキで示してみる。それが一番、手っ取り早い」

遊月は距離をとって、デュエルディスクをつける。

「それなら……」

香苗もデュエルディスクを構える。

お互いにカードを五枚引いた。

「私は、私のデュエルで、強さを証明します」

「やってみろ。死後の世界の広さを教えてやる」

「デュエル！」

香苗 LP8000

遊月 LP8000

「私の先行！私は手札からフィールド魔法、『転回操車』を発動します！」

香苗の背後に車両ドッグが出現する。

「そして、手札から『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を妥協召喚します！」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト ATK0 ☆10

「転回操車の効果で、デッキから『無頼特急バトレイン』を、レベルを10にして特殊召喚です！」

無頼特急バトレイン ATK1800 ☆10

「さらに、手札から『弾丸特急バレット・ライナー』を特殊召喚！」

弾丸特急バレット・ライナー ATK3000 ☆10

「出てきてください。重機を呼び起こすサーキット！召喚条件は、機械族二体。私はバトレインとバレット・ライナーを、リンクマーカーにセット！新たな設計図で、いざ連結！リンク召喚！リンク2『機関重連アンガー・ナツクル』！」

機関重連アンガー・ナツクル ATK1500 LINK2

「特殊召喚成功時、手札から『重機貨列車デリツクレーン』を特殊召喚します！」

重機貨列車デリツクレーン ATK1400 ☆10

「私は……レベル10のナイト・エクスプレス・ナイトとデリツクレーンで、オーバーレイ！」

二体のモンスターが渦の中に飛び込んで行く。

そして、不思議な形の『81』の数字が出現。

しかし、ひび割れたと思ったなら、すぐに砕け散った。

「っ……エクシース召喚！リンク10『超弩級砲塔列車グスタフ・

マックス』!」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK3000 ★10

「……なるほどな。まだ認められたわけじゃないわけか」

「私は……グスタフ・マックスの効果を発動!遊月さんに2000ポイントのダメージを与えます!」

グスタフ・マックスの主砲が展開され、遊月を狙い打つ。

遊月 LP8000↓6000

「私は魔法カード『アイアンドロー』を発動して、カードを二枚ドロ。このまま二枚セットしてターンエンドです。バトレインの効果でデッキから二枚目の『ナイト・エクспレス・ナイト』を、バレット・ライナーの効果で、墓地のデリックレーンを手札に加えます」
「なるほど。私のターンだ。ドロ」

遊月はドロしたカードをチラツと見ると、そのまま発動する。

「私はドロフェイズ中、速攻魔法『手札断殺』を発動。お互いに二枚墓地に送って、二枚ドロする」

「ということは……」

「まあ君が想定している通りだと言っておこう。スタンバイフェイズ。『転回操車』が存在することで、効果発動だ」

遊月の墓地から闇が溢れてくる。

「終わりも始まりもない蛇の王よ。ウロボロス怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け!『死霊王 ドーハスーラ!』」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

『ククク。さて、腹芸真つ最中の我が主のもとに、我、降臨!』
(ふざけたことぬかしてるとアドバンスドロのコストにするぞ)

『ごめんなさい!』

謝るのは速い死霊たちの王。

というか、アドバンスドロがそんなに嫌か。

「メインフェイズだ。私は『儀式の下準備』を発動。デッキから『レットアイズ・トランスマイグレーション』と『ロード・オブ・ザ・レット』を手札に加える」

「え……」

「そして私は、『レッドアイズ・トランスマイグレーション』を発動。レベル8のドーハスーラをリリース」

『さて、行くでしょう！』

ドーハスーラが消えて、遊月を炎が包んで行く。

「儀式召喚。レベル8『ロード・オブ・ザ・レッド』」

ロード・オブ・ザ・レッド ATK2400

まるで変身したかのように出現するロード・オブ・ザ・レッド。いつ使ったとしても、どうやらこうなるようだ。

既にそれを見ているので、もう香苗も驚いたりしない。

「私は手札から『不知火の隠者』を召喚」

不知火の隠者 ATK500 ☆4

「隠者をリリースして効果発動。それにチェーン。ロード・オブ・ザ・レッドの効果が発動。私は、グスタフ・マックスを破壊する」

遊月の右手から蒼い炎の玉が出現して射出。

グスタフ・マックスは木っ端微塵に。

「そして、デッキから『ユニゾンビ』を特殊召喚する」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3

「さらに、ユニゾンビの第二の効果で、私を対象に発動。それにチェーンして、私の効果が発動。セットカードを破壊させてもらおうか」

「させません！私は速攻魔法『緊急ダイヤ』を発動します！」

若干慌てたような雰囲気ではあるが、香苗はカードを使う。

「緊急ダイヤの効果で、『無頼特急バトレイン』と、『弾丸特急バレット・ライナー』を、効果を無効にして特殊召喚します！」

無頼特急バトレイン DFE1000 ☆4

弾丸特急バレット・ライナー DFE 0 ☆10

「チェーン処理だ。緊急ダイヤを破壊。そしてデッキから『馬頭鬼』を墓地に送る」

ロード・オブ・ザ・レッド ☆8↓9

「チェーン処理が終わった後、転回操車の効果が発動します。私はデッキから、『爆走軌道フライング・ペガサス』を、レベル10にして特殊召喚します！」

爆走軌道フライング・ペガサス DFE1000 ☆10

「そして、フライング・ペガサスの効果で、墓地から『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を特殊召喚です！」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト DFE3000 ☆10

「さらに、機械族・地属性モンスターの特殊召喚成功により、手札から『重機貨列車デリックレイン』を特殊召喚！ステータスは半分になります」

重機貨列車デリックレイン DFE1000 ☆10

一気に並ぶ五体のモンスター。

だが、遊月の表情は変わらない。

「モンスターゾーンを埋めるほど並べたか……で、それがどうした」「え？」

「私は手札から速攻魔法『デーモンとの駆け引き』を発動。レベル8のドーハスーラが墓地に送られたことで発動条件を満たしている。

『バーサーク・デッド・ドラゴン』をデッキから特殊召喚」

バーサーク・デッド・ドラゴン ATK3500 ☆10

「ば……バーサーク・デッド・ドラゴン……」

「そして、墓地の馬頭鬼の効果発動。除外することで、不知火の隠者を特殊召喚」

不知火の隠者 ATK500 ☆4

「レベル4の隠者に、レベル3のユニゾンビをチューニング。死した紅き眼の黒竜よ、屍界で湧き上がる怨念を宿し、君臨せよ。シンクロ召喚。レベル7。『真紅眼の不屍竜』！」

真紅眼の不屍竜 ATK2400↓2800 ☆7

『ふむ、俺を出すか。それ相応に本気だな。マスター』

(気を抜いたらいつの間にか焼かれてるからな)

それが列車の怖いところだ。

「バトルフェイズ。バーサーク・デッド・ドラゴンで全てのモンスターに攻撃」

バーサーク・デッド・ドラゴンがブレスを放出して、香苗のモンス

ターを焼き払う。

香苗 LP8000↓6000

「ぐっ……」

いろいろモンスターを出していたが、攻撃表示だったのはアンガー・ナツクルだけだ。

他のモンスターは守備表示である。

「そして、レッドアイズと私で直接攻撃だ」

遊月が右手を前に出すと、レッドアイズも青い炎を口の中で作り出す。

それはそのまま、香苗を襲った。

香苗 LP6000↓3600↓600

「ぐっ……こ、こここまで差があつたなんて……」

「私はカードを二枚セットして、ターンエンドだ。バーサーク・デッド・ドラゴンの攻撃力が下がる」

バーサーク・デッド・ドラゴン ATK3500↓3000

「私は、バトレインの効果で、デッキから三枚目の『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を、バレット・ライナーの効果で、墓地の『重機貨列車デリックレイン』を手札に加えます！」

「まあ、それくらいしかできないだろうな」

「わ、私のターンです。ドロー！」

香苗は勢いよくドローする。

「スタンバイフェイズだ。私の墓地から、ドーハスーラが帰還する」

『ククク。なかなか豪華なフィールドになつてきたではないか』

死霊王ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「……！」

ドローしたカードを見た香苗は唾を飲んだ。

「まだ……まだ行けます！私は魔法カード『ブラック・ホール』を発動。フィールドのモンスターを全て破壊します！」

「なら、それにチェーンして私の効果だ。残ったセットカードを破壊させてもらおう」

「それにチェーンです！リバースカードオープン。罠カード『ロスタ

イム』！相手のライフが4000以上ある時、私のライフを、相手のライフよりも1000少ない数値にします！」

遊月のライフは6000だ。

香苗 LP600↓5000

「……そこまで一気に回復するとはな……」

「これで、全てのモンスターを破壊します！」

問答無用とばかりにすべてを飲み込むブラック・ホール。

遊月は二枚の伏せカードを使うことなく、全てのモンスターが破壊された。

「無理矢理突破するカードをドロウしたことは褒めるが……そこからどうするつもりだ？」

サーチ、サルベージしたカードの存在を考えれば、やれることは多いだろう。

だが、香苗の表情は優れない。

「私は……」

「強くなりたい。と君は言ったが、君が求める強さは何だ？」

「私は……守れるようになりたいんです。自分も、皆も、困っている人を、助けることができるようになりたいんです！」

「無理だな」

「！」

「守ることは誰にでもできるんだ。だが、今の江藤の実力では、助けることはできない」

「私は……」

悩んでいる。

だが、それでいいと遊月は思う。

悩むだけなら誰にでもできる。

そして、答えを出そうとするフリをすることは誰にでもできる。

だからこそ……自分の意思があるのなら、それは最も尊いものになる。

「私は、それでも前を向いて進むんです。今は悪夢でも、きつと……」
香苗は、手札のカードをデュエルディスクに叩きつける。

「私は、『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を妥協召喚して、手札の『重機貨列車デリックレイン』を特殊召喚します」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト ATK 0 ☆
10

重機貨列車デリックレイン ATK1400

☆10

「私は……今は進むんです！幼いころに憧れた、素敵な夢を掴むために！」

今まで、周りを守るだとか、そんな自分を見ない言葉しか口にできなかった。

自分のことを言うとしても、行きつく先は自分ではなかった。

だが、そんな彼女から漏れた。その言葉。

響いたのだろう。

次の瞬間。

遊月は、ガチャリという音が聞こえた気がした。

何かが開いたような、何かがつながったような。そんな音。

「レベル10のナイト・エクスプレス・ナイトとデリックレインで、オーバーレイ！」

二体のモンスターが、空中に出現した渦の中に飛び込んで行く。

遊月は香苗の目を見る。

(めちやくちやだ。でも……強い目になったな)

香苗は手を掲げる。

「全てを守る盾を手に、いざ、出陣！エクシーズ召喚！ランク10『N O・81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドローラ』！」

特殊な数字の『81』

もう、砕けたりはしない。

(認めたのか……認めようとしなかった自分がバカらしくなったのか。さて、どっちだろうなあ)

遊月は微笑む。

N O・81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドローラ ATK3400

★10

「はあ……はあ……やっと、やっと会えました。私は、スペリオル・ドローラの効果を発動！オーバーレイユニットを一つ使い、スペリオル・ドローラは、全ての効果を受け付けなくなります！そして、エクシーズ素材だったデリックレーンの効果発動！遊月さんのセットカードを一枚、破壊します！」

「チエーンして罨カード『死魂融合』を発動。墓地に存在するレッドアイズとドローハスーラを裏側で除外し、融合召喚を行う」
「なっ……」

遊月の二大エースが混じりあう。

「朽ち果てた紅き眼の竜よ、死霊たちを束ねる王よ、屍界の底で力を束ね、冥界より響く咆哮を示せ！融合召喚。レベル8『冥界龍 ドラゴネクロ』！」

冥界龍 ドラゴネクロ ATK3000 ☆8

「……このタイミングでドラゴネクロ……」

そもそも、スペリオル・ドローラよりも、攻撃力が低いモンスターだ。なぜ攻撃表示なのかと一瞬疑問に思った香苗だが、一瞬で疑問は氷解する。

この融合召喚で出せるモンスターは限られているが、問題なのは守備力。

簡単な話、攻撃力倍化に加えて貫通能力を付与する『機関連結』のようなカードが香苗の手札にあった場合、他に簡単なモンスターが出てくるだけで、一瞬でゲームエンドである。『転回操車』を墓地に送ることでアンガー・ナツクルを出すことも可能なので、十分それも視野に入るだろう。

そう考えれば、ステータスがなるべく高いモンスターを用意することとは何も不思議なことではない。

（ですが……それは、私がスペリオル・ドローラで止まればの話です！）
自分の中から溢れて来る何か。

普段なら、精霊力をとりこみすぎて体調不良を起こしているだろうが、今はその感覚すらない。

すこぶる体調がいい。こんな日は、今までになかった。

今なら、もつと上に行ける。

「私は、機械族でランク10のスペリオル・ドーラで、オーバーレイネットワークを再構築！」

スペリオル・ドーラが、新たに生み出された渦に飛び込んで行く。

「全てを滅する力を得て、いざ、出動！ランクアップ・エクシース・チェンジ！ランク11『超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ』！」

超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ ATK4000 ★11

「ジャガーノート・リーベまで出て来るか……」

流星の遊月も驚いたような表情になる。

スペリオル・ドーラまでは予測できたが、これは予想以上だったようだ。

「ジャガーノート・リーベの効果を発動！オーバーレイユニットを一つ使うことで、攻撃力と守備力を2000ポイントアップします！」

超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ ATK4000↓6000

「さらに手札から、『リミッター解除』を発動です！」
香苗の全力は、まだまだ止まらないようだ。

超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ ATK6000↓12000

「攻撃力12000か……」

「これで、終わりです！私はジャガーノート・リーベで、ドラゴネクロを攻撃！」

リミッターが解除されて、赤く発熱するジャガーノート・リーベの主砲が、ドラゴネクロに狙いを定める。

そして、強烈なエネルギーが集約されていった。

そんな中、遊月は呆れたような表情だった。

（強くなったな……いや、枷が一つあっただけで、それに気が付かなかっただけか。レッドアイズ。ドーハスーラ。お前たちはどう思う？もう十分強くなったと思うが）

『マスターの好きにすればいい。俺はそれに反対しないだろうからな』

『私も同意見だ。もう少し、壁になってやるべきだろう』

精霊たちの言葉を聞いて、そうだよな。と遊月は呟く。

ジャガーノート・リーベの主砲から、レーザーが射出された。

「速攻魔法。発動」

ジャガーノート・リーベのレーザーがドラゴネクロに直撃する。

しかし……ドラゴネクロには、傷ひとつ付いていない。

「え……」

『決闘融合ーバトル・フュージョン』

ドラゴネクロは、右手に蒼い炎の玉を出現させ、左手に波動を集約し、ジャガーノート・リーベのレーザーを抑えていた。

いや、抑えている。という用語があるか。

「私の融合モンスターが戦闘を行う攻撃宣言時に発動。相手モンスターの攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする」

冥界龍 ドラゴネクロ ATK3000↓15000

「攻撃力……15000」

「もう少し、私は壁になるとしよう」

ドラゴネクロが、炎の玉と波動を合わせて、レーザーを押し返す。

そして、ジャガーノート・リーベに直撃した。

「ぐっ……」

香苗 LP5000↓2000

「ドラゴネクロと戦闘を行う相手モンスターは、その戦闘では破壊されない。だが、攻撃力は0になる」

超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ ATK12000↓0

本来ならトークンを特殊召喚する効果もあるが、レベルを参照する必要がある、エクシーズモンスターにレベルがないのでこちらは適用されない。

「まだです！メインフェイズ2。私は転回操車を墓地に送ることで、墓地のアンガー・ナツクルを特殊召喚します！」

機関重連アンガー・ナツクル ATK1500 LINK2

「私は『チキンレース』を発動します。1000ポイント払って、一枚ドロ……カードを一枚セットして、ターンエンドです」

香苗 LP20000↓1000

香苗はまだあきらめない。

遊月の手札は0だ。

セットカードはない。

墓地から発動するカードはなかったはずだ。

「なら、私のターンだ。ドロー」

「私は『威嚇する咆哮』を発動します。これで、遊月さんは攻撃宣言ができなくなります」

「そうか」

これで、ドラゴネクロはほぼ何もできない。

チキンレースがあるが、ドーハスーラはドラゴネクロの融合素材として裏側で除外されている。

「まだ、まだ戦えます」

「それはいいことだ。チキンレースの効果を発動。1000のライフを払って、破壊してもらおう」

「！」

遊月 LP6000↓5000

チキンレースが破壊される。

要するに、このターンで決めるつもりなのだ。

遊月は微笑む。

「怒って泣いて叫んで、限界を超えて、疲れただろう。そろそろ寝る時間だ」

「え？」

「私は魔法カード『真紅眼融合』を発動。デツキの『真紅眼の不死竜』と、『真紅眼の凶星竜―メテオ・ドラゴン』を墓地に送る」

チラツと、流れ星が見えたような、そんな気がした。

「人は何かを奪い続け、摂理はそれを罪とした。

世界の負債は積み重なり、摂理は清算を強制する。

一人の少女に押し付けるのなら、私はそれを拒絶する。

押し付けて悪夢を見させることを、私は許しはしない。

拒否する。否定する。拒絶する。希望を望む。

声はいずれ、世界に響く。
優しい世界の女神に願いを、汝の未来に祝福を。

悪夢の時間は、もう終わり。

黒の流星に願いを乗せて、良い夢を見よう」

流星が、舞い降りる。

「融合召喚。『流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン』」

流星竜メテオ・ブラック・ドラゴン ATK3300 ☆8

「あっ……」

終わりを悟った。

「メテオ・ブラック・ドラゴンの効果により、デッキから『真紅眼の黒竜』を墓地に送り、1200ポイントのダメージを与える」

流星から放たれる炎。

それが、香苗を覆った。

とても、暖かい火だった。

香苗 LP1000↓0

★

「まあ、あがりなよ」

「はい……」

遊月の自宅にきた。

そもそも、部屋を追い出された香苗は、あの宿舎には戻れない。

というわけで遊月の自宅にきた。というわけである。

「全然、勝てなかったです……」

ソファに二人で座った。

思うところがあつたのだろうか。香苗はポツリとつぶやく。

「そりやそうだ。私もそれ相応に本気を出したんだ。簡単に超えられ
ても困る」

「……遊月さん。なんでそんなに強いんですか？私、全力だったのに
……」

「ん？答えは簡単だ」

遊月は腐った瞳で優しく微笑む。

「君という子供が全力を出しても、それを受け止めて、そしてそれに応

えることができるくらい、私が大人だということだ」
「……」

悪意はなかった。

香苗は遊月に会ってから、一度も、悪意を向けられたことはなかった。

自分の母親すらも、自分に悪意を向ける。

だが、遊月は違った。

「あ、あの……遊月さん」

「なんだ？」

顔を真っ赤にして、香苗はポツリと言った。

「お……お兄ちゃんって、呼んでもいいですか？」

「好きなように呼べばいい」

顔を真っ赤にして問う香苗に対して即答する遊月。

その言葉に、香苗は耐え切れなくなった。

だが、無理矢理に耐えようとしている。

そんな香苗の頭を、遊月は撫でる。

「我慢なんてしなくていいから、泣きたいときは泣け。私は逃げたりしない」

「う、ぐす……うああああああああああん！」

壁を超えた少女は、一人の男の胸で涙を流す。

遊月はあやすように、小さな少女を抱きしめる。

やっと見つけた、少女が泣ける場所。

いつもは見つける前に泣き疲れていたが、もうそのようなことはない。
い。

★

さて、シリアスシーンは終わりだ。

ここからは欲望の混じったアレな感じである。

晩御飯に関しては、作るのが面倒で適当にカップめんを済ませた遊月と香苗。

宿舎が使えない香苗だが、これからどこの風呂を使うのか。という話である。

そう。遊月の家の風呂である。

『で、ドーハスーラ。すごく複雑そうな顔をしてどうした?』

『ん?ああ、『据え膳くわぬは男の恥』という名言があるだろう』

『名言だったか?』

『忘れた。が、我はあれにちよつと挑戦しようと思いかけていた』

『さすがチキング。世間体をまず気にするその姿勢。俺は好きだぞ』

『誰がチキングだ!』

『チキンでキングなんだからチキングでいいだろう』

『言い訳あるか!検索ワードで『チキング』って検索して我の名前が出てきたらさすがに泣くぞ!』

『俺が知るか』

先ほどまであんなにバトってたのにこの有様である。

『あ、そういうえばブルームは見に行ってるみたいだぞ』

『あんの植物がああああ!羨ましいiiiiiiii!』

本音がタダ漏れである。

だが見に行くことはない。ドーハスーラの意地(謎)である。

『あ、ブルームが出てきた。風呂から上がったみたいだな』

『ムムム……バスタオル姿を見るくらいはセーフか?』

『なんで俺に聞くんだ?』

『というかお前は興味ないのか?』

『俺はマスターに似て性欲が極端に少ないんだ』

『単に枯れただけだろ』

『やかましい。まあ、小説でもバスタオル姿ならまだ挿絵に乗るからセーフだろ』

ドーハスーラを誘惑するレッドアイズ。

なかなか性格が悪い。一体誰に似たのやら。

『あ、ブルームが脱衣所から出てきた。着替えも終わったか』

『早くね!』

『俺に突っ込んでどうするんだ』

先ほどからかなり暴走しているドーハスーラ。

『ただ、そろそろ欲望を抑えておいたほうがいいぞ』

『そうか？』

『お前このままだとロリコンチキングになるぞ』

『それは不味いな』

さすがにそれはやばい。

下手すればアンデット族全体の評価につながるかもしれない。

まあ、一番罪深いのはグローアップ・ブルームだが。

★

夜も遅くなった。

どこから買ってきたのか、ピンク色の寝間着を着ている香苗。

枕を抱いて、トコトコ歩いている。

目指しているのは、遊月の部屋だ。

部屋の前まで来ると、扉を少しだけあける。

中を見ると、遊月は寝息を立てていた。

(……よしっ！)

何がだ。

まあそれはそれとして、香苗は遊月が寝ているベッドにあがって、布団の中にもぞもぞともぐりこむ。

そして、ぎゅっと抱きしめた。

(……暖かいです)

久しぶりに、ぬくもりを感じたような気がする。

精霊力制御疾患である自分が、誰かに抱き着いたことなどなかった。

最後に抱きしめてもらったのは母親だっただろう。

だがそれも、いつのことだったか。

(……♪)

あれから、薬を飲んでいないのに、体調が良いはまだ。

今日は、いい夢が見られそうである。

……ちなみに、どんなに鈍いやつでも、抱き着かれたら起きるものだ。

しかし、それをあえて放置するくらいには、遊月は大人である。

遊月は朝起きるのが早い。

なので、次の日の朝になって香苗が起きた時、ベッドに遊月がいないことに気が付いて顔が赤くなるのは、ほぼ必然であった。

★ 「……ん？……はどこだ？」

グローアップ・ブルーム。

遊月のデツキの中では、デツキの中からエースの一角を場に引きずり出すことができる中核カードだ。

しかし、彼は今、疑問に思っていた。

「なぜ僕は吊り上げられているんだ？そして、この線路はいつたい……」

いつたいつこんな場所に来たのだろうか。

というか、そもそもなぜつられていてのだろうか。

「ん？何か嫌な音が聞こえているような……！」

ブルームは驚愕する。

自分は今、線路の上で吊られているのだ。

そして遠くのほうから、『弾丸特急バレット・ライナー』が突撃してきた。

しかもごく丁寧に『ウィリアムテル』がスピーカーから大音量で流れている。

そんな『爆走します！』みたいな空気を出されても困る。

「う、うわああああああ！やめろ！やめてくれえええええええ！」

絶叫するブルーム。

しかし、バレット・ライナーはそんなことを気にすることなく、突撃してくる。

「いやあああああ！わかった！もうのぞいたりなんかしないから！許してくれええええええええええ！」

時速二百キロなど軽く超える鋼鉄の物体。

身動きできない今、そんなものが突撃してきたら自分は木端微塵だ。

必死になるブルーム！

「いやだあああああ！や、やめてええええええええええええええええ！」

聞き届けられることなく眼前までバレット・ライナーが迫り――

「……はっ！」

ブルームはハツとした。

きよろきよろと周りを見る。

普段自分がいるアンデットワールドの景色だった。

「……ゆ、夢？今は夢だったのか？」

心臓に悪すぎる夢だった。

そして、彼は誓う。

「……覗きはやめよう。うん。絶対にやめよう」

まだ夜遅い時間である。

ブルームはまた、目を閉じるのだった。

全身から滝のような汗を流しながら。

第十五話

「あの、お兄ちゃん」

「どーした」

朝、学校に向かって歩いて歩いている時、香苗は気になることがあったよ
うだ。

「私、あれから一回も薬を飲んでないんですけど、どうして……」

「ああ、それだが、答えは簡単だ。香苗が持っている精霊のカードたち
でラインを作って送りこんでるんだ」

「え？」

「高水準で精霊に認められないと発生しない現象で、なおかつ、その精
霊に係るリンク2以上のモンスターが必要なんだがな」

そう前置きして、遊月は説明する。

「香苗がとりこみまくっている精霊力を、アンガー・ナックルが接続役
になって精霊たちに送りこんでいる。もともとランクが高い精霊だ
からな。香苗がとりこんでいる精霊力を注ぎこまれたとしてもびく
ともしないくらい強固な存在だ。多くなったとしても、精霊は自分で
排出できるから問題ない」

「そ……そんな方法があったんですね」

いろいろ条件はある。

そして、やらなければならぬこともそれなりにある。

「ただ、このラインを作る時、本人は圧倒的な解放感に支配されて、一
時的に暴走するんだ。その時、周りが抑えないと本人が壊れる」

「ということとは……」

「リーベまで出てきたのは、その暴走状態が原因の一端だ。まあ、リー
ベも君を認めているみたいだから、言うことを聞かなくなるようなこ
とはないだろう」

「そっちじゃなくて……昨日、お兄ちゃんが私を焚きつけたのは、その
暴走状態を引き起こすためですか？」

「それ以外に何がある。あの段階まで持って行くのってすごく面倒な
んだ。失敗すれば何が起こるのか知らないからな。遊びじゃできな

い」

万全の用意を整えてからとりかかれば、誰だって成功する。遊月はそれを有言実行するわけだが、失敗したときのデータが極端に少なくなる。

結果的に、最善に近い部分は分かつて、最悪に近い部分はさっぱりわからないのだ。

だからこそ、不真面目に取りかかれるものではない。

「まあ要するに、もう薬を飲む必要がなくなっただことだ。医者に連絡入れたけど実は一番面倒だったよ」

事後処理と言うのは大体やることが多いうえに書類ばかりになるので面倒だ。

「ありがとうございます」

「構わんさ。責任を取るといったのは私だ」

そう言いながら、遊月は角を曲がった。

すると、英明が見えた。

「おっ！遊月……と、香苗ちゃん？なんでこんなところに」

「あの……夜はお兄ちゃんの家泊まったので……」

「……お兄ちゃん？ああ、そういう意味か」

香苗が抱えている事情と、それにかかわったであろう遊月という男の関係をいろいろごちゃごちゃと考えて、英明は納得したようだ。

「……ていうか遊月の場合、愛称ならお兄ちゃんじゃなくてお爺ちゃんじゃね？」

「それは私が年寄り臭いといいたいのか？」

「もちろんだぜ！……で、家に泊まったってどういうことだ？」

遊月は英明に経緯を説明。

「……なるほど、うつるかもしれないからって追いだされたわけか。まあでも、精霊力制御疾患の方は問題ねえんだろ？」

「全くないな」

「……なんていうか、溜息しか出てこねえな。ていうか、薬代に金が消えないんなら、その分いろいろ金もたまるわけか。どうせこれからも遊月の家に住むんだらうし」

「え……あ、あの……」

すつかりばれていることに対して驚く香苗。

「まあ、英明は分かるだろうな」

「……一時期、遊月んちに住んでたしな」

「え。そうなんですか？」

「……まあ、俺にもいろいろあつたんだよ」

「要するに、英明は私の家を駆け込み寺だと思っているうちの一人だということだ」

一体どういふことなのやら。

「お、ついたな」

学校の校舎についた。

中等部と高等部は校舎が違うので、ここでいったん離れる。

「それじゃあ後でな」

「はいー」

いろいろな意味で解放されたといったところだろう。

いい笑顔だ。

「……守りたい笑顔だよなあ。ていうか、なんか遊月は慣れてるよな」

「こういうのは初めてじゃないからな」

遊月は高等部の校舎に向かって歩いて行った。

★

「遊月君！香苗ちゃんから精霊力制御疾患が治ったって聞いたけど。本当なの!？」

教室につくと、今度は大東が来た。

「治ったわけじゃない。問題にならなくなっただけだ」

あえて言い換えれば利用としたともいえるだろう。

要は関わり方である。

「そうなんだ……」

大東には解決策はないとしか言っていないので、そういう反応になるのは当たり前だ。

「でも、遊月君が言うならそうなんだよね」

その謎の信頼はなんなのだろうか。

そして、大束の中でも、香苗の話は終わりのようだ。

「そういえば、生徒会長が久しぶりに登校するって言ってたね」

「あまり学校に来ないよな」

「学生兼プロデュエリストだからね。高等部一年生だけど、すでに卒業単位はすべてとってて、あとは在籍年数だけだから、学校に来る必要がないって聞いたことがあるよ」

「めっちゃくちや濃い奴だな……」

学校に在籍している必要すら感じられないのだが、そのあたりはどうなのだろう。

「とはいえ、私には関係ない話か」

あまりこない生徒会長が来る。

だから何だ。と言う話である。遊月からすれば。

確かに副会長と接点は出来たが、だからと言って生徒会に興味があるわけではない。

「興味ないんだな」

「まあぶつちやけ」

遊月はそう言う。

だが、それと同時に、思うこともある。

こちらが興味ないからと言って、向こうもそうとは限らない。と言うことである。

★

遊月は基本的に予定は決まっていない。

フラツと呼ばれるときはあるのだが、基本的には暇な方だ。

「今日は晩飯何にするかな……」

作る量が一人分増えた遊月。

慣れている人からすれば別に苦ではないものだが、自分一人ならそれ相応に適当で良かったのだが、一人増えるとそれ相応に考える必要がある。

しかし、その日の献立など、別にたいしたものではない。

店に入って『今日のオススメ』見たいなコーナーからパツパと選んでカートに突っ込むだけである。

どうせケチるような資産状況ではない。

「……今日は鶏肉か。家に卵とケチャップってあったかなあ」

既にオムライスを作る気になっている遊月。

そう言いながらも歩く。

鶏肉の場所に言っつて、賞味期限を確認し始めた。

「これだな」

「あつ」

遊月が取ろうとして手を上げた時、隣にいた客がそれを手に取っつかごに放り込む。

遊月は顔を上げた。

向こうも顔を上げてこちらを見る。

見知った顔だった。

金色のコートは着ていないが、切りそろえた金髪に獯猛な瞳の少年。

「不死原遊月。何故お前がここに……」

「いや、来た理由はお前と変わらんדרו」

驚いている様子の少年に遊月は呆れる。

少年も『それもそうか』と思ったようだ。

「……名乗ってはいなかったな。俺はレイエス・アドベントだ」

「不死原遊月だ……で、ギルのことは知ってるよな」

「ああ。俺の相棒だ」

レイエスとギルは年代が違う気がするが、相棒に年齢差など関係ない。

「……で、何か俺に言いたいことはないのか？」

「私からはないよ。君が大束にしたことを私は許さないし、香苗がかわつていたあの一件で襲撃したことは悪いことだ。だが、私はそれを、不必要だとは思っていない」

「……てことは、分かってるわけか」

「ああ。『ISD』……『IncaNation Shift Due list』と言うものに付いて、私は君以上に知っている」

ISDは略号であり、正式名称は『IncaNation Shift

f t Duelist』

正式名称は『化身移行決闘者』

モンスターカードには『精霊』と言う概念がある。

だが昔から、魔法・罨カードには、そのような精霊カードと言う概念は存在しない。

罨モンスターすら精霊カードは確認されていなかった。

単なる『現象・物質』である魔法・罨に『意思』はない。と言う理由で精霊カードが存在しない。というのが学者の言い分だが、それでも、魔法・罨カードに特別な何かを求めめる者は一定数いた。

そして、研究がすすめられた中で生まれたのが、『ISD』という概念である。

デュエリストを媒介として、『精霊力』を用いて極度の親和性を生み出すことで、特別なカードを生み出す。

遊月なら『アンデットワールド』

英明なら『マスク・チェンジ』

大東なら『神の居城―ヴァルハラ』

永石圭吾が持つ『機殻の要塞』も該当する。

そしておそらく、ギルの場合は『オーバード・フュージョン』なのだろう。

そしてそう言う以上、レイエスも持っているのだ。

遊月たちと同じ、『化身カード』を。

「いろいろ問題を抱えているからな。そして、遠くない未来で、ヤバいことが起きる。だから、未来に起こるそれを解決するために、俺は、『正しくない正義を貫く覚悟』を決めた」

レイエスはそうつぶやく。

「俺達がやっていることは、俺たちが望む平和に取って必要なことだと俺は思ってる。だが、正しいことじゃない。だから、人が傷つくことだって当然ある」

「そうやって正しくないことをしているお前たちを踏み台にして、本当の成功を掴むヒーローの出現。お前たちはそれを待っているわけか」

「そういうことだ」

遊月はレイエスが言いたいことが分かった。

「正義と悪なら、絶対に悪の方が早く、悪が動いたからと言って、正義がすぐに動き出すことはない。必ず、悪に近い正義が動かなければ、正義は動かない。お前たちはそう考えているわけか」

「そういうことだ。俺達『アンダーカード・ブレイブス』は、それを信念に暗躍している」

「……まあ一つ確実なのは……」

遊月は呆れながら言った。

「鶏肉売り場で話すようなことじゃないな」

「……確かに」

レイエスは頷いた。

そして、そのままかごを持ったまま歩きだした。

遊月は大きく溜息を吐いた。

『なるほど、いろいろ抱えていることがあるわけか』

ドーハスーラが遊月の傍に出現。

店内なので『超デフォルメモード』である。

具体的に言うと、ギャグ漫画に出てきそうなドクロマークみたいな体から、短い蛇の体と小さな杖がびよこつと出ている。少なくとも人形として店に並べても売れないだろう。

なんとも訳の分からん姿だが、実は戦闘能力は本来の姿の時と変わらないのだ。初見殺しにもほどがある。

ちなみに、こういった狭い空間では、『真紅眼の不屍竜』の場合は『真紅眼の幼竜』で出現する。

(まっ。そんなもんだろ。本質的に悪である存在を除いて、人間は悪い奴がいるんじゃないかって、誰だって悪い奴になれる。レイエスたちは、自分から憎まれ役を請け負うことにした。ただそれだけのことだ)

『とはいえ、我には理解できんな。何を義務だと感じているのかが大きく異なるからだと思うが』

(世の中にはな。いろんな覚悟ができるやつと、そしてできないやつ

がいる。同じように見えて中身が全然違うとき、大体それらがバラバラなんだよ)

『それは分かるが、自立するというのは適切に頼れることだ。悪であることをただ請け負うだけなど、組織として未熟だと思うが?』

(ドーハスーラが言っていることも間違っていないだろうな。『一匹狼』を『独りよがり』の違いすら分からないやつだったのに、大きくなつたなお前も)

『大きなお世話だ』

ドーハスーラが引つ込んだ。

そんなドーハスーラをほほえましい目で見た後、遊月も鶏肉をカゴに突っ込んでレジに向かって歩きだした。

★

「あ、もうこんな時間か。皆。ごめんね」

大東綾羽の門限は厳しい。

午後六時ごろには家にいるくらいのタイミングで必ず迎えが来るくらいだ。

「大丈夫だつて」

「そうそう。綾羽の家つて厳しいもんね」

ただ、綾羽本人はこういう性格なので、周りとの関係はそれなりに良好である。

「今日も圭吾はどっかにいつてるしな」

「まあでも、適当に使えつて言つて三万円おいていくような奴だけだな……」

精霊カードにそれなりに執着を持っていたが、最近はそのような様子もない永石圭吾。

さらに言えば、その執着は精霊カードにのみ向けられるものだったので、それがなくなれば好青年である。

言つてしまえば『横暴な印象がある程度の俺様系』と言つたところか。

そしてかなり太つ腹であり、こうして集まるようなタイミングで永石だけが来れないとなつた場合。だいたいこうして現金を渡してく

る。

しかもかなりの額だ。

「あ、あはは……じゃあ、これで」

そういって、正門の近くのベンチで話していた彼らの輪の中から外れる綾羽。

これから家に戻って、そのまま特訓することになるのだろう。

心配だった香苗の問題がなくなったからなのか、表情はそれなりに優れている。

だが、この日は少し違う。

正門を出た時だった。

「お久しぶりですね。綾羽さん」

「……久しぶりだね。月詠さん」

綾羽が振り向くと、一人の女子生徒が立っていた。

大人びた印象がある。と言ったところだろう。

遊月のような年寄り臭さと言うよりは、まだ若い女性と言ったものだ。

長い金髪を伸ばしており、迷いがなくどこか達観した印象を与える瞳で、貴族の令嬢のような雰囲気だ。

そしてなにより……その胸は大きい。

大東とか香苗も胸は大きいのだが、それに匹敵、と言うかそれより大きいだろう。

別に大きすぎるといわけではないが。

デュエルスクール・アムネシア生徒会長。

みどうつくよみ
御堂月詠である。

「……私はこれから特訓があるので……」

「フフフ♪一回でかまいませんから。つきあってももらえるとうれしいです」

そういってデュエルディスクを構える月詠。

チラツと視線を動かすと、すでに迎えの車がきていた。

運転手がこちらを見ながら電話している。

すると、電話をやめて、こちらから視線を外した。

「……分かりました」

綾羽もデュエルディスクを構える。

「そこなくては……同世代のISD、しかも同じパターンであるあなたと一度戦っておきたかったので」

「私は……逃げたあなたとは違います」

「そうでしょうか？ 囚われていたことに気が付いた。と言っしてほしいですね」

お互いに含んだような言い方をする二人。

あとはカードで語ろうということなのだろう。

お互いにカードを五枚引く。

「デュエル！」

綾羽 LP8000

月詠 LP8000

「私の先攻。手札から『ヘカテリス』を捨てて、『神の居城―ヴァルハラ』を手札に、そのまま発動。手札から『幻奏の音姫プロディジー・モーツァルト』を特殊召喚！」

幻奏の音姫プロディジー・モーツァルト ATK2600 ☆8

「さらに、手札から『フォトン・サンクチュアリ』を発動して、トークンを二体特殊召喚」

フォトントークン DFE0 ☆4

「そして、トークン二体をリリースして、『天帝アイテール』をアドバンス召喚！」

天帝アイテール ATK2800 ☆8

「効果発動。デッキから『汎神の帝王』と『真源の帝王』を墓地に送り、『光帝クライス』を特殊召喚！」

光帝クライス ATK2400 ☆8

「そして、モーツァルトの効果を発動。手札から『大天使クリスティア』を特殊召喚！」

大天使クリスティア ATK2800 ☆8

「墓地の『汎神の帝王』を除外して効果発動。本来は選ばせるけど、私は『連撃の帝王』三枚を見せることで、一枚を手札に加える。カード

を一枚セットして、ターンエンド。クライスは手札に戻るよ」

モーツァルト。アイテール。そしてクリスティア。

手札はクライスのみだが、セットした『連撃の帝王』を使うことで出すことが可能。

悪いというものではないだろう。

ほとんどのデッキなら、大天使クリスティアを突破できないことだつてある。

だが、対戦相手の月詠の表情は落ち着いたままで、逆に、綾羽の表情は優れない。

「さすがお嬢様。大型モンスターを展開し、封殺効果として最高峰の一角であるクリスティアまで並べるとは……」

運転手の男性が自分をほめるが、まるで『言った通りに出来ていること』『想定した通りの動きができてきていること』を褒めているようで、綾羽にしかできないことを求められている気がしない言葉だ。

そんな男性の言葉を聞いて、月詠は一瞬だけ頬を動かすが、すぐに戻す。

「ふむ……ランク8のモンスターは出さないようですね」

「……私は、渡されたデッキしか使えない」

「あら？ そういえばそうでしたね。私たちは本来そうでした……まあ、あなたが本当にそれで納得しているのなら構いませんよ。私のターン。ドロー」

カードを引く月詠。

「私は手札から、『時械神ミチオン』をリリースなしで召喚します」

時械神ミチオン ATK0 ☆10

「なっ……」

現れた十の神の一角。

だが、綾羽の驚愕は、それそのものではない。

(よりによってミチオン……)

自分フィールドにモンスターがない場合、リリースなしで召喚でききる。

これが時械神の特徴。

一部を除いて貧弱と言っているステータスだが、抜群の耐性を誇り、除外やバウンスなどをデツキの中で考慮しない場合は強固な壁となるモンスターだ。

「私のデツキは【時械神】……昔からの付き合いですから知っているはずですよ……こうしてデュエルするのは初めてですが」

「分かっている」

「では、ミチオンの固有効果も覚えていきますね」

「当然だよ」

「フフフ♪バトルです。ミチオン。クリスティアを攻撃しなさい」

ミチオンは自らの前に球体を生み出すと、それをクリスティアに射出する。

攻撃力0のミチオンが、攻撃力2800のクリスティアを破壊することなど当然不可能。

しかし、時械神はその貧弱なステータスとは裏腹に、攻撃しまくるデツキだ。

「バトルフェイズは終了。ミチオンの効果を発動。相手のライフを半分にします」

「ぐっ……ああああー！」

綾羽 LP8000↓4000

一気にライフを半分にしてくるミチオン。

時械神にも序盤型、中盤型、フェニッシャーなどいろいろいるが、ミチオンはその序盤の中でも筆頭だ。

相手のライフを半分にする。

単純にして明快なカードである。

「ば、バカな……我々が作ったデツキが、こんな簡単に……」

男性も驚いているが、リリースなしで召喚可能で、しかも戦闘でも効果でも破壊できない時械神に対して、単なる『ヴァルハラビートダウン』では相性最悪である。

「私はカードを二枚セットしてターンエンド。さて、綾羽さんのターンですよ」

「わ、私のターン。ドローー！」

勢いよくカードを引く綾羽。

だが、まだ表情は優れない。

一体どうすればいいのかわからない。

そもそも……時械神など、レベル8を並べられるのなら『神竜騎士
フェルグラント』でもぶっさしておけば十分だ。

だが、それはできない。

あらかじめ決められたデッキでなければ、綾羽が持つデュエルデイ
スクは作動しない。

しかも、幼いころに体の中に入れられたナノマシンの影響で、今綾
羽が使っているディスク以外、使うことができないのだ。

何度も何度も使ってきたデッキ。と言えば聞こえはいいが、こう
言った場合の手段はあまりにも少ない。

ドローしたカードを見る。

「……まだいける。私は『帝王の烈旋』を発動。相手モンスター一
体を、アドバンス召喚のリリースのかわりにできる」

「やはり運命力は上がりましたね」

ミチオンが消滅していく。

「私はミチオンをリリースして、『光帝クライス』をアドバンス召喚！」
光帝クライス ATK2400 ☆6

「なるほど、ここでクライスをアドバンス召喚ですか……それで、私の
セットカード二枚を破壊しますか？」

「しないよ」

即答する綾羽。

そもそも【時械神】であれば、あの永続罫カードを伏せている可能
性がある。

そうならば単なる無駄打ちだろう。

だが、後ろにいる男性は違った。

「何を言っている。クライスは攻撃できないが、ここは破壊するべき
だ！」

「私は——」

「分かっているようにだな。君に、我々の意見を拒否する権利はない」

「！」

綾羽はギリツと歯ぎしりした後、宣言する。

「私は……光帝クライスの効果で、セットカード二枚を破壊する！」

「……残念です。罨カードを二枚オープン。『虚無械アイン』『威嚇する咆哮』です。威嚇する咆哮の効果で高貴宣言を封じます。アインは一ターンに一度、効果では破壊されません」

「ば、バカな……」

男性が驚いている中、ミチオンは復活する。

クライスは光球を二つ生み出すと、それを飛ばした。

だが、アインは破壊されず。既に効果処理の済んだ『威嚇する咆哮』だけが破壊される。

時械神ミチオン D F E O ☆10

「威嚇する咆哮が破壊されたことで、私は一枚ドロ」

そして……。

「私はターンエンド」

「エンドフェイズ。私はアインの効果を発動。墓地のミチオンをデッキに戻すことで、『無限械アイン・ソフ』をセットします」

無慈悲と言えば無慈悲なものだが、これが普通である。

「そして私のターンです。ドロ」

月詠は静かにカードを引く。

「まだ、クリスティアがフィールドにいるのだ。うまく動くことは……」

「先ほどから、後ろからうるさいですよ」

「なっ……御堂月詠。我々のプロジェクトから脱走した貴様が言うのかー」

「私は施設から出ただけで、そこからは逃げも隠れもしませんでしたよ？ いえ、一夜ほど、殿方の家に一宿しましたが、それだけです。逃げる私を捕まえることすらできなかったあなた達が、一体何を語るというのです」

「ぐっ……」

「今はデュエルの途中です。続けましょう。手札から『時械神カミオ

ン』を召喚です」

時械神カミオン ATK0 ☆10

出現する第二の時械神。

「！」

「バトルフェイズ。カミオン。クリスティアを攻撃しなさい」

当然、戦闘破壊もダメージもない。

「そしてバトルフェイズ終了時、カミオンの効果で、クリスティアにはデッキに戻ってもらいますよ」

「クリスティア！」

綾羽の言葉は届くはずもなく、クリスティアは消滅した。

綾羽 LP4000↓3500

「メインフェイズ2。私は手札から『ワン・フォー・ワン』を使い、手札の『時械神ラツイオン』をコストに、『時械巫女』を特殊召喚」

時械巫女 DFE0 ☆1

「そして、『無限械アイン・ソフ』を、アインを墓地に送ることで発動。その効果により、ラツイオンをデッキに戻すことで、デッキから『無限光アイン・ソフ・オウル』をセットします」

「これは……」

「私は『時械巫女』をリリースして効果発動。デッキから『時械神サンダイオン』を手札に加えます。そして、カードを一枚セット、ターンエンドです」

「私のターン。ドローー！」

綾羽は祈るようにカードを引く。

「私はアドバンス召喚したモンスターであるアイテールをリリースして、二体目の『天帝アイテール』をアドバンス召喚！」

天帝アイテール ATK2800 ☆8

「効果を発動。デッキから——」

「無駄です。私は『帝王の轟毅』を発動。通常召喚したレベル5以上のモンスターであるカミオンをリリースすることで、その効果を無効にします。そして一枚ドローー」

「なっ……」

無効にされた。

いや、それだけならまだいい。

月詠のフィールドががら空きになったが、こうなってしまうては止められない。

「私はアイン・ソフを墓地に送り……『無限光アイン・ソフ・オウル』を発動」

発動される三つの輪。

その神々しさは、通常のカードを超える。

「化身カード……」

「アイン・ソフ・オウルの効果発動。私は墓地のカミオン。手札のサンダイオン。デツキのラファイオンを特殊召喚します」

時械神カミオン	ATK	0	☆10
時械神サンダイオン	ATK	4000	☆10
時械神ラファイオン	ATK	0	☆10

「そ……そんな……」

「デュエリストはデツキの魂。与えられただけのデツキの中に、あなたはいません。することがないのであれば、何をしても無駄だと思っているのであれば、ターンを終了しなさい」

「た……ターンエンド」

「私のターン。ドロロー。バトルフェイズです。ラファイオンとサンダイオンでアイテールを攻撃」

お互いにダメージはない。

サンダイオンは攻撃力4000だが、お互いに戦闘ダメージを受けない効果がある。

「バトルフェイズは終了。ラファイオンとサンダイオンの効果により、2800と2000のバーンダメージを受けてもらいます」

「うあああああー！」

綾羽 LP3500↓700↓0

簡単にライフが消し飛ぶ。

「ば、馬鹿な。我々の計画通りに作り上げてきた筈……それを、こんな裏切り者に……」

「あなたに言うことはありませんよ」

そういうと、月詠は綾羽に背を向ける。

だが、まだ言いたいことがあったのか、顔だけ振り向いた。

「私が、そしてレイエス・アドベントが、逃げたと思っっていますか？別にそれは構いませんよ。ただし、そうすることでしか心を保てないというのなら、予測された強さしか身に着けることはできません」

「それから……これは個人的なアドバイスですが、滅私奉公よりも、恋を優先するべきです」

「えっ……ええ！」

なぜ知っているのか。

「最近暇になりましたので、自宅で私は寝泊まりしますからね。また会いましょう」

そういうと、月詠は校舎のほうに戻っていった。

「……」

「お嬢さま。わかっていますね」

「……っ！はい」

返事をする綾羽の声は、後悔しか含まれていない。

いや、それは今までのことだったか。

今は何か……こう……違う何かがあるような。そんな気がする。

(ちよっと、迷惑かけてもいいかな……遊月君)

少なくとも、そんなやんちゃなことを考えることができるくらい、このデュエルで成長できたといえ、あの生徒会長の思惑通りだろう。

もつとも、その程度であれば、遊月からすればかわいいものに違いない。

……ちなみにその夜。香苗に相談して、『うにゆううううあああああああああ！』という訳の分からないと言うより有り得ない奇声がでたのは黒歴史であり秘密である。

すでに居候してるってどういいうこっちゃ。ということなのだが

……いずれにせよ香苗に罪はない。綾羽の中で、開いてはいけない鍵
が開いただけである。

第十六話

「……」

「……」

夜、真夜中というほどではないが、夜とっていい時間。

学校からそこそ離れた位置にある遊月の自宅。

その玄関で、学校の制服姿で、百枚を超えない程度のカードと学生靴を持った綾羽が、寝間着であきれ顔になっている遊月と向かい合っている。

「……（チラツ）」

遊月は玄関から目を離して、後ろを向いた。

そこには、廊下の角から、びくびくしながらこちらを見ている寝間着姿の香苗がいた。

まあなんとというか。あれだ。『怒られる五秒前』みたいな雰囲気である。

遊月は再び綾羽のほうを向く。

「……まああがれよ」

「うん」

とりあえず中に入れた遊月。

「晩飯食べてるのか？」

「え、うん。食べてる」

「わかった。とりあえずリビングに入れ」

そーいいながらリビングに入る。

そこそこ広い部屋だ。

ゲーム機が置いてあって、格ゲーの真っ最中だったようだ。

男性キャラのHPがすべて消失し、女性キャラのHPが満タンなのだが……。

「えっと……その……」

「月詠からいろいろ聞いてるし、私もISDについては知っている。事情は説明しなくていいから、何をしたいのかまず考えろ」

「あ……うん」

言いにくいことはすべて察する遊月。

だからこそ、悩んでいるほうは余計なことを考えなくてもいい状況が生まれるのだ。

それくらいのアオローができるくらいは生きている。

「それと……」

遊月はカードを一つ渡した。

「……なにこれ」

「部屋のカードキーだ。どうせここに住むつもりなんだろう。香苗から話を聞いて、そんな荷物を持ってきたみたいだからな」

「そ、それはそうなんだけど……その……」

「言いにくいことを言えと言っているわけじゃない。まさか自分に秘権がないと思っっているわけじゃあるまいし、まずはゆっくりしろよ」

「あ、ありがとう」

言葉の数が少ない綾羽。

その代わり、慣れている遊月がすべて言う。

まあ、こんな男だから頼られるわけなのだが、こればかりは遊月の経験値の問題である。

「で、スマホか何か持ってきてるのか？」

「も、持ってきてない。私が使うスマホも、デュエルディスクも、全部GPSがついてるから……」

「電子機器を持たずに家から飛び出すなんてな。まあいいか……なら、代わりにこれつかえ」

遊月は近くの引き出しの力を開けると、そこからスマホとデュエルディスクを取り出して、綾羽に渡した。

どちらも黒い塗装のものである。

「え、これ……」

「見ての通りだ。パスワードを何も設定してないし、アプリはほとんど入れてないから、自由に使え」

「でも……」

「でももくそもない。スマホはとにかく、ナノマシンのせいで普通の

デュエルディスクが使えないはずだ」

「な、何で知って——」

「言ったはずだ、私はISDについて知っている」と

綾羽は黙った。

「当然。それを研究している機関についても知っている。ナノマシンを無効化するディスクを使うことになるとは思ってなかったが……まあ問題はない。スマホには電子マネーがそれなりに入ってるから、何か買うときはそれをつかえ」

「あ、あの……」

「なんだ？」

「なんで、ここまでしてくれるの？」

純粹な疑問だ。

何をどう考えても、綾羽は迷惑をかけた来た側だ。

さすがに何かを手伝うつもりではいたが、だからと言って、何も言わないうちからここまでしてくれるとは思っていなかった。

「ここまでしておけば、とりあえず当面の問題はなくなるからだ。そうしないとスタートラインに立てない」

「でも、私、迷惑をかけたに來ただけで……」

「まあ、とりあえず……」

遊月はあくびをした後、呑気な口調で続ける。

「私は、私に惚れた女の前でダサイことはしない。いろいろ準備することがあるから、香苗と適当にしゃべっている」

そういうと、遊月は部屋を出て行った。

綾羽は言われたことを頭の中で反芻して……。

「う……う……う……う……う……う……う……」

どこに気持ちを持っていけばいいのかわからない感じになった。

とりあえずソファのクッションを殴りまくる。

だからこそ、気が付かないのだ。

「……」

こちらをじーつと見ている香苗がいることに。

数秒殴りまくった後で、綾羽は香苗がいることに気が付いた。

「いや、あの、香苗ちゃん。これは……」

「クツションがどうかしたのですか?」

香苗がアホな子でよかったと綾羽は十割くらい本気で思った。たまに天然が入って救われた気分である。

「いや、まあ、あの、何でもないんだけどね。うん……ここに住むことになっちゃった」

「私もそんな感じですよ」

香苗も同じだ。

自分から押しかけたはずなのに、遊月が強引過ぎて、まるで遊月のほうから抱え込みに来たような感じになる。

おそらくそれは、遊月が慣れていて、ちよつとめんどくさがり屋だからだろう。

話を早く進めようとするれば、押しかけて来た側の意見なんて聞いたられない。

だから、それがちよつと強引に見えるのだ。

「なんていうか……時間をかけなくていいとわかっていることは、本当にすぐにやるんだよね。遊月君」

「そうですね。お兄ちゃんは頼りになりますから」

「うん……ん?お兄ちゃん?」

「はい、お兄ちゃんって呼んでもいいですかって聞いたら、良いって言ってくれました!」

『ペア……』といったひまわりのような表情でそういう香苗。

曇っている部分は何一つない、いい笑顔である。

綾羽は顔が赤くなった。

「んな……ぐぬぬ……!」

なんというかこう……うらやましいことがすべて先取りされているような感じがして、すごく悔しい綾羽。

「綾羽さんはどうなんですか?」

「わ、私はその……ゆ、遊月君のことがす——」

「おーい綾羽!。風呂入れたぞ!」

遠くから遊月のだらしない声が聞こえた。

「んーんーんーもおおおおおおー！」

狙ってんのか！狙ってんだろ!?

そんなことを叫びたいが、なんだかいうのは負けた気がするので恥ずかしい。

しかも……。

「あはははははは！」

香苗は腹を抱えて爆笑している。

「わらうなーんーんー！」

「い、いひゃいへふよー」

我慢できなくなつて両手で香苗の頬をつねる綾羽。

なんだかこう。怒りを遊月本人に向けることができなくて、代わりに香苗にぶつけているような、言つてしまえばものすごく惨めな感じである。

「むぐぐぐぐ」

数秒で香苗を開放し、何を言えいいのかわからず風呂に向かう綾羽。

不安だつたこととか、悩んでいたこととか、そういう部分は、かなり薄れているようだ。

★

『フッフ。さすがにあの銀髪の嬢ちゃんは無理だが、あの女の裸は覗いてやるぜ』

まだ煩惱が爆発しているグローアップ・ブルーム。

そーつと脱衣所に進んでいく。

だがしかし、この家には、遊月でも香苗でもなく、そして列車たちでもなく、まだ存在がいるのだ。

『あー！ゾンビはな！』

『なんだその名前！』

灰流うららである。

デッキに投入できないため普段は別の場所で保管しているが、ちゃんと持ってきた。

で、綾羽と香苗が話しているときの空気に入り込めなかつたのでこ

うして精霊たちがたくさんいる場所で戯れようとしている。

『ハツハツハ！ゾンビはな！ゾンビはなだつて！我の腹筋がやばい！』

『チキングよりましだ』

『うるせえ！え、ちよつと待って、それって定着してるの!?!』

超デフォルメモードのドーハスーラと、『真紅眼の幼童』姿のレッドアイズが来た。

『あ、精霊連れてたんだね〜』

『なかなか活発そうなお嬢さんだなあ……』

『幼い子が増えました』

『まあ、若いもんが元気そうなのは年寄りには目の保養じゃよ』

陽気なライナー、グータラ系のグスタフ、インテリ風のドーラ、おじいちゃんみたいなりーべ。

子供のおもちゃみたいなサイズになっている。

香苗のそばにいる精霊だ。

『……騒がしいのが来た』

遠くからそれをジト目で見つめる『儂無みずき』

もとは『幽鬼うさぎ』だったのだが、『なんだかサイキック族だとかわれなさそう』ということで、思いつ切ってアンデットワールドに飛び込んでアンデット化したようだ。

なお、『幽鬼うさぎ』と『儂無みずき』は手札誘発同士だが、元ネタとしてあまり関連性はない。

ちなみに一番驚いたのは遊月である。

そもそも、うさぎだったときは精霊ですらなかったのだから。

『あつーおもちゃー！』

うららが列車たちを見てそんなことを言った。

そしておいかける。

『あ、追ってきましたね』

『ほっほっほ、元気じゃのう』

『よーし、迎撃してやる！グスタフ！』

『えー。めんどくさいなあ。でもまあ僕の必殺技、『スーパースペシヤ

ルブランクショット』をお見舞いしてやるか』

『我よりだらしなすぎるぞ！』ブランクショット』って『空砲』だろ！?』

『え、チキングって英語できたのか?』

『文法は即座にジエンドだがオタクだからかつこいい単語には強いぞ』

『それって単なる勉強不足。あと、チキングを訂正させてない』
というより騒がしい。

『とにかく、僕はあの女の裸が見たい！胸大きいし良い形のおしりなんだもん!』

『ダメー!』

香苗の尻はそうでもないといいたいのだろうか。

それはともかく、うららがブルームを持ち上げて、花のところを持って振り回し始める。

『おええええええ。ちよつとストップストップ!』

なんだか一方的だが、そもそもブルームは効果は優秀だがステータスは貧弱であり、何より効果ではうららとは相性最悪である。

『よし、今のうちに逃げろろろ!』

ライナーが逃げ始める。

それに続いて他の列車たちも逃走。

『あ、まって!』

うららはブルームを振り回しながらライナーたちを追った。

『ちよつ。待つて!まずおろしてくれええ!』

『まてええええ!列車なら線路を走りなさい!』

確かに。

『ハッハッハ!線路なんて関係ないよ』

列車なのにそれでいいのか?ライナー。

……で、角を曲がって消えて行った精霊たちを見て、ドーハスーラ、レッドアイズ、みずきは顔を見合わせる。

『……平和だな』

『平和なの?』

『みんなで騒げるということは、余裕があるということだ。平和であろうな』

『ふうん』

みずきはぞんざいに返答すると、そのまま遊月の私室に入っていた。た。

『さて、我らも追いかけるか、我は騒がしいほうが好きだぞ』

『俺も嫌いじゃないな』

というわけで、ドーハスーラとレッドアイズもうららちを追うのだった。

★

そして真夜中。

ピンクの寝間着を着た綾羽は、遊月の私室の前に忍び足で来た。

そして少しだけ扉を開く。

中では、ベッドで遊月が寝息を立てていた。

(……よしっ！)

何がだ。という疑問など通じるわけもなく。

綾羽がもう少し扉を開けようとしたとき……。

気配を感じて振り向くと、枕を抱いてこちらに来ている香苗がいた。

「?!?!?!?!」

お互いに『なぜここに!?!』と言いたそうな雰囲気だが、とりあえず綾羽は扉を閉じる。

そして、香苗の方を向いた。

「香苗ちゃん。この家って、地下にデュエルできるスペースがあったよね」

「望むところですよ」

というわけで、お互いに自分の部屋に戻って、ものすごく真剣な顔でデッキを見て、デュエルディスクを持って地下に行く。

綾羽がいったとおり、地下にはデュエルコートが存在する。

高さは最低限だが、そんなことはこの際関係ない。

お互いにデュエルディスクにデッキをセット。
デッキがシャッフルされる。

「フフフ。香苗ちゃん。手加減なしだからね」

「わかっています。一発勝負です！」

「デュエル！」

綾羽 LP8000

香苗 LP8000

お互いに何をかけているのかすら言わず、始まったデュエル。

しかもお互い寝間着である。パジャマ姿でデュエルしているというレアケースだ。

当然のようにこそつとブルームがビデオカメラを持ちだして記録中である。

先攻は香苗。

「私の先攻。まずは『転回操車』を発動です！」

即座に発動されるフィールド魔法。

香苗のデッキの潤滑油である。

「そして私は、『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を妥協召喚！」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト ATK0 ☆10

そして出て来る深夜急行。

もしかしてバレット・ライナーじゃなくてこちらが精霊なのではないかと思うほどの召喚回数である。

「そしてこの瞬間、転回操車の効果発動です！」

「甘い！手札から『灰流うらら』の効果発動。『転回操車』の効果無しに効にするよ！」

うらら登場。

『えいっ！』

出てきたうららは綾羽から離れて、転回操車のブレーカーを落とすた。

(あ、そう言う感じなんだ)

『お姉ちゃん！頑張ってるね！』

そういうとうららは消えていった。

「むむ、転回操車は止められました。手札から『弾丸特急バレット・ライナー』を特殊召喚です！」

『よし。行くよ〜！』

弾丸特急バレット・ライナー ATK3000 ☆10

楽しそうに登場するバレット・ライナー。

「さらに、『アイアンドロー』を発動して二枚ドローです」

カードを二枚引く香苗。

あと一回しかモンスターを特殊召喚できなくなった。

「私はレベル10のナイト・エクスプレス・ナイトと、バレット・ライナーで、オーバーレイ！全てを守る盾を手に、いざ、出陣！エクシズ召喚！ランク10『No. 81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドロー！』」

No. 81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドロー DFE4000

★10

『まずは私からですね』

先攻一ターン目。

そう考えれば悪くはない性能を誇るドロー。

壊獣にはさすがに無力だが……。

「私はカードを一枚セットして、ターンエンドです！」

残した手札は二枚。

「私のターン。ドロー！」

元氣よくドローする綾羽。

うららを使ったので五枚スタートである。

「私は『トレイドイン』を使って、『The splendid VE NUS』を捨てて二枚ドロー。『天空の宝札』を使って、『大天使クリステリア』を除外して二枚ドロー」

手札を入れ替えていく綾羽。

(ヴァルハラスタートじゃないですね。珍しいです)

香苗はそんなことを思ったが、デュエルに集中する。

「私はモンスターをセット、カードを三枚セットして、ターンエンドだ

よ」

「それなら、ドーラの効果を使って、自身が効果を受けなくなります。そして、墓地に送ったバレット・ライナーの効果で、デッキから『重機貨列車デリックレーン』を手札に加えます」

準備完了。といった表情の香苗。

「私のターン。ドロー！」

「スタンバイフェイズ。『戦線復帰』を発動。墓地の『The splendid V E N U S』を守備表示で特殊召喚するよ」

The splendid V E N U S D F E 2 4 0 0 ☆8

「V E N U Sの効果で、天使族モンスター以外のモンスターの攻守は500下がるよ」

N o . 8 1 超弩級砲塔列車スペリオル・ドーラ D F E 4 0 0 0

↓3500

「ですが、まだまだ大丈夫です！私は『爆走軌道フライング・ペガサス』を通常召喚！」

爆走軌道フライング・ペガサス A T K 1 8 0 0 ↓1300 ☆4

「そして、フライング・ペガサスの効果を発動！墓地からバレット・ライナーを——」

「無駄だよ。チェーンして『奇跡の光臨』を発動。『大天使クリスティア』を特殊召喚！」

大天使クリスティア A T K 2 8 0 0 ☆8

「む……なら、ドーラを攻撃表示に変更します！」

N o . 8 1 超弩級砲塔列車スペリオル・ドーラ D F E 3 5 0 0

↓A T K 2 9 0 0

「バトルフェイズ。ドーラでクリスティアを攻撃！」

「罨カード『和睦の死者』を発動」

これで守られる。

「メインフェイズ2です。私はカードを二枚セットして、ターンエンドです」

「私のターン。ドロー！」

カードを勢いよくドローする綾羽。

伏せカードは使いきったが、これで手札は二枚。

「私はVENUSを攻撃表示に変更するよ」

The splendid VENUS DFE2400↓ATK2800

「そして、セットしたモンスターを反転召喚。『勝利の導き手フレイヤ』！フレイヤが場にいる限り、私のフィールドの天使族モンスターの攻守は400アップするよ」

勝利の導き手フレイヤ ATK 100↓50

0

The splendid VENUS ATK2800↓3200

大天使クリスティア ATK2800↓3200

0

「ドローの攻撃力を超えてきましたね……でも……」

「フツッ。バトルフェイズ！VENUSで、フライング・ペガサスを攻撃！」

香苗 LP8000↓6100

「そして、クリスティアでスペリオル・ドローを攻撃！この瞬間、手札から『オネスト』の効果を発動！」

大天使クリスティア ATK3200↓6100

「やはり握っていましたが……『ガード・ブロック』で、ダメージを0にします！そして一枚ドロー！」

……強い。

香苗は普通にそう思った。

爆発力がある列車デツキに対して、奇襲性、制圧力のある天使族。

先にガチガチに固めたほうが強いのは分かっていたが、ヴァルハラを使わず、本来のデュエルをする綾羽が強い。

「そして、フレイヤでダイレクトアタックだよ」

フレイヤがポンポンを使って香苗の頭をたたく。

当然、大したダメージではない。

香苗 LP6100↓5600

「私はカードを一枚セット、これでターンエンド」

大天使クリスティア ATK6100↓3200

「私のターン。ドロー！」

香苗はカードを見る。

正直『おっ！』と思った。

「私は『皆既日蝕の書』を発動します！」

綾羽のモンスターがすべてセット状態になる。

しかし……【列車】デッキで皆既日蝕とは……デメリットを考えれば、場を壊滅させる気満々である。

「セットしていた『緊急ダイヤ』を発動。デッキから『弾丸特急バレット・ライナー』と『爆走軌道フライング・ペガサス』を特殊召喚です！」

『またまた登場だZE！』

弾丸特急バレット・ライナー ATK3000 ☆10

爆走軌道フライング・ペガサス ATK1800 ☆4

「フライング・ペガサスの効果で、墓地からナイト・エクスプレス・ナイトを特殊召喚して、さらに、手札からデリックレーンを特殊召喚！」
深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト DFE3000 ☆10

重機貨列車デリックレーン ATK1400

☆10

「そろってきたね」

「はい。そして行きますよ！出てきてください。重機を呼び起こすサーキット！」

アローヘッド確認。

「召喚条件は、機械族二体。私はフライング・ペガサスとバレット・ライナーを、リンクマーカーにセット！新たな設計図で、いぎ連結！リンク召喚！リンク2『機関重連アンガー・ナツクル』！」

機関重連アンガー・ナツクル ATK1500 LINK2

「さらに、ナイト・エクスプレス・ナイトとデリックレーンでオーバーレイ！全てを砕く大砲を装着し、いぎ発進！リンク10『超弩級砲塔

列車グスタフ・マックス』！」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK3000 ★10

『あーだるい』

全然やる気がないグスタフ。

「グスタフ・マックスの効果発動。2000ポイントのダメージです！」

「うわっ！『ダメージ・ダイエット』を発動！」

でも効果はちゃんと使う。

綾羽 LP8000↓7000

「デリックレールの効果発動。対象はクリスティアです！」

裏になっているが、どこにあったのかはさすがに覚えている。

クリスティアが撥ねられた。

「さらに、グスタフ・マックスでオーバーレイ！全てを滅する力を得て、いざ、出動！ランクアップ・エクシーズ・チェンジ！ランク11

『超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ』！」

超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ ATK4000 ★11

『ホッホッホ。さて、老骨に鞭打つをするかのう』

お前のどこに骨があるんだ。

「リーベの効果発動。攻守を2000ポイントアップです！」

0
超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ ATK4000↓6000

「『エクシーズ・リボーン』を発動。戻ってきてください。ドローラ！」

『任されました』

No. 81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドローラ ATK3400

「そしてバトルフェイズ！リーベで二体のモンスターを攻撃！」

VENUSとフレイヤが撃ち抜かれる。

「そして、ドローラとアンガー・ナツクルでダイレクトアタックです！」

「ダメージは半分だよ！」

綾羽 LP7000↓5300↓4550

なんだか全然削れなかった気がするのはきつと気のせいだろう。

「メインフェイズ2に入って、カードを一枚セット、このままターンエ

ンドです」

「ふう、モンスターがいなくなったし、皆既日食のドロもできないね。だけど……私のターン。ドロー！『強欲で貪欲な壺』を発動して、十枚除外して二枚ドロー。『マジック・プランター』で、『奇跡の光臨』をコストに二枚ドロー！」

綾羽は手札を見て、そして笑顔になった。

「香苗ちゃん。このデュエルもらった！」

「！」

「私は手札から『ヘカテリス』を捨てて、『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加える」

「来ましたね……」

「そしてヴァルハラを発動！」

発動されるヴァルハラ。

だが、香苗が感じたのは疑問だった。

香苗はISDを知らない。

しかし、遊月や綾羽、そして英明が何か特別なカードを持っていることは何となくわかる。

よくわからないが、精霊たちと接しているような感覚だ。

しかし、その感覚が、今は感じられない。

特別なものではなく、『普通のカード』を使っているような、そんな感覚。

「効果発動！手札から『マスター・ヒュペリオン』の特殊召喚！」

マスター・ヒュペリオン ATK2700 ☆8

「効果発動。ヘカテリスを除外して、ジャガーノート・リーベを破壊する！」

「それなら、ドローの効果が発動です。リーベを守ります！」

「……助かったよ」

「え？」

「だって……ドローの効果を私のモンスターに使われたら、私が使う効果も受け付けないからね」

「え……あつ！」

気が付いたようだ。

「なら、私は『収縮』を発動です。マスター・ヒュペリオンの攻撃力を半分にします！」

マスター・ヒュペリオン ATK2700↓1350

攻撃力が下がるマスター・ヒュペリオン。

だが、綾羽の表情は曇らない。

「香苗ちゃん。それはバトルフェイズに入ってからするべきだったね。私の切り札を見せてあげるよ！手札から『儀式の下準備』を発動。デッキから『エンドレス・オブ・ザ・ワールド』と『破滅の女神ルイン』を手札に加える」

「る……ルイン!?」

「そして『エンドレス・オブ・ザ・ワールド』を発動。マスター・ヒュペリオンをリリース」

マスター・ヒュペリオンが消滅する。

「破滅した世界より、希望を手に、自壊する魂を導くべく降臨せよ！儀式召喚！『破滅の女神ルイン』！」

破滅の女神ルイン ATK2300 ☆8

光臨するルイン。

それに対する香苗の表情は、まぎれもなく驚愕だった。

そもそも、香苗は綾羽のデッキで、特殊召喚モンスターを見たことがなかったのだ。

「バトルフェイズ。ルインでジャガーノート・リーベを攻撃。そして手札の『オネスト』の効果を発動。攻撃力分アップさせるよ」

破滅の女神ルイン ATK2300↓8300

「攻撃力……8300!?!」

この前12000をたたき出したのはどこのどいつだ。

「ルイン。行くよー」

ルインの槍がリーベを貫通する。

香苗 LP5600↓3300

「そして、追加攻撃でドローを攻撃。これで、私の勝ち！」

香苗 LP3300↓0

デュエル終了。

★

「つ……強かったです」

「まあね。これが私のデツキなんだよ」

デュエル後。

綾羽と香苗はそのまま話していた。

「今まで、決められたデツキしか使えなかったから、ルインを入れることができなかったんだよ」

「それで、お兄ちゃんからデュエルディスクをもらって、使えるようになったということですね」

「うん」

そして、二人ともわかっていた。

なかなか話しださないが、ルインが精霊だということに。

とはいえ、まだ時期ではないのか、いくら呼びかけても返事がない。

嫌われているわけではなさそうなのだが、それでも、思うところはあ

る。

と思ったら、うらら登場。

『え、あのひんにゆーのおねえちゃんがどうしたの?』

(あっ……)

次の瞬間。

『だれが貧乳ですって?』

『いたたたたた!』

ルイン降臨。

そして、そのままうららの頭をがっちりつかんで持ち上げていた。

『も、もういいませんから許してください』

『よろしい』

そういうと、ルインがうららを下ろした。

うららはふらーつと部屋を出て行った。

「……ルイン」

『初めまして、ですね。私はルイン。マスターが所有する精霊です』

「うん。私は大束綾羽。よろしくね」

『まだ見せないつもりだったのですが、少々コンプレックスでして、ええ、全然、まったく、これっぽっちも気にしていませんが……』
そういいながらも、綾羽と香苗の胸をチラチラ睨んでいるところをみると、いろいろ黒いものを抱えているようだ。

『いつでも私はマスターの力になります。それではまた』

「うん。これからよろしくね」

ルインがうなずくと、そのまま消えて行った。

「さて、ひと段落ついたことだし、香苗ちゃん。また明日ね」

「はい。明日は負けませんよー！」

明日もやるつもりようだ。

綾羽は少し勝ち誇ったような笑みを浮かべて、デュエルコートを出ると遊月の私室に行く。

ドアを少し開けて寝ていることを確認。

内心ガッツポーズをして、中に入る。

そして……。

うららとみずきがパジャマ姿で遊月に抱き着いて寝ているところが目に焼き付いた。

(……ま、負けた)

何にだろうか。

(で、でも、まだ頑張れば……)

綾羽はベッドの上上がる。

シングルベッドの上は大変狭い。

が、何かこう抑えられないので、綾羽はどうにかして遊月に抱き着いた。

うららを挟んでいるが、そんなことはどうでもいい。

とにかく抱き着いた。

(……暖かい)

頼れる背中である。

そしてまあ……あれだ。

香苗の二の舞になるのであった。

第十七話

さて、遊月の強引さでなんとか普通まで一夜で持つて行ったわけだが、もちろん問題が消えるわけではない。

ただし、遊月は別に面倒だとは考えていない。

ISDにかかわる研究施設は確かに持っている権力が強大だが、それでも、実はアムネシアのほうが強いのだ。

大幅にかかわっているであろう月詠がアムネシアの生徒会長として普通に活動できているのもこれが原因である。

「まさか生徒会長が月詠だったとは……」

「え、遊月君って、月詠さんのこと知ってるの？」

「一夜だが家に置いたこともあるぞ」

「ええっ!？」

確かに、一夜だけ男の家に泊まったといっていたが、遊月の家だったとは……。

「私の家を駆け込み寺だと思っている人は多いからな」

「というか、遊月君の家ってかなり大きいよね。二階と三階に部屋が六つずつあったよ」

「お兄ちゃんの家は地下にも部屋がありますね」

「地下二階まであるな。まあ、地下二階はそこそこVIPな奴が来た時に騒がせないためのものだが」

「……え、遊月君が一人で管理してるんだよね」

「ホテルマンの経験あるから問題ないよ。あと、こういう管理は『スケープ・ゴースト』が得意なんだ」

遊月はあくびをしながらそんなことを言った。

「まあ、もともと小さなアパートだったからな。金余ってるし、団体で抱えてた時があったから、その名残だ。みんな巣立っていったけど」

遊月は感慨深そうな表情でそういった。

ちなみに、見た目が普通のアパートのようになってるのは変わらない。

そのため、遊月は基本的に『アパートの一室に住んでいる』と思わ

れがちである。

本当はアパートそのものが遊月の家なのだが、まあ、ある種の力モフラージュである。

だから駆け込み寺になるんだけどな！

「さて、学校に行くか」

そういつて、玄関で靴を履いて、そのまま土足のまま歩ける廊下を歩いていく遊月。

「え、遊月くん。ドアってこっちだよね」

「ドアはそっちだ。いいからついてこい」

綾羽と香苗は顔を見合わせたか、二人共遊月についていく。

すると、エレベーターについた。

ずっと荷物運搬用だと思っていたものなのだが、そこに入っていない。

遊月は綾羽と香苗が入ったことを確認すると、エレベーターの操作盤にカードキーを入力させて、地上三階から地下二階、開閉と上下が表示されているボタンのうち、『開』と『閉』と『下』を同時に押しした。すると、エレベーターが下がり始める。

地下二階を超えて。

「え、これどういうことなの？」

「地下二階が一番下じゃないってことだ」

そこではない。

エレベーターが下るのは早かったようで、二人が啞然としているうちに下がった。

ドアが開くと、少し広いくらいの広場に出た。

「あの、これからどうするの？」

「ん？うん。もうそろそろ来ると思うんだがなあ……」

遊月がそういつたとき、遠くからハイヤーが走ってきて、遊月たちの前で止まった。

運転席から一人の青年が出てくる。

スーツでぴしっと決めた少し長い黒髪と銀縁メガネが特徴で、近寄りやすい笑顔を浮かべている。

「遊月様。お待たせいたしました」

「いや、時間通りだから問題ないよ」

遊月に対して様付けで呼ぶ青年。

「あ、自己紹介が遅れましたね。私は小湊こみなと創輝そうきと申します。よろしく
お願いします」

丁寧である。

「んじや。さっそく行くこうか」

「……遊月君。私、小湊つてどこかで聞いたことがある気がするんだ
けど」

「アムネシアの理事長の息子だから当然だ」

「ええっ!?!」

驚く綾羽と香苗を無視して助手席に乗り込む遊月。

それを見て、綾羽と香苗は後部座席に乗り込んだ。

創輝は運転席に座る。

そして発進。

しばらく、無機質な通路が続く。

「そういうえば、理事長の息子つて……運転手なんてして大丈夫なんで
すか?」

「継ぐのは姉様なので問題ありませんよ」

「その姉貴は英才教育に悲鳴を上げてるけどな。創輝は逃げるのうま
いから」

「ははは、それほどでも」

(ほめてないと思う……)

唾然としていたが、やっと綾羽たちの意識が地下通路に向く。

「あの……こんな通路があるんですね」

「秘匿性が高いのであまり使いませんがね。ただ、遊月さんの頼みと
もなれば、何度でも許可が下りるでしょう」

そんなことを言う創輝だが、当然、後部座席の二人は驚いた。

「いったい何者なのだろうか。そんな目線で遊月を見る。」

「まっ。どうでもいいだろ。もともと、私の家から学校までの直通
ルートのために作られたものだからな」

「それもそうですね」

もはや意味が分からない。

が、安全に行けるといふのならそれは万々歳だ。

そして広場についた。かなり広い空間である。

遠くのほうでは線路があったので、地下鉄も通っているようだ。

「学校の地下につくから、エレベーターで上がるんだ。特殊なカードキーがないと下に行けないようになってるけどな」

そんなことを説明する遊月。

そして、香苗があることに気が付いた。

「あ、あの、綾羽さんが安全に通うために使ってるんですね。私って乗ってて大丈夫なんですか？」

急にあわて始める香苗。

「安心しろ。私が車に乗っているのなら大体許される」

意味味☆不☆明！

そんな顔をする二人だったが、遊月が車から降りたので、二人も降りることに。

「それじゃあ。帰りも使うから」

「ええ、それではまた放課後に来ますよ」

そういうと、創輝はハイヤーを走らせて消えていった。

「いくぞ」

特に躊躇なく歩き始める遊月。

そんな彼の背中を、綾羽と香苗はあわてて追うのだった。

★

「……なあ遊月。今日って綾羽ちゃん。どこから入ってきたんだ？」

朝礼前。

英明が遊月のところに来た。

「ふむ……」

遊月は自分が知っている範囲で事情を説明。

「で、英明。大丈夫か？そんな地上波無理そうな顔をして」

「どんな顔だ!？」

英明は溜息を吐いた。

ちなみに、英明は地下通路を使ったことがあるので言っても問題はない。

「ついに綾羽ちゃんもお前の家の住人になっちまったか」

言葉とは裏腹に安心した様子の英明。

「まあ、綾羽ちゃんが自分で決めたんなら俺は何も言わねえよ。で、どうするんだ?」

「どうするとは?」

「綾羽ちゃんのことだ。今のままでも問題はねえけど、それだと、強くはなれねえぞ。何かしら終着点は決まってるのかってことだ」

「もちろん決めている。でなければこんな面倒なこととはしない」

遊月はそういうと、本を開いて読み始めた。

「……ならいいや」

英明はタブレットを見始める。

そして、顔をしかめた。

「どうした?」

「いや……なんか面倒な奴が出てきたみたいだ」

「手伝ったほうがいいか?」

「できるならそうしてほしいぜ。ついでに言う……今日俺当番なんだけどな」

遊月は『綾羽ちゃん親衛隊』の業務を思い出す。

当番のものは、綾羽守護。

そうではないものは、綾羽が安心して暮らせるように、悪霊討伐。

といった感じだった。

「ふむ……その悪霊討伐。綾羽もつれていくか」

「え、綾羽ちゃん連れてくの?」

「男の家に単身飛び込んでくるようなやんちゃ娘なんだ。それくらい放り込んでもいいだろ」

「……まあ、遊月もいるし、隊長も納得するだろ……たぶん」

というわけで、悪霊退治にみんなでカチコミすることになった。

★

「まさか香苗の当番の場所ともかぶるとは思わなかったな」

「私も驚きです」

放課後。

アムネシアは午後が大体実技なので、早く終わるときはかなり早く終わる。

そして移動するわけだが、遊月と英明はそれぞれDホイールに乗って、綾羽と香苗は創輝が運転するハイヤーに乗るといった感じになった。

通信機がしっかり備わっているので、車とDホイールでも会話が普通に可能である。

ちなみに、男子三名と女子二名だが、別に格式高いというわけでもないのに一人称が『私』の奴が四人いるというちょっと珍しい感じである。

「そういや、香苗ちゃんはどこかの部署に所属してんのか？前聞いたときはホームページ作ってるところって聞いたけど」

「私は今はフリーですね。まだ精霊力制御疾患の影響が大きいので……でも、お兄ちゃんが手伝ってくれるので大丈夫です！」

英明は顔を見なくても、きつと満面の笑みを香苗が浮かべているんだろうな。ということはよくわかった。

「……遊月」

「なんだ？」

「お前結構暇なんだな」

「実はそうなんだよ」

遊月は遠い目をした。

「むう……遊月君は香苗ちゃんにやさしいんだね」

「何拗ねてるんだ」

「わからないの？」

「わかってるにきまつてるだろ」

「……えっ!?!」

「ハハハ！遊月様。綾羽様で遊んではいけませんよ」

「あははははは！」

香苗も大笑い。

「笑うなーー!」

「い、いひゃいへふー」

また頬をつねる綾羽。

香苗はなかなか学習しない。

「……もうそろそろつくぞ」

「わかった」

英明の言い分に、急に真剣な声で答える遊月。

先ほどまで笑っていた香苗も、悪霊に遭遇するということでスイツチを入れたようだ。

「この角を曲がればすぐだ……いたぞ!」

二台のDホイールと一台のハイヤーが角を曲がると、『魔妖仙獣大刃禍是』が暴れていた。

すぐそばには、妖仙獣たちが暴れている。

「うおっ!カテゴリー単位で悪霊化してんのか!こりや珍しい」

「悪霊化したモンスターが強いと、関連する精霊たちが悪霊になりやすいからな。で、どうする?」

「どうするつつつても、まだ向こうが明らかにデュエルする気サラサラなさそうだぜ」

「……仕方がない」

英明はディスクに二枚のカードを入れて、遊月は『レッドアイズ・トランスマイグレーション』のカードを取り出す。

「行くぞ。レッドアイズ」『了解した』

「変身!」『マスク・チェンジ 光牙』

遊月が炎を包んで、『ロード・オブ・ザ・レッド』に。

英明を光が包んで、『M・HERO 光牙』に。

それぞれ変身。

「ええ!」

そして驚く綾羽。

当然の反応である。

「ライナー!よろしくお願いします!」

香苗は元気よく『弾丸特急バレット・ライナー』のカードを掲げる。

すると、後方から渦のようなものが出てきて、線路が飛び出し、そこをバレット・ライナーが走ってきた。

『よし、思いつきり行くぜ〜!』
楽しそうなライナー。

「……」

口をポカンを開けて愕然とする綾羽。

気持ちには分からなくてもない。

「さて、私はこの車を死守するとして……綾羽様はどうしますか？」

「私は……」

綾羽はデュエルディスクを見つめて、そして、デッキから一枚のカードを取り出す。

『エンド・オブ・ザ・ワールド』のカードだ。

「遊月君のレッドアイズが精霊なら、私にも……」

いうが早いのか、綾羽は車を飛び出して、『エンド・オブ・ザ・ワールド』のカードを掲げる。

「いくよ。ルインー!」

『わかった』

いつでも力を貸すといったルイン。

その言葉の通り、綾羽の中に存在する『精霊力』が消費されて、綾羽の姿が変わっていく。

「よしっ!……あれ?」

変身そのものは完了した。

しかし、思っていたものとは違った。

手に持っている武器が、槍ではなく、円盤のようなものがついている斧のようなもの。

これは……『女神』ではなく、その下の『天使』の方だ。

「ど、どうして……」

「綾羽さん!来てますよ!」

「!」

綾羽が顔を上げると、妖仙獣 木魅が突撃してきていた。斧を振り上げて攻撃する。

切断されてそのまま消えて行つた。

さすがにこの程度なら問題はないようだ。

だが、綾羽の中では、『何故』という感情が抜けない。

「い、いったいどうして……」

変身そのものが成功している以上、ルインは綾羽を認めている。

力を貸すと決めて、そしてその通りに行動している。

だが、それでもルイン本人の力を出せないとすれば、その原因があるのは綾羽自身だ。

「綾羽さん！危ない！」

「なっ……」

綾羽の視界の外から、辻斬風が接近していた。

だが……。

『やはり我は子守か……』

横から波動をぶちかましたドーハスーラによって、辻斬風は消し飛んだ。

「ど、ドーハスーラ？」

『うむ、我も精霊だからな』

「そ、そうなんだ」

綾羽は何となくだが納得した。

『それにしても、何やら悩んでいるようだが』

「わ、私の精霊のルインは女神のはずなのに……」

『なるほど、今悩んでいることは分かった。だが、元から抱えている悩みがあるだろう。それが原因だ』

「！」

ドーハスーラの指摘に、綾羽は表情を変える。

『邪魔だ貴様ら！』

ドーハスーラが杖をふるうと、あたりをうろろろしていた木魅が一気に消し飛んでいく。

波動を使うまでもないようだ。

『あまり我がでしゃばっても仕方のない問題だが、一つだけ言っておこう』

ドーハスーラは一瞬だけ遊月を見た後、口を開く。

『まずは逃げてみるといい』

「え?」

『逃げることは単なる選択であって、それを恥だと騒ぐ者がいるだけだ。逃げた方が正しいのであればいくらでも逃げればいい』

「でも……」

『あと、こういう言い方はあまり好きではないのだが……』

ドーハスーラは溜息を吐いた後、言った。

『はつきり言おう。我は視野が狭い。我が主と比べれば、圧倒的に狭いだろう。そんなやつが吠えたことほど、この世の真理に近いものはない。だが、そんなやつが吠えたことほど、この世の真理に近いものはない』
「それって……」

『何か、叫びたいことがあるのなら叫んでみるといい。それを信じればいい。ないのなら求めればいい。我が主は夢を継ぎたがるから、言葉がほしいというのならいくらでもくれる』

そういうと、ドーハスーラは遊月たちの方に向かった。

ドーハスーラが一喝したことで、このあたりに弱い悪霊は近づけない。

何かが揺れたのだろうか。エンド・オブ・ザ・ワールドが終了して、元の綾羽に戻った。

そして、デュエルディスクの中に保管している、特別なヴァルハラに目を向ける。

「私の力……」

確かに悩みはある。

あの時の不死鳥が忘れられない。

……自分が積み上げてきたものが、簡単に奪われるものなのだということが、惨めでたまらない。

「綾羽さん……」

「……」

綾羽は遊月たちのほうを見る。

そこでは、英明がHEROを並べて大刃禍是のライフを削りきった

ところだった。

すでにデュエルが終了している。

「よっしや完全勝利!どうだ見たか!……あれ?ひよつとして綾羽ちゃん。俺のデュエル見てなかった?」

英明がこちらに来ながら不安そうな目で見てくる。

「あ……うん。ごめん」

「ガーン……」

英明が沈んだ。

そんな英明の肩を、遊月がポンツとたたく。

「まあ、そんなこともあるさ」

「そんなに機会ないからそういうの困るんだけど!」

なんだか元気な様子の英明。

綾羽は苦笑して、車の中に戻った。

「綾羽さん。大丈夫ですか?」

「うん。大丈夫」

内心は大丈夫ではない。

自分が積み上げてきたものが、そんな大したものではないという意識が、あのデュエルから抜けない。

(言葉か……私は、どんな言葉がほしいのかな)

綾羽はそんなことを思いながら、ヴァルハラのカードを取り出すのだった。

★

悪霊討伐に関しては完了したわけだが、他にどこかに行くという予定はない。

英明とは途中で分かれて、遊月、綾羽、香苗の三人は、創輝が運転するハイヤーで地下通路を使って家まで帰る。

ちなみに、地下通路の広場には、小さいながら売店も存在する。

運び込むのが若干面倒なのか、少々高いのだが、そもそもこの地下通路を使うような奴は金持ちが多いので問題はない。

そこで晩御飯の材料を購入してから、家に帰る。

地下でハイヤーを降りると、遊月が創輝の対応をして、創輝はその

ままハイヤーで帰って行った。

そのまま晩御飯も食べる。

そして、お風呂の前。

どちらが遊月のベッドで寝る権利を得るのか。と言うデュエルだ。綾羽としてはいろいろと思うところはあった。

言葉にはしていない。

だが、やはり出ていたようだ。

「……綾羽さん」

「……」

地下にあるデュエルコート。

そこでは、制服姿で二人がデュエルディスクを構えている。

綾羽 LP 0

香苗 LP 8000

結果だけを簡潔に言えば、綾羽の惨敗。

そもそも、ドローとリーベが投入され、真の力を発揮する『列車』が相手では、一瞬でも気を抜けば隙をつかれて終わりだ。

それを考えれば、デュエルするとなった時点で、もう構えておく必要がある。

力を信じることすらできないくらいブレブレなら、勝てるデュエルも勝てない。

「気になることがいろいろあるのは分かります。とりあえず……今日是一緒にお風呂に入りましょう！」

「え？」

笑顔で提案する香苗に対して、とぼけたような声で答える綾羽。

脈絡が感じられずに戸惑っているのだ。

そして……美少女二人がお風呂に入ると聞いて、魂を震わせるものもいる。

『くそっ……どうにかして隠しカメラを設置できれば……』

そう、ブルームである。

ちなみにお風呂に隠しカメラというのは普通に犯罪である。

『ライトの裏か……それとも壁に小さく穴を開けて……ん？ウイリア

ム・テルが聞こえてきた！ヤバイ！」

すっかりトラウマになってしまったブルーム君。

どうやらもう彼はこの曲を聞いてしまうという拒絶反応が起ころうだ。

『だがしかし……色欲は永遠なり！ここで記録に残さなければ男じやな——』

ブチッ！

★

なんだかアレなことになっている不死原邸。

そしてもちろん、問題と言うものはどこにでもある。

「ちよつとーあの子が見つからないってどういうことよ！」

大東家である。

かなり太っている中年女性、おおつかみこと大東美琴が、スーツ姿の男性たちに対して叫んでいた。

「そ、それが……登校時も下校時も、お嬢様の姿を発見できなかったもので……」

運転手の男性が困惑気味に答える。

とはいえ、彼は綾羽が地下通路を使っていることなど当然知らない。

昨日の夜に家を飛び出した綾羽。

今日、学校に登校していたことは事務室に連絡して確認済みだ。だが、そこからの面会がうまくいかない。

普通、親族が会いたいといえは会えるものだが、アムネシアは違う。治外法権と言うほどではないが、生徒達は外部との連絡が制限されているのだ。

そもそも、デュエルは今の世の中では重要視される部分が多すぎる。

単純にカードゲームとしてのそれだけではなく、精霊、そして綾羽たち本人がかかわるISDなど、二手先三手先を読まなければならぬことが多い。

ちなみに、二手先三手先は抜群でも一手先が大ざっぱで行き当たり

ばったりなのが遊月だったりするのだが。

とにかく、学校にある資料を持ちただけでも、かなり多くの制限が付きまとうほどだ。

アムネシアはとある事情により、昔からその席についている理事会の幹部のもの達が『情報』というものの重要性を知っている。いや、過剰に意識していると言った方がいいだろう。

そのため、あまり情報を出したくないのだ。

その反面、生徒達に提供される設備をはじめとしたサービスは大きい。本人だけにその影響が止まるサービスばかりである。

さらに言えば……アムネシアの理事会は、ISDの研究施設。そしてその裏にいる奴らが嫌いである。

結局私情だ。

それはともかく、綾羽とコンタクトが取れないというのは、現実であり事実である。

「あの子がいないと、私が補助金をもらえないじゃない！」

そう叫ぶ美琴。

そもそも、綾羽の両親は仕事をしていない。

ISDの研究会から金が入って来るので、それを使って生活している。

しかし、あくまでも研究のみを行い、研究対象である綾羽の扱いに関しては両親が決めることになっている。

そう言う体で派遣されている職員しかいないのだ。

綾羽の管理責任が両親にはある。

決められた時間に綾羽を研究所に入れることができないというのであれば、補助金が入ってこない。

かなりの金額が振り込まれていたので、それがなくなったからと言って生活のレベルを下げるなど不可能。

「ですが、私たちにも、どこにいるのかは……」

「いいから探してきなさい！」

一喝する美琴。

スーツ姿の男性たちは慌てたように部屋を出ていった。

このような大きな屋敷に雇われて、しかも彼らのスーツの質もかなり高いことを考えれば給料も待遇もいいはずだが、その動きは遅い。

全員がいなくなった後で、美琴はどかっとソファに座る。

「全く、あの子にも困ったものね。ここまで育ててあげた恩も忘れていなくなるなんて。まあ、あの子が一人で生きていけるわけないわ。そのうち自分から帰って来るでしょう。その時はみっちり説教しておかなきゃ」

美琴はそういいながら、近くにあったお菓子の袋を手取る。

……まあ、自分に反抗しないと思っていた娘が、まさかクラスメイトの男の家に上がりこんでいるとは夢にも思わないだろう。

当然、男たちが綾羽を発見できるはずがないのであった。

第十八話

遊月の中、そして遊月邸には様々な精霊がいる。

そして基本的に、アンデット族の精霊に関してはドーハスーラが代表で、アンデット族以外はレッドアイズが代表である。

基本的に遊月の精霊が出て来るときにこの二体がよく出てくるのはそれが理由だ。

チキングと煩惱植物がよく出しやばっている気がするので、自己主張が激しいのはアンデット寄りなのかもしれない。『死んだけど動いている』設定にしては元氣だ。

脳味噌が機能しなくなつて理性など吹っ飛んだのだから、怨霊が元氣ではないわけがないのだが。

『ふむ、それで、元のマスターの傍に一度戻りたいんだな』

『グルル……』

アンデットワールドの中でも比較的死霊的な要素の少ない場所。

そこで、レッドアイズがとある対応をしていた。

レッドアイズが対応しているのは、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンだ。

レイエスに一時的に奪われたヴァルハラを取り戻すために一役買った精霊だ。

とはいえ、ここにずっといる存在ではない。

『すでにお前の元マスターは墓の下でゆっくり寝ているが……マスターの近くにいたいと言う気持ちはよくわかる。ただ、またここに来たいと思ったら何時でも言え。ここにはバカが多いからな』

『グルル』

頷くスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン。

あまりためらいがない様子だ。

とはいえ、悲観している様子もないし、それはレッドアイズも同様。

『いつでもいるから。いつでも来ていい』

まるでそう言っているようにも見えるが、実際にそうだ。

現在進行形で綾羽と香苗を抱えている遊月だが、抱えているのは人

だけではない。

遊月を慕う精霊は多く、馬鹿なものが多いので、その雰囲気求めてやってくる精霊たちはいる。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンがここを離れるのは初めてではないし、そしてまた来たとしても、それはそれで『おひさし』と言ってまた混ざるのだろう。

ただ、ちよつと長い間いる場合もある。そんな程度である。

そして、遊月たちの中で長期滞在する場合は、アンデット族ならドーハスーラ、それ以外ならレッドアイズに報告しておいた方がいいという暗黙の了解があるというだけの話だ（ただし義務ではない。実際守らなくても怒られない）。

『ん、何？地縛神たちと話をしておきたいって？別に構わんよ』

地縛神たちは全員がアンデット族ではない。

思いつきり死者にかかわっていきそうだが、アンデットではないのでレッドアイズの管轄だ。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンが飛んでいく。

あいさつした後で出て行くということだろう。

『……巢立つのを見るのもいいが、出たり入ったりするのも悪くないな』

『なんかそう聞くと田舎の近所付き合いだな』

『レイジングか』

レッドアイズが振りむくと、そこにはオッドアイズ・レイジング・ドラゴンがいた。

『で、何かあったのか？』

『うーん……俺はシエリダンよりもオツPがいいなって思うけど、それは置いておくか。なんかブルームがパソコンの調子が悪いって愚痴ってたぞ』

『なんでブルームが？』

『アイツとドーハスーラくらいしかネット使わねえし……』

どっちもアンデット族であり、出しゃばり組である。

『ていうか、ブルームって何調べてるんだ？』

『それについてアイツに聞いたら盗撮に関して五時間は語って来るぞ』

ブルームの性癖が確定した瞬間である。

『まあ、他人の性癖にとやかく言う必要はないか』

『……』

レイジングは呆れた。

『で、他に何かあるか?』

『まあ、周りからの報告は特にねえけど……スカーレット・ノヴァ・ドラゴンは離れていいのか?』

『どういうことだ』

『いや、最近物騒じゃねえか。アイツの奪い尽くす力、必要になる時が来ると思うぜ』

『最近ドラゴネクロがアイツから教えてもらってたから大丈夫だろう』

『へえ。ドラゴネクロがねえ』

遊月が所有する序列五位の精霊。ドラゴネクロ。

『魂を奪う』という力を元々有しており、制御がいまいちだったので使用が禁じられていた元悪霊。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンと特訓して、そのあたりの制御ができるようになった。

これからは、スカーレット・ノヴァ・ドラゴンが立つべき場所はドラゴネクロが代わりに動いて動くことになるだろう。

『あと……またマスターの口座の金が増えてたけど……』

『ゴブリンゾンビ頑張ってるな』

『……アイツ前世なんだろうな』

『知らん』

序列が与えられていない精霊だが、なんだか金を預けると、一週間くらいで倍くらいになっている。

そして、それを全てマスターである遊月に振りこむのだ。

結果的に遊月の所持金がすごいことになっている。

『まあ、悪いことじゃないからいいか』

『マスターに似て楽観的だな。レッドアイズ』

『レイジングももつと簡単に考えてみな。選択肢が多すぎると世の中損するぞ』

『覚えておく……あ、忘れてた。家の管理をしてるスケープ・ゴーストが、オール電化にしたらどうだつて言ってたぞ』

『どういうことだ？』

『たまにマスターがコンロの火を消し忘れるからだ。その都度あいつが消してるみたいだけど』

『……年を取ったな。マスター』

『とりあえず報告したぞ。それじゃあまたな』

そういうと、レイジングは戻っていった。

『さて、休暇のために学校生活を謳歌するマスターの日常のためだ。そろそろ頑張るとしよう』

レッドアイズはそんなことを呟くと、翼を広げて飛んだ。

★

「なんか黒服多くなつたよな」

「綾羽様を探しているのですね。とは言え、大東家も、ISDの研究関連者も、この地下空間については知らないはずですから、見つけることはできないでしょう」

放課後に集まった遊月、綾羽、香苗、創輝の四人。

DGCにおいて、香苗が悪霊退治によくかり出されるようで、今日もそれに乗っかっている感じだ。

英明は友人に会っているようで、今日はいない。

「しっかりと情報が隠されているんですね」

「私はこのあたりに長い間住んでるけど、こんな場所があるなんて知らなかったよ」

「少人数のみがこの地下空間の建設にかかわっていますからね。それも当然です」

地下空間は広いので、ある程度のエリアまでなら行くことが出来る。さらに言えば、高額オプションだが、列車を使って車ごと乗りこむ

ことも可能だ。

因みに単行列車である。

遊月が車に乗っている場合は金を払う必要がないようだが。

そのため、ハイヤーの外から見える景色は電車の中である。

何故か冷蔵庫やDホイールの整備器具をはじめとして、様々なものがあるのだが。

車両の中ではさすがに車の中にいる意味はないので、出ている四人。

「それにしても、遊月君って何者？」

「お兄ちゃんは家も大きいですし、アムネシアの理事長さんとも知り合いなんですよ。とても気になります」

「……まあ、簡単に言えばフィクサーみたいなもんだよ」

「え……裏でいろいろと言えるってことだよ」

「簡単に言えばな」

「でも、こんな簡単になれるんですか？」

「誰にも真似できないくらい『特殊な意味』で強くなって、後はでかい恩を売ればいいんだ」

「？」

よく分かっている二人。

「大人の汚い世界の話だが、でかい恩を一つ売っておくと、後は利子を踏んだくって一生搾り取れるんだ」

それを聞いた二人は『うっわ。悪っ！』と思ったが、その恩恵を今受けている真つ最中なので何も言えない。

「なるほど、勉強になりますね」

そしてそれを脳内のメモに残す創輝。

なんだか黒すぎて何も言えない。

そんな話をするのが嫌になったのか、綾羽は遊月の方を見る。

「あの、冷蔵庫とか、整備器具とかいろいろありますけど、この単行列車ってレンタル品なんですか？」

「いや、私専用の特注品だ。走っている線路は確かに他の列車も走るが、機能性重視で作られた私専用のものだよ」

「ええ!？」

一人の人間のために列車がある。

その現実に驚く二人。

「まあ、そんなに長い列車じゃないからな」

「でも、どうしてそんなものまで……」

遊月は少し、遠くを見るような目になった。

「まあ、私にも、はっちゃけていた時代はあるということだ」

「……」

空気に耐えられなくなったのか、綾羽は話題を変更し始める。

「ねえ、遊月君」

「なんだ？」

「遊月君は、なんでそんなに強いのか？」

「経験」

即答する遊月。

絶句する綾羽。

吹きだす香苗と創輝。

「笑うな！」

綾羽は叫んだ。

「プクク……すみません」

「ハハハ！遊月様の即答は腹に刺さりますね」

なんて失礼な人たちなのか。

「しかし、なぜ強くなったか……強くなれる方法に攻略本はないぞ。

失敗は成功の母。失敗と成功が『夢』の母だ」

「それは……わかってるけど……」

「なら、綾羽はどんなデュエリストになりたい？」

「え？」

「人は、グッズを持っていれば誰でもデュエリストだ。なるのは簡単だよ。だけど、どんなデュエリストになりたいかというのは、みんな違うはずだ」

「遊月君は決めてるの？」

「もちろん。それをちゃんときめておけば、『一匹狼』と『独りよがり』

を勘違いせずに済むからな」

遊月はうなづく。

「私はね。クサイことを言った時に、場がしらけるんじゃないかって、かっこいいって思われるようなデュエリストになりたいんだ」
(とういかまらずこのセリフがクサイ)

遊月の言葉に綾羽はそう思ったが、しかし、悪い気はしない。

自信があつて、でも誰かにそれを押し付けることはなくて、ただ、周りにいる人間は遊月という男に頼れる。

そんな感じがするからだ。

「夢を追いかけてる人を見るのは好きだよ。そんな人間の手助けができればいいと考えることもある。頼られる側でいたいと思ってる。だが、一番大きいのはそこかな。だから、長い時間を使って、周りに頼られるために自分を高める。私がいれば大丈夫だつて思つてほしいんだ。英明や月詠、そして創輝、私の家に泊まったことがある人間は、大体それぞれの答えを持つてるよ。変わっているかもしれないがな」

「え、そうなんですか?」

香苗が創輝を見る。

創輝はうなづく。

「もちろんです」

「なんていうか……すごいですね」

「スケールが違うね」

創輝が苦笑している。

「一度、遊月様に『いい男になる条件は何ですか?』と聞いたことがあります。『クサイことは言うけど、一番重要な部分は背中で語る。なんで惚れてるのか言葉にしたら、理解してしまつてその価値が下がるからな』と聞いたときは、大笑いしましたけどね」

「あの時と同じようにボディブローを入れてやろうか?」

「遠慮しましょう」

その時、ブザーが鳴った。

「さて、そろそろついたな。悪霊退治に行くぞ」

「そうですね」

創輝と遊月はハイヤーに乗り込んだ。

それを見て、綾羽と香苗も、あわてたようにハイヤーに乗り込んだ。

★

今回相手にするのは……。

「……『ウォーター・ドラゴン』みたいですね」

香苗にとってなかなか久しぶりに見るモンスターのようだ。

「まあ、悪霊なら倒すだけか」

「シンプルですね」

「だって下手に気にしても仕方がないからな」

創輝がハイヤーを止めると、遊月はハイヤーから降りた。

「さてと……うわ、周りには『ハイドロゲドン』の群れがやばい……」

「私が片付けます！グスタッフ！」

香苗がグスタッフ・マックスのカードを掲げる。

『やれやれ、面倒だけど、まあ頼まれたからにはやりますか』

渦が出現して、グスタッフ・マックスが出現。

『むうう。もう見つかるとはな。だが、即座に叩き潰してやる！』

ウォーター・ドラゴンは乗り気のようにだ。

「ほう、叩き潰してやるって？大した悪霊でもないくせにでかい口叩くじゃないか」

遊月はデュエルディスクを構える。

『フーン……この数のハイドロゲドンを処理しきれないわけがなからう。やれ！』

『だから、僕がいるってことわすれてない？』

グスタッフ・マックスが大砲を一発ぶちかました。

すると、ハイドロゲドンが爆散する。

『む……だが、まだまだあふれてくるぞー！』

そう。あふれてくる。

……下水道から。

「だが、倒せばいいだけの話だ」

遊月はデュエルディスクからカードを五枚引いた。

ウォーター・ドラゴンのそばにも、デジタルカードが五枚出現する。

『いいだろう。ならば、デュエルでも叩き潰してくれる』

「さてと、死後の世界の広さを教えてやるか」

『デュエル！』

遊月 LP8000

WD LP8000

『フン。先攻はくれてやる』

「なら、私のターンだ。このドローフェイズ。速攻魔法『手札断殺』を発動。お互いにカードを二枚墓地に送って二枚ドローだ」

お互いに手札を交換する。

「そして、墓地の『屍界のバンシー』の効果発動。このカードを除外することで、デッキから『アンデットワールド』を発動！」

発動されるアンデットワールド。

いつも通りの重苦しい雰囲気だ。

遊月の『化身カード』の力である。

「そしてスタンバイフェイズだ」

遊月の墓地から闇は溢れ出す。

「終わりも始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の

魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ！』

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

『フハハハハ！我、降臨！』

上機嫌な様子のドーハスーラ。

『い、一ターン目からその効果を使うとは……』

「こういうこともできるのさ」

ちなみに圧倒的デイスアドコンボとして、ドローフェイズで『光神化』を使って『時械神』を出した場合、そのドローフェイズの後のスタンバイフェイズでデッキに戻る。

【時械神】使いである月詠が言い出したことだが、遊月としては絶句したい思い出だ。

「そして、『不知火の隠者』を召喚。リリースして『ユニゾンビ』を特殊召喚して、デッキから『馬頭鬼』を落とすことで自身のレベルを一

つ上げる。そして、馬頭鬼を除外して隠者を特殊召喚」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3↓4

不知火の隠者 ATK 500 ☆4

「レベル4の隠者に、レベル4のユニゾンビをチューニング。増幅器を駆り、突き進むべく疾走せよ。シンクロ召喚！レベル8『PSYフレームロード・Ω』！」

PSYフレームロード・Ω ATK2800 ☆8

「ふーむ、『アドバンスドロ』を使う。ドーハスーラ、ちよつと退散しろ」

『え、ちよ……いやあああああああ！』

情けない声を出しながらドーハスーラが消えていく。

そんなに嫌か。

「カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

『なら、オレのターン。ドロー！』

「スタンバイフェイズ。Ωとドーハスーラの効果発動。『馬頭鬼』を墓地に戻し、ドーハスーラを特殊召喚する」

死霊王ドーハスーラ DFE2000 ☆8

『あー……なんかこう、便利なんだけどこういうことばっかりされるから嫌だぞ。我』

ドーハスーラが愚痴を言いながら出現する。

『……まあいい。メインフェイズだ。オレは手札から『化石調査』を発動。デッキから『デューテリオン』を手札に加える。そして、このまま『デューテリオン』を捨てることで、『ボンディング-D20』を手札に加える』

「その効果処理後、Ωの効果を発動。そして、それにチェインしてドーハスーラの効果を発動！まずはドーハスーラの効果で墓地のデューテリオンを除外し、Ωの効果で、相手の手札一枚とこのカードを除外する！」

Ωが引っこ抜いたのは……『死者蘇生』だった。

「残念」

ボンディングを除外できれば万々歳だったが、まあそれは置いてお

くとしよう。

『……フウ。とりあえず、手札から『魂喰いオヴィラプター』を通常召喚。デツキから二体目の『デューテリオン』を手札に加える』

魂喰いオヴィラプター ATK1800 ☆4

『ここは贅沢に行こうか。オレは『ボンディング―D20』を発動。手札の『デューテリオン』二枚と『オキシゲドン』をリリース。デツキから『ウォーター・ドラゴン―クラスター』を特殊召喚！』

ウォーター・ドラゴン―クラスター ATK2800 ☆10

手札の消耗が激しすぎる。

もうすでに、手札が一枚しか残っていない。

なお、特殊召喚した時に、相手モンスターすべての攻撃力を0にして効果の発動を不可にする能力があるが、ドーハスーラが守備表示なので意味はない。

『バトルフェイズ！ウォーター・ドラゴン―クラスターで、ドーハスーラを攻撃！』

「仕方がないな」

渦にのみこまれて消えるドーハスーラ。

『魂喰いオヴィラプターでダイレクトアタック！』

「受けよう」

遊月 LP8000↓6200

『オレはこれでターンエンドだ』

「なら、私のターンだ。ドロー！」

ドローしたカードを確認する遊月。

そのとき、ウォーター・ドラゴンが笑う。

『ククク。ウォーター・ドラゴンが場にいる時は気を付けたほうがいいぞ？』

遊月が後ろを見ると、大量のハイドロゲドンの力が増している。

『む、ちよつと荷が重くなってきたな……』

グスタフが主砲を連射しながらつぶやく。

「なら、出てきてください！ドロー！」

『攻撃のみを考えておけるようにしましょうか』

さらに渦が出現して、そこからドーラが出現する。

「……精霊を所有している人たちはさすがですね……」

ちよつと役立たずな風味が漂っている創輝である。

「……っ！」

ギョツとこぶしを握る綾羽。

ハイドロゲドンとはいえ、強化されてはルインの力を使っても足りない。

『マスター……』

「ルイン、私は、どんなデュエリストになればいいのかな」

『そうですね……惚れている人に聞けばいいのでは？』

ルインは少し、いじわるになったようだ。

「……そっか」

綾羽はハイヤーの扉を開けて外に出る。

そして、遊月をまっすぐ見た。

「遊月君。私は、どうすればいいと思う？」

「さあ？ 私からは、『諦めたフリをしない奴になれ』としか言えんよ」

それを聞いた綾羽は苦笑する。

「遊月君、そこまでわかっちゃうんだ」

「捨ててないんだろ？ 綾羽もわかってるんだ。君はヴァルハラを捨てることはできないし、ルインだけを選ぶことはない。ただ、私がすべて正しいことを知っている、そう漠然と考えていて、言葉をもらうまでは何も選択しないほうがいいと考えている。私は、そんな奴に『新しいこと』を教えたりしない」

遊月は溜息を吐いた。

「本来、自分だけで気が付けるはず。変なことを吹き込んだバカがいるから君が迷っているだけだ。さっき、本人が嫌がることをわざわざやったのはそれが理由だ」

『ごめんなさい！』

土下座するドーハスーラ。

さすがチキングの称号を持つ王は伊達ではない。

遊月は綾羽のほうをもうむかず、ウォーター・ドラゴンのほうを見

る。

「さて、スタンバイフェイズだ。行くぞ。ドーハスーラ」

『うむ。そうだな』

土下座していたドーハスーラだが、体を起こしてフィールドに移動していく。

それを見ながら、綾羽はデュエルディスクに入れていた化身カードのヴァルハラを取り出す。

「この力も、私が積み上げた力か……」

綾羽は『エンド・オブ・ザ・ワールド』のカードを取り出す。

「ルイン。行くよ」

『わかった』

ルインが答えると、綾羽を光がつつんだ。

危険だと思ったのか、ハイドロゲドンが二体、綾羽のほうに向かう。

しかし……。

「君たちじゃ私には勝てないよ」

槍を二回振り終わった綾羽が、静かにそういった。

もともと迷う必要などなかった力。

もう、天使で止まったりはしない。

「香苗ちゃん。私も混ぜるけど、いいよね」

「はい！」

元気良くうなずく香苗。

それを見て、綾羽はハイドロゲドンたちのほうに走っていく。

そして、遊月の近くでもはしゃいでいる者がいた。

『おおっ！巨乳の女神ルインだ！マスター見て！全デュエリストの夢！巨乳の女神ルインだよ！』

ブルームである。

ちなみにバシヤバシヤと写真を撮りまくっている。

「ブルーム。その写真。一体どうするつもりだ？」

『クツクツ。もちろんプリントアウトして保管しておくのさ。ん？ぎゃあああああ！』

綾羽の意思とは関係なく、彼女のそばに雷の槍が出現し、ブルーム

ごとカメラを貫く。

プスプスと煙を出しながら崩れ落ちるブルーム。
馬鹿である。

遊月は溜息を吐いて、ウォーター・ドラゴンのほうを見る。

「……なんかすまん。茶番を待ってもらって」

『さっさと続けろ』

「そうしよう。スタンバイフェイズだ。行くぞ。ドーハスーラ。Ω」

死霊王ドーハスーラ DFE2000 ☆8

PSYフレームロード・Ω ATK2800 ☆8

「メインフェイズ。まずは墓地から『馬頭鬼』の効果を『不知火の隠者』を対象に発動。それにチェーンして、ドーハスーラの効果を発動。さあ、どうする？」

『チツ……クラスターの効果を発動。デッキから『ウォーター・ドラゴン』を二体、特殊召喚！』

ウォーター・ドラゴン DFE2600 ☆8

ウォーター・ドラゴン DFE2600 ☆8

「ドーハスーラの効果処理だ。ウォーター・ドラゴンを一体除外する！そして、隠者を特殊召喚」

不知火の隠者 ATK 500 ☆4

『ぐっ……だが、『ボンディングD20』を回収する』

「もう遅い。隠者をリリースしてデッキから『ユニゾンビ』を特殊召喚。効果でドーハスーラを対象にしてデッキから『馬頭鬼』を墓地に送り、馬頭鬼を除外して『不知火の隠者』を特殊召喚」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3

不知火の隠者 ATK 500 ☆4

死霊王ドーハスーラ ☆8↓9

「レベル4の隠者に、レベル3のユニゾンビをチューニング。死した紅き眼の黒竜よ、屍界で湧き上がる怨念を宿し、君臨せよ。シンクロ召喚！レベル7。『真紅眼の不屍竜』！」

真紅眼の不屍竜 ATK2400↓3600 ☆7

（……最初の断殺を使ったときに捨てたのは魔法・罨カードだったの

か)

まあいいかと思いき直す遊月。

「さらに、『アドバンスドロ』でもう一度ドーハスーラをコストに二枚ドロ」

『なぬ!?!』

また消えるドーハスーラ。

「そして、『デーモンとの駆け引き』を発動。あらわれる。『バーサーク・デッド・ドラゴン』」

バーサーク・デッド・ドラゴン ATK3500 ☆8

真紅眼の不屍竜 ATK3600↓3800

「バトルフェイズ。バーサーク・デッド・ドラゴンで、ウォーター・ドラゴンとオヴィラプターを攻撃!」

WD LP8000↓6300

『グッ……』

「レッドアイズの効果で、オヴィラプターを私のフィールドに特殊召喚」

魂喰いオヴィラプター ATK1800 ☆4

この瞬間、遊月のデッキにいる『カーボネドン』が『おっ!』と思っただが、遊月は完全に忘れてる。

「そして、オヴィラプター、Ω、レッドアイズでダイレクトアタック!」

WD LP6300↓4500↓2700↓0

『ぐ、ぐおおおおお!』

WDが消えていく。

遊月が振り向くと、綾羽は無傷で佇んでいた。

「もう問題はないか?」

「うん。後は私が、私の力で、決着をつける」

綾羽はルインの力を解除しながらそう言った。

「そうかい……創輝。大東家に向かってくれ」

「畏まりました」

★ 四人を乗せたハイヤーは、まっすぐ大東家を目指していく。

『もぐもぐ……ぺっ！ああ〜悪霊瘴気つてクソまずいな』

『食用ではないからな』

遊月たちがハイヤーで向かっているとき、路地裏でウォーター・ドラゴンとドーハスーラが話していた。

『しかし、お前のところのマスターは精霊づかいの荒い奴だな。手ごろな上級の悪霊がないからって、体のほとんどが水で構成されていって悪霊瘴気をコントロールできるオレを呼ぶなんて』

『使えるものは何でも使うのが我が主だからな』

『まあ、オレ自身も、元マスも世話になったし、これくらいなら朝飯前だが……デュエルするたびに思うな。お前やっぱ効果ひでえわ』

『だろ？まあ、こんな感じだからアドバンスドロウのコストにされるわけだがな』

『まあオレもデッキに『トレードイン』三積みだけどな……あまり文句言ってるど拗ねられるぜ』

『それは覚えておこうか』

ウォーター・ドラゴンはあきれた。

『まあ、オレはマスターのところで寝てることにするよ。何かあったら呼べ。まだ、借りを返せてねえからな』

『義理堅いなあ。我が主の周りではその考え方は苦勞するぞ？』

『承知の上だ。じゃあな』

ウォーター・ドラゴンは体を変形させると、その辺の下水道の中に消えていった。

『我也戻るか』

ウォーター・ドラゴンがいなくなったのを確認して、ドーハスーラも戻ることにした。

★

そして、大東家では……。

「ぐあああああー！」

これで何人目だろうか。

別れを告げに来た。と宣告する綾羽。

それを撤回させようとして、取り押さえようとする黒服たち。

ただ、分が悪いとかそういうレベルの話ではない。

デュエルで挑んでも、もとから『綾羽は自分たちに無条件で服従する』と考えていた者たちがその腕を磨いているわけもなく、ヴァルハラをフル活用したその戦術に叩き潰される。

リアルフアイトなどもつてのほか。

ルインの力を開放し、スタンロッドを構えて突撃してくる黒服たちを一網打尽。

精霊との親和性が高いのか、ルインの槍術を使っているようだ。

「な……アンタ。一体いつ、そんな力を……」

簡単に取り押さえることができると考えていた琴音は、自分に近づく綾羽の進撃に驚愕する。

「手に入れたんじゃない。元からあった。私が手に入れたのは、『使ってもいい』という選択肢と、頼れる背中だけ。もう私は、檻の中でおとなしくなんてしない。あなたが知っている『大束綾羽』から、変わったんだよ。琴音さん」

母親に向かって名前呼びをする綾羽。

「ぐっ……アンタがいないと、補助金が……」

「そんな物知らない。私は、もう、檻の中には戻らない」

「あ、アタシたちへの恩を忘れたってのかい！ここまで育ててきたつてのに、恩知らずにもほどがあるよ！」

綾羽はその叫びを聞いて、失望した。

『自分を縛り付けている恐怖は、自分が思ってるほど恐ろしいもんじゃない』

遊月が言っていたような気がする。

それが、その通りのものだと思った。

ただ、それだけ。

「私はあなたから何ももらっていない。名前も、命すら、あなたからもらったものじゃない。私はもう、あなたの言いなりにはならない」

自分と両親の間に、血のつながりはない。

その事実を、幼いころから知っている。

いや、そもそも、それを両親から聞いたのだ。

選択肢を与えられ、力を使っていると考えた綾羽は、もう止められない。

「後悔するよ。どうやってデュエルディスクを使っているのか知らないけど、アンタを守ってくれるところがどこにあるっていうんだい！」

「後悔してもいい。頼れる背中に、全部ぶつけるだけ。ビクともしないと思うから、私は別れを告げに来た」

「は、話し合おう。綾羽、話し合えば……」

それを聞いた綾羽は、琴音を睨みつける。

「もういい」

綾羽は琴音に背を向ける。

「あ、アンタ……」

「さよなら」

綾羽のそばで、雷の槍が出現。

それはまっすぐ、琴音の肩を貫いた。

「ぎゃあああああ！」

貫通属性はほとんどなく、単に感電させることを目的としたものだ。

そのため、そのまま倒れて動かなくなる。

死屍累々とした大束家の敷地を、綾羽はゆっくり歩く。

その目に、迷いはない。

不安はあるだろう。だが、もう迷ったりはしない。

ハイヤーまで戻ってくる。

いつの間に移動したのか、助手席にいた遊月が後部座席に移動して、後部座席にいた香苗が助手席に移動している。

綾羽は後部座席に乗り込んだ。

「……もういいのか？」

「うん。あとはもう、勝手に落ちるところまで落ちるだろうし、這い上がれたら、その時にまた評価するだけ、でも、もうお母さんとは呼ばないかな」

「そうか」

下を向いて、膝の上で手をぎゅつと握る綾羽。

「それでいいのなら私は構わない。創輝。出してくれ」

「かしこまりました」

創輝がハイヤーを発進させた。

そしてその夜。

デュエルで香苗を完膚なきまでに叩きのめした綾羽は、寝間着姿で遊月の私室に向かう。

(……遊月君って寝るの早いなだね)

都合がいいとばかりに、部屋に忍び込む綾羽。

ベッドの上にあがりこむと、遊月に後ろから抱きついた。

(……また上り込んできたのか)

遊月は寝るのは速いが浅いほうだ。

当然抱きつかれればわかるのだが、ここで口に出すのは野暮というものである。

(……いったい私のことをなんだと思っているんだか、月詠や英明もそうだが……まあいいか)

正直、枯れたような遊月は抱きつかれたとしても欲情しない。

というより、そういうことをしてくる者は多かったので、もう慣れた。

(遊月君……)

綾羽は暖かさを感じながら、そのまま落ちた。

しかしまあ……朝に遊月よりも早く起きようとして、これがなかなかうまくいかないので結局あわてるまでがお約束である。

第十九話

アムネシアはデュエルスクールであり、様々な研究会がある。

そのための、そんな研究会からのアンケートがあったりするのだ。研究会がいずれかの教師とつながりを持っていけば、授業を終わりのほうで出してもらえたりするので、意外と教師との関係は大切である。

まあ、そんなことはどうでもいい。

アンケートの内容である。

『デュエルモンスターズ格言研究会』というサークルからのアンケートだ。

ちなみに、英明が『隊長……いったい何やってんだ』とつぶやいているので、ファンクラブの表の集まりはこの格言研究会なのだろう。基本的には悪霊を討伐し、部活錬を使うために研究会を作って、何人かが教室で活動しているといったところか。

で、その内容だが。

『デュエルモンスターズにかかわるうえで、最も『理不尽だ!』と思うセリフ・状態を書いてください』

というものである。

センスが出るアンケートである。

仮澤英明の回答

【効果耐性があるモンスターを出しやすいデッキのくせに初手『激流葬』の確率が高い相手】

多分ぶちかまされたことがあるんだろうな。というのがよくわかる。

効果破壊耐性があつて守備力が2800もある『聖霊獣騎 ペトルフィン』を出しやすい【霊獣】とか、そんなの使うやつに限って『激流葬』を初手で握っている奴が多かったりするのだ。

【霊獣】は回すのが難しいが、融合カンナホークを使いまわすことで、連契だとか騎襲だとかそういういたたものをサーチしながら相手の場を壊滅させることができるのだ。そこに『激流葬』が加わると単なる

悪夢である。

大東綾羽の回答

『『スターダスト・ドラゴン／バスター』三体』
リリースすることでもなんでも無効にできるといっていいモンス
ター。

それが三体である。確かに嫌だ。三体だったらラー玉で食べるけ
ど。

江藤香苗の回答

『自分の初手に手札誘発が来ない時に周りの手札誘発の確保力がすご
い時に感じるアレ』

手札誘発時代といっても過言ではない環境。

そんな中で、大型モンスターを最大限投入するタイプのデッキで
は、誘発はきつい。

それなら自分も握っておけばいいのだが、大体来ないのだ。これが
マゾイのである。

御堂月詠の回答

【調整中】

公式なルールが存在しない。という状況。

正直、これほど全世界に広まっているカードゲームだというのに、
正式な裁定が存在しないというのはどうなのか。という話である。

結構根本的な話だが、解決されることはないだろう。

不死原遊月の回答

『658008分の1だど？真のデュエリストは100%なのだ！』

もはや語るまでもないが、これが現実になると正直やっていられな
い。

何かと経験している遊月だが、そんな彼でも、これだけはどうにも
納得がいかない。ということなのだろう。

思い思いのアンケートだが、どれもこれも納得できるもの。

隊長は喜んだようである。

★

「そりゃー！」

「ふああ……まだまだ甘いぞ」

地下に存在するトレーニングエリア。

ランニングコースが存在し、広々とした空間が存在する。

そこで、『ロード・オブ・ザ・レット』姿で『真紅眼の黒竜剣』を構えた遊月と、『破滅の女神ルイン』姿の綾羽が、剣と槍をぶつけて戦っていた。

正直、頑張っているのは綾羽のほうだけで、遊月はそれを軽くあしらっているような感じである。

体に発生する傷の発生を精霊力の減少に変更できる技術が存在する。

大掛かりな設備が必要なので、デュエルディスクなどに携帯することはまだできない。

場所に影響を与える『フィールド魔法』の『化身カード』のデータを集めて作ったものであり、使用料金は高い。

が、例のごとく、遊月同伴なら無料である。

「まだまだー」

突き、薙ぎ払い、振りおろし。

ルインが使う様々な槍術を使っているが、その全てを遊月は最小限の動きでよけるか弾く。

「うーん……なんか、若干大振りだな」

「大振り？」

「若干周りに見せるための動きが入ってるな。もうちよつと、ルールなしのチャンバラでもやってみたいに考えたほうがいいぞ」

「そうかな……そうかも……つとと」

少しつまずいた綾羽。

遊月は綾羽の体に腕を回して転倒を回避。

「あ……ありがとう」

「精霊力の使い過ぎだな。ルインの力を解いたほうがいい」

表情が変わらない遊月。

「わかった」

綾羽はなんだか損した気分になりながらルインの力を解いた。

元の姿に戻った綾羽。

その格好だが、スポーツブラとホットパンツを着て、室内用のスポーツシューズを履いているというものである。

出るところは出て引つ込むところはひっこんでいる綾羽の体。

スポーツブラをつけていることもあって健康美を感じられる上になかなかエロい。

……遊月の表情は変わらないが。

ちなみに、このやり取りはすでに本日で五回目。

「ふう……」

ベンチに座ってスポーツドリンクを飲みはじめる。

「ふーむ……綾羽は槍とか振ったことあるのか？」

「私はそういう武術的なことをやったことはないよ」

「……ということは、ルインのほうが研鑽をつんでるってことか」

「それはそれとして……遊月君はそのままでもいいの？」

ルインの力を解いた綾羽に対して、遊月のほうは『ロード・オブ・ザ・レッド』姿のままだ。

というより、この部屋に入ってからそれなりに長いが、遊月は一度も解いていない。

「まあ、私にとっては普段着の一部みたいなものだ」

「え？」

「要するに、『力を使っている』というより、普段とは気分の入れ方をちよつと変えただけの言うか……まあ、強引に言えば『自然体の範囲内』みたいな感じだ」

「それだけ長く使ってるってこと？」

「そうだ」

すると、ドーハスーラが出現。

「どうした？」

『うむ、微調整は必要だが、基本的な部分はできているからな。どうせ調節するのなら、悪霊を討伐することを想定した動きのほうがいいだろう。我をはじめとした精霊を相手にするほうがいいのではないか？』

「一理あるが……」

するとレイジングも出現。

『マスターが所有している精霊は多いからな。それに、ちよつと呼んだら来てくれそうな精霊も多いぜ』

「……遊月君の影響って精霊たちにも大きいんだ」

「はっちやけた結果ってというのが何とも言えないけどな」

さて、どうするか。

「休憩時間はまだとっておいたほうがいいんだよなあ」

『なら、マスターと俺たちでやろうぜ』

レイジングがかなり乗り気だ。

ドーハスーラと顔を見合わせる。

そして頷き合っている。

「構わんよ」

遊月は黒竜剣を構えなおして、部屋の中央まで移動する。

ドーハスーラとレイジングも移動して、二対一で構える。

「……遊月君。大丈夫なのかな」

『大丈夫。遊びでも本気でも、マスターはあの二人くらいなら負けない』

「うわっ！びっくりした」

いつの間にか、綾羽が座っているベンチの隣にみずきが座っていた。

『興味深いですね』

「ルイン……」

『マスターはあまり体を動かさないほうですからね。私の力を使っているときの身体能力にイメージがあっていません』

「それはそうだけど……」

とまあ、そんなことを話しているが……。

(そういうえば……)

みずきは綾羽を頭から足まで見て、思う。

(ブルームが静か。どこに行ったのかな)

スタイルのいい綾羽がこんな恰好をしていたら、必ず元気になって

出てくるはず。

なぜいないのだろう。

(まあいつか)

どうでもいいと思うことにした。

そしてそのころのブルームだが……。

『む……無念……ガクツ』

破壊されたカメラと、まだバチバチと痺れている貫かれた体。

どうやらすでに討伐されていたようだ。

ルインに。

「さて、ドーハスーラ、レイジング、どこからでもかかってこい」

『さあ、行くぞ。我が主よ！』

『オラア！行くぜ！』

ドーハスーラは右手の杖に波動を集約させ、レイジングは口の中にエネルギーをためる。

そして、二人ともそれを一気に放出した。

「それがどうした」

遊月は黒竜剣を真横に一閃。

波動は叩き壊され、レーザーのようなエネルギーは切り裂かれる。

『しよっぱなから同時でもダメかい！』

『ならこれだ！』

ドーハスーラが、波動を小さく何個もまとめて出現させる。

そして、それを弾丸の雨を降らせるように遊月に向けて射出。

「まあそれも無駄だな」

当たらないものは無視して、よけれそうにないものは弾く。あとは全部よける。

それだけで大量の弾丸を対処した。

『ならこれだ！』

レイジングの翼から灼熱の羽が出現する。

そして、それを一気に薙ぎ払った。

遊月はひよいとさける。

大振りの攻撃はほぼ通じないようだ。

「というか、遊月には無駄な動きがなさすぎる。

『そりゃー!』

ドーハスーラが波動でレーザーをぶちかます。

だが、遊月は剣を振ってそのまま消滅させる。

「そろそろ私も行くぞ」

遊月は剣を横に一閃。

そのまま青い炎のようなもので出来た斬撃が飛んでいき、ドーハスーラとレイジングに直撃した。

そして、そのまま吹き飛んでいく。

どうやら圧倒的な出力があるようだ。ちなみに黒竜剣を使っているからだろうか、レイジングの方が若干ダメージが大きい。

『グホアアアアアア!』

まとめて壁まで飛んで行って……。

「おい遊月!放課後にこんなところに呼んでどうし——」

ガラツと扉を英明が開けた。

「ん?」

英明は自らに向かって飛んでくるレイジングとドーハスーラを見る。

「うおおああああ!」

そのまま巻き添えになって廊下で倒れた。

……数分後。

「何しやがんだオラア!いくら傷が全て精霊力の減少になるからって、痛いもんは痛いんだぞ!」

「あー。うん。すまんな英明。まさかこんなジャストタイミングでやってくるとは思ってた……」

ムキヤー!と騒いでいる英明に対して、明後日の方をを向きながら謝罪する遊月。

さすがに悪いとは思っているようだが、昔こんなことがあったのだろうか、『まあよくある事故だから許してくれ』と考えているのが丸わかりである。

「ひ、英明君。呼ばれてたんだ」

「そうだけ綾羽ちゃ……うひょう！何て格好に！」

英明が綾羽の格好を見て変な声を出した。

16歳の童貞にはちよつと刺激が強いようである。

じゃあ遊月は何歳の何なのかと言う話になるのだが。

「遊月。まさか、ずっと綾羽ちゃんはこの姿なのか!？」

「何回かルインだったぞ」

「……なあ遊月。明日の放課後体育館裏に来いよ」

「返り討ちにしてほしいのか？」

「ごめんなさい撤回します」

何のコントだろうか。

『とにかく、特訓の続き』

みずきが話の路線を戻そうとする。

「……そうか。で、俺は何をすればいいんだ？」

「ルイン姿の綾羽と組み手だ」

「なるほどな。遊月だとレベルが高すぎるから俺でやるって訳ね」

「そういうことだ」

頷く遊月。

正直、経験豊富な遊月が相手だと、教えてもらうだけならいいのだが、あまりいろいろなものを実感できない。

ということ、英明を呼んだのだ。

「そういうことならつきあってやるぜ」

英明はデュエルディスクを取り出して、『マスク・チェンジ』と

『フォーム・チェンジ』を入れた。

綾羽も休み終わったのか、立ち上がって『エンド・オブ・ザ・ワールド』をとりだす。

部屋の中央までいどうして、離れて立った。

「変身！」『マスク・チェンジ ダーク・ロウ』

「行くよ。ルイン」『わかった』

英明がダーク・ロウの姿になり、綾羽はルインの姿になる。

そして、綾羽は槍を構えた。

英明は……というより、M・HEROはすべて徒手空拳が武器なの

でも手に持っていないが、それはともかく、拳を構える。

「……」

ただ、相對した英明が無言である。

なんだか、仮面の下がオロオロしているのが分かる。

それを見た遊月は『人選ミスったな』とおもった。

ルインのイラストをじっくり見たことがある人はいるだろうか。

その真っ白な肌はもちろん綺麗で、膝まで届く銀髪はきれいなものだ。

綾羽もまた肌は白く、黒い髪に黄色いメッシュを入れた髪も、ルインほどではないがかなり長い。

デタツチド・シオルダーと言うのだろうか、服と分離した袖は黒く、縁が金色の装飾がある。

二の腕は半分見せており、肩は露出し、脇は見えている。

胸の中央の少し下からへその下に至るまで、ひし形にくりぬかれておりかなり見えている。透明な素材で覆われているが、まああつてないようなものだろう。

下半身はガードが硬そうだが、普段女性が見せないであろう太股の外側が大胆に露出している。

色に関しては、上が濃い目の赤、というより紅色。下が黒だ。

昔はB M Gと並ぶイラストアドのトップクラスに君臨し、今では圧倒的イラストアドの新規も登場した。

それが、綾羽本人が持つ子供っぽさと交わってギャップが感じられるのだ。

神秘的なエロ差のある衣装を身に纏うあどけない美少女。

英明はもともと、『綾羽ちゃん親衛隊』などという、無駄にエネルギーを使いそうなものに所属している。

で、その崇拜対象である綾羽がこんな格好になっているので、脳味噌がオーバーヒートしているのだ。

ぶっちゃけ、先ほどのスポーツブラとハーフパンツの姿の方が露出度は高いのだが、こちらの方がダメージは大きいらしい。

結果。

「えいっ！」

「ぐほあっ！」

相手にならなかった。

(こればかりは悲しい男のSAGAだな)

枯れ果てた心で、遊月はそんなことを考えた。

★

とりあえず英明に戦力外通告を一方的に叩きつけておいて、再度遊月や精霊たちとごちやごちやすることになった。

しかし、このままではどうにもならないので、とりあえず、創輝を連れて移動することに。

「遊月君。これ、何処に向かっているの？」

「『アイディアル・タワー』だ」

「え……アイディアル・タワーに？」

アムネシアの敷地から見える百二十階建ての超巨大なタワーがある。

アムネシア周辺におけるデュエル複合施設だ。

主にデュエルモンスターの精霊に関して研究している。

が、それだけでは正直儲からないので、『開催団体』としての一面がある。

催し物と言うのは大体金がかかったり、細部に目が行かず失敗することも多い。

そのため、圧倒的な資金と人脈を駆使して、そう言ったものを開催する場を提供するのが仕事だ。もちろんアイディアル・タワーが主催する催し物もある。

タワー内部にも様々なアトラクションが存在し、一般開放されている部分が多い他、様々な関連施設がアムネシア周辺地域を超えて存在するほどだ。

そしてもちろん、フィクサーである不死原遊月が顔を出すということとは『そう言う場所』ということでもある。

階層が上に行けば行くほど、機密さは増していく。

圧倒的な『資金』と『人脈』と『情報』と『技術』を有しているゆ

えに圧倒的な発言力があり、デュエルスクール・アムネシアは『若干融通が効く不可侵』と言ったレベルだが、それを保障しているのはアイディアル・タワーだ。

その中でも高い階層にはVIPのみが入れるエリアもあり、その中には、セキュリティの最高責任者や、DGCの本部長くらいのレベルのものが入れる。

言いかえれば、セキュリティやDGCは、アイディアル・タワーの傘下組織なのだ。

……結成当時の状況が影響するが、それはいいでしょう。

「おや、もう会わせるのですか?」

運転中の創輝が反応する。

綾羽は首をかしげる。

「どうということ?」

「これから会うのは……まあ、私が今持っている最大の切り札だよ」

「切り札?」

「私の代理人と務めることができる。ということだ。私ほど強くはないけど」

次善策というものはあったほうがいいし、自分しか動けないという状況は回避したほうがいい。

要するにそういうことだ。

数十分後、ハイヤーは超巨大ビルの裏口から入る。

「……遊月君って、アイディアル・タワーにも影響力があるの?」

「……フッフ」

遊月は不敵に笑うだけ。

そして、ハイヤーを運転する創輝は内心苦笑していた。

(まあ笑うしかないですよねえ。遊月様が作った場所ですし。そんなことを言ったら絶対に混乱しますけど)

そんないろいろな思考があるなか、ハイヤーは進んで、エレベーターに乗りこむ。

そして、そのまま上に上がっていった。

「……え、車のまま上に上がって行けるの?」

「タワーの中心にはそれを可能にするエレベーターが存在するからな」

「ちなみにこちらは現在、超VIPの方しか使えませんね。お父様がめっちゃくちゃ便利なのに申請が面倒だと愚痴っていましたよ」

「……アムネシアの理事長でも簡単には使えないんですか?」

「少なくとも顔パスなのは遊月様くらいですよ」

そう言っていると、エレベーターが着いた。

「……ねえ、いつエレベーターの操作盤を押したの?」

「私のデュエルディスクで操作できる」

「……ええ!?!」

綾羽は『なんじゃそりや!?!』という表情だが、遊月は無視。

そのまま二人でハイヤーを降りて、廊下を歩いていく。

「……ねえ、音が全く聞こえないんだけど」

「元から防音室が多いし、地上百二十階だ。地上の喧騒なんて遠い世界だよ」

「え、最上階なの!?!」

「綾羽様。申し訳ございませんがあまり大きい声は……」

「あ、すみません」

「遊月様が同伴でなければ問答無用で叩きだされますよ」

「……マジですか?」

「マジです」

ちよつとビビる綾羽。

そう言っていると、広い空間にたどり着いた。

上質なソファークラセットに加えて、視界の端の方にはカウンターが存在し、事務員がパソコンのキーボードを拘束連打している。

一応、ロビーと言える場所で、カウンターにいる事務員はフロントだろうか。

「……」

もはや何も言わなくなった綾羽。

ISDといういろいろと機密にかかわる状況に立っていた綾羽だが、ここまで来るとレベルが違いすぎる。

「時間通りだな。日夏」

遊月は、ソファに座って、紅茶を飲みながら本を呼んでいる少女に話しかける。

少女は本にしおりを挟んで、立ち上がってこちらを見る。

その雰囲気に、綾羽は息を吐いた。

簡単に言えば、夢い印象の少女だ。

銀髪をショートカットにしており、格好はアムネシアの制服姿である。

黒い瞳も落ち着いた雰囲気が出ていて、感情があまり感じられない。

胸は慎ましいが、そのかわり、びっくりするほど肌がきれいだ。

「遊月様。お久しぶり。それから、大東綾羽さんだったかな？話は聞いている。私は沢本日夏^{さわもとひなつ}。よろしく」

そういってお辞儀をする日夏。

育ちがいいというか、溢れんばかりの優雅さがある。

声にも感情がこもってないが。

「は、初めまして、大東綾羽だよ。綾羽って呼んでね」

「私のことは好きに呼んでくれていい」

さて、自己紹介は終了。

「これからどうするかってことなんだが、ちよつと綾羽をいろんなところに引っ張ってほしいんだ。日夏が普段やってることについていさせるだけでいい」

「え!?!」

何も聞かされていなかった綾羽が驚く。

だが、日夏は頷くだけ。

「……英明さんにしたようにすればいいですか？」

「そんな感じだ」

「英明君も同じ目に合ってるって……どういうこと？」

「行けば分かる。安心しろ。日夏の実力は私が保障する」

「……遊月君はどうするの？」

「私は今日はこれから用事があるからな」

遊月はげんなりした様子で、黒いガラケーをとりだしながらそう言った。

日夏がそれをチラツと見て頷く。

「とにかく、そうと決まれば行きます。創輝さんは運転をお願いします」

「分かりました……私、日夏様のこと苦手なんですけどねえ……」

いやそんな顔でそう言う創輝だが、元は遊月の命令。

無下になると逆に面倒なことになるので、諦めた様子で頷いた。

「というわけで、行く。遊月様は……」

「私は地下鉄で帰る。アムネシアからは通ってないが、ここからは直通で通ってるからな」

「わかりました」

そういうわけで、ここからは別行動になった。

★

「……あの、日夏ちゃんが普段してることについていくってことだけど、普段何をしてるの?」

「午前中は学校。アムネシアの高等部一年だから、緊急の用件でない限り、午後に活動してる。大体はデュエル犯罪の対処」

「え……それって、セキュリティとかDGCとかが対応しているんじゃないの?」

「彼らには見つけるのが得意なものもあるけど、誤認や勘違いも含まれるから、情報収集能力がたかいアイディアル・タワーが対応することもある」

「誤認とかあるんだ」

「もちろん」

運転している創輝は内心で頷く。

(そりやまあ、遊月様のマツチポンプに巻き込まれて動いていたウォーター・ドラゴンの情報が『正式』に登録されていたくらいですしね。他にもいろいろあるでしょう)

遊月が持つドーハスーラが『悪霊瘴気の抽出・操作』に長けているのに対して、ウォーター・ドラゴンは、『体内での悪霊瘴気の制御』に

長けている。

ドーハスーラののような精霊は少ないのだが、ウォーター・ドラゴンのような精霊はそこそこいるのだ。

そういったモンスターはマッチポンプに使われるが、あまり知られていない。

「まあ、今日はいうほど強敵ではない、気楽に行く」

「あ、そんな感じなんだ」

「日夏様。そろそろポイントです」

「わかった。そろそろ車から降りる」

近くにハイヤーを止めて、日夏と綾羽はハイヤーから降りる。

「創輝さんは待っていてください」

「分かりました。お気を付けて」

「問題ない」

日夏はそのまま歩く。

身長は綾羽よりも日夏の方がやや低いのだが、堂々としているのが誰にでもわかるほどだ。

「……これからどうするの?」

「精霊ハンターを捕らえに行く」

「え、精霊ハンター?」

一度被害にあっている綾羽としては嫌な思い出だ。

「知っていると思うけど、野良になっていく精霊を確保して、安静にできる施設に届ける『精霊保護者』という職業があって、これに関しては公認の資格が存在する。でも、中には劣悪な目的で精霊カードを手に入れるものもいて、そんな奴らの手先になって動いているのが精霊ハンター」

「……私も一回被害にあってるからわかってる」

「なるほど、まあとにかく、そういった精霊ハンターを捕らえる仕事も私は請け負っている」

「へえ……じゃあ——」

「シッ。そろそろ静かに」

左手の人差し指で綾羽の口を押える日夏。

そして、目線を路地の角に向ける。

そこにいたのは……。

「さてと、確かこのあたりに精霊がいたはずなんだがな……」
きよろきよろと見渡している男がいる。

それを見て、綾羽が驚いた。

「せ、精霊ハンターの京吾」

「知ってるの？」

「私が被害にあったのはあの人が原因だから……」

「なるほど、まあ、大束家の教えの通りに生きていたのなら、あの男には勝てないから当然。ちよつと行ってくる」

「あ、ちよつ！」

日夏は京吾の方に向かってまっすぐ歩いていった。

それなりに注意力はある方なのだろうか、京吾の方も日夏に近づいた。

「あ？なんだガキ。こんなところで迷子か？」

「違う。精霊ハンターであるあなたを捕らえに来た」

「なるほどなあ。まっ、やれるもんならやってみろよ」

お互いにデュエルディスクを構える。

「俺のデュエルディスクはリアルにダメージが入るもんだ。逃げるなら今の内だぜ」

「私は私より弱い人の言いなりにはならない」

「ハッ！言うじゃねえか」

お互いにカードを五枚引く。

「デュエル！」

日夏 LP8000

京吾 LP8000

先攻は日夏。

「先攻は私。モンスターをセットして、さらにカードを二枚セット、ターンエンド」

「消極的だなあ。俺のターン。ドロー！」

京吾はドローしたカードを見てにやりと笑う。

「俺はまず『手札抹殺』を発動だ。お互いに手札交換だぜ」

「……」

淡々と処理を進める日夏。

「墓地に送られた『幻獣機オライオン』の効果だ。トークンを俺のフィールドに特殊召喚するぜ」

幻獣機トークン DFE0 ☆3

「『死者蘇生』を発動。墓地から『ホルスの黒炎竜 LV6』を特殊召喚！」

ホルスの黒炎竜 LV6 ATK2400 ☆6

「バトルフェイズ！ホルスでセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターは『マシユマカロン』。破壊されたことで、デッキから二体特殊召喚」

マシユマカロン DFE200 ☆1

マシユマカロン DFE200 ☆1

「チッ。なら、三枚セットしてターンエンド。ホルスをレベルアップ！」

ホルスの黒炎竜 LV8 ATK3000 ☆8

「さて、お前のターンだぜ」

「私のターン。ドロー」

ドローした瞬間、京吾が動いた。

「俺はトークンをリリースして『暴君の威圧』を発動し、ライフを1000払って『スキルドレイン』を発動だ！」

京吾 LP8000↓7000

「スキルドレインの効果により、お互いのモンスター効果は無効。そして、暴君の威圧により、元々の持ち主が俺のモンスターは、畏の効果を受けない！」

「なるほど、これで、フィールドのモンスター、魔法の効果の封殺した。ということになる」

「見ている綾羽からすればたまったものではない。」

「……余裕そうじゃねえか」

「全然余裕。墓地から『ギヤラクシー・サイクロン』を発動し、『スキ

ルドレイン』を破壊」

「チツ……」

「これでモンスターと罫は使える」

「させるか！『王宮のお触れ』を発動し、罫の効果は無効！」

「関係ない。マシユマカロン二体をリリースして『The splendid VENUS』を特殊召喚」

The splendid VENUS ATK2800 ☆8

綾羽も使うモンスターだ。

「VENUSの効果で、天使族以外の攻撃力がダウンする」

ホルスの黒炎竜LV8 ATK3000↓2500

「チツ……テメエも、あの女と同じように「天使族」使いつて訳か！」

「確かに「天使族」を使うけど、私の場合はもうちよつと細かい」

「何？」

「まずは罫カード『メタバース』を発動。デッキからフィールド魔法一枚を発動する」

「ハッ！俺のお触れのおかげで……」

「通用しない。VENUSの効果で、私が発動した魔法・罫は無効にならない」

「何だと!？」

驚愕する京吾。

魔法・罫を封じるデッキに取って天罰とも言える性能。

それがVENUSに備わっていると知らなかったのだ。

発動そのものを不可とするサイコ・シヨツカーなら封じられていたが、お触れなら何の問題もない。

「デッキからフィールド魔法『光の結界』を発動」

発動されたのは、一つの結界。

「ひ……『光の結界』だと?じゃあまさか……」

「私も『死者蘇生』を発動。墓地から『アルカナフォースIⅤ—THE EMPEROR』を特殊召喚。攻撃力が1500以下のため、セツトしていた『地獄の暴走召喚』を発動」

「その地獄の暴走召喚も……」

「VENUSの効果で無効にならない。出てきた二体も、元からいた一体も、光の結界の効果で効果を選ぶことが出来る。どちらも表を宣言」

これにより、アルカナフォースは攻撃力が500あがる。
それが三体。

アルカナフォースI V | T H E E M P E R O R A T K 1 4 0
0 ↓ 2 9 0 0 ☆ 4

アルカナフォースI V | T H E E M P E R O R A T K 1 4 0
0 ↓ 2 9 0 0 ☆ 4

アルカナフォースI V | T H E E M P E R O R A T K 1 4 0
0 ↓ 2 9 0 0 ☆ 4

「な……ば、バカな……」

「バトルフェイズ。光の結界があることで、アルカナフォースがモンスターを戦闘破壊した時にライフ回復もできるけど……もう関係ない。一斉攻撃」

「ぐ……がああああああ！」

京吾 L P 7 0 0 0 ↓ 6 7 0 0 ↓ 3 8 0 0 ↓ 9 0 0 ↓ 0

一気に削られていくライフ。

それを見て領いた日夏は、京吾を拘束して電話をかけた。
すぐにセキュリティの隊員が来て、京吾を連行していく。

「まあ、こんなもの。今日はもう帰る」

「遊月君の家まで一緒に行くの?」

「私は私でやることがあるから無理、途中で降りる」

「あ、そう言う感じなんだ」

そんなわけで、日夏を乗せたハイヤーは来た道に戻って、タワー付近で日夏は降りた。

そして、ハイヤーは遊月の家に向かった。

「どうでしたか? 日夏様は」

「なんか。最初はきれいな子だなあって思ったよ。あんな綺麗な肌の人見たことないもん」

「まあ、そこに関しては私も同意ですよ。デュエルはどうでしたか?」

「その……無駄がないっていうより、鮮やかかって言うか……なんだか、簡単そうな感じだった」

そう、日夏の戦術は言うならば『簡単』であった。

ロックデツキを使って来るのであれば、それを大きく封殺できるモンスターを用意し、そして、それを通すためのお膳立てをして、あとは好きに動いで高火力で殴る。

教科書にかかっているような『抽象的な理想形』をそのまま体現したような感じだ。

良い教えを受けてきた。と言うことなのだろう。

「なんか、会うときもパツとあって、分かれるときもパツと離れて……なんか、いろいろやってたけど全部簡単そうにしてた」

「まあ、デュエルを一回見て、一日接するだけでそれに気が付けるのなら十分ですよ。私は何か難しいことをしているのでは？と頭を捻り続けていた時もあるくらいですし」

「……まあ、普通はそうですよね」

「ええ……さて、着きましたよ」

「ありがとうございます」

「綾羽様も、こうして私のハイヤーを利用するのが普通になってきましたね」

「え……そうですか？」

「最初はぎこちない感じでしたが、遊月様に毒されたようですね」

「あ……そうかもですね」

苦笑いになる綾羽。

礼をいって中に入る。

遊月はリビングにいるようだ。

覗きこむと、遊月は新聞を見ながら黒いガラケーを耳に当てて話している。

「だから、副総理には来年の国家予算削減の阻止をしてほしいんだって、まだ経費浮揚策は必要だろ。え、何？これ以上国が借金を重ねるのはマズいって？今更だろ。それに、国債は私が買い支えるから問題ないって……え？……ふんふん……ほーん……私を脅迫する気かい

？なら副総理、二年前の二月のアレだけど……そうそう、良い判断を
してもらってこつちも助かるよ。それじゃあまた後で」

通話終了のようだ。

そして遊月が綾羽に気が付いたようだ。

「帰ってたのか」

「え……あ、うん。あの遊月君。さつき『副総理』って聞こえたんだ
けど」

「まあ私くらいになればこれくらいのつながりはね」

「思いつきり脅してたよね」

「政治だからね」

そうなのだろうか……。

綾羽は突っ込まない方がいいような気がした。

「で、日夏と会って、いろいろ思っただろうが、私と肩を並べるならあ
れくらいはできないと付いてこれないよ。それを教えるために合わ
せたんだ」

「……わかった。いろいろ、考えてみる」

「それでいい。そろそろ香苗も帰って来るだろうし、飯の準備だな」

「そう言いながら立ち上がる遊月。」

その背中を見ながら、綾羽は日夏のことを思いだすのだった。

第二十話

『いてて……なんだか僕ずっとひどい目に合ってない?』

アンデットワールドにて、ブルームがそんなことを呟いた。

『いや、それに関してはお前が悪いだろう』

『ブルームはバカだと思う』

ドーハスーラとみずきの視線は冷たい。

まあ、ドーハスーラに目はないのであくまでも雰囲気だが。

『だって……僕はただ写真をとっていただけなんだよ!』

『その内容に問題があるから制裁を受けることになるんだろうに』

『なんだとこのチキング! どうせそんな勇氣すらないくせに!』

『なんだとこのゾンビはな! 煩惱全開の分際でごちやごちや言うな!』

だんだん精神年齢の低い言い合いになってきた。

『……そうだった。ドーハスーラもバカだった』

『いや、ちよつと待って。我ってそのあたりの信用ないのか?』

『ぶつちやけあんまり……』

杖を持っていない左手で地面にのの字を書き始めるドーハスーラ。

なかなか哀愁が漂うものである。

『そういえば、ノヴァが見えないね』

ブルームが思いだしたように言った。

レッドアイズと定期的の確認を行うドーハスーラが復活した。

『ノヴァなら元マスのところに行ったぞ。ちよつと一緒に寝るそう
だ』

『あ、なるほどね。それなら仕方ないか』

離れるとしても、元マスのところに行くというだけで納得するブルーム。

本当に、それが普通という印象なのだろう。

『その間の強奪に関してはどうするの?』

『ドラゴネクロが担当するぞ』

『冷や汗流してたよ』

ドーハスーラとブルームはみずきの補足に首をかしげる。

そして、樽をすればなんとやら、ドラゴネクロの姿が見えた。

『あ。おーいドラゴネクロ〜！適当にだべろうぜ〜』

ブルームが叫ぶと、ドラゴネクロが振り向いて、そしてこちらに来了た。

『何か話題があるのか？』

『ちようど君の話をしていたんだよ。なんか冷や汗流してたっていうからさ』

『……いやまあ、ちよつとな』

『どうかしたのか？』

『まあ、あれだ……モンスターの攻撃力って意外と上がりやすいんだなど思ってたな』

『……何を今更』

デュエルモンスターズでは攻撃力のインフレなどよくあることである。

『墓地に特定モンスターをため込むことで攻撃力を上げるモンスターがいるだろう。あれを少し舐めていた』

『何で腕を震わせながらそんなこといつてんの？』

『ふむ、墓地に特定のカードか……数枚でいいのなら我が除外すればいいだけのことだ。効果処理時に選べるからまず逃げられないだろうし』

『その手があったか！』

急に希望を掴んだ様子ドラゴネクロ。

本当に何があったのだろうか。

ただ、そんなことを考えてあとで、ドラゴネクロはドーハスーラを見ながら思う。

(そーいやアイツは、活躍させてほしいといえれば本当に活躍させてもらえてたのに、こいつは単なるコストなんだよな……)

このまま考えていくと泥沼にはまるので思考の隅に追いやることにした。

ブルームが頷く。

『まあ、何を悩んでいたのかしらないけど、何事もなさそうでも何より。ところで、ノヴァがやってたようなことはちゃんとできるの?』

『もちろん。じゃないと、ノヴァが俺を信用しないからな……』

関係は悪くないが技術的な信用が薄いのが一部の精霊たちの現状らしい。

『そつか……あんな若気の至りみたいないな感じで暴れてたのに、落ち着いたもんだね』

『それは言わないでくれ……』

『?……何か変なことしてたの?』

みずきが首をかしげる。

ドーハスーラが腕を組んで答える。

『ふむ……まあ、悪霊時代にいろいろな』

『ドラゴネクロはね。無理矢理悪霊にされてたんだよ』

『無理矢理?』

『そうだ。とある施設で拘束されて、俺は悪霊にさせられた』

『それを、マスターがデュエルで救ったわけさ。懐かしいねえ』

本当に懐かしそうに言うブルーム。

『我も、あの時のことは忘れられないな』

精霊たちの中にも、様々な事情を抱えたものがある。

★

昔の話だ。

当時、『真紅眼の不屍竜』がまだ進化しておらず、『真紅眼の不死竜』だったくらい前だったとドーハスーラたちは記憶している。

『悪霊の目撃件数が増えたな……』

人気のない倉庫街。

遊月はハイヤーに乗って、窓の外を見ながらそんなことを呟く。

「そんなこともあるだろ。まだ許容ラインでとどまってるレベルだぜ?」

ハイヤーを運転しながらそんな返答をするのは、スーツを着崩してサングラスをかけた茶髪の青年。

活発な印象を持つ青年であり、遊月ともなかなか距離感が近い言葉

の使い方である。

近い距離を例えるならば、遊月と英明に近い感じだろう。

「で、この近くにいてるって聞いたけど……」

「そのようだな……ドーハスーラ。どうだ？」

『うむ……次の角を右だ』

「了解。次が右だな」

ドーハスーラが遊月の中にある精霊世界から語り掛ける。

指示を聞いて茶髪の青年が頷く。

「で、直哉、何か言いたそうな顔をしているが、なんだ？」

「いや、久しぶりを見るからな。そのカツコ」

きんせいなおや
金成直哉。

それが青年の名前である。

そして、彼が久しぶりに見るといった遊月の格好は、やや軍服に似た設計である『DGC』の制服だった。

「DGCのガキどもに言われたからな。まあ、これをクリアすれば、最近のミスを立て直せるから、私としてもあとあと面倒な部分が少なくなる。何故か新着をもらったが」

「あのおっさんたち必死だな」

遊月は『ガキども』と呼び、直哉は『おっさんたち』と呼んでいる。

二人称に年齢の違いが見られるが、遊月の『秘密』をすでに直哉が共有しているようで、何かを訂正する雰囲気はない。

「警察組織が乱立し始めてるもんな。結構バラバラだけど、どうにか纏まらんのか？」

「さあな。ただ、一番重要な部分は私の管轄内だ。そういった組織への人材提供として、DGCはある程度発言力があつた方がいい」

『成果』というものは『目標』よりも影響が大きく、そして『現実』と言うものは、何にも代えられない粘っこさがある。

そういうものを作るために、今回遊月はこんな恰好をしている訳だ。

溜息を吐きながら、胸ポケットからカードをとり出す。

「……『更新不要』の『DGCライセンス』か。こんなもんを作つてど

うするんだか」

「まっ、いつでも無条件で顔を出せるって言うのはいいじゃねえか。遊月そういうの忘れるけど」

「五月蠅い」

クククと笑う直哉。

「しかしまあ、身長が高くてしつかり背筋が伸びてると、軍服見たいな服は似合うねえ」

「直哉とは大違いだな」

「うっせ」

身長は別に低いというわけではない直哉。

しかし、スーツ姿ながら、若干猫背である。

本人のようすから察するに、指摘されなかつたら若干曲がっていることが多いようだ。

「……あ、この角だな」

直哉は角を見て、それを右に曲がった。

すると、『ゴブリンゾンビ』が見えた。

「……遊月の精霊にいたよな」

「ああ。ただ……悪霊瘴気が若干薄い。本体と言っている悪霊が他にいるはずだ」

『その反応はもつと遠くからだ。このまままっすぐ進めば……いや、こちらに向かって来ている！』

次の瞬間、直哉と遊月は気が付いた。

「直哉！」

「わかってらー！」

ハンドルを勢いよくきつて、ハイヤーを急に方向変換させる。すると、元の進行場所に、ドラゴンの掌底が振りおろされた。

その姿を見て、直哉は舌打ちする。

「『冥界龍 ドラゴネクロ』か。こりや面倒なレベルの悪霊だぜ」

「雑魚は抑えておけ」

言うが早いか、遊月がハイヤーから降りた。

それと同時に、近くの影から人が出て来る。

紫色の髪で、ゆがんだ色の瞳をした男性だ。

「あの一撃を避けるたあ勘がいいじゃねえか」

「殺意を漏らしすぎだ。それくらいはわかる」

遊月はデュエルディスクを取り出す。

「俺ばかり警戒していいのか？」

「どういう意味だ」

「俺がお前を抑えている間。小さい悪霊どもに周りを襲わせることも可能だつてことだぜ」

それを聞いた遊月は鼻で笑った。

「既になっているくせに何を言ってるんだ。第一、雑魚なら私が狩るまでもない」

デュエルディスクを構える遊月。

青年も舌打ちしながらデュエルディスクを構えた。

★

そして、その雑魚の駆除を任された直哉だが……。

「あーもう、人使いが荒いぜ。まあ、別に珍しいことじゃねえけどよ」

弱い悪霊たちが密集しているところを狙って、直哉は走った。

十数秒でおいついた。

遊月がいるあたりからは見えなくなっているが、直哉としては関係ない。

「で、俺がやるのはお前らか」

アンデット族モンスターが集まっている。

直哉が近づくと、一つの立方体が出現し、その中にすべての悪霊たちが入って行く。

「へえ、『デモンズ・キューブ』か」

力の弱い悪霊たちは、弱いデツキしか作れない。

そのため、シナジーのある者たちが集まり、自動的にデツキを構築する『一時的な共同手段』が存在する。

それが『デモンズ・キューブ』と呼ばれるものだ。

『雑魚呼ばわりしやがって……ぶっ倒してやるー！』
「ハッ！やってみろ」

直哉はデュエルディスクを構えて、デモンズ・キューブのそばにカードが五枚出現する。

『デュエル!』

直哉 LP8000

DC LP8000

「先攻は俺だな」

ターンランプがついたのは直哉。

「俺は手札から『レッド・リゾネーター』を通常召喚!そのモンスター効果で、手札から『ダーク・リゾネーター』を特殊召喚!」

レッド・リゾネーター ATK 600 ☆2

ダーク・リゾネーター ATK1300 ☆3

「そして現れる、荒ぶる魂のサーキット!召喚条件はチューナー一体を含むモンスター二体!リンク召喚!リンク2『水晶機巧―ハリファイバー』!」

水晶機巧―ハリファイバー ATK1500 LINK2

「ハリファイバーの効果発動。デッキからレベル3チューナーの『幻影王 ハイド・ライド』を準備表示で特殊召喚!」

幻影王 ハイド・ライド DFE300 ☆3

「俺はカードを二枚セット、ターンエンドだぜ」

『僕たちのターン。ドロー』

一枚カードが出現する。

『僕たちは手札から、『闇竜の黒騎士』を召喚!』

闇竜の黒騎士 ATK1900 ☆4

「なるほどな……俺はハリファイバーの効果発動。こいつを除外して、エクストラデッキから『シューティング・ライザー・ドラゴン』をシンクロ召喚!モンスター効果で、レベル2の『フォース・リゾネーター』を墓地に落とす!」

シューティング・ライザー・ドラゴン ATK2100 ☆7↓5

「そして、シューティング・ライザーは相手メインフェイズでもシンクロ召喚が可能。ハイド・ライドを自分フィールドでシンクロ素材にする時、チューナー以外のモンスターとして扱える。行くぜ!」

直哉は手を掲げる。

「俺はレベル3のハイド・ライドに、レベル5のシューティング・ライザーをチューニング！王者の咆哮。世界に轟き、最高の力を得て、我が身に宿れ！シンクロ召喚！レベル8『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000 ☆8

現れるドラゴン。

荒々しいパワーを秘めて、直哉のフィールドに降り立った。

『ぐっ……攻撃力3000か……なら、カードを二枚セットして、ターンエンド』

「俺のターン。ドロー！」

ドロウしたカードを見て、直哉は良いカードだとばかりに微笑む。

「俺はレッド・デーモンズがいることで『紅蓮魔竜の壺』を発動。デッキから二枚ドローだ」

デメリットが頭おかしいが貴重なドローカードだ。

ちなみに昔のカードらしくターナーが付いていない。

「そして、『クリムゾン・ヘル・セキユア』を発動。魔法・罫を全て破壊する！」

『グッ……』『アンデッド・ストラグル』を発動し、攻撃力を1000アツプさせる！」

闇竜の黒騎士 ATK1900↓2900

だが、残った一枚のセットカードは破壊である。

ちなみに『次元幽閉』だ。

「バトルフェイズ！レッド・デーモンズ・ドラゴンで、闇竜の黒騎士を攻撃！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンが掌底を繰り返して、粉碎する。

DC LP8000↓7900

『チッ……』

「俺はこれでターンエンドだ」

『僕たちのターン。ドロー！来た！』『融合』を発動。手札の『ピラミッド・タートル』と『デス・ラクーダ』で、融合召喚！力を貸してくだ

さい。『冥界龍 ドラゴネクロ!』」

冥界龍 ドラゴネクロ ATK3000 ☆8

現れるドラゴネクロ。

だが、悪霊としての力がない。

本体ではないスカカードだろう。

『さらに、『デーモンの斧』を装備!』

冥界龍 ドラゴネクロ ATK3000↓4000

「な……攻撃力4000!?!」

これがグッドスタッフに使われる初期カードの力である。

一枚がほとんど無駄になりにくいのだ。

『バトルフェイズ。ドラゴネクロで、レッド・デーモンズ・ドラゴンを攻撃!』

「させるか!速攻魔法『イージー・チューニング』を発動。墓地から『ダーク・リゾネーター』を除外することで、攻撃力を1300ポイントアップする!」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000↓4300

「返り討ちだ!」

ドラゴネクロ粉碎!

『……ターンエンド』

そりゃ手札がないのだから仕方がない。

ちなみに……イージー・チューニングの攻撃力上昇は永続である。

「俺のターン。ドロロー!手札から『チェーン・リゾネーター』を召喚して、デッキから『フレア・リゾネーター』を特殊召喚!」

チェーン・リゾネーター ATK100 ☆1

クリエイト・リゾネーター ATK800 ☆3

なかなかリゾネっている直哉。

体から炎が巻き上がる。

「行くぜ。俺はレベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴンに、レベル1のチェーン・リゾネーターと、レベル3のクリエイト・リゾネーターをダブルチューニング!」

炎のチューニングリングが出現し、レッド・デーモンズ・ドラゴン

を包み込む。

「王者と悪魔、荒ぶる魂により共鳴し、今交わる！全てを滅する力を得て、降臨せよ！シンクロ召喚『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！』」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK3500↓6500 ☆
12

『こ……攻撃力、6500だど?!』

シユートイニング・ライザーで落したり、チューナー以外で扱えるハイド・ライドとかを絡めたりとかそういう小ネタを積み重ねると、イージー・チューニングを使った後でもこれである。

「さらに、手札一枚を墓地に送って『閃光の双剣―トライス』を装備！捨てたのは『クロック・リゾネーター』だ。攻撃力が500下がるが、同時に500分上がる。そして、二回攻撃が可能になる！」

トライスがスカーレット・ノヴァ・ドラゴンの両手に出現する。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンが力を流し込むと、爆炎を吹き上げ始めた。

「バトル！スカーレット・ノヴァ・ドラゴンで、ツイン・ダイレクトアタック！」

左手の剣を真横に振ると、炎の軌跡が残り、右手の剣を垂直に振りおろすと、炎の軌跡が十字になって、キューブに向かって飛んでいく。

『う、うあああああああ！』

DC LP7900↓1400↓0

衝撃と同時に消し飛ぶキューブ。

「よっしゃ！最高だぜ！スカーレット・ノヴァ・ドラゴン！」

ガッツポーズをする直哉。

少し冷静になって、自分が走ってきた方を見る。

「さてと……まあ、遊月なら心配いらねえか。戻るぞ。ノヴァ」
『グルル』

スカーレット・ノヴァ・ドラゴンがデュエルディスクに引つ込むと、直哉はもと来た道を行っていった。

★

その頃の遊月はというと。

「さて、とりあえずやるか。死後の世界の広さを教えてやる」

「ハッ！勝った気でいるんじゃないやねえ！」

「デュエル！」

遊月 LP8000

翔太 LP8000

ターンランプがついたのは敵の翔太だ。

「俺の先攻。モンスターとカードをセットして、ターンエンドだぜ」

セットモンスター一枚と、セットカード一枚。

だが、かなり自信があるようだ。

「私のターンだ。ドロ。このドローフエイズ。速攻魔法『手札断殺』を発動。私は『屍界のバンシー』と『死霊王 ドーハスーラ』を墓地に送り二枚ドロ」

「俺も手札交換だ……チツ。そのセットってことは……」

「そういうことだ。墓地から『屍界のバンシー』を除外して効果発動。デッキから『アンデットワールド』を発動する」

広がる屍界。

お互いにデッキはおそらく『アンデット族』だろう。

しかし、ドーハスーラがいるので、必須だ。

遊月の墓地から闇が溢れだす。

「スタンバイフェイズ。墓地から効果発動だ。終わりも始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ！』」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

『フハハハハ！さあ、始めようか！』

「私は手札から、『不知火の隠者』を通常召喚」

不知火の隠者 ATK500 ☆4

「ハッ！これ以上は許さねえよ。罨発動『不知火流 燕の太刀』！俺のセットモンスター、『ゴブリゾンビ』をリリースすることで、ドーハスーラと隠者を破壊だ！」

粉碎するドーハスーラと隠者。

『我、最近活躍してない気がする』

ギャグパートで頑張れ。

「まだ効果は続いているぜ。デッキから『不知火の武部』を除外。ゴブリゾンビと武部の効果発動。ゴブリゾンビの効果で、デッキから『牛頭鬼』を手札に加える。武部の効果で、一枚ドロワーして牛頭鬼を捨てる。そのまま効果発動だ！墓地の『ピラミッド・タートル』を除外し、手札から『赤鬼』を特殊召喚！」

赤鬼 ATK2800 ☆7

(……赤鬼を入れてるアンデットデッキ。初めてみた)

召喚時に手札コストを任意の枚数払って、その分だけバウンス出来る効果を持つモンスターだが、遊月は使ったことが無い。

召喚制限のないアンデット族モンスターで最高の攻撃力は確かに2800ラインだが、だったら守備力が3000あり、敵の除去カードに反応できる『闇より出でし絶望』の方がいいだろう。

とはいえ、カードの選択はデュエリストが決めることなので、突っ込んでも仕方がないのだが、

「……まあいいか。私は『おろかな埋葬』を発動。デッキから『グローアップ・ブルーム』を墓地に落とす。そして除外することで効果発動。デッキから『真紅眼の不死竜』を特殊召喚！」

『よし、行っていい！』

『参るか』

真紅眼の不死竜 ATK2400 ☆7

「な……不死竜だど？」

「さらに、手札から『黒鋼竜』を、攻撃力600アップの装備カードとして、不死竜に装備させる」

真紅眼の不死竜 ATK2400↓3000

「バトルフェイズ。真紅眼の不死竜で、赤鬼を攻撃！」

不死竜が腐り切った黒炎弾を放つ。

赤鬼は爆散した。

「ぐうう……」

翔太 LP8000↓7800

「さらに、不死竜がアンデット族モンスターを戦闘で破壊したことで、

そのモンスターを特殊召喚だ」

赤鬼 ATK2800 ☆7

「そして、赤鬼でダイレクトアタック！」

「ぐおああああ！」

翔太 LP7800↓5000

まさに踏んだり蹴ったりなデュエルである。

「メインフェイズ2だ。私はレベル7の不死竜と赤鬼でオーバーレイ。紅き瞳の竜よ。黒炎の中に潜む鋼の炎の力を示せ。エクシーズ召喚！ランク7『真紅眼の鋼炎竜』！」

真紅眼の鋼炎竜 ATK2800 ★7

「フレアメタルだと……」

「私はカードを二枚セットして、ターンエンドだ」

「なら、俺のターン。ドロー！まずは『サイクロン』を使って、アンデットワールドを破壊する！」

「フレアメタルの効果で、500のダメージだ」

フレアメタルが炎を吐いた。

翔太 LP5000↓4500

「チツ……だが、これでドーハスーラは復活しねえ、手札から『融合』を発動だ！」

「フレアメタルの効果で、500のダメージだ」

翔太 LP4500↓4000

「俺は手札の『ブラッド・サッカー』と『ファラオの化身』を融合。冥界の扉よ。二つの死者の浅ましき歌により開け！融合召喚！レベル8『冥界龍 ドラゴネクロ』！」

冥界龍 ドラゴネクロ ATK3000 ☆8

『フハハハハ！矮小な人間風情が、俺様に勝てるかとも思ってるのか！』

高笑いしながら出現するドラゴネクロ。

のちに『若気の至り』と言われるアレである。

「……そいつ。まだ完全に悪霊瘴気に取り込まれているわけじゃないな」

自らを構成する精霊力。

その中の過半数が悪霊瘴気になると、精霊は悪霊に変わる。

精霊力は思ったより簡単に悪霊瘴気になるのだが、悪霊瘴気を精霊力に戻す手段は存在しない。

そのため、完全に悪霊瘴気に取り込まれた場合、デユエルで倒すと悪霊瘴気が分解して消滅するが、まだ精霊力が残っている場合、悪霊瘴気が全て分解すると精霊力が残るので、精霊に戻すことが出来る。

「だからどうした。お前が勝てるわけねえんだよ！バトルだ！ドラゴネクロで、フレアメタルを攻撃！」

遊月 LP8000↓7800

「ドラゴネクロと戦闘を行う相手モンスターは破壊されない。この瞬間、ドラゴネクロの効果発動。相手モンスターの攻撃力を0にする！」

「ダメージはお前にもあるぞ」

翔太 LP4000↓3500

ちなみに、ドラゴネクロはトークン精製能力があるが、レベルを持たないエクシーズモンスターやリンクモンスターが相手の場合、攻撃力を下げることができても、トークンを生成することはできない。

「俺はこれで、ターンエンドだ」

「私は『闇の増産工場』を発動。フレアメタルを墓地に送って、一枚ドロースする」

即座に手札を交換する遊月。

これで、エクストラモンスターゾーンは空いた。

「私のターンだ。ドロース」

ドロースしたカードを見た後、遊月はドラゴネクロを見る。

悪霊瘴気に囚われた瞳は、確かに狂気に満ちている。

しかし……まだ、その奥で助けを求めているのは分かった。

(さて、やるか)

遊月はそんなことを考えた。

『闇の増産工場』の効果により、手札の『ゾンビキャリア』を墓地に送り一枚ドロース。手札から、『生者の書―禁断の呪術―』を発動。墓地

からドーハスーラを特殊召喚し、お前の墓地から、『ブラッド・サツカー』を除外する」

『フハハハハ！我、再臨！』

死霊王 ドーハスーラ ATK2800 ☆8

「ドーハスーラか……」

「とはいえ、今回使うのはコイツの『特技』だ。『ユニゾン・チューン』を発動。墓地のゾンビキャリアを除外し、ドーハスーラに、レベル2とチューナーを与える」

死霊王 ドーハスーラ ☆8↓2 (チューナー)

「お前の場に、他にモンスターはいねえ。どうするつもりだ」

「罨カード『シンクロ・マテリアル』を発動。対象はドラゴネクロだ」

「何!？」

遊月は手を掲げる。

「シンクロ・マテリアルの対象になったモンスターを、私はシンクロ素材にできる。私はレベル8のドラゴネクロに、レベル2のドーハスーラをチューニング」

ドラゴネクロが遊月のフィールドに移動する。

『フハハハ！これが我の力だ。思い知るがよい！』

二つのチューニングリングとなったドーハスーラ。

ドラゴネクロを包むと、リングが高速回転し、ドラゴネクロの中の悪霊瘴気が抜けていく。

「冥界に響く咆哮よ。濁流の中で研ぎ澄まされし力を手に、君臨せよ。シンクロ召喚！レベル10『冥界濁龍 ドラゴキュートス』！」

冥界濁龍 ドラゴキュートス ATK4000 ☆10

「ど……ドラゴキュートスだと。しかも、俺のモンスターを使って……」

驚いているようだが、まあ無理もないだろう。

ドラゴキュートスが遊月を見る。

『新たなるマスターよ。感謝する』

「構わんよ」

完全に悪霊瘴気に囚われていないのなら、全て救い出すことが出来

る。

遊月にとっては、今回もそうしたというだけの話だ。

「シンクロ・マテリアルを使ったターン。私はバトルフェイズを行えない。ターンエンドだ」

「ぐ……俺のターン。ドロー！チツ……糞ガアアアア！」

ドローしたカードは使うことすらできないものだったようだ。

だが、デュエルと言うものは、何もできないものに対して時間を与えたりはしない。

数秒後、遊月のターンになる。

「残念ながら、私のターンだ。ドロー。ドラゴキユートス。終わらせろ」

『うむ』

ドラゴキユートスが口の中にエネルギーをため込んで、そのまま放射する。

エネルギーが濁流となって、翔太を包んでいった。

「うわああああー！」

翔太 LP3500↓0

翔太はそのまま気絶。

遊月は拘束して、そのまま電話をかけた。

「さてと、この功績を利用して、どうにかするか……新品って何か硬いんだよな。着心地が悪い」

肩を回す遊月。

「おーい遊月。大丈夫か」

直哉が来た。

「ああ。問題はない」

「みたいだな。で、悪霊は？」

「精霊に戻した」

「そうかい……また強いのが来たもんだな」

「だな。さて、DGCの回収班もそろそろ来る頃だろうし、さっさと引き渡して帰るぞ」

「わかった。どこか寄り道するか？」

「そうだな……」

遊月は少し考えた。

『デュエルロイド』を作ってる研究所が近かったはずだ。見に行ってみよう」

「ああ、様々なデュエルデータを蓄積して作るロボットの研究所か」
「確か開発コードネームは『H I N A T H U』だったような……まあいいか。行ってみよう」

★

回想終了。

『……とまあ、そんな感じで、俺が仲間になったわけだ』

『そうだな。我としても活躍できて満足する一戦だったぞ』

『チューニングする時に無理矢理悪霊瘴気を追いだすなんて聞いたことないけど……』

『出来る精霊はいくらかいるんじゃないかな？でも、簡単にそれをやつてのけるのはドーハスーラくらいだろうね』

元々チューナーではないくせに一体いつ練習しているのかと言う話だが、あくまでもチューニングと言う方法はきつかけのようなものであり、悪霊瘴気の手操作そのものはドーハスーラができることだ。

『いろいろあったのは分かった。ところで、複雑な出会いの精霊って多いの？』

『我ももとは悪霊だったからな。いろいろあったぞ。何度ガチバトルをやったことか……』

『僕はレッドアイズとほぼ同じだけど、多分レッドアイズが語りたがらないだろうから保留だね』

出会いと言うものはいろいろあるし、出会いがあるのならまた別れもある。

『魂をたぎらせた結果、短命だったマスターの精霊って言うのは、結構充実してるけどね。ノヴァのマスターは死んじゃったけど、ノヴァとしては悪くないんじゃないかな。しっかり看取ったって聞いたし』

『ふーん。なるほど』

みずきも、なんとなく察したようだ。

『さてと、そろそろ写真の整理をしてくるから、僕はこの辺で』

『ああ……ん？ちよつと待て、一体何の写真だ？』

『フフフ。『みずきとうらがマスターに抱き付いて寝ている写真』とか、その『綾羽ちゃんバージョン』とか『香苗ちゃんバージョン』とかね。全員寝間着姿で可愛らしい感じに……ちよつとウイリアム・テルと槍がバチバチしている音が聞こえるから僕は退散するよ。それじゃ！』

ブルームは『あとはこのカメラを分解し、上手く関税にかからないようにしなければ……でもすでにミンチなんだけど大丈夫だろうか』とかなんとかほざきながら、すぐに見えなくなつた。

『……平和だな』

『平和なの？』

『まあ、これくらいじゃ合えるくらいがちようどいいと思うぜ？』

そんなことを、残つた三人は話すのだった。

第二十一話

「……ムフフ。香苗ちゃん。今日もデュエルだよ！」

「お兄ちゃんの添い寝は譲りません！」

バチバチとしている様子の綾羽と香苗。

二人とも制服姿である。

遊月の家の地下にはデュエルコートがあり、それぞれが使用しているカードキーを使つて開けて使用することが出来るので、もうこうなると容赦はない。

援助金が膨大でそれなりに金持ち生活だった綾羽に、スケールの違いがでかすぎて感覚がマヒした香苗。

使うのが自由？なら使おうぜ！と言う思考だ。

とはいえ、こんなのが二人家にいるくらいなら何も問題がないのが遊月である。

『……毎日毎日飽きないよね。二人でマスターを挟み込むように寝ればいいのに』

部屋の隅の方でそんなことを呟くブルーム。

『我が主もそれくらいなら問題がないだろうな』

『枯れてるもんな』

『童貞のまま枯れるなんて……マスターも不憫だぜ……』

『……反対側でいつも添い寝している私が一番！』

ドーハスーラがため息交じりにいつて、ドラゴネクロが何かを思い出すように言つて、レイジングが呆れて、みずきは自慢する。

『マスターたちにはまだ早いでしょうね』

『え、何が速いの？』

『ハッハッハ！まあ無理だよね』

『正直、デュエルだるいから二人で添い寝すればいいのにつて思うけど……』

『無理でしょう。マスターも綾羽さんもまだ度胸が足りませんから、正面から抱き付くなど不可能。賭けているのは背中から抱き付く権利ですからね』

『若いのう……』

ルインは全てわかつているようだが、うららにはまだ理解できない領域のようだ。

ライナーもケラケラ笑いながらそんなことを言う横で、グスタフはだらけ切っている。

ドーラは二人の内心を余すことなく説明し、リーベはそんな二人を眩しいものを見るように呟いた。

まあなんともすさまじい数の精霊である。

綾羽には二人、香苗には四人いて、それでもかなり多い方だ。そして、遊月の精霊がとんでもなく多い。

狭い部屋でわちやわちやしていたら正直ヤバいことになる。

そのため、ドーハスーラやドラゴネクロ、レイジングはデフォルメモードであり、列車たちはオモチャに擬態している。

『そう言えばレッドアイズは?』

ブルームがきよろきよろと見渡す。

『我と違って高速移動手段がないからな。我が主のそばにいるぞ。いざとなれば力を使う必要があるからな』

『あ、そうだったね』

『ずいぶん前に説明したことがあるような……ブルームもぼけてきたか?』

『なにおう!?!ドラゴネクロ。ちよーつと前話でピックアップされてたからって調子に乗るな!』

メタいことを言うんじゃない。

『さて、今日はどっちが勝つんだろうな』

レイジングがそう言った時だった。

『お前たち、何をやってるんだ?』

デュエルコートがある部屋に遊月が入って来た。

『え、遊月君!』

『な、何かあったんですか?』

驚く綾羽と香苗。

それを見ながら、ドーハスーラが『あつ』と声を漏らした。

『今日は『調節日』だったか?』

「そうだ。準備しておけよ」

そう言うと、遊月は部屋を出ていった。

綾羽と香苗は顔を見合わせて、ドーハスーラの方を向いた。

「あの……どうということなの?」

『地下空間が作られていることは知っているな?その奥深くに、悪霊瘴気を吸収する機能を持った部屋がある。そこにいって、形成された悪霊たちを討伐するのが目的だ』

「え、集めることが出来るんですか?」

『ドーハスーラは体の外の悪霊瘴気を操作できるからね。それを応用したものだよ』

『たまに変な形の空気洗浄機みたいなのがあるだろ。それを使って集めてるんだ』

ということらしい。

『ちなみに、我が主は調節日は家で寝ないぞ』

「え、そうなの!?!」

『いろいろ電話しなくちゃいけないところが多いみたいだよ。近くのオフィスのベッドで寝るから、自室は使わないんだ』

そういうことらしい。

「あの、それって、私たちはついていって大丈夫なんですか?」

『むしろ普通に連れていく気だと思うよ』

「え、大丈夫なの?」

『大丈夫だ。それに、ついていった方がいいだろうな。我が主の『全力』が見れるぞ』

「!!?」

遊月の全力。

それを聞いて、綾羽と香苗は顔を見合わせる。

とても興味がある反面。そんな全力を出さなければならぬような場所というのは、一体どういうことなのだろうか。

「あの、悪霊瘴気が集中しているんですね……私は大丈夫ですか?」
香苗がオロオロしながら聞く。

『精霊力制御疾患』である香苗は、悪霊瘴気であつても体内に取り込んでしまう。

さらに、ウイルスの影響でそれが強くなった。

列車たちに送りつけているため問題がないのだが、そもそも悪霊瘴気をとりこんでしまうことは避けられない。

不安になるのは当然だ。

だが、不安になつてている香苗に対して、アンデットモンスターたちは軽い表情だ。

『列車たちのスケールはすごいし、最近は悪霊瘴気を制御出来る精霊に特訓してもらつてるから大丈夫だよ』

「え、そうなんですか？」

香苗が列車たちに聞く。

全員が頷いた。

『問題ないよ。ドンと任せて置け！』

ライナーが代表としてそういった。

……ちなみに、その制御の師匠はレッドアイズなのだが。それは今は置いておくことにする。

いろいろ確認事項はあるかもしれないし、気になる部分はある。

だが結果的には、『まあ、遊月が全力出すし問題ないだろ』と言うものである。

★

そして移動中。

「あの、遊月君。地下深くに行くって聞いたけど、どれくらいのデュエリストが集まるの？」

「私たちを除けば四人だ」

「少なくともですか？」

「……もともと私一人でも問題ないからな」

なんだか少し間があつたような気がするが、問題ないと言うセリフに嘘はないと分かつた二人。

地下にエレベーターで移動すると、そこにはハイヤーのそばで腕時計を見る創輝がいた。

「創輝。時間通りだな」

「遊月様……そうですね。こればかりは遅れると少々マズいので」

「あと三人は？」

「既に別口から向かっていますよ。合流地点で時間通り会う予定です」

「わかった」

そのまま自然にハイヤーの助手席に乗る遊月。

綾羽と香苗は慌てたようにハイヤーの後部座席に乗りこんだ。

それを見て、創輝は運転席に乗りこむ。

そのまま発進させた。

「お二人は初めてでしたね」

創輝が綾羽と香苗に話しかける。

「あ、はい」

「悪霊の討伐と聞きましたけど……」

オロオロしている様子だが、遊月と居ると急展開は普通にあるので若干耐性ができているようだ。

創輝がフフツと笑う。

「まあ、基本的に厄介な部分は遊月様がするので問題はありませんがね。とりあえず、できることをすれば問題ありませんよ。頑張ってください」

「二はいっ！」

頷く二人。

そして、ふと綾羽は気になった。

「あの……創輝さんも悪霊討伐をするんですか？」

「はい。私もしますよ………そういえば、私のデッキを見せたことはありませんでしたね。まあ、楽しみにしておいてください」

微笑みながらそういう創輝。

その隣で遊月は……。

「zzz……」

熟睡していた。

「お兄ちゃんってどこでも寝れるんですね」

「それに加えて『いつでも』ですね。誰もが緊張しているような空間でも普通に寝ている時も多々ありますよ」

「そう聞くと単にデリカシーがないような気がしなくもないが……。」

「あれ、結構速いですね」

「というより、遊月様の家の近くに作られた。という感じなので……」

「あ、納得です」

綾羽が遊月の頭をポンポンと叩く。

「……ん？もうそろそろか」

「はい。もうそろそろですよ」

「そう言うと同時に、ハイヤーは角を曲がる。」

「そこには、かなり厳重な扉があった。」

「まるで厳重な金庫のような雰囲気がある。」

「さてと、そろそろ来る頃か」

遊月がハイヤーから降りてデュエルディスクを見た時、Dホイールの音が聞こえてくる。

遊月が振り向くと、英明が来た。

「英明。時間通りだな」

「おう！調節日だからな。気合ばっちり入れてきたぜ！」

「相変わらず元気な様子だ。」

「で、あと二人だよな」

「ああ」

遊月はそう言って、近くの角を見る。

「日夏。月詠。演出はいいからさっさと出て来い」

「……何故バレた」

「あらあら、流石ですね」

遊月の秘密兵器である日夏と、アムネシアの生徒会長である月詠が角から出てきた。

日夏がスパナを握っているところを見ると、何かしら考えていたようだ、演出前にばれると全て台無しである。

「さて、全員そろったわけだ。これから、この扉の奥にいる悪霊討伐に

行く。小型が大量に湧いて出て来るが、デュエルは挑まず、精霊を使つて叩き潰せばいい。ある程度抑えたら、最後にデュエルを挑んでくるが、それに関しては私が対応する」

そういつて、遊月は全員を見る。

「まあ、要するにいつも通りなんだが、質問はあるか？」

「はいー！」

「香苗。なんだ？」

「あの、こちらの凄くきれいな人は一体……」

香苗が日夏を見てオロオロしている。

月詠はアムネシアの生徒会長なので知っているが、さすがに日夏のことには知らない。

日夏は香苗の頭をポンポンと叩いて、そして撫でる。

「〜♪」

とても気持ちよさそうな香苗。

「お兄ちゃんの撫でかたに似てますね〜」

そんなことを呟く香苗。

一瞬、日夏がチラッと遊月を見た。

遊月はわざと無視して、香苗の方を見る。

「私の切り札だよ」

「え、切り札……ですか？」

「私がない時に、私くらいの実力者が必要となった時のための保険だ」

「私は沢本日夏。よろしく」

「よろしくお願ひします！」

とりあえず初見の二人の顔合わせは終了。

それを見た遊月は、扉の方を見る。

重苦しい金庫だが、横のパネルの指紋認証装置に遊月が指を押しあてると、簡単に鍵が開いた。

「さて、入るか」

遊月を先頭に、六人が続く。

中はかなり大きな黒い球体が存在し、その周辺を、悪霊瘴気が渦巻

いていた。

「こ、ここに、悪霊瘴気が集められてるんだ……」

「そうだ。さて、早速出てきたぞ」

茫然とする綾羽に対して、遊月は頷く。

見ると、ぎよろつとした目が出現し、悪霊たちがばらまかれていく。

「……あれって、『方界胤ヴィジヤム』か」

英明が呟いたとおり、ヴィジヤムだ。

「これはまた、アレなカテゴリですね」

「まずは、対抗できるようにする」

「それがまず最初にあることでしょうね」

というわけで。

「行くよ。ルイン」『分かった』

「変身!」『マスク・チェンジ カミカゼ』

綾羽がルインの姿になって、英明はカミカゼの姿になる。

「アイン・ソフ・オウル解放。来てください。メタイオン」『任務ヲ遂行スル』

「ライトルーラー。出てきて」『イエス。マイマスター』

「スケールをセッティング。カイゼル。出番ですよ」『参る!』

月詠が『無限光アイン・ソフ・オウル』を解放し、メタイオンが出現。

日夏が所有する精霊『アルカナフォーエクス―THE LIGHT
RULER』を出現させる。

創輝は『DD魔導賢者ニコラ』と『DDケルベロス』でスケールを
セッティングし、『DDD制覇王カイゼル』が出て来る。

「ライナー。グスタフ。ドーラ。リーベ。行きますよ!」

『よし。行くぞ〜!』

『面倒だけど、やるしかないか……』

『厄介な効果持ちが多いですね。防御は切らないようにしましょう
か』

『ホッホッホ。さて、老骨に鞭打つとするかのう』

香苗の傍から四体の列車が出現する。

もともと精霊力をとりこみやすい香苗。
大型を一気に四体出現させることも可能である。

そして、各々が戦闘準備を整えていく中。

遊月は特に変化なく、歩いていく。

「え、遊月君？」

遊月を追いかけようと綾羽を、英明は止めた。

「まだ離れておいた方が良いぜ。あまり近付き過ぎると『影響力』の範囲に入っちゃう」

「それってどういう——」

「あっ！お兄ちゃんのおそばの床が……」

香苗が床を指さす。

悪霊瘴気をとりにばさないため特殊な塗装がされている床が、まるで何十年も放置したかのように腐り始める。

「え、どういうこと？『ロード・オブ・ザ・レッド』じゃないの？」

「そんな普段着なんて使わない」

「フフフ。そうですね。遊月さんの『全力』……とても、ヤバいものですよ」

遊月は胸ポケットから一枚のカードをとりだす。

「お、そろそろだ」

英明がつばを飲み込んだ。

そして、遊月が静かに呟く。

「行くぞ。レッドアイズ。ドーハスーラ」

『二年ぶりだ。本気で行こう』

『フハハハハ！承知したぞ。我が主よ！』

遊月が一枚のカード……『超融合』のカードを掲げる。

膨大なエネルギーが発生し、ドーハスーラとレッドアイズ。そして、『浸食され始めている地面』が集まり始める。

遊月の身に纏って、一瞬で、霧が晴れた。

「……………」

その姿は、異常だ。

黒い髪は青い炎を巻き上げているかのような色に変わった。骨の装飾品をいくつも付けたような真つ黒のロングコートを身に纏っている。

背中には、巨大なレッドアイズの翼が二対六枚で出現し、ドーハスーラの胴体のような長い尻尾が存在する。

右手には『真紅眼の黒竜剣』を持ち、左手にはドーハスーラが持っていたような杖を握っている。

「な……何あれ」

「遊月様の全力ですよ。敵だったらと思うとゾツとしますけどね」

「でも、ロード・オブ・ザ・レッドの力でどうにもならないうえに、ドーハスーラでも解決できないとなれば、あの姿になる。あの姿にさせる人間は、何人かいるけど……正直、勝ち目が浮かばない」

驚く綾羽に対して、創輝と日夏が呆れたように声を漏らす。

「でも、あんなモンスター。私は知らないです」

「存在しませんよ。ただ、あの状態の遊月様の情報を正確に読み取ることが最近可能になりました」

「え、そうなんですか?」

「実際のデュエルには使えませんが、あくまでも能力……いえ、格の差を判断するためのカードデータなら、ありますよ」

「……見せてもらえますか?」

「こちらです」

香苗は創輝のデュエルディスクを覗きこむ。

綾羽がかなり気になっているようなので、英明もタブレットを見せる。

レッドアイズ
真紅眼の死霊龍皇ネクロ・バロール・ザ・ワールド

星12 闇属性 アンデット族 ATK4500 DFE350

0

融合・効果モンスター

「死霊王 ドーハスーラ」+「真紅眼の不屍竜」+「アンデットワール

ド」

このカードは、上記のカードを素材にした「超融合」による融合召喚でのみ特殊召喚することができる。このカードを融合召喚する際、フィールドゾーンに表側表示で存在する「アンデットワールド」は「超融合」の効果処理中のみモンスターカードとしても扱う。

このカード名の③④⑥の効果は1ターンに一度しか発動できず、このカードの②④の効果に対して「効果を受けない」及び「無効にならない」効果は適用されない。

①：フィールド上に表側表示で存在するこのカードは他のカードの効果を受けず、相手のカードの対象にならず、リリースできない。

②：このカードが表側表示で存在する限り、フィールドの表側表示モンスター及び墓地のモンスターは全てアンデット族になる。

③：1ターンに1度、このカード以外の自分または相手のフィールド・墓地のモンスター1体を対象として発動できる。エンドフェイズまで、このカードはそのモンスターと同じ効果を得て、同じ名前のモンスターとしても扱う。

④：このカード以外のモンスターの効果が発動した時に発動できる。そのカードの効果を無効にし、お互いのフィールド・墓地から、カード一枚を選んで除外する。

⑤：相手フィールドに存在するすべてのモンスターの攻撃力・守備力は、お互いのフィールド・墓地のモンスターの数×100ダウンする。

⑥：このカード以外のモンスターが戦闘で破壊された時に発動できる。自分または相手の墓地のモンスター1体を選び、召喚条件を無視して自分フィールドに特殊召喚する。

「……」

綾羽と香苗の内心としては、『なんだこれは』というのが正直な感想だった。

ラスボスの奥の手だって、こんなにひどくはない。

「ねえ、これって一体何？」

「創輝が言つてたけど、『格の差』だ」

その時、英明と綾羽を、何かのバリアのような膜が覆った。

「これは……」

「ドーラの効果だな。これで、アイツらも怖くないぜ」

英明が香苗を見ると、香苗はグッドサインを出してきた。

英明もグッドサインを返すと、ヴィジヤムの方を見る。

「あとは暴れるだけだ」

「うん」

「まあ、ヤバいのは遊月が引き受けるだろ。大量にいる雑魚は俺達で倒そうぜ」

そういうと、拳を構えて英明はヴィジヤム達の方に向かって走っていった。

綾羽も何かが納得できないような雰囲気になったが、とりあえず追及は後にするとして、槍を構えなおしてヴィジヤム達を倒しに行く。

いずれにせよ、効果が通用しないというのなら、ヴィジヤム達は単なる攻守ゼロのモンスターである。

一撃を叩きこめばそれで終わる話であり、決して苦勞することはない。

もちろん、ドーラが気にする必要はあるのだが、いずれもしつかりとステータスを確保しているので問題はない。

「他は任せても問題なさそうだな……まあ、未経験が二人しかいないし、経験者がその倍いるんだから気にしていなかったが、それはいいでしょう」

剣を杖を構えて、翼を広げて球体に接近する遊月。

すると、球体の中からクリムゾン・ノヴァが大量に出現する。

だが、その目はおびえている。

自らを抹殺するために向かって来ている絶対的な存在。

しかも、これが『デュエル中にデュエリストが使用するモンスター』だというのならまだ救いはあるが、デュエリスト本人であるため、どうしようもないのだ。

「……怖いかな？それとも恨めしいのかな？まあどっちでもいいさ。ただ、見苦しいのは嫌いだから決断は早くしろよ」

剣を真横に一閃する。

それだけで、大量にいたクリムゾン・ノヴァの半分以上が消滅する。ならばと、遠距離から遊月以外を光線で狙う。

しかし、それを遊月は杖を振るうことで波動を生み出し、簡単に消滅させてしまう。

「……」

あまりにも簡単に対処される。

だが、この瞬間、とある言葉を思いだす。

『デュエルでは使用できませんが』

そう言っていた創輝。

それが真実であるならば――。

「……ほう」

遊月は、集まって行くクリムゾン・ノヴァを見て息を漏らす。

悪霊たちが集合決闘形態『デモンズ・キューブ』に変化していく。

「なるほど、リアルファイトで勝てないと判断して、そっちを選んだか」

リアルファイトよりもデュエルの方が、格式は上だ。

なぜなら、双方の力はいくまでもデュエルモンスターの力の一端でしかないからである。

デュエルモンスターが存在しなければ、彼らが今行使している力は存在しない。

だからこそ、デュエルと言うものを無視できないのだ。

あくまでも、リアルファイトで決着がつくというのなら、そちらの方が手っ取り早いという話でしかない。

「いいだろう。そっちがその気なら、こっちもそれで相手をする」

デモンズ・キューブを一度形成すると、それを分解するのは困難だ。

デュエルをすることを選んだのだから、いきなりリアルファイトに切り替えるのは不可能である。

デモンズ・キューブが完全に形成されたのを見て、遊月も融合を解

除し、デュエルディスクを構える。

『お前みたいな奴がいるだなんて想定外だ。だが、デュエルなら負けない！』

「やってみろ。死後の世界の広さを教えてやる」

『「デュエル！」』

遊月 LP8000

DC LP8000

『僕たちの先攻。僕たちは永続魔法『方界法』を発動。その効果で、手札の『方界胤ヴィジヤム』を捨てて、一枚ドロウする』

やはりと言うか【方界】である。

『さらに、僕たちは『流星方界器デューザ』を召喚！』

流星方界器デューザ ATK1600 ☆4

『効果発動。デッキから『方界合神』を墓地に送る。カードを一枚セツトして、ターンエンドだ！』

『私のターン。ドロウ』

遊月はカードをドロウして、手札を見る。

『珍しいな……私は手札から、『アンデットワールド』を発動する』

広がり始める屍界。

フィールドと墓地のモンスターを全てアンデットに変更するカード。

そして、遊月の化身カードである。

『私は手札から『不知火の隠者』を通常召喚し、リリースすることで『ユニゾンビ』を特殊召喚。手札の『馬頭鬼』とデッキの『グローアップ・ブルーム』を墓地に送ることでレベルを二つ上げる』

不知火の隠者 ATK 500 ☆4

ユニゾンビ ATK1300 ☆3↓4↓5

「そして、墓地に送ったブルームの効果発動。除外することで、デッキからレベル5以上のアンデットを特殊召喚だ」

デッキから闇が溢れだす。

「終わりも始まりもない蛇の王よ。ウロボロス怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

死霊王 ドーハスーラ ATK2800 ☆8

出現するドーハスーラ。

しかし、少し疲弊している。

「大丈夫か？」

『……あの形態は少し疲れるからな』

ドーハスーラとしても、あの形態はかなりエネルギーを使うようだ。

とはいえ、である。

「ま、だからと言ってデュエルでは出て来てもらうぞ」

『分かっている』

遊月は手を掲げる。

「現れる。死界に満ちる未来回路」

サーキットが出現。

「召喚条件は、アンデット族二体。私は隠者とユニゾンビをリンクマーカーにセット。夜を統べる血族よ、月の光が惑わす屍界に降り立て。リンク召喚！リンク2 『ヴァンパイア・サッカー！』」

ヴァンパイア・サッカー ATK1600 LINK2

『サッカーが出てきたか……』

「バトルフェイズだ。ドーハスーラで、デューザを攻撃」

波動により一撃で消し飛ばすデューザ。

ただし、『方界法』の効果によってダメージはない。

『デューザがフィールドを離れたことで、墓地の『方界合神』の効果を発動。デッキから、『方界超獣バスター・ガンダイル』を特殊召喚！』
方界超獣バスター・ガンダイル ATK0 ☆4
超獣が出てきた。

が、合神の効果により特殊召喚されたことで、このターン破壊はできない。

そして、法によりダメージはない。

「メイン2だ。手札から『アドバンスドロー』を使い、ドーハスーラをリリースして二枚ドロ」

『ぬあああああ！』

悲鳴とともに消えるドーハスーラ。

……相当嫌がつているが、そもそも『アドバンスドロー』をデッキから抜かない遊月も遊月である。

「カードを二枚セット、ターンエンドだ」

『ぐっ……僕たちのターン。ドロー！』

「スタンバイフェイズだ。帰って来い。ドーハスーラ」

『……我が主の伏せカードは二枚か……いやな予感がするな』

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「さらに、ヴァンパイア・サツカーの効果で一枚ドロー」

『僕たちは『方界法』の効果で、『流星方界器デューザ』を捨てて一枚ドロー。さらに、『おろかな埋葬』を使って、三枚目のデューザを墓地に！』

何を狙っているのか一瞬わからなかった遊月。

『バトルフェイズだ。バスター・ガンダイルで、ヴァンパイア・サツカーを攻撃！』

自爆。特攻してきた。

『方界法の効果でダメージはない。そして、バスター・ガンダイルが相手によって破壊されて墓地に送られたことで効果発動。墓地のデューザ三体を特殊召喚し、さらに、デッキ・墓地から『方界』カードを一枚手札に加える』

「そういうことか。ドーハスーラの効果発動。バスター・ガンダイルの効果を無効にする」

『無駄だ！『無限泡影』を発動し、効果を無効にする！』

「チツ……」

デューザが出て来る。

流星方界器デューザ ATK1600 ☆4

流星方界器デューザ ATK1600 ☆4

流星方界器デューザ ATK1600 ☆4

『さらに、デューザ三体の効果発動。デッキから『方界合神』『方界業』『方界降世』を墓地に送り、デッキから『方界超帝インディオラ・デス・ポルト』を手札に加える。さらに、墓地の『方界業』を除外し、デッ

キから『暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ』を手札に加える』

インディオラ・デス・ボルトとクリムゾン・ノヴァが手札に加わり、合計手札は四枚。

『僕たちは手札から『方界超帝インディオラ・デス・ボルト』『方界波動』『方界法』を見せることで、特殊召喚！現れる、『暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ』！』

暗黒方界神クリムゾン・ノヴァ ATK3000 ☆10

「出てきたか……」

『さらに、フィールドの三体のデューザを墓地に送ることで、インディオラ・デス・ボルトを特殊召喚する。800ポイントのダメージを受けろ！』

方界超帝インディオラ・デス・ボルト ATK0↓2400 ☆4
遊月 LP8000↓7200

『僕たちはこれでターンエンド。クリムゾン・ノヴァの効果により、お互いに3000のダメージを受ける』

DC LP8000↓5000
遊月 LP7200↓4200

「チツ……さすがにバーンダメージはかなり入るな……だが、私は永続罫『闇の増産工場』を発動」

『……ん？』

ドーハスーラが遊月を見る。

「ドーハスーラを墓地に送り、一枚ドロー！」

『ほらやっぱりいやな予感が当たったああああ！』

消えて行くドーハスーラ。

「そして私のターンだ。ドロー。そして戻ってこい。ドーハスーラ！」

『……我、泣いていい？』

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「ヴァンパイア・サッカーの効果で一枚ドロー。そして、『闇の増産工場』の効果を使い、手札の『冥界の麗人イゾルデ』を墓地に送って一枚ドロー。そして、『冥界騎士トリスタン』を召喚してイゾルデを回収

し、このまま特殊召喚」

冥界騎士トリスタン ATK1800↓2100 ☆4

冥界の麗人イゾルデ ATK1000 ☆4

「イゾルデの効果を使い、トリスタンとイゾルデのレベルを8に変更。そしてオーバーレイ！現れるランク8『No. 22 不乱健』！」

No. 22 不乱健 ATK4500 ★8

『……攻撃力4500!』

いきなり現れる超大型モンスターに、DCはびっくり。

『だ、だが、『方界法』がある限り、方界モンスターの戦闘で僕にダメージはない!』

「そんな小手先の技が通用するか。永続罫『最終突撃命令』を発動。フィールドのすべての表側表示モンスターの表示形式は攻撃表示となる」

唯一守備表示だったドーハスーラが起き上がる。

死霊王 ドーハスーラ DFE2000↓ATK2800

「さらに、不乱健の効果発動。エクシーズ素材一つと手札一枚を使い、相手フィールドの表側表示のカード一枚の効果は無効にする!」

『なんだって!?!』

「ただし、この効果を使った後守備表示になる。だが、最終突撃命令の効果により、すぐに攻撃表示に戻る。それにチェインしてドーハスーラの効果を発動。インディオラ・デス・ボルトを除外!」

破壊されて墓地に送られた際に効果を発動するが、除外すれば意味はない。

「そして、不乱健の効果を処理、『方界法』の効果を無効にし、守備表示になった後攻撃表示に戻る」

不乱健は屈伸した。

『グッ……』

方界合神の効果を使うことはできる。

だが、方界合神による特殊召喚は手札・デッキからであり、デューザを全て墓地に送ったことでリクルートはできない。

そして……守備表示で出しても、即座に攻撃表示になる。

出せるのは全て攻撃力0の方界のみ。

さらに言えば、方界胤ヴィジヤムを並べたとしても、数で攻めてきた場合は無力だ。

「バトルフェイズ。不乱健でクリムゾン・ノヴァを粉碎！」

不乱健が拳を振りおろしてクリムゾン・ノヴァに拳を振りおろす。

DC LP5000↓3500

『く、クソオオオオ！』

「ヴァンパイア・サッカーとドーハスーラで、ダイレクトアタックだ！」

ヴァンパイア・サッカーが出したコウモリがキューブにかみついた後、ドーハスーラが波動を叩きこむ。

DC LP3500↓1900↓0

DCのライフがゼロになったことで、たまっていた悪霊瘴気が全て霧散する。

英明たちが倒していたヴィジヤムも、それに反応して消えていった。

「さてと……私たちの勝ちだ。帰るぞ。お前たち」

振り向いてそう言う遊月。

どうやら、レッドアイズの力を使っていないところを見ると、デューエルとしては全力を出したものではないらしい。

何とも言えないコンボをいくつか披露しているが。

それはともかく、遊月たちの勝ちである。

★

人間、『会う』ことはあっても『集まる』ことはほとんどない。

というわけなので、実際に集まるのなら、そのままオフ会である。

アムネシアにおける最強のVIP存在である遊月が案内する場所となればすごいものだ。

今回来たのは旅館である。

「でっか……なにこれ、本当に旅館なの？」

遊月がかかわっているとやうに、旅館ならそうでもないとい瞬考えた綾羽。

そんなことはなかった。

確かに、ホテルではないので縦はそうでもない。

だが、横は呆れるほど広がった。

「旅館だぞ」

即答して中に入る遊月。

高級感あふれるVIPルームに直行して、そのまま宴会である。

楽しいものである。

七人いて、女子は四名。

半分は落ち着いているが、半分は初心。

男子三人としてもほほえましい感じだ。

まあそれ以上に……。

「どおりやあああああ！」

「えいやあああああ！」

「そりゃ！負けませんよ。マスター！」

「お姉ちゃんくらえ！」

「はっはっは！うわ、危ない！」

「枕投げを主砲にのせてと、発射」

「バリアがあれば大丈夫ですね」

「ホッホッホ。たまにはこういう運動もいいものじゃな」

何故か枕投げ大会になった寝室では、浴衣姿の綾羽と香苗とルインとうららが枕を投げ合い、ライナーは回避して、グスタフが主砲で枕を射出し、部屋の隅でドーラとリーベがほほえましい目でそれを見ていた。

「今日は月が綺麗ですね」

『私か？』

「ムーン。張りあっても仕方ないよ」

『ジットミテイロ。ソレガコノバシヨノ『作法』トイウモノダ』

落ち着いた雰囲気バルコニーでほっとしている浴衣姿の月詠と日夏。

満月が綺麗であり、ムーンがなぜか張りあっており、メタイオンは

静かにたたずんでいる。

「ふんぬううううう！」

「負けるかああああ！」

そして宴会場。

状況に合わせたのか、青い炎の髪で赤い瞳を煌めかせる青年……レッドアイズと、赤々とした逆立てた髪が特徴の少年……レイジングが、腕相撲で張りあっていた。

「頑張れー」

「みずきはどっちを応援しているのだ。我はレイジングだが」

「……いや、ちよつと言ってみただけ」

「何い!?」

「隙あり！」

「ぐはあ！」

シスター姿から一点、浴衣姿のみずきが応援している様子だったので、デフォルメ状態のドーハスーラ（こちらも浴衣を着ている）が聞いてみたところ、みずきのあんまりな発言にレイジングの緊張が解けて、レッドアイズに負けた。

「……まっ、賑やかにならないわけないよな」

「精霊たちの頭のネジが飛んでるもんな。完全防音の『別の建物』を使っておいてよかったと思うぜ」

「私も、ここではあまりまったりできませんね。なかなかうるさくて……」

遊月と英明と創輝。

三人とも浴衣姿で、廊下を歩いていた。

することが無いのでプラプラしているだけである。

「ま、たまにはこんなふうに集まるのもいいよな」

「そうですね。私も楽しいですよ。まだあの二人が初々しいですか」

「遅くなる前に何回か集まるか」

そんなことを話していた。



そして、全員が大部屋で雑魚寝し始めたころ……。

「ふむふむ……たまにはエロ路線じゃなくて、わいわい騒いでいるっていうのもいいもんだね」

ブルームが持つカメラには、様々な写真が写っている。

『精霊も含めて、全員でテーブルを囲んで料理を食べている写真』

『初々しい女子たちとその精霊たちが、枕投げをしている写真』

『腕相撲でレッドアイズがレイジングにとどめをさした写真』

『落ち着いた雰囲気で肌が驚くほど綺麗な二人とその精霊が、満月を見上げている写真』

『廊下を歩いていた男子三名が、綾羽たちに混ざってUNOり始めた写真』

『全員が大部屋で雑魚寝している写真（時間ごとに遊月に抱きついている女子が違う）』

他にも様々な写真があったり、同じ部屋のものでも時間の違う写真があったりするが、彼にしては珍しく、『明確な煩惱目的の写真』がない。

楽しそうで、団欒としていて、なんだか家族のような、そんな騒がしくて暖かいモノ。

「良い思い出だね」

元マスを失ったマブダチからもらったカメラ。

何度か壊れているが、それでも直し続けて使っているものだ。

「これからも、いい思い出が写りますようにっ」と

カメラのメンテナンスをして、ブルームも布団の中に潜りこんだ。

第二十二話

訓練に熱が入るのはいいことだ。

実際、圧倒的な実力を持つ者の近くにいて、そしてその隣に立つことを目指そうとする場合、いつまでも成長し続ける必要がある。

遊月は優秀なトレーナーを電話一本で用意することも可能であり、男女関係なく、レベルを引き上げることが可能だ。

トレーニング中に矯正していると普段の仕草にも出て来るもので、強くなったことと言うのは周りからは分かるのだ。

そして、若いものが成長していく姿というものは、年寄りには眩しいものがある。

「おお、遊月様。いらつしやいましたか」

「……入学式にすら出ていなかったから、見るのは大体何年ぶりだろ……それにしても、かなり老けたな。創吾そうご」

「最後にお会いしたのはそこそこ前ですからな。遊月様とはタイムスケジュールが違うのですよ」

広いグラウンドと街並みを一望することが出来る『アムネシア理事長室』

そこで、遊月は初老の男性と話していた。

男性のオールバックにした黒髪は白髪交じりではあるが、高級なスーツを着て、背筋はしっかりと伸びており、愛嬌のある笑みを浮かべ、まだまだ現役と言う雰囲気醸し出している。

言いかえれば『良い年の取り方をした人』と言えるだろう。

こみなとそうご
小湊創吾。

遊月が在籍している『デュエルスクール・アムネシア』の理事長である。

高級そうなソファにお互い真正面に座っているが、街並みを一望できる窓が正面に見える場所に遊月が座つているところを見ると、格式は遊月が上のようである。

「最近、いろいろ起こっているようですね」

「私がかどうにかできる範囲で収まっているから何とかなっているが

な」

「アムネシアも、遊月様がいらっしやる限りは平和なものです。私も安心して後継者の育成ができるというもの。そろそろ育成が終盤でしてね」

「長女が私以上に腐った目をしていただぞ」

「フッフ、追い込みは入念にやっておく方がいいですからな」

そういつて、愛嬌のある笑みの中に黒いものが混じる創吾。

遊月はあえて追及しないことにした。

聞けばどういう笑顔なのか。その意味を答えるだろうが、遊月が追及するとしても野暮と言えるジャンルは存在するので。

その時、部屋のドアがノックされた。

「おや、黒江くろえだね。入ってきなさい」

ノックの音だけですべてが分かるわけではなく、ちゃんとカメラが付いていてそれを確認しただけだが、創吾は笑顔のままそういった。

「お父様。書類の整理が完了しました」

ドアが開いては言ってきたのは、一人の女性だ。

知的な印象があるブルーライトカットの黒縁眼鏡をかけた、長い桃色の髪が特徴。

かっちりした黒のスーツとフルレングスパンツで、胸はCくらい。

やや身長が低く童顔なので、外見的には大学生で通用しそうである。実際は三十路。

タブレットを左手で持っており、なかなか疲れたような雰囲気がある。

小湊黒江こみなとくろえ。

小湊家の長女であり、次期アムネシアの理事長になるための英才教育中の人である。

……父親とは年齢差が四十くらいあるが。

理事長室に入って来るのが珍しい遊月の存在に気が付いていないようなので、疲れているのは実際間違っていないだろう。

ちなみに、理事長室ともなればアポイントもしっかり取って訪れるものだが、遊月に関してはそんなものは必要ない。

電話も秘書を通じたものではなく直通である。

「はあ……やっと一段落付きました」

「苦労しているようだな」

「ええ、もう本当に……え？」

黒江は遊月の声を聞いて、驚いたように顔を上げた。

「ゆ、遊月様、いらっしやっていたのですか？」

「数分前からだ」

最も、今日は創吾に來客はいない日である。

実はそれなりに珍しいのだが、遊月が電話したのでコール一回で会うことにした。と言った状態だ。

書類整理で激務状態だった黒江だが、そんな掟破りなレベルで訪れる遊月のことを気にしていたら頭痛がするのである。まだまだ父親ほどなれていない。

「通りで事務室の雰囲気若干違うなと思いました」

「私が来ていると反応する人は一定数いるからな」

様々な権限を持つている遊月だが、何も人事権まで完全に掌握しているわけではない。

なので『一定数』と言ったが、それでも、アムネシアエリアで重役は狭き門だ。

中には遊月の『推薦』で嫌々ねじ込まれたものもいるが、遊月はそういう管理者とそれに直結する事務員の選定で人の不満は気にしない性質である。

「まだ片づけないと行けない書類がたくさんあるんですよ……」

「ふむ……」

遊月は黒江を見る。

そして、頭の中にある知り合いのスケジュールを思いだして、言った。

「私の家に来るか？」

「え、いいんですか？」

「たまには餡があっても良いだろう。初々しいのが二人いるから寄って行くといこ」

「おお……ありがとうございます……その間の私の仕事は……」

「私が仕上げておく」

「良いんですか!？」

「かまわない」

遊月は頷く。

「どうやら、飴を与える時はそれはそれなりに徹底するようだ。」

「ちなみに、遊月が仕上げると言った場合、引き継ぎ作業は必要ない。」

「どうせ遊月のやりたいようにやるからだ。」

それに、全てのシステムを作ったのは遊月であり、システムの変更点があればその都度確認している。

一段落付いた。と言っている以上、本人にも癖はあられると思われるが、その癖も遊月は把握しているので問題はない。

タブレットを預けると、そのまま黒江は遊月の家に直行するのだった。

……そして、踊るように黒江が部屋を出て言った後、遊月は思う。

「……あれで三十路か」

「一応、すでに結婚済みなのでいいのですが……なかなかお恥ずかしい限りです」

「なんだか見た目通り子供っぽい仕草で部屋から消えていった黒江に対して呟く遊月だったが、創吾の呟きに溜息を吐くのだった。」

★

「ふう……香苗ちゃんは今日はDGCは休みなの?」

「私の担当ではないですね」

遊月の家の地下にはフィットネスルームが存在する。

この前使用した傷を全て精霊力の減少に変更する部屋だが、あれは遊月の家に住んでいるからと言って自由に使えるわけではなく、制限がないのはあくまでも同伴の場合である。

もちろん、フィットネスルームも十分に広いし、ランニングコースも確保されている。

しかも、いたるところに自販機のようなものがあり、そこでは様々なスポーツ飲料がそろっている。

補充とゴミの回収は『スケープ・ゴースト』が担当だ。

「うーん！今日の分のトレーニングは終わりだね」

「私もです！」

なお、二人の格好だが……。

綾羽の格好はこの前と同じで、スポーツブラとホットパンツとス
ポーツシューズである。

どうやら、遊月の誘惑のためにしていたわけではなく、学校で指定
の運動着を着る時以外はこの格好で運動するようだ。あまり肌の露
出に対して抵抗がないようである。まあ、痴女か天然かと聞かれれば
後者だろうが。

香苗の格好はTシャツにハーフパンツで、言ってしまうえば『運動す
る子の格好としてもものすごく普通』である。

トレーニングは終わりのようで、二人ともシャワーを浴びて、その
ままアムネシアの制服に着替えた。

何処かに出かけるのだろうか。

さて、それはそれとして、である。

「……ねえ香苗ちゃん」

「なんですか？」

「あの人。だれ？」

綾羽が指差す先には、なんだかすごくポワポワした表情でこちらを
見ている女性だ。

童顔だがかつちりした知的な印象を持つファッションであり、綾羽
と香苗をすごく幸せそうな目で見ている。

遊月の家のセキュリティはすさまじいので、家に入ってきていると
ころを考えると部外者ではないようだが、初見であることに変わり
はない。

向こうも気が付いたのか、こちらにきた。

「フッフ、私の名前は小湊黒江だよ。よろしくね。綾羽ちゃんと香苗
ちゃん」

「小湊って……」

「そう……あのクソジ……理事長の娘だよ！」

一瞬本音が出ていたような気がした綾羽と香苗。
だが突っ込んで仕方がないと判断してスルー。

「そ、そうですか……」

「久しぶりに遊月様が仕事を代わってくれるうえに、家にながってもいいとのことだったので、来ちゃいました！とてもかわいい二人がいてお姉さんはうれしいです！」

まあ、もしもここにいるのが綾羽と香苗ではなく、月詠と日夏だったら空気が違うであろうことは間違いない。

「遊月君って、アムネシアの理事長の仕事とかできるんですか？」

「出来るよ。それにしても、遊月様に対して君付け……なるほど、そういう距離感というわけかあ」

懐かしむような雰囲気をつぶやく黒江。

なんだかとても哀愁が漂っている。

だが、なんだかとても子供を見るような目で見られていると思ったのか、香苗が口を開いた。

「あの……私たちもそれ相応に成長して来ていると思うんですけど……」

香苗がそんなことを呟く。

だが、黒江は大人っぽい笑みを浮かべる。

……いや、元が童顔なので浮かべきれしていないが。

「フッフ。あの人達のしごきを受けている私から言われてもらえば、君たちはまだまだかわいもんだよ……二人まとめて相手しても、十分なくらいにね」

「二なっ……」

少し不敵な笑みが混ざる黒江。

それに対して、二人は驚いた。

確かに、二人はまだ成長途中と言っているだろう。

だが、それでも遊月の背中を追いかけているし、様々な資料が保管されている図書室が遊月の家の地下にはあり、そこには入れるのでいろいろと知識も蓄えているのだ。

決して、弱いとは言われたくはない。

「フッフ、驚いてるみたいだね。なら、実際にやってみる？」

デュエルディスクを取り出す黒江。

「分かりました。弱くはないところを見せます！」

「私もです！」

というわけで、デュエルコートに移動する三人。

そして中に入ると……。

『あ、来た！』

『ピー！』

グローアップ・バルブと黒竜の雛がいた。

「あれま。これは珍しいですねえ」

黒江が笑顔で二匹に近づくと、二人の頭を撫でる。

『えへへ。撫でかたがマスターに似てる〜』

『ピー〜』

気持ちよさそうな様子の二人。

「え……あの、二人は一体……」

綾羽にはわからない。

『あ、そうだ』

バルブは近くの通気口のそばに行くと、叫んだ。

『父ちゃーん！桃色の髪のスーツの人と、綾羽さんと香苗さんがデュエルするみたいだよー！』

そう叫んだ。

すると、数秒後、ブルームが通気口から出てきた。

『よし、参上！お、黒江さん、お久しぶりです』

『お久しぶりですね。ブルームさん』

どうやらお互いに知った仲のようだ。

だが、聞き捨てならないことがあった。

綾羽が質問する。

「ねえ、ブルーム君。きつき、バルブ君が君のことお父さんって……」

『そうだね。あれ、僕とレッドアイズには子供がいたんだけど、知らなかった？』

「初耳です！」

香苗がそう叫ぶと同時に、二人は黒竜の雛の方を見る。

視線を向けられた雛は『ペイ?』と首をかしげた。

「……レッドアイズさんの息子なんですね」

『いや、ヒナは女の子だよ。バルブは男の子だけだね』

『僕は植物だからチ○コはついてないけどね!』

『バルブ。下品なこと言うのやめなさい』

どうやら躰がなっていないようだ。

まあ、親がこれなので期待するだけ無駄だろう。

「変わらず賑やかですね」

『黒江さんも変わらず……童顔ですね』

「それは言わないでくださいよ」

先ほど大人っぽい不敵な笑みを浮かべていたのに、遊月が関係する精霊に会った瞬間にこれである。

レッドアイズ、ドーハスーラに並んで、精霊として格が高い様子のブルーム。

当然、遊月のそばにいた時間は他の精霊と比べても圧倒的に長く、圧倒的な実力があるのだ。

「ひよつとして、ドーハスーラにも……」

『あいつは童貞』

ブルームが即答した。

『で、今回はどんな感じで……ああ、マスターから飴をもらったんだね』

「そんな感じですね。初々しい二人を見ると、ちよつとデュエルしたくなって」

『だからめちゃくちや下手な挑発してたんだね!』

『ペイ!』

「何故分かった!?!」

幼児精霊たちにはバレバレだったようだ。というかいつから見えていたのだろう。

黒江が綾羽と香苗を見ると、二人は白けた目をしていた。

「はうっ!?!」

初々しいものが恋しい三十路にこの視線はきつい。

『まあいいや、で、デュエルするんでしょ？ 僕らは部屋の隅で観戦してるよ』

『お姉ちゃんたち頑張れ〜！』

『ピィ〜！』

と言うわけで、精霊が部屋の隅まで移動した。

綾羽たちは向かい合うように立って、デュエルディスクを構える。

「さて、かかつてきなさい」

「いくよ。香苗ちゃん」

「はいー」

「『デュエル！』」

綾羽&香苗 LP8000

黒江 LP8000

「私の先攻ですー！」

香苗が前に出た。

……ちなみにタッグフォースルールである。

「私は手札から、『テラ・フォーミング』を発動して、デッキから『転回操車』を手札に加えて、発動しますー！」

デュエルコートが転回操車に変貌する。

「そして、手札から『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を妥協召喚ですー！」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト ATK0 ☆10

「転回操車の効果で、デッキから『無頼特急バトレイン』を、レベル10にして特殊召喚！」

無頼特急バトレイン ATK1800 ☆4↓10

「さらに、手札から『弾丸特急バレット・ライナー』と『重機貨列車デリックレイン』を特殊召喚ですー！」

弾丸特急バレット・ライナー ATK3000 ☆10

重機貨列車デリックレイン ATK1400 ☆10

「出てきてください。重機を呼び起こすサーキット！ 召喚条件は、機械族二体。私はバトレインとバレット・ライナーを、リンクマーカー

にセット！新たな設計図で、いざ連結！リンク召喚！リンク2『機関重連アンガー・ナツクル』！」

機関重連アンガー・ナツクル ATK1500 LINK2

「さらに、レベル10のナイト・エクスプレス・ナイトとデリックレーンでオーバーレイ！全てを守る盾を手に、いざ、出陣！エクシーズ召喚！ランク10『No. 81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドローラ』！」

No. 81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドローラ DFE4000

★10

『さて、デリックレーンを素材に私を出しましたか、堅実でいいことです』

先攻一ターン目としては悪くない。

まあそもそも、列車デッキは回らない場合、最低でもドローラを立てておくのが普通である。

「私は『アイアンドロー』を発動です。これで……カードを一枚セットして、ターンエンドです。バトレインの効果でデッキのナイト・エクスプレス・ナイトを。バレット・ライナーの効果で、墓地からバトレインを手札に加えます」

「なら、私のターンだね。ドロー！」

黒江がカードをドローする。

綾羽と香苗は、創輝が使っていた精霊カードを思いだす。

それを考えれば……。

「私は手札から、『DD魔導賢者ケプラー』を通常召喚！」

DD魔導賢者ケプラー ATK0 ☆1

考えられる選択肢は、【DD】が筆頭。

「ケプラーの効果で、デッキから『地獄門の契約書』を手札に加えるよ。そして、『地獄門の契約書』を発動！」

「させません！ドローの効果を使って、デリックレーンを墓地に送るとともに、自身を守ります。そして、デリックレーンの効果で、契約書を破壊します！」

「だよね」

ドーラの主砲が契約書をぶち割った。

「でも、まだだね。私は手札から、『DDスワラル・スライム』の効果発動。このカードと『DDラミア』を墓地に送り、融合召喚、『DDD烈火王テムジン』！」

DDD烈火王テムジン ATK2000 ☆6

「さらに、墓地に存在する『スワラル・スライム』を除外することで、手札から『DD魔導賢者コペルニクス』を特殊召喚！コペルニクスの効果で『DDネクロ・スライム』を墓地に送りながら、テムジンの効果でラミアを特殊召喚だよ」

DD魔導賢者コペルニクス ATK 0 ☆4

DDラミア ATK100 ☆1

「そして、私はテムジンとケプラーでリンク召喚。リンク2『DDD深淵王ビルガメス』！」

DDD深淵王ビルガメス ATK1800 LINK2

「ビルガメスの効果で、デッキからスケール6の『DDケルベロス』とスケール10の『DD魔導賢者ニユートン』でペンデュラムスケールをセッティングして、ダメージを受ける！」

黒江 LP8000↓7000

ケルベロスが出てきた。

綾羽と香苗の中では、大体アビス・ラグナロクが出てくると思っていたのだが……。

「でも、このタイミングで、手札から『DDD反骨王レオニダス』の効果が発動。特殊召喚して、受けたダメージ分、ライフが回復するよ」

DDD反骨王レオニダス ATK2600 ☆7

「ケルベロスのペンデュラム効果で、ラミアのレベルを4にして、攻撃力を400ポイントアップさせる」

DDラミア ATK100↓500 ☆1↓4

「そして、レベル4のコペルニクスとラミアでオーバーレイ！英雄よ。荒れ狂う波の中でその手を掲げ、降臨せよ！ランク4『DDD怒濤王シーザー』！」

DDD怒濤王シーザー ATK2400 ★4

「シーザーが入っているDDデッキ……初めて見ました」

「まあ、最近は制圧系が多いから仕方ないね。私は『RUM―アストラ
ル・フォース』を発動！ランク4のシーザーでオーバレイネット
ワークを再構築！荒波で手を掲げし英雄よ。試練を超えし手に入れ
た力を示せ！ランクアップ・エクシース・チェンジ！ランク6『DD
D怒涛大王エグゼクティブ・シーザー』！」

DDD怒涛大王エグゼクティブ・シーザー ATK2800 ★6

「エグゼクティブが先に出てきましたか……」

「あれはマズいかもね……」

香苗と綾羽が呟く。

だが、黒江はデュエルを続けた。

「私は墓地のネクロ・スライムの効果を発動し、それにチェーンするこ
とでエグゼクティブ・シーザーの効果を発動。これを無効にして破
壊。エグゼクティブ・シーザーとレオニダスを、ターン終了時まで1
800ポイント攻撃力アップ！」

DDD怒涛大王エグゼクティブ・シーザー ATK2800↓46
00

DDD反骨王レオニダス ATK2600↓4
200

「バトルフェイズに――」

「いえ、メインフェイズ時に、アンガー・ナツクルの効果が発動。手札
のバトレインを墓地に送ることで、墓地の『弾丸特急バレット・ライ
ナー』を守備表示で特殊召喚です！」

弾丸特急バレット・ライナー DFE0 ☆10

「なるほどね、なら、反骨王レオニダスでスペリオル・ドローを攻撃！」
粉碎された。

「さらに、エグゼクティブ・シーザーでアンガー・ナツクルを攻撃！」
綾羽&香苗 LP8000↓4900

「ぐ……ドローがいる状態で、ここまでもらうとは思ってなかったで
す」

「まあ、そんなもんだよ。メイン2に入るね。私はカードを一枚セツ

トして、ターンエンド！」

「バトルインの効果で、デリックレーンをデッキから手札に加えます」
「だよね。シーザーたちの攻撃力も元に戻るよ」

DDD怒涛大王エグゼクティブ・シーザー ATK4600↓2800

DDD反骨王レオニダス ATK4200↓2600

「私のターン。ドロロー！」

綾羽のターンだ。

なお、フィールドにはバレット・ライナーが残されているので、現在はヴァルハラを使えない。

とはいえ、アンガー・ナツクルの効果で特殊召喚されたバレット・ライナーの効果は無効化されているので、攻撃宣言時の糞みたいなデメリットは消えている訳だが。

(特殊召喚は、シーザーの効果で無効にされて破壊。一応バレット・ライナーで殴ればいい話か)

現在、黒江の手札はゼロ。

仮にセットカードがあのかードだったとしても、問題はない。

「私は『サイクロン』を発動。セットカードを破壊する！」

『戦乙女の契約書』だと思ったかな？残念、『連成する振動』だよ！ケルベロスを破壊して一枚ドロローだ！」

「ですが、これで問題はなくなりました。バレット・ライナーを攻撃表示に変えてバトルフェイズ！いけええええ！」

バレット・ライナーがエグゼクティブ・シーザーに突っ込んだ。

「ぐぬぬ……シーザーの効果で、『地獄門の契約書』を手札に加えるよ」

黒江 LP8000↓7800

「これで、邪魔はない。私は手札から『ヘカテリス』を捨てて、『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加える」

「でも、バレット・ライナーがいると特殊召喚できないよ？」

『ごめんね綾羽ちゃん』

ライナーが謝った。

「私は『アドバンスドロー』を発動！」

『君もかい！』

バレット・ライナーが消えていった。

そしてカードを二枚ドロロー。

なんとというか、『困った時にはアドバンスドロー』という風潮でもあるのだろうか。

……まあ、この三人よりも抜群に強い遊月がそうなのだから、影響を受けても仕方がないのだが。

ちなみに、綾羽は『最上級』が投入されたヴァルハラ、香苗は列車、月詠は時械神、日夏も何枚か最上級天使族が投入されており、何かと『アドバンスドロー』が投入圏内である。

……ちなみに香苗のデッキにも入っている。

「改めて、私はヴァルハラを発動。これにより、手札から『マスター・ヒュペリオン』を特殊召喚！」

マスター・ヒュペリオン ATK2700 ☆8

「効果により、墓地のヘカテリスを除外して、レオニダスを破壊する！」

「むう……仕方ないね」

ただ、もうすでにメインフェイズ2だ。

どうするつもりなのだろうか。

「私はカードを一枚セット、ターンエンドです」

「私のターン。ドロロー！」

黒江がカードをドロローする。

「ふうむ、なるほどね」

フィールドにはマスター・ヒュペリオンが一体。

そして、二人が伏せたセットカードが一枚ずつある。

『ねえねえ父ちゃん。あのお姉ちゃんたち強いね！』

『ピィ♪』

『まあ、これくらいはやるだろうね……ただ、そろそろギアが入ってきてたんじゃないかな？』

ブルームは、そう締めくくった。

「まずは『ナイト・ショット』を使って、香苗ちゃんが伏せたカード……多分『エクシーズ・リボーン』かな？それを破壊するよ」
「え……」

ナイト・ショットがカードを打ち抜く。

それは、確かに『エクシーズ・リボーン』だった。

「ど、どうして……」

「フッフ、私くらいになるとこれくらいはね。『地獄門の契約書』を発動して、アビス・ラグナロクを手札に。そしてセツティング」

ペンデュラム召喚の前に……。

「さらに、墓地からネクロ・スライムの効果を発動。このカードとテムジンを除外して融合召喚。『DDD烈火大王エグゼクティブ・テムジン』！」

DDD烈火大王エグゼクティブ・テムジン ATK2800 ☆8

「ペンデュラム召喚。エクストラデッキからレオニダスを出すよ」

反骨王レオニダス ATK2600 ☆7

「特殊召喚されたことにより、エグゼクティブ・テムジンの効果で、エグゼクティブ・シーザーを墓地から特殊召喚」

エグゼクティブ・シーザー ATK2800 ★6

「地獄門の契約書を墓地に送ることで、ラミアを特殊召喚して、レオニダスにチューニング。『DDD呪血王サイフリート』」

DDD呪血王サイフリート ATK2800 ☆8

「さて、攻撃力は十分。最後は雑に行こうか。『死者への供物』を使って、マスター・ヒュペリオンを破壊する」

「ぐ……」

「その伏せカード、発動する様子が全くないところを見ると『奇跡の光臨』だね？」

「そ……そんな……」

「二体のエグゼクティブでダイレクトアタック」

綾羽&香苗 LP4900↓2100↓0

簡単に削られるライフ。

いや、アビス・ラグナロクの効果を使っていないので、まだ回すこ

とはできていただろう。

そう考えると、相当手加減されていたようだ。

「フッフ。まあ、私くらいになればこれくらいはできるのさ！」

エツヘン！と子供っぽく胸を張る黒江。

『……三十路のおばさんが何言ってるの？』

「童顔だから大丈夫！」

さようですか。

そして、ブルームの三十路と言う単語を聞いて愕然とする綾羽と香苗。

「ほ、本当に三十歳なんですか？」

見た目は大学生で通りそうなので、そう思っても仕方がない。

「その通りだよ。君たちの倍は生きてるよ」

グッドサインを出している。

が……なんだが、どこかのタイミングで墓穴を掘ってしまった可能性が非常に高い。

どこか勢いでやっている感がすごくなるからだ。

ただ、その空気を完璧に把握しているのはブルームだけであり、話し始める三人に、幼児精霊も交じり始めるのだった。

幼児ゆえに許される特権として胸に抱きついたりしている。

そして、それをパシヤリととって保存するブルームも相変わらずである。

子供たちはどんなふうに育つのだろうか……。

第二十三話

デュエルをして、そしていろいろ絡んだ後、黒江は帰っていった。その時の目が『また仕事に戻るんだよなあ……』というものを語っていたので、また彼女は地獄を見るのだろう。

ただし、それは彼女が成長してどうにかするしかないのだ。

アムネシアの理事長の娘。

何をどう考えても、彼女の周りには、他人の逃げ場を潰すのがうまい人間が多すぎる。

ちなみに、ヒナとバルブはレッドアイズを見かけると走っていったので、事情を聞く相手はブルームになった。

「そういえば、バルブ君って『グローアップ・バルブ』だよな」

『そうだよ。正真正銘ね』

精霊の赤ん坊。

それはそれでいいでしょう。

世の中には自分たちが知らないことがたくさんある。

だが、一つ気になることがあった。

『グローアップ・バルブ』のカードって禁止カードになってるけど、大丈夫なの？」

そう、『黒竜の雛』はいいとしても、『グローアップ・バルブ』は禁止カードだ。

いても大丈夫なのか、刑務所が飛んできたりしないのか、そういう疑問はある。

『デュエルに混ざることにはできないよ。でも、だからと言って刑務所に入らなくちゃいけないことにはならないよ。別に罪を背負って生きていく訳じゃないしね。禁止が解除されればデッキに入ることが出来るし、精霊として特殊な能力を持つている場合、その存在を拘束するとメリットを自分から捨てるようなものだから』

要するに、『禁止カードの精霊だからと言っても、存在そのものを悪とみなすのは差別だ』ということだ。

精霊として成長することで特殊な能力を習得し、デュエル以外で活

躍する精霊というのはそれなりにいて、リアルファイトにおいて活躍する場合もかなりある。

「なるほどね……確かに、禁止カードの精霊だからって捕まえても仕方ないし……」

『まあそもそも、『禁止カード』と言う概念が、デュエルという環境の調整でしかないというだけの話だからと言うのが一つの意見かな』

言いかえるなら、『参加できない』ということと『不必要』は違うのである。

「いろいろ事情があるんですね」

『そうだね。まあでも、昔は投獄されてたみたいだよ。マスターがそのあたりの法律を変えたみたいだけどね』

「ええ!?!」

法律を変える。

一体どれほどの労力を必要とするのだろうか。

『すごかったよ。その頃は世界中で『禁止カードの精霊は捕獲して刑務所にぶち込むべきだ』って言う意見が一般的だったからね。マスターが法律を変えたことで、世界中にいる禁止カードの精霊が日本に集まってきて、それをマスターが保護したことで、一気に力が増したんだ』

当時の禁止カードの精霊たちからすれば遊月は救世主のような存在だ。

日本に集まってきて、遊月の元で保護される。

先ほども言ったように、デュエルには参加できないがそれ以外では活躍させることが可能。

なおかつ、『規制緩和』によって表に出られるようになった者も当然存在するので、それが影響して遊月の発言力も高まったようだ。

とはいえ、遊月は昔からフィクサーなので表社会に名前は残らないのだが。

「……あれ？私が生まれた時から、禁止カードの精霊って捕縛されないよね。遊月君って一体何歳なの？」

『ん？……フフフ。それは僕が語ることじゃないなあ』

ブルームはかなりいろいろなものを含んだような表情でそういった。

まだまだ秘密を抱えているらしい遊月。

その全てを知るには、綾羽たちはまた速い。

★

「……襲撃があつただと？」

遊月は日夏から電話で表情を変えた。

……目が腐っているところは変わらないが。

『襲撃があつたのは二か所。悪霊瘴気の収集施設と、金成直哉の墓』

「……理由が分からないな」

『ただ、その場に残っていた痕跡から、同一人物による犯行だと判断している』

「なおさら理解できなくなったな……まあいい、報告ご苦労」

『はい』

通話終了。

「……セキュリティのレベルが違いすぎるな。いや、低い方もそうそうに突破できるものじゃないんだが……」

ちなみにセキュリティレベルが高いのは金成直哉の墓の方である。

「セキュリティレベルを上げておくか」

遊月は『守る』ことと『助ける』ことと『救う』ことの三つの内、優先順位は『助ける』一択であり、他の二つもレベルは高水準だが、守ることは広範囲過ぎてすべてをまかなうのは不可能であり、そもそも助けることができなければ救うことは不可能なので、『助ける』と言う部分に重点をおいている。

だからこそ、セキュリティを突破してくるとなればそれ相応に何か知ら目的を感じるのだが、だからと言って情報が少なければどうしようもないうえに、そもそも裏で絶大な権力を握る遊月は誰かに不安そうにしている様子を見せるべきではない。

「直哉の墓を狙ったか……私のことを知らないようだな」

★ 獰猛な笑みを浮かべて、遊月はそういった。

「やれやれ、隊長は人使いが荒いなあ……」

英明はヤレヤレと言いたそうな表情でDホイールに乗っていた。表では『デュエルモンスタースターズ格言研究会』で、裏では悪霊の討伐を行い、そしてその真の姿は『綾羽ちゃん親衛隊』ファンクラブと、なんだかともエネルギーを必要としそうな場所だ。

「最近はず月と一緒にいて危険なことがほとんどないからな」

結果的に悪霊討伐にかり出されることになる。

それが悪いことではない。

『綾羽ちゃん親衛隊』ファンクラブの理念は、あくまでも『大東綾羽が笑顔で幸せに生きているところを見る』と言うことである。ノータッチである。綾羽がず月のそばにいることで、危険なこともなく生きているというのであれば、それに越したことはない。

「……ん？」

悪霊討伐をよくする英明。

彼にはなんとなく、悪霊の場所が分かるのだ。

「……何かいるのか」

Dホイールの方向を変えて、英明はそれを追った。

アムネシア周辺は、基本的に外周部に倉庫街が広がっている場合が多い。

上下ではなく左右に広がった時代の名残であり、現代では地下開発により倉庫が地下にある。

ものは壊すのにもコストがかかるものであり、再利用されることのないエリアとなっている。

「さて、このあたりなんだが……」

呟く英明だが、答えを返すものはいない。

ず月のそばにいるものとしては珍しく、精霊カードを所持していないのだ。

「……ん？」

英明は倉庫の角に目を向ける。

何か、瘴気のようなものがみえた。

「あれか」

Dホイールから降りて、デュエルディスクを外して左手に付ける
と、倉庫に向かって走る。

角に隠れて確認すると、二人の男が話している。

片方は白衣を着た軽薄そうな印象を持つ男。

もう片方は、襟の高いトレンチコートに、唾の広い帽子を被った高
身長の男性。

最初に口を開いたのはトレンチコートの男だ。

英明が倉庫の角から見えた悪霊瘴気は、軽薄そうな男が持っている
アタッシュケースに入っているようだ。

「襲撃は終わったのか？」

「もちろんですよん。収集施設と墓。必要なものは集めて、既に本部
に送りつけました」

そのやり取りを聞いて、英明は表情を変える。

(遊月が言っていた襲撃の話か)

収集施設はついこの前に入った悪霊瘴気を収集するための場所だ。

そして、金成直哉。

遊月の『初代相棒』が寝ているという墓である。

「仕事が速いな」

「ボスに認められたエリート隊員ですからねん。で、次の命令は来て
ますのん?」

「いや、まだ来ていない。解析に時間がかかっているようだ」

「収集施設の方とはもかく、墓はスカーレット・ノヴァがいて苦労しま
したよん。しかも、ノヴァには逃げられちゃって、こつてり絞られま
したねん」

英明は驚いた。

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン。

遊月が所有している精霊のなかでもかなり上位の精霊たちと同じ
レベルの『格』にいる精霊だ。

そんな精霊を相手にできる。

それが信じられなかった。

(だが、こつてり絞られたと言うわりに、そこまでへこんでいる様子は

ない……金成直哉の墓を襲撃したのに、スカーレット・ノヴァが目的じゃなかったのか？)

珍しい状況だ。

圧倒的な力を持つ精霊がそれ相応にいる遊月。

当然、その精霊を捕獲しようとするものもいる。

ちなみに、ドーハスーラは一度捕まったことがあるそうだが。

「……む、誰かいるようだな」

(あ、ヤベツ)

トレンチコートトレンチコートの男は英明の存在に気が付いたようだ。

「え、全然気が付きませんでしたよ」

「それはお前がまだ新米なだけだ」

英明はこの時点で、隠れても無駄だと判断した。

跳びでて、デュエルディスクを構える。

軽薄軽薄そうな男が笑みを浮かべる。

「へえ、こんなところに人が来るなんて思ってなかったよん。ひよつとして迷子かな？」

「智洋ともひろ。油断するな。アイツは不死原遊月の『今の相棒』だ」

「ほう、わかりましたよん」

二人もデュエルディスクを構える。

いずれもパワービジョン型のデュエルディスクだった。

そして、智洋ともひろと呼ばれた軽薄軽薄そうな男が、面白面白そうなることを思いついたとばかりに笑みを濃くする。

「ククク。これを使いましょうかねん」

智洋はアタッシュケースを開いた。

そして、その中に二本入っている円柱状のガラスケースをどちらもとりだして、片方をトレンチコートトレンチコートの男に渡す。

「悟サンさとらも必要でしょ。これ」

「……そうだな」

悟と呼ばれたトレンチコートトレンチコートの男と智洋は、円柱状のガラスケースをデュエルディスクデュエルディスクに接続する。

「クククク。面白いデュエルデュエルをしましょうかねん」

「我々の密談を見られたからには返すわけにはいかない。覚悟しろ」
「上等だ！やっつけてやるぜ！」

「デュエル！」

英明 LP8000

智洋 LP8000

悟 LP8000

(……ん?)

英明は疑問に思った。

なぜ、ライフが三人分表示されるのだろうか。と。

「私の先攻だ」

疑問に思っている間にも、悟がデュエルを始める。

「私は手札から、『ダイナレスラー・カポエラプトル』を通常召喚」

ダイナレスラー・カポエラプトル ATK1800 ☆4

「さらに、カードを二枚セットし、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロロー！」

英明もドロローする。

何が起こっているのかよくわからないが、デュエルであることに変わりはない。

「俺は手札から『増援』を発動し、デッキから『E・HERO ソリッドマン』を手札に加えて、召喚！手札から『V・HERO ヴァイオン』を特殊召喚だ！」

E・HERO ソリッドマン ATK1300 ☆4

V・HERO ヴァイオン ATK1000 ☆4

「ヴァイオンの効果で『E・HERO シャドー・ミスト』を墓地に送る」

英明は準備完了とばかりに表情を変えた。

「さあ、ヒーローショーの時間だ！手札から『マスク・チェンジ』を発動！対象は地属性のソリッドマンだ！」

ソリッドマンが仮面に手を当てる。

「変身召喚。レベル8『M・HERO ダイアン』！」

M・HERO ダイアン ATK2800 ☆8

「そして、ソリッドマンが魔法カードの効果で墓地に送られたことで、墓地のシャドー・ミストを特殊召喚だ。これにより、デッキから二枚目の『マスク・チェンジ』を手札に加える」

E・HERO シャドー・ミスト ATK1000 ☆4

「よし、バトルフェイズだ！まずはヴァイオンで……!?!」

英明のデュエルディスクに、ブザーとともに『Error』の文字が表示された。

「な、どうなってんだ？……いや、そもそも、宣言したはずなのにバトルフェイズに入っていない……」

何が起こっているのかわからない。

相手を見ると、智洋の方はニヤニヤしている。

この状況の意味を理解しているようだが、説明する気はないようだ。

「ヴァイオンの効果でソリッドマンを除外することで『置換融合』を手札に……俺はカードを二枚セットして、ターンエンドだ」

「ククク。僕のターンだよん。ドロー！」

次は智洋のターンだ。

だが、このタイミングで悟が宣言する。

「私は『エネミー・コントローラー』を発動しよう。カポエラプトルを守備表示に変更し、カポエラプトルの効果を使い、デッキから二枚目のカポエラプトルを特殊召喚だ」

ダイナレスラー・カポエラプトル ATK1800↓DFE0

ダイナレスラー・カポエラプトル DFE0

「さて、僕のターンの続きだ。僕は手札から、『レディ・デバツカー』を通常召喚だよん！」

レディ・デバツカー ATK1700 ☆4

「効果により、デッキから『マイクロ・コーダー』を手札に加えるねん。そして現れる。未知なる次元のサーキット！」

アローヘッドが出現。

「僕はフィールドのレディ・デバツカーと、手札の『マイクロ・コーダー』をリンクマーカーにセット、リンク召喚！リンク2『コード・

トーカー！」

コード・トーカー ATK1300 LINK2

「マイクロ・コーダーの効果でデッキから『サイバネット・コンフリクト』を手札に、そして現れる。未知なる次元のサーキット！僕はフィールドのコード・トーカーと、手札の『コード・ラジエーター』をリンクマーカーのセット、リンク召喚！『デコード・トーカー！』
現れるリンク3モンスター。

攻撃力上昇に加えて、無効効果も持っているのです、それ相応に汎用性が高く、最近は専用強化カードも登場したことで強くなっている。

デコード・トーカー ATK2300↓3300 LINK3

カポエラプトルがリンク先にすることで攻撃力が上昇している。

「さらに、コード・ラジエーターの効果により、ダイアンの攻撃力を0にするよん！」

M・HERO ダイアン ATK2800↓0

「チツ……」

「ま、これだけじゃないけどねん」

智洋の手札は、サーチを繰り返したことで、まだコンフリクトを含めて五枚。

サイバース族ならば、まだまだ展開できるだろう。

「手札の『デフコンバード』は、サイバースを捨てることで特殊召喚できる。『ドット・スケーパー』を捨てることで特殊召喚し、墓地に送られたドット・スケーパーは特殊召喚できる！」

デフコンバード ATK100

ドット・スケーパー ATK 0

「モンスターが並んだか……」

来るとすれば、リンク4。

最近出てきたリンク4の大型サイバースがいたはず。

あとでX・ドラゴンにつなげる時に有利になるカードである。

「ククク……現れる。未知なる次元のサーキット！」

智洋が手を掲げる。

「召喚条件は……サイバース族二体！」

「何だと!？」

「僕はデフコンバードとドット・スケーパーの二体をリンクマーカーにセット、リンク召喚! 『フレーム・アドミニスター!』」

フレーム・アドミニスター ATK1200 LINK2

「ば……バカな……」

「さてと、永続効果を処理しておこうか」

智洋が指を鳴らすと、攻撃力がそれぞれ上がっていく。

デコード・トーカー ATK3300↓3800↓4600

フレーム・アドミニスター ATK1200↓2000

「な……何が起こってるんだ……」

「おまえの目は節穴だねん」

召喚演出を終えたフレーム・アドミニスターがフィールドに降りてくる。

その場所は……。

「か……カポエラプトルの上?」

カポエラプトルの上に薄い透明の板が出現し、その上にフレーム・アドミニスターが立っている。

「まさか」

英明は自分のデュエルディスクを操作して、普段している『サーチカード選択画面』を、『フィールド上のカード一斉表示』に変更する。「な、なんだこれは……」

デュエルフィールドは普通、線を引いて区切ったようなものである。

だが、今英明のデュエルディスクに表示されているデュエルフィールドは、『キューブ』で区切られていた。

そして、フレーム・アドミニスターは、カポエラプトルの『上』

言いかえれば、『二段目』のデュエルフィールドに存在している。

「気が付いたみたいだねん。そう、これが僕たちのデュエル……『次元拡張デュエル』だよん!」

「次元……拡張?」

「そう。このフィールドでは、フィールドは『多重構造』になる」

「い、意味が分からねえ……」

眩きながらも英明は観察する。

エクストラモンスターゾーンが二つであることに変わりはない。

片方にはダイアンがいて、もう片方にはデコード・トーカーがいる。デコード・トーカーは現在、カポエラプトル二体と、フレイム・アドミニスターの三体がリンク先にいる状態であり、さらにフレイム・アドミニスターの効果を受けていることで、今のような攻撃力になっているのだろう。

というより、メインモンスターゾーンは確かに『キューブ』のような感じのだが、エクストラモンスターゾーンは、一段目、二段目のデュエルフィールドを貫く『柱』のような形だ。

「……なるほど、なんとなく分かって来た」

「ククク。ここまで見せたらわかる部分も多いだろうねん。ならばバトルフェイズだ！デコード・トーカーでダイアンを攻撃！」

デコード・トーカーに攻撃宣言をする智洋。

そして……彼が付けているデュエルディスクのガラスケースから黒い液体が噴出し、デコード・トーカーを纏った。

すると、デコード・トーカーからは悪霊瘴気が漏れ始める。

「(悪霊を……この場で作った!?!……いや、今は置いておくか) 罨カード『星遺物からの目醒め』を発動。俺は、フィールドのダイアンとシャドー・ミストでリンク召喚を行う！」

二体がアローヘッドに飛び込む。

「英雄は今混じりて、驚異の爆走者となる。リンク召喚！リンク2

『X・HERO ワンダー・ドライバー！』」

X・HERO ワンダー・ドライバー ATK1900 LINK

2

「チツ、かわしたか」

「シャドー・ミストの効果で、『E・HERO オネステイ・ネオス』を手札に加える」

「そう来たか……なら、デコード・トーカーでヴァイオンを……」

「まだまだ！ヒーローショーの時間だぜ！『マスク・チェンジ』を発動し、

闇属性のヴァイオンで変身召喚！『M・HERO 闇鬼』

M・HERO 闇鬼 ATK2800 ☆8

「な……クソ」

「ワンダー・ドライバーの効果で、マスク・チェンジをセットする！」
「チツ、だが、2500アップさせても、まだワンダー・ドライバーよりもデコード・トーカーの方が上だ。やれ！デコード・トーカー！」
「オネステイ・ネオスは使わない！」

英明 LP8000↓5300

「僕はカードを一枚セットして、ターンエンド」

伏せたカードは確実にコンフリクトだろう。

「俺のターン。ドロロー！」

「スタンバイフェイズ。カポエラプトルの効果発動だ」

ダイナレスラー・カポエラプトル DFE0

「構わない。まずは手札から『フォーム・チェンジ』だ！対象は闇属性の闇鬼！」4↓3

「通すわけじゃないよん！『サイバネット・コンフリクト』を発動だ！除外して、次のターン終了時まで同名カードの発動を——」

「ライフを半分払って『レッド・リブート』を手札から発動！サイバネット・コンフリクトを無効にする！」3↓2

英明 LP5300↓2650

「バカな……『サイバネット・リグレーション』をセットするよん」

「そしてフォーム・チェンジだ！闇鬼を水属性の『M・HERO アシッド』に変身！」

M・HERO アシッド ATK2800 ☆8

「魔法・罫を全て破壊して、相手モンスター全ての攻撃力を300下げろ！」

「な……」

デコード・トーカー ATK4600↓4300

フレ임・アドミニスター ATK2000↓1700

ついでに、悟が伏せていた『次元幽閉』も破壊された。

『『死者蘇生』を使って墓地のシャドー・ミストを特殊召喚して、デッ

キから『フォーム・チェンジ』を手札に加える。さらに、『置換融合』を発動。シャドー・ミストとアシッド、HEROと水属性で融合召喚。『E・HERO アブソルトZero!』

E・HERO アブソルトZero ATK2500 ☆8

『置換融合』を除外し、ダイアンをエクストラデッキに戻して一枚ドロ。そして『フォーム・チェンジ』を発動だ。水属性のアブソルトZeroを变身! 『M・HERO 光牙』!

M・HERO 光牙 ATK2500 ☆8

「そして、Zeroの効果で、モンスターを全て破壊する!」

「くそがあああ!」

カポエラプトル三体、デコード・トーカー、フレイム・アドミニスター。

全て消え去った。

「そしてバトルフェイズ! 光牙で智洋。お前にダイレクトアタックだ!」

「ぐうう……」

智洋 LP8000↓5500

「ターンエンド!」

「私のターンだ。ドロー」

「く……悟。どうにかしろ! このままだと、僕は——」

「なるほど。流石にフィールドが別って訳か。次のターン。俺がお前にダイレクトアタック出来るのは確実みたいだな!」

「ぐっ……」

智洋は表情をゆがませる。

本来のバトルロイヤルルールであれば、悟の次のターンは智洋かもしれない。

だが、今回のこのデュエル。どうやら『バトルロイヤルルール』ではなく『タッグデュエルの延長ルール』のようだ。

リンク先が拡張させることでデコード・トーカーの攻撃力を爆上げする作戦だったようで、それは成功しているが、HEROが持つ爆発力に及ばなかったということだろう。

「私は『ダイナレスラー・コエロフィシラット』を特殊召喚し、さらに、『ダイナレスラー・エスクリマメンチ』をリリースなしで召喚。二体でシンクロ召喚を行う。現れる。『ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット』！」

ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット ATK3000 ☆8

「効果発動。光牙を破壊する！」

「なら、光牙の効果発動だ。墓地からZeroを除外することで、ターン終了時まで攻撃力を下げる！」

ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット ATK3000↓500

「く……ダイレクトアタックだ」

「屁でもないぜ！」

ギガ・スピノサバットに悪霊瘴気がまとわりつくが、とても弱弱しい。

英明 LP2650↓2150

「……ターンエンドだ」

ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット ATK500↓3000

「よし、ダイナレスラー・ギガ・スピノサバットがいれば、他のモンスターに攻撃できない。これで僕は……」

「俺のターン。ドロロー！『ミラクル・フュージョン』を発動し、アシッドと光牙を除外して融合召喚！『C・HERO カオス』！」

C・HERO カオス ATK3000 ☆9

「カオスは、フリーチェーンでモンスターの効果を無効にできる。ギガ・スピノサバットの効果は無効だ！」

「な……」

「そしてバトルフェイズ！カオスで智洋にダイレクトアタック！ついでにオネスティ・ネオスだ！」

C・HERO カオス ATK3000↓5500

智洋 LP5500↓0

智洋は吹っ飛んで気絶した。

「カードを一枚セットして、ターンエンド！」

C・HERO カオス ATK5500↓3000

「私のターンだ。ドロー。まずはギガ・スピノサバットの効果で、カオスを破壊！」

『神の通告』を発動だ！」

英明 LP2150↓650

「ぐ……私は『ダイナレスラー・システゴ』を召喚し、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！『E・HERO エアーマン』を召喚して、オネスティ・ネオスをサーチ。まずはカオスでシステゴを攻撃！」

悟 LP8000↓6900

「そして、エアーマンでダイレクトアタック！」

悟 LP6900↓5100

「ぐっ……」

「ターンエンドだ」

「私のターン。ドロー！……『ダイナレスラー・カパプテラ』を召喚」

ダイナレスラー・カパプテラ ATK1600 ☆3

「そして効果発動。カオスを墓地に送る」

「当然、それは無効だ！」

表情をゆがめる悟。

だが、サレンダーはしないようだ。

あるいはできない事情があるのか……。

「……ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー。エアーマンで攻撃して、カオスで攻撃するときにオネスティ・ネオスの効果を発動。これで終わりだ！」

悟 LP5100↓4900↓0

カオスの攻撃で尽きるライフ。

しかし次の瞬間、悟たちを膨大な悪霊瘴気が覆った。

「あ……」

瘴気ははれると、既に二人はいなくなっていた。

「……どうなってんだ一体」

聞きたいことはいろいろあったのだが、逃げられては仕方がない。とりあえず、遊月に報告しておくことにした英明である。

第二十四話

「……思ったより情報が盛りだくさんだな」

「結果的に逃げられちゃったけどな」

「お前が勝てる相手だと分かっただけで十分だ」

「……どういう意味なんだそれ」

アムネシアの屋上。

悪霊の探索中に発見した二人組に関して、遊月は英明からいろいろ聞いていた。

情報の共有は重要である。

『多重構造ファイル』『悪霊の生成』『墓と収集施設の襲撃』……か。なかなかスケールが大きい話だ」

「まあ、あれだな。『多重構造ファイル』っていうのは、あくまでもプログラミングの問題だってわかるけどよ。悪霊って作れるものなのか?」

「……ドーハスーラがその気になれば、『精霊』を『悪霊』にすることは難しいことじゃない。だが、『精霊ですらないカード』を『悪霊』にする技術は、ドーハスーラでも持っていない」

「それだけすごい技術ってことか?」

「いや、やり方が分からないってだけで、多分できないわけじゃないだろうな」

言いかえるなら『発想力』の問題である。

脳味噌のないドーハスーラには酷な話だ。

「墓と収集施設を狙った理由は分からねえけど、『本部に送りつけた』って言ってたから、どちらも何かの目的のために必要で、同じか近い部署ってことになるのか?」

「だろうな。別の部署だったら取り扱いが難しくなるから、そいつらの空気とは辻褄が合わなくなる」

一つの組織の中であつたとしても、一枚岩というわけにはいかない。

それが組織と言うものである。

そのため、ここまで物質の移動が速いとなれば、必然的にそうなる。「まだ情報が少ないってことか」

「結果的にそうなるな。情報を収集することはもちろんだが、だからと言って、やみくもに発見しようとしても見つからないだろう」

座して待つのも一興だが、敵の最終目的が自分ではない限り、これに意味はない。

「で、どうするんだ？ 収集施設に関してはこれから情報を集めるしかねえし、デュエルに関してはそれ相応の戦術をデッキに組み込むしかねえだろ。だが、あの墓地への襲撃は……」

「英明。ひとつ言っておく、私は確かに結果はそれ相応に重視するが、まだ結論に出す時ではないと考えているよ」

「……そっか、そもそも俺と遊月じや時間の感覚が違うか」
「最後には取り戻せばいい。それを可能とする力も時間も、私にはある」

遊月はそういって、フツと笑った。

「それにしても、新しいルールか……」

遊月は英明を見る。

「……なんだよ」

「いや、急にそんな状態になったにしては、それなりに楽そうだったみたいだからな。強くなったと思っただけだ。私と会って二年。成長しているようで何よりだ」

「……そりゃ忘れられないさ。あんなことを言っただけだぜ？」

思いだしたくないことはいろいろある。

だが、乗り越えなければならぬこともある。

英明もまた、そんな試練を乗り越えた一人だ。

だからこそ、彼は遊月の『相棒』なのである。

★

二年前の話だ。

『マスター。かつての相棒の化身カードを見だして、一体どうしたんだ？』

十四歳であるかどうかはともかく、アムネシアに関しては高校から

の編入組ゆえに中等部二年生ですらない遊月。

レッドアイズに言われるまで、彼は自分が『イージー・チューニング』と『ボンディング―D20』のカードをポーッと見ていることに気が付いていなかった。

「……まあ、何となくだ」

二枚のカードを内ポケットに入れる遊月。

彼は今、重役が着ているような高級スーツを着ていた。

「遊月様の相棒の方々の化身カードですか。二枚だけではなかったと記憶していますが……」

運転手の創輝が呟く。

「ああ、まだ家においてあるが、初代と二代目は何時も持ってるんだ」「そうですか……とところで、アムネシアで大規模なデュエルイベントがあるようで、その会議に出席していたとのことですが……」

「私もそろそろ通うことになるからな」

「そろそろ……といっても二年後ですよね」

「私からすればそろそろだ」

「そうですね……」

タイムスケジュールが普通の人間とは異なる遊月。

長期的な目線で考えればなおさらである。

「どうやら国の方が動いてるみたいだからな。大規模なデュエルイベントの会場に、私がかかわるアムネシアを選んできたのはほとぼりが冷めたころにあるが、動いている予算からしてかなりのものだ」

「そのための会議ですか……アイディアル・タワーで行うところを見ると、私が予想しているより予算が多いようですね」

「ああ。普通に運営するだけでは不必要な額が動いてる。最近、国の方にいろいろ突っ込んでないから影響力が薄いんだよな……」

影響力が薄いとはいうが『ゼロ』とは言わない遊月。

「……そろそろ、一回くらい寄っておくか」

「アムネシアにまっすぐ向かいましょうか?」

「そうしてくれ」

「畏まりました」

創輝はそう言うと、マイク付きのインカムを耳に付けて操作し始める。

「……あ、父さん。これから遊月様を連れてそちらに行きますので……え、たまには姉さんの仕事を手伝ったらどうかですって？ 冗談でしょ。姉さんがあまりにも激務過ぎて、精霊のホワイテストがダークネスに変わったといっていましたからね。それはともかく、これから向かいますよ」

そういつて通話を終了させた。

「……相変わらずだな」

「姉さんの周りには逃げ場を潰すのがうまい人が多いですからね。これくらいは当然でしょう」

そういつて苦笑している創輝。

「どうやら、自分はうまく逃げる事が出来る才能があったことに感謝している様子である。」

原因が誰とは遊月は言わないが。

すぐにアムネシアに付いた。

「創輝、適当に車庫で待っている。ここに長居はしない。校舎をちよつと自分で見て回ってくる」

「畏まりました」

遊月は正門で降りると、そのままアムネシアの敷地内に入っていく。

アムネシアは遊月が建設にかかわった場所なので、どこがどのようになっているのかは大体わかるのだが、それでも多くの人間がいるので若干違いが出てくる。

「まあ、大きく変わるようなものじゃないか。第一、何かあったら連絡が来るだろうし」

騒いでいる生徒もそれ相応にいるが、最も多いのはデュエルしている生徒だ。

切磋琢磨している人が多いようで安心である。

まあ、中には走り回っている人もいるようで……。

「英明君！……ちこちこち——ぶっ！」

遊月に激突する者もいるのだ。

激突した女子生徒はそのまましりもちをついた。

「いたたた……あ、すみません！」

「いや、問題ない」

実際のところ問題はない。

(……元気な生徒だな)

遊月はそう思った。

自分からはもう消えてしまった若さである。

「臯月^{さつき}。何やってんだよ……」

「うるさーい！英明君が遅いの！」

追いかけてきたオレンジ色の髪の少年が溜息を吐いた。

遊月にぶつかった少女に振り回されているのがよくわかる。

腰まで伸びた水色の髪に、好奇心で満ち溢れた純粋な瞳。

活発な本人にあっていないのかにあっていないのか、自己主張の激しい大きな胸。

動きの一つ一つが大きいので揺れるのだが、まああれだ。本人が気に入っている様子はない。

「すみません。幼馴染が失礼しました」

「いや、気にしていないから構わない」

遊月は、なんだか男子生徒のその背中から謝りなれているものを感じた。

「よし、なら何も問題はないね！……ところで、なんだか私たちと同じくらいの年齢に見えるけど、スーツ着てるね。この学校の生徒じゃないの？なんだか目が腐ってるし」

遊月は『思ったことを全部言うんだな』と感じた。

良い。悪いの問題ではない。

自分が持っている権力がアレなので、周りにそういう人間が少なかつただけだ。

「まあいっか！」

(……いいのかよ……)

遊月まで振り回され始めた。

「私は漆野^{うるしのぎつき}皐月だよ！で、お兄さんの名前は？」

「……不死原遊月だ」

「ふむふむ……初耳だねー！」

そりやそうだろうよ初対面なんだし。

「……あ、俺は仮澤英明って言います」

「ああ……苦労してるんだな」

「ええ、まあ」

体力が回復する暇がなさそうだ。

「なるほど、遊月君だね。暇なの？」

「まあ、暇といえば暇だが……」

「ふむふむ……ならデュエルしよう！」

皐月がデュエルディスクを起動する。

……遊月は脳の処理が追いつかなくなってきた。

「……ん？ああ、デュエルだな」

なんか成り行きでそうだったが、別にデュエルすることそのものが悪いわけではない。

遊月だって、スーツ姿だがデュエルディスクはつけている。

「よーし、やるぞおおおー！」

「まあ、ちよつとだけ死後の世界を見せてやるか」

すでに元気が失われているのか、歯切れがよくない遊月。

だが、デュエルはデュエルだ（確信）。

「デュエル！」

遊月 LP8000

皐月 LP8000

「む。私の先攻か」

遊月のデュエルディスクにターンランプがついた。

「ドローはできないが、ドローフェイズとスタンバイフェイズは存在する。ということ『手札断殺』を発動し、お互いに二枚、手札交換だ」

「おりよ!?!」

変な反応をしながらもお互いに手札交換。

「そして墓地から『屍界のバンシー』を除外、『アンデットワールド』を発動」

屍界が広がり始める。

「なるほど、アンデットデッキだね」

「スタンバイフェイズだ」

墓地から闇があふれ出す。

「終わりも始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

『ふむ……これはまた元気な娘だな』

ドーハスーラとしては何かまぶしいものを感じるようだ。

というより……あそこまで純粋な瞳は見たことがないようである。

「私は手札から、『不知火の隠者』を召喚してリリース、『ユニゾンビ』を特殊召喚し、デッキから『馬頭鬼』を墓地に落とすことで隠者を特殊召喚」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3↓4

不知火の隠者 ATK 500 ☆4

「なるほど、アンデット族デッキだけど、汎用型だね！」

「そういうことだ。あらわれろ。屍界に満ちる未来回路」

サーキットが出現。

「召喚条件は、アンデット族二体。私は隠者とユニゾンビをリンクマーカーにセット。夜を続ける血族よ、月の光が惑わす屍界に降り立て。リンク召喚！リンク2『ヴァンパイア・サツカー』！」

ヴァンパイア・サツカー ATK1600 LINK2

「ふむむ……む？ドーハスーラはこのままだと復活しないよ？」

「『アドバンスドロー』を使う」

『ふむ、仕方がないな』

このころは嫌悪感は少ないようである。

普通に消えて二枚ドロロー。

「カードを二枚セットしてターンエンドだ」

「私のターン。ドロロー！」

勢いよくカードをドロローする皐月。

「スタンバイフェイズだ。帰ってこい。ドーハスーラ」

『了解した』

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「サツカーの効果で一枚ドロローだ」

「この布陣は残すとやばそうだね！私は手札から『融合』を発動！」

「ほう」

「私が融合するのは、『沼地の魔王』と『E・HERO スパークマ

ン』！」

「何!?!」

融合代理モンスターとスパークマン。

となれば……。

「融合召喚！『E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン』

！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン ATK25

00↓2800 ☆8

「……一気にこいつが出てくるとはな」

「バトルフェイズだ！シャイニング・フレア・ウイングマンで、ヴァン

パイア・サツカーを攻撃！」

「チツ……」

遊月 LP8000↓6800

「さらに！攻撃力分のダメージを受けてもらうよ！」

遊月 LP6800↓5200

「よし、これでターンエンドだよ！」

『闇の増産工場』を発動。ドーハスーラをリリースして一枚ドロ

ーだ

『あ、パターン入ったな……』

理解が早いドーハスーラ。

「そして私のターンだ。ドロロー。そして戻ってこい。ドーハスーラ」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「なんか……ひどいね！」

「自覚はしている」

遊月はドロローしたカードを見る。

「ほう、お前か」

「む？何かいいカードだったの？」

「あまり手札にこないカードだったただけだ。増産工場の効果でドーハスーラを墓地に送って一枚ドロロー」

『……』

ドーハスーラは何も言わずに消えた。

「さらに、『手札抹殺』を使って手札交換だ」

「わかったー！」

遊月は五枚捨てて五枚ドロロー。

皐月は二枚捨てて二枚ドロロー。

「手札のブレイズマンが墓地に送られたから、シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃力アップするよー！」

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン ATK28
00↓3100

「あれま、それを握ってたのか。まあいい。そろそろ私のデツキがやりたいことがそろったから動き出すとしよう。手札から『デューテリオン』を捨てることで、デツキから『ボンディング―D20』を手札に加える」

「んなっ!？」

「そして、手札抹殺で墓地に送った『馬頭鬼』を除外、アンデットワールドの効果でアンデット族になっている『デューテリオン』を特殊召喚し、モンスター効果で二体目の『デューテリオン』を墓地から特殊召喚」

デューテリオン ATK2000 ☆5

デューテリオン ATK2000 ☆5

「そして『ボンディング―D20』を発動。手札の『オキシゲドン』とフィールドのデューテリオン二体をリリース。デツキから『ウォーター・ドラゴン―クラスター』を特殊召喚！」

ウォーター・ドラゴン―クラスター ATK2800 ☆10

「そしてそのモンスター効果により、相手モンスターの攻撃力は0になり、フィールドで効果を発動できない」

E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン ATK3100↓0

「えっ！攻撃力0!?!」

「バトルフェイズ。ウォーター・ドラゴン―クラスターで、シャイニング・フレア・ウィングマンを攻撃」

「うわあああ!」

皐月 LP8000↓5200

「むぐぐ。だけど、まだ大丈夫!」

「ウォーター・ドラゴン―クラスターの効果発動、このモンスターをリリースし、デッキから『ウォーター・ドラゴン』を二体、守備表示で特殊召喚。墓地のボンディング―D20がこれに反応して手札に加わる」

ウォーター・ドラゴン DFE2600 ☆8

ウォーター・ドラゴン DFE2600 ☆8

「おっ!でも守備表示なら……!」

「永続罫。『最終突撃命令』を発動。ウォーター・ドラゴン二体が攻撃表示になる」

ウォーター・ドラゴン DFE2600↓ATK2800

ウォーター・ドラゴン DFE2600↓ATK2800

「そんない!」

ドーハスーラもそうだが、意外と守備表示で出てきたりするモンスターがそこそこ多い遊月のデッキ。

もちろん、『馬頭鬼』のように『もともと攻撃表示でも特殊召喚できる』モンスターはいるが、近年は『守備表示で高ステータスモンスターを出す』ことで調節されていることもあるので、こういったカードがあるとい気に攻勢に出ることができる。

「二体のウォーター・ドラゴンでダイレクトアタックだ」

「うぎゃああああ!」

ウォーター・ドラゴンがブレスを放出する。

皐月 LP5200↓2400↓0

(防御札を握っていなかったのか。まあ、こんなこともある……のか)
あつさり終わった気がする遊月。

だが、皐月の表情を見る限り、あまり悲観している様子はない。
(あえて実力を隠そうとしている人間の表情と似ているな。まあ、私には関係のないことだ)

事情があるのならそれはそれで構わない。

「いたた、アンデットデツキに『ウォーター・ドラゴン』が入るなんて思わなかったよ」

「名称指定で、サーチ・リクルートするうえでアンデットが無関係なら大体組み込めるぞ。事故率は上がるからネタにしかならんが」

「じゃあネタデツキなの？」

「さあ、それはどうだろうな」

フツツとほほ笑む遊月。

「ふむふむなるほど、私もいろいろ考えてみると面白いかもね！」

HEROってそんなごちゃごちゃできるだろうか。

できなくはなさそうだが。

「そうと決まれば、英明君。さつそく研究だよ！」

「え、ちよつ、うああああああ！」

皐月は言うが早いか、英明の首根っこをつかんでそのまま遊月の視界から消えた。

その場に残された遊月としては何も言えない。

「……嵐のようなやつだな」

遊月は何を言えばいいのかわからず、とりあえず溜息を吐いてから再び歩き始めた。

『ムフフ、胸がよく揺れているなあ』

ブルームがカメラを見ながらにやにやしていた。

『ブルーム、何をしているんだ』

そんなブルームに、レッドアイズが話しかけていた。

『揺れる胸があればカメラを向けないわけにはいかないからね』
『……』

『しかも、ミニスカートでよくはしゃぐ子だね。もうちよつとで中が見えそうだったのに……』

『はあ……少しは自重しろよ』

『脳みそが腐ったアンデットに自重とは……ジョークかな？』

『どうなつてもしらんぞ』

まあ、こんなブルームも、二年後にはウィリアム・テルに震えるよ
うなやつになる。

このころはまだ、自重は無いようだった。

第二十五話

「英明君！私はHEROデツキの新しい可能性に気が付いた！」
「へえ」

相変わらず動きが大きく活発な様子の臯月と、なんだかおどおどしている様子の英明。

「レベル4が多いでしょ？」

「確かに多いな」

英明は『そういえばランク4って汎用性高いからなあ』と考えた。

『同胞の絆』が無理なく投入できるんだよ！」

「……」

今更か。と英明は思ったのだが、なんだかとてもすごいものを発見したように言う臯月に何も言えない。

「ライフコストは重いけど、まあそこは『魔力節約術』とかを使えば問題ないんだよ！で、ライフコストを踏み倒せるんだから『ヒーローアライブ』を入れられるでしょ？だったら『超越融合』とかも入るって思っただんだよ！」

話だけを聞けば『アライブHERO』の『ロマン特化』である。

そしてロマン特化ゆえに、『魔力節約術』がなかったら悲惨である。

「それでね。デツキを組んできたよ！」

「あ、作っただ……」

行動力があるというか、エネルギーの塊というか。

その活力をいったいどこから捻出しているのだろうか。

「今日の実技ではこれを使ってあんなことやこんなことをしてやるぜ！」

「……そうか」

「もう、元気ないね。幸せ逃げるよ！」

「……」

英明はぐったりした。

自分の分の元気をなぜか臯月が使っているような気さえしてくる。

「まあいつか。それじゃあ学校にGO！」

「うああああー！」

また襟首つかんで暴走する皐月。

そしてそれに巻き込まれる英明。

ここしばらく続く日常だ。

★

「フフフ……負けました！」

「だろうね」

アライブHEROが軸。しかも『魔力儉約術』が投入されており、しかもこの性格である。

おそらく魔法・罫が軸なのだ。

「いろいろ考えたんだよ。ライフ回復カードを入れて、『魔力儉約術』と『エンシエント・リーフ』による疑似『強欲な壺』コンボとか」
「……それ、『魔力儉約術』がなかったら悲惨だよね」

「大惨事だったよ。自分でライフをゴリゴリ削っていくスタイルだからねー！」

『呪眼』かよ。と思った英明は間違いではないはずだ。

「そういえば、イベントがあるみたいだね」

「あ、うん。なんか国が主導になってるって聞いたけど……」

「ということは……すごいことになるんだね！」

何もわかっていない人でもこんなこと言わない。

「そういえば英明君。悪霊が出たみたいだね。DGCの情報があつたよー！」

「え、そうだったの？」

「せっかくだから調べないといけないんだよ！これは義務だよ！」

そんな義務はありません。

「というわけで行くよー！」

「うわあああああー！」

またまた英明の襟首をつかんで走り出す皐月。

いったいどこからそのエネルギーが捻出されているのだろうか。

ちなみに、授業であつてもあまり変わらない。

ただし、ちよつと授業がつまらなくなると爆睡しだすし、いい授業

をしているときは目を爛々を輝かせて参加するので、『臯月が起きている場合、先生が優秀』という変な習慣が出来上がっている。

とはいえ、ほとんどの場合は起きているので、遊月が主導して集めた教師が優秀なのだということがわかる。

ちなみに、悪霊瘴気の収集装置があるため、アムネシアは悪霊が出現しやすい。

なので、明確に安全対策をする必要がある。

遊月がDGCの制服を着てまで臲負するのはそういう理由である。

まあ、中には組織的ではなく、民間の中にも悪霊を討伐するチームは存在するわけだが。

英明たちも、その民間の討伐員ということになるのだ。

すでに現場では、『バハムート・シャーク』が暴れていた。

「到着！ さあ英明君。頑張ってね！」

「殺す気かよ……」

英明は肩で息をしながら、デュエルディスクに『マスク・チェンジ』と『フォーム・チェンジ』のカードを入れてベルトに接続する。

そして、『M・HERO ブラスト』のカードを入れた。

『マスク・チェンジ』を意味する『MC』と表示されたボタンを押す。

『マスク・チェンジ・ブラスト』

英明を風がまとって、ブラストの姿になった。

「うひよおおおおお！ かつこいいー！」

「そりやどうも」

「どうせなら『変身！』くらい言おうよ」

「……無理」

「英明君は相変わらずヘタレだねえ」

思ったことを全部言う臯月。

おどおどしている英明にはよく刺さるようだ。

「まあとにかく、悪霊討伐だよ！」

「わかった。行ってくる」

いたたまれなくなっただろうか。英明はブラストの姿でバハムート・シャークに突撃する。

バハムート・シャークは英明に気が付いたようで、その口から水流を放出する。

英明はそれを回避して、そのまま突撃を再開。

拳に風を乗せて、それをバハムート・シャークにたたきつけた。

『ギャオオオ！』

それ相応に効いているようだ。

しかし……。

「後ろー！」

臯月が叫んだので後ろを見ると、破滅のアシッド・ゴーレムが英明に向かって拳を振り上げていた。

あわてて回避しようとすると、足元に何かが巻き付いている。

見ると、餅カエルの舌が巻き付いていた。

(やばっ)

英明の背中に嫌な汗が流れる。

「んーもうー仕方ないなあー！」

臯月のそんな声が聞こえたと思ったら、アシッド・ゴーレムが吹っ飛んでいた。

見ると、臯月が背中に『オネスト』の翼を出現させて、アシッド・ゴーレムを蹴り飛ばしていた。

ミニスカートをはいたままそんなことをすればどうなるのかは一目瞭然であり……。

(あ、白)

(○)が三つあるが、一人は英明、一人はバハムート・シャーク、一人はブルームである。

パシャっという音が小さく聞こえた気がした。

「おりゃー！」

そして近くにいた餅カエルを踏みつぶす。

餅カエルは大きめのカエルの上に小さなカエルが乗っかっているが、大きい方のカエルの視線は真上だった。

みんなの心は同じである。これが男のSAGAである。子供の中でもたまたまにマセた奴いるけど。

アシッド・ゴーレムと餅カエルはそのまま消滅している。
おそらくあの世でアシッド・ゴーレムだけ血涙を流すのだろう。
パンツ見たかった。と。閻魔が怒りそうだが。

「英明君もさっさと距離をとるー!」

なんと仮面を驚つかみして、オネストのような翼をきらめかせて距離をとった。

英明からすれば拷問である。

正直、首が取れそう。

「ちよ、イダダダダー!」

もちろん悲鳴が出た。

一応、バハムート・シャークから距離は取れたが、一人だけもうすぐ死にそうである。

「もう、だらしないなあ」

いったい誰のせいだと思っっているのか。

「さて、バハシャ君。ここからは私が相手になるよ!」

こぶしを構える皐月。

とはいえバハムート・シャークも、オネストの翼を展開しているやつを相手に正面から殴りかかることはしない。

(ぱ、パンツウウウウウウ)

どんだけ衝撃的だったんだお前は。

だが、冷静に(?) カードを五枚出現させる。

「む、こうなるとデュエルで片づけるしかないね」

皐月はオネストの翼を収めると、デュエルディスクを構える。
シャツフルされたデッキから、カードを五枚引いた。

「『デュエル!』」

皐月 LP8000

BS LP8000

『俺の先攻。手札から『レスキューラビット』を召喚!』

レスキューラビット ATK100 ☆4

出てきたウサギ。

『そして効果発動。現れる『レインボー・フィッシュ』二体!』

レインボー・フィッシュ ATK1800 ☆4
レインボー・フィッシュ ATK1800 ☆4

『そしてレベル4のこの二体でオーバーレイ!』

「あれ、もうバハシャダすの?」

『違うわ!現れる、リンク4』No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク!』

No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク ATK2600 ★

4

「むむむ……ムム?」

わかっていないのは分かった。

『さらに手札から、『ジエネレーション・フォース』を発動。エクシーズモンスターがいるため、デッキから『エクシーズ』と名のついたカードを手札に加える』

「この状況で使えるカードってあったっけ?」

『貴様。このカードを知らんのか?俺は『エクシーズ・リモーラ』を手札に加える』

「……あれってなんだっけ?」

水属性エクシーズデッキを相手にする場合、このカードを警戒しないのは少々まずい。

『そしてエクシーズ・リモーラを特殊召喚。このカードは、自分フィールドのエクシーズ素材二つを使うことで特殊召喚できる!』

エクシーズ・リモーラ ATK800 ☆4

『さらに、この効果で特殊召喚した場合、墓地の魚族・レベル4を守備表示で特殊召喚できる。現れるレインボー・フィッシュ!』

レインボー・フィッシュ DFE800 ☆4

レインボー・フィッシュ DFE800 ☆4

「ギョギョー!」

何言ってるんだお前。

『そして、スパイダーシャークとリモーラをリンクマーカーにセット、リンク召喚『マスター・ボーイ!』』

マスター・ボーイ ATK1400↓1900 LINK2

『さらに、レインボー・フィツシユ二体で再度オーバーレイ！現れる俺の分身『バハムート・シャーク』！』

バハムート・シャーク ATK2600↓3100 ★4

「こ、このためか！」

『バハムート・シャークを見ればこれくらいの想定はしてほしいものだ。効果発動。現れる『餅カエル』！』

餅カエル ATK2200↓2700 ★2

再度出現するカエル。

その視線がなんだか妙なのだが、まあ彼も男なのだということだ。

「ムムム……確か無効効果があったね」

無効にしてセットできるぞ！

『俺はこれでターンエンドだ』

「私のターン。ドロー！よし、まずは『粘糸壊獣クモグス』をプレゼント・フォー・ユー！」

カエルは消えて蜘蛛になった。

粘糸壊獣クモグス ATK2400 ☆7

「さーて行くよ！私は『魔力儉約術』を発動！」

「……え？」

英明がいつの間にか復活し、そして発動したカードに目を丸くした。

ちなみに、英明の変身は解除されている。

解除に追い込まれたわけではないと信じたい。

「そして発動。『ヒーローアライブ』！出てきて、『E・HERO エアーマン』！」

E・HERO エアーマン ATK1800 ☆4

「これによって、デッキから『E・HERO ソリッドマン』をサーチ。

そして召喚！手札から『V・HERO ヴァイオン』を特殊召喚だよ！」

E・HERO ソリッドマン ATK1300 ☆4

V・HERO ヴァイオン ATK1000 ☆4

「これによって、デッキから『E・HERO シャドー・ミスト』を墓

地に送って、その効果で『E・HERO バブルマン』をサーチ！ヴァイオンの効果でシャドミスを除外して『置換融合』をサーチ。カードを三枚セット、手札一枚になったバブルマンを特殊召喚！」

E・HERO バブルマン ATK800 ☆4

「ここから全速前進だああああ！まずはエアーマンとヴァイオンをリンクマーカーにセット、『X・HERO ワンダー・ドライバー』」

X・HERO ワンダー・ドライバー ATK1900 RINK

2

「そしてセットしておいた『置換融合』を発動。ソリッドマンとバブルマンで融合召喚！『E・HERO ガイア』！」

E・HERO ガイア ATK2200 ☆6

「チェーン1にワンダー・ドライバー、チェーン2でソリッドマン。チェーン3でガイア。対象はクモグスだよ！」

糸壊獣クモグス ATK2400↓1200

E・HEROガイア ATK2200↓3400

「ソリッドマンの効果でヴァイオンを特殊召喚。そして、『置換融合』をセット！」

V・HERO ヴァイオン DFE1200 ☆4

「さらに、ヴァイオンの効果、墓地のソリッドマンを除外して二枚目の『置換融合』を手札に加えるよ！」

『何?!』

「知らないの？ヴァイオンは墓地落としは名称ターナー1があるけど、融合サーチの方にはついてないんだぜ！」

その語尾が『ぜ!』になるのはいったいなんだ。

「まだまだ！伏せていた『融合識別』を使って、エクストラデッキのガイアを見せてヴァイオンをガイア化！さらに『超越融合』を発動！」

「……」
英明絶句。

「ヴァイオンとガイアで、二体目のガイアを融合召喚！効果対象はバムート・シャーク！」

E・HEROガイア ATK2200↓3750 ☆6

バハムート・シャーク ATK3100↓1550

「さらに、墓地の『超越融合』の効果で、墓地のガイアとヴァイオンを効果無効、攻守0で特殊召喚！」

E・HERO ガイア ATK0 ☆6

V・HERO ヴァイオン ATK0 ☆4

「蘇生したガイアとワンダー・ドライバーでリンク召喚。『X・HERO ドレットド・バスター』！」

X・HERO ドレットドバスター ATK2500 LINK3

「攻撃力アップだよ！」

X・HERO ドレットドバスター ATK2500↓2900

E・HERO ガイア ATK3750↓4150

「いくぞおおおお！伏せておいた『ミラクル・フュージョン』を発動だあああ！」

発動されるミラクル・フュージョン。

それを遠くから見ていたブルームは、感じた。

(あのミラクル・フュージョン、化身カードだ！)

驚いている間にも、デュエルは進む。

「フィールドのヴァイオンと、墓地のワンダー・ドライバーで融合召喚

！『E・HERO The シャイニング』！」

E・HERO The シャイニング ATK2600 ☆8

「さらに、墓地の『置換融合』の効果でガイアを戻して一枚ドロ、墓地のHEROが減ったから、200ずつ減るけど、そのかわり、シャイニングは除外されているE・HERO一体につき300上がるよ！」

X・HERO ドレットドバスター ATK2900↓2700

E・HERO ガイア ATK4150↓3950

E・HERO The シャイニング ATK2600↓2800↓3

400

『な……………、これは……………』

「バトルフェイズ！まずはガイアで、クモグスを攻撃！」

BS LP8000↓5250

「そしてドレッド・バスターで、バハムート・シャークを攻撃！」

BS LP5250↓4100

「シャイニングで、マスター・ボーイを攻撃！そして発動『E・HERO オネステイ・ネオス』！」

種類が増えたことでドレッド・バスターの効果が適用されて100
あがり、さらにオネステイ・ネオスの効果で2500上昇。

E・HEROTH シャイニング ATK3400↓3500↓6
000

『馬鹿な……この状況で……ジャストキルだと……』

BS LP4100↓0

消滅していくバハムート・シャーク。

とはいえまあ、最後にいいものが見れた悪霊は多くないので、彼は
幸運である。たぶん。

「よし、英明君。帰るぞおおお！」

「うおおあああー！」

ほっとするまもなく、英明の襟首をつかんで走り出す皐月。

やはり彼女は、エネルギーの塊である。

★

「……まだまだ運動したりないね！」

で、なんだかんだ言って英明を学生寮に放り込んだ皐月。

自分一人でここから出歩くようだ。

ただどうでもいいが、芝生の公園で叫ばないほうがいい。マナー的
な話で。

「……で、何か用？」

皐月は近くの木を見る。

「……なんでわかったの？」

ブルームは正直にひよこつと顔を出した。

当然カメラは隠している。

「勘だよー！」

女の勘がいいのはフィクションの中だけで勘弁してほしいものだ
とブルームは思う。

「で、何か用かな?」

笑顔でしゃがんでブルームに話しかける皐月。

(あ、黒……はき替えたのか)

小さなブルームは普段からローアングルである。

「君が持つてる『ミラクル・フュージョン』のカードが気になってね」

「あ、これ?」

デュエルディスクに入れていたカードを取り出す皐月。

「うん。そのカードだよ」

「あく。これね。お母さんの形見のカードなんだ」

ブルームは、皐月の母親が『インカーネイション・シフト・デュエリスト』……『ISD』なのだと判断した。

「あ、ごめんね。つらいこと聞いて」

「ううん。今では頼りになる人がいるから大丈夫!」

「……そうなの?」

振り回していたところからしか見ていない。

「いつも一緒にいる男がね、頼りになるんだよ」

「そうには見えないけどなあ……」

当然、ブルームは英明が使っていた『マスク・チェンジ』が化身カードであることは推測している。

M・HEROの精霊を味方にしていないのにあんな使い方をすることとはできない。

「アムネシアのデュエルのレベルがちよつと高くてナイーブになってるだけだから、もうちよつと強くなればまた頼りになるから」

「そうなんだ……そういえば、あの羽、どうなってるの?」

「この羽かな?」

皐月は数秒間だけオネストの翼を出した。

「うん」

「お父さんがオネストの精霊なんだよ」

「へえ」

要するに、皐月は人間と精霊のハーフということだ。

珍しいと思うが、ブルームは疑ったりしない。自分のマスターがそ

うなのだから。

「でも、精霊としては短命の人だったから、お母さんの近くで寝てるよ」

「短命……ね」

あつけらかんとしている様子の皐月。

幼くして両親がいない人間を含め、何かしら事情や問題を抱えている生徒がアムネシアには一定数いる。

そんな学校の運営にかかわる遊月の精霊をやっていると、そういう人間はよく見る。

自分から話す人はあまりいないが。

ただ、皐月は『隠すようなことではない』と考えているようだ。

「……ん？あ、マズイ！マスターがいる！」

ブルームが首(?)を振ると、その視線の先には遊月が。

公園の近くを歩くことはあまりないはずだが、どうやらいるようだ。

「ど、どうしたの？」

「今日はいろいろノルマがある日なんだ。でも全然やってない！」

あわてるブルーム。

周辺は芝生が広がるだけで、ベンチや木など、隠れられそうなものはない。

「や、ヤバ——」

ブルームがそれを認識するより早く……。

皐月が姿勢を女の子座りに変更し、なんとブルームをミニスカートの中に押し込んだ。

「うお、ヤバイヤバイヤバイヤバイ！」

「静かに！芝生なんだから大丈夫でしょ！」

小声で叫ぶ皐月。

もちろんそういう問題ではない。

しかし、ブルームが急に静かになった。

皐月は安心。

で、遊月が通りかかった。

「……皐月か。何をしているんだ？芝生の上でそんな座り方をして」
「えーとね……探し物があつたんだよ！」

無理がある。

が、何も状況を知らない人からすると、なんだかそんな気もしてくるのが皐月の不思議なところである。

「手伝おうか？」

「いいよいいよ。ダイジョーブダイジョーブ！」

とても大丈夫には見えない。

「……まあ、そういうことならいいが、最近悪霊が多いから気を付けろよ」

「わかったー！」

遊月はそのまま去っていった。

すぐに見えなくなったので、皐月はミニスカートの中からブルームを引っっこ抜く。

ブルームは……花血を出しまくっていた。

「うわあああ！大丈夫!?!」

これが大丈夫に見えるのなら皐月の目は節穴である。

「だ、大丈夫だよ」

「い、家に連れて行った方がいいかな？」

「大変うれしい申し出だけど、ちよつと今回しなくちやいけないノルマは欠かせない奴なので、お先に僕は失礼するよ」

フラフラになりながらブルームは去っていく。

「……私も早く帰った方がいいかな」

初めて、皐月の顔に不穏な影が宿ったが、すぐに表情を戻すと、彼女も帰っていった。

★

「あー……ヤバかったね」

ブルームはまだ頭の花から血を流していた。

そしてその手には小型カメラが。

煩惱の塊である。

が、もうひとつ事情があるようだ。

「全く、ハーフなら別にいいんだけど……人間と『悪霊』のハーフなんて久しぶりに聞いたなあ」

臯月が言った『精霊』として短命』だが、ブルームの経験上、精霊は例外なく長命である。

短命なのは『悪霊』だ。

「性行為をすると、母親はもちろん、子供にも宿るからなあ。体内で悪霊瘴気を作りながら、我慢して、あんな元気にはしゃいでいる子なんて始めてみたよ」

基本的に、悪霊瘴気は人体と相性が悪すぎる。

もちろん、生物はもともと様々な微生物を体内に宿して共存関係にあるわけだが、悪霊瘴気は拒絶反応しか生まない。

嘔吐や激痛は普通である。

周りに全くそれを悟られない人間は、ほぼいない。

さらに言えば、生成された悪霊瘴気は通常とは質が異なるため、体内でのみ循環する。

言い換えれば外に漏れないのだ。

「ま、どうにかなってよかったよ」

悪霊瘴気の治療において、レッドアイズは体内、ドーハスーラは体外が得意。

ただしどちらも、『手で通常は触れないようなあやふやな状態』であり、レッドアイズやドーハスーラはそう言った部分が専門だ。

ブルームの場合は、『固定・定着している実物』に触れることで操作する能力に長けている。

レッドアイズであっても、自分の体内にある『固定・定着化』までされた悪霊瘴気を取り除くのは自力では不可能であり、体外が得意なドーハスーラであっても、固定・定着化されていたら操作できない。だが、ブルームはどれだけ侵食していようと、取り除くことができる。

オマケに、体内を弄る必要があるのに、本人に気付かれないように操作することさえできるレベルだ。

ただし、それは言い換えればあやふやな状態で広範囲までいくと管

轄外になるということにもなるのだが。

いずれにせよ、アムネシアを実質支配している遊月が所有する精霊、その『序列三位』の実力は甘くない。

「しかし、思ったより力を使ったね。こんなに体がボロボロになったのは久しぶりだ」

それ相応に力を使って手術をしたブルーム。

彼に取っても難易度は高かったのか、かなり体が壊れている。

まだ血が流れているのはそういう理由だ。

「……元気だったし、服を掴むことはあつても抱きつくことはなかった。まあこんなものを抱えていたらそうなるだろうね」

だが、それと同時に思う。

「これでスキんシップや性行為がノーリスクになったわけだが、普段あんなに元気なのに自重材料がなくなるとどうなるんだろうか……まあいいや」

ブルームは黒いキューブをとりだす。

そこからは悪霊瘴気が漏れ出していた。

キューブを握りしめると、目を光らせる。

それだけでキューブは砕け散った。

「世界の権威が集まるような専門の医療機関で、成功率一割未満の手術を受けるのが普通だったか。それでもアイツら、手術費に八千万は請求して来るけど……まあ、桃源郷の駄賃くらいにはなったかな？さて、ノルマをこなさない」と

ブルームは少し休憩すると、ノルマをこなすために歩き始めるのだった。

第二十六話

「英明くー！ー！ーん！」

「うおああああああ！」

全速力で英明に抱きつく皐月。

なんと、それに耐えきる英明。

どうにかして受け止めたのはいいが、急なことで驚いた。

「ぎゅううううー！」

そして放そうとしない皐月。

周りから嫉妬に満ちた視線が向けられている。

中学二年生にはつらい。

年の割に。皐月の胸はでかいのだ。

「い、いったいどうしたんだ皐月」

今まで、自分を引っ張りまわしていた。

パーソナルスペースは狭かったが、だからと言って密着することはなかった。

急激な変化に戸惑うばかりである。

「ウフフ……」

とともうれしそうな表情で頬ずりする皐月。

本人にとつて、どこか『解禁された』という雰囲気があった。

「英明君。私ね」

「うん」

「今までよりもっと元気になったよ！」

「……」

英明は死んだような目になった。

そのまま砂になって消えていきそうなくらい絶望していた。

皐月は気にしないが。

★

実際、スキンシップは激しい。

教室に入ってもなんだかそれが続く。

もちろん、皐月が英明と一緒にいるのはクラスメイトなら知ってい

ることだし、『あの元気に振り回されたらヤバいことになるんだろうな』ということとはわかりきっている。

アムネシアには体育の授業があり、そこでは運動量の多いスポーツが優先される。

運動不足解消のために体を動かさせるのが目的なのだ。デュエリストの体は頑丈だが。

で、皐月はバスケットボールで全力でメテオジャムを叩き込みまくった。あきれ果てるほどのセンスと持久力である。

……目の端から何やら光の線のようなものを幻視した生徒も中にはいたが、当然ながらそんなものは実際には出ていない。

「英明君。今日は午後から大規模なイベントがあるということを知っているかな！」

「朝礼で先生が言ってた」

「私は聞いていなかったよ！」

グラウンドで叫ぶようなことではない。

ちなみにそのグラウンドでは、さまざまな機材が外部から持ち込まれて設備が出来上がっている。

「あれってなんだろうね」

「さあ？」

イベントがあるという話だけを聞いていたのだ。

当然、そんなことがわかるはずもない。

「……あ、これから説明があるみたいだね」

ステージのようなものが出来上がっており、その上に司会進行の男性が上がった。

「みなさん。お待たせしました。これよりイベント『スピリット・パーク』を開催いたします！」

拍手はない。

事前告知で何も言っていなかったのだから当然だ。

そのため、ざわついている。

「ご説明しましょう。スピリット・パークは、デュエルモンスタースの精霊の『実体化』を発生させる波動を使うことで、精霊と触れ合うイ

ベントになります!」

英明が皐月のほうをちらつと見ると、皐月は目を輝かせていた。

「英明君!聞いたよね!精霊たちをおもいつきりハグできるって言うてたよ!」

「いやまあ、抱きしめることはできると思うけど、そうはいつてないよ?」

独自解釈が激しすぎる。

で、そこから司会者の説明が続き研究チームだとかどれほど困難だったとか云々を言つて、やつと怪しげなスイッチを取り出した。

「それではさっそくはじめましょう。本日は、精霊との触れ合いをお楽しみください!」

そういつて、司会進行の男性がスイッチを押した。

波動のようなくわからないものが広がったと思ったら、いたるところからデュエルモンスターの精霊が出現した。

精霊カードはもとからプロジェクトに使われていたものや、イベント用にそろえたものだろう。

見栄えのいいモンスターも多数出現している。

「うひよおおおおお!モフモフだあああああ!」

皐月は獣族が密集しているエリアに全速力で突撃していった。

そのままの勢いで飛び込んで抱きしめている。

「……元気だなあ。ん?」

英明が振り向くと……。

『もう少し、もう少しでレイさんのパンツがぐほあああああ!』

カメラを構えて『閃刀姫―レイ』をローアングルから撮影しようとして制裁されているグローアップ・ブルームの姿が。

制裁しているのは『死霊王 ドーハスーラ』だ。

そのままずると引きずられてブルームは焼却炉の中にぶち込まれた。

「……」

英明はあえて無視することにした。

気にしても無駄な気がするのだ。実際無駄である。

「英明君！モフモフだよ！モフモフ！」

「あ、ああ。そうだな」

獸族モンスターを次々と抱きしめながら笑顔でこちらに来る皐月。
楽しそうでなによりだ。

「こんなに素晴らしい装置があつたなんて、感激だよ！」

満面の笑みで再びモフモフの中に飛び込む皐月。

(……まあ、しばらくはあんな感じか)

英明の選択は放置であつた。

★

とあるチャットでのやり取りである。

大賢者ローリコーン：で、今回はどうしたのだ？

制裁覚悟の盗撮班長：同僚から制裁されました。

大賢者ローリコーン：何をしたのだ？

制裁覚悟の盗撮班長：レイたんの絶対領域の奥が知りたかつたのさ！

大賢者ローリコーン：僕も気になるぞ！

制裁覚悟の盗撮班長：レイたんをロリ扱いすると物議を醸すような気がしなくもないけど。

大賢者ローリコーン：班長はロリコンの定義など知らないだろう。

制裁覚悟の盗撮班長：小五から中学生で童顔の人が好きだったよな。

大賢者ローリコーン：そうなのか？

制裁覚悟の盗撮班長：小一から四が好きだとアリスコンプレックスだったような気がする。

大賢者ローリコーン：なるほど、ならば僕はロリコンだな。あぶねえ。

制裁覚悟の盗撮班長：はたしていいのか悪いのか……。

大賢者ローリコーン：そういうえば、精霊が現実化するイベントについてだが。

制裁覚悟の盗撮班長：行われてるね。

大賢者ローリコーン：セームベルたんかわいい。

制裁覚悟の盗撮班長：お前アムネシアの学生だったのかよ！

大賢者ローリコーン：いや、隣の学校だよ。

制裁覚悟の盗撮班長：あ、さようですか。

大賢者ローリコーン：ガガガシスターと戯れてるんだFOOOO

！

制裁覚悟の盗撮班長：落ち着け。

大賢者ローリコーン：まあどっちも僕の精霊だけどね！

制裁覚悟の盗撮班長：死ぬ。あ、二人ともデュエル中しか出てこられないのか。

大賢者ローリコーン：精霊としての格が足りないからな。僕の愛が足りないからだろうか。

制裁覚悟の盗撮班長：あまりうざいと『お兄ちゃんなんて大っ嫌い！』って言われるぞ。

大賢者ローリコーン：イヤアアアアアアア！

制裁覚悟の盗撮班長：さて、まじめな話するけど、どう思う？

大賢者ローリコーン：ふむ。精霊の実体化か。すごいとは思いますが、制御による。

制裁覚悟の盗撮班長：だよなあ。デメリットのほうが多そう。

大賢者ローリコーン：実際、精霊としての格が足りないゆえに問題がないシステムだろう。

制裁覚悟の盗撮班長：そうだね。たまに小さい悪霊もいるけど。

大賢者ローリコーン：だが基本、大型の精霊しか悪霊にならないと聞いた。

制裁覚悟の盗撮班長：そのおかげで、出る杭を打つだけでいいんだけど……。

大賢者ローリコーン：じゃあこのままだと……。

制裁覚悟の盗撮班長：とてもやばいことになるかもしれない！

大賢者ローリコーン：どうするのだ班長！

制裁覚悟の盗撮班長：君は即座に撤退しなさい！

大賢者ローリコーン：……。

制裁覚悟の盗撮班長：どうしたロリコン。

大賢者ローリコーン：僕は、まだ目に焼き付けておきたい。

制裁覚悟の盗撮班長：警告はした。後は君の自由だ。

大賢者ローリコーン：うむ。

制裁覚悟の盗撮班長：お、どうやら用事ができたようだ。というわけ下さいなら！

大賢者ローリコーン：ああ、また話そう。

チャットが終了した。

★

「ククク。うまくいっているようだな」

もうほとんど髪が残っていない中年男性がモニターを見ながらうなずく。

「そうですね。精霊というものを知っている者はいても、触れ合うことができない人は少ないですから」

そう答えるのは、生徒会長の御堂月詠みどうつくよみである。

中等部二年だが生徒会長を務めている。

芯のある雰囲気を出す彼女が、中年男性……副総理である高頭宗助たかどうそうすけと話していた。

月詠の顔には若干のイライラがあるようにも見えるが、高頭のほうは気が付いていないようである。

（精霊を現実化する技術……確か、アイディアル・タワーでは『制御力不足で実用的と判断不可』としてまた発表すらしていない技術のハズ。パツと見た限り、設備がそれに似ているような……）

月詠としては、あまり乗り気ではない。

そもそも、生徒会長である彼女にすら、今回のイベントの詳しい内容は知らされていなかった。

アムネシアは外部からの干渉が困難だが、イベントの際はその限りではない。

黒いうわさのある人物を実際に呼ぶとなれば、遊月本人がいるはずだ。

月詠ですら断固拒否したい内容だというのに既に決まっていたとなれば、そこには大体遊月がかかっている。

「どうかね？ 私たちが完成させた『スピリット・リアリゼーション・システム』の性能。これがあれば、精霊に対する研究が大幅に進むだろう。それに、アムネシアの中心とっていい生徒たちからの人気も高いようだ。アムネシアにも、このシステムの開発を指揮した私のような人材が必要だとは思わんかね？」

「え、ええ、まあ、そうですね……（プロジェクトの名前がアイディアル・タワーの時のまま……正気なのでしょう。この男）」

遊月に直通の電話番号を思い出しながら、月詠は内心溜息を吐いていた。

「これで、あとは『あの計画』を進めることができれば……」
「？」

高頭が言った『あの計画』の意味。

そこが月詠にはわからなかったが、実のところ月詠は忙しい。

そのため、いつまでも高頭にかまっているわけにはいかなかった。彼女にできるのは、『高頭がこのシステムを使って何かをしようとしている』ということ報告するくらいである。

まあそもそも、ほとんど事情を知らされていない。

前提の情報が少ない以上、彼女の役目は、『遊月が抱いているかもしれない疑念の一つを確信に変える材料を提出する』くらいである。

★

「英明君！ 写真を六百枚くらい撮れたよ！」

「撮りすぎだろ……」

とつても元氣な臯月に振り回されている英明。

「すでに現像も終わってるよ！」

そしてそのすべてがファイル化されたものを見せてくる。

英明は『こんなに早くできるものなのかね？』と思いつつもファイルを開いた。

かなり楽しんだようだ。

モフモフ目当てで獣族（特におジャマ以外のレベル2）の場所に突撃していたが、いろいろな写真がある。

ガガガシスターやセームベルが紛れ込んでいたしている。まあそ

れはいいとしよう。

なぜか給仕をしているようすの『スケープ・ゴースト』だったり、売店を開いている『ゴブリンゾンビ』など、なんだかアンデット族モンスターが活発である。

(……)

アンデット族というところで記憶に引かなかった英明だが、とりあえず思考の隅に追いやった。

「思ったけど、かなりカメラの取り方がうまいな」

「うん。最近知り合った精霊がカメラを持ってて、撮ってもらったんだ！実際にカメラを回している人にも見せたらすごいって言ったよ」

「へえ……」

英明の頭には、焼却炉に放り込まれたとある花の姿が思い浮かんだが、きつと偶然ではないのだろうかと思いつつ写真を見ていった。

写真の臯月はとても笑顔だ。

どうやら、今までよりも元気だといったのは間違いないらしい。

たまに英明も写真に入り込んでいたが、あまり記憶がない。

「……あ、後半はカメラマンの要望だぜ！」

見てみることにした。

「……なんだこれは」

言ってしまうえば『擬人化』だろうか。

実際にモンスターの精霊の隣でコスプレをしている。

『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』や『銀河眼の光子竜』

『ドラグニティアームズ―レヴァティーン』をはじめとした各種ドラグニティたち。

『ガンドラX』『レダメ』『ダークマター』『アガーペイン』などのソリティアの友達。

おまけに各種ブルーアイズまで。

そしてとどめに、すべての『霸王眷竜』に加えて『霸王龍ズアーク』！

露出度が若干高い時もあるのだが、それでもやっているのである。

本気である。

ちなみに、本来皐月の髪は水色なのだが、設定上ちよつと無理がある場合はカツラをかぶっている。ブルーアイズの際は白のカツラに青のカラーコンタクト。ズアークの時は基本黒で緑のメッシュが入ったものをかぶったりと、ガチである。

「張り切っちゃった！テヘツ♪」

コテツとこぶしを頭に当てる皐月。

ちなみにあぎといのではなく素である。

「……ていうか、写真六百枚に加えてファイルまで……結構金かかったんじゃないか？」

「問題ないって花血を出しながら言ってたよ！」

「で、そのカメラ撮ってた精霊にも写真渡したの？」

「モツチロン！」

とのことである。

「で、今日のイベントはもうそろそろ終わるみたいだね」

「ああ。でも、明日もやるって話だろ？」

「また明日もギユウウウってするぞおおお！」

元気だな。と思った。

まあ、いつも通りだが。

「あ、英明君。私はそろそろ帰ります！」

「そうか」

「というわけで行くぞおおおお！」

「うおおあああああ！」

今までは襟首をつかんでいたが、まるで盛大に密着するように抱きしめてそのまま突撃していく。

これがまだ日常の延長線上であるというのなら、幸せなことである。

しかし、意図のある偶然は、常に、人を脅かすものだ。

★

「……む？」

臯月は急ブレーキをかけた。

英明が死にそうになった。

「英明君！悪霊の気配がするよ！それも大量に！」

「それよりも前に放してくれ……」

臯月が英明を開放すると、よろよろと立ちあがった。

「ふう……確かに感じるな。こんなに悪霊の気配がするなんて……」

英明はあたりを見る。

臯月が言った通りの状況だ。

かなりの悪霊瘴気が漂っている。

「……！危ねえ！」

英明は臯月を抱き寄せてそのまま跳躍した。

その次の瞬間、英明たちがいた場所に、瓦礫がなだれ込んできた。

「うわあああ！あ、あぶなかつた……」

「間一髪だな……んな？！」

英明は顔を上げて驚愕した。

なぜ、自分たちのところに瓦礫がなだれ込んで来たのか。

その原因がそこにいたからだ。

だが……

「お……オベリスクの巨神兵……」

三幻神の一体である『オベリスクの巨神兵』が、悪霊瘴気をまき散らしながらそこにいた。

「あ、あり得ないよ！オベリスクなんて、並みの精霊力じゃ現出不可能なのに……」

デュエルモンスターの精霊と言うのは、自らが抱えている精霊力が『安定』しているだけで、『生成』してるわけではない。

格式の高い精霊の場合は、この『精霊力』を生成することが出来るので、それを利用した『現出化』を可能とする。

しかし、あまりにも強力な『性能』——ステータス・効果・カテゴリなど総合的な強さ——が高い場合、精霊たちは並みの精霊力消費では現出できない。

ただし、格式の高い精霊は、マスターとなるデュエリストの精霊力

を使うことが出来る。

強い精霊がしよつちゆう出てきている気がしなくもないが、これらはマスターの精霊力を消費しているに過ぎない。

そして、三幻神の一体であるオベリスク。

普通なら、考えられないのだ。

「いや、悪霊瘴気は『現出特化』の性質を持つてる。『精霊力』じゃ考えられない量でも、『悪霊瘴気』なら可能性がある」

「私初耳だよ!?!」

「授業で言ってたぞ。ちゃんと聞いとけ」

「むううう」

唸る皐月。

だが、英明の方はオベリスクから目を放さない。

放すことができない。

「英明君。どうするの?」

「オベリスクは多分、現出直後だから意識が定まっていない。逃げるなら今だが……!?!」

オベリスクが、突如咆哮を上げた。

すると、周辺に存在していた悪霊たちが、オベリスクの右の拳に集まって行く。

圧倒的なほどのエネルギーが集約する。

「まさか……」

集約したエネルギーが安定し……オベリスクは、英明と皐月の方を向いた。

「ヤバい!」

オベリスクがエネルギー溢れる拳を振りおろしてきた。

『マスク・チェンジ ヴエイパー』

英明を水が包んで、ヴェイパーの姿になる。

皐月よりも前に出て、オベリスクの拳を受けた。

「ぐ……うあああああー!」

しかし、その程度でオベリスクの攻撃を受け切れるはずもない。

そのまま英明は飛んでいき、建物を五つ貫いた。

「英明君！」

もうどこにいるのかも見えない。

だが、臯月にも叫ぶ余裕はない。

「な……」

オベリスクのもう一方の拳。

そこには、すでにエネルギーが集約していた。

ちなみに、オベリスクのカードテキストを見れば分かることだが、そもそもオベリスクの『自分フィールドのモンスターを二体リリースして、相手モンスター全てを破壊する効果』は、回数制限が存在しない。

リリースを確保することが出来るのなら、連発すら可能である。

「させるか」

静かな声が聞こえた。

それと同時に、臯月を波動のようなもので出来た障壁が守る。

オベリスクはあざ笑うかのように拳を振りおろしてきたが、その障壁を貫通することはなかった。

「んな……」

圧倒的な質量と圧力。

それをもちもしいない障壁は、オベリスクが攻撃を終えた後も健在だった。

「全く、何をしでかすかと思えば……『悪霊瘴気』が『精霊力の一つの形態』であることを知らなかったのかあのクソガキ。制御を誤れば悪霊瘴気すら簡単に現出化するから凍結しておいたんだがな」

臯月が振り返る。

そこにいたのは……。

「ゆ……遊月君？」

「お、この姿でも初見で私だと分かるのか、そして君付けとは恐れ入る……」

『真紅眼の死霊竜王ネクロ・バロール・ザ・ワールド』の姿の不死原遊月である。

髪は青い炎のようになびいており、怪しげな赤い眼を光らせて、骨

のアクセサリーがふんだんにつけられたロングコートを身に纏っている。

背中には三対六枚の翼に、ドーハスーラののような長い尻尾がある。右手には『真紅眼の黒竜剣』。左手にはドーハスーラの杖だ。

正直、遊月のころの面影はあまりない。

「まあ、今は私に構っている暇はないだろう。ギリギリ受け身をとっていたが、あまりいい状態ではなかったぞ」

「わ、わかった!」

皐月はオネストの翼を広げて、英明が飛んでいった方に向かって飛翔していった。

『グ……ヌウウウ』

「ん? ようやく自我が出てきたか」

『キサマ。 ナニモノダ』

「お前より格上の一般人だ」

めちやくちやな言い分である。

「で、どうするんだ? 私はまだお前と暴れてもいいんだが」

『ククク。キサマガ、我ヨリモ格上ダト? 愚弄スルデナイ!』

オベリスクは拳を振り上げる。

遊月は溜息を吐いて、黒竜剣を構えた。

「全く、古今東西、悪霊は言葉は通じてても話は通じないな」

黒竜剣を一閃。

それだけで、オベリスクの拳は弾かれる。

『グ……ナゼ、コンナコトガ……』

「井の中の蛙大海を知らず。視野が狭いぞ。だから『神』は嫌いなんだ」

『ナヌ?』

「私の中では、『神』は『人を超えた存在』ではなく『人の限界』だからだ。人は『神より上の言葉』を作れないだろ? 作ってみろといえは『超越神』だとか『神を超えしもの』だとか、もともと神が頂点に立っているような言い方するのがその証拠だ」

『……ナニガイイタイ』

「お前に、私に勝つ手段などない。せめて、私が『神』を評価できる程度の実力は見せてくれ。『人の限界』の産物であるお前にできるのは、その程度のことだ」

『ホ、ホザクナアアアアアア！』

オベリスクが拳を振り上げる。

「そろそろ結界ができる頃か。多少暴れても問題ないな」

遊月は剣と杖を構えなおす。

臯月が飛んでいった方向に、雷雲が出現しているのを尻目に。

第二十七話

「どりゃあああー！」

次々と瓦礫をぶん投げる皐月。

その背中にはオネストの翼が展開されており、精霊力を全力で使っているのがわかる。

「英明君！どー！」

がれきを投げてはいるが、実際、まだどこにいるのかはわかっていない。

建造物を五つもぶち抜いたため、がれきの量が多いのだ。

「速くしないと、英明君が……」

表情に焦りが出てくる皐月。

とはいえ、焦ったところで見つかるわけではない。

「……ん？」

視界のなかで何かが動いた。

見ると、とある瓦礫の上で、『スケープ・ゴースト』がこちらを見ている。

「そこに英明君が……」

そこまで飛んで行って、次々と瓦礫を投げる皐月。

あまりにも強烈な威力を持っていそうな速度で投げるので、怖くなったスケープ・ゴーストは退散することにした。

おそらく正しいと思われる。

「あー！」

英明のデュエルディスクが見えた。

そのまま周りのがれきを取り除くと……全身がボロボロになった英明がいた。

「英明君！」

抱きしめる皐月。

英明は息もしているし、心臓もすっかり動いている。

まだしつかりと生きているが、危険な状態であることに変わりはない。

「速く病院に連れて行かないと……」

皐月は自分のデュエルディスクの緊急コール機能を立ち上げる。
が……。

「通信不可？」

通信ができない状態になっている。

「緊急用のアンテナがたくさんあるはずなのに……え？」

見渡して思った。

思っていたよりも、周辺が暗い。

「こ、こんな雲があるはずが……」

皐月が上を見ると、そこには視界に広がるほどの雷雲があった。

「今日は快晴だったはずなのに……!」

皐月は、『自分の真上』が光ったのがわかった。

『あぶねえ!』

聞きなれた声とともに、自分の上で何かのはじける。

見ると、『グローアップ・ブルーム』が根っこを伸ばして膜を作っていた。

「ぶ……ブルーム君」

『いきなり雷雲なんて怪しすぎるから来てみれば、大変なことになってるな』

ブルームは根っこを引つ込めた。

その膜の向こうにいたのは、悪霊瘴気を放出する『オシリスの天空竜』だった。

「そんな……三幻神がこんなに、悪霊になって出てくるわけが……」

『ん？まだあんなのがいるの?』

「うん。遊月君がオベリスクの巨神兵と戦ってる」

『マスターがオベリスクと?……ああ、本気でやってるわけか』

いくら遊月とはいえ、さすがに本気を出さずにオベリスクと渡り合えるとは思っていないブルーム。

なんだかいずれできそそうで怖いが。

「それよりも、英明君が……」

『電波が通じなくなってるみたいだね。まあ、あんな雲があればそ

りやそうなるか』

「え、あの雲が電波を妨害してるの?」

『というより……あの雲、『悪霊瘴気』でできてるみたいだしね』

「え!?雲が、悪霊瘴気でできてる!？」

『まあ、電波を妨害するかどうかとなると種類によるけど……』

ライフラインに影響が出る場合があることもある。

今回は電波妨害のようだ。

「う……ぐっ……」

英明が気絶から目覚めたようだ。

「英明君!」

「臯月か……いま、どうなってる」

「オベリスクは遊月君が戦ってるよ。でも……まだ、三幻神が……」

「ま、まじかよ……」

声にまったく張りが無い英明。

全身打撲なのだからそりやそうだろう。

『やつと起きたか……ん?』

ブルームが上を見ると、オシリスが口の中に雷を充填していた。

『ああもう、ボク、あそこまで攻撃届かないってのに』

再び根っこを伸ばして、降らされてくる雷を防いでいく。

「ぶ、ブルーム君」

『早いところ逃げたほうがいいよ。マスターはオベリスクと遊んでるみたいだし、たぶんすぐにはこれないからね』

「でも、あんなに大きな悪霊瘴気の雲があるんだよ?ただ耐えるだけじゃ……」

『まあ、ほかにも影響があったり、後遺症が残ったりすることもあるけど……』

「だったら、ここですぐにかしなないと……」

『出来るの?ボクはできないよ。もともとこういうリアルファイトは専門じゃないし。攻撃防いでるボクが強いんじゃないって、マスターが書いた護身術のマニュアルがすごいだけだからね?』

実際のところ、ブルームにオシリスを倒す手段はない。

精霊としての格が足りているので耐えているだけであり、レッドアイズやドーハスーラのように直接的な戦闘力が大きいわけではないのだ。もともとステータスは攻守0だし。

「……なら、しかたないか」

『ん?』

臯月は自分のデュエルディスクから、『オネスト』のカードを取り出す。

それを、英明の胸に当てると、自分は翼を展開した。

『いったい何を……んなつ?!』

ブルームは驚いた。

臯月の翼が煌めいたと思ったら、何か大きなエネルギーが英明の中に流れ込んでいく。

それと同時に、傷が次々とふさがっていった。

『(オネストとしての力を与える能力か。でも、治癒能力じゃなくて純粹に力を与えているだけだからひどく間接的。ていうか、どこであるな技術を……)』

さらに言えば、もっと驚いていることがある。

『(力を与えられている英明もそうだ。あそこまでエネルギーが与えられたら、間接的であつても回復しているはず。それでもまだあんな中途半端な回復にしかなつてないってことは……器が大きいのか)』

英明を見ながら、ブルームは思い出す。

『(久しいな。相棒候補を見るのは)』

遊月が抱えている秘密と計画はどれも大きいものだ。

そのすべてを知っているのは、序列上位三名であるレッドアイズ、ドーハスーラ、ブルームの三人だけ。

だからこそ、その相棒もそれ相応の実力者でなければ耐えられない。

『お前はと思う?もう死んでからすぐく時間がたったけど』

ブルームはオシリスの攻撃を防ぎながら、カメラを取り出す。

一つのボタンを押すと、『カシヤン』という音とともに、『閃光の双剣―トライス』のカードが出てくる。

『初代は『イージー・チューニング』で、二代目は『ボンディング―D 20』だ。三代目のお前は、どう思うだろうね』

ブルームはカメラをしまうと、再びオシリスの攻撃を防ぐのに集中した。

回復というより、強化されていくと、体は思うように動かなくともしゃべれるようにはなる。

「臯月、いったい、何を……」

「だいじょーぶだいじょーぶ。ちよつと、力を使ってるだけだから」
余裕そうなことをいう臯月だが、額や頬には汗が流れ、体は震えている。

元気という概念が形を持ったような臯月がこのような状態になるとなれば、明らかに異常だ。

「臯月……」

「英明君。それより先を言っちゃだめだよ。私がやりたいって思ったことをやってるだけなんだからね」

「でも……」

「でも何も無いよ。それにね……惚れた男の前ではね。女はダサイことはしたくないもんだよ」

「……」

「アハハ！めちやくちやいやそうな顔だね。たぶん英明君は、私のこと、『嫌い』か『大嫌い』かのどっちかでいえば、『大嫌い』なんだろうね」

「……」

「でも、『大好き』か、『大嫌い』かなら、どっちだろうなあ……よし、終わった！」

英明の頭をバシンとたたく臯月。

だが、次の瞬間、臯月の背中にあった翼が……消えた。

「臯月……」

完全に回復した様子 of 英明が、倒れる臯月を支える。

「アハハ、ちよつと、体内の精霊力が空になっただけだよ」

「……クソ。もう、俺もグダグダ聞いてられねえな。臯月、俺にどうしてほしいんだ？」

「そうだねえ……」

臯月は、自分がつけているデュエルディスクを捜査して、カバーを開いた。

そしてその中から、キューブの部品を引っこ抜いた。

さらに、デツキから一枚のカードを抜き取る。

「とりあえず、これは英明君に持っていてほしいなあ。このキューブ……『ディスク・コア』には、私のデュエルのデータが全部入ってるからね」

「ああ、わかった」

キューブとカードを英明は受け取った。

「あとはそうだなあ……守りたいって思った女の前で、ウジウジしちゃだめだよ」

「わかった」

「約束だよ？」

「わかってるって」

「なら、もう大丈夫だね」

臯月はブルームのほうを向く。

「ブルーム君。私、どうなるのかな」

『ん？ああ……精霊力を使って限界まで行使した場合、肉体が限界を感じて強制的に休眠に移行するんだ。マスターは起きるまで五年はかかった』

「そっか……」

「臯月、俺はもう大丈夫だ。ゆっくり寝てろ」

「……そうだね。すぐく眠いし、あとは、よろし……く……」

そういうと、臯月は眠りについた。

とても幸せそうな顔で、すやすや眠っている。

英明は臯月をそっとおろした。

『さて、覚悟は決まったな？』

「ああ」

『なら、一つだけ教えておこう。デュエルディスクのコアには、一枚だけ、カードを入れることができるスリットがあるんだ』

「……あった」

『りよーかい。んじゃ、あとよろしくー!』

ブルームはオシリスの雷撃を弾き返して、オシリスをひるませる。

英明は、皐月のディスク・コアに、皐月から受け取ったカード『ミラクル・フュージョン』を入れた。

すると、ディスク・コアの側面に接続端子が出現する。

「これはすごいな」

英明は自分のデュエルディスクに『マスク・チェンジ』と『フォーム・チェンジ』のカードを入れて、ベルトに接続する。

「……行くぜ。皐月」

英明は、皐月のディスク・コアを、自分のデュエルディスクに接続する。

すると、デュエルディスクの画面に存在する『MT』と『FT』……『マスク・チェンジ』と『フォーム・チェンジ』をそれぞれ意味するアイコンの下に、『MF』……『ミラクル・フュージョン』のアイコンが出現した。

「変身!」

英明はデュエルディスクに一枚のカードを入れて、『MF』のアイコンを押した。

『ミラクル・フュージョン カオス』

英明の胸から黒い霧が出現し、背中からオネストの翼が出現する。

その二つは霧散して、英明の体を半分ずつ包む。

英明は、『C・HERO カオス』となった。

『ギャオオオオオオオ!』

オシリスの上の口が開いた。

その中から、雷の弾丸が放出される。

「無駄だ!」

英明は黒いほうの腕から闇を放出し、弾丸を無力化し、そのままオシリスに闇をぶち込んだ。

『……オオオオオオオオオ』

オシリスは一気に弱った。

『ふーむ、雲の規模の割に大きさがそうでもないな。英明、さつさと決めな』

「ああ」

英明はオネストのカードを取り出す。

皐月が自分に力を与えるために使ったものだ。

一瞬、カードが光った。

「ん？……な、皐月？」

カードのイラストが変更され、男性の天使のものから、羽衣を身にまとった皐月の姿になった。

元気いっぱい表情で腰に手を当ててふんぞり返っている。

「迷惑な奴だ」

そういいながらも、英明の眼は優しい色をしていた。

『オネスト』のカードをデュエルディスクに入れる。

『英明君！がんばるぞおおおおおおお！』

「あ、こんな時でもうるさいんだな」

自分の背中に翼が広がるのを感じながら、英明はそう思った。

溜息を吐いた後で一気に飛び上がって、オシリスよりも上を陣取る。

英明はデュエルディスクのボタンを押した。

『カオス・エンディング』

両脚にエネルギーが集約する。

英明は、そのまま急降下して、オシリスにけりをぶちかました。

大爆発を起こしながら、そのまま地面に降り立つ。

「はあ、はあ……うぐっ！」

急激に怠惰感が全身を襲って、変身が解除された。

「な、なんで……」

『あんなにボロボロだったのに、回復行程を無視して能力強化だけで立ち上がったんだ。デュエルディスク二つ分のエネルギーに耐えられるわけないでしょ。当然だよ当然』

「……冷たいな」

『いや、あんなにオドオドウジウジしてたのに、あれだけで変わるなんて若いなって思っただけだよ』

ブルームはそれ以上は何も言わずに、オシリスのほうを見る。

オシリスはボロボロになりながらも、カードを五枚出現させていた。

「んな。まだデュエルする元気があるのか」

『そりやあるでしょーね。ま、あとはボクが片づけておくから、お子さんは寝てな』

ブルームは根っこを使って、英明を首トンで気絶させた。

『さーてクソガキ。ここからはボクが相手だ。ここ最近はいい写真がいっぱいとれて気分がいいんでね。全力で相手してやろう』

ブルームのそばにもカードが五枚出現する。

『ぐ、ぬうううう！舐めるな！』

『これはボクのセリフじゃないんだけど、使っておこうか。死後の世界の広さを教えてあげるよ』

『『デュエル！』』

ブルーム LP8000

オシリス LP8000

『俺の先攻！手札から『古代の歯車機械』を召喚！』

古代の歯車機械 ATK500 ☆4

先攻のオシリスのフィールドに出現したのは、あまり使われることのないガジェットモンスター。

『……【オシリスガジェット】か？』

『あまりその名は聞かんが概ね間違っていない。古代の歯車機械の効果発動。名称をグリーン・ガジェットに変更。そして『機械複製術』を

発動し、デツキから『グリーン・ガジェット』を二体、特殊召喚！』

グリーン・ガジェット ATK1400 ☆4

グリーン・ガジェット ATK1400 ☆4

『効果により、デツキからレッドを二体手札に加える。そして『カード・アドバンス』を発動。デツキの上から五枚を変更、だが、本命はこちらだ！俺のフィールドの三体のモンスターをリリース！』

三体のモンスターが消えて、体がそれなりにボロボロになっていたオシリスが、完全な体となる。

『『オシリスの天空竜』……俺自身を召喚！』

オシリスの天空竜 ATK0↓4000 ☆10

『ふーむ……出てきたか』

『俺はカードを一枚セットし、ターンエンドだ！』

オシリスの天空竜 ATK4000↓3000

『ならボクのターンだ。ドロー！』

『俺は本来、守備表示には対応できない。だが、永続罫『最終突撃命令』を発動！これにより、お前のモンスターは全て攻撃表示になる！』

『……セットには対応してないよ。それ』

『なぬ？……マジだった』

軍神ガープはセットにも対応するが、最終突撃命令は無理である。

『まあそれはともかく、デュエルを続けようか』

『ククク。最終突撃命令をどうにかしない限り——』

『ごちやごちやうるさいな。とりあえず『アンデットワールド』を発動させてもらうよ』

広がり始める屍界。

もちろん、彼のマスターである遊月が持っているような『化身カード』ではないものの、らしいカードではある。

『そして、『おろかな埋葬』を発動、デツキから『グローアップ・ブルーム』……ボクを墓地に送る。そして効果発動。来てもらおうか。『死

霊王 ドーハスーラ』！』

死霊王 ドーハスーラ ATK2800 ☆8

精霊としての彼は今は遊月と融合中なので、当然精霊など宿ってい

ないが、彼のデッキにも入っていないおかしくはないカードだ。

『ム、だが、俺の効果で……』

『そう、強制効果だ。そして、お前は今アンデット族だ。ドーハスーラの効果発動。オシリスの天空竜を除外する！』

雷の弾丸は発射されたが、ドーハスーラが波動を放出してオシリスを除外。

元のボロボロの姿になった。

死霊王 ドーハスーラ ATK2800↓800

『グッ……』

『確かに強い効果だよ。でも、強制効果だからこそ怖くはない！手札から『強欲で貪欲な壺』を使って、十枚除外して二枚ドロウ。『牛頭鬼』を召喚して効果発動。デッキから『ゾンビキャリア』を墓地に送り、手札を一枚デッキトップに戻してこいつを特殊召喚！』

牛頭鬼 ATK1700 ☆4

ゾンビキャリア ATK 400 ☆2

『レベル4の牛頭鬼に、レベル2のゾンビキャリアをチューニング。シンクロ召喚！レベル6『デスカイザー・ドラゴン』！』

デスカイザー・ドラゴン ATK2400 ☆6

『さらに、手札から速攻魔法『バスター・モード・ゼロ』を発動！』

『そのカードは……』

『デスカイザー・ドラゴンをリリースして、手札から、『デスカイザー・ドラゴン／バスター』を特殊召喚！』

デスカイザー・ドラゴン／バスター ATK2900 ☆8

『特殊召喚成功時の効果により、君の墓地のグリーン・ガジェット二体とボクの墓地のデスカイザー・ドラゴンを、ボクのフィールドに特殊召喚する！』

デスカイザー・ドラゴン ATK2400 ☆6

グリーン・ガジェット ATK1400 ☆4

グリーン・ガジェット ATK1400 ☆4

『これで、僕のフィールドにはモンスターが五体！その攻撃力の合計は……』

800+2900+2400+1400+1400=8900

……800まで下がってるドーハスーラいらねえ。

『バトルフェイズ。まずはドーハスーラで攻撃！』

『チツ、仕方があるまい。手札から『速攻のかかし』の効果を使い、バトルフェイズを終了させる！』

『……むう、仕方ないな。ならメインフェイズ2だ。グリーン・ガジェット二体でリンク召喚！リンク2『ヴァンパイア・サツカー！』
ヴァンパイア・サツカー ATK1600 LINK2

『でまあ。『アドバンスドロ』を使って、ドーハスーラをリリースして二枚ドロ。そして、墓地のバスター・モード・ゼロを除外することとで、デツキから『バスター・モード』をセット、これはセットしたターンでも発動可能だ。『バスター・モード』を発動。デスカイザー・ドラゴンをリリースして、二体目の『デスカイザー・ドラゴン／バスター』を特殊召喚！』

デスカイザー・ドラゴン／バスター ATK2900 ☆8

『効果発動だ。君の墓地のグリーン・ガジェット二体と古代の歯車機械を特殊召喚！』

グリーン・ガジェット ATK1400 ☆4

グリーン・ガジェット ATK1400 ☆4

古代の歯車機械 ATK 500 ☆4

『そして、墓地からアンデット族モンスターが特殊召喚されたことで、ヴァンパイア・サツカーの効果で一枚ドロ』

『ぐっ、ここまでまわしてくるとはな。だがいずれ、ガジェット戻って来る！』

『戻りません。僕はガジェット三体をレベル6として扱い、オーバーレイ！』

『ファッ!?!』

『エクシーズ召喚。ランク6『交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン』！』

交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン ATK2600 ★6

『……ま、まさか。俺のガジェットたちまで奪われるとは……』

『僕はカードを一枚セット、ターンエンドだ』

『俺のターン。ドロロー!』

オシリスの二枚の手札はどちらもレッド・ガジェットだ。

しかも……。

『スタンバイフェイズ。ドーハスーラの効果発動。戻って来い!』

死霊王　ドーハスーラ　DFE2000↓ATK2800　☆8

『そして、ヴァンパイア・サッカーの効果で一枚ドロロー』

『ぐっ……だが、俺は『真実の名』を発動!』

『……ん?そうか。『カード・アドバンス』の効果で、後四枚は分かるわけか』

『その通りだ!デッキトップは『強欲で貪欲な壺』!当然正解!デッキから特殊召喚!『オシリスの天空竜』!』

オシリスの体が再び完全なものになる。

オシリスの天空竜　ATK0↓3000　☆10

『さらに、『強欲で貪欲な壺』を発動し、デッキの上から十枚を除外し、二枚ドロロー!』

オシリスの天空竜　ATK3000↓4000

『俺は、俺は負けんぞ!さらに『マジック・プランター』を使い、『最終突撃命令』を墓地に送って二枚ドロローだ!』

オシリスの天空竜　ATK4000↓5000

『魔法カード『サンダー・ボルト』を発動!お前のモンスターを全て破壊する!』

『……』

ブルームは絶句した。

オシリスの天空竜　ATK5000↓4000

『これで、貴様のモンスターはいなくなつた。俺はスケール8の『メタルフォーゼ・ステイエレン』とスケール1の『メタルフォーゼ・ゴルドライバー』でペンデュラムスケールをセッティング。ペンデュラム召喚!『レッド・ガジェット』二体!』

レッド・ガジェット　ATK1300　☆4

レッド・ガジェット　ATK1300　☆4

『効果により、デッキから『イエロー・ガジェット』二体を手札に加え

る。そして、レッド・ガジェット二体でリンク召喚！『プラチナ・ガジェット』！』

プラチナ・ガジェット ATK1600 LINK2

『効果により、手札の『イエロー・ガジェット』を特殊召喚！』

イエロー・ガジェット ATK1200 ☆4

『効果で三枚目のグリーン・ガジェットを手札に加える。そして、メタルフォーゼ・ステイエレンの効果発動！プラチナ・ガジェットを破壊し、デツキから『メタルフォーゼ・カウンター』をセットする。そしてプラチナ・ガジェットが破壊されたことで効果発動！デツキから『レッド・ガジェット』を特殊召喚！これにより、デツキから『グリーン・ガジェット』を手札に加える』

レッド・ガジェット ATK1300 ☆4

『そして、レッドとイエローでオーバーレイ。ランク4『ギアギガントX』！』

ギアギガント X ATK2300 ★4

『効果を使い、デツキから『ゴールド・ガジェット』を手札に加える。このままバトルフェイズだ！まずは俺でダイレクトアタック！』

『逃げも隠れもしないから全部来ていいよ』

『ごちやごちやうるさいな。ならばフルアタックだ！』

ブルーム LP8000↓4000↓1700

大きくライフが削られるブルーム。

しかし、ブルーム本人はほとんど傷を負っていない。

『な……ど、どういうことだ？』

『君よりボクが断然格上なだけだよ』

『グッ……俺はこれでターンエンドだ！』

『僕のターン。ドロロー。このドロローフェイズ中、『禁じられた聖杯』を使って、オシリスの天空竜の効果を無効にする』

『チッ……』

オシリスの天空竜 ATK4000↓400

『スタンバイフェイズにドーハスーラを特殊召喚できるけど、しないでおくよ』

『何?』

『必要ないからね。僕は手札から、『死の花―ネクロ・フルール』を通常召喚』

死の花―ネクロ・フルール ATK0 ☆1

『な、なんだ?そのモンスターは』

『これはね……ボクがこうなる前の姿だよ』

『はっ?』

『続きを語るつもりはないね。ボクはネクロ・フルールの召喚に対して、『連鎖破壊』を発動。デッキからネクロ・フルール二体を破壊する!』

『い、一体、何の意味が……』

ネクロ・フルールが破壊されたが、大地に、花が咲いている。

『ネクロ・フルールが破壊されて墓地に送られた時……デッキから、

『時花の魔女―フルール・ド・ソルシエール』を特殊召喚できる。それが二回だ』

時花の魔女―フルール・ド・ソルシエール ATK2900 ☆8

時花の魔女―フルール・ド・ソルシエール ATK2900 ☆8

『な、なんだと!』

『フルール・ド・ソルシエールの効果発動!このカードの特殊召喚に成功した時、相手の墓地のモンスター一体を、直接攻撃不可、ターン終了時破壊を付与して特殊召喚する。ボクが君の墓地から選択するのは、『グリーン・ガジェット』二体!』

一体何回奪われたら気が済むんだ……。

グリーン・ガジェット ATK1400 ☆4

グリーン・ガジェット ATK1400 ☆4

『そして、またグリーン・ガジェット二体をレベル6としてオーバーレイ!』『交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン』!』

交血鬼―ヴァンパイア・シエリダン ATK2600 ★6

『そしてモンスター効果発動。ギアギガント Xを墓地に送る』

『そ、そんな馬鹿な……』

『バトルフェイズ!ヴァンパイア・シエリダンでオシリスの天空竜を

破壊し、フルール・ド・ソルシエール二体でダイレクトアタック！
オシリス LP8000↓5800↓2900↓0

『こ、この俺が、ジャストキルされるとは……うあああああ！』
オシリスが消えて行く。

そしてそれと同時に、悪霊瘴気の雷雲も晴れていった。

『……ふう、終わった……ん？』

ブルームが振り向くと、遊月が遠くから飛んできていた。

まだ本気の姿のままである。

『お、マスター！』

『ブルーム。こっちはどうだったんだ』

『オシリスが来たよ。僕が片づけておいた。まあ……ほとんどは彼だ
けどね』

遊月は、倒れている英明と臯月を見る。

『……いや、どういう状況だ？』

『臯月ちゃんは精霊力が空になって休眠。英明は無理しすぎてたから
首トンで気絶させました』

『そうか』

遊月は英明を見る。

『……どうやら、壁を超えたようだな』

『まあ、大した柵でもなかったみたいだけどね』
『構わない』

遊月は本気のそれを解いて、通常の状態に戻った。

レッドアイズとドーハスーラが離れて、そのまま引込んだ。

……一番精霊力と体力を使っているのは遊月のはずなのだが、その
遊月に不調が見られないのはなんとも不思議だが、この場では気にし
ないブルーム。

『ブルームはどう思う？』

『英明はいいね。素質あるよ』

『そうか。まあ、レッドアイズに聞いても同じことを言うだろうな』

『臯月ちゃんは……』

「とりあえず病院に連れていこう。しばらく起きないのは変わらない

からな」

『それもそうだね』

遊月が電話をし始めた。

それを尻目に、ブルームは晴れていく雲を見る。

『……オシリスはまだ完全に消えていないね。そして、あの特殊召喚されたオシリスが墓地に戻らなかった。あれは一体……』

ブルームには考えてもわからなかった。

が、それらを感じとった後、電話が終わった様子の遊月に話しかける。

『そういえばマスター。オベリスクは？』

「手懐けた」

『うわっ。ヤバいな……』

ブルームは『まあ、悪霊としてすごかったからまだ安定するまでに時間がかかるかな』と考えながらも、『こりや大変なことになったな』と思うのだった。

第二十八話

「ククク。このカードさえあればいい」

いたるところで悪霊が発生している中、中年の男性、高頭宗助はS
Pが運転する装甲車によって逃走していた。

そこには一枚のカードが握られている。

高頭の目は貪欲に濁っており、これから自分がする数々の功績にしか見えていないようだ。

「高頭様。そのカードは……」

「これか？これはね。『圧倒的な力』だよ。作るためにはそれ相応の犠牲が必要なのだが、この辺りはなかなか入り込めなかったからな。それに、あの男がいる地域だ。多少犠牲が出ようと問題はない」

アムネシアは不死原遊月が裏でトップとして君臨している地域だ。

ただ、遊月はあくまでも裏にいる存在なので、表での市長などは別にいる。

だが、本当に大きな案件となると、遊月か、その遊月の『判断基準』をすべて把握している日夏に確認を取らなければならない。

「私をあの男は軽く見ている。こんなことがあっていいものか！私はいずれこの国のトップに立つ男だ。今回の件で、この町にもそれ相応の被害があったはず。この経験を踏まえて、しっかりと上下関係というものを学んでほしいものだな」

「……」

後部座席でふんぞり返りながら、高頭はそうつぶやく。

それと、運転するSPの男は冷めた目で見ていた。

そもそも、運転している彼は高頭とは無関係の人間だ。

政府関係のものを装って入るものの、実際は『アムネシアでどんな事件が起こっても高頭を泳がせておけ』と遊月から直々に命令された、列記としたアムネシア側の人間である。

それから、高頭は『犠牲』と言っているが、このアムネシアにおいて、単純な災害で犠牲は出ない。

現在、悪霊たちが暴れて建造物が損壊していたりするが、圧倒的な

力を持っている悪霊が少なすぎて、遊月が抱えている一部の強者たちにより、駆除が間に合っている。

さらに、アイディアル・タワーは世界最大の『精霊保護施設』であり、災害救助の現場では彼らが大きく活躍する。

人的被害はほぼゼロ。

物的被害はあるものの、いずれ修復は可能である。

『犠牲が出ている』と思っっている人間はいつも、本当に『犠牲が出ているかどうか』など、確認しないものだ。

「ククク……む？あれはなんだ？」

高頭がそんなことを呟いた。

運転手のSPは『なんだ？』と思う。

車が大きく揺れたのは、その時だった。

「ぐおお！なっ、なんだ!？」

シートベルトを締めていなかった高頭が頭を思いっきり天井にぶつけたが、運転手のSPは冷静だ。

自分よりあわてている人間を見ると、人間は冷静になれるものである。

「ぐ……な、そんなのアリか!」

高頭は窓から外を見て驚いた。

そこでは、『時械神メタイオン』が右手を広げて、そこで月詠が微笑みながら座っていた。

右手を上品に手に当てており、なんだか見ていてもイライラする感じである。

さすがに月詠の登場はSPの男も驚いた。

のだが、インカムに通信が来る。

『私、ちよつとやっておきたいことがあるので、あなたはフェードアウトしておいてください』

「……」

だそうだ。

右手の手首にマイクがあるのだろう。それを使ってしゃべっているのはわかるが、正直、性格が悪すぎてどうともいえない。

「というか今は運転中である。」

「おい！さっさとスピードを上げんか！このままでは焼き尽くされてしまうぞ！あの悪魔め！」

正直、わめいているおっさんもうるさいが、月詠が悪魔であることには同意するSPの男。

『あ、運転手の方。演出のためにそれなりに攻撃しますので、指定ポイントまで頑張ってくださいね♪』

SPの男は『アムネシアの生徒会長って、俺みたいなSPよりも階級が上なんだよなあ。なんでだろ』と思いながらも、スピードを上げた。

実際、アムネシアの生徒会長というのはある程度の裁量権が与えられているので、アムネシアの中ならば無茶が通るのである。

そして、その『ある程度』の範囲内ならば遊月が自動でもみ消してくれるのだ。

何ともいい身分である。

★

指定のポイントまでくれば、月詠もそれなりに自重……してくれないもので、SPの男はアクション俳優も真つ青な運転センスを発揮して、どうにか高頭を後部座席に置いて逃走した。

ちなみにキーは抜いている。

爆発シーンというものをうまく利用したすごく怖いアクションシーンだったため、高頭は目をつぶっていた。

だが、車が動く様子すらないとなれば、高頭も不審に思う。

「お、終わったのか？……お、おい！どういうことだ。あいつはどこに行った！」

さすがに目を開けて運転手がいなくなっていたら驚く。

車の窓から外を見るが、月詠もメタイオンもいなくなっている。

「た、助かったのか？」

高頭は車から出て、そのままキョロキョロと見渡した。

「残念ながら、助かったわけではない」

「っ誰だ！」

声がするほうを向くと、金髪の少年がこちらに向かって歩いてきた。

年齢はまだあどけなさがあり、月詠と変わらず十四歳ほどだろう。だが、身にまとっている強者としてのオーラが漏れ出ている。

「俺か？おれはレイエス・アドベントだ」

「私に何の用だ」

「簡単に言うならば……お前が手に入れたカードをもらおう」
「!?」

高頭は胸ポケットに入れたカードに手がいった。

「なるほど、お前の狙いはこれか。渡すものか！これは私のものだ」

高頭はそのカードをデッキに入れて、デュエルディスクを構える。

「ほう、さつさと逃げると思っていたが、どうやらそうではないらしい」

「フン！適正量の精霊力を注入して作った特注品だ。これを使えば、貴様をひねりつぶす程度はたやすい！」

「そうか。なら、どれほどのものか見せてもらおうぜ」

レイエスもデュエルディスクを構える。

「デュエル！」

レイエス LP8000

高頭 LP8000

ターンランプがついたのは高頭。

「私の先攻！手札から『V・HERO ヴァイオン』を召喚！」

V・HERO ヴァイオン ATK1000 ☆4

出現するヒーローの一角。

某優秀な戦士族御用達と言えるリンクモンスターの影響で、ポンポン出てくるようになったともいえるモンスターだ。実際便利。

「モンスター効果により、デッキから『D-HERO ディアボリックガイ』を墓地に落とす。そして、こいつを除外することでディアボリックガイを特殊召喚！」

D-HERO ディアボリックガイ ATK800 ☆6

二体のモンスターでリンク召喚だ。現れる『聖騎士の追想 イゾル

デ』！」

聖騎士の追想 イゾルデ ATK1600 LINK2

そして現れる『便利な戦士族リンクモンスター』であるイゾルデ。

大体、今のデュエルモンスターズと言うものはやろうと思ったことが全部できるものだが、その原因の一つはこんなところにあつたりする。

「イゾルデのリンク召喚成功時の効果により、デッキから『終末の騎士』を手札に加える。そして、イゾルデのもうひとつの効果！デッキから『執念の剣』と『リビング・フォッシル』を墓地に送ることで、デッキからレベル2の戦士族である『天帝従騎イデア』を特殊召喚！『執念の剣』をデッキに戻し、イデアの効果により、デッキから『冥帝従騎エイドス』を特殊召喚だ！」

天帝従騎イデア ATK800 ☆2

冥帝従騎エイドス ATK800 ☆2

デュエルディスクのデッキゾーンからカードを一枚だけ抜き取る形でサーチやリクルートをしたとしても、デッキはシャッフルされる。

執念の剣はデッキトップに戻ったはずだが、即座にシャッフルされたようだ。

「エイドスの効果により、通常の召喚に加えて、アドバンス召喚を行うことが出来る」

「アドバンス召喚の権利を得て、モンスターを三体か」

「そうだ。私はこの三体のモンスターをリリース！」

イゾルデ、イデア、エイドスの三体が消えて行く。

「アドバンス召喚！『ラーの翼神竜―球体形』！そして、その力を解放し、現れるのだ！『ラーの翼神竜』！」

ラーの翼神竜 ATK4000 ☆10

現れる最強の三幻神。

バトルモードに移行したことで、圧倒的な力を解放している。

さらに……。

「しかも、それ……精霊カードだな」

「そうだーこれが、『スピリット・リアリゼーション・システム』を活用することにより完成した精霊カードだ！本来、このカードには精霊としての存在を保てるほどの力がなかったが、空気中に存在する精霊力すらも操作可能なものに変換できるこのシステムを応用することで、疑似的な精霊とすることが出来る！」

一体後ろにどんなスポンサーがついているのか気になるところが……。

「だが、三幻神ともなれば、相当な『資格』が必要になるぞ」

これは『神をそもそも操れるか』という『器としての資格』と、『圧倒的な存在感を持つ三幻神をコントロールする』ための『公的な資格』の話だ。

もちろん前者は精霊が決めることだが、後者は実際に『とある団体』が定めていることだ。

強いモンスターカードだからと言って必ずしも強い精霊と言うわけではない。

例えるなら、不死原遊月は『死霊王 ドーハスーラ』という、『王』の称号を持っており、実際に『精霊格』も高いモンスターを従えているが、全てのドーハスーラの精霊が遊月のドーハスーラほど強いというわけではない。

のだが、三幻神を代表とする『そもそもデュエルモンスターズとして格式が高いモンスター』というのは、精霊化するだけでその『精霊格』も高いものとなる。

要するに、『三幻神のカードなら、精霊というだけで届け出をする必要がある』ということだ。

因みに、遊月の場合はその『とある団体』から『コンビニエント・パス』をもらっている。

この場合の『コンビニエント』は『便利』ではなく『都合の良い』という意味で、このパスを持っていると、自分だけでなく、自分にかかわる人間に対する精霊格の高い精霊の所持を認めてくれる。というものだ。

人付き合いをそれ相応に選ぶ遊月だが、その理由はこんなところに

あつたりする。

話がそれたので戻すが、そもそも高頭はその二つの資格を満たしているのか。ということだ。

「ククク。神であろうとなんだろうと、このカードがあればいいのだ！フィールド魔法『神縛りの塚』を発動！」

大地から鎖が出現し、ラーの翼神竜をとらえていく。

「……そんなカードを使わなければ操れないか」

「うるさい！どう操るかなど関係ないのだ！操ったのちに、どう活用するかを考える。これが成功する者の秘訣なのだよ」

「なるほど、お前の言い分は分かった」

「フーン！そうして余裕ぶっていられるのも今の内だ！私はターンエンド！」

セットカードはないようだ。

神縛りの塚によって耐性を得ているラーの翼神竜をそこまで信用しているのか。

だが、それは過信と言うものである。

「俺のターンだ。ドロー！」

「さあ、私のラーの翼神竜を超えられるものなら、超えてみるがいい！」

「超えさせてもらおう。俺は手札から『百獣のパラディオン』を通常召喚！」

百獣のパラディオン ATK1200 ☆3

「現れる。神罰を刻むサーキット！百獣のパラディオン一体でリンク召喚！リンク1『マギアス・パラディオン』！」

マギアス・パラディオン ATK100 LINK1

「さらに、手札から『星辰のパラディオン』を、マギアス・パラディオンのリンク先に特殊召喚！」

星辰のパラディオン DFE2000 ☆4

マギアス・パラディオン ATK100↓700

「この瞬間、星辰のパラディオンとマギアス・パラディオンの効果発動。マギアス・パラディオンの効果でデッキから『神樹のパラディオ

ン』をサーチ。星辰のパラディオンの効果により、墓地の『百獣のパラディオン』を回収する」

「回るな……だが、私の神には及ばない！」

「まだまだ序盤だ。おとなしく待っている」

そう、パラディオンは、まだまだ止まらない。

止まってはくれない。

「現れる。神罰を刻むサーキット！俺はマジアス・パラディオンと星辰のパラディオンでリンク召喚！リンク2 『レグレクス・パラディオン』！」

レグレクス・パラディオン ATK1000 LINK2

「そして、リンク先に『神樹のパラディオン』を特殊召喚！この瞬間、レグレクス・パラディオンの効果発動。デッキから『テストメント・パラディオン』を手札に加える」

レグレクス・パラディオン ATK1000↓1800

「まだまだ行くぞ。神罰を刻むサーキット！俺はレグレクス・パラディオンと神樹のパラディオンでリンク召喚！リンク3 『アークロード・パラディオン』！」

アークロード・パラディオン ATK2000 LINK3

「フン！そいつがエースモンスターのようだが、たったの攻撃力2000で、私のラーの翼神竜にどうやって勝つつもりだ？」

「さっきからリンクモンスターの攻撃力がちらほら上がっているのに気が付かないか？」

「何？」

「今のところ、リンク3以下のパラディオンモンスターは、そのリンク先にいるモンスターの元々の攻撃力分、攻撃力がアップする！」

「なんだと!？」

どうやら高頭は『パラディオン』の基本性能を知らないようだ。

ガンドラXのワンキルのお友達としてあんなに猛威を振るっていたのに……。

「俺は手札から、『百獣のパラディオン』と『天穹のパラディオン』を特殊召喚！」

百獣のパラディオン DFE1600 ☆3

天穹のパラディオン DFE1000 ☆4

「これにより、アークロード・パラディオンの攻撃力が上昇する！」

アークロード・パラディオン ATK2000↓4800

「こ、攻撃力、4800だと!?!」

「バトルフェイズ！アークロード・パラディオンで、ラーの翼神竜を攻撃！」

アークロード・パラディオンが剣を振り上げると、鎖に縛られているラーの翼神竜が切断され、消えて行く。

高頭 LP8000↓7200

「グツ……バカな。ラーの翼神竜が、こんな簡単に……」

「だが、この『モンスター同士の戦闘その物』は、まだ終わっていない」「何？」

「こう言うことだ……俺の元に来るんだ。不死鳥よ！」

レイエスがデュエルディスクのスイッチを押して、高く掲げる。

すると、高頭の墓地にいるラーの翼神竜の精霊が舞い上がり、レイエスのデツキに飛び込んで行った。

「バカな、私の……私のラーの翼神竜が……」

「不死鳥すら墓地に用意しないお前に、ラーは力を貸さないさ。アークロード・パラディオンが相手モンスターを破壊したことで、手札から速攻魔法『テストメント・パラディオン』を発動！アークロード・パラディオンのリンクマーカーの数は三つ。よって、カードを三枚ドロウする」

勢いよくカードを三枚ドロウするレイエス。

……二年後はまだ落ち着いた風格があったのだが、この頃はまだ落ち着きがないようだ。

とはいえ、ラーを手に入れたことで高ぶっているのは認めてあげべきだろう。ただでさえ思春期である。

「チツ、だが、貴様の他のモンスターは守備表示、バトルフェイズは終了だ！私の手札には『終末の騎士』がある。これを使って再度展開すれば……」

「残念だが、まだ俺のバトルフェイズは終了していない」

「お、お前のフィールドに、攻撃出来るモンスターは……」

「だから、手札からカードを使うのさ。速攻魔法『ライバル・アライバル』を発動！バトルフェイズ中に、アドバンス召喚を行うう！」

「バトルフェイズ中にアドバンス召喚を……ん？貴様のフィールドにモンスターは三体……まさか」

「そのままかだ！俺は、三体のパラディオンモンスターをリリース！」

パラディオンモンスターたちが消えて行き、レイエスの手にあるカードが輝きを増していく。

『ラーの翼神竜』を、アドバンス召喚！」

空中に現れる太陽。

資格の無い不適合者に操られたそれとは違う、神々しいチカラをあふれさせ、その体を変形させていく。

ラーの翼神竜 ATK0 ☆10

「だ、だが！貴様如きに、三幻神を操る力など……」

「これを見てから判断するんだな。ラーの翼神竜の効果発動！召喚成功時、俺のライフを100になるように払うことで、攻撃力と守備力を、払った数値分、アップさせる！」

レイエス LP8000↓100

ラーの翼神竜 ATK0↓7900

「ば、バカな……攻撃力、7900だと!？」

驚く高頭。

……とはいえ、最近、一万越えでも全然記録を更新できないであろう数値を普通に出してくるデュエリストがいろんなところにいたりするので、レイエスとしては感動が薄い。

が、目の前にいるやつを葬り去るには十分な攻撃力だ。

アホ見たいな攻撃力はみんなのロマンだが、デュエルに過剰な攻撃力など不要！

結論、ワンターンキルは楽。

「ラーの翼神竜で、ダイレクトアタック！『ゴッド・ブレイズ・キャノン』！」

ラーの翼神竜が渾身のブレスを放出。

「うあああああ」

高頭 LP7200↓0

そして吹き飛ぶ高頭のライフ。

デュエルは決着である。

で……高頭はそのまま気絶してしまった。

「……おい、出てきていいぞ」

「どうやらそのようですね」

ひよこつと月詠が建物の角から顔を出した。

いつも通りの微笑を浮かべたままで。

「で、俺はもう用はないんだが、どうするんだ？」

「もちろん、いろいろと使いますよ。彼にもまだ使い道はあるのです」

「……まあいい。俺はもう行くぞ」

「フッフ。レイエスさん。強くなりましたね」

「それはお前もだ。一体何があった？」

「そうですねえ……強い殿方の家に泊まったくらいですよ」

「そうか」

レイエスはそれ以上は何も言わなかった。

なんとなく察していたことではあるし、そもそもこれ以上、月詠が語るとは思え無かったからである。

なお、高頭に関してだが、彼は遊月のところではなく、アイディアル・タワーで『日本政府にうまく切り込みたい』と考えている部署で身柄を一時預かることとなった。

遊月も、高頭をいろいろ利用できることは分かっていたが、それ以上に気にすることがあったので、この時点では放置。

二年後まで、月詠が生徒会長としてかかわっていたという事実が伝わることなく、事件そのものは終了した。

★

病院のベッドで、臯月がすやすやと眠っている。

腕には点滴がつながっており、皐月はこれから、長い休眠状態となる。

早々に起きることはないだろう。

そんな皐月を、部屋の外から英明は見ていた。

「ここにいたのか」

「……遊月か」

英明に話しかけたのは遊月だ。

初対面の時と同じようなスーツ姿であり、何らかの書類整理をしていたのだと英明は思った。

「……皐月は、大丈夫なんですよね」

「ああ。精霊力を空になるまで使う。ということは、本来なら簡単にはできない。リミッターが体の中に存在するからな。彼女は意図的にそのリミッターを外したわけだが、だからと言って、生命に異常が来るわけではない」

要するに『変化に体がおいついていないだけ』である。

「……そっか」

「英明。今日は君に対して、一つ『提案』をしに来た」

「提案？」

英明は首をかしげた。

「そうだ。今回の事件で、お前はいろいろ考えた部分があったはずだ。そしてその中で、一つの答えを出した」

遊月はまっすぐ英明を見る。

逆に英明は、遊月を見ることはできない。

十四歳である英明の体は、あまり大きいとは言えないものだ。

「枷を破った。だがそれだけだ。しかし、お前には素質がある。結論を先に言えば、『勧誘』だ」

「勧誘？」

「私の相棒になるかどうか。ということだ。見ていて多少は分かると思うが、君よりも断然、私の方が強く、多くのことを知っていて、多くの修羅場を潜り抜けている。だが、そんな場所にいるからこそ、後ろからしっかりとついてくる人間がほしいわけだ」

「その後ろからついて来る人間に、俺を選ぶってことか」

「その通りだ。もちろん強制はしないし、自分のやり方があるというのならそれでかまわない」

「……それ、巻き込むって言ってるのと同じだろ」

「大人だからな」

英明の苦笑に対して即答する遊月。

「巻きこむことを当然だと考えているが、だからと言って無責任と言う印象が全く感じられないその瞳。」

「……俺は、あんたみたいになりたい」

「ほう?」

英明の呟きに、遊月は人の悪い笑みを浮かべる。

「なら一つ聞いておくか。私がどんな奴だと思う?」

「……バカだと思う」

「そうか」

遊月は微笑んだ。

そして、まだ小さい体で頑張る英明の頭をガシガシと撫でる。

「あ、そうだ」

遊月がデュエルディスクを操作すると、英明のデュエルディスクにメールが受信された。

「いつでも私の家に来るといい。歓迎しよう」

遊月はそう言うと、英明に背を向けて去っていった。

臯月の方を一度も向いていない。

最初から大丈夫だと思っているのだろう。

自信にあふれていて、頼りにしかならない。大きな背中。

英明は、そんな遊月の後姿を見送った後、皐月の方を見る。

「皐月。俺、強くなるからな」

英明はそういって、いろんなものをこらえるように、病院を後にした。

……その日から時々遊月の寝室で、英明がその小さな体を支えてもろうように寝ている姿があったが、まあ、ブルームの『大切なアルバム』の中に残っている程度の話である。

★

そして二年後。相棒として強くなった英明。

中学二年、三年の時間を鍛錬に当てたのだが、鍛えれば鍛えるほど遊月の凄さが分かって気が遠くなることもあった。

それでも、遊月の相棒として様々なものを使いながら鍛えてきた。

だがそれでも、皐月に振り回されていた方がなんだか鍛えられそうな気がしてくるのは、英明の気のせいなのかもしれない。

そんなことを考えているくらいには、英明の心にも余裕はあった。

ただ、人は思い出だけで強くなれるかどうかとなれば、よほどの信念が必要。

その信念を続けられるだけの『熱』がなかなか入らない……：……というか、遊月に似て、若干の『ヤレヤレ系』の思考が入ってしまったからか、最初のころに掲げた情熱というものはだんだん冷めていく。

もちろん、高等部一年になれば遊月も入って来るため、熱が冷めてきた自分をどう奮い立たせるかというのは重要な課題だった。

だからこそ、と言うと変かもしれないが……。

『初めまして、おおつかあやは大束綾羽おおつかあやはといいます。アムネシアに来るのは初めてで、色々迷惑かけるかもしれませんが、これからよろしくお願いします』
強さはある。

だが、余裕がなくて、不安そうにしている。

そんな雰囲気おおつかあやはの綾羽を見て、少しだけ大人になった英明は『守ってやりたい』と思うようになったのだろう。

ルックスもスタイルもよく、デュエルは強くて性格もいい。

そんな綾羽のファンクラブができるのは、必然と言うと妙かもしれないが、アムネシアではできていたので英明も混ざった。

遊月との関わり方も慣れてきたころなので、そういったものに参加するのも悪くないと思っていたと言うこともあるが。

とにかく、彼は『綾羽ちゃん親衛隊』に所属することになった。

★

いろいろと英明にも思うところがある二年だった。と言うとなんだか軽いのが、要するにその程度の話である。

「しかし、私のようにになりたい。か。今も言えるか？英明」

「そうやって俺を弄るのやめてくれねえか？遊月」

とまあ、こんな軽口を叩けるくらいには、関わり始めの空気のわりによくなっている。

「だがまあ、強くなってるのは事実か」

「だな。俺もそう思う」

「ああ。ただ、私は一っだけ気になることがある」

「俺も、病院に行くたびに思うことがあるぜ」

口には出さない。

だが、遊月と英明はこう思っていた。

『臯月。二年も寝たきりなのに、肌はツヤツヤなんだよなあ。なんだろう』と。

第二十九話

綾羽VS香苗。

『ヴァルハラルイン』VS『列車』ともいえるデュエルだが、『遊月に後ろから抱きついて寝る権利』のため、それ相応に本気のデュエルが繰り広げられる。

もちろん、遊月が所有する精霊たちは、『若いなあ』と思いながらそれを見ているわけだ。

元気で素直でかわいい女の子ががんばっている姿というのは、年寄りの目の保養にいいのである。

しかも寝間着姿であり、なんだか見ていて癒されるのだ。

『ムフフ。いいねえ。こういうの。お、ありがと』

ブルームが写真をまともしていると、スケープ・ゴーストが湯呑を持ってきた。

ちなみに、ブルームのイラストを見て『どうやって飲むんだ？』と思う方もいるだろうが、目の下のほうに口がある。という独自設定である。

はた目からは『全力で目薬を目にぶっかけてる』ように見えるのでなんだか心臓に悪いのだが。

『長い間、経験してきたからなあ』

ブルームは基本的に煩惱全開だが、まじめな写真も結構撮っている。

『いろいろ残ってるね』

一枚目、

『スカーレット・ノヴァ・ドラゴン&金城直哉と、レッドアイズ&遊月のレースの写真』

二枚目、

『ウォーター・ドラゴンに乗ってはしゃいでいる水色の長髪の男の娘と、それを呆れながら見ている遊月とドーハスーラ』

三枚目、

『スケープ・シューターと一緒にカメラの調節をしている赤髪の少

年と、それをじつと見ているブルームと、ちんぷんかんぷんな様子の遊月』

まだまだ『こういう写真』はいろいろあるのだが、いずれにせよいい思い出だ。

ちなみに、ブルームは『見ていて微笑ましい写真』と『エロ路線』はきつちり分けるほうだ。

綾羽と香苗のデュエル写真は『見ていて微笑ましい写真』に分類される。

『精霊たちの中にも、平均と比べて寿命が短い場合もあるし……みんな、僕らを置いていつちやうんだよなあ』

格が高くなつた精霊の寿命は基本的に長いのだが、遊月の近くにいるからと言って強い精霊になれるかどうかとなればそういうわけではない。

もちろん、強い精霊になりたいと願う精霊が多かったのは事実だが、現実には残酷で、そうなることができたのは一部の精霊だけ。

『みんな。こつちを見てるんだろなあ』

あの世からこの世が見えるかどうか。

遊月曰く『若干見える時がある』とのことだ。

だからこそブルームは、常に考えている。

「みんながボクを見つけた時、ボクの周りが幸せであつてほしい」

それは、怒らないとか、泣かないとか、そういうことじゃなくて、楽しいものであるように。ということだ。

もちろん、元からブルームは馬鹿なのだろう。

しかし、ブルームはそんな自分が大好きだ。

『遠い世界にも、僕みたいな馬鹿な人がいてよかつたよ』

もつとバカで楽しいことをするには、同じように、馬鹿で楽しいやつとの交流が必要だ。

『さてと、いつかこれを掲げる日が来るだろうか』

ブルームはとある旗と色紙を持ち上げる。

旗には『制裁上等悪乗り同盟』とかかかっている。

そして色紙にはとある短歌が書かれていた。

【赤信号】

みんなが渡れば

怖くない

エロのためなら

俺たちすすむ】

とてもアレな座右の銘である。

『……フフツ』

ブルームは微笑んだ後、整理した写真を片付けて眠りについた。

★

「むうう……」

綾羽がアムネシアの図書館で唸っていた。

最近、香苗とのデュエルの勝率が下がってきているのだ。

正直……『オネストがなかったらどうしようもない』という状況に陥っているのである。

光属性・天使族で構築された綾羽のデッキは、どうしようもなく奇襲性がある。

逆に、地属性・レベル10で構築された香苗のデッキは、自分のターンも相手ターンも、高い攻撃力を維持できる。

元のステータスの差となると、列車が相手では分が悪すぎるのだ。とりあえずヴァルハラがあれば、手札の最上級モンスターが腐ることはないのだが、だからと言って突破できなければ意味がない。

「どうにかして、安定的に打点を確保できないとマズイね」

天使族も、回せば3000打点を超えるくらいのモンスターは出せる。

が、相手が列車である。3000でどうしろというのだ。という結果になるのだ。

「んー」

とりあえず伸びをする綾羽。

最近暖かくなってきたので、アムネシアも夏服になってきている。

そのため、綾羽の胸が強調されていた。

アムネシアの図書館は優秀な揃え方をしているので利用者が多い

のだが、主に男子生徒の視線を集めている。

……のだが、あまり気にしていないようだ。

まあそもそも、地下で特訓するときにもスポーツブラとホットパンツで運動しているのだから、ほかの人間よりも若干羞恥心が薄いのは前々からわかってのことだが。

「……考えが全く浮かばないね。こういう時は、全く別のことを考えよう」

ここは図書館だ。

アムネシア側の審査が入った本が多数そろっている。

それは要するに、『遊月が作った審査基準をもとに集められた本』ということになるのだ。

綾羽としては、それらを読むのに苦痛はない。

「どんな本があるのかな……」

綾羽はいろいろ見て回ることにした。

そして……。

「……『著者が精霊のコナー』かあ。そんな本も置いてあるんだね」
なかなか興味をそえられるエリアだ。

というか、意外とそのエリアが広い。

「思ったより、精霊たちも本を書いてるんだなあ……」

黒い装丁の本が目に入った。

『盤面を制圧する我が眼光 著：ドーハスーラ』

綾羽はあえて無視した。

……が、五秒後、ちよつと気になったので手に取って開いてみた。
まえがきをちよつと読んでみる。

『我は近年。ドロソのコストとして一定の評価を得ている。しかし！
我は盤面についてこそ強いのだ。本書では、我がマスターのそばで戦い、経験したことを抜粋して紹介しよう』

このような見出しから始まっている。

……なんともリアリティがあるというか、そもそも綾羽が知る限り、『印象に残るドーハスーラ』という存在は遊月の精霊である。

そして、この言葉の選び方が何ともそのドーハスーラらしい。

「……あれ？なんか著書のところに番号がついてる。これってなんだろう」

八ケタの番号がついている。

綾羽は知らないことだが、基本的に、デュエルモンスターの精霊というのは見分けがつかない。

もちろん、精霊として格が高いゆえにあふれてくるオーラだとか、性格から出てくる雰囲気だとか、そういった違いはあるのだが、それらは深くかかわっていないとわからないことなので、それぞれ番号登録されているのだ。

単にマスターに従事するだけなら必要はないが、遊月のように一定の権力を持っていたり、そしてこのドーハスーラのように本を書くとなると、こういう識別は必要となる。

「……まあ、識別番号は必要だよね」

とはいえ、その知識がなかったとしても、識別番号のためだということにはわかる。

綾羽はとりあえず本棚に戻した。

……興味ないんかい。

そしてさらにちらつと目に入るものが……。

『ミリオン・フォース 著：ブルーム』

「え、なにこれ」

ブルームというと、綾羽にとっては遊月の精霊が目には浮かぶ。

どんな内容なのだろう。

前書きを読む。

『最近、とてつもない攻撃力を記録するデュエルが確認されているようだ。公式のデュエルではないのでそのデュエルの映像を見せることはできないが、近年、なんと百万というロマンのような領域に達している攻撃力が確認されている。本書では、『攻撃力』と『ライフポイント』の相互関係を明らかにしたうえで、絶大な攻撃力の世界を解説していく』

「……意外と真面目」

失礼な感想である。

とまあこんな感じで、なんだか遊月がかかっている精霊が書いたであろう本がいくつかあった。

「いろんな本があるんだなあ……」

そうは思いながらも、その場を後にする綾羽。

次は天使族の関連コーナーのところだ。

「ええと、このあたりかな……」

基本的な運用を目的としたシリーズのうちの一冊が並んでいることがそれなりにある。

できることなら、打点を確保するタイプのものがいい。

「天使族で、打点特化してどんなものがあるかなあ」

そんなことをつぶやく綾羽だが、実は先ほど手に取った『ミリオン・フォース』というブルームが書いた本には、『エンシエント・ホーリー・ワイバーン』という『天使族モンスター』を題材にした内容が紹介されているのだが……どうやら綾羽は前書きだけを読んで目次を読まないようだ。

「あ、『オネスト運用理論』なんて本があるんだ」

ただ、かなり高いところにある。

近くに台になりそうなものはない。

「フーン！」

思いつきり手を伸ばすが、全く届いていない。

身長が百六十ちよいしかない身長では無理がある高さだった。

そして、綾羽の後ろに立った誰かが、その『オネスト運用理論』の本をひよいっととった。

「あっ！」

「いったい何をしてるんだ。綾羽」

「え、遊月君？」

綾羽の後ろにいたのは遊月だった。

こちらでも半袖の夏服姿である。

腐った目とドクロのネックレスは相変わらずだが。

「遊月君って、図書館に来るんだね」

「私をなんだと思ってるんだ……」

さすがの遊月といえど、図書館には来る。

ネット社会になったが、中には本を求めている人もいるものだ。活字主義というわけではないが、この程度はふつうである。

「で、これだろ」

「うん。ありがとう」

「まさか打点に走るとはな。まあ、もともとルインと相性がいいから構わんが……」

「でも、打点あげて殴ったほうが強くて見栄えいいもん」

そういう綾羽だが、そもそもこれは、ルインが戦闘特化の効果を持っているからだろうと思われる。

精霊を従えているデュエリストにはよくあることだ。

「そういうえば、遊月君は何をしたの？」

「どんな本が並んでいるかとか、ぎつと確認していただけだ」

「遊月君もそういうことするんだね」

「意外とバカにできないからな。貸出リストはたまにチェックしている」

「へえ……そういうえば、精霊も本って書くんだね」

「……ああ、ブルームとドーハスーラが書いたって言ってたな。ドーハスーラは『主張』に近いが」

「結構不憫だもんね」

最近、チキングとは呼ばれなくなったが、逆にドロソ扱いである。

「ブルームも、なんかライフポイントを利用したロマン攻撃力がどうとか言っていたが……」

「あ、前書きだけ見たけどそんなことが書かれてたね」

「いずれにせよ、運命力が必要なのは変わりないからな……」

「とんでもないレベルで運命力が必要である。」

まあ、ロマンというのはいつもそんなものだが。

綾羽が座っていた席まで戻ってきた。

遊月も何冊か本を持っているようで、これから読書タイムなのだろう。

「相席いいかしら」

綾羽は、自分に声をかけられたのを認識して振り向いた。
そしてそのまま、言葉を失った。

(……きれいな人)

綾羽の第一印象はそれ。

実際、その人物は、特徴という特徴であふれていた。

長く伸ばした濡れ羽色の髪と、翡翠の混じった瞳。

落ち着いた雰囲気だが、赤いヘアピンがあるので可愛らしさがある。

胸は大きく、腰はくびれ、形のいいおしりと、女性がうらやむスタイルを体現している。

とまあ、特徴をあげていけばきりがなが、ぶっちゃけて言えば『めっちゃきれいな女性』である。

そして、身にまとっている衣装も、普通でない。

どこかのパーティーにこれから行くのか、と思わず聞きたくなくなるような、真っ黒のドレスだ。

デタッチド・シヨルダーであり、袖がドレスとは別に分離しており、肩がほとんど見えている。

胸の下にベルトをまいて大きな胸を強調し、スカートにはスリットが入っており、とても轟惑的である。

「……時雨しぐれか。いつ来たんだ?」

だが、そんな美女に対して、遊月は何の躊躇もなく聞いている。
旧知の仲なのだろう。

というより、アムネシアの敷地の中にあまり外部の人間はいない。

「あ、あの、遊月君、知り合いなの?」

「ああ。周防時雨すおうしぐれ。簡単に言えば……私と同格のバカ女だ」

何とも失礼な紹介である。

「フフフ。もうちょっと説明してくれてもいいじゃない」
「知らん」

バツサリ切る遊月。

取りつく島もないとはこのことである。

「ゆ、遊月君と同格って……」

「まあ、デュエルをしてみればわかるわ。可愛がってあげるわよ。フフ」

余裕そうに、子供を相手にするように綾羽に対して微笑む時雨。

「なんだか……生徒会長の御堂月詠をレベルマックスにしたような女である。」

そして、それなりにしつかりした十六歳の女子という、大人への意識がどののといわれる時期の綾羽にとっては、あまりいいものではない。

「むうう！わかりました。デュエルしましょう！」

「……………（若いなあ）」

デュエルディスクを取り出す綾羽に対して、遊月と時雨はそう思った。

「あと、なんでドレスなんですか？」

「これは私の普段着よ」

「そ………そうですか」

すでに圧倒されている綾羽であった。

★

アムネシアには、大量の『デュエルができるスペース』が確保されている。

それは、図書館の地下であつても例外ではない。

そして、遊月がいれば、それらの施設は即座に使用可能だ。

権力の乱用のような気がしなくもないが、そもそもデュエルを邪魔する権利はだれにもないので大体こうなる。

『おりよ！時雨さんが来てるの！』

ブルームが喜んでいようだ。

ボンツキュツボンツで色っぽいドレスを着ている時雨に対して、彼が反応しないわけがない。

さっそくカメラを構えてバシャバシャ撮りまくっている。

それに対して、時雨は堂々としているだけ。

「それにしても……なんかすごいですね」

「あなたも、朝に外でスポーツブラでランニングしていると聞いたわ

よ」

「?……変ですか?」

(え、天然?)

時雨がブルームをちら見する。

ブルームはうなずいた。

時雨は理解した。

「まあいいわ。かかっけていらっしやい」

「むうう。行くよ!ルイン!」

『大人の魅力に対して反抗しようとするマスターって若いわあ』

「余計なこと言わない!」

『はいはい』

ルインもあきれた様子だ。

『そういえばマスター。時雨さんっていつ来たの?』

「多分ちよつと前だろ。特に用事がなければ来ないタイプだし」

『それもそっか』

デュエルスペースの端っこに設置されているベンチで本を読み始める遊月。

ブルームはその横でちよこんと座っている。

「デュエル!」

綾羽 LP8000

時雨 LP8000

「フフフ。綾羽ちゃん。先攻と後攻はどちらがいいかしら」

「む……先攻です」

「いいわよ。綾羽ちゃんからはじめなさいな」

「むうう……私の先攻!」

カードを使用し始める綾羽。

(時雨も相変わらずか)

外野の二人はそう思った。

「手札から『ヘカテリス』を捨てて、デッキから『神の居城―ヴァルハラ』を手札に、そして発動!」

発動される綾羽の化身カード。

(ヴァルハラかあ……)

時雨は内心で、それを感慨深そうに見ていた。

「ヴァルハラの効果を使って、手札から、『幻奏の音姫プロデイジー・モーツァルト』を手札から特殊召喚！」

幻奏の音姫プロデイジー・モーツァルト ATK2600 ☆8

「モーツァルトの効果発動。手札から、光属性、天使族モンスターを特殊召喚できるよ。私は手札から『マスター・ヒュペリオン』を特殊召喚！」

マスター・ヒュペリオン ATK2700 ☆8

もはやおなじみとっていい『星8・光属性・天使族』の展開である。

「そして、レベル8のモーツァルトとマスター・ヒュペリオンでオーバレイ！ランク8『神竜騎士フェルグラント』！」

神竜騎士フェルグラント ATK2800 ★8

「カードを一枚セットして、ターンエンド！」

「私のターン。ドロー」

時雨もカードを引く。

「私は手札から『極星霊リヨースアールヴ』を召喚」

極星霊リヨースアールヴ ATK1400 ☆4

「きよ……極星？」

「私が入れている極神は一種類だけよ。まあいいわ。開眼せよ。全てを見通す未来回路」

サーキットが出現。

「私はリヨースアールヴをリンクマーカーにセット、リンク召喚！リンク1『極星天グルヴェイグ』！」

極星天グルヴェイグ ATK800 LINK1

「グルヴェイルの効果発動。知っているかしら？三枚まで手札・フィールドからカードを除外して、極星モンスターをその数まで出せるのよ」

「んなっ……フェルグラントの効果が発動！その効果を無効にする！」

「手札から『禁じられた聖杯』を発動。フェルグランツの効果は無効にして、攻撃力を400アップ」

「しまった……」

神竜騎士フェルグランツ ATK 2800 ↓ 3200

「手札三枚を除外することで、デッキから『極星天ヴァナディース』と『極星獣ガラム』二体を特殊召喚」

極星天ヴァナディース ATK 1200 ☆4

極星獣ガラム ATK 800 ☆4

極星獣ガラム ATK 800 ☆4

「そして、ヴァナディースの効果。デッキから『極星天ヴァルキュリア』を墓地に送り、レベルを2に変更」

極星天ヴァナディース ☆4 ↓ 2

「合計で、レベルが10に……」

「私はレベル4のガラム二体に、レベル2のヴァナディースをチューニング、天を統べる勝利の槍。最高神の手に渡りて、神話を紡ぎなさい。シンクロ召喚。レベル10『極神聖帝オーデイン』！」

極神聖帝オーデイン ATK 4000 ☆10

「で、出た……」

「オーデインの効果発動。ターン終了時まで、このカードは魔法・罫の効果を受けなくなるわ。バトルフェイズ。オーデインで、フェルグランツを攻撃！」

槍から放たれた雷が、いとも簡単にフェルグランツと貫く。

綾羽 LP 8000 ↓ 7200

「私はカードをセット、これでターンエンドよ」

「私のターン。ドロー！」

綾羽は二枚になった手札を見る。

「私は、『儀式の下準備』を発動。デッキから『エンドレス・オブ・ザ・ワールド』と『破滅の女神ルイン』を手札に加える」

「ほう、このタイミングで精霊カードね」

「そして、『戦線復帰』を発動。墓地から『マスター・ヒュペリオン』を特殊召喚」

マスター・ヒュペリオン DFE2100 ☆8

「儀式魔法『エンドレス・オブ・ザ・ワールド』を発動。マスター・ヒュペリオンをリリース！破滅した世界より、希望を手に、自壊する魂を導くべく降臨せよ！儀式召喚！『破滅の女神ルイン』！」

『さて、参りましょう』

破滅の女神ルイン ATK2300 ☆8

「そしてバトルフェイズ！ルインで、オーデインを攻撃！そして『オネスト』を手札から発動。オーデインの攻撃力分、ルインの打点をあげる！」

破滅の女神ルイン ATK2300↓6300

ルインの背中にオネストの翼が出現する。

『おおっ！オネスティ・ルインだ！やつほおおい！』

興奮した様子のブルーム。

バシャバシャと写真を撮りまくり……。

『懲りませんね』

ルインが指パッチンで出した雷が直撃。

『ギヤアアアアア！』

悲鳴を上げるブルーム。

カメラもボロボロになっている気がしなくもないが……いや、まあ気のせいだろう。

「……行くよ！ルイン！」

『はい』

槍を構えて、オーデインに向かって突撃する。

「フフフ。ブルームちゃんも相変わらずね。まあいいわ」

時雨 LP8000↓6700

「そして、次はグルヴェイグに攻撃！」

「グルヴェイグは破壊されるけど、『ガードブロック』を発動して、ダメージを0にして一枚ドローよ」

時雨は余裕そうな表情でドローする。

「私は、これでターンエンド」

破滅の女神ルイン ATK6300↓2300

できることはこれ以上はない。

時雨のターンになる。

『……………いてて、そういや時雨さん。普段とは『逆』だね』

「……………そうだな」

ブルームは復活したようで、根っこで頭をかきながらそんなことを言った。

遊月もうなずく。

「え、逆？」

「ウフフ。これから見せるからすぐにわかるわよ。私のターン。ドロー。私は『呪眼の死徒 サリエル』を召喚。効果により、『セレンの呪眼』を手札に加えて、これを装備する」

「んなつ。呪眼!?!」

呪眼の死徒 サリエル ATK1600 ☆4

発動される『セレンの呪眼』

それを見た綾羽は感じた。

「まさか……………化身カード？」

「その通りよ。このカードは、私の化身カード。まあ、極星のほうにもまた別にあるけどね」

「一人のデュエリストが、二枚の『専用化身カード』を持つなんて、聞いたことない……………」

「あなたにはまだ知らないことがたくさんあるわ。まあそれは後、デュエルを続けるわ。サリエルの効果を発動。ルインを破壊する」

サリエルがセレンの呪眼を開く。

すると、ルインはそのまま破壊された。

「……………ルインが……………」

「セレンの呪眼の効果を適用するわ」

時雨 LP6700↓6200

呪眼の死徒 サリエル ATK1600↓2100

「そして、手札から『呪眼領闖―パレイドリアー』を発動。効果処理として、『呪眼の眷属 バジリウス』を手札に加えるわ。そして、セレンの呪眼の効果を適用」

時雨 LP6200↓5700

呪眼の死徒 サリエル ATK2100↓2600

「さらに、自分フィールドに『呪眼』モンスターが存在することで、『呪眼の眷属 バジリウス』を特殊召喚。モンスター効果により、デッキから『セレンの呪眼』を墓地に」

呪眼の眷属 バジリウス DFE2000 ☆3

「バトルフェイズ。サリエルでダイレクトアタック！」

「ぐっ……」

再びサリエルがセレンの呪眼を開く。

綾羽 LP7200↓4600

「これでターンエンドよ」

「私のターン。ドロロー！」

「サリエルの共通効果により、バジリウスを破壊。さて、どうするかしら？」

「私は……モンスターをセットして、ターンエンド！」

サリエルが破壊できるのは、特殊召喚されたモンスターだけ。

セットしたモンスターならば、狙われることはない。

「なら、私のターン。ドロロー。『強欲で貪欲な壺』を使って、上から十枚除外して二枚ドロロー。手札から『呪眼の死徒 メドウサ』を通常召喚」

呪眼の死徒 メドウサ ATK1400 ☆4

「メドウサの効果により、墓地の呪眼カード『呪眼の眷属 バジリウス』を手札に加える。そして、このまま特殊召喚。効果により、『喚忌の呪眼』を墓地に送るわ。そして……開眼せよ。全てを見通す未来回路」

サーキットが出現。

「召喚条件は、呪眼モンスター三体。私はサリエル、メドウサ、バリジウスの三体をリンクマーカーにセット、欲望の果てに力を得た王よ。絶大な力を秘めるその眼を開き、万物の下せ、リンク召喚！リンク3『呪眼の王 ザラキエル』！」

呪眼の王 ザラキエル ATK2600 LINK3

「ザラキエル……」

「私は墓地の『セレンの呪眼』の効果を発動。1000のライフを払い、もう一枚の『セレンの呪眼』を除外することでこのカードをセットする。そして、これをそのままザラキエルに装備」

時雨 LP5700↓4700

ザラキエルがセレンの呪眼を見開く。

「そして手札から『妬絶の呪眼』を発動。あなたのセットモンスターを手札に戻す」

「そんな……」

時雨 LP4700↓4200

呪眼の王 ザラキエル ATK2600↓3100

「バトルフェイズ。2600以上の攻撃力を持つモンスターをリンク素材にしたザラキエルは、二回の攻撃ができる。残念だけど、これで終わりよ。お嬢ちゃん」

「うわああああー！」

綾羽 LP4600↓1500↓0

一気に削られる綾羽のライフ。

まあ、さすがにあそこまでされてはどうにもなるまい。

『あー……なんか。一気に負けちゃったね』

「しかし、ヴァルハラ関係が手札に来すぎるっていうのも問題だな……」

ブルームと遊月としてはそんな感想である。

「フフフ。まだまだ強くなれるわよ。これからもがんばりなさいな」

時雨はそういつて綾羽の頭をポンポンと叩いた後、そのまま去って行った。

「……はあ、なんか、すごい人だね」

「そりゃ私の初恋の女だ。強いに決まってる」

「へえ……ん?!えっ?!?どういうこと?!」

驚く綾羽。

当然である。

『もうすでに結構冷めてるけどね。時雨さんって、子供が産めない体

になった男にあんまり興味ないし』

「な、なるほど……それはそれでどうということなの!？」

「文字どおりの意味だ」

文字通りの意味だ。

生きぞこないの遊月に、子供を産む能力など残っていない。

ただそれだけである。

『とはいっても、マスターと完全に離れるつもりは毛頭ないみたいだけれどね。まあ、時雨さんはハーレム容認派だし、綾羽ちゃんをからかいには来ていると思うけど、ちよつかい出しに来てはないと思うよ』

「え、そうなの?ていうかそれっていいことなの?」

『時雨さんが本気でしたら、止められるのはマスターくらいだからなあ』

何かを思い出しているのか、ブルツと震えるブルーム。

「それにしても……ハーレム容認派の人っているんだね」

『自分が一番だって確信してるからだよ。だから、ほかの女が寄ってきたとしても余裕なんだよね』

「……」

綾羽は改めて、『遊月君の関係者って頭おかしいんじゃないか?』と思ったが、それ以上は何も言わないことにした。

「……あれ?そっかえば遊月君は?」

『トイレ』

「……………そっか」

さすがに言葉が困る綾羽だった。

『そういえば、最後に伏せたセットモンスターってなんなの?』

「『マシユマカロン』だった」

『あ、それはだめだね』

総評。

まだまだ綾羽は甘い。

コラボ回 第一話

「……？」

香苗は疑問に思った。

昨日の夜、綾羽に負けたので自室（といっても遊月から借りている部屋）で寝ていたのだが、なんだかとてもいいにおいがする。

そして……うまく動けない。

「……!？」

「あら、起きたみたいね。フフフ。もうちよつと寝ていていいわよ」

香苗の意識は一気に覚醒。

目を開けて上を見ると、とてもきれいな顔立ちの女性が微笑ましい目で自分を見ていた。

「ん……………ん……………!」

叫ばれてはたまらないと思ったのか、自分の胸に香苗の顔を押し付ける女性。

とても大きくて形のいい胸である。

まあ、胸がでかいのは香苗も同じなのだが。

『うひよおおおおお！』『黒髪美女と銀髪ロリ巨乳の寝間着でウフフな絡み合い』だ。こりやたまんねえ!』

なんだか暴走している花がいる。

まあ要するに……この部屋に香苗の味方はいなかった。

……で。

「いつ来たんだ？時雨」

なんだか1000ポイントくらいのダメージを受けている様子の香苗と、とてもいい笑顔の時雨がリビングにいた。

本日は休日であり。授業はない。

遊月は休日であってもそこまでアムネシアの運営にかかわるような仕事をしているわけではない。

そもそも、『高校生活の三年間』というのは、遊月に与えられた長い休憩時間のようなものだからだ。

全く働かないというわけではないのだが。

「フッフ、かわいい子がいるんだから、気になるに決まっているでしょ？まあ、私はこれからいろいろ調べ物をしてくるから、今日はもうそろそろ出るけれどね」

「そうか」

とりあえず時雨を見ながら、遊月は思う。

（なんで時雨って、普段着は黒のドレスなのに、寝間着はピンクなんだろうか……まあいいか）

思考を放棄する遊月。

……そして、早速自分が以前使っていた部屋でパツパと準備をして、パツパと出かけていく時雨。

「なんか、すごいね」

「女の準備は時間がかかるというが、時雨の場合は素の自分に絶対の自信があるからな」

「でもドレスなんですよね」

「ドレスは普段着だからな」

意味不明である。

遊月はとりあえず時雨のことを置いておくことにして、遊月はタブレットをとりだして、ニュースを見る。

「……アムネシアの南東地区で、高ランクの悪霊がいる危険性がある……か」

「え、悪霊が出てるの？」

「確定ではないが、そもそも収集装置のせいで悪霊瘴気が集まりやすい。その結果、偶然が重なって強い悪霊になる場合がある」

というわけで……。

「一応、行っておいた方がいいだろうな。英明も今日は暇そうだから呼んでおこう」

というわけで、早速英明の電話番号を出してコール。

一回でつながった。

『もしもし、どうした遊月。こんな朝っぱらから』

「南東地区に高ランクの悪霊の気配があるらしいからな」

『……あ、ほんとだ。確かに注意が出てるな。これって確率は低いん

だよな』

「相当低いが、ゼロではない」

『分かった。今日は俺も暇だし、向かうことにするぜ』

「ああ」

通話終了。

「さてと、準備するか」

「創輝さん呼ぶの？」

「いや、今日は私が運転しよう」

「お兄ちゃんって車の運転できるんですか!？」

「出来るよそれくらい……私を何だと思ってるんだ」

まあ、そんなことをぐちゃぐちゃ言いながらも、遊月たちは自分の部屋に入っていた。

遊月がリビングにおいたタブレットを、ひよこつとブルームが見る。

『南東地区って、確か『あの店』の支店があったような……』

うる覚えのブルーム。

とはいえ、気にかけていいほどのものであることは間違いない。

★

その頃……。

「あれは一体、どういう顔にや……」

アムネシアとは根本的に別の空間である『メルト』の一角で、カフェ『黒猫亭』のオーナー。ウイズは呟いた。

猫耳がやや不安そうにぴくぴくしている。

「オーナー。どうしたの？」

そんなウイズに話しかけるのは、『召喚師ライズベルト』の精霊であるライズ。

この黒猫亭の従業員の一人である。

「さつき、ルシフィアが『すごい笑顔』で歩いてたにや」

「いつものことじゃないの？」

それでいいのか。と思わなくもないが、それを言っても仕方がない。

神聖な儀式をしていると思っっている連中が、注意された程度で止まるわけがないのである。

「あはは！まてまて〜！」

『うわああー！やめろおおお！調味料と水を持ってこっちくんなああ！』

まだ営業前だからと言って、かなり自由な様子の幼女二人と猫。

それぞれ、ヒュプノシスターと召喚師セームベルとトランスファミリアであり、愛称は『ヒュプノ』『セーム』『トラファ』だ。

「また猫鍋かにゃ」

「なんか衝動的にやりたくなつたみたいで……」

「幼いって結構物騒にやね……」

ウイズは『ここにも問題はあつたにゃ』と言いたそうな顔になった。

『おいライズ！そんな余裕そうに構えてないで助けてくれよ！』

「え……」

ライズがトラファを見る。

だがしかし、妹に甘いライズは、トラファよりもセームとヒュプノが目に入る。

二人とも、目をウルウルさせていた。

ライズはここで、一度考えた。

ヒュプノは十四歳、セームは十一歳。

確かに二人とも幼いが、もうそろそろ、十五歳である自分がしっかりと注意するべきなのではないかと。

……とかなんとか、コンマ一秒で考えて、ライズは言った。

「セーム。ヒュプノ……頑張れ！」

シスコンにはまあ無理な話である。

『薄情者おおおおー！』

トラファは再び逃走。

二人は再び追いかけていった。

「……ハッ！俺は一体……」

「いや、もう遅いにゃ」

「そう言えば、前はすぐに片づけさせたのに、なんで今日はスルーなん

ですか？」

「たまには息抜きも必要にや。何かそうした方がいい気がしたにや」
さて、そう言った時、ドアが開いて一人の少女が入って来る。

「あ、リフィル……どうしたにや？何か不安そうな顔をしてるにや」
入って来たのは、黒猫亭の従業員のリフィル。

手に持っている紙を見ているが、何か悪いことでもあったようだ。

「支店からの情報が来た」

「ん？どつちにや？」

ウイズたちが今いる『本店』の他に、支店が現在二つある。

「アムネシアの方だ」

「あつちかにや。確かに悪霊は多いみたいだけど、黒猫亭には近づけないはずにやよ？」

「それが、高ランクの悪霊が発生しているらしい」

「ふむ……」

ウイズは腕を組む。

ぶつちやけてしまえば、高ランクの悪霊であろうと、黒猫亭に近づけないことに変わりはない。

もちろん、黒猫亭に近づけないというだけで、黒猫亭付近のエリアに悪霊が来れないわけではないので、カフェの売り上げには響くかもしれない。

が、一応の報告としては、それで終了。

この話は終わりで、今日も普段通りに……

(ん?)

ウイズは一つ、思いだした。

(ルシフィアはとても、良い笑顔だったにや)

それは、今朝見かけたルシフィアの顔。

とても笑顔で、なにやら嚴重なケースを持っていた。

どこかで聞いた『神聖な取引』だろうか。

(ルシフィアがアムネシアの方で取引している可能性は十分考えられるにや)

一度考え始めれば、ウイズの頭は回る。

(もしも、アムネシア支店のそばで、高ランクの悪霊が発生したらどうにやる?)

ルシフィアと言えど、高ランクの悪霊を放置はしないだろう。

第一、いつ取引現場に出て来るかわからない悪霊はあまり放置したくない。

そうなれば、ルシフィアはどうするか。

(当然、デュエルをするはずにや)

そして、思い浮かぶ。

バカげた数字を叩きだす。あの一撃を。

(もしも……もしも、支店のそばで悪霊が発生したら、支店のそばでデュエルするはずにや)

可能性は低いかもしれない。

リフィアの念押しが若干甘いということもあるが、そもそも、アムネシアは悪霊に対して警戒が強く、大きな問題はかなり早く解決される。

(ルシフィアの運命力はすごいにや。そんじょそこらの悪霊相手でも、三百万とかはいかなくても、多分百万はいくにや)

悪霊が黒猫亭に近づけないことに変わりはない。

だが、『余波』はどうだろう。

平和なメルトでは、ルシフィアに都合の良い補正がかかるだろう。

だが、アムネシアまでそうとは限らない。

(……)

ウイズの額に汗が流れ始める。

「今日は本店はお休みにや！支店の様子を見に行くにや！」

「え？」

ライズとリフィルは驚く。

二人とも、ウイズがそこまで気にかけているとは思っていなかったのだろう。

ウイズは常連客の予定を確認。

(ふむふむ、今日はみんな結構予定があるにや。すぐ行ってすぐ帰って来れば問題なさそうにや)

セームとヒュプノも、アムネシアには行ったことが無い。
が、まあ、きつと大丈夫だろう。

(支店が原子分解する可能性があるにや。万が一でも、止めた方がいいにや)

もちろん、どれほど攻撃力が高かろうと、単なるソリッドビジョンだ。

だがしかし、文字通りケタが違うとどうなるのか。

実はそのデータは、あまり出回っていないのである。

若干不安な様子のウイズを筆頭に、リフィル、ライズ、セーム、ヒュプノ、トラファはアムネシアに向けて出発した。

★

「はあ、今日は開店休業かなあ」

黒猫亭・アムネシア支店。

そこでは、ウイズが現地で雇った支店長の少女がいた。

幼い顔立ちで、猫耳としっぽがあり……説明が面倒なので暴露すると、『No. 29 マネキンキャット』である。

精霊にしては珍しく、肉体に縛られている存在だが、本店のオーナーの周辺メンバーを考えると『まあそりゃ選ぶだろうなあ』という特徴だ。

ネームプレートには『マネキ』と書かれており、そこもまたウイズが選ぶには不自然のないものである。

「まあ、悪霊が来てるみたいだし、仕方ないか。一応、本店には連絡してるから、大丈夫だと思っただけど……」

そんなことを考えた時だった。

「……あれ？ルシフィアさん？」

本店によく来ているルシフィア。

ただし、アムネシアに来ているときはよく支店のほうを通るのだ。窓から見えたので少し気になった。

「また何かの取引かな？」

そもそも支店によくブルームが来て『フッフ』と笑っていることがあるので、その関係で知っているのである。

とはいえ、その程度だ。

まだまだ黒猫亭の支店長としての期間が短いマネキ。

「どうやら、『要石』として存在するということがわかっていない様子。」

平和だと思っているのだった。

★

「ウフフフフ。ブルームさんが『黒髪美女と銀髪ロリ巨乳の寝間着でウフフな絡み合い』を録画できたとのことでしたから、逃すわけにはいきませんね」

神聖な儀式の取引のため、アムネシアに来ているルシフィア。

その顔に浮かんでいるのは、ブルームから伝えられた題名から察せられる『楽園』の1ページを見るかのような、そんな表情をしている。正直、ゆるふわ系といえる顔がすごいことになっている。

『変態紳士と変態淑女の会』として、この取引は必ず完遂しなければ

……おや？」

『グルル……』

取引現場に向かう途中、唸り声が聞こえてきた。

ルシフィアが振り返ると、そこにいたのは『疫病狼』であった。

悪霊瘴気が漏れ出ており、そもそもの性質も相まってやばいことになっている。

「ほう、悪霊瘴気としての質が高いものですね。高ランクの悪霊でしようか」

「どうやら、ブルームとの『神聖な取引』で脳内を占領されて、悪霊についての情報を調べていない様子のルシフィア。」

「とても彼女らしいが、そういう人に限って悪霊に遭遇するのである。」

「私は今、とても気分がいいのです。まあ、いずれにせよ一撃で終わりますから、さっそく始めましょうか」

ルシフィアはデュエルディスクを取り出し――

「デュエ「待つにゃあああああああああー!」

ルシフィアの背後からとんでもない絶叫を出すのは、黒猫亭・本店

のオーナー。ウイズである。

その手には、『デュエルにおけるダメージの実体化の考察 著：レイジング』と書かれた本がある。

葉がはさまれているところを考えると、どうやら相当やばいことが書かれていたようだ。

ちなみに、書いた本人はアニメでブレスで壁をぶっ壊しているので、説得力が尋常ではない。

「あら、ウイズさん。どうしたのですか？」

「こんな支店の近くでデュエルされたらたまらんにゃ！ブラマジ！
ガール！たのむにゃ！」

ウイズが二枚のカードを掲げると、ウイズのそばに『ブラック・マジシャン』と『ブラック・マジシャン・ガール』が出現。

「なるほど、おや？疫病狼が自分の効果も使っているみたいですね
雄たけびを上げる疫病狼。」

「関係ないにゃ！『黒・魔・導・連・弾』を発動にゃ！
『いくぞー！』

『はいー！』
ブラマジとガールが杖を合わせて、エネルギーを集中。

『『黒・魔・導・連・弾！』』

そのエネルギー弾は、たやすく疫病狼を貫いた。

「……ブラマジだけでよかったのでは？」

「高ランクの悪霊だから、まあ念には念を入れただけにゃ」

出番は終わったのか、ブラマジとガールは引っ込んだ。

「さてと、リフィルたちを支店に預けてるから、とりあえずそっちに行くにゃ」

「私もそうしましょう」

(……まあ最悪、デュエルするとなれば距離を取ればいいにゃね)

悪霊は退治したが、なんだか疲れたウイズ。

「……にゃ？」

心配を感じたウイズ。

「む、ウイズさん。どうやら囲まれているようです」

「そうみたいだにゃ」

いつの間にか、大量の『疫病狼』が二人を包囲していた。

「むう、ちよつと面倒にゃ」

「ですが、問題なさそうですね」

「どういうことになゃ？」

ウイズが素晴らしいながらルシフィアのほうを向いた時だった。

『光牙 エンディング』

そんな機械音声が聞こえた。

次の瞬間、オオカミがたまっているところに、『M・HERO 光牙』が降ってきた。

「にゃ!？」

「足がもげそうですね」

「こら、ルシフィア、現実的なことを言うんじゃない。

「さっさと片付けるか」

「いくよ。ルインー!」

次にあらわれたのは、『真紅眼の黒竜剣』を持つ『ロード・オブ・ザ・レッド』と、『巨乳の女神ルイン』であった。

ルシフィアはこっそり写真を撮った。特にルインを。

そんなことはお構いなしに、二人は剣と槍をそれぞれ使って疫病狼をなぎ倒していく。

「行きますよー!」

遠くからそんな声が聞こえたので、ウイズとルシフィアが振り向く。

そこには、グスタフ・マックスの主砲のようなものがついている等身大の機械鎧を身にまとった少女が、こちらに向かって主砲を向けていた。

ルシフィアはこっそり写真を撮った。

そんなことはお構いなしに、少女は大砲をブツパする。

疫病狼はなぎ倒されていった。

(うちのルシフィアもそうにゃけど、この嬢ちゃんも容赦にゃいにゃ……)

ウイズは頭が痛くなった。

とまあ、それはそれ、これはこれ……でいいということにしよう。心には平穏が必要だからだ。

疫病狼の殲滅も終わって、全員が変身や換装を解いた。

「ふう、で、大丈夫か？」

腐った眼の少年が話しかけてくる。

「あ、大丈夫にや。助けてくれてありがとうにや」

「ふう、何事もなくてよかったです」

笑顔で銀髪の少女が話しかけてくる。

それをみて、ルシフィアは頭がフル回転！

(ぎ……銀髪のロリ巨乳！まさか、ブルームさんからの映像には、この子が『ピーーーー』する映像が映っているのでしょうか!?)

まあ、こんな具合である。

……ただし、ブルームの性癖が『一線を越えないエロを楽しむ』のため、それに影響されているルシフィアも、そこまで激しいものだと考えていない。

誤解がないといえたいことなのだが……大丈夫なのだろうか。

ちなみに、なぜ伏字にしたかといえれば、単に彼女の沽券のためである。

「あ、私はウイズっていうにや。ちよつと遠くのカフェのオーナーをしてるにや。こっちはルシフィアにや」

「どうも、ルシフィアといいます。よろしくお願いしますね」

ウイズ側が自己紹介をしたので……。

「不死原遊月だ。よろしく」

「俺は仮澤英明だ」

「あ、大東綾羽といいます。よろしくね」

「私は江藤香苗です！よろしくお願いします！」

さて、自己紹介は終了。

あまりにも簡単すぎるが、まあ、この程度である。

「あ、このあたりには支店があるにや。今日はちよつと様子を見に来てるだけにやけど、みんなも来てもらえると嬉しいにや。(まずは常

連客の確保にや)」

かつちり運営のことも考えながらそんなことを言うウイズ。

それに対して四人は……。

「まあ、悪霊退治が目的だったが、あまりこのあたりにはこないからいいんじゃないか？」

と遊月が言ったので、ほかの三人ともうなずいた。

そんなわけで、六人で黒猫亭・アムネシア支店に行くことになった。

★

「あはは！まてまて〜！」

『今度は何も持たずに来るのか！っていうかその満面の笑みって怖いんだけど！』

アムネシア支店では、ヒュプノとセームがトラファを追いかけていた。

『元氣な幼女って見ていていいよなあ』

ブルームはそんなおっさんくさいことを言いながら、コーヒーを飲んでいた。

ちなみに、かなりやばいレベルのプライバシーがかかわる取引を常日頃から行うのが『変態紳士と変態淑女の会』なので、取引がうまくいかない場合の予備プランはいくつも存在する。

裏路地での取引はあきらめて、人が集まっでごちやつとした時にパツと取引をする方向にシフトしたようだ。

意気揚々と裏路地を歩いていたルシフィアが『支店に行く』といった理由がこんなところにある。

「でも、そんな高いコーヒーでいいの？」

『問題ないよ。リフィルさんが作ったコーヒーっておいしいし』

「ありがとうございます」

「でも、一杯4500円の『ブルーアイズ・アルティメット・マウンテン』を普通に飲めるってすごいですよね」

ブルームの懐事情を心配するライズだが、ブルームは印税をもらっている問題はない。

コーヒートの腕が絶品のリフィル。

支店に預けられたわけだが、ブルームという客がいたし、そのブルームが最高金額のコーヒーを注文したので、支店長をそっちのコーヒーを作って出したわけだ。

それでいいのか。マネキ。

『……お、そろそろマスターたちが来るね』

そうブルームが言った時だった。

「マネキ！商売は繁盛しているかにや！」

ウイズが正面から入ってきた。

「お、オーナー!?なぜここに!?!」

支店長のマネキはびっくり。

「フッフ……常連客候補を連れてきたにや！」

「客の前で言うなよ……」

溜息を吐きながら、ウイズの後ろから遊月が入ってくる。

まあ、ウイズもウイズで、アムネシアで『招き猫』がモチーフであるマネキンキャットを拾って支店長にするあたり必至であるが。

そんなオーナーと支店長のやり取りをよそに、ルシフィアはブルームと目があつた。

アイコンタクトで通じ合っている様子の二人。

「あ、お客さんだ！いらつしやい！」

セームとヒュプノの二人が、遊月たちを見て挨拶をする。

そして、遊月たちが二人のほうを向いた瞬間……。

シュパパパパ!

(……ふう)

(取引完了)

いい笑顔で取引（というより交換）は完了したようだ。

尻目に見ていた遊月はスルー。

「あ、いらつしやいませ〜」

マネキが一步遅れて挨拶をする。

まあ、このテンポについていくのは難しいのでウイズもそこはスルーした。

『さてと、とりあえず自己紹介からしておく?』

ブルームはそういった。

……正直、飲食店にいつて最初にするようなコミュニケーションではない。

しかし、そう言ったことを即座に言えるのがブルームの特徴とも言える。

「まあ、それもそうですね」

ライズもうなずいた。

というわけで、それぞれが自己紹介である。

先ほど、遊月たち四人とウイズ、ルシフィアは済ませているのだが、黒猫亭の従業員は分かっていたいなかったので、必要なことである。

『さてーデュエリストが何かそろってきたし、デュエルでもする？』

ブルームがそういった。

デュエルをする。というブルームの宣言に、デュエリストたちは『やろつか』見たいな空気になった。

デュエリストなら別に問題などなにもない。だってデュエリストなのだから（謎）。

だがしかし、ウイズは違った。

「でもまあ、場所は考えた方がいいにや。お互いに大型モンスターを出した時、このあたりだと色々迷惑にや」

ウイズとしては『支店が原子分解したらまずいにや』と言ったものなのだが、他のメンバーとしても納得している。

「そうだな。このあたりはそれなりに建物が多いし、そもそもまだ朝早い時間と言っていていいからな」

遊月の補足もあつて、移動することになった。

★

アムネシアは『ソリッドビジョンを用いたデュエル』をするにふさわしい広さが確保されたデュエルコートがいくつも存在する。

そのうちの一つに集合した。

……ちなみに、『さすがに本店も支店も休みにするのはまずいにや』ということ、マネキは支店においていかれた。かわいそうに。

『というわけで！』『アムネシア組』と『メルト組』でデュエルをするぞ

！』

ブルームが宣言した。

「……メルトって何だ？」

英明がそういった。

遊月と綾羽と香苗も首をかしげているところを見ると、どうやら全員が知らない様子。

「黒猫亭の本店があるところですよ。今度いらっしやってくれらうらしいです」

そしてしっかりと宣伝も混ぜながら説明するリフィル。

クールビューティーと言う設定に恥じないセリフである。

『というわけで、くじびき作ったからこれ引いてね』

くじが四本ずつはいったコップをブルームがそれぞれの組に渡した。

全員がくじを引く。

なお、くじにはそれぞれ、『1』から『4』の数字がかかっている。結果……。

- 1 香苗VSルシファイア
- 2 英明VSライズ
- 3 綾羽VSリフィル
- 4 遊月VSウイズ

となった。

『ほう、一回戦から脳筋対決になったなあ』

ブルームがメタいことを言う。

「え、と言うことは、ルシファイアさんもパワーデッキですか？」

「そうよ。私は今日は気分がいいから。全力で相手してあげるわ。

(グフフフ。こんなかわいい子とデュエルなんて、今日は本当にラッキーね)」

内心で何を考えているのか、メルト組ははつきりわかっていたが、あえて言わない。

「むむっ、私は【列車】デッキですからね！パワーなら負けませんよ！」
張り切っている様子の香苗だが……。

(正直、無理だと思おうにや)

(まあ、頑張ってください)

始まる前から心配になったウイズトリフィール。

『なーんか、すごく微妙な空気だな』

トラファアが呟くが、おそらくこの場の空気を最も表現しているといえるだろう。

というわけで、デュエルコートの指定位置になって、デュエルディスプレイを構える。

「デュエル！」

香苗 LP8000

ルシファイア LP8000

先攻はルシファイア。

ルシファイアは手札を見て、とても良い笑顔になった。

「なんか、すごいことになりそう」

「でもでも、ルシファイア姉さんですから、きつと記録を更新してくれませよー！」

ヒュプノとセームがルシファイアの顔を見てそんなことを呟いた。

「私の先攻。まずは『手札断殺』を発動、お互いに手札交換よ」

「む、分かりました」

お互いに、二枚を墓地に送って二枚ドロー。

「この時、墓地に送られた『髑髏顔 天道虫』の効果により、私のライフを1000回復」

ルシファイア LP8000↓9000

「そして、永続魔法『魔力節約術』を発動して、魔法カード発動のライフコストをなくして、『エンシェントリーフ』を三枚発動！」

「え……き、三枚!?!」

流石の香苗も驚く。

エンシェント・リーフは、ライフが9000以上の時、2000ポイントのライフコストが必要となる。

普通のデュエルならば、そもそもエンシェント・リーフが手札に来る確率なども考えると一枚が限界だろう。

だが、ノリに乗っているルシフィアは、普通ではない。

「私はこれにより、カードを合計で六枚ドロ。ふむ、このルートね。私はカードを四枚セット、『カードカー・D』を召喚して、リリースすることで効果を発動。二枚ドロして、ターン終了よ」

「この瞬間、墓地に送られた『無頼特急バトレイン』と『弾丸特急バレット・ライナー』の効果を発動です！バトレインの効果でデッキから『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を手札に加えて、バレット・ライナーの効果で、バトレインを回収します！」

そして、ターンが移る。

「私のターン。ドロー！」

「スタンバイフェイズ。『ゴブリンのやりくり上手』三枚。そして『非常食』を発動するわ」

「ええ!？」

これには外野もびっくり。

「あの人、一体何のゲームをやったんだ。ポーカーじゃねえんだぞ」「ていうか実際、ポーカーも強そうだな」

「ルシフィアは運命力がすごいにや。まあ、耐えてほしいにや」

英明の眩きに対して遊月は苦笑する。

ウイズとしては……『これがルシフィアにや』としか言いようがなかった。

「結果としては、4000回復、その後十二枚ドロして、三枚を戻すわね」

ルシフィア LP9000→13000

これにより、ルシフィアはフィールドにカードはないが、手札は驚異の十二枚だ。

三枚デッキに戻したが、元々三枚握っていたのでこうなってしまうた。

もはや意味不明である。

「む……むぐぐ……」

香苗が唸っている。

手札は八枚。

多い方だ、多い方なのだが……なんだこれは。

「ですが、ルシフィアさんのフィールドにカードはありません！私は『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を妥協召喚！さらに、『弾丸特急バレット・ライナー』を特殊召喚です！」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト ATK 0 ☆

10

弾丸特急バレット・ライナー ATK3000 ☆

10

「私は二体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築、エクスシーズ召喚！ランク10『超弩級砲塔列車グスタフ・マックス』！」

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス ATK3000 ★10

『ちよつとだるいけど頑張ろつか……うわつ、何だあの手札……』

だるそうな様子で出て来るグスタフだが、ルシフィアの手札の枚数を見て愕然とする。

「グスタフ・マックスの効果発動！オーバーレイユニットを使って、ルシフィアさんに2000ポイントのダメージを与えます」

「フフフ、さすがにここまで手札があって、防御札がないということはありませんよ。手札から『ハネワタ』を捨てて、このターンの効果ダメージを無効にします」

「ならば、私はグスタフ・マックスでオーバーレイネットワークを再構築！」

グスタフ・マックスがオーバーレイユニットとなって渦に飛び込んで行く。

「全てを滅する力を得て、いざ、出動！ランクアップ・エクスシーズ・チェンジ！ランク11『超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ』！」

超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ ATK4000 ★11

『ホッホッホ。さて、ワシも老骨に鞭を……いや、あの手札枚数は何じゃ』

リーベも驚く手札枚数である。

「リーベの効果を発動。2000ポイントアップです！」

超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ ATK4000↓600

「そしてバトルフェイズ！ジャガーノート・リーベで、ダイレクトアタック！」

「手札から『速攻のかかし』の効果を使い、バトルフェイズは終了です」
「……通る気配がないですね。私はカードを三枚セットして、ターンエンドです」

「私のターン。ドロー」

香苗のターンに手札を二枚使ったが、ドローしたことで手札は十一枚。

まるで意味が分からんぞ！

「まずは『ハーピィの羽根帚』を使って、セットカードを全て破壊！」「うわっ！」

三枚とも破壊される。

『超信地旋回』と『デモンズ・チェーン』と『次元幽閉』だ。

いずれもこのタイミングでは使えない。

「ふむ、なかなか妙な手札ですね。カードを五枚セット、ターンエンドです」

「私のターン。ドロー！」

「スタンバイフェイズ。永続罫『女神の加護』三枚！これにより、ライフを合計で9000回復します！」

ルシフィア LP13000↓22000

「22000……ですが、女神の加護はフィールドを離れた場合、3000のダメージが発生するはず！」

「勿論そんなドジは踏みませんよ。私は手札一枚をコストに『レインボー・ライフ』を発動し、チェーンして『非常食』を発動！」

「……」

「非常食の効果で、四枚を墓地に送ることで4000回復、さらに、女神の加護のデメリット効果が発動しますが、レインボー・ライフの効果で回復に変わります！」

というわけで。

ルシフィア LP22000↓26000↓35000

「ライフポイント、35000ですか……」

「どうしますか?」

「削れませんが、動けるだけ動きます!」

香苗の手札は四枚ある。

まあ、動くだけならできるだろう。

「私は手札からフィールド魔法、『転回操車』を発動します!」

香苗の背後に車両ドッグが出現する。

「そして、手札から『深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト』を妥協召喚します!」

深夜急行騎士ナイト・エクスプレス・ナイト ATK0 ☆10

「転回操車の効果で、デッキから『無頼特急バトレイン』を、レベルを10にして特殊召喚です!」

無頼特急バトレイン ATK1800 ☆10

「さらに、手札から『弾丸特急バレット・ライナー』を特殊召喚!」

弾丸特急バレット・ライナー ATK3000 ☆10

「出てきてください。重機を呼び起こすサーキット!召喚条件は、機械族二体。私はバトレインとリーベを、リンクマーカーにセット!新たな設計図で、いぎ連結!リンク召喚!リンク2『機関重連アンガー・ナツクル』!」

機関重連アンガー・ナツクル ATK1500 LINK2

大型のエクシーズを素材に出てくるアンガー・ナツクル。

まあ正直、エクストラモンスターゾーンをエクシーズが占領していると邪魔である。

「さらに、ナイト・エクスプレス・ナイトとバレット・ライナーでオーバレイ!」
No.81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドーラ!」

No.81 超弩級砲塔列車スペリオル・ドーラ ATK3400

★10

『さて、そろそろ私の出番に——ライフポイント35000!』

ドーラも驚愕。

「私はカードを一枚セット、ターンエンドです。バトレインの効果で、デッキから『重機貨列車デリックレイン』を手札に加えます」

「フッフ。私のターン。ドロ―」

ルシファイアの手札はドロ―して五枚。

「まずは、『カップ・オブ・エース』を三枚発動。運命はすべて私に味方しているわ！すべて表！カードを六枚ドロ―！」

「!?!?!」

「もはや言葉にならない香苗。」

「!?!? いったいどんな運命力だ。」

それはともかく、手札は八枚。

「こ、これは悪夢だな」

「さすがは私たちには到底できないことをやってくれるルシファイアお姉ちゃん！そこに痺れる憧れる！」

『いや、そこは『この人でなし！』じゃねえの!?!?!?!?! あれ、気のせいかな？前にもこんなことを言った気がする』

外野も絶好調だ。

「私は手札から、『死者蘇生』を発動し、墓地から『力の代行者 マーズ』を特殊召喚」

力の代行者 マーズ ATK0 ☆3

「さらに、速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動。さらにマーズを特殊召喚！」

力の代行者 マーズ ATK0 ☆3

力の代行者 マーズ ATK0 ☆3

「そしてフィールド魔法『天空の聖域』を発動！」

そして出現する『天空の聖域』

その『存在感』を感じ取った遊月はあることを感じたが、この場で指摘するのは無粋だと判断したのか、沈黙する。

「そしてマーズたちの攻撃力は、『天空の聖域』が存在し、相手よりもライフが多い場合、その差の分だけ攻撃力がアップする！」

ルシファイアは35000

香苗は8000

よって……。

力の代行者 マーズ ATK0 ↓ 27000

力の代行者 マーズ ATK0↓27000
力の代行者 マーズ ATK0↓27000

「さらに、『神秘の中華なべ』を三枚発動。それぞれの攻撃力分、私のライフを回復！」

一回目

ルシファイア LP35000↓62000

力の代行者 マーズ ATK27000↓54000 ×2

二回目

ルシファイア LP62000↓116000

力の代行者 マーズ ATK54000↓108000

三回目

ルシファイア LP116000↓224000

「んな……ライフが……ライフが……」

香苗がついにパニック症状を起こした。

「私の手札は二枚。ちよつと使いすぎたわね。でも『トレード・イン』を発動。手札から『マスター・ヒュペリオン』を捨てて二枚ドロ。来た！」

何が？

「私はフィールド魔法を張り替えて、『祝福の教会ーリチューアル・チャーチ』を発動！その効果により、墓地の『カップ・オブ・エース』二枚、『神秘の中華なべ』三枚、『エンシエント・リーフ』三枚をデッキに戻して、レベル8の『マスター・ヒュペリオン』を特殊召喚！」
マスター・ヒュペリオン ATK2700 ☆8

「そして、墓地から『錬装融合』の効果！このカードをデッキに戻してシャッフルして、一枚ドロ。『魔力節約術』を発動して、『エンシエント・リーフ』を発動。そして引いた『エンシエント・リーフ』二枚を使って、四枚ドロ。そして『カップ・オブ・エース』二枚も使つてさらに四枚ドロ！」

「いや？」

「ハ、これはいったい……」

普段から運命力を見ているメルト組も愕然とするドロ数。

とりあえず、あれだけ使って手札は6枚。

『アドバンスドロウ』を使って、マスター・ヒュペリオンをリリースして二枚ドロウ。発動されている『魔力儉約術』でコストを踏み倒して、『サモン・ダイス』を発動。出目は……3！墓地から『力の代行者 マーズ』を特殊召喚！」

力の代行者 マーズ ATK0 ☆3

「さらに、『地獄の暴走召喚』を発動！」

「まさか……」

「さらに出てきなさい！」

力の代行者 マーズ ATK0 ☆3

力の代行者 マーズ ATK0 ☆3

「そして永続魔法『パースィアスの神域』を発動。このカードは、『天空の聖域』として扱えるわ！」

力の代行者 マーズ ATK0 ↓216000

力の代行者 マーズ ATK0 ↓216000

力の代行者 マーズ ATK0 ↓216000

「あ、墓地から『ヘルウェイ・パトロール』を除外して、手札から『レッド・リゾネーター』を特殊召喚するわね」

レッド・リゾネーター DFE200

「マーズを選択するわ」

ルシフィア LP224000 ↓440000

力の代行者 マーズ ATK216000 ↓432000 ×3

「さらに、『神秘の中華なべ』三枚を再び発動！」

一回目

ルシフィア LP440000 ↓872000

力の代行者 マーズ ATK432000 ↓864000 ×2

二回目

ルシフィア LP872000 ↓1736000

力の代行者 マーズ ATK864000 ↓1728000

三回目

ルシフィア LP1736000 ↓3464000

「な……ライフが……三百万を超えた!？」

『貪欲な壺』を使って、マーズ三人とハネワタ、かかしをデッキに戻して二枚ドロ。手札から『終末の騎士』を召喚して、デッキから『D—HERO ディアボリックガイ』を墓地に、レッド・リゾネーターと終末の騎士でリンク召喚! 『水晶機巧—ハリファイバー!』

水晶機巧—ハリファイバー ATK1500 RINK2

『ハリファイバー』の効果で、デッキから『ハネワタ』を特殊召喚! さらに、ディアボリックガイを墓地から除外して、二体目を特殊召喚!

ハネワタ

ATK200 ☆1

D—HERO ディアボリックガイ ATK800 ☆6

「レベル6のディアボリックガイに、レベル1・光属性のハネワタをチューニング、天空に舞いし翼龍よ、天使の加護を受け、この世界に舞い降りよ! シンクロ召喚! さあ、現れ出でなさい! エンシエント・ホーリー・ワイバーン!」

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK2100 ☆7

「エンシエント・ホーリー・ワイバーンは、私のライフが相手より多い場合、その数値分アップする! ……『パースィアスの神域』で300上がるけど、まあ今更ね」

ちなみに、マーズも天使族ではあるが、そもそもマーズは魔法カードの効果を受けない。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK2100 ↓2400

↓3458400

「念には念を入れて……『強欲で貪欲な壺』を使って、デッキの上から十枚除外して二枚ドロ。『ライトロード・ビースト ウォルフ』を捨てて、『ソーラー・エクステンジ』を発動。二枚ドロして、デッキから二枚墓地に。『星遺物を継ぐもの』を発動。『マテリアルドラゴン』をハリファイバーのリンク先に特殊召喚!」

マテリアルドラゴン ATK2400 ☆6

「バトルフェイズ! エンシエント・ホーリー・ワイバーンで、アングラー・ナツクルを攻撃!」

「……今日の朝のデッキ調節の時、このカードを入れた私を恨みます

！罨カード『魔法の筒』を発動！攻撃を無効にして、そのモンスターの攻撃力分、ダメージを与えます！」

「マテリアルドラゴンの効果により、回復に変更」

ルシファイア LP3464000↓6922400

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK3458400↓6916800

「そして、攻撃が無効になったことで、『ダブル・アップ・チャンス』を発動。攻撃力を倍にして、もう一度攻撃を行う！」

「え……ええ!？」

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK6916800↓13833600

「こ、攻撃力が……一千万を超えた!？」

『パラダイス・ロスト』！」

古代の光の龍のその光が、あたり一面を覆い尽くした。

香苗 HP……じゃなくて LP8000↓0

「フッフ、大勝利よ！さあ、ライズ、英明さん。次のデュエルよ」

(いや、マジかよ。この空気デデュエルするってのか?)

思わず頬が引きつる二人。

「信じられない攻撃力だったな」

「あ、ちなみに、普段は『DNA改造手術』と『リミッター解除』二枚を使って、さらに四倍くらいになってるにや」

「じゃあ、もっと本気でしたらあれの四倍ってこと?」

「もしそうだったら、攻撃力は五千万を超える」

遊月がつぶやいたので、ウイズは頭痛をこらえながら補足する。

綾羽は気が付いたようにそう言ったので、リフィルが電卓で計算する。

そんな中、ルシファイアだけがうつとりした表情で、完全に気を失っている香苗を膝枕しているのであった。

誰か、この空気をどうにかしてくれ。

コラボ回 第二話

一千万を超える攻撃力。

圧倒的な数値を見てなかなか静寂に包まれているし、一人気絶している。

このままでは大変まずいので、どーにかする必要がある。

「とういわけで、ライズ。困った時はデュエルだー!」

「え、あ、はい!」

英明は少々まずい空気をどうにかしようと思って、結果的にそんなことを言った。

ライズも『どうすりやいいんだこれ』と聞いたような雰囲気だったので、とりあえずデュエルコートの指定位置に立つことに。

「ライズおにいちゃん。頑張つて!」

「フレー! フレー! おにいちゃん!」

そしてそんなライズを見て元気よく応援する二人。

「ああ、任せろ!」

そしてそれを見て元気になるライズ。

さすが妹に甘いだけあって、その妹から応援されるとテンションが上がるようだ。

「英明君。頑張つて!」

「よっしゃあ! やるか!」

そして英明も声援ブーストがかかった。

「若いにや……」

「いや、ウィズも若いだろう」

本店も支店も客が増える気配があまりない上に、なんだかとても哀愁が漂う雰囲気ウィズ。

それ相応に普段からいろいろ抱えている遊月もなんとなくわかるのか、そのフォローも弱い。

「フフフ。幼女の応援っていいですね」

「まあ、それはそうなんだが……」

気絶している香苗の頭をなでながらそんなことを言うルシフィア。

リファイルとしては『この空気の元凶が何を言うんだか』といったところだろう。

『というわけで、第二回戦！英明VSライズだ！双方頑張るように！』『デュエル！』

英明 LP8000

ライズ LP8000

「僕の先攻！」

先攻はライズ。

なのだが、手札を持った瞬間に手が止まった。

「どうしたにや？ライズ」

「いやあの、僕、本家のほうでデュエル描写がないから、デッキの名前しか作者が知らないような気がして……」

「メタいこと言っていないでさっさとデュエルするにや！」

まさかコラボまでやっておきながら『メタいことを言うな』と指摘する日が来るとは思わなかったウイズ。

「僕は手札から、魔法カード『調律』を発動！デッキから『ジャンク・シンクロン』を手札に加える」

「ほう、なるほどな」

「そのあと、デッキをシャッフルして、デッキトップを墓地に、そのまま『ジャンク・シンクロン』を召喚して、墓地の『ドツペル・ウオリアー』を特殊召喚！」

「『ジャンクドツペル』……『調律』一枚でそろえてくるとか、なかなかの運命力してるぜ……」

英明もこれには驚きである。

ただ、先ほどのデュエルのアレを見ているせいから、『デュエルってのは何でもアリだな』と思い始めているので、問題はない……問題は無い！

「僕はレベル2のドツペル・ウオリアーに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング。シンクロ召喚！レベル5『アクセル・シンクロン』！」

アクセル・シンクロン ATK500 ☆5

「シンクロ召喚成功時、ドッペル・ウォリアーの効果。トークンを二体特殊召喚！」

ドッペルトークン ATK400 ☆1

ドッペルトークン ATK400 ☆1

「アクセル・シンクロンの効果で、デッキから『ジェット・シンクロン』を墓地に落として、レベルを一つ下げる。そして、アクセル・シンクロンとドッペルトークン一体をリンクマーカーにセット、リンク召喚！リンク2『水晶機巧―ハリファイバー』！」

水晶機巧―ハリファイバー ATK1500 LINK2

「ハリファイバーの効果発動。デッキからレベル3以下のチューナーモンスター。『D・スコープン』を特殊召喚！」

D・スコープン DF E1400 ☆3

「ハリファイバーで出したモンスターは効果を発動できないけど、無効にはなっていないから永続効果は適用される。そして、D・スコープンは守備表示の時、レベルが4になる！」

D・スコープン ☆3↓4

「へえ、そんなシナジーがあるのか」

素直に驚く英明。

まあ、彼のデッキにそもそもチューナーが入っていないので、必然的にハリファイバーが入らないのだ。無理もない。

「おにいちゃんすごい！」

「頭いい！」

幼女たちも応援。

「へへっ、『ダーク・バースト』を使って、墓地の『ドッペル・ウォリアー』を手札に加える。手札一枚をコストに、墓地の『ジェット・シンクロン』の効果を発動して特殊召喚！そして、手札に戻したドッペル・ウォリアーがこれに反応して特殊召喚！」

ジェット・シンクロン ATK500 ☆1

ドッペル・ウォリアー ATK800 ☆2

「レベル1のドッペルトークンに、レベル4のスコープンをチューニング！シンクロ召喚！『TG ハイパー・ライブラリアン』！」

TG ハイパー・ライブラリアン ATK2400 ☆5

「レベル2のドッペル・ウオリアーに、レベル1のジェット・シンクロンをチューニング、シンクロ召喚！レベル3『武力の軍奏』！」

武力の軍奏 ATK500 ☆3

「ライブラの効果で一枚ドローして、ドッペル・ウオリアーの効果でトークンを生成！」

ドッペルトークン ATK400 ☆1

ドッペルトークン ATK400 ☆1

「レベル1のトークン二体に、レベル3の軍奏をチューニング。シンクロ召喚！レベル5『転生竜サンサーラ』！」

転生竜サンサーラ DFE2600 ☆5

「ライブラの効果で一枚ドロー！」

「ライブラと低レベルシンクロチューナーを利用したドロー加速か」

「その通り！そして、軍奏を素材としたモンスターはチューナーになる。僕はレベル5のライブラリアンに、レベル5のサンサーラをチューニング。シンクロ召喚！『白鬨気双頭神龍』！」

白鬨気双頭神龍 ATK3300 ☆10

「んなっ!?なんでそんなカードが入ってんだ!？」

「このためだよ！このモンスターがシンクロ召喚に成功したとき、『神龍トークン』を特殊召喚できる！」

神龍トークン DFE3000 ☆10

「でけえトークンだな」

「うん。効果を持ってないモンスターだから、『馬の骨の対価』を発動して、トークンをコストに二枚ドロー！」

「いや、ひどくね!？」

まじか!?!と思った英明だが、少なくとも脳筋天使を一ターンに六回も中華なべで料理する人よりはマシである。

「魔法カード『シンクロキャンセル』を発動。戻した後で、素材の二体を特殊召喚！」

TG ハイパー・ライブラリアン ATK2400 ☆5

転生竜サンサーラ DFE2600 ☆5

「なるほど、これで、サンサーラがチューナーじゃなくなるってところか」

「そうだよ！僕はカードを一枚セットして、ターンエンド！」

残っている手札は三枚。

さて、これはどう表現するべきだろうか。

「俺のターン。ドロロー……メインフェイズまで行っていいぞ」

「じゃあ、僕はハリファイバーの効果を発動。このカードを除外して、エクストラデッキから『フォーミュラ・シンクロン』をシンクロ召喚！」

フォーミュラ・シンクロン DFE1500 ☆2

「フォーミュラとライブラの効果で、合計二枚ドロロー！」

「……まだあるんだろ？」

「もちろん！レベル5のハイパー・ライブラリアンとサンサーラに、レベル2のフォーミュラ・シンクロンをチューニング！デルタ・アクセスル・シンクロ！レベル12『コズミック・ブレイザー・ドラゴン』！
コズミック・ブレイザー・ドラゴン ATK4000 ☆12

「すごい！」

「かっこいい！」

出てきた大型ドラゴンに大はしやぎの少女たち。

「出やがったな……だが、フィールドを離れる必要があるんだ。どうにかなる。手札から『増援』を発動だ。デッキからレベル4以下の戦士族を手札に加える」

「む……僕はコズミック・ブレイザー・ドラゴンの効果を発動します！除外することで、『増援』を無効にします！」

「（もう使ってくるか、たぶん『速攻のかかし』か何か握ってるな）だが残念。手札から『E・HERO ソリッドマン』召喚！手札から『V・HERO ヴァイオン』を特殊召喚だ！ヴァイオンの効果でシャドミスを墓地に」

E・HERO ソリッドマン ATK1300 ☆4

V・HERO ヴァイオン ATK1000 ☆4

「す、すでにそろってたんですか!？」

「そちらがそんだけ運命力あるんだから俺にあってもいいだろ別に」というわけで。

「さあ、ヒーローショーの時間だ！手札から『マスク・チェンジ』を発動！対象は地属性のソリッドマンだ！」

ソリッドマンが仮面に手を当てる。

「変身召喚。レベル8『M・HERO ダイアン』！」

M・HERO ダイアン ATK2800 ☆8

「おお！かっこいい！」

変身ヒーローを見て喜ぶ幼女たち。

ダイアンもグッドサインを出している。

「そして、ソリッドマンが魔法カードの効果で墓地に送られたことで、墓地のシャドー・ミストを特殊召喚だ。これにより、デッキから二枚目の『マスク・チェンジ』を手札に加える」

E・HERO シャドー・ミスト ATK1000 ☆4

「バトルフェイズ。ダイアンでダイレクトアタック！」

「僕は『速攻のかかし』を捨てて、バトルフェイズを終了させます！」

「だよね……ヴァイオンの効果でソリッドマンを除外することで『置換融合』を手札に……俺はカードを二枚セットして、ターンエンドだ」

「この瞬間、コズミック・ブレイザー・ドラゴンが戻ってきます！」

コズミック・ブレイザー・ドラゴン ATK4000 ☆12

「そして、僕のターン。ドロワー！『強欲で貪欲な壺』を使って、十枚除外して二枚ドロワー。よしっ」

勢いよくカードを引くライズ。

いい手札になったようだ。

「手札から『召喚師セームベル』を召喚！」

召喚師セームベル ATK600 ☆2

ひよこつとあらわれるセームベル。

ソリッドビジョンのセームベルはセームをみて、フルフルと手を振った。

セームも手を振りかえす。

「私だ！」

(……【ジャンクドツペル】にセームベルつて入れるか普通!?)

内心驚いている英明だが、もちろん、思い入れというのは誰にでもあるものなので否定はない。

「そして、『スター・チェンジャー』を発動、セームベルをレベル3にする!」

召喚師セームベル ☆2↓3

「そして、セームベルの効果発動。手札からセームベルと同じレベルのモンスター……レベル3の『召喚師ライズベルト』を特殊召喚!」

召喚師ライズベルト ATK800 ☆3

フィールドに並ぶ兄妹。

精霊カードではない(そもそも、ライズたちは体のほうに縛られている)ようだが、やはり持ち主に影響されている部分があるのか、ライズベルトがセームベルの頭をポンポンと撫でて、セームベルは『召喚師ライズベルト』のイラストの通りに『にぱっ』と笑った。

『ブホアツ!』

そしてそれを見たルシフィアとブルームが、感動に耐え切れずに汚い火花を放出した。

「ライズおにいちゃん!私は!」

ここでヒュプノが反応。

「わかってるって。僕は手札から『二重召喚』を発動。これで、もう一度通常召喚を行える。『ヒュプノシスター』!」

ヒュプノシスター ATK1400 ☆4

そして召喚される妹!

ライズベルトを見ると、ライズベルトは優しい顔になってヒュプノシスターの頭をなでる。

『おーいライズ!どうせやるんなら俺も出してくれよ!』

「そうだな。『緊急テレポート』を発動。デッキから『トランスファミアリア』を特殊召喚だ!」

トランスファミアリア DFE0 ☆1

そして猫まで出現。

ヒュプノシスターのそばに出現し、肩まで一気に登っていく。

ヒュプノシスターは、肩まで上がってきたトランスファミリアを両手で抱き上げて、頬ずりした。

「か、かわいい〜」

綾羽がうつとりしたような声で言った。

「いいですね〜」

香苗も復活したようだ。

「あれ、香苗ちゃん。いつ起きたんだ？」

「ルシフィアさんが鼻血を吹いたあたりですね」

リフィルが聞くと、香苗の返答は何とも言えないものだった。

が、まあ、それは置いておくにしても、こういう光景は悪くない。

そして、バシャバシャと響くシャッター音。

どうやら、ルシフィアとブルームが我慢できなくなったようだ。

(……?)

遊月はあることを感じた。

ライズ、セーム、ヒュプノ、トラファの四人の意識の場所。

(……アムネシア特有の現象が出てるな。いや、強い運命力を持つデュエリストが化身カードを持っていると、そのそばで起こりやすいことではあるが……)

今、フィールドにいる四人と、フィールドではない場所にいる四人は、感覚が共有されている。

ライズベルトが頭をなでていけば、撫でているライズも、撫でられているセームとヒュプノも、その感覚を共有している。

「さて、ここからどうするか」

「あ、おにいちゃん！この前テレビで見たあのおっきいロボットが見たい」

「私もー」

幼女二人の要求。

それに対してライズは……。

「わかったー」

と答えた。

……手札がかみ合っていないなかったらどうするつもりなのだろう。

というか一枚しか残ってないのに。

「僕は手札から、『ギヤラクシー・クイーンズ・ライト』を発動。僕のフィールドのモンスターのレベルは、僕が選択するレベル7以上のモンスター……コズミック・ブレイザー・ドラゴンと同じ、12になる！」

コズミック・ブレイザー・ドラゴンが咆哮を上げると、空から星々がきらめいて、ライズのフィールドを満たしていく。

召喚師セームベル ☆2↓12

召喚師ライズベルト ☆3↓12

ヒュプノシスター ☆4↓12

トランスファミア ☆1↓12

「そして僕は、セームベル、ライズベルト、ヒュプノシスターの三人で、オーバーレイ！」

そして星々は交わり……。

「エクシーズ召喚！ランク12 『超量機神王グレート・マグナス』！」

超量機神王グレート・マグナス ATK3600 ★12

「トランスファミアの効果で、グレート・マグナスをメインモンスターゾーンに移動する。そして効果発動。エクシーズ素材を一つ使って、ヴァイオンをデッキに戻す！」

ヴァイオンがデッキに戻った。

「バトルフェイズ！」

「チツ。罨カード『星遺物からの目醒め』を発動。俺は、フィールドのダイアンとシャドー・ミストでリンク召喚を行う！」

「『コズミック・ブレイザー・ドラゴン』を除外して、効果発動！その発動を無効にする！グレート・マグナスで、『M・HERO ダイアン』を攻撃！」

「残念！手札から『E・HERO オネステイ・ネオス』の効果が発動。ダイアンの攻撃力を2500アップさせる！」

M・HERO ダイアン ATK2800↓5300

「……攻撃力、5300!？」

「二千万見た後で驚きますかね!?!ダイアン、迎撃しろ！」

グレート・マグナス。粉碎！

ライズ LP8000↓6300

「そして、ダイアンが相手モンスターを戦闘で破壊して墓地に送ったことで、デッキから『E・HERO エアーマン』を特殊召喚！デッキから『V・HERO ヴァイオン』を手札に！」

E・HERO エアーマン ATK1800 ☆4

「ふう、あぶねえ。で、どうする？」

「僕は、トランスファミア一体で、『リンクリボー』をリンク召喚！」
リンクリボー ATK300 LINK1

「これで、ターンエンドです！そして、コズミック・ブレイザー・ドラゴンが戻ってきます！」

コズミック・ブレイザー・ドラゴン ATK4000 ☆12

「リンクリボーにコズミックか……なかなか固いな」

あと、最初のターンに伏せたセットカードが一枚あるのだが、なぜか使っていない。

「俺のターン。ドロロー！まずはダイアンとシャドー・ミストでリンク召喚！『X・HERO ワンダー・ドライバー』！」

X・HERO ワンダー・ドライバー ATK1900 LINK

2

「墓地に送られたシャドー・ミストの効果発動だ」

「それは、コズミック・ブレイザー・ドラゴンで無効にします！」

「これで展開の障害はなくなった。『V・HERO ヴァイオン』を通常召喚！」

V・HERO ヴァイオン ATK1000 ☆4

「ヴァイオンの効果で、デッキから『D・HERO ディアボリックガイ』を墓地に送る。そして、ディアボリックガイを墓地から除外して、二体目を特殊召喚！」

D・HERO ディアボリックガイ ATK800 ☆6

「手札から『置換融合』を発動。フィールドのディアボリックガイとヴァイオンで融合召喚！『V・HERO アドレイション』！」

V・HERO アドレイション ATK2800 ☆8

「ワンダー・ドライバーの効果で、墓地の『マスク・チェンジ』をセット、そして、墓地のディアボリックガイを除外して三体目を特殊召喚」
D—HERO デイアボリックガイ ATK800 ☆6

「あらわれろー！英雄たちが集うサーキット！召喚条件はHERO二体以上。俺はリンク2のワンダー・ドライバーとディアボリックガイを、リンクマーカーにセット！英雄たちが集う場所でその力を束ね、恐怖を打破するものとして生まれ変われ！リンク召喚！リンク3
『X・HERO ドレッドバスター』！」

X・HERO ドレッドバスター ATK2500 LINK3

「ドレッドバスターとそのリンク先のHEROは、墓地のHEROの数×100アップする！」

六体である。

X・HERO ドレッドバスター ATK2500↓3100

V・HERO アドレイション ATK2800↓3400

E・HERO エアーマン ATK1800↓2400

「バトルフェイズ！まずはエアーマンで攻撃！」

「リンクリボアの効果を使って、攻撃力を0にします」

「だが、ドレッドバスターとアドレイションの攻撃が残っている。これで終わりだ！」

「う、うわああああ！」

ライズ LP6300↓3200↓0

『勝者！英明！……正直、コズミックで止めるところを変えてたらライズが勝ってる気がしなくもないけどね』

ブルームがそういった。

「そういえば、最後までセットカードが使われてなかったな。あれは何だ？」

遊月がそうつぶやいた。

『揺るがぬ絆』です」

みんなから『ごめん。知らない』と言う視線を向けられるライズ。テキストを確認。

カウンター罠

(1)：Pモンスターの効果または既にPゾーンに存在しているカードの効果

相手が発動した時に発動できる。

その発動を無効にし、除外する。

遊戯王カードWiki 《揺るがぬ

絆》より引用。

「……俺、ペンデュラム入れてねえわ」

「だろいな」

英明の呟きにリフィルが頷く。

さすがに、『HERO』にペンデュラムを入れるとなると、独特な構築になるはずだ。

【M・HERO】がそもそも、純正のHEROからそれた派生形なので、これ以上他のカードを積むのは少々無理があるだろう。

「まあでも、やりたいことはできたのでよかったです」

「そっか。それならいいだろう。デュエルは『対話』ではあるが『主張』でもあるからな」

遊月がそう締めくくって、とりあえず、二戦目は終了した。

コラボ回 第三話

『戦績としては、『アムネシア組』と『メルト組』で一勝ずつか。さて、どうなるんだろうなあ』

すでに、指定場所では綾羽とリフィルが立っている。

「さて、はじめよっか」

「ああ。行くぞ」

「デュエル！」

綾羽 LP 8000

リフィル LP 8000

先ほどのデュエルはほんわかしたものだだったが、案外平和な感じに終わったということもあり、次のデュエルにすんなり移動している様子。

いいことだ。あの混乱の中、同じデュエル場所で連戦とか呆れしかない。

だが、そういう空気であつてもデュエルできるのが英明というデュエリストである。

それが今回はいい方向に進んだだけだろう。

「私の先攻。魔法カード『手札抹殺』を発動だ」

手札抹殺スタートのリフィル。

「私は四枚捨てて四枚ドロ」

「私は五枚捨てて五枚ドロ」

「続けて、『バッテリー・リサイクル』を発動。墓地から『OTTOサンダー』『OKaサンダー』を手札に加える。そして、『OTTOサンダー』を召喚して効果発動。『OKaサンダー』を召喚して効果発動。『ONiサンダー』を召喚して『サンダー・シーホース』をサーチ！」

OTTOサンダー ATK1300 ☆4

OKaサンダー ATK1400 ☆4

ONiサンダー ATK 900 ☆4

「さらに、『フォトン・サンクチュアリ』を発動。『フォントーン』二体を特殊召喚！」

フォトントークン DFE0 ☆4

フォトントークン DFE0 ☆4

「ま……回るね」

「そうだな。雷と共に光れ、私のサーキット！『OTTOサンダー』『ONiサンダー』とフォトントークン二体をリンクマーカーにセット！神雷よ！轟音とともに鳴り響け！リンク召喚！轟雷機龍―サンダー・ドラゴン！」

轟雷機龍―サンダー・ドラゴン ATK2800 LINK4

リフィル『サンダー・ドラゴン』を対象にして、轟雷機龍のモンスター効果。サンダー・ドラゴン二枚を手札に加え、墓地のサンダー・ドラゴンをデッキの一番下に戻す」

リフィルおなじみの展開コンボである。

「……【サンダー・ドラゴン】か？」

「ああ、ただ、【雷族】の汎用を積んだ形だろうな。まあ、純正の【サンダー・ドラゴン】ってしつかり調べてまわさないと意味わからんが……」

英明と遊月はそのようなかたちで当たりをつける。

いずれにせよ、ここまで回ってきていることに変わりはない。

手札消費が激しいのが欠点といえば欠点ではあるが、強いことに変わりはない。

「私はカードを一枚セット、ターンエンドだ」

母ちゃんと機龍を出してターンエンド。

「私のターン。ドロ―！」

次は綾羽のターンだ。

「まずは『ヘカテリス』を捨てて、『神の居城―ヴァルハラ』を手札に加える。そして、これを発動！」

発動されるヴァルハラ。

神々しきはほかのヴァルハラを上回るオーラを感じさせる。

「新しい型を組んできたから、それで行くよ！私はヴァルハラの効果を発動して、『堕天使アスモディウス』を特殊召喚！」

堕天使アスモディウス ATK3000 ☆8

「あれ？綾羽ちゃんって墮天使入れてたっけ？」

「……いや、そもそもヴァルハラは『天使族サポート』であって、『光属性・天使族サポート』じゃないぞ」

「あ、私もなんだか勘違いしてました」

英明がアスモディウスを見て驚いているが、遊月の指摘で納得したようだ。

香苗も同様である。

「アスモディウスの効果で、デッキから『墮天使スペルビア』を墓地に送るよ。さらに、『創造の代行者 ヴィーナス』を通常召喚！」

創造の代行者 ヴィーナス ATK1600 ☆3

「効果発動。合計でライフを1500払うことで、デッキから『神聖なる球体』を三体、特殊召喚！」

綾羽 LP8000↓7500↓7000↓6500

神聖なる球体 ATK500 ☆2

神聖なる球体 ATK500 ☆2

神聖なる球体 ATK500 ☆2

「君も並べるんだな」

「フッフ。そうだね。現れる！天より開くサーキット！召喚条件は通常モンスター一体！『神聖なる球体』を素材にしてリンク召喚！リンク1『リンク・スパイダー』！」

リンク・スパイダー ATK1000 LINK1

「そしてさらに現れる。天より開くサーキット！召喚条件は通常モンスター一体！『神聖なる球体』を素材にしてリンク召喚！リンク1『星杯竜イムドゥーク』！」

星杯竜イムドゥーク ATK800 LINK1

「もう一回！現れる。天より開くサーキット！召喚条件は、別名モンスター二体以上！ヴィーナス、神聖なる球体、リンク・スパイダー、イムドゥークの四体をリンクマーカーにセット！アルテミスの弓矢よ、月より降り注ぎ、星々の輝きを示せ！リンク召喚！リンク4『召命の神弓―アポロウーサ』！」

召命の神弓―アポロウーサ ATK? LINK4

「攻撃力が決まっていけないリンク4モンスター……」

「アポロウーサのもととの攻撃力は、リンク素材にしたモンスターの数一体につき、800になる」

召命の神弓ーアポロウーサ ATK?→3200

「攻撃力、3200か」

……なぜだろう。高く感じない。

「バトルフェイズ。アスモディウスで、OKaサンダーを攻撃!」

「うわっ!」

リファイル LP8000→6600

「さらに、アポロウーサで轟雷機龍を攻撃!」

「ぐっ……破壊の代わりに、墓地からサンダー一家の三人を除外する!」

リファイル LP6600→6400

「アポロウーサは、相手モンスターの効果の発動にたいして、攻撃力を800下げて、その発動を無効にできる効果があるけど、永続効果は無理だね」

「なんだその殺意の高い効果は!」

現在、アポロウーサは、『モンスター効果の発動を四回止められる』ということだ。

制圧力が高い!

「リファイル姉!頑張っ!」

が、ここで声援ブーストが来た。

「……ああ、任せておけ」

リファイルがうなずいた。

(……幼女に応援されて元気が出る……か。若いなあ)

そしてそんな様子を見て、遊月はそんなことを思った。

とはいえ、遊月としても、『まあ若い子ががんばってるのは年寄には目の保養だよ』とかいいだす上に、明らかに十六歳ではないのに高校一年生になってまで高校に通うやつなので、なおさら人のことは言えない。

「私はカードを一枚セットして、ターンエンド!」

「私のターン。ドロロー！」

リフィルはドロローしたカードを見た後、アポロウーサを見る。

「どうやら、かなり邪魔のようだ。」

「私は墓地から『雷龍融合』を除外することで、効果発動。デッキから雷族モンスター『雷撃壊獣サンダー・ザ・キング』を手札に加える！」
「か……壊獣?!」

「アポロウーサをリリース。あらわれる。『雷撃壊獣サンダー・ザ・キング』！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング ATK3300 ☆9

「そして、『サンダー・シーホース』の効果!このターン特殊召喚はできなくなるが、手札から捨てることで、『太陽電池メン』を二体手札に加える。そして、一体を召喚！」

太陽電池メン ATK1500 ☆4

「効果で、デッキから『雷源龍—サンダー・ドラゴン』を墓地に送る。さらに、轟雷機龍の効果発動!墓地から『雷源龍—サンダー・ドラゴン』をデッキに戻すことで、効果を適用、攻撃力を500ポイントアップする！」

轟雷機龍—サンダー・ドラゴン ATK2800↓3300

「なんだかポツと上がった攻撃力。」

その上昇はターン終了時までではなく永続である。

「バトルフェイズ!轟雷機龍—サンダー・ドラゴンで、墮天使アスモデイウスを攻撃！」

「通すよ！」

綾羽 LP6500↓6200

「だけど、アスモデイウスが破壊された時、トークンが特殊召喚されるよ！」

アスモトークン ATK1800 ☆5

デイウストークン DFE1200 ☆3

「アスモトークンは効果では破壊されず、デイウストークンは戦闘では破壊されない！」

「……攻撃力1500の太陽電池メンだと破壊出来ないじゃないか」

さすがのリファイルも苦笑いである。

とはいえ、これに関してはアスモディウスをデザインした奴に言うべきだろう。

それ相応に面倒なステータスであることに変わりはない。

「私はカードを一枚セットして、ターンエンド」

「私のターン。ドロー！」

「私は『強制脱出装置』を発動する。私を手札に戻すのは当然、『雷撃壊獣サンダー・ザ・キング』だ」

「ですよー」

戻って行く壊獣。

これで、次のターンは一体除去されるのが確定である。

それはともかく、綾羽の手札は三枚。そしてセットカードが一枚。

これで、とりあえず突破する必要がある。

「私はセットしておいた『補充要員』を発動。私の墓地にモンスターが五体以上いる時、効果モンスターではない攻撃力1500以下のモンスター三体を手札に加えることが出来る！私は『神聖なる球体』三体を手札に加える。そして、速攻魔法『リロード』を使って、手札のカードすべてをデッキに戻して、戻した枚数分ドロー！」

これによって、手札が五枚分入れ替わった。

「……綾羽ちゃんのデッキ、ヴィーナスが軸になったな」

「ヴァルハラが何をもたらすのかとなると『初動』と『継戦力』だからな。だが、同時に手札消費も早いデッキだから、リカバリーをどうするか考えた結果だろ。いずれにせよ問題はない」

ライフコストは必要になるが、ヴァルハラが大体手札に来るからと言って、最上級モンスターを積まなければならないルールなどない。

こだわりがあるのはいいが、視野が狭いのは論外。

そう考えれば、今回のデッキの方が動きやすいだろう。

まあそれでも、ある程度運命力が必要なコンボではあるが。

「よしっ。現れる。天より開くサーキット！召喚条件はモンスター二体！私はアスモトーションとデイウストークンでリンク召喚！リンク2『魔界の警邏課デスポリス』！」

魔界の警邏課デスポリス ATK1000 LINK2

「そして、手札から『死者蘇生』を発動。墓地から『墮天使スペルビア』を特殊召喚して、そのモンスター効果によって、『創造の代行者 ヴィーナス』を特殊召喚！」

墮天使スペルビア ATK2900 ☆8

創造の代行者 ヴィーナス ATK1600 ☆3

「そして、ヴィーナスの効果を開発！デッキから、『神聖なる球体』を三体。特殊召喚！」

綾羽 LP6200↓5700↓5200↓4700

神聖なる球体 ATK500 ☆2

神聖なる球体 ATK500 ☆2

神聖なる球体 ATK500 ☆2

「そして、『リンク・スパイダー』と『星杯竜イムドゥーク』をそれぞれリンク召喚！そして……あらわれろ！天より開くサーキット！召喚条件はカード名が異なるモンスター二体以上！私はヴィーナス、神聖なる球体、リンク・スパイダー、イムドゥークの四体をリンクマーカーにセット！軀に宿る魂よ。鎖が描く楽譜に従い、四重奏を歌え！リンク召喚！リンク4『鎖龍蛇―スカルデット』！」

鎖龍蛇―スカルデット ATK2800 LINK4

「んなつ、スカルデットまで入ってるのか!?!」

英明が驚く。

が、遊月のほうは違う感想を抱いていた。

（いつの間にかいなくなっていると思ったら、綾羽のところに行つたのか）

自分が使っている精霊の出入りに関しては、アンデット族以外であればレッドアイズが把握している。

とはいえ、いないからと言ってそれを問題にするかといわれるとそうでもなかった。

「効果発動。カードを四枚ドロウして、デッキの下に三枚戻す！そしてスカルデットの効果で、手札から二枚目の『墮天使アスモディウス』を特殊召喚。スカルデットの効果で攻撃力アップ！」

墮天使アスモディウス ATK3000↓3300 ☆8

一応いうと守備力も上がっているが、今は関係ない。

「そして、私はレベル8のスペルビアとアスモディウスでオーバーレイ！生い茂る密林の中で、精霊は、その真理を解く。エクシーズ召喚！ランク8『森羅の守神 アルセイ』！」

森羅の守神 アルセイ ATK2300 ★8

「まずは、スカルデットの効果で、攻撃力アップ！」

森羅の守神 アルセイ ATK2300↓2600

「そして、アルセイの効果！一ターンに一度、カード名を一つ宣言して、デッキトップをめくる。あつていたら手札に加えて、違っていたら墓地に送る。私は『オネスト』を宣言！」

「あつていたら不味いな……」

「デッキトップのカードは……」

綾羽はカードをめくる。

『強欲で貪欲な壺』だった。

「……私、何か悪いことしたかな」

さあ、どうだろう。

「とりあえず墓地に送られるけど、アルセイの効果！カードの効果でデッキからカードが墓地に送られた場合、フィールドのカード一枚をデッキトップかデッキボトムに戻す。私が選択するのは、轟雷機龍―サンダー・ドラゴン！」

「んなっ……」

轟雷機龍がデッキに戻った。

「バトルフェイズ！スカルデットで、太陽電池メンを攻撃！」

リファイル LP6400↓5100

「さらに、アルセイでダイレクトアタック！」

「うわあああ！」

リファイル LP5100↓2500

「よし、私はカードを一枚セットして、ターンエンド！」

「私のターン。ドロ―！まずは、スカルデットをリリースして、『雷撃壊獣サンダー・ザ・キング』を特殊召喚！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング ATK3300 ☆9

『強欲で貪欲な壺』を使い、十枚除外して二枚ドロ。さらに、『リロード』を発動だ。私もすべてデッキに戻して、戻した枚数ドロする」

これで、リフィルの手札は四枚。

「(ふむ、これが来たか) 私は手札から『封印の黄金櫃』で『雷電龍—サンダー・ドラゴン』を除外して効果を発動し、『雷鳥龍—サンダー・ドラゴン』をサーチ、そして、手札の『雷鳥龍—サンダー・ドラゴン』の効果で除外されている『雷電龍—サンダー・ドラゴン』を特殊召喚！」

雷電龍—サンダー・ドラゴン ATK1600 ☆5

「そして、雷族モンスターの効果が手札で発動したターン、融合以外の雷族効果モンスター一体をリリースすることで、『超雷龍—サンダー・ドラゴン』を特殊召喚！」

超雷龍—サンダー・ドラゴン ATK2600 ☆8

「そして私は、手札の『サンダー・シーホース』と、フィールドの雷族融合モンスターである超雷龍—サンダー・ドラゴンを除外すること、あらわれろ! 『雷神龍—サンダー・ドラゴン』!」

雷神龍—サンダー・ドラゴン ATK3200 ☆10

「ら……雷神龍!」

この登場に驚く綾羽。

「リフィル先輩。サンダー・ドラゴンの使い方がわかってきたんですね!」

ライズがキラキラした目で雷神龍を見ている。

(……いや、少なくとも、超雷龍のほうの特殊召喚はWikiのまんまにや)

(すっかり覚えてきたんだな……)

ウイズと遊月はそう考えていた。

「そして、手札から『雷源龍—サンダー・ドラゴン』の効果を使い、雷神龍の攻撃力を500アップ。そして、雷神龍の効果により、アルセイを破壊!」

雷神龍―サンダー・ドラゴン ATK3200↓3700

「バトルフェイズ！雷神龍―サンダー・ドラゴンで、デスポリスを攻撃！」

「きゃああー！」

綾羽 LP4700↓2000

「……………私はカードを一枚セットして、ターンエンド」

（今の間はなんだ（にや）？）

遊月とウイズは、リファイルがカードをセットするまでに若干の間があつたので気になった。

「私のターン。ドロー！」

だが、綾羽は気が付いていないようす。

「私は手札から、『アドバンスドロー』を使って、サンダー・ザ・キングをコストに二枚ドロー。さらに『融合』を発動！」

「融合!?」

入っついてエクシードだけだと思っていた英明である。

「手札の『幻奏の音女ソナタ』と『幻奏の音女アリア』で、融合召喚！レベル6『幻奏の音姫マイスタリン・シューベルト』！」

幻奏の音姫マイスタリン・シューベルト ATK2400 ☆6

「マイスタリン・シューベルトの効果！お互いの墓地の中からカードを三枚まで除外して、一枚につき200ポイント、攻撃力をアップする！私が除外するのは、ヘカテリス、アスモディウス、スペルビアの三枚！」

0 幻奏の音姫マイスタリン・シューベルト ATK2400↓300

「そして、バトルフェイズ！マイスタリン・シューベルトで、雷神龍―サンダー・ドラゴンを攻撃！」

もちろん、一同は驚く。

特に幼女。

「ええっ!?サンダー・ドラゴンのほうが、攻撃力が高いよ!？」

「自爆特攻なのかな?」

もちろん、リファイルも考えている。

(攻撃力の低いモンスターで、攻撃力の高いモンスターに攻撃……手札のカードを握った! 『オネスト』がある!)

リファイルは一瞬舌打ちした後、カードを発動する。

「罫カード発動。『決戦融合―ファイナル・フュージョン』!」

「んなつ、そのカードは!?!」

今まさに、『オネスト』を使おうとしていた綾羽の手が止まる。

「融合モンスター同士がバトルするとき、その二体を対象として発動、攻撃を無効にして、お互いに、選択した二体のモンスターの攻撃力の合計分のダメージを受ける!」

二体のモンスターの攻撃力の合計は……6700!

「きやあああ!」

「うわあああ!」

綾羽 LP2000↓0

リファイル LP2500↓0

決着。

「いたた、まさか、このタイミングでファイナル・フュージョンが来るなんて思ってたよ」

「私も発動できるとは思っていなかった」

リファイルの言うとおりだろう。

そもそも、お互いが融合モンスターを使っているか、自分が融合モンスターを送りつけるしかない。

綾羽が融合モンスターを使うとは、リファイルは途中まで考えていなかったし、そもそも、送りつけるようなカードはサンダー・ドラゴンには入らないのだ。

「いいデュエルだったにや。リファイルも、ある程度サンダー・ドラゴンの使い方を予習してるにや」

「綾羽も、今までは視野が狭かったが、それを取っ払ったデュエルができていたぞ」

お互いに成長が見えるデュエル。というべきだろう。

そう見れば、いいデュエルだったと言い切れる。

「……そういえば、ブルームはどこに行ったんだ?」

「ルシフィアさんもいませんね？」

英明がきよろきよろを見渡したのを見て、ライズも見渡す。
だが、二人はいなかった。

★

『グへへ。スポーツブラでアスレチックやつてる綾羽ちゃん。マジでエロいね！』

「ウフフ。ではこちらはセームとヒュプノが抱き合って寝ているこれを」

『うひよおおお！幼女二人の絡み合いだ！こりやいやされるううう……』

変態紳士と変態淑女の会。

同盟の結成はブルームが考えて、会の名前はルシフィアが考えるというロクなことがなさそうな同盟である。

支店で瞬間交換を行ったわけだが、あふれ出る欲望を互いに抑えきれず、ルシフィアは自分のデュエルが終わったから取引が始まっていた。

「しかし、時雨さんはすさまじいエロさがありますね。ドレスが普段着というのはいいことです」

『そして、これが本命の香苗ちゃんとの絡み合いの映像だぜ！』

「ウフフフフ。あ、やばっ、鼻血が……」

本当に鼻血まで流したルシフィア。

ブルームはどうなのかって？当然だが既に流している。

『いろいろあるからなあ、あ、『風呂上がりのみずきに香苗ちゃんがドライヤーをかけているところ』だ。普段ジト目のみずきちゃんがなんだかぼーっとしている珍しい写真だね』

どちらかというところ『エロ』より『ほのぼの』といった感じだが、彼らは変態紳士、および変態淑女であって変態というものはその一部分でしかないので問題はない。多分。

「いいですねえ」

『そういや、ギャップ萌えとかあるかな』

「エロ路線ではありませんがありますよ」

『ジャンジャン来い。変態は常に、ありとあらゆる自分にとって都合のいい性癖を許容する』

というわけで……。

「こちらですね。男装麗人のアルトが子猫を笑顔で頬ずりしているところですよ」

『ウツハツハ！これはいいね。ウイズさんのところにいつも行ってる猫に対して抵抗なんてなくなるだろうし』

「ブルームさんからは何かありますか？」

『意外とおとなしい性格の香苗ちゃんが隠れてギターでジャズの練習している動画あるけど』

「もらいましよう」

このような形で、お互いがおすすめる様々な写真が交換されている。

エロけりゃいい、というものではない。

『ほのぼの』でもいいし、『ギャップ』でもいいし、なんなら『団欒』だろうとかまわない。

『変態紳士と変態淑女の会』

掲げるモットーは『尊さを愛せよ』である。

大好物は『エロ』と『黒歴史』

ただしほかにもいろいろ味わう。

あまりにもアレだが、世の中はこんなことを考えている奴が大体強い。

『さて、次は——』

ブルームが次の写真を取り出そうとした時だった。

近くのビルが崩れた！

『うおっ！危ない！』

自分たちに振ってくる瓦礫を、根っこを使ってすべてはじくブルーム。

当然、ルシフィアの分も全て弾く。

とんでもないスペックである。

「い、いったいなんですか？」

『わからんけど、たぶん悪霊』

そういつたとき、ブルームにもその正体が見えた。

『うわっ、『Sin パラドクス・ドラゴン』か』

『どうしますか？』

『まあ、最終的に倒すんだけど、いろいろと手順がいるタイプの悪霊だ。まずはマスターたちと合流しよう。まず君が最初に戦っても意味がない感じだしね』

『なるほど。ではそうしましょうか』

『……まあ、多分もうデュエルは終わってるだろうし、僕らがいないことに気が付いてる可能性があるから、『何をしてたの？』って言われたときに『悪霊の気配を感じたからその調査』って先手を打っておいたほうがいいからね』

『小賢しいことを考えますね』

『マスターほどじゃないさ』

というわけで、二人は遊月たちがいる場所を目指して走って行った。

コラボ回 第四話

正直な話をしよう。

いなくなっていたかと思っていた人が走ってきた方向を見て、ドラゴンがいたらそりや驚く。

「おい、ブルーム。あのパラドクス・ドラゴンなんだ」

『知らんよ。だって急に出てきたんだもん』

「ルシフィア。顔に鼻血を拭いた痕があるにや」

「気のせいです」

「そんなわけないにや……」

確認なのが漫才タイムなのかわからないが、とりあえず合流したブルームとルシフィア。

「ねえ、遊月君。あれって……」

「ああ、どうやら、先ほど大きな爆発音があったが、その原因らしい」
「で、でもお兄ちゃん。『悪霊瘴気』が出ていませんかよ？」

綾羽が遊月に聞くと、遊月は簡潔に答える。

だが、香苗の言うとおり、パラドクス・ドラゴンからは悪霊瘴気が漏れていなかった。

「あれは『悪霊』じゃなくて、『悪性の精霊』だな」

「悪性の精霊？」

リファイルが初めて聞いた単語のようで、英明の言葉を反芻した。

「言葉から察するに……『精霊』という枠の中で、悪い心を持つてる人ってことですか？」

「そういうことだ」

ライズが英明に聞くと、英明はうなづく。

「なるほど、まあ要するに……人間と同じにやね」

『悪霊』は多くの場合、悪感情にとらわれたり、過剰にため込んでい
る精霊が変異するもので、絶対的な破壊衝動を持っているから社会的
な生活がほぼ不可能だ。だが、『悪性の精霊』は、精霊として存在でき
るほど自分の心を制御しながらも、悪事を働く」

「?。」

幼女二人がわかっていない。

「……簡単に言えば、『悪いことなのかどうかの判断もできずに物を壊す』のが悪霊で、『悪いことだとわかっていて悪いことをする』のが悪性の精霊だ」

「なんとなくわかった!」

ヒュプノはなんとなくわかったようだが、セームにはちよつと難しいだろう。

少なくとも十一歳には難しい話だ。

ヒュプノは『うーん』と考えた後、ぽつりと言った。

「要するに、悪性の精霊は……ブルームさんみたいな精霊のことなんですね」

『ちやうわ!』

「そうだな。ブルームはまだ善性側だ」

『ねえマスター。なんで『まだ』ってつけたの?』

「自分の胸に手を当てて考えろ」

『残念! 僕に胸はないのさ!』

確かに。

「まあとにかく、ああいった精霊は一定数いる、が、悪霊瘴気を漏らさないからセンサーに引っかからないんだ。まあでも……あの店には近づけないだろうけどな」

遊月は黒猫亭の支店のほうを見る。

「支店のほうに近づけにやくと、メルトにいる精霊が悪性にある可能性はあるかにや?」

「精霊が善性から悪性になるのは、悪霊瘴気の有無だ。アムネシアは悪霊瘴気が多いほうだが、メルトのほうにほとんどないというのであれば、悪性になる可能性は限りなく0に近い」

「わかったにや」

ウイズが頷く。

「で、あのパラドクス・ドラゴンを倒す方法なんだが、まず、一度デユエルに勝てばいいのかとなるとそうではない」

「そうなの?」

綾羽が首をかしげる。

「ああ、悪霊ならば、一度デュエルして勝てばその存在を保てなくなる。だが、精霊の場合はデュエルして負けても存在が消えるわけじゃない」

『簡単に言うと、僕がデュエルして負けても簡単には消えないってことよ』

「ブルームさんはしぶとそうだもんね!」

「セーム。どこで覚えたんだその使い方……」

げんなりしたライズ。

遊月は咳をして再び話し始めた。

「で、いったいどうすればいいのかというと、まずはリアルファイトでボコるんだ。最終的にデュエルするのは変わらないが、そもそも、精霊はデュエルを強制されない存在だからな。だが、向こうがデュエルで決着をつけると判断すれば、こちらがそのルールに乗らざるを得ない。あいつらはデュエルモンスターの精霊だからな」

「で、とりあえずそのデュエルに勝てば、あいつはその本性が出てくる。そこを、『圧倒的な戦闘ダメージ』を叩き込むことで消滅させることができる」

「なるほど」

要するに

1 まずはリアルファイトでボコる。

2 デュエルをして、とりあえず勝つ。

3 二回目のデュエルで、圧倒的な戦闘ダメージを叩き込む。

という手順だ。

「まあ、弱らせるのは私と英明で十分だ。というより、あのレベルの精霊とリアルファイトするとなれば、私が出る必要があるからな」

「私と香苗ちゃんは?」

「綾羽は余波や流れ弾からみんなを守ってくれ」

「わかった」

「お兄ちゃん。私はどうするんですか?」

「ルシフィアとハグっててくれ」

「えっ!？」

さすがに驚く香苗。

「二回目のデュエルはルシフィアに任せることになるが、その際、全力を出してもらう必要がある。メルトのほうはわからないが、アムネシアでのデュエルで運命力を発揮する場合、精霊力を消費する必要がある。さつき香苗とデュエルをしてかなり消費されているはずだ」

「なるほど、でも、なんでハグ?」

リフィルとしては疑問だ。

ルシフィアはちよつとやばい表情になっているが。

「香苗は私を除けば、この中で一番保有している精霊力が多い。『精霊力制御疾患』で、常に限界に近い状態で精霊力を保有しているからな。で、その伝達方法なんだが、限りなく密着しているほうがいい。特殊な機材があればその必要はないが近くにないからな。精霊力はつねに、『均等に保ちたがる』性質を持っているから、実はふれあっているだけで伝達が行われる」

「なるほど」

「……ブルーム、お前は写真に集中するんじゃないかと、綾羽と一緒にみんなを守れ」

『……わかった』

ブルームは構えていたカメラをしまった。

「ウフフ。香苗ちゃん。やさしくギュツとしてあげますからねグフフフフ」

「……(脅)」

壁際に追い込まれたチワワみたいな顔になる香苗。

それではルシフィアの嗜虐心がそそられるだけである。

その時、近くのビルが崩れて、その奥からパラボクスが出てきた。

「とまあ、そんなわけで、英明。行くぞ」

「おうー!」

遊月と英明が前に出る。

英明はデュエルディスクに『マスク・チェンジ』のカードを入れて、ベルトの金具に接続して固定する。

そして、もう一つのデュエルディスクのコアを取り出すと、ベルトに固定されたデュエルディスクに装着した。

遊月は『超融合』のカードを取り出す。

「行くぞ。レッドアイズ。ドーハスーラ」

『了解した』

「変身！」

『ミラクル・フュージョン カオス』

遊月のそばにレッドアイズとドーハスーラが出現。

英明の背中にオネストの翼が出現し、胸から黒い霧が出現する。

遊月はレッドアイズとドーハスーラとまじりあう。

翼と霧はそれぞれ粒子となって、英明を包み込む。

遊月は『真紅眼の死霊竜王ネクロ・バロール・ザ・ワールド』となり。

英明は『C・HERO カオス』になった。

「んにゃー！あんなモンスター。見たことないにゃー！」

「あはは……まあ、実際には存在しないもんね。行くよ。ルイン」

『わかった』

綾羽が『エンド・オブ・ザ・ワールド』のカードを使うと、ルインになった。

「むふふ、いい匂いがしますねえ」

「んー……」

言った通り、ギョツとやさしく抱きしめているルシフィア。

その顔は彷彿としており、なかなかアレな感じである。

遊月と英明のほうもパラドクスとの戦闘だ。

『ククク。矮小な人間どもよ。この俺に勝てると思うなよ！』

「さすが、悪霊じゃなくて精霊なだけあって、普通に言葉が通じるな」
「まあ、そういうものだ」

そういったとき、パラドクスがブレスを放出してくる。

遊月が左手の杖を振ると、障壁が出現。

ブレスは障壁に当たると霧散していった。

『ぐぬっ、小癩な！』

「ブレスを防いだ程度で何言ってるんだ。第一、痛めつけるのが優先で大した出力じゃなかっただろ」

『うるさい！』

「あと、視野が狭い」

『何？』

遊月がしゃべっている間に、英明が接近していた。

「おらっ！」

そして、その腹に思いっきりこぶしを叩き込んだ。

『オグフッ！』

とんでもない衝撃だったようで、ちよっと浮いているパラドクス。だが、すぐに英明めがけて腕を振り下ろした。

英明は距離を取って、その腕を回避する。

そのころには、遊月が黒竜剣を振り下ろしていた。

青い霊的な炎をまとった斬撃がパラドクスに直撃する。

『ぐおっ！な、なんだこの力は』

「単なる格の差だ」

『チッ、ならば、奥にいるやつを……』

パラドクスは、エネルギー弾を何発にも分けて発射。

綾羽たちのほうに飛んでいく。

「無駄だよー！」

『そーだね』

綾羽が槍を振って、ブルームは根っこを触手のようにふるう。

それだけで、エネルギー弾はすべて消滅した。

『ぐっ……うおおー！』

かなりのエネルギーが口の中に集中する。

「なるほど、そろそろ決めてくるわけか」

『カオス エンディング』

英明がデュエルディスクのスイッチを押すと、足にエネルギーが集中する。

『消えろ！』

パラドクスがブレスを放出する。

「そりゃ無理な話だ」

英明は『オネスト』のカードをデュエルディスクに入れる。

『英明君。朝ごはん食べた？』

「ごめん、なんでそれ、今聞いてくるの？」

げんなりしながらも、背中に翼が出現するので、それを使って飛び上がり、ブレスに向かって蹴りをぶちかます。

ブレスとキックが衝突して、そのまま双方のエネルギーが消えた。

『馬鹿な……！』

そして、遊月が剣と杖を合わせて、エネルギーを集中させている。

遊月とパラドクスの距離は、ほぼゼロ距離。

「そらっ！」

剣と杖を叩き込む。

『ぐおおおおお！』

耐えられなかったのか、パラドクスは勢いよく飛んで行った。

『ぐっ、な、ならば、デュエルだ！』

パラドクスがカードを五枚出現させる。

「やっとなんかそれを取り出したか」

遊月も合体を解除して、デュエルディスクを構える。

「なら、私も混ざるにゃー！」

遊月が構えたのに合わせて、ウィズが出てきてデュエルディスクを構える。

「一緒にやるか？」

「当然にゃ。悪霊に対しては良いとしても、悪性の精霊に関してはデータが少ないにゃ。私も混ざるにゃよ」

というわけで……。

『ふざけるな。貴様らまとめて、叩き潰してやる！』

「死後の広さを教えてやる」

「さあ、始めるにゃー！」

「『デュエル（にゃ）！』」

遊月&ウィズ LP8000

パラドクス LP8000

『俺の先攻！』

パラドクスの先攻だ。

『俺は手札から、永続魔法『Sin Territory』を発動！発動時の処理として、デッキからフィールド魔法『Sin World』を発動！』

世界が、紫色の世界に塗り替わる。

「な、なんだかすごいことになってるにや」

『ククク。俺はエクストラデッキの『サイバー・エンド・ドラゴン』を除外することで、手札から『Sin サイバー・エンド・ドラゴン』を、デッキから『究極宝玉神 レインボー・ドラゴン』を除外することで、『Sin レインボー・ドラゴン』を特殊召喚する！』

Sin サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000 ☆10

Sin レインボー・ドラゴン ATK4000 ☆10

出現する二体の大型モンスター。

「その『Sin Territory』……さすがにうざいな」

『フフフ。このカードは、本来ならフィールドに一体しか存在できない『Sin』モンスターを、一種類につき一体に変更する効果を持っている。よって、今まで持っていなかった展開力を手に入れたのだ！俺はターンエンド！』

「なら、私のターン。ドロー」

遊月はカードを引く。

『『Sin』か……フィールド魔法を重視するカテゴリだったな』

『その通り。この世界がある限り、俺に敗北はない！』

「あながちそうでもないがな。フィールド魔法があるとうれしいのはお前だけではないぞ。私は『手札断殺』を発動し、お互いに手札を二枚交換だ」

『ぬう……』

「そしてスタンバイフェイズ」

遊月の墓地から闇があふれ出す。

「フィールド魔法が存在することで、効果発動だ。終わりも始まりも

ウロボロス
ない蛇の王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

わりも始まりもない蛇の王ウロボロスよ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

『フフ。そのフィールド魔法がある限り敗北はないか。我が主の前で、よくそんなことを言えたものだ』

大型モンスターが二体いても、さほど心配した様子のないドーハスーラ。

「私は手札から、『不知火の隠者』を通常召喚し、リリースして『ユニゾンビ』を特殊召喚、デツキから『馬頭鬼』を墓地に落として、ドーハスーラのレベルを一つ上げる。馬頭鬼を墓地から除外し、墓地から隠者を特殊召喚」

不知火の隠者 ATK 500 ☆4

ユニゾンビ ATK1300 ☆3

死霊王 ドーハスーラ ☆8↓9

「そして、レベル4の隠者に、レベル3のユニゾンビをチューニング。死した紅き眼の黒竜よ、屍界で湧き上がる怨念を宿し、君臨せよ。シンクロ召喚。レベル7。『真紅眼の不屍竜』！」

真紅眼の不屍竜 ATK2400 ☆7

『私とドーハスーラが並ぶとはな』

『まあ、敵は精霊としての格だけでいえば高いのだからいいではないか』

『……そういうことにおこう』

レッドアイズとドーハスーラが並んだ。

「不屍竜の攻撃力は、お互いのフィールド、墓地のアンデット族モンスター一体につき、100ポイントアップする」

真紅眼の不屍竜 ATK2400↓2900

『ククク。そのような矮小な攻撃力で、俺のSinモンスターをどうやって倒すつもりだ！』

「私は墓地から、『屍界のバンシー』の効果を発動。このカードを除外

することで……『アンデットワールド』を発動する。そして、これに対してドーハスーラの効果を発動。Sin サイバー・エンド・ドラゴンを除く！』

『フハハハ！消え去るがいい！』

発動されるアンデットワールド。

その世界は……遊月たちのところまで広がっていた紫の世界を、逆に覆い尽くしていく。

『な……なんだ!?!』

パラドクスとしても想定外だったのか、驚愕しているようだ。

「これにより、お互いにフィールド、墓地のモンスターはアンデット族になる」

真紅眼の不屍竜 ATK2900↓3100

『だ、だが、まだ俺のSin レインボー・ドラゴンには及ばない！』

「手札から速攻魔法『アンデット・ストラグル』を発動。レッドアイズの攻撃力を、ターン終了時まで1000アップする！」

真紅眼の不屍竜 ATK3100↓4100

『んなっ……!』

「バトルフェイズ！不屍竜で、Sin レインボー・ドラゴンに攻撃！」

不屍竜がレインボー・ドラゴンを焼き尽くす。

パラドクス LP8000↓7900

『グッ……だが、この程度のダメージなど……!』

「不屍竜の効果により、アンデット族モンスターが戦闘で破壊された場合、お互いの墓地から、アンデット族モンスター一体を選択して特殊召喚できる。私はユニゾンビを特殊召喚！」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3

「そして、ユニゾンビでダイレクトアタック」

『ぬおっ!』

パラドクス LP7900↓6600

「メインフェイズ2。あらわれる。屍界に満ちる未来回路！」

サーキットが出現。

「召喚条件は、カード名が異なるモンスター三体。私は不屍竜、ドーハスーラ、ユニゾンビの三体をリンクマークカードにセット。混沌より来たる戦士よ。死した世界でその剣を掲げよ。リンク召喚！リンク3『混沌の戦士 カオス・ソルジャー』！」

混沌の戦士 カオス・ソルジャー ATK3000 LINK3
「か、カオス・ソルジャーまで入ってるのか」

リフィルが驚愕。

「だいたい、『アドヴェンデット・セイヴァー』か『ヴァンパイア・サツカー』くらいだと思っていたのだろう。」

「カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロウの代わりに、Sin Worldの効果で、『Sin Selector』三枚を見せる」

「だろうな。まあ、真ん中と一応言っておこうか」
『ブン』

「スタンバイフェイズ。フィールド魔法が存在することで、ドーハスーラの効果発動。戻ってこい！」

「ふむ、だいたい工場送りになってからの蘇生だったから久しぶりだな」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「俺は、『Sin Selector』を発動！墓地の『Sin レインボー・ドラゴン』と『Sin サイバー・エンド・ドラゴン』を外し、デッキから『Sin Cross』と『Sin スターダスト・ドラゴン』を手札に加える」

ここで、セームが首をかしげた。

「あれれ？あのサイバー・エンド・ドラゴンって、除外されてなかった？」

「あ、本当だ！なんで？」

「多分、『手札断殺』のときじゃないかな。『Sin Territor y』は一種類につき一体だから、同じモンスターを並べることはできないし、多分、『Sin サイバー・エンド・ドラゴン』が最初から手札に二枚あったんだよ」

「あ、そっか！」

「お兄ちゃん頭いい！」

納得しているようで何より。

『俺は、『Sin パラレルギア』を召喚！』

Sin パラレルギア ATK0 ☆2

『俺は手札のレベル8『Sin スターダスト・ドラゴン』に、レベル2の『Sin パラレルギア』をチューニング。矛盾した真実よ。今、我が分身たる竜の力となりて、顕現せよ！シンクロ召喚！『Sin パラドクス・ドラゴン』！』

Sin パラドクス・ドラゴン ATK4000 ☆10

『Sin パラドクス・ドラゴンの効果！シンクロ召喚に成功したとき、お互いの墓地の中から、シンクロモンスター一体を俺のフィールドに特殊召喚する』

「私の墓地の不屍竜が狙いか？だが無駄だ。アンデット族モンスターの効果発動にチェーンして、ドーハスーラの効果発動。その効果は無効にする」

『そんなことは百も承知だ。だが、無効効果を使ったのなら、除外効果は使えない！お前の墓地に、私のターンに発動できるアンデット族モンスターは存在しないからな。バトルフェイズだ！俺は——』

「手札から『儚無みずき』の効果発動。にチェーンして、ドーハスーラの効果を発動だ」

『出番がキタアアアアアアアア！』

儚無みずき。絶叫。

『なっ……』

「ドーハスーラの効果により、Sin パラドクス・ドラゴンを除外する」

『くそっ……俺は『神秘の中華なべ』を発動！パラドクス・ドラゴンをリリースして、攻撃力分のライフを回復！』

パラドクス LP6600→10600

「知っていると思うが、ドーハスーラの効果は対象にとらない。除外する場合、選ぶタイミングは効果処理時だ。墓地のSin パラドク

ス・ドラゴンを除外する」

『フフフ。フハハハ！我から逃げることはできんよ！』

『ぐっ……』

Sin パラドクス・ドラゴンが除外された。

『だが……』『Sin Cross』を発動。墓地から『Sin レインボー・ドラゴン』を特殊召喚！』

Sin レインボー・ドラゴン ATK4000 ☆10

『Sin Selectorの効果で除外されたはず……いや、まさか……』

さきほどのサイバー・エンド・ドラゴンの話から察するに……。

「このタイミングのデュエルでツープアだったってことにや。なかなか不憫にやね」

「まあそれはともかく、バトルフェイズ中の特殊召喚だ。みずきの効果が適用される」

遊月&ウイズ LP8000↓12000

『俺は、Sin レインボー・ドラゴンで、混沌の戦士 カオス・ソルジャーを攻撃！』

遊月&ウイズ LP12000↓11000

『これでターンエンドだ。Sin レインボー・ドラゴンは……除外される』

フィールドからモンスターがいなくなった。

「なるほど、私が7800の攻撃力を用意できない可能性に賭けたってことにやね」

パラドクスのライフは10600で、ドーハスーラの攻撃力は2800だ。

その差は7800である。

『そうだ』

「まあ、言いたいことは分かったにや。私のターン。ドロローにや！」
ウイズはドロローしたカードを見る。

「ペンデュラムゾーンにアストログラフ・マジシャンとクロノグラフ・マジシャンをセッティング！そしてペンデュラム効果発動にや！自

身を破壊し、デツキからアストロは星読みを、クロノは時読みを選択し、ペンデュラムゾーンにセットにや！」

『出てきて即座に変☆身！』』

ウイズおなじみのペンデュラムである。

……なお、キマシタワー系（要するに百合を好む）のクロノは、一応着替えてはいるがデュエルなど関係なくルシフィアと香苗がハグっているところを見ている。

「ペンデュラム召喚にや！手札とエクストラデツキから、ブラマジ、アストロを特殊召喚にや！」

ブラック・マジシャン ATK2500 ☆7

アストログラフ・マジシャン ATK2500 ☆7

『呼ばれたからには即参上！』

『再び参上！』

「そして、手札から『師弟の絆』を発動するにや。デツキからガールを特殊召喚して、さらに、デツキから『黒・魔・導・連・弾』をセットするにや」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000 ☆6

『参ります！』

「そして、『黒・魔・導・連・弾』を発動するにや！ブラマジの攻撃力を、フィールド・墓地のガールの攻撃力の合計分アップさせるにや！」

ブラック・マジシャン ATK2500↓4500

『んなっ……』

「そもそも黒猫亭にとって、支店は要石の機能を持つ重要なものにや。本店のオーナーである私が弱いわけがないにやよ？ドーハスーラを攻撃表示に変更してバトルフェイズにや！」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000↓ATK2800

「まずはドーハスーラで攻撃にや！」

『さて、決めにかかるとしよう』

パラドクス LP10600↓7800

「次はアストログラフ・マジシャンにや！」

『参る！』

パラドクス LP7800↓5300

「次はガールにや！」

『いきますー!』

パラドクス LP5300↓3300

『グフツ……ば、バカな。この俺が……』

「ブラマジ。決めるにや！」

『いくぞー!』

『はい!』

『『黒・魔・導・連・弾!』』

『ぐ……うおおおおお!』

パラドクス LP3300↓0

デュエルに敗北したパラドクス。

しかし、まだ、彼が倒れる様子はない。

それどころか、内側から、何か大きな力があふれている。

「さーで、向こうが覚醒するまでに準備を整えないとな」

遊月はめんどくさそうな表情でそういった。

コラボ回 最終話

「ルシフィア。問題は……なさそうだな」

「フフフ。そうですね。圧倒的な精霊力を保持する。ということに関して、ここまでだとは思っていなかったのよ」

遊月とウィズがみんなのところに戻ってくると、ルシフィアはエネルギーが満タンだった。

「ただ、その精霊力を扱いきれるコンセプトと、制御しきれぬ技術がないので、不安でもありますよ」

『それに関しては問題ないよ』

ブルームはルシフィアの近くに行つて、デッキを取り出した。

『圧倒的な精霊力であつても出し尽くせそうな感じに組み上げた特製デッキだよ。これを使つてね』

「ありがとうございます」

ルシフィアがブルームからデッキを受け取った。

ルシフィアが内容を簡単に確認する。

「なるほど、コンセプトはわかりましたが……」

「どうかしたのか？」

「いえ、これでは不完全燃焼になりかねません。もう一人ほしいですね」

「え、要するに、二人で挑みたいってことか？」

「そうですね。デッキの枚数が足りないのよ」

何をやる気だ……。

「わかったにや……」

ウィズがそう言つて、スマホを取り出して電話し始める。

「私にや……ちよつと支店を通つて、まっすぐ来てほしいにや。ルートはメールで送るにや。大丈夫。時間はとらないにや。リフィルのコーヒーを一週間無料にするにやよ……ありがとうございます」

通話終了。

「助っ人が来てくれるにや」

「そうか。じゃあブルーム。パラドクスの精霊力をいじつて遅延して

てくれ」

『わかった。あ、これサブデツキね』

ブルームがもう一つのデツキを渡すと、パラドクスのもとに向かって走って行った。

……そして数分後。

「……なあ、呼ばれたからには来たが、これはいったいどういうことなんだ？」

男装の麗人が到着。

「アルト。とりあえず、あそこで全能感漂ってるルシフィアと一緒に、あいつとデュエルしてほしいにや」

ウイズはルシフィアと、パラドクスの変貌を抑えているブルームを指差した。

それに対するアルトの反応は……。

「いや、無茶だろ!」

「無茶じゃにやいにや!アルトならできるにや!というか私はやりたくないにや!」

「そつちが本命じゃないか!」

「大丈夫にや!今、ルシフィアがアルトが使うサブデツキに運命力を注入してるにや!」

アルトがルシフィアを見ると、右手にデツキを持って、自分の腕から精霊力を溢れさせて、デツキにぶち込んでいた。

デツキからは、何やら紫色の雷のようなものが発生しており、幻覚かどうかはわからないが『ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!』とオーラが溢れている。

「いや、明らかにやばいやつだろ!副作用がありそうで怖い!」

「だから、リフィルの傑作コーヒを一週間無料にするにや!」

「え、そうなのか?」

「え、あ、まあ、そういうことにしておいてくれ」

男装麗人であるアルトと、クールビューティーであるリフィルの雰囲気は少し似通った部分があるものの、ルシフィアの被害者になりそうなアルトと、それを見守る側のリフィルでは精神状態に大きな違い

があるようだ。

「……いや、コーヒー一週間で済むかあれ!？」

「いいから早くやるにや!」

アムネシアに来てから苦労型のギャグとツツコミをするというかなり忙しい状態になっている気がしなくもないウイズ。

その時、遊月が口を開いた。

「アルトといったか？」

「え、えつと……どちら様？」

「私は不死原遊月という。こっちは仮澤英明と、大束綾羽と江藤香苗だ。とりあえずそれは置いておくとして、デュエルなんだが……」

遊月はアルトに耳打ちした。

「ふむ……うむ……なるほど、わかった。引き受けよう」

(え、何を言ったのにや?)

ウイズには全く聞こえなかった。

が、とりあえず、アルトがデュエルをすることに。

「話はまとまったようですね。アルト。これを使ってください」

ルシフィアがデツキを渡した。

アルトはデツキを手にとった。

なんだか……『ヒ……ヒヒヒ……ヒヤアアアッハッハッハッハ

!』という気味の悪い歓喜の笑い声が聞こえた気がした。

「……本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫です」

「その大丈夫というのは、『問題がない』ということなのか? 『実は問題があるけど影響はない』ということなのか?」

「フフフ。どちらだともいます?」

「聞かないでおこう」

というわけで、アルトはデツキをデュエルディスクにセット。

「さて……ブルームさん。もういいですよ!」

『お、やっとか!』

根っこを触手のように伸ばしてパラドクスの変貌を抑えていたブルームだが、それをやめた。

それによって、パラドクスはその力を開放して、トゥルースになっていた。

『ククク。この状態になった俺を止められると思うなよ。小娘!』

「今の私を見下ろしますか……よかったですよ。全力の攻撃を『上』に放てますからね」

「なるほど、どういうことなのかなんとなくわかった。確かに、下に打ちたくはないな」

『何をほざくか。さあ、始めるぞ』

「死後の世界の広さを教えてあげましょう」

「いくぞ」

「『デュエル!』』

ルシフィア&アルト LP8000

トゥルース LP8000

先攻はルシフィア。

……のだが、隣で立っていたアルトが、手札を見るのをやめた。

「どうしたのですか?」

「手札がクソだった……」

でしようね。

『アルトさんに渡してるデッキは、ルシフィアの補助デッキだからね。ルシフィアのデッキと合わせて、同名カードが三枚までなんだよ』

「要するに、メインエンジンが入ってないわけか」

「確かに無理ですよね」

ルシフィアはそのやり取りを聞いて理解した。

「なるほど……私の先攻……私は、『ソーラー・エクステンジ』を二枚発動。それぞれ、手札の『ライトロード・ハンター ライコウ』をコストに二枚ドロウして、二枚をデッキから墓地に送る」

『何!?!』

「最初に言っておきますが……これは、私とあなたの対決ではなく、私のデュエルです。この時に墓地に送られた『髑髏顔 天道虫』三枚により、私のライフを一体につき1000回復します」

ルシフィア&アルト LP8000↓9000↓10000↓1

1000

「そして、『カップ・オブ・エース』を三枚発動。全て表のため六枚ドロ。『魔力儉約術』を発動して、『エンシエント・リーフ』を三枚発動。カードを六枚ドロ」

『な……ば、バカな……』

これで、ルシフィアの手札は十枚。

「と、とんでもない速度で増えてるにや」

「自重なしですね」

当然だ。これはルシフィアのためのデュエルなのだから。

「続けましょう。私はさらに『ソーラー・エクステンジ』を使い、『ライトロード・ハンター ライコウ』をコストに二枚ドロして二枚落とす。そして、『死者蘇生』を使い、『マテリアルドラゴン』を特殊召喚」

マテリアルドラゴン ATK2400 ☆6

「私は魔法カード『星の金貨』を発動。私の手札を二枚あなたに渡して、その後、私はカードを二枚ドロします」

『む?』

ルシフィアの手札が二枚、トゥルースの手札に加わる。

「あれって、何のカードなのかな?」

セームが首をかしげる。

「いや、『ルシフィアが相手にカードを渡してまで使ってほしいカード』なんて、私には一枚しか考えられないにや」

「あ……そうですね」

もう一枚は多分適当だ。自分の邪魔にならなければいいのだから。

デュエル続行。

「私はカードを四枚セットして、ターンエンド」

残った手札は四枚。

絶句である。

『お、俺のターン。ドロ!』

「スタンバイフェイズ。『女神の加護』を三枚発動。一枚につき3000回復です」

ルシファイア&アルト LP11000↓20000

『グツ……』

「そして、『非常食』を発動します」

『んなつ……』

「四枚を墓地に送ることによって4000回復。女神の加護のデメリットでダメージがありますが、マテリアルドラゴンの効果で回復に変わりま
す」

ルシファイア&アルト LP20000↓24000↓33000

『……メインフェイズ、まずはカードを伏せる』

ルシファイアが渡したカードを伏せた。

『フーン……どれほどライフをためようと、その程度であれば、高い攻撃力
を使つて連打すればいい！』俺は手札から、永続魔法『Sin Territory』を発動！発動時の処理として、デッキからフィールド魔法『Sin World』を発動！』

世界が塗り替わる。

『出し惜しみは無しだ！手札から』Sin パラドクスギア』を召喚
！』

Sin パラドクスギア ATK0 ☆1

『リリースして効果発動。デッキから』Sin パラレルギア』を特殊
召喚し、デッキから』Sin スターダスト・ドラゴン』を手札に加
える』

Sin パラレルギア ATK0 ☆2

『さらに、『ブラック・ホール』を発動！フィールドのモンスターを全
滅させる！』

トウルースが使ったのは、ルシファイアが送ったカードだ。

「いいでしょう」

マテリアルドラゴンには、手札コストを使った効果破壊耐性がある
が、ルシファイアは通した。

『Sin パラレルギア』が破壊される。

『そして、Sin パラレルギア……Sinモンスターが破壊された
ことで、手札に存在する俺の効果が発動！ライフを半分払うことで、

特殊召喚！』

トゥルース LP8000↓4000

Sin トゥルース・ドラゴン ATK5000 ☆12

「出てきましたね。そして、相変わらず私を見下ろしますか」

『当然だ！デツキ・エクストラデツキから対応するモンスターを除外し、このモンスターたちを特殊召喚！』

Sin サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000 ☆10

Sin レインボー・ドラゴン ATK4000 ☆10

Sin スターダスト・ドラゴン ATK2500 ☆8

『バトルフェイズ！Sin トゥルース・ドラゴンで、ダイレクトアタック！』

『速攻のかかし』の効果を使い、攻撃を無効にしてバトルフェイズは終了です」

『チツ……ターンエンドだ』

「よし、次は私のターンだ。ドロロー！」

アルトがカードを引いた。

「準備段階どころか、このデツキではそもそも決めると不可能か。私は『祝福の教会ーリチュアル・チャーチ』を発動。墓地から『アドバンスドロロー』一枚と、『カップ・オブ・エース』『エンシエント・リーフ』『ソーラー・エクステンション』三枚ずつをデツキに戻して、『時械神サンダイオン』を特殊召喚。墓地のモンスターをすべて戻して、『究極封印神エクゾディオス』を特殊召喚。『アドバンスドロロー』を二枚使って、エクゾディオスとサンダイオンをリリースして四枚ドロロー。エクゾディオスはフィールドを離れた場合、除外される」

意味不明！

手札は六枚だ。

『魔力節約術』を使い、『エンシエント・リーフ』を三枚使って六枚ドロロー。『カップ・オブ・エース』三枚を使って……すべて表だ。六枚ドロロー。フフフ、ちよつと楽しくなってきた」

副作用はあるかもしれない。

手札が十一枚になった。

「手札から『ソーラー・エクステンジ』を三枚発動。手札から『ライトロード・ハンター ライコウ』を三枚捨てて六枚ドロし、六枚を墓地に。墓地に送られた『髑髏顔 天道虫』三枚により、私のライフを一体につき1000回復」

ルシファイア&アルト LP33000↓36000

「さてと……」

「アルトさん。あとは、私のためにデッキのカードを出来る限り墓地に」

「……わかった。私は『ブーギートラップ』を使って、手札二枚をコストに『貪欲な瓶』をセット。そして発動だ。『女神の加護』三枚と『エンシエント・リーフ』二枚をデッキに戻して、一枚ドロ。エンシエント・リーフを発動し、そして引いたエンシエント・リーフを発動だ」

手札は十一枚。

「手札一枚をコストに、『一撃必殺！居合いドロ』を発動。七枚を墓地に送り、ドロ。『リロード』だ。墓地から『カップ・オブ・エース』三枚。『エンシエント・リーフ』三枚と『非常食』をデッキに戻す。そして、『リロード』を使って九枚戻して九枚ドロ。『エンシエント・リーフ』三枚と『カップ・オブ・エース』三枚を発動して十二枚ドロ。『手札抹殺』を使い、十四枚捨てて十四枚ドロ。『暗黒界の狩人 ブラウ』三枚の効果で、追加に三枚ドロ」

手札は十七枚。

「私は『サモン・ダイス』を使って3を出して、『魔轟神レイヴン』を特殊召喚。私の手札は十六枚で、このうち十枚を捨てることで、レイブンのレベルを10あげて、攻撃力を4000アップ。そして、『神秘の中華なべ』で回復だ」

ルシファイア&アルト LP36000↓51300

「カードを四枚セット、ターンエンドだ」

『お、俺のターン。ドロ！』

「スタンバイフェイズ。先ほどと同じだ。合計で、私のライフは9000が二回と4000が一回。合計で22000回復する」

ルシファイア&アルト LP51300↓73300

『な………ば、バトルフェイズだ!』

「墓地から『超電磁タートル』を除外します。メインフェイズ2に入ってください」

まずいことになってきた気がしなくもない。

『お、俺は……俺のフィールドのモンスターを全て守備表示にして、ターンエンドだ』

Sin トウルース・ドラゴン ATK5000↓DFE5

000

Sin サイバー・エンド・ドラゴン ATK4000↓DFE2

800

Sin レインボー・ドラゴン ATK4000↓DFE

0

Sin スターダスト・ドラゴン ATK2500↓DFE2

000

「いや、『絶対王 バック・ジャック』の効果は墓地から使う。除外して、デッキトップを確認。『DNA改造手術』だ。セットさせてもらう」

攻撃力だけではなく、守備力も全体的に高いといえるSinモンスター。だが、トウルースの心境は最悪だ。

わからない。

これからこのデュエルがどうなるのか。

そして、そのデュエルによって、自分がどうなってしまうのか。わからない。

そしてそれが、恐ろしくてたまらない。

「私のターン。ドロロー。さて、このターンで決着です」

まだ、五ターン目だ。

とてもそうとは思えないほど、状況は最悪だ。

「私は手札から、『ファントム・オブ・カオス』を召喚」

ファントム・オブ・カオス ATK0 ☆4

「墓地のカードを除外してコピーします。私は『戒めの龍』の効果のコ

ピー。さて、ライフコストを払うのはこれだけです。私はフアントム・オブ・カオスの効果により、1000のライフを払い。お互いの墓地と、表側で除外されているカードをすべてをデッキに戻します」
ルシフィア&アルト LP73300↓72300

具体的にはライフコウは残る。ライトロードだけは残るのだ。

『で、デッキの枚数が……』

「さて、続けましょうか。ライフコウたちをデッキに戻して、『究極封印神エクゾディオス』を特殊召喚。『アドバンスドロー』を使って二枚ドロ。『魔力儉約術』を使い、『エンシエント・リーフ』を発動。そして引いた二枚の『エンシエント・リーフ』を発動して四枚ドロ。さらに、『カップ・オブ・エース』を三枚発動して六枚ドロ。『ソーラー・エクステンション』三枚を発動。手札の『ライトロード・ハンター ライコウ』三枚をコストに六枚ドロして、六枚をデッキから墓地に送る。『髑髏顔 天道虫』三枚により、私のライフを一体につき1000回復します。さらに、『手札抹殺』を使って、八枚捨てて八枚ドロ。『暗黒界の狩人 ブラウ』効果で、私は追加で三枚ドロ」

ルシフィア&アルト LP72300↓75300

ルシフィアは手札が五枚スタートだったが、これで十一枚。

「リチュアール・チャーチの効果で、『アドバンスドロー』一枚『カップ・オブ・エース』『エンシエント・リーフ』『ソーラー・エクステンション』をデッキに戻して、『時械神サンダイオン』を特殊召喚！」

時械神サンダイオン ATK4000 ☆10

「墓地から『錬装融合』をデッキに戻して、一枚ドロ。エンシエント・リーフからスタート。エンシエント・リーフ三枚とカップ・オブ・エース三枚により、これ一枚で七枚増えます」

手札は……十八枚！

「そして、フィールド魔法『アンデットワールド』を発動。墓地から『馬頭鬼』を除外することで、『ライトロード・ハンター ライコウ』を特殊召喚し、『地獄の暴走召喚』で数を増やします」

ライトロード・ハンター ライコウ ATK200 ☆2

ライトロード・ハンター ライコウ ATK200 ☆2

「ライコウ二体とマテリアルドラゴンでリンク召喚、『トラフィックゴースト』!」

トラフィックゴースト ATK1800 LINK3
「二枚目の『馬頭鬼』と『地獄の暴走召喚』を使って、ライコウを三体特殊召喚!」

ライトロード・ハンター ライコウ ATK200 ☆2
ライトロード・ハンター ライコウ ATK200 ☆2
ライトロード・ハンター ライコウ ATK200 ☆2

「そして、『ギヤラクシー・クイーンズ・ライト』を発動。ライトロード・ハンター ライコウたちをレベル10に!」

ライトロード・ハンター ライコウ ☆2↓10
ライトロード・ハンター ライコウ ☆2↓10
ライトロード・ハンター ライコウ ☆2↓10
ファントム・オブ・カオス ☆4↓10

「あ、ファントム・オブ・カオスを忘れていました」
ひどい。

「私はライコウ二体、ライコウとファントム・オブ・カオスの組み合わせで、オーバーレイ!貪欲なる祝福者よ、その力を以て敵を喰らわん!エクシーズ召喚!『No. 35 ラベノス・タランチュラ』」

『あははははつ!やつと来たよ!僕の出番!まあでも、今日は主役じゃないからなあ』

なお、一枚は精霊、もう一枚は普通である。

No. 35 ラベノス・タランチュラ ATK0 ★10
No. 35 ラベノス・タランチュラ ATK0 ★10

「ラベノス・タランチュラの効果により、私のモンスターは全て、私とあなたのライフの差の分だけ上昇します。これはラベノスの永続効果であり、さらに、この効果は重複します」

『な……ということは……』

「私のフィールドのモンスターは、現在、私とあなたのライフの差を倍にした数値分アップします」

ルシフィアのライフは75300

トウルースのライフは 4000

その差は71300

よって……。

No. 35 ラベノス・タランチュラ ATK0↓142600

※他のモンスターの表記は面倒、かつ不要なのでしません。

「さらに、『エクシース・ギフト』を二枚使って、ラベノス二体の素材になっているモンスターを墓地に送り合計四枚ドロ。そして、三枚目の『馬頭鬼』と『地獄の暴走召喚』で、ライコウを二体並べて、二枚目の『ギャラクシー・クイーンズ・ライト』でレベル10に！」

ライトロード・ハンター ライコウ ☆2↓10

ライトロード・ハンター ライコウ ☆2↓10

「そして、三体目のラベノスをエクシース召喚！」

No. 35 ラベノス・タランチュラ ★10

「もうこの段階で増やしておいてよさそうですね。『エクシース・ギフト』を使って、三体目のラベノスの素材を使って二枚ドロ」

『グッ……』

「異次元からの埋葬』を発動。『馬頭鬼』を三枚戻す。そして『馬頭鬼』を使い、墓地から『レッド・リゾネーター』を特殊召喚！」

レッド・リゾネーター ☆2

「レッド・リゾネーターの効果で、私とあなたのライフ差の三倍に4000をプラスできる『時械神サンダイオン』を選択し、その攻撃力分回復！」

ルシファイア&アルト 75300↓293200

「『アドバンスドロ』を使い、サンダイオンをリリリースして二枚ドロ。私はトラフィック・ゴーストとレッド・リゾネーターでリンク召喚！『水晶機巧ーハリファイバー』！デッキから『ハネワタ』を特殊召喚！」

水晶機巧ーハリファイバー LINK2

ハネワタ ☆1

「そして、ハリファイバーとラベノス二体でリンク召喚！リンク4『ラストライガー』！『死者への供物』で破壊！」

なんだかよくわからないことに……。

『『デステニー・ドロ』でディアボリックガイを落として二枚ドロ。そして墓地から除外して特殊召喚。レベル1のハネワタをチューニング！』

「母なる大地は絶え果て、父なる空は黒く染まり、神なる太陽は我を見放す。

天より落ちた彷徨える翼竜は、黒き世界で翼を広げる。

その蜘蛛は、なぜ私を選んだ。なぜ私に、その糸を垂らした。

現世と冥界を行き来する火は、また燃えていく。

現世と冥界を行き来する雄叫びは、何度も響く。

真実を求める問いに、答えるものはいない。

ならば、答えない世界ですべてを超えたと誓う。

たとえこの身を止められようと、次なる好機を必ず掴む。

たとえこの身が機械になろうと、ただ限界を超えよう。

私は今、地獄の底にある天国より、すべてを終わらせる光となった。

シンクロ召喚

エンシエント・ホーリー・ワイバーン！」

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ☆7

「さて、本命の登場だけど、まだまだ私の準備は終わらないわ」

手札は十四枚だけど……。

『『モンスターゲート』を使って、エンシエント・ホーリー・ワイバーンをコストにデッキトップの『ファントム・オブ・カオス』を特殊召喚。墓地から『馬頭鬼』を除外して、『エンシエント・ホーリー・ワイバーン』を墓地から蘇生。『竜の鏡』を使って、墓地から『霸王眷竜ダークヴルム』と『霸王眷竜オッドアイズ』を融合して『霸王眷竜スターヴ・ウエノム』を融合召喚。そして、ファントム・オブ・カオスはラベノスを除外して、効果を得る。手札一枚をコストに『D・D・R』を、

そして残った馬頭鬼を使って、ラベノスを蘇生と帰還」

ファントム・オブ・カオス ☆4

霸王眷竜スターヴ・ウエノム ☆8

No. 35 ラベノス・タランチュラ ★10

No. 35 ラベノス・タランチュラ ★10

「フフフ……アハハハハ！ファントム・オブ・カオスたちは、これで、ラベノスの効果を得ている。そして、エンシエント・ホーリー・ワイバーンは同じ効果で自らを強化できる。よって、今私のエンシエント・ホーリー・ワイバーンは、あなたと私のライフの差の六倍に、2100を足した数値となる！」

ルシファイアたちのライフは293200

トウルースのライフは4000

よって……。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK1737300

『ば……馬鹿な……』

さすがに驚くしかない。

「遊月。まだ、ルシファイアは、なべを使っていないにや」

「……そうだな」

このタイミングで、ルシファイアの手札は十枚。

ここからどうするつもりなのだろうか。

「私は、『貪欲な壺』を二枚発動。ハネワタとディアボリックガイとブラウ三枚、『髑髏顔 天道虫』三枚とトラフィツクとラストライガーをデッキに戻して、四枚ドロロー。さらに『貪欲な壺』を発動。墓地からライコウ三枚とファントム・オブ・カオスとレッド・リゾネーターを戻して二枚ドロロー！」

あ、十三枚になった。

『異次元からの埋葬』で、『馬頭鬼』三枚を墓地に戻す。そして、私の手札には、三枚の『神秘の中華なべ』がある。馬頭鬼たちを除外して、エンシエント・ホーリー・ワイバーンに注ぎ込む！」

一回目。

ルシファイア&アルト LP293200↓2030500

馬頭鬼！

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK12161100

二回目。

ルシファイア&アルト LP2030500↓14191600

馬頭鬼!!

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK85127700

三回目。

ルシファイア&アルト LP14191600↓99319300

馬頭鬼!!!

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK595893900

『な……なんなんだ。これは?!』

「まだです！私は『一撃必殺！居合いドロウ』を発動！あなたのフィールドのカードは七枚。よって、デッキからカードを七枚墓地に送り、ドロウ！『リロード』でした。私は墓地から、『エンシエント・リーフ』三枚と『神秘の中華なべ』三枚と『カップ・オブ・エース』一枚をデッキに戻します」

さらに、と続ける。

「効果で墓地に送られた『シャドール・ヘッジホッグ』『シャドール・リザード』『超量士ホワイトレイヤー』効果で、『影依融合』のサーチと一枚ドロウと『超量妖精アルファン』の回収を行う。さらに、『真紅眼の黒竜』をデッキに戻して『伝説の黒石』を手札に。そして、『リロード』を発動。十一枚戻して十一枚ドロウ。『エンシエント・リーフ』三枚と『カップ・オブ・エース』一枚をつかって、八枚ドロウ！」

あ、十五枚になった。

『異次元からの埋葬』で、『馬頭鬼』達を墓地へ、そして、『神秘の中華なべ』は三枚あります。二回目！」

一回目。

ルシファイア&アルト LP99319300↓69521320

0

馬頭鬼！

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK417125730

0

二回目。

ルシフィア&アルト LP 695213200 ↓ 4866470
500

馬頭鬼!!

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK 291988011
00

三回目。

ルシフィア&アルト LP 4866470500 ↓ 340652
71600

馬頭鬼!!!

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK 204391607
700

『に……二千億だと!?!』

ルシフィアの手札は……十一枚!

「手札から『ブーギートラップ』を、手札コストを二枚使って発動。墓地の『レインボー・ライフ』をセットする。そして、手札コスト一枚をはらって発動!」

『だ、だが、俺のモンスターは守備表示で……』

『メテオ・ストライク』を装備!」

絶句である。

「そして、バトルフェイズ! 『エンシエント・ホーリー・ワイバーン』で、『Sin トウルース・ドラゴ?』を攻撃」

『お、俺は『魔法の筒』を発動……?』

トウルースは驚愕している。!!!!?』

何故、俺はこれを使ったのか。と。

いや、そもそも、『発動しようと思った』とかそれ以前に、『発動してしまっていた』とでもいうかのような不思議な感覚がする。

『魔法の筒』の効果に寄ってエンシエント・ホーリー・ワイバーンの攻撃が無効になり、私はダメージを受けますが、レインボー・ライフの効果で回復に変わります」

ルシファイア LP34065271600↓238456879
300

「そして、エンシエント・ホーリー・ワイバーンの攻撃力は、あなたとのライフの差を六倍にして、2100を足した数値になる」

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK204391607
700↓1430741253900

「さらに『ダブル・アップ・チャンス』を発動。エンシエント・ホーリー・ワイバーンはもう一度攻撃できる。そして……攻撃する前に、カードを発動出来るタイミングがある。私は『コンセントレイト』を三枚発動。エンシエント・ホーリー・ワイバーンの攻撃力を、その守備力分だけアップさせる！」

エンシエント・ホーリー・ワイバーンは自身の攻撃力しか上げないが、ラベノスは守備力も上げる。

よって、その守備力は、ライフ差の五倍に、エンシエント・ホーリー・ワイバーンの元々に守備力である2000を足した数値となる。

そして、それを三回プラスする。

よって……。

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK143074125
3900↓5007594389400

「さらに！アルトが伏せた『DNA改造手術』を使い、『機械族』を宣言！『リミッター解除』を二枚使って、攻撃力を四倍にします！」

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK500759438
9400↓20030377557600

「そして、ダブル・アップ・チャンスの効果を受けたモンスターが攻撃するとき、その攻撃力は倍になる！」

エンシエント・ホーリー・ワイバーン ATK200303775
57600↓40060755115200

『あ、あり得ない。あり得てはならない。そんなわけあるか。無限ループも使っていないのに……まだ、たったの五ターン目で……攻撃力……四十兆だ?!』

「何度も言いました。あなたが上にいてよかったです。『ワールドエン

ド』！」

エンシエント・ホーリー・ワイバーンが、エネルギーを放出した。消えて行くトウルース。

最後に彼は、一体何を思ったのだろうか。

★

「……おい。ルシフィア。生きてるかにや〜」

デュエル後。

完全にぐったりとしているルシフィアを、ウイズがつんつんとついていた。

しかし、ルシフィアは起きてはいるものの、ほとんど反応する気配がない。

「……超、ダルイです」

「でしようね。あんなだけやったんだ。多分これから先のデュエル一生分の戦闘ダメージを叩きこんでると思うぞ」

遊月がそういった。

「……なんだか私もダルイ」

「まあ、あのデュエルに耐えきれただけ、たいしたもんじゃ出てきたばかりで巻きこまれたアルト。

まあ、仕方のないことだ。

だって遊月だっていやがるレベルなのだから。

『おいルシフィア』

ブルームが呼んだ。

ルシフィアは視線だけを向ける。

そこには、綾羽の着替えシーンが映っている写真があった。

「？ルシフィア姉さん。ちよつと鼻血が出てるよ？」

「意外とまだ余裕あるにや……」

「まあ、これは私の性癖的現象ですから……」

「そんな単語初めて聞いたぞ」

『僕たちの同盟の辞書には普通に乘ってるけどね』

そう言う話が聞きたいわけではない。

「まあとにかく、ここまで発散したんだし、しばらくはおとなしくなっ

てるだろ」

「そうですね。百万くらいしか出せそうにないです」

「それでも十分過剰供給にや……」

とまあ、そんな部分もあったが……。

「まあともかく、悪性の精霊に関するサンプルデータも、実はこっそり入手してるにや……リフィルとライズが」

「隙も暇もものすごくあったので」

とても優秀な従業員である。

「一応解析しておく必要があるにや。さすがのこのデュエルは参考に
ならないにや」

「だろうな」

「元々は支店の様子を見にくる程度だったにや。そろそろ帰るにや
よ」

「えー……」

幼女二人は不満のようだ。

綾羽が苦笑した。

「大丈夫。本店に行けば会えるんでしょ。だったら、会おうと思えば
いつでも会えるよ」

「そうですよ！皆友達ですからね！」

香苗がそうだったので、幼女二人の機嫌もよくなった。

『しかし、余波がすごいな……』

『ああ。正直ここまでとは……』

レッドアイズとドーハスーラが、デュエルをした場所の近くを見ま
わっている。

「やっぱりすごかったか」

『行き場のないエネルギーが充満しているからな。パツと見問題はな
さそうだが、実は相当な衝撃になっている』

『まあ、利用できないわけでもないんだがな』

と言うわけで……。

『私からは土産として、これを渡そう』

レッドアイズが赤い眼を光らせると、充満していたエネルギーが集

まっけて行く。

そして、手に持ったカードに集約されていった。

『……うむ。まあこんなものだろう』

レッドアイズはウイズたちのところにいった。

そして、全員に対してカードを投げ渡す。

「おっとつとー！」

全員の方向に投げ分けているレッドアイズだが、さすがに全員が反応できるかどうかとなるとそれは別である。

だが、渡されたカードを見て、『おお！』と言っているものは多かった。

「私は『師弟の絆』にや。ん？これ化身カードかにや？」

『ああ。本来。化身カードは、本人の精霊力をもとにして作られたものを、アムネシアで使うのが一番その効果を発揮するんだが、その調整を弄って、それ以外の条件でもうまく使えるようにしたものだ』

リフィルもうなずいた。

「私は『雷龍融合』か」

『使いこなせれば強いカードだからな』

「あと、『真紅眼融合』が付いているのはなぜ？」

『ん？血縁者にレッドアイズ使いがいるだろう。そのような気配がした』

するものなのだろうか。

『ルシフィアは『アロマガーデン』だ』

「あ、『神秘の中華なべ』ではないんですね」

『君の場合は何に絞ればいいのかわからんからな……まあ、しばらくはそれを使ってデュエルするといい。アロマモンスターの精霊が気になるように作っているからな』

『要するに百合を撮ろうってことだよ』

「……分かりました」

ブルームはレッドアイズにボコられた。

「私は『竜の霊廟』？」

セームが首をかしげた。

『まあ、『ドラゴラド』と言うモンスターと君はシナジーがあるからな。そういったカードを持っているといいときもある』

「分かった！」

素直でよろしい。

「私は『錬成する振動』」

ヒュプノがぼつりと言った。

「兄を割ってドローだ」

「わかった」

いいのかそれで。

『俺は『緊急テレポート』か。まあ、無難だな』

『だろ？』

トリアファは渡された『緊急テレポート』の化身カードを見て、まあこうなるだろうな。と思った。

「僕は『機械複製術』」

『最近組んでいるデツキに入れると安定性が上がるぞ』

「ありがとうございます！」

ライズが最近組んだデツキをなぜしているのだろうか。

「私は『融合』か」

『青眼にバスブレを混ぜているようだからな』

アルトはレッドアイズを不思議そうに見た。

青眼としては宿敵であり、バスブレが相手だと天敵である。

そのような自分に、子のようなカードを渡すとは思っていなかったのだ。

というわけで、全員の土産を渡し終わった。

「というわけで、これで私たちは帰るにや。また今度、本店にもよってほしいにや」

「待ってるよ〜」

元気な様子で、ウイズたちはメルトに帰っていった。

「……なあ英明。胸騒ぎがするのは気のせいだろうか」

「アハハ。俺も止まらねえんだけど」

四十兆。

五ターンでたどり着くようなものではないし、そもそも使っているカードにシナジーはあっても整頓されたコンボ性能はなかった。

「……世の中にはあんなデユエリストがいるんだな」

「だな。ただ……これからはどんな攻撃力を見ても驚かないだろうな」

「同感だ」

遊月と英明も、その場を後にする。

普通の日常に戻るために。

そして、戦うために。

ただ、あの攻撃力が敵ではなかったことにホツとしながら……。

第三十話

『ムッフッフ。これはいい。これはいいぞー!』

『どうした?ブルーム』

ブルームが歓喜している様子だったので、ドラゴネクロが聞いてきた。

『美少女が百合っている写真までゲットしたのさー!これで歓喜の舞を踊らずしてどうする!』

『俺に言われても困るわ!』

遊月の家の地下。

精霊たちにとっても集まりやすい環境が整えられているので、遊月の中でなくともかなり自由に活動している。

そして、特に遊月が直接デッキに入れるような精霊たちは、それぞれ個室を持っているのだ。

当然、セキュリティは抜群である。

……ただ、遊月の中のほうが当然セキュリティがあるので、遊月のところに戻れないときの一時的なバックアップデータを置いておくくらいしか使い道がない。言い方を変えれば倉庫扱いである。

ただこういうのは、称号そのものに意味があるので一概に良い悪いといえないのだが。

『あ、そういえば、ドーハスーラとみずきも歓喜してたぞ』

『そうなの?』

『ドーハスーラは』我がコストにされることなく、活躍することができたぞー!』と喋っていて、みずきは『出番が来たあああああ!』とはしゃいでいた』

『本人たちらしいな。ていうか、もともとドーハスーラとみずきって効果の相性いいもんね』

アンデットが効果を発動すると効果が発動できるドーハスーラと、手札誘発でしかもフリーチェーンで効果を使えるみずき。

確かに相性はいい。

問題なのは、そんなことをごちゃごちゃいう前にドーハスーラが退

場することだ。

『そういえば……』

『どしたの?』

『いや、レッドアイズとドーハスーラは単体でも戦えるし、マスターと融合することで進化を発揮するだろう。ブルームにはそういうものはないのか?』

ドラゴネクロはそう思った。

レッドアイズはその力を使って、遊月を『ロード・オブ・ザ・レット』にしたうえで、『真紅眼の黒竜剣』になることができるし、さらにそこにドーハスーラも混ぜれば言わずもがなである。

だが、ブルームの場合はデュエルしている描写はあるものの、基本的には根っこを職種のように動かしているだけである。

『……僕にも強化手段がないわけじゃないよ?ただ、デュエルに使えないってだけでね。しかも、それはドーハスーラもレッドアイズも同じさ。ネクロ・バロール・ザ・ワールドはね。まだ『切っ払い切り札』なんだよ』

『まだあれより上があるのか?』

『あるよ。ただ……マスター以外の全員が束になっても、マスターには勝てないっていう力関係があるからなあ……』

遊月だけが飛びぬけて格が違う精霊たちの力関係である。

『ふむ……俺も鍛えるべきか』

『君は早くドラゴキュートスになるべきだね』

『グハッ!』

ドラゴネクロは吐血した。

まだ長いことドラゴネクロのままなのだが、そもそも、『遊月と一緒にいるだけで質が上がる』という性質上、ドラゴネクロとして質が上がってしまったため、そこからドラゴキュートスになるためには相当な鍛錬が必要である。

かわいそうな話だが、それでも、ドラゴネクロよりもブルームが断然格上なのは間違いない。

『……あ、そうだ、ブルーム。お前はあのデュエルを見て、どう思った

？』

『そうだねえ……』

ブルームはデュエルを思い出して、そのコンセプトを理解したうえで言った。

『あのデュエルは、『エンシエント・ホーリー・ワイバーン』の、最後の晴れ舞台じゃないかな』

★

何か大きなことがあったとき、その影響力を調べるのは重要である。

「で、何か報告することはあるか？時雨」

『衛星軌道で待機していた『ラボ』で、膨大なエネルギーの回収に成功したわ』

「……ああ、あつたな」

衛星軌道に研究所を置いている。

まあ、何とも言えないレベルの話だが、リアル・ソリッド・ビジョンを使うことで、疑似的にそれを可能とする。

『ダメージ・コンデンサー』か」

『そうよ。みんな、急ピッチで機材と設備を準備して、超特急で移動してかまえてたんだから。見ていて面白かったわ』

「さようですか」

『しかし、恐ろしいダメージね』

「ああ、四十兆のダメージだからな」

『フフフ。本当にとんでもないダメージよ？世界中のデュエリストが相手だったとしても、あの一撃で五十億人が吹き飛ばんだから』

「怖いな」

そういうえば、そういう数値か。

「で、時雨のやりたいこそは済ませたのか？」

『そうね。フフフ。アムネシアは精力が強い人がいっぱいいいわね♪』

「……そうか」

もう何も言うまい。

「で、時雨のほうから急にかけたきたわけだが、何かあるのか？」
『まあ、とりあえず報告をしたということと……最近、アムネシアで暗躍してる人たちがいるけど、あの収集施設以外でも、悪霊瘴気を集めてるそうよ』

「そうか……」

悪霊瘴気というのは基本的に操作するだけのものであり、何かにとどまっておくためには核が必要となる。

だからこそ、集まるようにしておくことで、あとはそれを片付ければいいと思っていた。

『……どうおもう？』

「さあな。ただ、それができる保存媒体を開発したか、それとも、私たちが何か常識にとらわれているか、そのどちらかだろう」

『……それもそうね』

圧倒的な年月を生きている遊月と時雨。

当然ながら、常識など常に作られ、そして動いているものだということは知っている。

いちいちとらわれていると、前に進めない。

前に進めないのは……とてもつまらない。

『まあ、遊月のことだから何か考えがあるんでしようね』

「ああ、アムネシアにいらつとるのであれば、最終的には私がつぶささ。学校にいる三年間は私にとっては休みのはずなんだがな」

『世の中そういうものよ』

ふと、時雨が聞いてきた。

『遊月。もしも、あの数値をたたき出したあの子が、本気で敵になつたらどうするの？』

「時雨、知っているはずだ。私は……才能も、努力も、常識も、運も、すべて叩き潰せるものを持っている」

『……それもそうね』

時雨は納得した様子。

『まあ、これからは事後処理で忙しいでしょうから、そつちに集中しな
やう』

「そうだな。そうするとしよう」

通話終了。

スマホをポケットに入れて、遊月はつぶやく。

「切らないほうがいい切り札なんだが、使う日は来るか？」

答えは、出ない。

出てほしいとも、思わない。

第三十一話

『アツハツハ!』

「ブルーム。何見て笑ってるんだ?」

朝。

高校生ならば学校の用意をしているわけだが、ブルームが何かを見て笑っていた。

遊月としてもかなり気になる。

『あ、マスターって翻訳サイトってどんなものを使ってる?』

「グー〇ル」

『まあ、打ち込んだら即座に翻訳してくれるもんね。で、英語版のカードってあるでしょ?もしくは、英語のテキストが存在するカードとか』

「アムネシアにいる外国人も大体日本語版のカードを使ってるが、まあ、あるな」

『で、グー〇ル翻訳に英語版のテキストを打ち込んだら面白いのなんのって』

「たとえば?」

『これ』

ブルームが見せてきたタブレットに乗っていたのは……『邪神イレイザー』だった。

英語版というより、英語のテキストが存在するカードである。

A god who erases another god.

When Eraser is sent to the graveyard,

all cards on the field go with it.

Attack and defense points are 1000 times

the cards on the opponent's field.

これが英語のテキスト。
で、これをグーグル翻訳に突っ込んで日本語訳すると……。
他の神を消す神。
消しゴムが墓地に送られると、
フィールド上のすべてのカードはそれと一緒にいきます。
攻撃と防御のポイントは1000倍
相手のフィールド上のカード。
となる。

「消しゴムが墓地に送られるとフィールドのすべてのカードは道連れか……」

なるほど、ブルームが笑いたい気持ちは分かった。

消しゴム……消しゴムって……。

『ね、面白いでしょ?』

「まあ、そうだな」

というわけで。

「なあブルーム。昨日、私の部屋からタブレットが消えていたんだが」

『……撤収!』

「逃がさん」

ブルーム。タブレット没収。

★

「……どうした。英明」

通学路にて。

珍しく綾羽と香苗を連れず、さらにハイヤーにも乗らずに通学路を歩いている遊月だが、遭遇した英明が嫌なほどげっそりしていた。

「いや……時雨さんに会ったんだよ」

「……絞られたのか?」

「いやそういうわけじゃねえけど、あの人スキンシップ激しいからな……」

「臯月もすごかっただろ」

「いや、臯月の場合、スキンシップは激しかったけど、密着してきたりっっていうのは本当にあの日だけだったからな」

「それもそうか」

皐月の体内には、悪霊瘴気を発生させる核があった。あまりにも密着していたりすると、英明にそれがうつる可能性がある。

そう考えていた皐月は、英明を振り回してはいたが、実際の身体接触は抱きつくにとどまっていた。

ブルームが取り除いたので解禁されていたわけだが、当時は中学二年生なので、本人の中では困惑が大きかった部分もあるだろう。

結果的に、皐月はそこで止まっていたわけだ。

だが、時雨はそんなことはない。

止まってはくれない。

「加減されたな」

「だな。正直やばいわあの人……」

そもそもの話をすれば、身体能力は英明よりも時雨のほうが高い。というか、遊月と比べても高いといえるだろう。

お互いに全力ならば遊月のほうが上だが、普段出せるレベルは時雨のほうが高い。

時雨が本気になれば英明など瞬殺だろう。

……実際、腹上死一步手前になった男が昔いたので笑えない。

「ただ、こつちが一瞬でも攻めの意思を見えたらあの人は一秒くらい止まるからな。その隙に逃げてきた」

「美女の扱いに慣れたな。英明」

「そういうこと言うのはやめてくれませんかね!？」

時雨はドSとドMを併せ持ち、性別関係なくどっちもいける性欲お化けである。

そのため、相手がひ弱の場合はSが起きているが、逆に攻めの意思を見せるとMが覚醒するのだ。

ちなみに、制御できない彼女の本能の話なのでこの方法は何度も通用する。

英明のそれは慣れである。

「遊月の相棒になったことで発生する数少ないデメリットだな……」

時雨の価値観の一つとして、『遊月についていけるような人間なら強いだろう』という考えである。

というわけで狙われるのだ。これは歴代の相棒全員がそうである。全員うまく逃げていた。別に逃げることでできそうな人間を選んでいただけではないのだが。

「がんばれ。性欲が失われた私に対して、時雨はそういう意味では興味ないからな」

「……うらやましいようなかなしいような」

「やかましい。行くぞ」

「ああ」

というわけで、登校である。

……で。

「今日からみんなと一緒に学ぶことになった周防時雨よ。よろしくね」

（いや、なんでお前も高校生になってんねん！）

学校に行つて、HRになってみて驚いた。

なんと、時雨がアムネシアの夏服を着ていたのである。

普段は黒い扇情的なドレスを着ている時雨だが、今は夏服である。

すなわち、半袖で薄着である。

醸し出されるその大人の雰囲気クラス全体が飲まれている中（実年齢を考えるとおばあちゃんというより化石だが）、時雨は教室の中を歩いて、教室の一番後ろの空いていた席に座った。

で、そのHR中、ほぼ全員が気になってみているのだが、時雨は当然そんなことは気にしない。

そもそも、Mなのでみられることを許容し、そもそも『みられる女は美しい』とかいう座右の銘を掲げているので、見られることを望むのだ。

というわけで、今日からアムネシアの高等部の一年一組では、めっちゃやきれいな人が一緒に授業をすることになった。

★

時雨に限らず、転校生というものはそもそも目立つ。

そして、何かコミュニケーション能力に問題があるというのならともかく、時雨は基本的にだれとでも話せる人間だ。

……誰かを虜にしようとしている部分は確かに認める必要があるかもしれないが、それでも、きれいで話しやすく、賢いこともばかなことを話せる人間というのは人を集めるものだ。

そのため、行こうと思えばすでに誰かがいるので、遊月や英明がコミュニケーションを取れるタイミングがない。

なんとも完成されすぎていてかなりあれだが、そもそも経験があるのは本当のことなので今さらいつても仕方がない。

そして彼女が虜にするのは生徒たちだけではなく、虜にできるのは休み時間だけではない。

新任の先生方ももれなく虜にされている。

のだが、時雨は遊月の近くに存在する人間である。

新任の先生ならともかく、高齢の先生であればギリギリ耐性があるのだ。

まあ、あつてないような耐性だが。

とはいえ、少なくとも初日はまだ大丈夫である。

そして放課後、時雨はふらっと教室からいなくなった。

「で、遊月。どうする？時雨はどこかに行つたようだが」

「とりあえず……生徒会室に行つてみるか」

「え、何かわかるのか？」

「アムネシアに入ってくる転校生は生徒会が主にかかわる設定になっている」

「なるほど」

というわけで、生徒会室に向かうことにした。

自分から進んで生徒会室に行く生徒はほとんどいないと思うが、遊月の場合はそう珍しい感覚というわけではないし、その遊月に影響される英明も同様である。

そして、生徒会室に到着、コンコンとノックした。

……が、反応がない。

「留守じゃないよな」

「ああ」

遊月はちよつとドアを開けてみた。

するとそこには……。

「えへへ。お姉さま」

「あらあら、月詠ちゃん。すっかりかわいい子になっちゃって」

余裕のある雰囲気だったはずの御堂月詠が、彷彿とした表情で時雨を抱きしめていた。

時雨は月詠をあやすように頭を撫でていて、時々月詠の大きな胸をもんだりしているが、そのたびに月詠から気持ちよさそうな声が漏れている。

（調教されとる！）

（手遅れだったか……）

そして耳を澄ませると、ビデオカメラの駆動音が聞こえてくる。

遊月と英明がちらつと横を見ると、ビデオカメラでその様子を見守るブルームが。

『あ。マスターも来たの？』

「ああ、時雨が転校してくることを知らなかったからな」

『あー。なるほどね』

「で、いったい何があったんだ？」

『月詠さんは調教されました』

「……：そーいや生徒会長って、時雨さんのことをデータでは知ってるけど、実際に会ったことはなかったな」

「私の監視下で一度会わせておくべきだったか？」

『いやー……あの様子だと結果は変わらなさそうだけどね。月詠さんって頑丈さのあるSって感じだけど、それだと時雨さんには勝てないでしょ。相性的に』

「……：そんなものか？」

『いや、僕だって詳しくは知らんよ……』

ただ変わらないのは、生徒会長である月詠が調教されてしまった以上、時雨の転校云々に対して、抵抗はおろか時間稼ぎすら不可能ということだ。

『僕、月詠さんの自室に行ったんだけどね』

「……どうだったんだ？」

『月詠さんは多分、これからは時雨さんなしでは生きられない体になってるかも』

「みりやわかるわ」

「え、遊月って見ればわかるのか？」

「時雨の被害者はなにも月詠が最初じゃないからな」

ひどいのである。

「フフツ。遊月。来たのね」

「ああ。時雨が転校すること知らなかったもん」

「そういうええそうね。まあ、私にとってはどうでもいいことよ」

そうなの？

「さて、そろそろ行きましようか」

月詠から手を放す時雨。

「あ……」

そしてそれに対して名残惜しそうな声を出す月詠。

「フフフ。心配しなくても、あとでかわいがってあげるわ」

時雨がドアの近くに來ると、指をパチンと鳴らした。

すると、月詠の瞳に光が宿る。

「あ、あれ？……私はいったい……」

困惑している様子の月詠。

その次の瞬間、時雨が生徒会室のドアを閉めたので、遊月側からは

月詠が見えなくなった。

(……指パチンで戻せるのか!?)

英明はそれを見て愕然。

さすがに意味不明！

「さあ、遊月、英明。行くわよ」

「……」

正直、嫌である。

★

『さてと、また本でも書こつと。あと動画の編集もあるしね』

ブルームは自分のパソコンを開いた。

……飛行中のドーハスーラの上で。

『ブルーム、どうかしたのか?』

『んにや。ちよつと書いておきたいことがあったんだよ』

『どんな内容だ?』

『モンスターが出せる最高の攻撃力に関してのやつだよ』

『ああ……あのエンシエント・ホーリー・ワイバーンの攻撃力には我もビビった』

『僕も驚いたけど……コンセプト的に、多分もう攻撃力だけを考えていけば、ワイバーンはもう出てこられないと思うよ』

『どういう意味だ?』

『あのデュエルでの攻撃力アップは、分解するといくつかのコンセプトに分かれる。まずはこれ』

ブルームはいろいろ入力した後、ドーハスーラにも見せた。

【最初に膨大な回復を行い、資本を作る】

『まあ、確かにその通りだな。あのターン数であの回復を可能とするのはあのコンボくらいだろう』

『僕もそう思うよ。『女神の加護』って、そういう意味じゃ分かりやすいカードだからね。で、次はこれ』

【ラベノス三体。それをコピーしたモンスター二体、エンシエント・ホーリー・ワイバーンを並べて、

エンシエント・ホーリー・ワイバーンの攻撃力が『ライフ差の六倍+2100』という状態を作る】

『回収手段として用いたチャーチサンダイオンの流れから、『アンデットワールド』『馬頭鬼』のアンデット蘇生パーツによって、『ライコウ』と『地獄の暴走召喚』で並べたのち、『ギヤラクシー・クイーンズ・ライト』でレベル10にして、ラベノスを並べたあれか』

『そう。これによって、この状態が完成した。まあ、リンク先の問題とかいろいろあつて面倒だったと思うけど。で、次はこれ』

『『神秘の中華なべ』と『馬頭鬼』によるライフアップ。』

『『異次元からの埋葬』と『一撃必殺！居合いドロウ』による再利用
これにより、膨大なライフと攻撃力をワイバーンに付与する』

『書かれている通りだな。それ以外に何かがあるようにも思えない』
『そうだね。で、次がこれ』

『攻撃を行い。『レインボー・ライフ』状態で構えて『魔法の筒』を受けける』

『これによってまたすごいことになっていたな』
『だね。次はこれ』

『【コンセントレイト リミッター解除 ダブル・アップ・チャンスを使い、爆アゲして相手を原子分解する】

『……思うのだが、あの後、トゥルースは具体的にどうなったの？』
『僕もしらない。けど、ここで僕はとある問題を発見した』

『問題？』
『問題なのは。攻撃力を上げまくるとき、『コンセントレイト』の存在だよ』

『守備力分、攻撃力を上げるカードだったか？』
『それ』

『いったい何の問題がある』
『ラベノスの効果がワイバーン以外の五体にあつたから、守備力がライフ差の五倍上がっていた。でも、ワイバーンは攻撃力しか上げることができない』

『そうなのか？』

『そうだよ。もしもワイバーンを出すのではなく、ラベノス三体と、コーピーンスター三体なら、攻撃力も守備力もライフ差の六倍になっていたんだ』

『なんだと!?!』

ドーハスーラは驚いた。

そもそも彼は、あの盤面よりも強い盤面を予想できなかったからである。

『あのデツキを渡したのは僕だよ。コンセントレイトを本当に使うというのであれば、さっき言った盤面にすべきだったね』

『ふーむ……』

『ラベノスの驚異的なところは、全体にその効果を付与するところじゃなくて、『ステータス』を強化するところだ。だからこそ、『守備力』というアドバンテージを丸ごと攻撃力に変換する『コンセントレイト』に大きな意味があったわけだけど、それなら、ワイバーンに一番はない。まあ、最後の晴れ舞台とか言っちゃったから怒られたけどね』

『当然だ』

『ただ、ワイバーンはこれから、自分にしかないとこを見つけていくしかないね。ラベノスとは大きく異なる部分が多いから差別化できるけど、あのコンセプトで攻撃力を求めた場合、ワイバーンは絶対に勝てないからね』

そういいながらも、ブルームはタイピングしていた。

『ふーむ……思うのだが、単に攻撃力を求めるのならば、無限ループでいいのではないか?』

ドーハスーラが言っているのは、モンスターの攻撃力を調節したうえで、『レインボー・ライフ』と『ギガンテック・ファイター』を合わせてライフを回復し、そしてそれを『ラーの翼神竜』で攻撃力に変換する。といったコンボのことだろう。

『ドーハスーラ。何当たり前のこと言ってるの?』

『む?』

『無限ループを使って攻撃力をただあげる。確かにそれでも攻撃力は

上がるよ？でも、それだと満足できない人っていうのはいるのさ。だから、そういうことは言っちゃだめだよ』

『そういうものか』

『そういうものだよ。まあ、求めてしまったがゆえに抜け出せなくなる熱みたいなものだから、そのうち覚めるんだけどね』

『まあ、確かに珍しいことではないか』

ドーハスーラはそういつて納得した。

そして……。

『！』

二人とも、悪霊の存在を感知した。

『さて、行くか』

『そーだね。結構大きい悪霊みたいだし』

ブルームとドーハスーラはその悪霊のもとに向かった。

そこにいたのは……。

『フフフ。フハハハハ！ハカイ。ハカイシテヤル！』

盛大に暴れまわっている『混沌幻魔アーミタイル』だった。

出現したばかりなのか、周りの者はほとんど壊れていない。

だが、あまりにもあふれ出る悪霊瘴気が、周辺にあるものを侵食し始めている。

『なんじゃありゃー！』

『アーミタイル!?』

これには高位の精霊であるブルームとドーハスーラも驚いた。

『で、ブルーム、どうする?』

『どうするって、まずは戦うしかないでしょ。だってデュエルをいきなり受けてくれるようには見えないよ僕』

『そうだな。我也見えん。というわけでブルーム。防御は任せるぞ！』

ドーハスーラは右手の杖に波動を集約させていく。

だが、アーミタイルはその力に早々に気が付いた。

『コザカシイ！』

アーミタイルは口からエネルギー弾を放出してくる。

『ドーハスーラ。君がやろうとしている攻撃を比べて、即座に向こうがやってきた攻撃のほうが強くない?』

『うるさいわ!』

『まあ防ぐとしますか』

ブルームは根っこを触手のように伸ばして、そのエネルギー弾を受け流した。

空に向けて流したので何も壊れていないが、なにかに被害が出るのも時間の問題だろう。

『うへえ、こりや相当エネルギーを使うなあ』

『エネルギーがたまったぞ!』

『さっさとやれや!』

ドーハスーラが波動を固めた弾丸を杖から放出する。

それに対して……。

『キカンワー……グホアアアアア!』

効きました。

『あ、効いとるやん。なんか『あたつても意味がない』みたいな展開を予想してたのに』

『私の攻撃でまったく効果がないとか、向こうの格が高すぎるわ!だが、あまり効いたようには見えないな』

『そうなんだよねえ』

アーミタイルはすぐに起き上ってくる。

三幻魔の合体。

デュエルモンスターズにおける格の高いモンスターであることに間違いはない。

そのため、頑丈さもけた違いだ。

『ムシケラドモガアアア!』

『蛇と花だけどね。おーい。お前の母ちゃんデーベソ!』

『フザケルナ!オレノカアチャンハデベソジャネエ!』

『あの巨体で『カアチャン』って言ってるとなかなかシユールだ』

『同意しよう。おーい!お前の母ちゃん有機物!』

『フザケルナ!オレノカアチャンハユウキブツジャネエ!』

『じゃあ一体何で出来てるんだ……』』

動物や植物である以上、有機物である。

精霊力というものが有機物として考えられるという研究結果が出ている以上、当然、動物であるドーハスーラも、植物であるブルームも有機物である。

まあ、このアーミタイルの親が有機物であろうと無機物であろうと問題は……ありそうだが、いま議論しても答えは出ないのでスルーしよう。

『で、ドーハスーラ。どうする?』

『この辺りは人が少ない……どちらかが全力を出すか?』

『なるほど。まあ、こいつみたいなのが相手なら、短期決戦のほうがよさそう。で、その場合、どっちが本気を出したほうがいいと思う?』

『……我だな』

ドーハスーラは『ブルームの本気』を思い出して、自分のほうがいいと思った。

戦闘力はドーハスーラのほうが上だが、実際に全力を出した場合、出力をちよつとでもミスするとブルームの場合はマズイ。

『なら任せるよ』

ブルームはドーハスーラから飛び降りた。

『……仕方がないか』

ドーハスーラは『DNA改造手術』のカードを取り出した。

『あのデュエルには一度貸し出して、すぐに戻ってきたが……まあその話は置いておくか』

ドーハスーラは『DNA改造手術』のカードを掲げる。

そして、カードから力がドーハスーラに流れていく。

アーミタイルがそれに気が付いた。

『ナニラシテイル!』

エネルギー弾がドーハスーラに向かって放出された。

『……ふああ。まあ、がんばれ』

ブルームはドーハスーラを守るどころか、のんきに欠伸あくびしていた。

エネルギー弾がドーハスーラのそばで爆発し……突如出現した黒

い球に、ドーハスーラごとすべて取り込まれた。

そして、空間を割って、一つの存在がその姿を現す。

「演出ご苦労。さて、第二ラウンドと行こうか」

蛇のような体は、完全に人の形をとっていた。

黒いシャツとズボン、ブーツの上に、紫色のコートと、骨のアクセサリーを付けた隻眼のイケメンだ。

手にはドーハスーラが持っていた杖を持ち、真っ白の髪をなびかせるその姿は、表現するならば、『王』を超えた何かにあざわしい。

『どう？久しぶりの本気は』

「……悪くない」

ドーハスーラはあいている右目でアーミタイルを見る。

「……この姿になると、あいつくらいなら片手間に潰せそうで怖いな」
『そりやそうだよ』

ブルームは機械を使って、ドーハスーラの力を計測した。

屍界の魔眼神バロール・ドーハスーラ

星10 闇属性 魔法使い族 ATK4000 DFE3000

特殊召喚・効果モンスター

このカードは通常召喚できず、このカードの効果でのみ特殊召喚でき
きる。

このカードの特殊召喚に成功したデュエル中、自分は「死霊王
ドーハスーラ」を召喚、特殊召喚、セットすることはできない。

このカード名の③⑤の効果は一ターンに一度しか発動出来ない。

①：自分フィールドの、種族が魔法使い族で元々のカード名が「死
霊王 ドーハスーラ」のモンスター三体を対象にして発動できる。対
象にした三体のモンスターを除外し、手札のこのカードを特殊召喚す
る。

②：このカードが表側表示で存在する限り、手札・デッキに戻らず、
除外されず、お互いの手札に存在するモンスターは全てアンデット族
になる。この効果は無効にならない。

③：「屍界の魔眼神バロール・ドーハスーラ」以外のアンデット族モ

ンスターの効果が発動した時に発動できる。その効果を無効にして、このカードにドーハスーラカウンターを1つ置く。

④：このカードにドーハスーラカウンターが4つ以上存在する場合に発動できる。このカードのドーハスーラカウンターを4つ取り除くことで、相手フィールド・墓地の全てのカードを除外する。この効果に対して、相手はモンスター・魔法・罠の効果が発動出来ない。

⑤：「アンデットワールド」が存在する場合、自分・相手のスタンバイフェイズに発動できる。このカードを墓地から特殊召喚する。

『……相変わらずの効果だね』

ブルームは機械を仕舞った。

ドーハスーラは杖を構える。

アーミタイルはうなっているが、悲観している様子はない。

まだ何とかなるかと考えているのか、それとも……。

『グヌヌ。ナニガドウナツテイルノカヨクワカラング、圧倒的なパワーで叩き潰せばいい！』

「ふむ、それ相応に安定してきたようだな」

ドーハスーラはアーミタイルの様子に納得した。

『死ね！』

アーミタイルは再度エネルギー弾を放つ。

だが、ドーハスーラは杖を構えて波動の障壁を生み出した。

エネルギー弾が障壁に当たると、そのまま消滅する。

……なお、ステータスの話をするとアーミタイルはほぼ最強だが、

『何!?!』

「圧倒的なパワーか。それが通じるのは、お互いに同じレベルで戦っている時だけだ」

『なに？ 貴様のほうが格上だというのか!』

「その通りだ」

ドーハスーラが再度杖を振ると、『死霊王 ドーハスーラ』を小さくしたような蛇が四体出現する。

『なんだそれは』

「なんだと思う?」

ドーハスーラは不敵に笑う。

ブルームはそれを見ながら思った。

(あれってカウンターだよな。トークンじゃなくてカウンターがある形で出てくるのは、さすがにドーハスーラくらいだね)

四匹の蛇がドーハスーラに力を与え始める。

「……ブルーム。今、我の視界にいるぞ」

『おっと、それは僕も危ないね』

ブルームはドーハスーラの後ろに隠れた。

『なんだ?』

「こういうことだ。それと……何かをたくらんでいるやつを、ただ待つのはよくない」

蛇たちが力を与えるのを終える。

そして……ドーハスーラの左目が開かれた。

死

『!!?!??』

アーミタイルは一瞬、理解することができなかった。

ただわかったのは、このままではマズイということと、『デュエルを開始すればこの状態が一時的に中断されて、そのデュエルに勝てばこの状態が解除される』という、デュエルモンスタースターの精霊・悪霊に適用される絶対の法則のみ。

アーミタイルは自分のそばに、カードを五枚出現させた。

「ほう。その判断を即時に行ったか。やはり、高位の悪霊を束ねた奴は違うな」

『い、今のはいったい……』

「安心しろ。我に勝つことができれば、それが解けることに変わりはない」

ドーハスーラは指を鳴らすと、蛇を一匹出現させた。

その蛇はドーハスーラの左腕に巻きつくくと、そのままデュエルデスクになった。

『デュエルなら、デュエルなら俺は負けん！』

「そうして吠えている。死後の世界そのものを教えてやる」

『デュエル！』

ドーハスーラ LP8000

アーミタイル LP8000

『俺の先攻！俺は手札から、『おろかな埋葬』を発動。デッキから『ヘルウェイ・パトロール』を墓地に送る。そして、このヘルウェイ・パトロールを墓地から除外することで、手札から『暗黒の召喚神』を特殊召喚！』

暗黒の召喚神 ATK0 ☆5

『さらに、暗黒の召喚神をリリース！デッキから現れる。『降雷皇ハモン』！』

降雷皇ハモン ATK4000 ☆10

『さらに手札から、フィールド魔法『失樂園』を発動！この効果で、カードを二枚ドロウする。カードを二枚セット、ターンエンドだ』

「なるほど、私のターンだ。ドロウ」

ドーハスーラはカードを引いて、そのあと微笑んだ。

「さて、失樂園があると、効果の対象にすることと、効果による破壊が

不可能だったな。まあ、あまり関係はないか」

『何?』

「我は手札から、『手札抹殺』を発動だ。まずは手札交換しようじゃないか」

『ぬう……』

ドーハスーラは五枚交換。

アーミタイルは二枚交換。

「我は墓地から、『屍界のバンシー』の効果を発動。デッキから『アンデットワールド』を発動する」

広がり始める屍界。

アーミタイルが使った失楽園と混じってなんだかとても絶望感が漂う雰囲気になっているが、ドーハスーラは気にしない。

「さらに、墓地から『馬頭鬼』を除外して効果発動。墓地から我が分身、

『死霊王 ドーハスーラ』を特殊召喚!」

死霊王 ドーハスーラ ATK2800 ☆8

『出たか』

「当然だ。さらに我は手札から、『封印の黄金櫃』を使い、『不知火の武器』を除外する。そして、除外された物部の効果を発動。それにチェーンして、フィールドの我が分身の効果を発動する!」

『ぐ……』

「消えてもらうぞ。『降雷皇ハモン』!」

ドーハスーラが波動をぶつけると、ハモンは消えていった。

「そして、物部の効果によって手札交換だ。一枚ドローして一枚捨てる。そして、今捨てた『グローアップ・ブルーム』を除外して効果発動!」

『お、僕だ』

「『アンデットワールド』が存在することにより、デッキから二体目の我が分身を特殊召喚!」

死霊王 ドーハスーラ ATK2800 ☆8

「バトルフェイズ。二体のドーハスーラで、ダイレクトアタック!」

『ぐおおお!』

アーミタイル LP8000↓5200↓2400

「メインフェイズ2だ。我は『アドバンスドロー』を使い、ドーハスーラをリリースして二枚ドロー」

『お前もするんかい！』

「あれだけコストにされてたら諦めの境地くらい達するわ！我はカードを二枚セットして、ターンエンド！」

『ごちゃごちゃと……俺のターン。ドロー！』

「スタンバイフェイズ。墓地から戻ってこい。我が分身！」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

『ぬう……俺は手札から『おろかな副葬』を発動。デッキから『方界降世』を墓地に送る。そして効果を発動。デッキから『方界胤ヴィジャム』を三体、特殊召喚！』

方界胤ヴィジャム ATK0 ☆1

方界胤ヴィジャム ATK0 ☆1

方界胤ヴィジャム ATK0 ☆1

『そして、『融合準備』を使い、『混沌幻魔アーミタイル』をみせることで、デッキから『幻魔王ラビエル』を手札に加える。悪魔族モンスターであるヴィジャムを三体リリースすることで、降臨せよ！『幻魔王ラビエル』！』

幻魔王ラビエル ATK4000 ☆10

「二体目の幻魔か」

『そして、失楽園の効果で二枚ドロー。バトルだ！幻魔王ラビエルで、攻撃表示のドーハスーラを攻撃！』

「受けよう」

ドーハスーラ LP8000↓6800

『カードを一枚セット、ターンエンドだ』

「我のターンだ。スタンバイフェイズ。墓地から戻って来い」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

この蘇生効果。やっぱりエグイ。

「そして、もう一方のドーハスーラを攻撃表示に変更」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000↓ATK2800

「さて、また除外してもらおうか。我は『不知火の隠者』を通称召喚！」
『ラビエルの効果により、俺のフィールドにトークンを特殊召喚！』

不知火の隠者 ATK 500 ☆4

幻魔トークン DFE1000 ☆1

「構わん。我は隠者をリリースして効果を発動。それにチェインして、ドーハスーラの効果を発動。ラビエルを除外し、『ユニゾンビ』をデッキから特殊召喚。ドーハスーラを対象にし、デッキから『妖刀―不知火』を墓地に送る！」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3

死霊王 ドーハスーラ ☆8↓9

「レベル8のドーハスーラに、レベル3のユニゾンビをチューニング。現世をさまよう怨霊よ、弔われず嘆く骸に宿りて、屍界の底より顕現せよ！シンクロ召喚！レベル11『骸の魔妖―餓者髑髏』！」

骸の魔妖―餓者髑髏 ATK3300 ☆11

『な……』

「バトルフェイズ！まずは、ドーハスーラで幻魔トークンを攻撃！」

『ぐっ！』

「続けて、餓者髑髏でダイレクトアタック！」

『させるか！』『ガード・ブロック』を使い、ダメージを無効にして一枚ドロロー！』

「ふむ……カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

『俺のターン。ドロロー！……よし』

「何を引いたのかは知らんが、スタンバイフェイズ。我が分身は戻って来る」

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

『構うものか！俺は手札から、『ブラック・ホール』を発動！全て消え去るがいい！』

「雑……」

ドーハスーラの全てのモンスターが破壊される。

アーミタイルの手札は四枚。

『さらに、手札から『大欲な壺』を発動し、除外されている『ヘルウエ

イ・パトロール』『幻魔王ラビエル』『降雷皇ハモン』をデッキに戻して一枚ドロウ。そして、魔法カード『HEROアライブ』を発動！『E・HERO プリズマー』！」

アーミタイル LP2400↓1200

E・HERO プリズマー ATK1700 ☆4

『プリズマーの効果に寄り、エクストラデッキの『混沌幻魔アーミタイル』を見せることで、『神炎皇ウリア』の名を得る！『失樂園』で二枚ドロウし、『HERO'S ボンド』を発動。さらにプリズマーを特殊召喚！』

E・HERO プリズマー ATK1700 ☆4

E・HERO プリズマー ATK1700 ☆4

『それぞれの効果を使い、ラビエルとハモンの名を得る。俺は三体を除外し、『混沌幻魔アーミタイル』……俺自身を降臨させる！』

混沌幻魔アーミタイル ATK0↓10000 ☆12

『フハハハハハ！俺の力により、俺のターンの間。攻撃力が10000ポイントアップする！どうだ。この圧倒的な攻撃力！』

「……ブルーム。大きな数値に見えないのは私の気のせいだろうか」

『知らんよ……僕らが毒されただけじゃない？』

「それもそうか」

『何をごちゃごちゃと言っている。これで終わりだ！俺自身で、貴様にダイレクトアタック！』

アーミタイルがエネルギーを集約させていく。

そしてそれを、まっすぐドーハスーラに向けてはなった。

「……残念だ」

ドーハスーラは指をパチンと鳴らした。

すると、ドーハスーラのすぐそばで、空間が裂けた。

「せめて、魔法や罫を破壊できるカードを握っていれば、可能性を増やすことはできていたのに」

『デイ……』『デイメンション・ウォール』だと……』

「対象をとる『魔法の筒』は『失樂園』があるお前には通じないが、こちらは対象には取らない。貴様程度の攻撃が、我に届くはずもなから

う。先ほどは、あえて華を持たせたただけだ」

エネルギー弾が裂けた空間に入っていく、アーミタイルの近くで炸裂する。

『グアアアアアアア！』

アーミタイル LP1200↓0

アーミタイルが消滅していく。

「ま、こんなものか」

『だいぶ余裕あったね。次のターンには除外してた物部が戻ってくる上に、『妖刀―不知火』まで準備してたし』

「そうだな」

ドーハスーラは指を鳴らして、もともとの蛇の状態に戻った。

『ふう、こうして戻ってみると疲れるな』

『あの状態じゃないとかなわない相手ってなかなかいないもんなあ。しかも、ドーハスーラってあの状態じゃないとデュエルできないし』
基本的にデュエルモンスターの精霊は、デュエルで使われる存在であって、デュエルをする存在ではない。

悪霊たちはバンバンデュエルしているが、あれは生き残るための最終手段として振り絞っているからである。

ブルームのように自分でデュエルできる精霊は少ないのだ。

ちなみに、野良の精霊でデュエルできるものはほとんどいない。

ブルームだってそれは同じだ。

これに関しては、マスターである遊月がすごいというだけの話である。

『そうだな。まあ、それに関しては我がこれから鍛えていくしかないか』

『だって普通は切らないほうがいい切り札だもんね』

やらないほうがいい。

ただし、出し渋っていては仕方がないときはある。

このようになってるのは、切らないほうがいい切り札を持っているものはそれ相応にいて、自分の判断でやっていいと認められているのがドーハスーラたちを含めて数体しかない。ということである。

『……ふう、あの姿になるのはかなりのエネルギーを消費するからな。我はもう戻って休むとしよう』

『さよならく。僕はまだノルマが残ってるから。お先に帰りな』
基本的に、精霊であるブルームたちの悪霊退治を含めた業務は『ポイント制』である。

決まった業務があるのではなく、それぞれの項目にポイントが割り振られており、それを一定以上にすることでノルマをこなす。

もちろん、遊月が直接使っている精霊たちのみである。

序列ごとにノルマのポイント量が決まっており、序列二位のドーハスーラと序列三位のブルームでは大きく異なる。

直接大物を倒したか、それとも協力しただけかでポイントが大きく異なるが、今回のアーミタイルのような大きな精霊を直接倒せばそのポイントは大きい。

ちなみに、このポイントの計測方法だが、遊月が『フィールド魔法の化身カード』の使い手なので、それを研究して作られた結界によって計測されているため、遊月が決めたルールでこなさないとポイントは増えない。

なお、ノルマは月単位で決まっているため、月末は阿鼻叫喚である。これに関しては、夏休みの終わりに地獄を見る学生と変わらない。

ちなみに、序列一位はレッドアイズであり、『ノルマ免除』である。『ふう、どこかい温泉はあったかな……』

なんともジジ臭いことを言いながら、ドーハスーラはふらふらと帰って行った。

それを見ながら、ブルームは思った。

『ジジ臭いなあ。僕より年下なのに』

そんなことを言いながらも、片手間に写真や動画の編集を行いながら歩くブルームであった。

第三十二話

トレーニングする際の格好というものは大体決まっているものだ。香苗の場合は市販で売っていきそうなスポーツウエアである。

体格の割に胸が大きい香苗の場合、見守る場合はそれで十分だ。綾羽の場合、あまり外で運動するわけではない。

そもそも、遊月の家の地下にはそれ専用の設備がそろっているの
で、そちらを選ぶのは当然だ。

基本的に、スポーツブラにハーフパンツと、スポーツシューズである。

……正直、外でやらない人でよかったですと周りが思う服装である。ちなみに、実際にジムに行く場合、公共の場所なので周りへの配慮が必要である。

みられるのが嫌なら上からちよつときればいいのだ。どのみち男はちよつと隠れていたらそれはそれでソソる。

真面目にやるのなら同じだが。

ちなみに、遊月の家のセキュリティはすさまじいので、外部の人間はほぼ入れないのため、盗撮云々は問題ないだろう。

要するに何が言いたいのかという点、ブルームにとつてはいい目の保養になるのである。

……たぶん。

『ムフフ。いろいろなアスレチックにあんな格好で挑んでる綾羽ちゃんはやっぱりいいなあ』

ブルームはビデオを回しながらそんなことをつぶやく。

「よっこいしょー！」
クライミングで一番上まで登った後で、うーん！とのけぞっている。

当然、スポーツブラでそんなことをすれば大きな胸が強調される。

『尊いねえ……ん？』

ブルームは足音が聞こえたのでそちらを向くと、スポーツウエアとレギンスを身に着けて、ゴムひもで髪をアップにした時雨が歩いてき

ていた。

『……あれ？時雨さん』

「フフフ。どうしたの？私がここにきていたらおかしいかしら」

『時雨さんって必要だったっけ？』

「それは聞かないお約束よ」

『自分で聞いておいてその返しはきつい……』

ブルームが呆れていると、時雨が壁の上から降りてきた綾羽に話しかけていた。

「あ、時雨さん」

「綾羽ちゃん。がんばってるみたいね」

そういつてほほ笑む時雨。

そんな時雨に対して、綾羽はウツトリとした表情で見ている。

やはり誰が何と言おうと綺麗な体をしている時雨。

ブルームから見ると綾羽もいい体をしているのだが、まあそこは何も言わないのがお約束である。

「まあとりあえず、一緒に運動しましょうか」

「あ、はいー」

何も言わずとも、雰囲気ですぐに相手を自分のペースに持っていく時雨。

そんな時雨の提案に乗って、綾羽はうなずくのだった。

で、運動後。

「ところで、何か困っていることはあるのかしら。ちよつと緊張してるみたいよ？」

運動も終わって、制服に着替えた二人。

これから学校なのだ、朝から運動するタイプになったのである。

元気なものだ。

「アムネシアで悪霊に遭遇するとリアルファイトで戦うことが多くて、ルインと一緒に戦ってるんですけど、なかなか新しい手段とか、切り札とかがなくて……」

「なるほど。最終手段みたいなものがほしいってわけね」

「遊月君も、英明君もあるって聞いたし、香苗ちゃんも一応用意はして

るっていったから、私にも何かあったほうがいいかなって思っ
て……」

もちろん、単純な強さというものは重要なので、切り札というものが『絶対に必要か』となると賛否両論あるだろうが、あったほうが本人の心のゆとりにつながる。

切り札がないことが原因で『極度の緊張』を感じるというものはそれ相応にいるので、ある程度の緊張感に調節する際に必要だと考えるものが多いのは、アムネシアの上層部の中では事実である。

『まあ、精霊たちにもいろいろあるくらいだしなあ……』

『ブルーム君にもあるの?』

『もちろん。ただ切り札にもいろいろあるけど、大体は二種類かな』

『二種類?』

『こんな感じ』

ブルームはタイプングをして、画面を見せる。

【①：今自分が使っているカードを軸にして、そこから強化先のカードを目指す】

【②：そもそも存在しない『ぼくがかんがえたいきょうのすがた』を目指す】

という内容になっている。

「①のほうは簡単に言えば英明ね。普段は『M・HERO』を使っているけど、その強化として『C・HERO カオス』がある」

『基本的にこっちはいいんだよね。だって進化先が見えてるもん』

「あ。そっか」

「綾羽ちゃんだと、ルインには進化先があるから、それを目指すってことになるわね。これはこれで分かりやすいと思うわ」

『破滅の女神ルイン』の先には、『破滅の美神ルイン』がいる。

それを目指すという案だが、悪いというものではないだろう。

目的がわかりやすく、それを目指す。

「ただ、ギリギリまでは今のルインのほうがいいわね」

『そうだね。今のままでギリギリまで鍛えて、『破滅の女神ルイン』の格を上げて進化させたほうがいいよ』

「そういうものかな」

『すぐに進化を望んでも仕方がないっていう部分はある。マスターが近くにいるし、何かあった時は頼ればいいからね。あと……綾羽ちゃん。今のままで『破滅の美神ルイン』に進化できるとして、マスターの『ロード・オブ・ザ・レッド』に勝てる?』

「……無理だと思う」

「そういう差が生まれるということよ。だから、ギリギリまで鍛えるほうがいいわ」

そして、次だ。

『で、②のほうだけど、これはもうわかりやすいよね。『真紅眼の死霊 竜王ネクロ・バロール・ザ・ワールド』のことだよ』

「あれって正直、意味が分からないくらい強いんだけど……」

『でも、あれくらい強いと『すごい』ってわかるでしょ?だから、最終的には目指すべきなんだよね。まあ、あれはちょっとやりすぎだからなあ……』

ブルームは再びタイピングする。

『とりあえず、②のイメージとしては……』

【②Ⅰ：女神と美神の間、レベルでいうと9を想定する】

【②Ⅱ：美神の上、レベルでいうと11や12を想像する】

『わかりやすいルートを考えるとこんな感じかな』

「まあ、そんなところね」

「わかりました……そういうえば、時雨さんってどうやって戦ってるんですか?」

「私はそんじよそこらの悪霊なら、手のひらに精霊力を固めてビンタでワンキルできるから参考にならないわよ」

「あ、確かに参考にはなりませんね」

ひどく理不尽な何かであった。

「今のままで頑張ってみます……それと、疑問があるんですけど……」
「何かしら」

「あの、香苗ちゃんが『精霊力制御疾患』だから、大量の精霊力を常に持っている。というのは分かるんですけど……遊月君が常に持って

いる量と比べると、どつちが多いんですか?」

『マスターの方が多いいね。桁の数が違うと思うよ。』

「ということは……遊月君がやれば、過去最大の攻撃力を叩きだせるんですか?」

綾羽はそういった。

疑問に思っていたことだ。

遊月は『精霊力は均等を保ちたがる』と言った。

均等と言うことは、二人でやっているのならば、香苗の半分の精霊力で数値を叩きだしたことになる。

では、その際に使用された精霊力の倍以上の精霊力を持っている遊月の場合はどうなのか、という話だ。

『まあ無理だね』

「そうね」

「えっと……それにも理由はあるんですよね」

「もちろん。精霊力にもね。種類と言うか、個別な親和性と言うか、ともかく『区別』ができるのよ」

『マスターの精霊力はライフの回復とは相性が悪いんだよ』

ブルームの説明を聞いてもよく分からない綾羽。

「そういえば、私も詳しく聞いたことはないわね」

『詳しくは知らんのかい……』

「あなたは知ってるの?」

『もちろん』

というわけで、ブルームの説明が始まった。

『デュエルモンスターズに存在するモンスターには、モチーフがある場合がある。僕で言うと、『グローアップ・ブルーム』は、『グローアップ・バルブ』がアンデット化した。って言うのが分かりやすいかな?』
「そうだね」

ただ、現在話しているブルームに限れば、変化前はグローアップ・バルブではないのだが、それは置いておくとして。

『僕が簡単にネットで調べた結果出した結論だけど、ドーハスーラの元ネタである『バロール・ドーハスーラ』っていうのは、ケルト神話

に登場する魔神のことなんだ』

「へえ……」

『このバロール・ドーハスーラって言う魔神は、ダーナ神族に対して重税をかけていたらしい』

「そんなの強かったのかしら？」

『もともとドーハスーラは『視線だけで相手を殺せる』という力を持っていて、左目か第三の眼かは諸説あるけど、その目はずっと閉じられてるんだ。まあ、他にもいろいろすごいことができるんだけど』

強すぎである。

あと中二病すぎる。

まあ、大体の中二病患者のバイブルは神話なのだから当然だが。

『とにかく、ダーナ神族を従属させていて苦しめていたんだ。で、そのダーナ神族の内の一人が、『治療の神 デイアン・ケト』のモデルになった『デイアン・ケヒト』なんだよ』

「その因果関係が原因と言うこと？」

『もちろんこれだけが原因じゃないよ？まあ、バロールとデイアン・ケヒトの関係って結構すごいけどね』

「関係がすごい？」

『ドーハスーラを殺したのは、自分とデイアン・ケヒトの孫である『太陽神ルー』だからね』

「ええ、ええ？」

まるで意味が分からんぞ。

「た、太陽神って……ラーじゃないの？」

『僕が話しているのはケルト神話であってエジプト神話ではありませんせん！』

「あ、ごめんなさい」

『とまあ、そんな感じで、かなり関係が悪い』

「他にもいろいろあるの？」

『ドーハスーラ関係はまだある。このルーがドーハスーラを殺した武器が、実はブリューナクと呼ばれているんだ』

「え、あのブリューナクが？」

「というか……ブリユーナクってケルト神話だったんだ」

若干ずれた感想を抱く綾羽。

『そこからか……とまあそんな感じで、マスターが所有しているドーハスーラは、『氷結界の龍 ブリユーナク』が使うバウンス効果に対して、たとえばブリユーナクがアンデット族になっていたとしてもチェーンすることができないんだ』

「え？ チェーンできない？」

「なるほどね。綾羽ちゃん。遊月のモンスターを『死者蘇生』で特殊召喚しようとしたことがあるかしら？」

「え……あ、はい。確かできなかったような……」

『それと同じ現象が起こる。まあ、厳密には単なる『デュエルディスクの不備』みたいな感じで処理されるんだけどね』

なかなか理不尽な話だ。

『あと、ブリユーナクが『投石機』だっていう話もあるね。というより、そもそもブリユーナクって名前がないとか聞いたことがあるけど、まあその関係で、実は若干【岩石族】とも相性が悪いんだ。ブリユーナクほどじゃないけど』

「……意外と弱点があるんだ」

「こればかりは、精霊として高位の格式を得たことで、そのモチーフに近づこうとした結果ね」

「どういうことですか？」

『これはドーハスーラの切り札にもかかわる話だけど、ドーハスーラは『存在しないカード』を軸にしているんだ。で、その元になった姿が、さつきから話してる【バロール・ドーハスーラ】ってわけ。モチーフになった存在に近づくことで、自分の中に眠る削られた力を全て取り戻す。というのがドーハスーラのやり方だったんだ。だから、その負の面にも近づくことになったわけだね』

ブルームはタイピングし始める。

『まとめるとこんな感じ』

見せてきた。

このような内容である。

「ドーハスーラの元ネタは、ケルト神話の魔神、バロール・ドーハスーラ」

「チート能力などいろいろあって、『ダーナ神族』を従属。重税を付けていた」

「その際の因果関係が原因で、『ライフ回復』『ブリューナク』『岩石族』と相性が悪く、特にブリューナクは致命的に相性が悪い」

『とまあ、こんな感じかな。モチーフに沿って強くなるうとする人いるけど、『どんな強さを持っているのか』だけを調べて、『どのよう相性の悪さがあるのか』を調べない人って多いんだよね。綾羽ちゃんも、何かすごいものを見つけたときは、特に気を付けた方がいいよ』

「わかった」

「フフフ。ちゃんと聞いておいた方がいいわよ。ブルームが全力を出したら、私でも止められないくらい強いからね」

「え……そんなに?」

『そうだよ』

正直、驚いた。

ブルームは見る限り、かなり小さな体である。

モンスターのステータスとしても、確かに効果は強いが『攻守ゼロ』で『レベル1』だ。

そう言う部分もあって、あまり強くは見えないのである。

失礼な表現だが。

「……思ったけど、ブルーム君って結構もの知りだし強いんだね」

『こう見えて序列三位だからね。強さでは抜かれたけど、年齢と知識量はまだまだ二人には負けないよ』

とのこと。

「……体は小さいけど秘密は多いんだね」

『君たち二人の秘密を足しても僕からすれば日常みたいなものさ!』

ドーハスーラがいれば、それは言いすぎだと突っ込んでいたかもしれないが、生憎不在である。

「そっか……そういえば、私、みんなのことあんまり知らないかも」

「そういうものよ。これから知っていけばいいわ」

『それがいいよ。あと、マスターだって一人で強くなったわけじゃないし、頼れる人にはどんどん頼っていけばいいのさ』

遠慮のないアドバイスに顔をしかめる綾羽。

『おや？遠慮してる部分があるのかな？いいんだよ細かいことは。いずれ頼るんじゃないやなくて、頼られる時が来るんだ。そのとき、自分が誰かを頼っているとけっこう楽だよ』

ブルームのその意見に対しては、綾羽は納得したようである。

★

「ドーハスーラが力を使ったか」

遊月は報告されてきた情報からそう判断して、少し唸った。

デュエリストによって、自分の中にいる精霊の状態を把握できるものできないものがあるが、遊月くらいになると、中にいる精霊のすべての状態がわかる。

ドーハスーラの状態から察するに、相当のエネルギーを使ったのは間違いない。

実際のところ、力を使うとしてももう少し抑えて使うことは可能である。

「ふーむ。電話しておくか」

遊月は普段使っているスマホではなく、黒いガラケーを取り出す。

そして、一つの電話にかけた。

コールは一回でつながる。

……まあ、アムネシアの数ある『上層部』の中で、黒いガラケーを無視できるものはほほいなのだが。

『はい。こちら、黒沢です』

「私だ。黒沢、とりあえず最近の悪霊の発生データを閲覧できるファイルを開け」

『はい……開きました』

「速いな。で、ドーハスーラからは聞いているな。そっちとしてはどう思う？」

『何か不審な点といますと……基本的に、悪霊の発生件数がアムネシア全体で多くなっています。時期としてみますと、収集装置の襲撃

からでしようか』

「私もそう考えている。が、英明がデュエルをした相手が『ボスから認められたエリート』との話だったが、どう思う?」

少し、間があった。

『正直なところ、セキュリティ本部長である私からすれば、英明様が勝った相手が向こうの中でエリートだとするならば、強いとは言えません。しかし、問題は技術です。運命力に直結する部分の多い悪霊のカードを使えるとなれば厄介です。高位の悪霊は、モンスターとしてのスペックは強く、そしてそのスペックの高いモンスターを出しやすい運命力を持っていますから』

運命力。というものが高いことのわかりやすい利点を挙げるとするならば、それは『自分がいいカードを引きやすい』という部分もあるが、それ以上に『敵に妨害カードを引かれない』という部分がある。

悪霊によって傷害事件は数多く発生するのだが、『相手に運命力で負けている』ということは、言い換えるなら『相手を妨害するカードを引けない』ということになる。

厄介なモンスターはいろいろいるが、そのほとんどは壊獣で処理できる。といえればいいだろうか。

「今のところ、処理に問題はないな」

『はい。警戒レベルは通常よりあげていますが、通常のレベルで問題ないという声は上がっています』

「……一応、今の警戒レベルで維持しておけ」

『はい』

通話終了。

「ふああ……守りたいものが多いときは、守れるやつを増やしたほうがいいな」

そんなことを呟きながら、遊月はアムネシアの校舎に入っていた。

★

「今回は『カテゴリ』を見ていくぞ」

『デュエルモンスターズ分類学』の授業である。

名前は斉藤当夜^{さいとうとうや}。ちよつとだるそうな顔つきで、茶髪黒目の新任教師だ。

新任の先生なのだが、いつも通りの授業を高等部一年一組で行える唯一の先生である。

左手の薬指に指輪があるので既婚だと思われるが、だからと言って時雨の虜にならない材料にはならない。

本当の意味で妻一筋なのだろう。なんだかすごい。

ちなみに、一年一組の担任教師でもある。

新任で遊月が所属しているクラスに配属されると言う部分を考えれば、強者なのだという事は理解できる。

「ここという『カテゴリ』っていうのは、名称指定にかかわる話だ。だから、『ステータス』によって判断される『帝』とか『列車』は、シリーズカードっていう扱いで、カテゴリとして扱ってないから、気を付けるように」

要するに『遊戯王カードWiki』と同じである。

「で、このカテゴリの分類方法なんだが、大きく分けて二種類だ。『そのカテゴリのモンスターを回すことに特化している』もの、あとは『カテゴリのモンスターが共通の効果を持っている』という二パターンだ」

先生が黒板に

『そのカテゴリのモンスターを回すことに特化している』

『カテゴリのモンスターが共通の効果を持っている』

と書いた。

「二つ目のほうだが、まあ、主に『カテゴリデッキ』を使う場合にみんなが使ってるのはこっちだ。カテゴリを指定し、サーチ、墓地肥やし、リクルートを行って、結果的に大型モンスターを終着点にして制圧する。言い換えれば『初動』が重視されるテーマだ。有名どころは『HERO』とか『シンクロン』とかだな」

それぞれ例を書いていく先生。

「で、二つ目のほうだが、これは『ライトロード』とか、『インフェルニティ』とかが代表だな。ライトロードは、そのほとんどが墓地に

カードを強制的に叩き込むし、インフェルニティは手札がゼロの時に効果を発揮する。特にインフェルニティに関して言えば、準備さえ整えばいつまでも回るほどのポテンシャルを持つてる」

先生はそれぞれメリットを書いていった。

「だが、どっちも弱点がもちろんある。一つ目のほうなんて、言い換えれば『灰流うらら』で止まるからな。初動をどうにかすることができればいいんだが、ここを止めれないと悲惨だ。まあ、初動を止めても、お化けみたいな手数を持つてる【海皇水精鱗】は本当に止まってくれねえんだけどな」

次。

「で、二つ目の方だが、『ほぼ全部が同じ効果を持つていても、根幹となるカードが一部含まれている』ってパターンがある。例を挙げると、【方界】でいうヴィジヤムとかだな。こいつらが止められたり、リソースが尽きる前に決めきれないとどうしようもないことが多いんだこれが」

実際に見たんだろうな。という感情が含まれる口調である。

「どっちにも言えることだが……『マクロコスモス』で大体止まる」

それを言っちゃうと身もふたもない。

「マクロコスモスの効果知ってるか？『原始太陽ヘリオス』を特殊召喚できるカードだ……まあ冗談じゃねえけど、お互いの墓地に行くカードがすべて除外されるっていう永続罠だ。こいつは何があっても『サイクロン』で割れ。絶対に相手はマクロがデメリットにならないデツキだからな」

当然である。

「いずれにせよ、どっちを選ぶにしてもメリットもデメリットもあるわけだ。というわけで、カテゴリデッキを使うメリットを言おうか」

五木は黒板に『ステータスが変更されてもある程度保てる』と書いた。

「何かしようとしたとき、カテゴリデッキを組んでると名前を指定する。だからこそ、『種族変更』をされたとしても問題なく蘇生することができる。で、自分から種族を変更する場合、利用方法によつては十

分強い。『DNA変更フォートレス』とか有名だろ？あの『そしてこれ
もいなくなつた』コンボ。先生も食らつたことがある。こつちのモン
スター六体を奪われて、しかも相手の場に余分なモンスターがいたか
ら八千でぶん殴つてきやがった」

デュエルをよくやめなかつたものである。

「とまあ、こんな感じで、カテゴリデッキを使う場合に気を付けること
を述べたわけだが、一つの名前で二つ以上のカテゴリに分類されるモ
ンスターもいる。『HERO』とか『ナンバーズ』とか。相手のデッ
キのサポートカードを予想する際は、しっかりとみておくことだ」

先生の言葉にはすごく実感がこもっている。

本当に……何があつたのだろうか。

「君たちも気を付けるようにな。ん？それなりに時間使つたな。じゃ
あ次に入るか」

★ とまあ、こんな感じで授業は進んだ。

授業後。

「なんか、当夜先生つて、言っていることに感情が入るよな。結構だら
しない雰囲気してるけど」

「アムネシアは先生も生徒も事情を抱えているパターンがあるから
な」

「あ、さいですか」

英明は何となく気になつたようだが、アムネシアは基本的にそんな
感じである。

「でも、遊月がいるクラスの担任つてことは、デュエルは強いのか？」

「英明より強いだろうな」

「え!？」

さすがに驚いた英明である。

遊月の相棒として日々鍛えている英明だが、それでも、やはり届か
ない部分というものはいろいろあるようだ。

まあそもそも……学生のうちから遊月の相棒として認定されたのは、歴代の相棒の中でも英明が最初なので仕方のないことではあるが。

がんばれ、英明。

第三十三話

デュエルスクール・アムネシアは学校なので、定期テストがある。実技試験は確かに重要だが、筆記試験も無視はできない。

人間、苦手分野は見なくなるもので、それによって騙されることだってあるのだ。

デュエルでは、相手の手を正確に読めないことにつながる。

そういつたことを防ぐため、きちんと問題を解いていく必要があるのだ。

遊月でもある。

(『もともとの種族が機械族ではないモンスター五体を融合素材にして、『極戦機王ヴァルバロイド』を融合召喚してください。なお、カード名のコピーは認めません』か……『ダークジェロイド』『E・HERO』ネクロイド・シャーマン』『ダークジェロイド』と、『マジカル・シルクハット』で『ビークロイド・コネクション・ゾーン』二枚を出して、『砂漠の光』で全部表にして、『DNA改造手術』で機械族に変更。『超融合』で融合召喚する)

遊月は考えてそんなことを書いた。

すでに、基本的な問題は終えて応用編である。

このような鬼畜な問題も出てくるわけだが、正解することも可能である。

ちなみに、この問題は彼らの担任教師が授業でちらつと言っていたことだ。

あまりにも問題が鬼畜すぎるので、一応言ったようである。

(『「チェンジ」速攻魔法を五種書きなさい』か。楽勝だな。『マスク・チェンジ』『マスク・チェンジ・セカンド』『フォーム・チェンジ』『ギアチェンジ』『スター・チェンジャー』の五種類だ)

英明は納得した様子でそう書いた。

ちなみにこの問題は、『マスク・チャージ』に対応するカードの話である。

まあ、普通に【M・HERO】で使うほうがいいのだが、そのよう

な使い方もある。ということだ。

(えーと……『ユベルの第三形態の名前を正確に記しなさい』……でき
るかあああああああ！)

内心で絶叫する綾羽。

ちなみに正式名称は

『ユベル―Das Extremier Traurig Drach
en』

である。

まあ無理である。

ちなみに配点を見ると『0点。ただし、正解すれば大幅に加点』と
いう謎の裁定が存在する。

……なお、応用編の問題はすべての学年で変更はない。

(ええと確か……英語表記が『Yubel―The Ultimate
Nightmare』だったはず。そっちを書いておけばい
いですかね?)

香苗は変な知識を身に着けていたようだ。

ちなみに綴りも間違えていない。

……まあ、完全正答とは言えないが、部分点くらいは普通にもらえ
そうな答えである。

そもそも問題文には、『何を持って正確とするのか』が記載されてい
ないからだ。

だが、アムネシアではこれでも完全正答になる。

なぜか。

遊月もその方法で逃げているからである。

だって、『究極の悪夢』だぞ。簡単すぎる。

というわけで、アムネシアの頂点に立つフィクサーの遊月すらもこ
の答えに逃げているので、同じように答えたものは完全正解だ。

どないせいっちゅうねん。

ちなみに時雨はフリガナ付きで全部書いていた。化け物である。

実技試験。

あまりにも人数が多く、生徒同士のデュエルだと先攻ワンキルを誰かがやった場合、もう片方の生徒の評価ができなくなるので、CPUが相手になる。

『死霊王 ドーハスーラ』でダイレクトアタック」

『M・HERO 光牙』に『オネスト』を加えて、攻撃だ！」

『破滅の女神ルイン』で、二回攻撃！」

『超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ』に『リミッター解除』を使つて、攻撃です！」

まあひどいものである。

特に最後。

あの出しやすさで攻撃力12000がポンツ！と出てくるのはアカン。

なんで『二枚いーよ！』状態にしたんだろうか。コンマイの脳の中は謎である。

なお、基本科目に関しては課題をこなして提出すればいいのがアムネシアスタイル。

試験は終わりである。



アムネシアは、高さ六百メートルの『アイディアル・タワー』をはじめとして、地上の発展度が高いが、遊月がいついかなる時であつても便利に過ごせるように、ということ地下がかなり発展している。

特に、遊月が直接所有する精霊たちは特別場空間が与えられており、その範囲も広い。

そして、その遊月が所有する精霊の中でも上位のもの達となれば、その得点は格段に大きくなり、結果的に過ごすことができる施設の質も増していく。

『にゅおおおおおおお！アムネ安に加速してしまったああああ！チキシヨオオオオオ！』

遊月の自宅から地下に降りたところタブレットのそばで吠えるブルーム。

『……どうしたんだ？ブルーム』

気になったレイジングがブルームに聞いた。

『あー……レイジングって異世界の存在知ってる？』

『その異世界からきたデュエリストが信じられない攻撃力を叩き出したのは知ってるぞ』

『なるほど、まあそれくらいの認識でよろしい。で、その異世界での日本円の価値と、アムネシアで使われてる日本円の価値って違うわけさ』

『ふむ、通貨が異なり、価値が違い、そしてそれが変動する。というわけか』

『そゆこと』

『つまりは【為替で儲けること】が可能になるというわけか』

『レイジングって意外と理解が早いね』

『いや、これくらいなら誰にでもわかるぞ。ただ最後までブルームの説明を聞かずに自分で言いだしたただけだ』

『んなことはいいいんだよ！で、アムネシアが加速したんだよねえ！』

アムネシア。

言いかえるなら『アムネシア安』であり、要するに、アムネシアの通貨の価値が下がった。ということになる。

もともと悪霊瘴気を集めており、治安維持費がかなり多いのが現状。

経済が安定しているかどうかとなると首をかしげるものはそこそこいることは事実だろう。

『取引相手はどこなんだ？』

『某喫茶店の本店があるところさ！めちやくちや平和なんだよね。あの異世界。そりゃ価値は安定してるってもんだよ』

『なるほど。というか、どのようなレートなのだ？』

『こつちが100で向こうが79だね』

言いかえるならば、『アムネシアで100円で売られているものを買おうとした時、メルトの通貨を使うならば79円で買える』ということだ。もちろん両替する必要があるが。

ほぼ二割引きである。なかなかの差だ。

『で、大損したと』

『そう言うわけです』

アムネシア安が加速したことで大損したということは、あらかじめ持っていたアムネシアの日本円をメルトの日本円に変えておけば、アムネシア安が加速した後で戻せば大儲けできたということだ。

遊月が所有する精霊で序列三位のブルームは、元の資産が多いので尚更だろう。

……なお、『変態紳士と変態淑女の会』の方では、持っていたアムネシア円をメルト円に交換しておいたので儲けを得たらしい。

なんで会の方針に乗らなかったのだろうか。

『そういえば、今日はアムネシアは定期試験だったようだな』

『あ、そういえばそんな話してたね。問題も見たよ』

『ブルームは何点だった?』

『満点だったよ』

『マジで!?!』

『マジ』

実は本当である。

『……ブルームって賢いんだな。俺なんて17点だったぜ』

『それはそれで問題があるとおもうけど……』

レイジング。かなりバカだった。

『で、ほかに何かある?』

『レッドアイズが呼んでたぞ』

『?……わかった』

思い当たる節はいくつかあるブルーム。

ただし、レッドアイズは意外と見逃す時もある方だ。

呼び出すということは、大体面倒なことを押し付けてくるということである。

『レッドアイズに頼まれると断れないんだよね』

『ほう、何か恩があるのか?』

『恩と借金』

『……』

レイジングは『恩アンド借金』なのか『恩イコール借金』なのかよくわからなかったが、聞かない方がいいと思って黙っておくことにした。

正解である。

★

『で、レッドアイズ。どうしたの？』

『保育園で何かあったらしい。園長から連絡がきた』

『ほー……『精霊保育園』だよね』

『もちろんだ』

精霊保育園。

デュエルモンスターズの精霊の中には、産まれたての時はほとんど力のない赤ん坊がいる。

これは人間にも言えることだ。

二足歩行になったことで骨盤が小さくなり、結果的に、赤ん坊の頭が大きくなりすぎると出せないため、『赤ん坊が母体で育ちきる前』に出産する。

四足歩行の哺乳類の赤ん坊が、生まれてすぐに立ち上がったたりするのに対して、人間のこれは遅い。

ちなみに、雛もそれと同じであり、産まれたての場合はほとんど何もできないのがほとんどだ。

精霊の中にも、具体的な事情は異なるが、産まれたての赤ん坊にはとんど力がないというパターンは多いのである。

そのため、精霊の赤ん坊や子供のための保育園が存在するのだ。

精霊に対してかなりの予算を投じているアムネシアらしい施設である。

『僕らの子供も通ってるしね。何かあったのなら行った方がいいか』
というわけで、ブルームはレッドアイズの背に乗って、二人で保育園に行くことに。

保育園があるのは『アイディアル・タワー』の近くだ。

何かあった時にアイディアル・タワーから専門家を呼べるという最

大の利点を活かすための配置である。

『うわー……空からみてもすごいくらいごちゃつとしてるね』

『みんな自由だからな……』

元気で、自由で、精霊ゆえに勉強が必要ない。

まあ将来的には、お化けと違って仕事はあるわけだが、アムネシアから離れるとそれもなくなるわけだ。

「あ、ブルームおじさん！」

保育園の屋上にいた『エルフの剣士』の子供が、空を見上げてそう叫んだ。

すると、周辺にいたいろいろなモンスターの赤ん坊たちがそれに反応して空を見上げる。

「あ、ブルームさんだ！」

「ブルームおじさん！お久しぶりです！」

「ブルームさん！お菓子！」

『なんでこいつら私の名前を呼ぶんだ！』

あんまりな扱いにレッドアイスが吠えた。

なかなか珍しい光景である。

『普段の行いの差じゃない？』

『お前の方が悪いだろ！』

『それは失礼だって。まあ冗談だよ。普段からここにきてるからね。僕』

『関わりあいゆえの明確な差か……そこまで言われると否定できないな』

『まあとりあえず、着陸してくれ』

『そうだな』

地面に降りた。

すると、赤ん坊たちがワラワラとレッドアイスを取り囲む。

『ほーれ！お菓子いっぱい持ってきたぞー！』

ブルームが大量の袋を取り出すと、赤ん坊たちは歓喜した。

(気のせいかな？ほとんどのお菓子の製造元が『水ト製菓』みうらせいとなっている気がするんだが……)

こいつ、異世界から発注してきやがったな。と思うレッドアイズ。ただし、実際に配られているお菓子で赤ん坊が喜んでいるので問題はない。

「あ、そうだ！ブルームおじさん！大変なことになってるんだよ！」
『大変なこと？』

レッドアイズに行ったこととつながっているのだろうか。
だが、緊迫感はそこまでないようだ。

「うん！モアイ君がいなくなっちゃったんだよ！」
（いや、保育園からいなくなるってめっちゃやばいやんけ！ていうかモアイ君って誰?!）

ブルームとレッドアイズを謎の混乱が襲った。

『いなくなったモンスターの正式名称は？』

「えーとね。なんだったっけなあ」

「園長先生が言ってたよ！『イースター島のモアイ』だって！」

『……帰巢本能で帰ったのか？』

というかなんでアムネシアにいるんだ！

アムネシアにいるんだったら『アムネシアのモアイ』になるだろ！

……私は何を言っているんだ！閑話休題！（混乱）

で、確認してみると、実際にいたそうです。
すでに保護が完了しているようだ。

園長先生の権力ではつなげられなくとも、ブルームやレッドアイズならば電話一本である。

イースター島支部の皆さんはご協力ありがとうございます。

『みんな。大丈夫だよ。みつかったからね！』

「よかったー」

みんなほっとしているようだ。

フレイバーテキストによれば口から丸いレーザーを出すらしいが、思ったより人気者でよかった。

ちなみにテキストとかはこんな感じ。

イースター島のモアイ

通常モンスター

星4／地属性／岩石族／攻1100／守1400

イースター島に存在する石像。

口から丸いレーザーをはく。

遊戯王カードWikiより引用。

『あ、なんか、【磁石の戦士】あたりで使えそう』

『低いステータスのバニラで、星4の地属性、岩石族か。優秀だね』

将来は磁石の戦士デツキに投入され、イースター島から援護射撃をするのだろうか。

謎である。

『まあ、これで問題ないね。さあ、お菓子パーティーだ!』

『「おおおおおおお!」』

変な空気になっても、すぐに楽しい方向に持っていけるのがブルームである。

(どうやって帰ったんだろう)

レッドアイズはその疑問を抱いて、ついに解決されることなく、モヤモヤしたまま過ごすのだった。

第三十四話

「あー。データが多いな」

格言研究会の主な活動は、インタビュー用紙、及び、録音機をもって街頭インタビューである。

そして、インタビュー用紙をあとでそれを全てデータ入力して、集計日を含めたタグをつけて、あとで引っ張りだせるように整理していく。

例を挙げるならば。

『ガチ勢の鉄則はゴキの飼育』

であれば、『ガチ勢』『増殖するG』『手札誘発』などのタグを付ける。ということである。

そしてこれがまた膨大である。

「……研究会も大変なんだな」

「綾羽ちゃんが遊月の保護下に入ったからな。かなり安全になったから、悪霊討伐して報酬金をもらって経費にしたりとか、街頭インタビューとかいろいろやってる。その結果、なんだかデータが多くなっただんだよな。まあ、ネタに困らないってことだからうれしい悲鳴だぜ」

「まあ、やることに関しては全部まじめにやってるのは分かっているが、体を壊したらそれまでだからほどほどにな」

「おう」

英明も自分の限度くらいは分かっているだろう。

「私が聞いた情報だと、『デュエルモンスターズ格言研究会』は『綾羽ちゃん親衛隊』らしいけど、実は本部が学校外にあると聞いたわよ」

「ん？ああ、そうだな。綾羽ちゃん。学校の外でも結構人気だぜ」

「へえ……」

「……まあ、原因が……あんな恰好でジョギングするからなんだけど」
「あの子。あの恰好で外で走ってるのかしら」

例の、スポーツブラにホットパンツにスポーツシューズという、英明に取って目のやり場に困る恰好のことである。

「……時雨さん。人のこと言えるの？」

「私のドレスは普段着よ。話が違うわ」

(「そんなのだろうか」)

遊月と英明は同時に疑問に思った。

『僕はどっちもエロいので尊いと思います』

『我が主の周辺に住んでいる一般市民に対する問題があるような……』

ブルームの場合は普通に自分の願望だが、ドーハスーラの押しも弱い。

「んああああ！終わった！」

パソコンを閉じて伸びをする英明。

「で、遊月がこれから行くところがあるから付いていくってだけ聞いたんだけど」

英明を誘う予定だった遊月と時雨。

「そうよ。最近、アムネシアでござかしいことを考えている企業が入ってきてるのよね。しかもその企業、裏をとったら直哉の墓を荒らしていた奴につながったのよ」

「遊月の初代相棒の墓……あいつらか」

「そういうこと。まあ、さすがに私と遊月がいれば大体どうにでもなるけど、英明もついて来るといいわ。人数って言うのはね。急用じゃない限り、多い方がいいのよ」

★

というわけで。

遊月と英明はDホイールに乗り、時雨は遊月のDホイールのサイドカーに乗るという状態で、遊月たちは移動していた。

なお、先行するのが遊月の方である。

「で、遊月、その企業って一体何なんだ？」

『『ミライギア』っていう企業だ』

遊月が答えるが、彼は運転中なので、時雨がタブレットを操作して英明のヘルメットのバイザーテロップ機能に表示させる。

アムネシアの運営にかかわる遊月の相棒として速読力は必須の上

に、時雨の無駄のない文章と画像を見て、英明は事情を把握した。

「……武装型デュエルディスクの機能開発か」

武装など、デュエルディスクをデュエルモンスターズ以外の目的で携帯している者は一定数いる。そう言ったもの達に対する特殊なカスタマイズが施されたデュエルディスクを製造し、販売している会社だ。

そして、要人にも警護は当然必須だが、そのSPにもデュエルの腕は求められる。

そのようなデュエリストのためのデュエルディスクを作っているということだ。

「荒事も多いからってかなりの耐久テストをクリアしたデュエルディスクを作ってるところじゃねえか。ここが隠れ蓑になってるってことか？」

「最近隠れ蓑になった。と言う方が適切ね。実際、遊月が許可してアムネシアで発注することもある企業よ。高品質に加えて、それを完全技術化したライン作業に寄る大量製造で高水準の評価を得ているくらいだから……まあ、ここまで言えばわかるわね」

英明もそこまで言われれば理解する。

そして、なぜ『人数稼ぎ』で自分が呼ばれたのかもわかった。

武装型デュエルディスクを作っている。というと簡単だが、市場に流れ出ると暴走族やマフィアに流れてしまうため、周辺セキュリティも万全だ。

そのような場所を制圧し、情報工作レベルも高いとなれば、油断出来る相手ではない。

「……相当の相手だな。まあ、大体わかってたけどよ」

英明はまるで経験したことがあるかのように苦い顔をした。

実際、遊月と時雨が組んで鎮圧に当たることは、珍しいことだがないわけではない。

英明は、それに巻き込まれたことがあるのだ。

その時の経験から、いやそうな顔をしているというだけの話である。

「よし、そろそろだな。あ、そうだ。英明」
「ん？」

「独断で『全力』を出してもかまわない」

「……心臓に悪いこと言うなよ」

やはり英明は、苦い顔をするのだった。

★

地下の開発が進むアムネシアでは、地上がビルになっており、地下が製造工場になっていると言うケースが多い。

『ミライギア』のアムネシア支部の建物も、超高層ビルだった。

「上か、下か……どっちだ？」

「下は無視してもいいわ。上で一択よ」

英明の質問に対して即答する時雨。

その左目は金色に輝いており、何かしらの力を行使しているのは一目瞭然。

「上か……」

「しかも、アムネシアから手渡されてるマニュアル通りの万全耐性を普段から敷いてるわ。一応奇襲だけど、油断は禁物よ」

「……俺、時雨さんの方が怖いと思う」

「英明、それは言わない約束だ」

「だよな」

全員がDホイールから降りて並んだ。

「で、正面突破か？」

「私が持っているパスを使っていくつかショートカットはする。ただ、アムネシア中枢部ではないから、限度はあるがな」

「いつも通りか」

「そういうことだ」

というわけで、高層ビルの正面ではなく、裏手に回った。

いくつか窓はあるものの、非常階段にすら近づいていない。

「で、どうやって乗りこむんだ？」

「すぐに分かる」

遊月がそう答えた瞬間、ビルの大体三分の一くらいの高さにある窓

が音もなく割れた。

中から猛スピードで『根つこのような触手』が飛び出てきて、遊月たち三人のそばに降りてくる。

「さすがブルーム。時間も場所も完璧だ」

「……………こう言う細かい作業は上二人を超えるからなあ……………」

英明だけはげんなりしている様子だ。

とはいえ、掴まない理由はない。

三人が掴むと急激に引つ張り上げられて、そのまま窓間で回収された。

「ふう、人を三人引つ張り上げるとちよつと重いね」

「そんなこと微塵も思っていないだろ。ブルーム」

遊月たち三人を出迎えたのは、まるで荒い布で作ったような緑色のシャツと、茶色の短パンを吐いたとても笑顔の少年であった。

茶髪には花で作ったような髪飾りが付いている。

もちろん、遊月が言うように、ブルームであることに間違いはない。

だが、『グローアップ・ブルーム』でもないのだ。

「ブルームの強化体か」

「そうだよ。本気じゃないけどね」

笑うブルーム。

本人らしい表情だが、『そうさせている何か別の要因』を感じさせるものだ。

時雨はタブレットをとりだして、ブルームをカメラにおさめる。

屍界の道化師スマイル・ブルーム

LINK1 闇属性 アンデット族 ATK1000

【リンクマーカー：下】

通常召喚されたレベル1アンデット族モンスター一体

このカード名の②の効果は一ターンに一度しか発動出来ない。

①……………このモンスターのリンク召喚に成功したターン中、自分の「グローアップ・ブルーム」の墓地から除外して発動される効果は、「自分フィールドにグローアップ・ブランチ・トークン（植物族・闇・星8・

攻／守2000) 5体を特殊召喚する」として適用する。

②:このカードが墓地に存在する場合、除外されている「グローアツプ・ブルーム」一体を対象にして発動できる。対象にしたカードを手札に加え、このカードをエクストラデッキに戻す。

「相変わらずね」

「でしょ?」

微笑むブルーム。

「……ていうか、その姿を使っていいんだったら、俺要らない気が……」

「そんなことはないさ。君が思ってるより制限時間は長くないしね」

「今はおいて置け。行くぞ」

遊月がそう言うのと走りだしたので、時雨、英明、ブルームもついていくことに。

「うおっ!」

急に、遊月のすぐ横からスタン弾が飛んできた。

それを回避する。

「うわっ!」

英明が足元にあつたスイッチをギリギリで回避。

「ほいっ!」

ブルームのところにもスタン弾が飛んできたが、手のひらから出した杖にあたってそのままとまった。

「んっ♡」

時雨の脇腹にスタン弾が直撃する。

「「わざとっけるな変態」」

三人に突っ込まれる時雨。

「だ、だって、最近ひどいことされてないから……アムネシアって常識人が多いのよね」

「混沌を望むな」

いまいち空気が乗らない四人。

だが、進行速度を落とすことはない。

遊月と英明は鍛えており、ブルームは精霊力で動くゆえにほとんど生身での運動神経は関係なく、時雨は超速再生と言っている回復能力を持っているので、実質的に肉体の疲労が存在しない。

そのため、速度を落とさず走ることが出来る。

ただし……時雨はドレス姿で走っているのに、遊月と英明に追いついている。ということを考えれば、巢の身体能力がどれほど高いかわかるだろう。

「お、なんか大型の扉が見えてきたな」

「あの扉をぶち破るぞ」

「OK」

物騒である。

が、せっかく襲撃しているのだから容赦はない。

遊月がドアを蹴り破った。

大型の広間についた。

そして……大勢の武装集団が集まっていた。

「ほー。遊月が作った対応マニュアル通りに本当に配備してら」

「マスターが作ったマニュアルは経験値がすごいからねえ……」

かなり余裕の表情の英明とブルーム。

訓練の風景に交じることもあるので、マニュアル通りにされているのなら、今どうなっているのか非常にわかりやすいからだろう。

「……見た限り、ミライギアを狙って襲撃してきたわけじゃなさそうだねえ」

大勢の武装集団の後ろから、白衣を着た男性が来た。

その後ろから、トレンチコートを着た男性が続く。

「……なあ、あんたらってコンビでやってるときはその組み合わせって決まってるの?」

英明がそう言った。

「どういうことだ?」

「ああ、こういうええいいか?智洋と悟って知らないか?」

「ああ、あいつらか、降格されたって聞いたけど、原因がこいつらなわけだ」

白衣のほうの男がトレンチコートのほうを見る。

「征二^{せいじ}。どうやら、なかなかの顔ぶれようだ」

「意岐部^{おきべ}がそういうんならそうなんだろうね。で、誰？」

「アムネシアのフィクサーと、その存在が所有する序列三位の精霊、そしてその相棒……」

「……」

紹介が止まった。

「あのきれいな人は？」

「私のデータにはない」

「意岐部のデータにない？それはまた面倒だなあ」

征二はめんどくさそうという評所を隠そうともせず、こちらのほうを向いた。

「しゃーない。ここは撤退するよ」

「そうだな」

さきほどから、トレンチコートを着ているほうは情報を出すだけで、支持をしない。

そういうルールなのだろうか。

「させるか」

「させてもらおうぜ」

征二が指を鳴らすと、武装していたデュエリストたちがデュエルディスクを起動する。

征二と意岐部の二人は、奥の扉から消えていった。

「ふむ、マスター。時雨さん。二人で追ってくれ。ここは僕と英明でやるよ」

ブルームはそういうと、杖を触手のように伸ばして、頑丈な『道』を作った。

遊月と時雨は、その道の上を走っていく。

まだパスが有効だったようで、そのままドアのロックを解除して奥まで走って行った。

「……さて、やろつか。あ、英明。全力出しているって言われてる？」

「ああ。独断でいいってさ」

「そりやよかった。それなら、最初からやるべきだよ。英明ならわかっていると思うけど、かなりやばい奴らがそろってるからね」

「……仕方がないか」

英明はデュエルディスクにカードを入れて、そのまま自分が付けているベルトの金具に固定する。

「まさか、こんなに早く使うとは思ってなかったぜ」

「結構向こうも本気を出してきてるってことさ。この企業だってセキユリテイはもともと甘くないよ」

「そうだな」

英明は皐月のデュエルコアをとりだして、『ミラクル・フュージョン』のカードを入れてデュエルディスクに付ける。

そして、普段は使わないポケットに手を入れて、一枚のカードをとりだした。

「変身！」

『ミラクル・フュージョン インファイニティ！』

光が巻き起こる。

四つのエレメントが呼び起こす光だ。

交じり合い、白となって、英明を包んでいく。

そして……。

「さあ、はじめようぜ」

英明は変身を完了した。

M・HEROたちが持つ機動力重視の衣装とは少々異なり、マントを羽織ったダイヤモンドの装飾があるものとなっている。

M・HERO インファイニティ

融合・効果モンスター

星10 光属性 戦士族 攻3500 守4500

炎・水・風・地の「M・HERO」モンスターをそれぞれ一体ずつこのカードはルール上「E・HERO」モンスターとしても扱う。

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカード名の②③④の効果は一ターンに一度しか発動できず、相

手ターンでも使用できる。

このカードの②の効果はスペルスピード3として扱う。

①：このモンスターは戦闘・効果では破壊されず、リリースすることはできず、相手の効果の対象にならない。

②：フィールド上の表側表示のカード一枚を対象にして発動できる。その効果が無効にする。そのカードがモンスターカードだった場合、そのモンスターの攻撃力は0になる。

③：手札の「マスク・チェンジ」一枚を捨てて発動できる。このモンスターを守備表示に変更した後、ターン終了時まで守備力は倍になる。

④：相手ターンのエンドフェイズに発動する。墓地の「マスク・チェンジ」一枚を手札に加える。

「ちっ、そんなものにびびってられっか！」

武装集団がデュエルディスクを向けてくる。

だが、英明は落ち着いたままだ。

スタン弾が飛んでくるが、装甲にあたってそのまま落ちる。

完全に無傷だ。

「チッ！」

大勢が特殊警棒を構えて襲ってきた。

それに対して、英明は構える。

殴る。ということはしないが、すべての訓練された襲撃者を手刀と蹴りで無力化していく。

「ほっほー。英明、それなりに鍛えてるなあ」

「てめえも死ね！」

ブルームの後ろから警棒を振り下ろしてくるものがあるが、ブルームが指をぱちんと鳴らすと、杖がコンクリートの床から生えて止める。

そして、別の方向から杖が飛んできてそのまま襲撃者をブツ飛ばした。

「……ブルームも相変わらずだな」

「当然でしょ♪」

ニコニコ笑っているブルーム。

正直、無害そうな顔で容赦がない。

「な、なんなんだこいつら……」

「おい、逃げるぞ。あんな奴戦つてられるか！」

大勢の襲撃者が逃げていく。

「やっぱり手ごたえがないな……ん？」

英明の視界に、アタツシユケースを大事そうに抱えている者がうつった。

「あいつ……」

「ま、追ったほうがいいよね」

ブルームも気が付いたようだ。

扉の奥に消えていった者を追う。

すぐに開けた場所にでた。

「……なあブルーム」

「どうした？英明」

「あの、Dホイール。飛んでね？」

「というよりは、浮いたまま加速してるって感じかなあ」

英明とブルームは驚いた。

なんと……先ほどの男が、飛んでいるDホイールに乗って逃げているのである。

「まあ、普通に浮いてる精霊も多いし、それを利用した技術かな」

「……まあ、その技術について考えるのは後だ。どうやって追うんだ？」

「僕が枝で道を作るから、英明はそのあとから追いかけてきて。君もその状態なら可能でしょ？」

「まあ、可能だな」

英明の装甲が一瞬光った。

次の瞬間、まるで瞬間移動してきたかのように、ダイヤカラーのDホイールが英明のそばに出現する。

「うおっ、そんなこともできるのか」

「まあな」

「これはいい誤算だ。それじゃあ、僕は枝をアイツに向かって向けることを優先するから、がんばってね」

ブルームは精霊力の粒子になって消えていく。

そして、ビルの側面から、巨大な枝を伸ばして道を作っていく。

英明はDホイールに乗り込むと、そのまま発進した。

「思ったより頑丈な道だ」

「頑丈な道であることを確認する前に飛び出せる英明のこと、僕結構好きだぜ。というわけで、もつとスピードあげてもいいよ」

「わかった」

英明はDホイールを加速させて、そのまま逃亡者を追いかえていく。

近づいてくると、何かの異変に気が付いたのか、逃亡者が振り向いた。

「んな、なんだありや!？」

「飛んでるDホイールに乗ってるお前が驚くんじゃない」

反論するブルームだが、まあいろいろ無理があるだろう。

「枝がしゃべった!？」

「……こいつ、よく枝から声が出たってわかったな」

「そうだよな。普通なら英明の声だと思うはずだけど……」

重要なデータを抱えている以上、優秀なのだろうか。

とはいえ、そんなことは関係ない。

「さあ、お前が抱えているデータを渡してもらおうか。そんな最新のものを使つて逃げてるんだ。よほど重要なデータを抱えてるんだろう」

「チツ。なら、デュエルでつぶしてやるー!」

逃亡者はデッキからカードを五枚引く。

英明も、デッキからカードを五枚引いた。

「デュエル!」

英明 LP8000

寛治 かんじ LP8000

「俺の先行！」

相手からの先攻だ。

「俺は手札から、『迷える仔羊』を発動。トークンを二体特殊召喚だ！」

仔羊トークン DFE0 ☆1

仔羊トークン DFE0 ☆1

「そして、トークン二体をリリースしてアドバンスセット。さらに、カードを一枚セットして、ターンエンドだ」

「ずいぶんと懐かしい動き方をするもんだな。まあいい。俺のターン。ドロー！」

ドローしたカードを見る英明。

初手五枚を合わせてみても、悪くはない。

「俺は手札から、魔法カード『融合』を発動！手札の『E・HERO エアーマン』二体を融合して、現れる。レベル8。『V・HERO アドレイション』！」

V・HERO アドレイション ATK2800 ☆8

「アドレイション？だが、俺のモンスターはセット状態だ。意味なんてねえぜ！」

「まあそう急ぐなよ。それに、アドレイションは俺のデッキでは優秀な中継地点だ。こっからやるんだって。手札から『融合解除』を発動して、アドレイションを戻してエアーマンを二体、墓地から特殊召喚する！」

E・HERO エアーマン ATK1800 ☆4

E・HERO エアーマン ATK1800 ☆4

「そして、エアーマンの効果にターナーの制限は存在しない。俺はエアーマン二体の効果を使って、デッキから『E・HERO シャドー・ミスト』と『E・HERO ソリッドマン』を手札に加える」

「何だその鬼畜コンボ!？」

「俺に言うな。エアーマンをデザインした奴に言え」というわけで。

「俺は手札から『E・HERO ソリッドマン』を通常召喚して、その効果で手札の『E・HERO シャドー・ミスト』を特殊召喚！」

E・HERO ソリッドマン ATK1300 ☆4

E・HERO シャドー・ミスト ATK1000 ☆4

「シャドー・ミストの効果で『マスク・チェンジ』を手札に加える。そして、あらわれる！英雄たちが集うサーキット！」

サーキットが出現。

「アローヘッド確認！召喚条件はHERO二体。俺はエアーマンを、リンクメーカーにセット。英雄は今混じりて、驚異の爆走者となる。リンク召喚！リンク2『X・HERO ワンダー・ドライバー！』」
X・HERO ワンダー・ドライバー ATK1900 LINK
2

「さあ！ヒーローショーの時間だぜ！俺は手札から、『マスク・チェンジ』を発動！対象は地属性のソリッドマンだ」

ソリッドマンが自分が付けている仮面に振れる。
すると、地属性の光が溢れだした。

「変身召喚！レベル8『M・HERO ダイアン』！」

M・HERO ダイアン ATK2800 ☆8

ダイアンがバイクに乗って、英明の前を走る。

「ワンダー・ドライバーの効果チェイン1で、魔法の効果で墓地に送られたソリッドマンの効果チェイン2だ。墓地からHEROを特殊召喚できる。俺はエアーマンを特殊召喚！」

E・HERO エアーマン DFE400 ☆4

「そして、墓地に存在する『融合』をセットする！」

「チッ、エアーマンの効果はターン1がないんだったな。またサーチするつもりか」

「ハッ！そんなもん必要ねえよ！」

盛大に煽る英明。

だが、ブルームは枝を伸ばしながら呆れていた。

（そもそもの話、強制効果で確実に割り込んでくるワンダー・ドライバーに対して、ソリッドマンの効果はこの状況なら確実にチェイン2での発動になる。エアーマンは時の任意効果だからタイミングを逃すんだよなあ。相手の無知を利用した舐めプでの煽りとは……誰に

似たんだか)

「そして、あらわれろ！英雄たちが集うサーキット！」

あらわれるアローヘッド。

「アローヘッド確認！召喚条件はHERO二体以上。俺はリンク2のワンダー・ドライバーとエアーマンを、リンクマーカーにセット！英雄たちが集う場所でその力を束ね、恐怖を打破するものとして生まれ変われ！リンク召喚！リンク3『X・HERO ドレッドバスター』！」

X・HERO ドレッドバスター ATK2500 LINK3

「来たか、大型リンクモンスター」

「ドレッドバスターの効果により、ドレッドバスターとリンク先のHEROは、俺の墓地のHEROの種類×100ポイント。攻撃力が上昇する！」

X・HERO ドレッドバスター ATK2500↓2800

M・HERO ダイアン ATK2800↓3100

E・HERO シャドー・ミスト ATK1000↓1300

「バトルだ！俺はM・HERO ダイアンで、セットモンスターを攻撃！」

ダイアンが右手にエネルギーをためると、それをセットモンスターに向けて放つ。

「セットモンスターは……『機怪神エクスクローラー』!？」

守備力は3000だ。

破壊することは可能だが……。

「チツ、仕方がない。ダイアンの効果で相手モンスターを戦闘で破壊したことで、デッキからレベル4以下のHEROを特殊召喚だ」

「こちらは『機怪神エクスクローラー』が戦闘で破壊されたことで、デッキから『雷撃壊獣サンダー・ザ・キング』を手札に加える」

「そつちも鬼畜なシナジーを投入してきたもんだ。だが、こつちはダイアンの効果で三体目の『E・HERO エアーマン』を特殊召喚だ。そしてエアーマンの効果発動。デッキから『V・HERO ヴァイオン』を手札に加える」

E・HERO エアーマン ATK1800↓2100 ☆4

「何回出てくるんだソイツ」

「俺も知らん。俺はエアーマンとドレッドバスターで、ダイレクトアタック！」

『攻撃の無力化』を発動。止めてもらおうか」

「止めてくるタイミングが個人的だなあ。メインフェイズ2だ。俺は伏せておいた『融合』を発動。フィールドのシャドー・ミストとエアーマンで融合。『V・HERO アドレイション！』」

V・HERO アドレイション ATK2800 ☆8

「俺はこれで、ターンエンドだ」

「俺のターン。ドロー！」

寛治は英明のフィールドを見る。

サンダー・ザ・キングで誰を狙うか、と言う話だ。

かなり重要である。

そしてそこまで考えた後で……何も問題はないと判断した。

「俺は『M・HERO ダイアン』をリリースすることで、『雷撃壊獣サンダー・ザ・キング』を特殊召喚！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング ATK3300 ☆9

「ダイアンを？」

「こう言うことだ。俺は『所有者の刻印』を使い、サンダー・ザ・キングを俺のフィールドに移動させる」

コントロールが移動する。

「そして……『星遺物の胎導』を発動」

発動されたカードを見て、英明は驚愕する。

(本人と完全に適合してる化身カードだ?!)

正直、そんなものが出てくるとは思っていなかった。

「これにより、俺はデッキから『星遺物の守護竜メロダーク』と二枚目の『機怪神エクスクローラー』を特殊召喚」

星遺物の守護竜メロダーク DFE3000 ☆9

機怪神エクスクローラー DFE3000 ☆9

「そして現れる。セカイへ繋ぐ未来回路」

サーキットが出現。

「召喚条件は、レベル5以上のモンスター3体。サンダー・ザ・キング、メロダーク、エクスクローラーの3体をリンクマーカ―にセット。禍々しき創造主よ、今、星の歯車を回し、禁じられた天界より全てを続べよ。リンク召喚！リンク3『星神器デミウルギア』！」

星神器デミウルギア ATK3500 LINK3

「な……なんだこれは……」

英明が驚いているのは、デミウルギアというモンスターが初見だからではない。

そのモンスターが持つ格。

それが、想定以上のものなのである。

「……」

ただし、状況に対するブルームの答えは沈黙だった。

「デミウルギアの効果発動。このカード以外の、フィールドの全てのカードを破壊する」

「な……うおおあああああ！」

二体のモンスターとセットカードが割られた。

「そしてバトルフェイズ。デミウルギアでダイレクトアタック！」

英明 LP8000↓4500

デミウルギアから放たれた閃光が英明を襲う。

その瞬間、英明の三枚あった手札の中の一枚のカードが、腕に付けているハンドホルダーから抜けて飛んでいく。

「なっ、カードが……」

「うーん。この状態で手札一枚損失って……」

対戦相手が鼻で笑ってきた。

「フン。運のない奴だ。ターンエンド」

「俺のターン。ドロ―！よし、良いカードだ」

巻き返された英明だが、すぐに動き始める。

「手札から『V・HERO ヴァイオン』を通常召喚！」

V・HERO ヴァイオン ATK1000 ☆4

「効果発動。デッキから『D―HERO ディアボリックガイ』を墓地

に送る。そして、このディアボリックガイを墓地から除外することで、二体目をデッキから特殊召喚！」

D—HERO ディアボリックガイ ATK800 ☆6
「リンク召喚か」

「それが違うんだよなあ。俺はヴァイオンの効果発動。墓地のエアーマンを一枚除外して、『融合』をデッキから手札に加える。そして、『ダーク・バースト』を発動。墓地からシャドー・ミストを手札に加える」

「何を狙って……」

「手札から『融合』を発動。ヴァイオン、ディアボリックガイ、シャドー・ミストの三体で、融合召喚！レベル8。『V・HERO トリニティー』！」

V・HERO トリニティー ATK2500→5000 ☆8

「このタイミングでトリニティーだど!」

「この瞬間、墓地に送られたシャドー・ミストの効果発動！」

「だがこちらもお前のエクストラデッキからモンスターが特殊召喚されたことで、デミウルギアの効果発動。デッキから『星遺物—『星鎧』』を特殊召喚！」

星遺物—『星鎧』 DFE2500 ☆7

「俺がシャドー・ミストの効果で手札に加えるのは、『E・HERO オネステイ・ネオス』だ」

「やはりそれか。星鎧の効果発動。このカードが召喚、特殊召喚された場合、デッキから星遺物を手札に加える」

「星鎧が目的だな。そうはさせねえさ！手札から『灰流うらら』の効果発動。サーチ効果を無効にする！」

デミウルギアは効果を受け付けないので無効効果が効かないが、星鎧には通用する。

「チツ……」

「さあ、バトルフェイズだ！」

「だが、オネステイ・ネオスの効果を使い、攻撃を通せたとしても、俺が4000ポイントのダメージを受けるだけだ。お前の手札は0。」

次のターンで……」

寛治は状況を整理し始める。

だが、英明は笑った。

「ハハハ！俺の手札が0？違う違う、1枚あつただろ？」

「1枚……」

「あと、4000で済むと思つたら大間違いだぜ」

「何!？」

英明は、先ほど飛んで行つた自分の手札を見る。

ブルームが出した枝にすら引つかかかっていないが、ミライギアのビルの壁に張り付いていた。

英明は、Dホイールのディスク部分の下にあるカバーを開けて、赤いスイッチを押した。

次の瞬間、Dホイールが特殊な加速を開始する。

「さあ、行くぜ！」

英明はDホイールに乗つたまま空中に飛び出た。

そのまま、まるで飛んでいるかのように、カードに向かって加速していく。

「チツ……デミウルギア！」

寛治の命令を受けたデミウルギアが、英明に向かってレーザーを放つ。

だが、一発の英明には当たらない。

「カードのほうを狙え！」

デミウルギアは即座に狙いを変える。

カードのほうに照準を合わせて、レーザーを発射。

「遅い！」

レーザーが当たる寸前、英明はカードをとつた。

そのまま急ターンをしている。

「俺は『アクションマジックフルターン』を発動。このターン。モンスター同士で発生する戦闘ダメージは倍になる！さあ行くぜ！トリニティでデミウルギアを攻撃。その攻撃宣言時、手札からオネスティ・ネオスの効果発動！攻撃力を2500ポイントアップする！」

V・HERO トリニティー ATK5000↓7500

「デミウルギアの攻撃力は3500だ。その差は4000。そして、フルターンの効果で、戦闘ダメージは倍になる！」

「こ、こんなバカな……」

トリニティがデミウルギアを殴り倒す。

「うおおおおお！」

寛治 LP8000↓0

「よっし！俺の勝ちだ！」

英明がそういつたとき、寛治のDホイールの金具が外れたのか、アタッシュケースが落ちてくる。

「うおっ！危ない！」

さらにDホイールを空中で加速させて、アタッシュケースを回収。

そのまま、ブルームが出した枝に戻ってきた。

「ふう、お疲れさん」

「ああ。ひっさしぶりに本気出したぜ……ん？あいつは？」

「あれ？どこに行ったんだろう」

いつの間にか、寛治はいなくなっていた。

そこまで速度が出せる設計だったのだろうか。

不思議なものだが、ここで考えても仕方がない。

一応、ビルまで戻ることにする二人だった。

★

「隊長、どうでしたか？」

アムネシアには高い建物が一定数ある。

その中の一つに、Dホイールで降りた。

「俺はもう本部役員だぞ。すでにお前の隊長じゃないんだ。何度言え
ばわかるんだ。レイエス」

そういいながら、胸ポケットにカードを入れて、氏名欄に『せきかんじ関寛治』
と書かれたミライギアでの会員証をビリビリに破く男。

「……かしわぎ柏木さんって呼ぶべきなんですかね？」

「何度もそう言っているはずだ。で、あの英明ってやつがどうだった
かって話か……さすが後輩だなんて思うよ。四代目の相棒として見

る限りは……まあ別に可も不可もねえな。俺のデミウルギアも同意見だ」

柏木はポケットからタバコを取り出すと、そのままライターで火をつけて吸い始める。

「……それと、お前の『ラーの翼神竜』は相変わらず、俺のことが嫌いだな」

煙をはーつと吐いて、自分をにらむラーの翼神竜を見る柏木。

だが、彼のデミウルギアが闘志を漏らすと、そのまま引つ込んでいった。

「私と柏木さんはいろいろありましたからね」

「だな。さてと、渡しておきたいものは渡した。まあ、遊月も俺のことに気が付くだろうが、今はそれでいいだろう。ていうかブルームがいたんだから隠せると思ってたねえし」

携帯灰皿の中にタバコを入れる柏木。

そのままDホイールに乗り込んだ。

「そんじゃ、俺は帰るよ」

「あ、はい」

「お前、普段はプライド高えのに、俺の前だと素直だな」

「慣れですね」

「そうかよ。んじゃまたな」

「はい。柏木さん、風邪ひかないようにしてくださいね。体、そんなに強くないんですから」

「余計なお世話だ」

吐き捨てるようにそう言うと、柏木はそのままDホイールを発進させた。

残されたレイエスは、柏木の姿が見えなくなるまで見送ると、屋上を後にするのだった。

第三十五話

遊月は疲れていた。

原因はもちろん、仕掛けられている数々の罠……ではなく、時雨である。

もはや超速再生と言っても過言ではない回復能力により、体力が実質無限の時雨の速度は落ちない。

そのため、しつかりついてくるのだが……。

「うふふ、結構えぐい罠が多くていいわね」

「……疲れるわあ。こいつ」

『DMなのは相変わらずか』

『我が主をこういう意味で困らせることができるものは少ないからな……』

罠を受けるたびに破れるドレスを精霊力を使って修復しながら、次々と罠を正面から受ける時雨。

そのたびに喘ぎ声を出すので、正直気が散るのだ。

「ウフフ。最近はスタンガンがないと夜も眠れないから——」

「ちよつと待て！それ以上言うとなんかいろいろまずいと私は思うんだが!？」

なんだかいろいろと問題が発生しそうなことを言う時雨。

さすがの遊月も驚きである。

『……正直、ここまでくると末期症状だな』

『我もここまでくるとコメントに困る』

さて、阿呆なことを言っているうちに、扉が見えた。

「さてと、これはぶち破るか」

『思うのだが、我が主が作った通りにセキュリティを組んでいるはずなのに、扉を簡単にぶち破れるのだな』

「私が設計した扉をぶち破るのにはちよつとしたコツが必要になるというだけのことだ」

『嫌な設計だな……』

というわけで。

「おらー！」

溜まった鬱憤をすべてぶちまけるかのように扉に蹴りを入れる。コツがある。といった通り、遊月が蹴りを入れると扉は簡単にぶち抜くことができた。

扉の奥では、征二と意岐部が待っていた。

「なるほど、さすが、自分で組んだセキュリティというわけか」

「まあ、そういうことだ。観念してもらおうぞ」

「そういうわけにもいかないな」

白衣を翻して、征二がデュエルディスクを構える。

だが、意岐部のほうはデュエルディスクを構える様子はなかった。

「意岐部、お前は退路の確保だ。デュエルは僕がやる」

「承知した」

意岐部が側面のドアに向かって走って行った。

「フッフ。ちよつと暴れたりないから行ってくるわね」

「好きにしろ」

時雨が意岐部を追いかけて行った。

それを確認した意岐部は、『超重武者』を出し始めている。

モンスターを盾にして、その間に退路を確保しようということだろうか。

「……君は追いかけないのか？」

征二が遊月に聞いてきた。

「ん？ああ、そうだな。どうせ結果は見えている」

遊月はデュエルディスクを構える。

「なら、まずは君を始末してからだ」

「やれるものならやってみろ。死後の世界の広さを教えてやる」

「デュエル！」

遊月 LP8000

征二 LP8000

「僕の先攻だ。僕は手札から、『イービル・ゾーン』を召喚」

イービル・ゾーン ATK100 ☆1

「イービルゾーンをリリースして効果発動。300ポイントのダメー

ジを与えて、デッキから同名モンスターを二体まで特殊召喚する」
「！」

遊月 LP8000↓7700

イービル・ソーン ATK100 ☆1

イービル・ソーン ATK100 ☆1

(……ジャスミンにつなげる植物族デッキか?)

一瞬、そう考えた遊月。

「何を考えている当てたうえで言おうか。そもそも僕のエクストラデッキに、リンクモンスターは入っていない」

「……そうか」

となれば……。

「僕はレベル1のイービル・ソーン二体で、オーバーレイ。世界を綴った淡き図書館。本は今そのページをめくり、伝説を紡げ。エクシース召喚」

出現したのは、巨大な図書館。

「これが、ナンバーズの世界。ランク1『No78 ナンバーズ・アーカイブ』」

No78 ナンバーズ・アーカイブ ATK0 ★1

「なるほど、【ナンバーズ】ってわけか」

「そうだ。そして、僕はナンバーズ・アーカイブの効果発動。エクシース素材を一つ使い、相手は僕のエクストラデッキを一枚ランダムに選ぶ。それが1から99のナンバーズならば、アーカイブを素材にしてエクシース召喚できる」

「面白い効果だ。なら、今エクストラデッキの一番上のカードだ」
「わかった」

征二はカードを確認。

「当たりだ。僕はナンバーズ・アーカイブでオーバーレイ。エクシース召喚。ランク6『No.24 竜血鬼ドラギユラス』」

No.24 竜血鬼ドラギユラス ATK2400 ★6

「そして、ドラギユラスの効果発動。エクシース素材を一つ取り除くことで、ドラギユラスをセット状態に変更する」

出てきたばかりだが、すぐに裏になった。

「本来、ナンバーズ・アーカイブで出したモンスターはエンドフェイズに除外されるけど、これなら問題はない。僕はカードを二枚セットして、ターンエンド」

「私のターンだ。ドロー」

ドローした後で、遊月は思った。

……ドラギユラスの守備力、どれくらいだったっけ？と。

「……まあいいか。私は魔法カード『手札抹殺』を発動。お互いに手札交換だ」

「僕は二枚捨てて二枚ドロー」

「私は五枚捨てて五枚ドローだ。そして私は、墓地に落ちた『グローアップ・ブルーム』の効果が発動。さらにチェーンして、『屍界のバンシー』を除外して効果発動。デッキから『アンデットワールド』を発動する」

広がり始める屍界。

世界最強の化身カードゆえに、その影響力は大きいですが、征二は特に気にしている様子はない。

「そして、ブルームの効果だ。終わりも始まりもない蛇ウロボロスの王よ。怨霊渦巻く大地に降り立ち、死の魔眼を開け！『死霊王 ドーハスーラ』！」

死霊王 ドーハスーラ ATK2800 ☆8

『フハハハハハ！我、降臨！』

「相当な精霊格のドーハスーラだな……」

「私のドーハスーラは強いぞ。手札から『不知火の隠者』を通常召喚」

不知火の隠者 ATK500 ☆1

「隠者をリリースして効果発動。それにチェーンして、ドーハスーラの効果が発動だ」

『フハハハハ！消え去るがいい！』

ドラギユラスが波動を受けて消滅する。

「そして、隠者の効果で『ユニゾンビ』を特殊召喚、デッキから『馬頭鬼』を墓地に落として、自身のレベルを上げる。さらに、馬頭鬼を除

外することで、隠者を特殊召喚」

ユニゾンビ ATK1300 ☆3↓4

不知火の隠者 ATK 500 ☆4

「そして現れる。屍界を満たす未来回路。召喚条件はアンデット二体。ユニゾンビと隠者をリンクマーカーにセット。夜を続ける血族よ、月の光が惑わす屍界に降り立て。リンク召喚！リンク2『ヴァンパイア・サッカー』！」

ヴァンパイア・サッカー ATK1600 LINK2

「そしてバトルフェイズ。まずはヴァンパイア・サッカーで、ダイレクトアタック！」

「無駄だ。僕は『エクシーズ・リボーン』と『ナンバーズ・ウォール』を発動する。これで、ナンバーズ・アーカイブを守備表示で特殊召喚。さらに、ナンバーズ・ウォールの効果で、ナンバーズはナンバーズ同士でしか戦闘破壊されなくなる」

N078 ナンバーズ・アーカイブ DFE0 ★1

「……ナンバーズデッキっていうんだから、まあそれくらいは入ってるか」

「そうだ」

「だが、ナンバーズ・アーカイブは、アンデットワールドの効果でアンデット族になっている。ヴァンパイア・サッカーの効果で、墓地からアンデット族が特殊召喚されたことで一枚ドロウ。カードを二枚セットして、ターンエンドだ」

「僕のターン。ドロウ」

さて、どう来るか。

「僕はまず、手札から『禁じられた聖杯』を使って、ドーハスーラの効果を無効にする」

『む……え、これ、我が飲むの?』

ポンッ！とドーハスーラの手聖杯が出現。

「……そうした方がいいと思うのなら飲めばいいだろ」

『……杖にでもかけておこう』

地味だが効果は適用されるので問題はない。

死霊王 ドーハスーラ ATK2800↓3200

「なんなんだこいつら……僕はナンバーズ・アーカイブの効果発動。さあ、選んでもらおうか」

「またさつきと同じだ」

「そうか……当たり前だ。僕はナンバーズ・アーカイブでオーバーレイ。エクシーズ召喚。ランク9『CNo. 15 ギミック・パペットーシリアルキラー』」

CNo. 15 ギミック・パペットーシリアルキラー ATK2500 ☆9

「んなつ。カオスナンバーズまで入ってるのか！」

「エクシーズ素材を一つ使い、シリアルキラーの効果発動。僕はドーハスーラを破壊し、その攻撃力分のダメージを与える」

『む……むおおおおお！聖杯さえなければあああああ！』

遊月 LP7700↓4500

「バトルフェイズだ。シリアルキラーで、ヴァンパイア・サッカーを攻撃」

遊月 LP4500↓3600

「伏せカードを発動しないか……僕はカードを一枚セット、ターン終了とともに、セブン・シンズは除外される」

セブン・シンズが消え去った。

「私のターンだ。ドロ。スタンバイフェイズ。ドーハスーラ、戻って来い」

『フハハハハ！フィールド魔法を破壊しなければ、我は何度でもよみがえるぞー！』

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「そしてメインフェイズだ。『アドバンスドロ』を発動だ」

『……』

「なんだその目は」

『我は骨だから目はないぞ』

「いや、そういうネタはいいから……」

『せめてもうちよつと活躍させてくれ』

「登場回数はレッドアイズより多いんだから我慢しろ」

『それは作者が墓地のカードの枚数を数えるの面倒だから——』

「ストップ」

征二からも止められた。

『冗談だ。まあ、ここは我慢しよう』

ドーハスーラが消えた。

「ふむ……ならば、二枚目の『エクシーズ・リボーン』を発動。墓地から『N078 ナンバース・アーカイブ』を特殊召喚だ。そして、そのまま効果を発動する」

「……エクストラデッキの一番下だ」

「そうか。当たりだ。僕はナンバース・アーカイブでオーバーレイ。エクシーズ召喚、『N081 超弩級砲塔列車スペリオル・ドーラ』
N081 超弩級砲塔列車スペリオル・ドーラ DFE4000

★10

「スペリオル・ドーラまで入ってるのか！」

「ああ、僕も驚いた」

「……どういうことだ？」

「僕はエクストラデッキを構築する際、ナンバース・アーカイブ以外をすべてのナンバースを中から、ランダムに十二枚を無作為に抜き取ってデッキを構築している。残りのカードが白衣の裏にいつもあるくらいだからな」

「……そんな風にデッキを組むデュエリストがいるとは……」

アムネシアは精霊カードや化身カードが存在する。

存在枚数は精霊カードの方が圧倒的だが、何か『特別なカード』を軸にしてデッキを組むものが多い。

そしておそらく、征二の場合、それはナンバース・アーカイブなのだろう。

だから、そんな意味不明のデッキになっているのだ。

「まあ、そういうやり方でいいっていうのなら文句はない。私は手札から、『冥界騎士トリスタン』を通常召喚し、墓地から『冥界の麗人イゾルデ』を手札に加え、特殊召喚する。そして効果を発動し、二体の

レベルを8に変更」

冥界騎士トリスタン ATK1800 ☆4↓8

冥界の麗人イゾルデ ATK1000 ☆4↓8

「まさか……」

「そちらがナンバーズ合戦をしたいというのなら付き合ってやろう。私はレベル8のトリスタンとイゾルデの二体でオーバーレイ、エクシーズ召喚。ランク8『No.22 不亂健』！」

No.22 不亂健 ATK4500 ★8

「攻撃力、4500……」

「バトルフェイズ。不亂健で、スペリオル・ドローラを攻撃！」

振り下ろされた拳で、スペリオル・ドローラが粉碎する。

「スペリオル・ドローラが一撃で粉碎とはな……」

「そして、スペリオル・ドローラが破壊されたことで、『ナンバーズ・ウォール』は破壊される。私はこれでターンエンドだ」

「僕のターン。ドロロー」

「戻って来い。ドーハスーラ」

『我、復活！』

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

さて、征二はそろそろ何かするだろう。

ただし、遊月のフィールドのモンスターは、どちらも相手の効果を止める効果を持っている。

「まずは墓地から『ブレイクスルー・スキル』を除外して効果発動。ドーハスーラの効果を無効にする」

『何かの宿命を抱えてないか？我』

「知るか」

というわけで、無効も除外もできなくなった。

「僕は『ZW―玄武絶対聖盾』を通常召喚」

ZW―玄武絶対聖盾 ATK0 ☆4

「召喚成功時に効果発動。除外されているエクシーズモンスター一体を特殊召喚できる」

「……通そう」

除外されているのはシリアルキラーとドラギユラス。

いずれも、エクシーズ素材がないのであれば問題はない。

「なら、僕はシリアルキラーを特殊召喚だ」

CNo. 15 ギミック・パペットーシリアルキラー DFE15
00 ☆9

「そしてこの瞬間、墓地の『エクシーズ・スライドルフィン』の効果発動。墓地のこのカードを、特殊召喚したエクシーズモンスターの素材にできる」

「手札抹殺の時に墓地に送ったのか」

「そういうことだ。僕はシリアルキラーの効果発動。対象は不亂健だ」

「それに対して、不亂健の効果だ。エクシーズ素材と手札一枚をコストにして無効にする。そして、不亂健は守備表示になる」

No. 22 不亂健 ATK4500↓DFE1000

「なら次だ、『強欲で貪欲な壺』を使い、十枚除外して二枚ドロ。僕の墓地の『エクシーズ・リボン』と、君の墓地の『アドバンスドロ』を除外、『カクリヨノチザクラ』を特殊召喚」

カクリヨノチザクラ ATK0 ☆1

「そして、このモンスターをリリースし、君の墓地のヴァンパイア・サッカーを対象にして発動。リンクモンスター以外のモンスターを、僕の墓地から特殊召喚する。僕はナンバーズ・アーカイブを特殊召喚」

No78 ナンバーズ・アーカイブ DFE0 ★1

「まだだ、僕は『希望の記憶』を発動。僕のフィールドのナンバーズの種類、二枚のカードをドロする」

「まだやってくるか」

「当然だ。続けて、『オーバーレイ・リジエネレート』を発動。このカードをナンバーズ・アーカイブのエクシーズ素材にする。そして、効果発動」

「デッキの一番上だ」

「そうか。僕は、ナンバーズ・アーカイブでオーバーレイ。エクシーズ

召喚。『No. 35 ラベノス・タランチュラ』

No. 35 ラベノス・タランチュラ ATK4400 ★10

現れたそのクモの姿に、一瞬、とある悪夢がよみがえったが、『あんなことができるやつが二人もいてたまるか』と思考の隅に追いやつた。

「これにより、玄武絶対聖盾の攻撃力も4400となる」

ZW―玄武絶対聖盾 ATK0↓4400

「バトルフェイズだ。ラベノス・タランチュラと玄武絶対聖盾で、ドーハスーラと不乱健を攻撃」

二体の大型モンスターが粉碎されたが、遊月の内心は平穩のままだ。

ラベノス恐怖症なのかもしれない。神々しさはエンシエント・ホーリー・ワイバーン担当なので。

「僕はカードを一枚セット、ターンエンドだ」

「私のターン。ドロロー。戻って来い。ドーハスーラ」

『う、うむ』

ドーハスーラも思い出したのか、若干元気がない。

死霊王 ドーハスーラ DFE2000 ☆8

「ドーハスーラ」

『なんだ？我が主よ』

「どうすればいいと思う？この胸の奥底から湧き上がってくる変なもの処理」

『圧倒的な物量で叩き潰せばいいのだ』

「そうだな」

というわけで。

「時雨のカードを使うか」

「何？」

「私は『呪眼の死徒 サリエル』を通常召喚」

呪眼の死徒 サリエル ATK1600 ☆4

「な……サリエルだ?!」

「サリエルの効果。デッキから『ゴルゴネイオの呪眼』を手札に加え

る。そして、現れる。屍界に満ちる未来回路。召喚条件は、呪眼一体を含むモンスター二体。私はサリエルとドーハスーラをリンクマーカーにセット。眼前の存在を石へと変わる呪われた眼は、何をもって開くのか、答えを教えよう。リンク召喚。リンク2『呪眼の女王 ゴルゴーネ』

呪眼の女王 ゴルゴーネ ATK1900 LINK2

「ゴルゴーネは、私の墓地の呪眼カード一種類につき、攻撃力が100アップする」

呪眼の女王 ゴルゴーネ ATK1900↓2000

「さらに、手札から『ゴルゴネイオの呪眼』を装備する。このカードを装備している場合、私の方がライフが低い場合、その数値分だけ、装備モンスターの攻撃力をアップする」

呪眼の女王 ゴルゴーネ ATK2000↓6400

「そ、そんな馬鹿な……」

「そして、ゴルゴーネの効果。このカードが『セレンの呪眼』を装備している場合、相手モンスター一体の効果が無効にできる。ゴルゴネイオの呪眼はセレンの呪眼としても扱うため、発動可能、ラベノス・タランチュラには沈んでもらおうか」

No. 35 ラベノス・タランチュラ ATK4400↓0

ZW―玄武絶対聖盾 ATK4400↓0

「な……」

「バトルフェイズ。ゴルゴーネで、ラベノス・タランチュラを攻撃。攻撃宣言時、『アクションマジック―フルターン』を発動。モンスター同士の戦闘ダメージは、お互いに倍になる」

「な……うわあああああー!」

征二 LP8000↓0

征二が壁まで吹っ飛んだ。

「くそ……意岐部!」

征二が意岐部の方を向いた。

そこでは……。

「アハハハハ!もつと全力を出してもらわないと、私も楽しめないわ

よ」

時雨が大暴れしていた。

その姿はかなり独特だ。

着ていた黒のドレスは、オーデインの法衣とザラキエルの意匠が混じりながらも露出度が確保された改造服となっている。

右目にはセレンの呪眼が存在し、左目はオーデインの取り出された左目のように金色に輝いている。

両腕をザラキエルのように変貌させ、右手でオーデインが持っていたグングニルを握り、一振り得意岐部が出す超重武者たちを薙ぎ払っていた。

「ば……馬鹿な……頑丈さでは圧倒的なはず……」

「その程度の実力では、時雨は止められない。ついでに言うと、ああ見えて結構雑に動いてるぞ?」

「何?」

「そうじゃないと、相手がちゃんと自分を攻撃してくれないからな。時雨は攻撃はちゃんと当てるが、防御はしないぞ」

「防御をしない……だと?」

「そうだ」

ドMだからな……。

でも、ドSでもあるので、攻撃はめっちゃくちやつかりやるのだ。ついでに言うと、オーデインの眼の影響で全部わかる。

「まあ、攻撃を受けたそばから、精霊力がフル稼働して回復するんだけどな」

傷はついていない。

だが、敵の攻撃に対して、回避も防御もしていないのは事実なのだ。時々、語尾が『♡』になってそうな声が聞こえてくる。

「……時々、喘ぎ声が聞こえてくるんだが……」

「それはドMだからだ」

「……おとなしく投降する」

「賢明な判断だ」

というわけで。

「おーい。時雨ー。こっちは終わったぞー」

「あら。もう終わりなの？ちよつと暴れたりないから、あとで遊びたいんだけど」

「そういうことはブルームに言え。嬉々としてやってくれるぞ」

ちなみにブルームがそれを聞けば、『DM全開の時雨さんの相手つて疲れるんだけど……』と嫌な顔をするだろう。

煩惱まみれのブルームだが、それでも嫌なものはあるのだ。趣向の問題である。

「さてと、そろそろ敵さんの情報が欲しかったところだ……ただ、情報握ってなさそうだなあ。時雨。どうだ？」

「そうねえ」

次の瞬間、いつもの黒いドレス姿になった時雨は、超至近距離で征二の顔を覗き込んだ。

「!？」

いつ接近したのかわからないほどの体術だった。

「全然知らないわね。というより、記憶処理がされてるわ」

「だろうと思った。そもそも、実働部隊のメンバー構成と服装を揃えてくる時点で、必要以上の情報を与えたりしないのはわかっていた」

「じゃあ、二人はどうするの？」

「しばらくは軟禁だな」

あくびをして、どこかに電話をかける遊月。

正直、収穫はなさそうだが、だからと言って何もしないわけにはいかない。

いろいろあきらめたような表情になっている征二と意岐部を見ながら、これからどうするか遊月は考えるのだった。

「それじゃあ、私はブルームのところに行ってくるわ」

「……好きにしろ」

ブルームはリリースされたようだ。

第三十六話

アムネシア中央病院。

アムネシアが大幅に改革を迎えた『遊月世代』となつてから大増改築が行われ、今も運営されている病院である。

単なる風邪から大きな怪我のどんな範囲のものであろうと対応する幅広い技術力と、アムネシアの『本部』であるアイディアル・タワーから派遣されたデュエルSPが担当する警備力。

総合的に、少なくともアムネシアの近況では数ある病院の中でも優れていると行っていい規模である。

そして、地下深くには『遊月に関連する大きな秘密』が存在するが、ここでは割愛しよう。

なお、遊月や、遊月にかかわっているものがここに入院する場合、この病院の地下に行くこともある。

そして、遊月が構築した『地下空間』に直通のエレベーターも存在するため、それだけでこの病院がアムネシアで重要な立ち位置であるかわかるだろう。

「むっー！」

そしてそんな地下室の一つ。

一人の少女が目覚めた。

「うーん……ふっかあああああああつ!!!」

ベッドを降りると、両手を突き上げて絶叫する少女。

「むう、私はどれくらい寝ていたのかな。まあとりあえず……英明君。待っててね！」

少女はそういうと、ドアに手をかける。

だが、ガチャガチャと動かしても、ドアが開かない。

「む、むむむ!? おーい。開けてくれえええええええー！」

すると、数秒後、ドアの鍵が開いて、ナース服を着た女性が入ってきた。

そして、ナース服を着た女性は、本気で騒いでる様子の少女を見て驚愕する。

さて、ここで難解な問題を一つ提示しよう。

『この少女、漆野皐月が病み上がりであることを証明せよ。ただし、初対面かつ、発見場所が病院以外の場所であるとする』

★

征二と意岐部を尋問しても、何の情報も得られなかった。

ちなみに、征二と意岐部を専門の部署に放り込む前、『まあ、時雨が見ても何もわからなかったんだけどな』といったときの職員が目が『いや俺らが見る意味ないやん』と語っていたが、遊月はそういう部分はスルーするタイプである。

「……この資料。本当に柏木冬賀かしわぎとうがが持っていたのか？」

『うん。間違いないよ』

遊月は紙の資料を眺めて、視線をブルームに移してから聞いた。

ブルームは頷く。

『アミウルギアの精霊を連れていた。しかも、『星遺物の胎導』も、本人に適合したものだっただよ』

「となれば、本当に冬賀だな。いったいどこに行つたのかと思つていたが、まさかスパイなんぞやっていたとは……」

『そんなに体が強くなかつたのに、『探さないでください』なんて手紙一つでいなくなつちやつたし、仲が良かったレイジングが大騒ぎになるかもね』

「レイジングには言わないのか？」

『それはマスターが決めることさ。僕はアルバム作成で忙しいんだよね』

ブルームは言いたいことが終わったのか、そのまま遊月の部屋を出ていく。

「……冬賀。新しい場所で元気にやつてるようだな。なら、私からとやかく言うのは野暮というものか」

ブルームは、悪霊討伐などノルマ達成の報告書以外で、書類作成をほぼ行わない。

だからこそ気が付いていなかったようだが、『遊月が確認した時のため』にいろいろと隠しメッセージを入れている。

しかも、当時と同じ使い方。

だからこそ、冬賀の近況はわかった。

「さて、この書類の内容を考慮するに……」

そこまでつぶやいたとき、一通の電話が。

「……なんだ？」

遊月は電話に出た。

「私だ」

『おお、遊月様。少々、聞いておきたいことがあります……』

その声は、デュエルスクール・アムネシア理事長、小湊創吾であった。

「何かあったのか？」

『いえ、復学の手続きになるのですが……その生徒が少々』

「復学？生徒は誰だ？」

『漆野皐月様です』

「ああ、英明の彼女か。目覚めるのがかなり速いが……とりあえずリハビリ施設の手配を……」

『いえ、とても元気よく動いております』

「……冗談だろ」

『冗談で済ませることができればよかったです……』

「いやだって……二年間寝たきりだぞ」

『ですが、ありとあらゆる健康診断の結果、問題はなしと判断されています』

「……まあ、とりあえず、二年間休学状態であることに変わりはないからな。とりあえず実技試験を行って、試験データを正式に手に入れれば、あとはどうにでもなるだろう」

『そうですね。その実技試験ですが……』

少し言葉に詰まる創吾。

アムネシアでは、実技試験を行える教員は限られている。

全員が行えるわけではないのだ。

電話相手の創吾は当然可能だが……。

「というか、創吾は今……」

『私は理事長室にいますよ。自宅よりもクオリティが高いので』

「あつそ……ただなあ……あ、黒江っている？」

『娘なら今も高速タイピング中でしょいな』

「なるほど、なら、黒江に任せよう」

『黒江にですか？』

「ああ、まあ皐月は気にしないだろうが、一応女性が対応した方がいいだろう。あと……」

『あと？』

「七十を超えたおっさんと元気一杯の女子高生のデュエルって……絵面が……」

『……そうですね』

まあ。遊月はもー……と年寄りなわけだが、それは置いておこう。

『それでは、黒江を呼びましょう』

「今日の黒江の仕事は私が片付けておこう」

『いいのですか？』

「ああ、権限的に、黒江なら返答に時間がかかるものでも、私ならメール一つでいいからな」

『そうですね……では、黒江に言っておきましょうか。現在、皐月様は大幅にデツキを入れ替えているようで、少々時間がありますし、その間に引き継ぎを終わらせるように言いましょう』

「デツキを大幅に？」

『はい。医師からの報告では、『HEROパワーは英明君に預けるから』と言っていたそうですが……正直意味が分かりませんな』

「私もわからん。というか、医師が付いてるんだな」

『状況が私としても前代未聞ですから』

「なるほど。まあ、事情は分かった。試験や手続きはそっちに任せる」
『お任せください』

というわけで、通話終了。

「……どこのギャグマンガから出てきたんだ。アイツ」

遊月はそんなことをつぶやいたが、それにこたえるものは当然いなかった。

★ 「デツキができたぞおおおおお！」

夜の学校で騒ぐ臯月。

病院で目覚めた彼女だが、『多分病院にいたままだとほかの患者の迷惑になるから』という理由で、病院から学校に移された。

なお、医師たちは車に乗ってきたが、臯月は自転車である。

ちなみに、服は即席で用意されたジャージである。

なんと、二年間寝たきりだったのに、身長もバストサイズも大きくなっているの、それまでの服が全然きれなかったのだ。

しかも肌はツヤツヤのテュルンテュルンである。

教員たちは『I☆MI☆HU☆ME☆I!』だったが、遊月のそばで働いていれば、『理解する前に現実逃避する』という技術が培われるので、どうにかして混乱を回避していた。

「できたようですね。試運転は必要ですか？」

「大丈夫ですよ黒江先生！」

満面の笑みで黒江にデツキを掲げる臯月。

その黒江の表情は青天の霹靂から目覚めた『いいいいやつほおおおとおおおお！』と言いたそうな顔だった。

もちろん、黒江が向かかなければ意味のない仕事もあるわけだが、面倒な部分をすべて遊月に丸投げできたので、これ以上に良いことはない。

ついでに言うと、臯月の復学の書類のための試験を受けさせることをどれほど重要視しているのかという、遊月の臯月に対する評価がドエライくらい気になるが、黒江はきつといい答えを聞けるわけではないと思って放置した。

「そうですか。それでは、実技試験の相手は私が勤めますよ」

「え、黒江先生が相手なんですか？」

理事長の娘だが、教壇に立つこともある。

三十路の既婚者だが、童顔かつ貧相な体格なので（胸はCくらいあ

るが）、『大学から来たお姉さん』扱いがデフォルトである。

当然、皐月としてもその意見は変わらない。

が、相手が誰であろうと、皐月は全力を出すだけだろう。

「はい。アムネシアでは、こういった状況での実技試験は教員側にもいろいろ条件がありますからね」

「わかりました！それでは、よろしくお願いします！」

ということ、皐月はデュエルディスクを受け取って、デュエルスペースに移動する。

指定位置に立った二人は、お互いにデュエルディスクを構えた。

ただ、試験なので外野がいる。

カメラが設置されているので、人数は最低限だが。

「……なあ、なんで僕呼ばれたの？」

一年一組の担任。斎藤当夜も呼ばれていた。

茶髪をガリガリと書きながら、『とりあえず顔だけは洗ってきたんだな』という表情でデュエルスペースを見る。

「彼女が復学するとなれば、あなたのクラスになるからですよ」

「え、僕のクラスに？」

いつの間にか隣にいた医者いの伊賀和志かが応えた。

「……お前って病院勤務じゃなかった？」

同期に話すかのような気軽さで当夜は伊賀和志に聞いた。

「その病院からついてきたんですよ。だって……こう……なんか……医学的というか常識的に説明がつかないことが起こってるんですから」

「あー。だな」

「まあその話は置いておくとして、彼女は漆野皐月。君のクラスの英明君の彼女ですよ」

「あ、資料で読んだな」

頷く当夜だが、実は『一人の人間が一つの都市を裏から牛耳っている』という状況を快く思わない若者は多いので、遊月の情報を伏せられている先生はアムネシアに採用されている教員の中にも存在する。

当夜は価値観的にそのあたりが問題ないとされて説明されている

のだ。

「まあ、そういう事情ですね。ところで……当夜君はこんな時間まで何を？」

「研究が長引いたから研究室で寝てた」

「あ、そうですか」

大学ではないが、優秀な教員には個室が与えられるのだ。

それを研究室と呼ぶ者いるものが多いので、研究室という呼び名が一般的になっているが。

「事情は分かった。今はデュエルを見ようか」

「そうですね……なんで男二人で見なくちゃいけないんですかね？」

「カメラで理事長も見てるし、別にいいだろ」

当夜は二人を見た。

「デュエル！」

皐月 LP8000

黒江 LP8000

「皐月ちゃん。先攻と後攻のどっちがいい？」

「むむ……後攻です！」

「なら、私の先攻だね」

黒江のターンでスタート。

「ふーむ……どうやら、私のデッキは楽しいことをしたいみたいだね」
「え？」

「私はスケール1の『DD魔導賢者コペルニクス』と、スケール13の『DD魔導賢者ニュートン』で、ペンデュラムスケールをセッティング！」

並ぶ二体のペンデュラムモンスター。

「む!？」

「ペンデュラム召喚！二体の『DDD死偉王ヘル・アーマゲドン』！そして、『DD魔導賢者トーマス』！」

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン ATK3000 ☆8

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン ATK3000 ☆8

DD魔導賢者トーマス DFE2600 ☆8

「うそでしょ!?!」

「私はトーマスの効果を使い、ペンデュラムゾーンの新ユニットを破壊して、デツキから三体目のヘル・アーマゲドンを特殊召喚!」

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン ATK3000 ☆8

「そして、私はトーマスとヘル・アーマゲドンでオーバーレイ!黒を統べる組織よ。今偉大なる王と賢者を束ね、権限せよ!エクシース召喚!ランク8『DDD超死偉王ダークネス・ヘル・アーマゲドン!』」
DDD超死偉王ダークネス・ヘル・アーマゲドン ATK3500

★8

「さあ、私はこれでターンエンドだよ。ダークネス・ヘル・アーマゲドンが存在するとき、私のペンデュラムモンスターは破壊されないから気を付けてね」

「わかりました。私のターン。ドロロー!」

ちらつとドロローしたカードを見る皐月。

「私は手札から、『光天使セプター』を召喚!」

光天使セプター ATK1800 ☆4

「おっ、光天使だね!」

「その通り!召喚に成功したセプターの効果発動!それにチェインして、手札から『光天使スローネ』の効果が発動!」

「うわあ……そのセットを握ってたんだ」

「スローネの効果で、自身を召喚して、一枚ドロロー!そして、セプターの効果で、二枚目のスローネを手札に加える」

光天使スローネ DFE2000 ☆4

「そして、今加えたスローネの効果!特殊召喚して、一枚ドロロー!」

光天使スローネ DFE2000 ☆4

「本当に頭がおかしい……」

みんなそう思ってるだろう。

ただ問題は、ここから何を出すかである。

「私は、レベル4のセプターと、二体のスローネでオーバーレイ!光輪の意思に答える天枢の星々よ。聖なる法衣をまとい。権限せよ!エクシース召喚!『No.102 光天使グロリアス・ハイロー!』」

No. 102 光天使グローリアス・ハイロー ATK2500

★4

「ぐ……グローリアス・ハイローが入ってるんだ」

「その通り！私はセプターを素材にしたグローリアス・ハイローの効果発動！ペンデュラムゾーンのコペルニクスを破壊する！」

「うわっ！」

モンスターたちに破壊効果は効かない。

正しい選択である。

「そして、一枚ドロロー！」

「やるねえ。皐月ちゃん」

「さらに！私はグローリアス・ハイローの効果発動。エクシーズ素材を一つ使って、ダークネス・ヘル・アーマゲドン一体の効果を無効にして、攻撃力を半分にする！」

DDD超死偉王ダークネス・ヘル・アーマゲドン ATK3500
↓1750

「バトルフェイズ！グローリアス・ハイローで、ダークネス・ヘル・アーマゲドンを攻撃！」

グローリアス・ハイローが投げた槍が、ダークネス・ヘル・アーマゲドンを貫く。

黒江 LP8000↓7250

「メインフェイズ2に入って、私はカードを二枚セット、これでターンエンド！」

「私のターン。ドロロー！」

黒江のターンだ。

「フッフ、まずは二体のヘル・アーマゲドンを、リンクマーカーにセット！リンク召喚！『DDD深淵王ビルガメス』！」

DDD深淵王ビルガメス ATK1800 LINK2

「ビルガメスの効果発動！デッキから、スケール1の『DDD運命王ゼロ・ラプラス』と、スケール10の『DD魔導賢者ニュートン』で、ペンデュラムスケールをセッティング！そして1000のダメージを受けるよ」

黒江 LP7250↓6250

「うへっ!?またっ!」

「ゼロ・ラプラスのペンデュラム効果で、エクストラデッキのコペルニクスを回収。ペンデュラム召喚!エクストラデッキから、ヘル・アーマゲドン二体!」

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン ATK3000 ☆8

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン ATK3000 ☆8

「そして私は、手札に加えたコペルニクスを通常召喚!効果で『DDスワラル・スライム』を墓地に送る。そのまま除外して効果発動。『DD壊薙王アビス・ラグナロク』を手札から特殊召喚!これにより、墓地からヘル・アーマゲドンを特殊召喚!」

DD魔道賢者コペルニクス ATK 0 ☆4

DDD壊薙王アビス・ラグナロク ATK2200 ☆8

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン ATK3000 ☆8

「アビス・ラグナロクの効果で、コペルニクスをリリースして、グローリアス・ヘイローを除外!」

「グローリアス・ヘイローが!」

これで、皐月の場にモンスターはいない。

「試しに殴ってみようか。バトルフェイズ!」

「罨カード発動!『威嚇する咆哮』!相手は攻撃宣言できなくなるよ!スウウ……ヒヤッハアアアアアア!」

君が威嚇する必要はないのだが……。

というか威嚇なのだろうか……。

ついでに言うと、威嚇された側である黒江は『かわいい子やなあ』と和んでいた。

どうやら皐月の威嚇に緊迫感はないらしい。

「私はこれでターンエンドだよ。さあ、かかってらっしゃい!」

今度はダークネス・ヘル・アーマゲドンを出さない様子の黒江。

ただ、そもそもヘル・アーマゲドンにもある程度の耐性は備わっているし、そもそも実技試験の教官は、『試験用デッキ』の場合はデッキのレベルが調節されるので、現段階では『ダークネス・ヘル・アーマ

ゲドンは二枚目を使わない』というレベルに設定してデュエルしているだけである。

セプスロで攻めてくるならば、『対象に取られない耐性』を与えるホワイテストくらいは欲しいところだが、あえて出さないのはそういう理由だ。

「私のターン。ドロー！」

ただし、そういう『教官としてのレベルの調整』を頭の中でカチカチとくみ上げている黒江の内心など、皐月には関係ない。

手札を見て、何をするのかを決める。

「私は手札から、『魔界発現世行きデスガイド』を通常召喚！効果で『クリッター』を特殊召喚！」

魔界発現世行きデスガイド ATK1000 ☆3

クリッター ATK1000 ☆3

「お、突然の闇属性出張パーツ」

「私はこの二体でリンク召喚！リンク2『見習い魔嬢』！」

見習い魔嬢 ATK1400↓1900 LINK2

「光天使に見習い魔嬢!」

黒江は驚いた。

さすがにこのような構築は知らない。

「あ、あの、私のDDたちの攻撃力は上がるよ?」

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン ATK3000↓3500

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン ATK3000↓3500

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン ATK3000↓3500

DDD深淵王ビルガメス ATK1800↓2300

DDD壊薙王アビス・ラグナロク ATK2200↓2700

「何も問題はないよ。とりあえずクリッターの効果で『灰流うらら』を手札に加える。続けて、私は『戦線復帰』を使って、『光天使セプター』を墓地から特殊召喚！」

光天使セプター DFE400↓0 ☆4

「そしてこのセプターは、見習い魔嬢の効果によって、攻撃力が400下がって、1400までダウンしてるよ！私はこのセプターを対象

に、『地獄の暴走召喚』を発動！」

「その手があったか！私はアビス・ラグナロクを守備表示で特殊召喚するよ！」

「私はデツキから、二体のセプターを特殊召喚！」

光天使セプター ATK1800↓1400

☆4

光天使セプター ATK1800↓1400

☆4

DDD壊薙王アビス・ラグナロク DFE3000↓3500 ☆

8

「セプター二体の効果で、デツキからウィングスとスローネを手札に加える。そして、私はレベル4のセプター三体で、オーバーレイ！」
三体のセプターが渦の中に飛び込む。

「もう一度現れる！エクシース召喚！『No. 102 光天使グローリアス・ヘイロー』！」

No. 102 光天使グローリアス・ヘイロー ATK2500↓

2100 ★4

「セプターの効果は重複する。私は三体の効果によって付与されたグローリアス・ヘイローの効果で、ヘル・アーマゲドン三体を破壊！」

「うわあ！」

「そして、三枚ドロ！」

「うーん。そこは勘弁してほしいなあ……」

正直アレだ。

アドバンテージの稼ぎ方がおかしい。

「そして、『二重召喚』を使って召喚権を増やして、手札からウィングスを召喚！」

光天使ウィングス ATK1200↓800 ☆4

「ウィングスは召喚成功時、手札の光天使を特殊召喚できる効果がある。それにチェーンしてスローネの効果が発動！手札から特殊召喚して、一枚ドロ！ウィングスの効果で、二体目のウィングスを特殊召喚！」

光天使スローネ DFE2000↓1600 ☆4

光天使ウイングス ATK1200↓800 ☆4

「そして、私は見習い魔嬢とスローネをリンクマーカーにセット！リンク召喚！『デコード・トーカー・エクステンド』！」

デコード・トーカー・エクステンド ATK2300↓3800

「え、エクステンド……」

「見習い魔嬢がいなくなったことで、モンスターたちの攻撃力は元に戻るよ」

「ま、まづいなあ……」

「そして、私はウイングス二体でオーバーレイ！」

ウイングスが渦の中に飛び込んでいく。

「エクシーズ召喚！『輝光子パラディオス』！」

輝光子パラディオス ATK2000 ☆4

「パラディオスの効果で、攻撃表示のアビス・ラグナロクの効果は無効にして、攻撃力を0にする！」

DDD壊薙王アビス・ラグナロク ATK2200↓0

「さらに手札から魔法カード『量子もつれ』を発動。ビルガメスには一ターン消えてもらおうぜ！」

除外されていくビルガメス。

「バトルフェイズ！デコード・トーカー・エクステンドで、リンク先の、攻撃力0のアビス・ラグナロクに攻撃！」

「むぎや!?!」

黒江 LP6750↓2950

「これで、エクステンドは二回目の攻撃が可能！もう一体のアビス・ラグナロクも抹殺！そして、パラディオスでダイレクトアタック！」

「フギャアー！」

黒江 LP2950↓950

「ラスト！グローリアス・ヘイローで、ダイレクトアタック！」

「ぐほあああああー！」

黒江 LP950↓0

勝者、臯月。

「よっしやああああ！勝ったどおおおおおお！」

両腕を突き上げる元気な様子の皐月。

真夜中でしかも病み上がりなのに元気なものである。

「いてて、なかなかの爆発力だったね」

「スカツとする効果が多いですからね！」

「というかセプターは反則だ。」

光天使スケールが何をもって自分を見出せばいいのかわからなくなるくらい反則だ。

「まあこれで、いろいろ書類もちゃんと作れるから、明日から……つて
いうか、今日の朝から学校に通えるよ」

「はいーありがとうございますー！」

とても元気な様子の皐月。

英明に会うのが今から楽しみなのだろう。

そばで見守っていた当夜と伊賀和志は、何事もなくデュエルが終わってホッとした。

二年間寝たきりの少女の行動とは思えないのは事実だが。

「ふむ……まあ、とりあえず、今のところは問題ないと判断しましょうか。心配するだけ損のような気が……」

「僕もそう考えていたところだ。というか、彼女に対する授業ってどうするんだろうか……」

二年間寝たきりの人間に対して、周りと同じカリキュラムで信仰させるのはどうなのか、ということである。

「あ、その点は大丈夫ですよ。長期間学校から離れていた生徒が復学した時のカリキュラム調整に関してはマニュアルがありますからね」
いつの間にか皐月がいなくなっていた。

ので、黒江が二人に説明している。

「聞いていないぞ」

「難しいことは書かれてないですけど、あまり引つ張り出されないマニュアルですからね……一応内容の更新はしっかり行われているので安心してください」

「アムネシアってマニュアルの更新頻度すごいよな……」

「アイディアル・タワーにはそれを行う専門部署がありますからね」
「……」

絶句している二人だが、『これから何をすればいいのか』がわかって
いることに変わりはない。

問題はないはずなのだ。

問題はないはずだが、どこか納得していない自分がいる。

「当夜。私はアムネシアに赴任して短いのですが、ここまで非常識な
のですか？」

「さあ？この高校の二代前の生徒会長である僕にも不明だ」

「フッフ、当夜君は大学時代はアムネシアの外に出て学んでいました
からね。ちゃんとアムネシアの常識に慣れてくださいね」

「苦労する……」

「ちゃんとサボる技術を今から身に付けておいた方がいいですよ。私
は中学時代からそればかり考えてますからね。それでは、私は書類
整理がありますので、これで」

黒江も試験会場を出て行った。

「……なあ、伊賀和志」

「なんですか？」

「彼女のデュエルディスク。音声通信モードのランプがついてたよ
な」

「ついていましたね」

「指摘した方がよかったか？」

「もう遅いでしょう」

「だな」

黒い部分に飛び込む必要はない。

勝手に自爆しているのだから、自爆したものはその処理に並走して
いればいいのだ。

黒江はサボる才能はあるようだが、サボる天才ではないらしい。

第三十七話

先生が言うまで廊下に待機しておいてください。

転校生の紹介において、よく使われる言葉だ。

全員が集まった状態で紹介し、自己紹介や本人の事情の説明を一気に解決するのである。

ただ……皐月が『待機』を守れるかどうかという話である。

別に修学旅行中というわけでもないし、別にそれを守らなかったからと言って何かあるわけではない。

というわけで……。

「英明くうくううん！」

「さ、皐月!?!おわあああああ!?!」

朝っぱらから、登校した英明に皐月は突っ込んだ。

真正面から抱き着いて、そのまま英明に頬擦りしている。

「英明くうくううん! 会いたかったよおおおおお!」

「ちよ、皐月、ちよつと離れろつて!」

さすがに朝っぱらからそこまでパワーが出るタイプではない英明。

終始元気な皐月には翻弄されるばかりである。

なぜか二年間寝たきりだったが育っている体で抱き着く皐月。

その様子に遠慮などない。

「英明君にとっては二年ぶりかもしれないけどね。私にとってはちつとも時間なんて立ってないのさ! 英明君大きくなったね!」

「いや、皐月の方も大きくなってね? なんて二年間寝たきりだったのに成長してんの?」

「私を知るかあああ!」

理不尽である。

何がと言わないが。

「まあまあ、そろそろショートホームルームが始まるわよ。離れなさい」

「むむむ!……英明君。この綺麗な人って誰?」

「……」

英明が気絶している。

朝っぱらから体力の使い過ぎだ。

感動の再開なんてなかった。

「あれ、おーい！起きろおおおおー！」

肩をもつてブンブンと容赦なく前後に振る臯月。

気絶していて抵抗できないので、すごい勢いで英明の脳がシエイクされている。

「落ち着きなさいー！」

「あだっ！」

臯月の脳天に手刀が落ちてきて、臯月は悶絶。

「完璧に気絶してるじゃない。ちよつとの間起きないわよ」

「むむ！あれ？なんで気絶してるの？」

「いろいろあるのよ……」

時雨が疲れてきている。

なかなか珍しい光景だ。

「あ、そうだった。私は漆野臯月っていいます！」

「私は周防時雨よ。クラスメイトだからよろしくね」

「よろしくおねがいますー！」

とつても元気な様子の臯月。

体はそれなりに育っているが行動がとても幼いようだ。

「す、すごい人が来たねえ」

綾羽も苦笑しているほどだ。

「むむ！よろしくー！」

「あ、うん。私は大東綾羽。よろしくね」

というわけで、自己紹介が進んでいく。

「……で。そろそろSHRだから帰って来い」

ダルそうな顔で斎藤当夜が言った。

「むむ！英明君。またあとで！」

そういって、指定位置に戻った臯月。

「……はっ！……俺、どうなってたんだ？」

「気絶してたぞ。まあ……多分精神的な疲労を理解して頭の中が

は周りと違って、『消費税が低く』て、『法人税と所得税が高い』んだ」
「？」

「何もわかってなさそうな表情をするな」

「そういえば、アムネシアでは消費税って3パーセントだよな」

「アムネシアから出るとそうじゃねえけどな。まあそれはそれとして、法人税が高いと、企業は儲けた分を『金』^{かね}で持っていると引き抜かれまくるから、設備投資や賃金増加につき込んで、預金の分母を減らすんだよ。結果的に、設備が向上するうえに、アムネシアで働いてる人の賃金上がるんだが、消費税っていう『消費に対する罰金』が少ないからインフレするんだ」

「なーるほど」

「で、まあ、所得税が高くなっただけって言うても、もともと『多く持つてる人から多くもらう』ことと『少なく持つてる人からは少なくもらう』性質がある『累進性』があるし、アムネシア中央銀行が金利の調整で安定させてるから、ハイパーインフレにはならないけどな」

「ふむふむ、わかった！」

「……」

本当にわかっているのだろうか。と思った英明。

ただ、そもそも英明がそのあたりのちゃんとした説明をできるタイプではないので、詳しい説明は省くが。

「要するに、アムネシアの逆で『消費税が高く』て、『法人税・所得税が低い』と、庶民が貧乏になって大企業だけが得をするってことだね！」

「日本は実際にそうなってる」

「……私、アムネシア以外では住まないようにするよ」

「そうか」

謎の意気消沈を見せる臯月。

まあ、臯月がどこに住むのかは自由である。

「まあとにかく、レアカードの値段が上がった理由は分かったよ！ついでに言うと、住民の賃金もちゃんと上がってるから負担は大きくなってるんだね！」

「ああ。まあ、値段が上がったのはカードだけじゃないけど、二年間寝てた臯月から見れば驚くだろうな……」

タイムマシンで二年後に飛んだような感覚だろう。

おそらく予測できる人間はほぼいはいはずだ。

アムネシアの実質的な支配者である遊月が『緊縮財政なんてくそくらえ』などと考えているタイプなのでこうなるのは目に見えているが。

「まあ、二年間も寝てたら真っ先に気が付くことだろうなあ」

「まあとにかく、私はおなかですいた！」

「文脈放棄が酷すぎる……」

「というわけで、特盛を食べに行くぞおおおおお！」

「うわあああああ！」

英明のブレザーの襟首をつかんで全力疾走をする臯月。

……ブルームはそれを見ながら、『元気な子が帰ってきたなあ』と思いながら追いかけるのだった。

ちなみになぜ追いかけるのかって？

パンチラというシャッターチャンス逃さないためである。

時雨の場合は、隠し撮りを含め、適当なタイミングでシャッターを切ってもベストポーズだが、臯月はさすがにそうではないのだ。というか盗撮に気が付く時雨の方が頭おかしい。

★

「……尋常じゃないな」

「何が？」

「牛丼の特盛を四つも平らげるとは思わなかった……」

「フッフッフ！目指すは某ゴム人間だぜ！」

「アムネシアの料理人が死ぬからやめろ」

商店街を歩く二人だが、相変わらず目が爛々と輝いている臯月に対して、早くも疲労の色が見える英明。

臯月の食に対するモットーは『質はそこそこ、量はヒヤッハー！』である。

ぶつちやけ二年前はそこまで食べる方ではなかった。

ただし、当時の臯月は悪霊瘴気の核を抱えていた故に制限があったようだが、それはとつくの昔にブルームが取り除いたので遠慮はない。

「むむ？なんか悪霊が近くにいるような……」

「あー。みたいだな。なんか弱いのがいそうだな。多分デュエルすらもできないタイプだろ」

弱い悪霊は、弱い悪霊同士で力を束ねることで『デモンズ・キューブ』を構築し、そしてデッキを生み出す。

そして、悪霊は『デュエルをする』という意味を見せた場合、デュエルでしか討伐できない』というルールがあるので、悪霊討伐を専門としている組織は、デュエルの腕も鍛えたうえで、リアルファイトが可能になるように鍛えるのだ。

ただし、悪霊の力の不足はカードの不足を招くため、デッキを作れない。

悪霊がデュエリストに対してデュエルを挑めない場合、デュエリストはリアルファイトで叩き潰せばいいのだ。

「ちよつと行ってみよう！」

「いいけど……多分俺たちが感覚で分かるくらいだったら、すでにセンサーが引つかかかっていると思うけどなあ」

「そうなの？」

デュエルディスクに送られてくる避難警報は全く出ていない。

ただし、封鎖されている部分がある。

「一応封鎖くらいはするけど、基本的に討伐隊員だけで可能と判断した場合、それだけだな。一々避難誘導なんてやってたら、そもそも悪霊の出現数が多いアムネシアでは経済が回らないし」

「あ。それもそうだね。ムムム……じゃあ行こう！」

「話聞いてた？」

そもそも封鎖されているといったはずなのだが。

「英明君なら大丈夫でしょ！」

「まあ、確かにそうなんだが……」

アムネシアの支配者である遊月の相棒である英明。

悪霊の討伐が目的の場合、基本的に英明に立ち入り禁止はない。

「というわけでいくぞおおおお！」

「おわあああああ！」

またもや襟首をつかんで引きずっていく皐月。

英明は不憫である。

使われていない裏の広場のようなものがある。

そこに悪霊が出現しているようだ。

「よしー！私のオネストの力で……うわっ！」

皐月が倒そうとした悪霊が、突如横から来たレーザーが焼いていく。

しかもそれらが連続で発射され、悪霊たちは抵抗することすらできずに倒れていった。

「よしー！討伐完了です！……あれ？英明さん？」

聞いたことがある声が耳に入ったので顔を上げた英明。

そこには、グスタフ・マックスの意匠がみえる砲台型の装甲兵器を身にまとった香苗がいた。

「む！英明君。知り合いなの？」

「ああ、主に遊月関係だ」

「ほうほう！とつてもかわいいね！おりゃ！」

「む、むううううう！」

グスタフ・マックスの装甲を格納した香苗に抱き着く皐月。

「うへへ、小さくて抱きしめやすい体だねえ」

「うーん！うーん！」

抱き着くときもかなり全力の皐月。

その皐月の大きな胸に顔をうずめている香苗は、正直息ができていないようだ。

ただ、英明は『バシャバシャバシャバシャバシャ！』という音が聞こえてくるので、きつと馬鹿なゾンビ花が興奮しているのだろうと判断。

「おちつけ」

「あだっ！」

脳天手刀。

香苗から離れて悶絶する皐月。

「いてて、何をするのさ！英明君！」

「初対面で皐月のテンションについていけるわけないだろ。ちよつとは自重しろ」

「私はそんなこと気にしないよ！」

そうか。と思う英明。

「自己紹介がまだだったね。私は漆野皐月。よろしくだぜ！」

「あ、私は江藤香苗と言います。よろしくお願いします」

「ふむふむ、香苗ちゃんだね。覚えたよ！」

というわけで……。

「香苗ちゃんはDGC所属なんだね」

DGCは若干軍服っぽいような制服になっている。

まるつきりブレザーであるアムネシアの制服とは異なるのだ。

「はい！お兄ちゃんのおかげで、いい条件の部隊に入ることができました！」

「英明君、香苗ちゃんのお兄ちゃんって誰？」

「血縁関係はないが遊月のことをそう呼んでる」

「ふむふむ……とてもいいことだね！」

そうなのだろうか。

というより何も考えていないだけのように見える。

「香苗ちゃんは遊月君のことが大好きなんだね」

「はい！大好きです！」

英明は『そりゃ每晚綾羽ちゃんとデュエルで遊月とどっちが一緒に寝るか決めてるくらいだもんな』と思いつつ見守っていた。

「でも、香苗ちゃんはあるまり押しが強いタイプには見えないねえ」

「む、むう……」

むしろ君は押しが強すぎるじゃないか。オマケに引きずり回すだろう！

と英明は強く主張したいところだったが、残念なことに言っても無

駄だということがすぐわかるのだ。

(まあでもあれだな。香苗ちゃんがいう『遊月が好き』っていうのは、なんだか『頼れるお兄ちゃん』に向けるようなものだし……『恋愛』じゃないんだよねえ)

そう思う英明。

ただし、真正面からとかそういうことはせずに、遊月が寝始めてから気が付かれていないことを願って布団に潜り込む綾羽や鼎の要するを察するに、『押しが弱い』というのは確実だ。

「私が押しの強さを生み出す秘訣を教えてあげるよ！」

「そ、そんな秘訣があるんですか？」

「あるんだよ。要するにね。大きな声がちゃんと出せるようになればいいんだよ！」

簡潔すぎる。

「そのためには大きな声を出す練習が必要なのさ。すううう、ヒヤツハーーーーー！」

「!?!?」

突如出した大声に驚く香苗。

「ほらほら、香苗ちゃんも一緒に、ヒヤツハーーーーー！」

「ひゃ、ひゃつはああ……」

力なんて何も入っていないか弱い声であった。

「ムッフ、かわいらしくてなんだか新しい扉を開けちゃいそうだけど、それだと押しの強さは生まれなよ！ヒヤツハーーーーー！」

「ひゃ、ひゃつはああ……」

ちよつと伸びた。

「元気だなあ」

英明はなんだか自分がちよつと年上になったような気分で二人を見守っていた。